

日本女子大学大学院審査博士学位申請論文

児童養護施設における「家族再統合」  
—「場」への包摂と「関係」への収斂—

指導教授 岩田 正美 教授

2014 年 3 月

日本女子大学大学院 人間社会研究科

2011 年度満期退学 大澤 朋子

# もくじ

## 序章

1. 研究の背景と目的	7
2. 研究の方法	10
3. 本論文の構成	11
文献	12

## 第1章 児童虐待と家庭支援専門相談員制度

1. 児童虐待の社会問題化のプロセス	14
(1) はじめに	14
(2) 問題発掘期と早期発見・早期介入	15
(3) 問題拡大・制度整備期と市民動員	17
(4) ゴール転換期と「家族再統合」	18
2. 児童養護施設の子どもの家庭環境	21
(1) 児童養護施設の機能の変遷	21
(2) 児童養護施設入所児童の状況	22
(3) 社会的養護におけるケアとソーシャルワーク	26
3. 家庭支援専門相談員制度の概要と制度導入の経緯	27
(1) 家庭支援専門相談員制度の概要	27
(2) 家庭支援専門相談員制度導入の経緯	29
(3) 「ファミリーソーシャルワーカー」とは何か	31
4. 本研究の位置	34
(1) 家庭支援専門相談員制度	34
(2) 児童養護施設の専門性	38
(3) ソーシャルワークの担い手としての FSW	40
(4) 本研究の位置	42
文献	43

## 第2章 家族再統合とは何か

1. 家族再統合概念の整理	48
(1) 「家族再統合」とは何か	48
(2) 広義の「家族再統合」概念	48
(3) 狭義の「家族再統合」概念	51
(4) なぜ「家族再統合」なのか	54



(5) 本論文で用いる「家族再統合」の暫定的定義・	57
2. 家庭支援専門相談員の考える「家族再統合」—アンケート調査から・	57
(1) 調査概要・	58
(2) 結果と分析・	59
(3) アンケート調査にみる家庭支援専門相談員の考える「家族再統合」・	71
3. 分岐点としての「家庭復帰の可能性」・	73
文献・	74

### 第3章 家庭支援専門相談員の2つの役割—アンケート調査事例分析から

1. 家庭支援専門相談員の役割を明らかにする意義・	77
2. 分析視角・	78
(1) 事例調査の特徴・	78
(2) 分析視角・	79
3. 家庭支援専門相談員の判断・	80
(1) 「家庭復帰ケース」の判断の根拠・	80
(2) 「社会的自立ケース」の判断の根拠・	83
4. 家庭支援専門相談員の業務・	85
(1) 勤務形態の違いに見る「家庭復帰ケース」の家庭支援専門相談員の業務・	85
(2) 退所時の子どもの年齢の違いに見る「家庭復帰ケース」の家庭支援専門相談員の業務・	88
(3) 勤務形態の違いに見る「社会的自立ケース」の家庭支援専門相談員の業務・	91
(4) 入所時の子どもの年齢の違いに見る「社会的自立ケース」の家庭支援専門相談員の業務・	93
(5) 家庭復帰しない子どもに対する家族との関係の持ち方に関する援助・	95
5. 家庭支援専門相談員の2つの役割・	97
(1) 家庭支援専門相談員の2つの役割・	97
(2) 「家庭支援役割」の3つの支援と「家族再統合」・	97
(3) 「社会的自立支援役割」の2つの支援と「家族再統合」・	100
(4) 家庭支援専門相談員に固有の業務の可能性・	102
文献・	103

### 第4章 「帰せる家庭」をめぐって—インタビュー調査から

1. はじめに・	104
2. 調査方法と分析方法・	104
3. 調査対象者・	105
4. 6つのストーリーライン・	107

(1) A氏のストーリーライン	107
(2) B氏のストーリーライン	109
(3) C氏のストーリーライン	110
(4) D氏のストーリーライン	112
(5) E氏のストーリーライン	114
(6) F氏のストーリーライン	115
5. FSWの語りによる13のカテゴリー	117
(1) 家庭支援専門相談員制度導入による変化	117
(2) FSWの果たす役割	119
(3) 関係機関との関係	121
(4) 施設の立地条件	122
(5) 「家庭復帰」に対するFSWの考え	123
(6) 「家庭復帰」支援プロセスで重視すること	125
(7) 「家庭復帰」を妨げるもの	127
(8) FSWの家族観	128
(9) 児童養護施設の専門性	129
(10) 児童養護施設にできる「家庭支援」	131
(11) FSWとして感じる困難	132
(12) 児童養護施設の将来に向けた課題	133
(13) 勤務形態と施設規模	134
(14) まとめ	135
6. 「帰せる家庭」から親子関係の維持へ	135
文献	137

## 第5章 家族再統合と家族関係修復をめぐる

1. 家庭支援専門相談員制度への期待	138
(1) 児童養護施設措置待機児童の増加	138
(2) 児童相談所の対応能力の限界	138
(3) 「家族再統合」概念の輸入	139
(4) 家庭支援専門相談員制度への期待	139
2. FSWの立ち位置と業務の周辺性	140
(1) CWの延長としてのFSWの専門性	140
(2) FSW業務の周辺性	141
3. FSWが見据える2つの未来	143
(1) 子どもが経験する二重の排除	143
(2) 「帰せる場」としての家庭	144

(3)「赦せる親」との親子関係	145
4.「場」への包摂と「関係」への収斂	146
(1)「場」への包摂	147
(2)「関係」への収斂	148
5. FSW のジレンマ	150
(1) FSW の独自性	150
(2) 期待と現実の矛盾	151
(3) 家庭支援専門相談員制度の限界	152
文献	154

## 終章

1. 児童虐待・社会的養護と FSW	156
2. 「家族再統合」とは何か	159
(1)「家族再統合」の再定義	159
(2)「家族再統合」の構造	160
3. 家庭支援専門相談員制度の課題と展望	161
4. 本研究の限界と今後の課題	165
文献	167

## 【資料】

資料 1 家族関係を再構築するということについて FSW 業務を通じて考えていること (専業 FSW)	168
資料 2 家族関係を再構築するということについて FSW 業務を通じて考えていること (兼業 FSW)	170
資料 3 FSW の判断根拠 (家庭復帰ケース／12 歳以下)	172
資料 4 FSW の判断根拠 (家庭復帰ケース／13 歳以上)	174
資料 5 FSW の判断根拠 (社会的自立ケース／12 歳以下)	175
資料 6 FSW の判断根拠 (社会的自立ケース／13 歳以上)	176
資料 7 勤務形態別家庭復帰ケースの FSW の業務 (専業 FSW)	177
資料 8 勤務形態別家庭復帰ケースの FSW の業務 (兼業 FSW)	178
資料 9 子どもの年齢別家庭復帰ケースの FSW の業務 (退所時 12 歳以下)	180
資料 10 子どもの年齢別家庭復帰ケースの FSW の業務 (退所時 13 歳以上)	182
資料 11 勤務形態別社会的自立ケースの FSW の業務 (専業 FSW)	183
資料 12 勤務形態別社会的自立ケースの FSW の業務 (兼業 FSW)	184
資料 13 子どもの年齢別社会的自立ケースの FSW の業務 (入所時 12 歳以下)	186
資料 14 子どもの年齢別社会的自立ケースの FSW の業務 (入所時 13 歳以上)	188

資料 15	家族との関係の持ち方に関する援助	189
資料 16	SCAT 分析結果表	190
	A 氏 (M 学園) へのインタビューデータ	190
	B 氏 (S 学園) へのインタビューデータ	202
	C 氏 (R 学園) へのインタビューデータ	212
	D 氏 (H 学園) へのインタビューデータ	231
	E 氏 (P 学園) へのインタビューデータ	252
	F 氏 (W 学園) へのインタビューデータ	265
資料 17	調査票	287
資料 18	インタビューガイド	295

## 図表もくじ

### 【図】

図 2-1	FSW の性別	60
図 2-2	FSW の年齢	60
図 2-3	FSW 歴	60
図 2-4	FSW になる前の職種	61
図 2-5	常勤割合	61
図 2-6	専業割合	61
図 2-7	兼務している職種	61
図 2-8	FSW のケースへの関与度	64
図 2-9	児童養護施設と児童相談所の判断の不一致経験	65
図 2-10	児童相談所と判断が異なった際の対応	65
図 2-11	アセスメント基準の有無	66
図 2-12	専業 FSW が家族関係を再構築することについて考えること	70
図 2-13	兼業 FSW が家族関係を再構築することについて考えること	71
図 3-1	FSW の判断根拠 (家庭復帰ケース／退所時 12 歳以下)	82
図 3-2	FSW の判断根拠 (家庭復帰ケース／退所時 13 歳以上)	83

図 3-3	FSW の判断根拠（社会的自立ケース／入所時 12 歳以下）	85
図 3-4	FSW の判断根拠（社会的自立ケース／入所時 13 歳以上）	85
図 3-5	勤務形態別家庭復帰ケースの FSW の業務（専業 FSW）	87
図 3-6	勤務形態別家庭復帰ケースの FSW の業務（兼業 FSW）	88
図 3-7	子どもの年齢別家庭復帰ケースの FSW の業務（退所時 12 歳以下）	90
図 3-8	子どもの年齢別家庭復帰ケースの FSW の業務（退所時 13 歳以上）	91
図 3-9	勤務形態別社会的自立ケースの FSW の業務（専業 FSW）	93
図 3-10	勤務形態別社会的自立ケースの FSW の業務（兼業 FSW）	93
図 3-11	子どもの年齢別社会的自立ケースの FSW の業務（入所時 12 歳以下）	95
図 3-12	子どもの年齢別社会的自立ケースの FSW の業務（入所時 13 歳以上）	95
図 3-13	家族との関係の持ち方に関する援助	97
図 3-14	FSW の 2 つの役割と 5 つの支援型	101
図 5-1	「場」への包摂	148
図 5-2	「関係」への収斂	150

## 【表】

表 1-1	1989 年～2013 年の OPAC 検索による文献の種類	15
表 2-1	FSW として行っている業務	64
表 2-2	FSW のケースへの関与度と勤務形態	65
表 2-3	退所についての最初の提案	66
表 2-4	退所についての最終的な判断	66
表 2-5	アセスメント基準と施設の対応方針	66
表 2-6	研修機会	67
表 2-7	「家族再統合」をどのように考えるか	70
表 3-1	分析事例の概要	79

## 序章

### 1. 研究の背景と目的

1990年代以降、児童虐待の急増が言われている。幼い子どもが暴行や遺棄によって死亡する事件が繰り返し起こり、報道され、社会の関心を集めてきた。親が我が子に暴力を振るうという現象は驚きを持って受け止められ、子どもへの同情や虐待親への非難を導いたが、実はわが国で児童虐待が社会問題化されたのはこれが初めてではない。それと同時に、問題とされる現象の範囲や社会問題化の文脈も、時代によって異なってきた。

たとえばわが国で比較的初期に児童虐待が注目されたのは、第二次世界大戦より以前のことである。この昭和初期に問題とされたのは、過酷な児童労働と児童の搾取、軽業や見世物に児童を使用することであり、1933年にはわが国で初めての児童虐待防止法が成立している。同法が対象としたのは14歳未満の監護者から虐待された児童で、虐待者の処罰よりも被虐待児童の保護を目的としていた<sup>i</sup>。

また1970年代に入ると、「コインロッカーベイビー」<sup>ii</sup>に代表される嬰兒殺、乳児遺棄事件が複数発生し、社会の強い関心を集めた。これらの事件は、従来の「子捨て」が子どもの生存を期待して見つかりやすい場所に子どもを放置したのに対し、コインロッカーという子どもの生存の可能性を考慮しない遺棄場所が選択された点で社会に衝撃を与えた。この時期は今日の児童虐待ではなく、「子捨て・子殺し」というカテゴリーで問題把握された。田間によれば、この「子捨て・子殺し」は子どもを自らの手で育てられない親の社会的・経済的な背景によるネグレクトとしてではなく、もっぱら「母性を失ったダメな母親」の非常識な行動として理解され、母親批判が展開された（田間 2001）。この時点では1933年児童虐待防止法は1947年の児童福祉法制定と同時に廃止され、存在していないが、これらの事件を契機に立法を伴う児童虐待対策が取られることはなかった。

一方近年の児童虐待への関心の高まりは、上記2度の社会問題化に次いで3度目の注目といえる。児童相談所が養護相談から児童虐待相談を独立させて統計を取り始めたのが1989年のことであったが、それ以降今日に至るまで一貫して虐待相談対応件数は増加を続けている<sup>iii</sup>。当時の時代背景として、1989年の1.57ショックを契機に、厚生省（現厚生労働省）は少子化対策を主眼とした「エンゼルプラン（1994年）」、「新エンゼルプラン（1999年）」、「少子化対策プラスワン（2002年）」、「子ども子育て応援プラン（2004年）」等を立て続けに策定、実施した。上記の対策はいずれも保育所整備の数値目標を定め、合計特殊出生率の回復を目指したが、これらの対策によってもすぐには合計特殊出生率の回復には至らなかった<sup>iv</sup>。そのような中で、貴重な子どもが虐待によって死亡していることが問題とされ、わが国で2度目の「児童虐待の防止等に関する法律（以下、児童虐待防止法。2004年施行）」が制定された。今日の児童虐待が、1994年の「国連子どもの権利条約」批准を契機とした子どもの人権保護の主張からというよりは、むしろ少子化対策の文脈から捉えられてきたことは、「子ども子育て応援プラン」の中に虐待防止が位置づけられたことから

読み取れる。

上述したように、時代とともに児童虐待が社会問題化される文脈は異なるが、我々の社会は常に児童に対しては過酷な環境から救出し保護すべき対象として把握し、高い関心を寄せているように見える。1990年代に見られた児童相談所批判も、児童福祉司の虐待家庭への関与不足を批判する報道の論調を、一般市民が共有していたと考えられる。「子育てが難しい時代」の母親の育児不安に着目することで拡大してきた今日の児童虐待対策（大澤 2008）においても、児童家庭支援センターのような一般子育て世帯を対象とした相談援助サービスが拡大することに対して、批判や反対が表だって展開されることはない。ところが、阿部らによって明らかにされたように、わが国の子どもの貧困率は OECD 諸国と比較して高い水準にあり（阿部 2008；山野 2008）<sup>v</sup>、特にひとり親世帯の貧困率の高さは一般世帯の貧困率と比較して際立っているが<sup>vi</sup>、民主党政権下での子ども手当法の挫折に見たように、子育て世帯に対する一般的な所得保障には否定的な社会でもある。浅井はこのような傾向を評して「子どもを大切にしない国」と呼び、国の政策を批判している（浅井 2006；2008）<sup>vii</sup>。これらの状況からは、我々の社会は、子どもが生命に関わる深刻な虐待にさらされることには同情的でも、その虐待を生み出す背景要因としての家計を含む生活基盤の脆弱さに対しては無関心であるか、むしろ支援することに否定的な二律背反の反応を示す傾向があることが推察される。

いずれにしても児童虐待相談は増加の一途をたどり、特に都市部を中心に児童相談所の一時保護所も乳児院・児童養護施設等の児童福祉施設も常時満員の状況が続いている。それでも相談事例の約 9 割は実は在宅指導にとどまり、親子分離に至る事例は比較的少数である。したがって、今日の児童相談所は子どもを虐待親から分離保護するのではなく、親元にとどまらせたまま安全を確保し、虐待的な親子関係を解消するという困難な業務を担うことになった。このように家族での生活を維持し、親子関係を改善するために、「家族再統合」という概念が導入されている<sup>viii</sup>。結果として、親子分離を伴う社会的養護への措置事例は、急増する虐待通告のなかでも最も危険度が高く、解決の困難な事例ということになるだろう。近年、社会的養護の現場でも同じく「家族再統合」が支援のゴールとして設定されるようになったが、このもっとも困難な子どもたちを受け入れている社会的養護の現場で、入所児童の退所時に目指される「家族再統合」とは、いったいどのようなものであろうか。

今日、子ども家庭福祉政策の領域では、親子分離せず家族を維持できる状況で目指される「家族再統合」と、親子の深刻な分断を経験した後の「家族再統合」が同じ言葉で語られている<sup>ix</sup>。だが、前者は形態としては一度も親子分離を経験していないことから、「家族再統合」というより、「家族維持」や「家族保全」などと呼ぶ方が適当であろう。畠山はこの点について、わが国の児童虐待施策の中に「家族維持（family preservation）」の概念は未だ導入されておらず、ただ児童相談所や市町村が行う「在宅指導」「在宅支援」の総称に過ぎないと批判する（畠山 2007）。同様に澁谷も、わが国の「在宅指導」が行政サービスの形態を指すのみで、「家族保全」を目的としたものではない点を指摘し、「家族保全」概念

を導入して専門的価値を基盤としたサービスの開発を行う必要性を主張している（澁谷 2002）。一方後者は、一度分離した親子が何らかの意味で再び家族となるという意味で、「家族再統合」が用いられることが適当であると考ええる。何らかの意味でというのは、第 2 章で検討するように、「家族再統合」概念は狭義には家庭復帰を意味するが、他方で親子が個別に物理的・心理的に最適な距離を取ることを達成するプロセスとして極めて広義に用いられることも多いからである。

だが、家庭復帰と比べて、広義の「家族再統合」は親と子の多様な実態を含む概念であり、結局のところ、ケースの数だけ「家族再統合」の形はあり得るとも考えられる。もちろんそれはその通りであろうが、しかし社会的養護の現場には、そのような多様性とは別の次元で、日々の業務から見えている「家族再統合」についての何らかのリアリティを持った認識があるのではあるまいか。分離に至る前の不調を起こした親子に対する援助が必要なことも、深刻な虐待を受けている児童を保護する必要があることも、一度は分離保護された子どもと親を、できることならもう一度ひとつの家族に再統合させたほうがよいことも、概ね我々の社会のコンセンサスを得ていると言えよう。その具体的な手法としてのアセスメントツールやペアレンティングトレーニングの開発が急務であることは言うまでもない。しかしその前提として、「家族再統合」とは何かということが、もっとリアリティをもって理解される必要がある。そしてその際、もっとも困難なケースを扱う社会的養護の現場で、「家族再統合」をめぐる何が問題とされ、どのような「家族再統合」が目指されているのかということが明らかにされなければならないと考える。

ところで社会的養護は里親と施設養護に大別され、さらに施設養護も入所型、通所型、利用型などに分類することができる。このうち親子分離を伴うのは里親委託と入所型施設養護であるが、平成 20 年度の「児童養護施設入所児童等調査」（厚生労働省 2008a）によれば、里親委託児童数が 3,611 人であるのに対し、入所型児童福祉施設の措置児童数は里親委託児の 10 倍以上にあたる 37,991 人であり、そのうち 8 割以上を児童養護施設が占めている。むろん、第 1 章で詳述するように 40,000 人を超える措置児童のすべてが被虐待児ではないが、虐待経験を含む多様な困難を抱える子どもを早期に家庭復帰させる目的で、入所型児童福祉施設には 2004 年から家庭支援専門相談員が配置されている。制度導入から本研究の調査時点で 7 年が経過していたが、社会的養護の現場では、家庭支援専門相談員の職種に就いた施設職員たちによって、「家族再統合」支援についての一定の経験の蓄積できつつあり、また課題が見え始めているのではあるまいか。

そこで本研究は、社会的養護の担い手としてもっとも多くの重篤な被虐待児童を受け入れている児童養護施設において、「家族再統合」支援を担うとされている家庭支援専門相談員（FSW）が、所属する施設の方針、FSW の専門的価値と家族観、および FSW の業務を通じて、入所児童の退所に際してどのような「家族再統合」を達成しようとしているのかを、FSW への実態調査を通じて明らかにし、その意味を考察することを目的とする。具体的な研究方法は次節で詳述するが、全国の児童養護施設に勤務する FSW が実際に行ってい



る業務の内容と、「家族再統合」についての考えを分析することにより、わが国の社会的養護の現場で実現している「家族再統合」の構造を示し、家庭支援専門相談員制度の課題と展望を示すことになる。

## 2. 研究の方法

本研究は 2010 年 11 月から 2011 年 3 月にかけて筆者が行った児童養護施設に勤務する家庭支援専門相談員を対象とした二つの調査を中心とした探索的な実証研究である。

対象として児童養護施設を取り上げるのは以下の理由からである。先にも述べたように児童虐待相談の約 9 割は在宅指導とされるため、親子分離を伴って社会的養護に措置されるケースは極めて重篤なケースといえる。そのような重篤なケースを担う社会的養護には児童養護施設だけでなく、乳児院等いくつかの児童福祉施設が携わっているが、そのうち児童養護施設は乳児院に比べて対象とする児童の年齢幅が広く、入所期間や退所の形態が多様である。また情緒障害児短期治療施設ほど治療に特化した施設ではなく、他方で児童自立支援施設と異なり非行の矯正にも特化していない。近年注目されている里親はまだ措置事例が少ない。上記の特徴により、社会的養護の担い手として最も多くの児童が措置されているのが児童養護施設である。平成 20 年度の「児童養護施設入所児童等調査」（厚生労働省 2008a）によれば、全国の児童養護施設に入所している児童数は 31,593 人である。児童養護施設への措置事由が児童虐待に相当する「父または母の放任・怠だ」「父または母の虐待・酷使」「棄児」「養育拒否」だったものを合計すると、全体の 33.1%にあたるが、入所後に明らかになったものも含め被虐待経験のある児童は全入所児の 53.4%にものぼる。児童養護施設入所児童の中で被虐待児は過半数を超え、児童養護施設にとって決して特殊な対象ではないのである。ちなみに、その他の措置事由としては、「父または母の行方不明」「父または母の拘禁」「父または母の入院」の合計が 17.9%、「父または母の精神疾患等」が 10.7%、「父または母の就労」が 9.7%、「破産等の経済的理由」が 7.6%等である。

このように被虐待児を多数受け入れている児童養護施設において、「家族再統合」支援を担当する専門職として 2004 年から配置されたのが家庭支援専門相談員（FSW）である。家庭支援専門相談員制度導入の経緯は第 2 章で詳述するが、児童養護施設に勤務する FSW はもともと重篤で多彩なケースの「家族再統合」支援に携わっていると考えられる。

調査は全国の児童養護施設の FSW を対象とした質問紙調査と、6 名の FSW を対象としたインタビュー調査から構成される。質問紙調査では、回答者である FSW のフェイスシートおよび所属施設の業務方針に関わる項目を、選択肢を示してたずねた。そのほか、通常の質問—回答の選択という手法ではなく、「家庭復帰」と「社会的自立」という形態の異なる特徴的な 2 種類の退所方法を示し、それぞれのケースについて、FSW 自身が取り扱った事例とそれへの援助について自由に記入してもらうという設計にした。この方法で既に退所した過去の事例において、FSW が実際に行った支援業務と判断基準を分析することで、

FSW が実際に果たしている役割を描く。またインタビュー調査では、半構造化面接から得られたデータを分析することで、FSW が日常的な業務を通じて「家族再統合」をどのように捉え、ゴール設定を行っているのか、および現状の困難をどのように乗り越えようとしているのかを示したい。

上記の 2 つの調査結果を分析するにあたり、家族が共に暮らす「場」としての「「家庭」復帰の可能性」を支援のゴール設定の分岐点と仮定した。退所の形態が、現実的に「家庭復帰」を達成できるか否かによって、その後の支援のゴール設定および実際の支援の内容が異なると考えられたからである。また分析の際、入所児童の入所時・退所時年齢および FSW の勤務形態を分析の基軸とした。さらに、調査結果分析を通じて、FSW が達成しようと試みる「家族再統合」とは何かを明らかにするにあたり、家族が共に暮らす「場」、つまり「家庭」と、家族成員相互の「関係」を異なった概念として設定し、考察を行った。

### 3. 本論文の構成

以上の目的と方法を前提に、第 1 章では、児童虐待の社会問題化のプロセス、児童養護施設の成り立ちと現状、家庭支援専門相談員制度導入の経緯と制度の概要を概観する。また虐待家庭の貧困問題と養護問題の階層性、家庭支援専門相談員制度、児童養護施設の専門性やファミリーソーシャルワーク等に関する先行研究のレビューを通じて、本研究の位置を示す。

第 2 章では、児童養護施設の FSW が考える「家族再統合」とは何かを整理する。まず先行研究から「家族再統合」概念を整理したうえで、本研究で用いる「家族再統合」概念の暫定的な定義を行う。さらに、アンケート調査結果をもとに、児童養護施設の FSW が「家族再統合」をどのように認識しているか分析する。

第 3 章では、児童養護施設の FSW が果たす役割を明らかにする。第 2 章にひきつづきアンケート調査の自由記述分析結果に基づいて、FSW が行う支援の実際を検討する。まず、「家庭復帰の可能性」の判断を分岐点とした、「家庭復帰ケース」と「社会的自立ケース」でそれぞれどのような支援が展開されるか分析する。その際、入所児童の入所時・退所時年齢および FSW の勤務体系によってデータをいくつかのグループに分け、FSW が「家庭復帰の可能性」をめぐって何を根拠に判断を行い、設定したゴールに向けた支援を行うのか分析する。またこの FSW の判断と実際の業務から、FSW が果たしている 2 つの役割を示す。

第 4 章では、インタビュー調査結果に基づいて、FSW の支援のゴールが「家庭復帰」から親子関係修復へと移行する過程を検討する。家庭復帰にあたっては子どもの生家が「帰せる家庭」と判断される必要があるが、FSW は何をもって家庭復帰の判断を行い、家庭復帰を妨げる要因が何であると考えているのかを検討する。インタビュー調査で得られた 6 つのストーリーラインと 13 カテゴリーから、FSW が実際には家庭復帰ではなく親

子関係修復を「家族再統合」支援のゴールとせざるを得なくなる過程を分析する。

第5章では、第2章から第4章で行った調査結果の分析を踏まえ、児童養護施設の FSW がゴールとする「家族再統合」が「場」への包摂か「関係」への収斂かのいずれかのパターンに整理される過程を分析する。

最後に終章で、本論文での各章の論述内容を整理し、児童養護施設の FSW が考える「家族再統合」を再定義する。また、社会的養護の現場で実現している「家族再統合」の構造を示す。加えて、現行の家庭支援専門相談員制度の受けている制約と、それを発展的に乗り越える方策を示す。最後に本研究の限界と今後の課題を提示する。

## 【文献】

阿部彩(2008)『子どもの貧困』岩波書店

浅井春夫(2006)『子どもを大切にする国・しない国—子育てのなかのしあわせ格差を考える』新日本出版社

浅井春夫・湯澤直美・松本伊智朗(2008)『子どもの貧困—子ども時代のしあわせ平等のために』明石書店

畠山由佳子(2007)「家族維持を目的とした「正当な努力 (reasonable effort)」に対する—考察—アメリカ・イリノイ州でのインタビュー調査結果を通して—」『子どもの虐待とネグレクト』9(1),7-15

大澤朋子(2008)「『虐待認識』の視点から見た児童虐待対策の課題—普遍的な子育て支援を目指して」『社会福祉』48,21-33

澁谷昌史(2002)「家族保全の研究 I—文献を通じた家族保全概念の考察—」『日本子ども家庭総合研究所紀要』39,283-289

田間泰子(2001)『母性愛という制度—子殺しと中絶のポリティクス』勁草書房

山野良一(2008)『子どもの最貧国・日本』光文社

吉見香(2012)「戦前の日本の児童虐待に関する研究」『教育福祉研究』18,53-64

## 【資料】

厚生労働省(2008a)『児童養護施設入所児童等調査結果（平成20年2月1日現在）』

厚生労働省(2010a)『平成22年国民生活基礎調査の概況』

OECD (2012) Family database “Child poverty”

---

<sup>i</sup> ただし、明治期から戦前にかけての児童虐待は貧困による児童労働・児童酷使を指すと思

---

われているが、吉見はこの時期にあっても現代の児童虐待の定義に当てはまる虐待の 4 類型で現象を捉える視点があったことを指摘している（吉見 2012）。

ii 1973 年前後に全国のターミナル駅のコインロッカーに新生児が遺棄され死亡する事件が複数発生したことから、乳児虐待死・遺棄事件の総称となった。

iii 1989 年度の相談対応件数は 1101 件であったが、児童虐待防止法が施行された 2004 年度には 33,408 件、直近の 2012 年度は 66,807 件となり、統計を取り始めた年と比較して 60 倍を超えている。

iv わが国の合計特殊出生率は 1989 年の 1.57 以降も低下を続けたが、2005 年の 1.26 を底に微増に転じた。

v 厚生労働省は 2009 年にわが国の子どもの貧困率を初めて公表した(2007 年度調査)。2009 年の 15.7%という数値は OECD 平均の 12.6%(OECD2012)と比較しても高い水準である。

vi ひとり親世帯の貧困率は 2009 年度統計で 50.8%である(厚生労働省 2010a)。

vii 子どもの貧困問題への対応を迫られた政府は、2013 年 6 月に「子どもの貧困対策法」を制定したが、対策はまだ緒に就いたばかりである。

viii 「家族再統合」の定義については第 2 章でふれることにし、ここでは定義しない。

ix たとえば大阪府では、児童虐待からの家族回復支援を「家族再統合支援事業」として事業化しているが、ここでは児童虐待を行ったが子どもが在宅のまま支援を受ける保護者と、親子分離中の保護者を共に対象にしており、両者を区別していない。ただし、これは稀な例であり、一般に「家族再統合」という場合は親子分離中の親子を対象にしていることが多い。

x ここでは児童養護施設、情緒障害児短期治療施設、児童自立支援施設、乳児院の 2008 年度調査時点での入所児童数の合計を指す。

## 第1章 児童虐待と家庭支援専門相談員制度

### 1. 児童虐待の社会問題化のプロセス

#### (1) はじめに

わが国で3度目に児童虐待が社会問題化されはじめた1990年代初頭から20年以上が経過した。この間、一貫して児童相談所の虐待相談対応件数は増加し続け、2012年度は統計を取り始めた1989年度と比較すると60倍を超えている<sup>i</sup>。1970年代初期に社会問題化された際には、これほど長期にわたって社会的な関心を集めることはなかったことと比較すると、今回の社会問題化のプロセスは興味深い。序章で触れたように、1990年初頭の子どもに関する行政の主要な関心は少子化であった。児童虐待対策も、貴重な子どもが虐待によって死亡している現実に対する切実な対策として、少子化対策の中に位置づけられた。しかし現在、研究領域では児童虐待は少子化の文脈というよりはむしろ子育て家庭の不安定さの文脈でとらえられ、行政施策もそれに追随しているように見える。ある現象が、どのような文脈から誰によって関心を持たれるかということは、施策のあり方を規定するのである。社会構築主義の視点から、KitsuseとSpectorは次のように社会問題を定義している。

われわれは、社会問題を定義するにあたって、社会のメンバーが、ある想定された状態を社会問題と定義する過程に焦点を合わせる。したがって、社会問題は、なんらかの想定された状態について苦情を述べ、クレームを申し立てる個人やグループの活動であると定義される。ある状態を根絶し、改善し、あるいはそれ以外のかたちで改変する必要があると主張する活動の組織化が、社会問題の発生を条件づける。社会問題の理論の中心課題は、クレーム申し立て活動とそれに反応する活動の発生や性質、持続について説明することである。(Kitsuse&Spector=1990:119)

この定義によれば、まずは今日の児童虐待問題が、社会のどのメンバーによって社会問題であると認識され、誰に対してどのように主張されたのか、またこれに対して児童福祉政策がどのように対応したのかという過程が明らかにされる必要があろう。

今日の20年超にわたる社会的関心の形成、維持のプロセスにおいては、常に同じ文脈から児童虐待が社会問題として申し立てられてきたわけではなかった。いま、1989年から今日に至るまでの児童虐待の社会問題化のプロセスを政策展開の変化を指標に、次の3つの時期に区分して検討してみたい。まず第Ⅰ期を児童相談所が児童虐待相談の統計を取り始めた1989年から、児童虐待の防止等に関する法律（以下、児童虐待防止法）制定の2000年までの12年間とし、これを問題発掘期と呼びたい。第Ⅱ期は児童虐待防止法制定翌年の2001年から家庭支援専門相談員制度導入の2004年までの4年間とし、これを問題拡大・制度整備期と名付けた。最後に第Ⅲ期を2005年から現在までとし、これをゴール転換期と呼ぶことにする。

## (2) 問題発掘期と早期発見・早期介入

1980年代後半からの児童虐待の社会問題化のプロセスを最初に牽引したのは、民間支援団体であった。アルコール依存等からの回復支援の過程で新しく「発見」された子どもへの暴力やネグレクトに対し、被虐待児への対応と、虐待してしまう母親への支援の必要性が支援者によって認識されていた。そこでまず全国に先駆けて 1990 年に大阪の児童虐待防止協会が、翌 1991 年には東京の子どもの虐待防止センターが設立され、その後 1990 年代には同様の児童虐待防止を目的とした民間支援団体が全国に設立されていく。これらの民間団体は、第Ⅰ期において、児童虐待現象の存在や子育てに悩み不安を感じる母親の存在を社会一般に知らせる役割を担ってきた。またこれらの団体は、早い段階から虐待ホットラインを開設して母親の電話相談を行っており、被虐待児の保護というより、虐待してしまう母親や虐待しそうな不安に悩む母親への支援によって、児童虐待防止に焦点を当てている。

ところで、児童虐待がどのような社会問題として提起されてきたのか、その特徴を時期別に大まかに把握するために、国立国会図書館の検索システム NAL-OPAC で「児童虐待」「子ども虐待」をキーワードに、発表された論文、雑誌記事、書籍を検索すると、第Ⅰ期には 38 件が該当した（表 1-1）。雑誌掲載論文数がまだ多くない一方で、一般の読者を対象にしたルポルタージュや児童虐待を解説する書籍が刊行されていることがこの時期の特徴といえる。

表 1-1 1989 年～2013 年の OPAC 検索による文献の類型

児童虐待社会問題化の3期	文献の種類(該当数)	主な内容
第Ⅰ期	雑誌記事(18)	児童虐待の現状、保健医療分野からの報告 等
[問題発掘期]	書籍(14)	行政・民間作成の虐待防止手引き・対応マニュアル、ルポ・データブック、一般読者を対象とした児童虐待解説
1989-2000	講演会記録・学会記録等(6)	虐待防止講演会
第Ⅱ期	雑誌記事(68)	児童虐待対策特集、行政等の実践報告、実態調査、児童虐待防止法、アセスメント指標・アプローチ開発研究
[問題拡大・制度整備期]	書籍(24)	行政・民間作成の虐待防止手引き・対応マニュアル、児童虐待概念・歴史、臨床研究
2001-2004	講演会記録・学会記録等(16)	研修講演記録等
	調査報告書(2)	児童虐待に関する意識調査・医療機関調査
第Ⅲ期	雑誌記事(105)	児童虐待対策特集、周辺領域(医療・保健・心理・教育・法学)からの実践研究、国際比較研究、アセスメント／スクリーニング指標・アプローチ開発研究、地域ネットワーク研究、行政等の実践報告
[ゴール転換期]	書籍(72)	行政・民間作成の虐待防止手引き・対応マニュアル、対応実践事例集、児童虐待論、貧困・発達障害等関連問題研究
2005-	講演会記録(15)	講演会、シンポジウム記録
	調査報告書(11)	「子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について」、調査報告書

問題発掘期の早い時期には、親が実の子どもを虐待し、死亡させるという現象が、社会

に驚きをもって受け止められたが、1970年代に見られた母親の母性喪失批判よりは、むしろ母親の病理性がマスメディア等によって注目された。同時に、上述の民間団体等の啓発活動によって、母親が子育てに不安を感じたり、子どもに暴力を振るったり暴言を浴びせてしまう時があることをカミングアウトし、自ら支援を受けようとすることを肯定的に評価する論調がマスメディアに現れた。加えて、保育分野の研究者を中心として、現代を「子育ての難しい時代」と強調するようになる（大日向 1999; 汐見 2010）。自らが親になる以前に子どもに接した経験の少ない母親が感じる育児不安に着目して、虐待的な親子関係を誰もが陥りかねない病理であると強調したのである。子どもを虐待することが特別で異常な母親の起こす事件ではなく、「いつでも誰にでも起こり得る現象」だと強調することで、孤立無援の育児に追い詰められていた多くの母親に、助けを求めても良いのだというメッセージを送ることに成功した。こうしたごくありふれた子育て中の母親の悩みへの政策的対応が、子育て支援を提供する目的で制定された児童家庭支援センター（1998年制定）である。しかしその反面、問題発掘期にはありふれた育児不安と深刻な虐待の兆候の区別をあえて行わず、ごく些細な育児不安も「虐待リスク」と見なされた。そして虐待の心理的側面に注目が集まるにつれ、一部の母親が自ら「虐待しそうな不安」を訴えて支援を求めるに至った（大原 2001; 田中 2010）。

そのため、問題発掘期にとられた主な虐待対策は児童虐待家庭の「早期発見・早期介入」であったと言える。さらに早期発見・早期介入を求める行政の意識は、虐待が起こる前段階にまで及び、後に全子育て家庭のスクリーニングを通して虐待リスクの管理を行う制度（2004年新生児全戸訪問事業）として結実することになる。この点は、民間支援団体が不安を抱える母親への支援を通じて児童虐待を未然に防ごうとしたこととも通じ、政策が民間活動の後追いをしていたと考えられる。

しかし一方で、児童虐待の社会問題化のプロセスで社会に与えたインパクトが大きかったために、第Ⅰ期の初期には虐待家庭に介入し子どもを救出する役割を負っていると考えられていた児童相談所の対応の遅れにも批判が集中した。だがこの点も、わが国の児童福祉司数が先進諸国に比べて児童人口の割に少ないことが知られるようになった。虐待通告数の増加が児童相談所の対応能力の限界を超えていることも認識され、やがて児童福祉司増員へとつながった。

ところで注目すべきは、この問題発掘期が、児童養護施設（当時の養護施設）において入所児童数の減少が問題視されていた時期でもあったことである。わが国の児童養護施設の多くは社会福祉法人の経営するものであり、国と自治体の措置費で運営されている。1990年頃は全国の児童養護施設で入所児童数が定員の9割を下回り、施設運営を圧迫していたのである。児童養護施設は従来の養育者のいない子ども、ひとり親等養護問題を抱えた家庭の子どもに代わり、不登校児や情緒的な課題を抱えた子どもを入所させ、定員の充足を試みていた。そのため、この児童虐待の社会問題化の発掘期は、児童養護施設にとってはまさに「新しい顧客」発見の時期でもあったと言える。このような日本の状況について、イギリスの社会的養護の研究者である Goodman は次のように指摘する。

この傾向が続けば、公立施設はいうに及ばず、民間施設の中にも閉鎖を余儀なくされるところが出て来ざるをえないことは明白であった。そして民間施設の閉鎖は、長く続いてきた入所施設による児童福祉事業の輝かしい歴史の終焉を意味していた。施設閉鎖はまた、同族経営によるファミリービジネスの基盤を失うことを意味する場合も少なくなかった。そうすると、老人ホームや保育所のような他種の福祉施設を運営している場合、社会福祉法人の適格性そのものが問われることとなり、法人経営問題にまで波及することが予想された。一九九一年全養協・京都会議では、それまでに意識していなかった施設長も含め、児童養護施設長全員、二一世紀に生き延びるには児童養護施設は社会的に新たな役割をみつけ出さなければならない、と強く認識させられたのであった。(Goodman=2006 : 291)

上述のように、第Ⅰ期にはまず民間の支援団体が児童虐待現象と子育てに悩む母親の存在を社会に知らせ、母親に対する相談援助を開始した。研究や行政施策が後追いつる形で展開し、児童虐待を一時的な流行問題に終わらせず、社会問題として定着させたのが問題発掘期であると言えよう。また、児童養護施設がこの新しい「顧客」への関心を示し始めた時期でもある。その児童政策としての結実点が2000年の児童虐待防止法の成立である。ここで初めて児童虐待が明確に法律に定義され、発見者の通告義務が明記されることになる。

### (3) 問題拡大・制度整備期と市民動員

続く第Ⅱ期の問題拡大・制度整備期は、児童虐待防止法成立を受け、行政が主体となってさらに広く市民一般に児童虐待問題を啓発し、児童虐待の発見に市民が巻き込まれていた時期である。虐待通告件数の増加も、それまでの緩やかな増加とは異なり、法律施行前後で急上昇している。先と同条件で検索した論文、雑誌記事、書籍も、110件該当と急増している(表1-1)。専門誌にも特集が組まれ、多分野からの論文が投稿されるようになる。また行政、教育機関、医療機関等で用いる虐待対策マニュアルが多数作成される一方で、虐待家庭のアセスメント指標開発や支援のアプローチ開発に関する論文の投稿が目立っている。

2000年代に入ると、児童養護施設でも1990年代初頭の入所児童不足から一転して入所児童数の急増・激増が言われるようになった。入所児童中に被虐待児の割合が増加するにつれ、施設内部で子どもが多様な問題を引き起こし、大規模集団での養育の難しさが露呈する。社会的養護に従事する職員や研究者の専門誌である『季刊児童養護』にも、被虐待児の増加によって現場が混乱していく様子が表れている。職員が虐待によって傷ついたり子どもが引き起こす暴力等の問題行動に対応しきれず、バーンアウトによる離職や職員による入所児童の権利侵害行為が生じるに至った(全社協2009)。児童養護施設が常時満床であることから、児童相談所に一時保護された子どもが行き場を失い、一時保護所に長期に留



め置かれる現象も常態化している。安部らの行った全国の児童相談所一時保護所に保護されている子どもの大規模な調査によれば、1998年から2005年までの8年間で一時保護件数は6%しか伸びていないにもかかわらず、一時保護した子どもの延べ日数は75%増加している。児童福祉法の定めた一時保護期間2カ月を超えて保護している子どものいる一時保護所は半数を超え、場合によっては1年を超える例もあり（安部 2009）、今日でもこの傾向は継続している。

この期はすでに社会問題としての発掘は終わり、児童虐待が看過できない問題だとの認識が広く一般社会へいきわたっていた。しかし虐待相談が増加する一方で、通告をためらったために子どもの命が失われることも依然続いていた。そこで、市民の通告義務をさらに強化する児童虐待防止法改正が2004年に行われている。同年には児童福祉法も併せて改正され、子どもに関する相談の窓口が都道府県から市町村に移譲された。この業務の移譲によって、児童相談所は比較的深刻な虐待事例への対応に集中できることが期待された。さらに、児童養護施設を含む児童福祉施設に家庭支援専門相談員（FSW）を配置する厚生労働省通知が発表されたのも2004年のことであった。本論文のテーマである家庭支援専門相談員制度の導入の経緯については次節で詳しく検討するが、問題拡大・制度整備期とは児童虐待問題に対応するために次々と法制度が整備されるとともに、広く市民一般がその防止対策に巻き込まれていった時期であると言える。

また、市民からの虐待通告が急増する一方で、その対応が追い付かない事態も生じていた。こうした現象は、児童虐待対策で先行する米国ではすでに1980年代に経験しており、小林はシンポジウムでのリチャード・D・クルーグマンの発言を引用しながら、通告・親子分離を強化して対応の限界を超えた米国型の対策を選ぶのか、発見と支援の均衡を保って対応を発展させてきた欧州型の対策を取るのか、わが国も決断を迫られた時期にあったことを指摘している（小林 2007）<sup>ii</sup>。

#### （4）ゴール転換期と「家族再統合」

第Ⅲ期のゴール転換期には、児童虐待対策にはいくつかの異なるベクトルの動きが影響を与えた。まず、最も深刻な事例である虐待死事件が後を絶たないことから、厚生労働省は2005年に児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会を設置し、虐待死の全数調査を開始した。また、虐待が生じる背景要因の分析が進んだことで、それまでの母親の「心の問題」という認識に対して、研究者や現場から虐待家庭の「貧困」が主張された。さらに、虐待相談の増加の一方で社会的養護の定員は増えず、施設側の受け入れ限界が明らかになってきた。そのため、社会的養護から地域へ戻すこと、社会的養護に至る前に地域で家族をケアする必要性が認識されるようになっていく。

2005年から2013年に発表された論文、雑誌記事、著書は203件が該当した（表1-1）。問題拡大・制度整備期以上に保健、医療、教育などの社会福祉学隣接領域からの発表が多くなっているが、児童虐待問題の認識が広く浸透したことの証左であろう。スクリーニング・アセスメント指標開発に加え、地域ネットワーク開発研究も目立つ。この時期にとく

に増加したのは書籍である。多くは行政の虐待対応マニュアルや実践事例集であるが、発達障害や貧困問題と児童虐待の関連研究などが刊行されていることは特徴的である。

これまで心理学・精神医学分野の研究では、虐待親の「心の問題」と被虐待児の「トラウマ」に焦点を充てたものが多かった。これは民間支援団体の依存症患者支援の過程で発見されたアダルト・チルドレンや被虐待児をいかにケアしていくかという現場の問題意識と、1995年の阪神淡路大震災以降「トラウマ」や「PTSD（ストレス後心的外傷）」という用語が一般社会に普及したこととも無関係ではない。被虐待児は身体の傷だけではなく心にも傷を負い、後々に至っても「フラッシュバック」と呼ばれる被害の追体験と問題行動が生じることがあり、社会的養護の現場では職員の深い愛情が必要とされることが知られている。さらに、第Ⅲ期に入ると、被虐待経験が発達障害を引き起こす可能性があることも指摘され（杉山 2007）、単に愛情深く接するだけではなく、専門的な治療の必要性が認識されるようになった。

一方、この時期に新しく始まったこととして、児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会が発足したことが挙げられる。同専門委員会は度重なる虐待死亡事例を詳細に検討し、今後の対策に生かすことを目的として、2005年に社会保障審議会児童部会の下に設置された。同年の専門委員会第1次報告（厚生労働省 2005）では、死亡事例の発生している家庭の多くが経済的な困窮や家族・親族ネットワークの脆弱さを抱えており、若年の母親で妊娠中からケアが不十分な実態が明らかにされた。問題発掘期に強調されたような心理的な問題も生じているが、社会・経済的な問題もまた深刻な虐待事例の背景にあることが示されている。同委員会は2013年現在までに第9次報告（厚生労働省 2013b）を提出し、若年で孤立し、生活基盤の不安定な母親に対する保健・福祉・就労等の複合的な支援のため、地域ネットワーク構築の必要性を繰り返し提言している。

研究者および児童相談所、社会的養護の現場からも、虐待家庭の貧困が指摘されるようになっていく。実は比較的早い段階から、児童虐待を「こころの問題」として構築する医療モデルのアプローチに批判的だった研究者もいる（たとえば上野加代子 1996；2003；2006）。上野は、米国の児童虐待問題が医師や精神科医師によってわが国へ輸入され、虐待親の「心の問題」が治療の対象と見なされた上に、さらに虐待が起こる以前からリスク保持者として「捕獲」されていく虐待対策の構造を指摘し、批判している。日本においても、松本（松本 2007；2010）、山野（山野 2006）らは、児童虐待の発生する家庭が貧困家庭であることを実証的に示した。山野らによって、米国の児童虐待家庭の住居や就労、食事と健康状態など詳細な分析をもとに、貧困や低収入が児童虐待やネグレクトとその深刻さの程度に深く結びついていることを実証した Pelton（Pelton=2006）の研究が紹介されたのも第Ⅲ期である。Pelton は貧困それ自体が虐待の直接要因なのではなく、親のストレスやパーソナリティが媒介要因になっていると留保しながら、児童虐待やネグレクトを減らす最も効果的な方法は貧困やそれに付随する社会環境的な困難性を減らすことだと結論づけている。Pelton の分析は米国を対象としたものであり、人種や貧困層の集住する住居の構造、アメリカの社会保障制度であるフードスタンプやメディケイドなどが分析項目に上

っているため、これをわが国にそのまま当てはめてみることはできない。しかし、わが国でも貧困家庭に育つ子どもがそうでない子どもに比べて教育、医療、栄養面で不利な状況に置かれ、労働市場への参入時にも不安定な就労によって脆弱な生活基盤が引き継がれることは、上述の先行研究等によって実証され始めている。Pelton は児童虐待とネグレクトに関して、もっとも貧しい子どもたちがもっとも危険な状態に置かれ、豊かな子どもたちが安全な状態に置かれるという現象を「漏斗現象」と呼んだが、この現象がわが国にも存在していると言えよう。この点は川松（川松 2008）、清水（清水 2010）ら児童相談所の立場から、児童虐待と家庭の貧困との間には密接な関係があり、虐待問題の根本的な解決のためには、虐待家庭の生活基盤を安定させる対策をとることが先決だと主張されていることによく示されている。

児童相談所で働いていると、社会から児童相談所に要請されている使命が、あたかも虐待をする「ひどい」親から子どもを保護することであるかのような世論を感じることもすらある。しかし、一つひとつの虐待相談を深く調査していくと、そのような社会からの視線とは違った姿が浮かび上がってくるのである。私たちの目に映る子ども虐待の背景は単純ではない。多くの保護者は生活上のさまざまな困難を抱え、そして、社会的な介入を受ける状態に落ち込んでいる。しかも多くの家庭が経済的な困難に苦しんでいることに気づかされるのだ。（川松 2008 : 88）

このように、虐待通告を扱う児童相談所で、近年「こころの問題」を超えた社会環境的な要因が把握され、個別の保護者指導を超えた生活全体の支援の必要性が認識されていることは興味深い。

一方、児童養護施設の満床状態は継続しており、要養護の事由を一刻も早く解決して子どもを退所させ、入所待機児童を措置すべきとの無言の要求が児童相談所からも社会的養護の現場からも挙がっていたと考えられる。同様に、児童養護施設のみならず情緒障害児短期治療施設や児童自立支援施設でも被虐待児の入所が増加し、施設の回転率が緊急課題となっていった。

児童虐待対策で日本より先んじている諸外国の例をみると、親子分離による児童保護優先の政策から、家族再統合、家族維持政策へとシフトするのが常である。例えば米国では 1970 年代に虐待通告の急増とともに親子分離を伴う保護の急増を経験したが、1980 年代に入ると分離保護優先の政策および長期の家庭外養護が批判されるようになった（池谷 2009 ; ヘネシー 2004）。今日では一時的に分離保護されることがあっても、概ね 1 年から 2 年という短期間に家庭復帰させることが義務化され、短期での家庭復帰が果たせない事例については養子縁組される（池谷 2009）<sup>iii</sup>。オセアニア地域でも、子どもと養育者、養育環境のパーマネンシーを重視する観点から、親族を含む里親委託が一般的である。オーストラリアでは 1990 年代半ばにグループホームも閉鎖され、社会的養護の 9 割以上は里親または親族への委託であるが、それ以前に親子分離を回避するための集中的な在宅プログラ

ムが用意されている（加藤純 2010）。

先述の受け皿の問題に加え、こうした諸外国の前例が研究されたことで、わが国の児童虐待対策も分離保護一辺倒ではなくなってくる。虐待対策において、子どもの保護はゴールではない。そもそも虐待通告ケースのすべてが分離保護されるわけでもない。子どもの安全が脅かされないならば、無理に分離保護される必要はない。いったいどのような支援があれば、子どもが家庭外へ出されないで済むのか。どのような条件を整えば、分離保護された子どもが親元へ帰ることができるのか。虐待対策はこのような問いに取り組む段階に入ったのである。厚生労働省は「子どもがその保護者から虐待を受けた場合、必要に応じて子どもを保護者から一時的に引き離すことがあるが、保護者が虐待の事実と真摯に向き合い、再び子どもとともに生活できるようになる（「親子の再統合」）のであれば、それは子どもの福祉にとって最も望ましい」（厚生労働省 2007a;2008b）とする見解を示し<sup>iv</sup>、家庭外に分離保護した子どもを家族の元へ再統合することが児童福祉政策の重要な課題になってきた。才村も、現実には家庭復帰が困難な事例が存在するとしながら、一時的にやむを得ず親子分離されたとしても、できるだけ早く家庭復帰できることが理想であると述べている（才村 2005）。

このように、児童虐待を少子化という文脈から社会問題化し、「いつでもだれにでも起こり得る現象」として問題の掘り起しを図った問題発掘期、問題が隣接多領域で盛んに研究され、法整備が急速に整うとともに広く一般市民が対策に巻き込まれていく問題拡大・制度整備期を経て、現在は分離保護から家族再統合へと制度目標を転換する時期に入っていると考えられる。児童福祉法の 2004 年の改正においては、「（児童福祉施設等を）あわせて退所した者に対する相談その他の自立のための援助を行う」「規定による措置の期間は、当該措置を開始した日から二年を超えてはならない」等の文言が明記された。相澤によれば、これは保護者に対する支援を行いやすくし、家族再統合後の見守りや支援などのアフターケアの充実を図ることを目的とするものである（相澤 2004）。したがって、一度は子どもを親元から分離保護しても、関係者が「家族再統合」実現へ向けて支援することが明示されたといえよう。ゴール転換期の児童虐待対策のキー概念である「家族再統合」という用語については、第 2 章で議論することにするが、「家族再統合」を達成するにあたり中心的な役割を担うことが期待されているのが、家庭支援専門相談員（FSW）である。第 3 節でその概要と制度導入の経緯を確認しておきたい。

## 2. 児童養護施設の子どもの家庭環境

本節では、この FSW が導入されるにいたった児童養護施設の戦後の成り立ちと入所児の傾向を概観し、児童養護施設に暮らす子どもたちの社会的位置を確認しておきたい。

### （1）児童養護施設の機能の変遷

今日の児童養護施設の原点は、明治期に民間篤志家らによって全国に創設された入所型

の育児施設にさかのぼることができるが、児童虐待の社会問題化のあり方が時代によって異なったのと同様に、児童保護施設に収容された子どもの実態も時代とともに異なっている。ここではとくに第二次世界大戦直後から今日までの入所児童とその背景の変化に着目し、児童養護施設の目的の変遷を整理しておきたい。

終戦直後の児童養護施設（当時の養護施設）に求められた役割は、もっぱら戦災孤児の収容保護であった。1944年には全国の養護施設はおよそ200施設だったが、1945～1950年の5年間に倍増し、続く15年ではほぼ今日と同程度までその数を増やしている。戦後混乱期の養護施設を研究した山口は、終戦直後に設立されたおよそ200施設のうち、約半数が「戦争による孤児、引揚孤児、浮浪児を目的とする施設」であり、とくにそのうち6割程度が1946年までの2年間に慌ただしく設立されたことを指摘している（山口1985）。実際には終戦直後の入所児童も、成育家庭の貧困問題や障害、非行問題等、多様な問題を抱えていたと思われるが、実践現場でも研究者の間でも衣食住のみが課題の「単純養護」が要求されていると見なされてきた。そのため、養護環境の質よりも収容児童数が重視され、大舎制施設ばかりが作られることになった。養護施設は衣食住を保障し、子どもが退所するまで職員が親代わりをする家庭代替機能を担っていたといえる。

このような大規模集団での養護のあり方に対して、ホスピタリズム<sup>v</sup>の弊害を指摘して批判的な立場をとる者と、集団の育ちあいを重視した積極的養護理論<sup>vi</sup>・集団主義養護理論<sup>vii</sup>の立場をとる者が登場し、1950年代にはいわゆるホスピタリズム論争が起こった。しかしこの論争が決着する前に、児童養護施設の入所児童の質に変化が生じはじめることになる。戦後の社会的養護のニーズの変遷を3期に分けて時代ごとに整理した加藤によれば、戦災孤児の救済が求められた終戦直後の第1期と異なり、高度成長期から1990年頃までの第2期には、実親が存在しながらも親子関係が希薄化した「崩壊家庭」から生じる社会的養護ニーズに応えることが求められたという（加藤純2005）。ただし、第2期においても、養護施設は機能を果たし得ない家庭に代わる家庭代替を目的としていたと言える。

状況が大きく変わるのは1990年以降から今日まで続く第3期である。施設入所後も実親との交流を持ち続ける入所児童が増えたことから、児童養護施設に求められる役割は家庭代替から家族関係の調整および家庭支援へと大きく変化していくことになった。むしろ、今日においても実親との関係を持ち得ない子どももいるため、家庭代替の機能がまったくなくなったわけではない。そのため、むしろ今日は入所児童によって異なる多様なニーズに対応することが迫られていると言えよう。多様な課題を抱える入所児童の「単純養護」だけではなく、治療的機能を果たしながら発達を保障する必要性が生じるとともに、家庭に近い環境での養護が理想とされ、施設のユニット化、小規模化、地域分散化が進められている。

## （2）児童養護施設入所児童の状況

終戦直後と異なり、多様な機能を求められるようになった児童養護施設だが、今日の入所児童とその成育家庭の状況はどのようなものであろうか。

平成 20 年度の「児童養護施設入所児童等調査」（厚生労働省 2008a）によれば、児童養護施設への措置事由でいわゆる児童虐待にあたる「父・母の放任・怠惰」「父・母の虐待・酷使」「棄児」「養育拒否」を合わせると、33.1%であった。これに家庭から両親が不在になることを意味する「父・母の死亡」「父・母の行方不明」「父・母の拘禁」「父・母の入院」を合わせた 20.2%、「父・母の精神疾患」の 10.7%、「破産等経済的理由」7.6%が続く。また、入所児童の被虐待経験について見てみると、53.4%と過半数の児童が重複も含めて何らかの虐待を経験している。したがって、児童養護施設の入所児童にとって、児童虐待はよくある経験ということができよう。父母の入院や就労など、短期の入所があらかじめ見込まれる子どももいるが、全体としては虐待を中心に複雑な背景を持つ子どもが多く、いわゆる「単純養護」ではなく治療的な関わりや家庭への支援を必要としていることが社会的養護の現場でも認識されている。

次に、厚生労働省が 2005 年度から毎年発表している「子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について」から、深刻な虐待が発生した家庭の状況についてみておく。この報告書は、今後の対策に活かすためにその年に発生した虐待死・心中死の全数を調査し、事例分析を行うもので、すでに第 9 次報告まで出されているが、第 1 次報告から第 9 次報告までの間にさほど傾向に変化はない。死亡する子どもの年齢は 0 歳が最も多く約半数であり、3 歳までに 8 割前後が該当する。主たる加害者は実母が最も多く、実母の抱える問題としては「若年妊娠」「望まない妊娠」「妊婦健康診査未受診」「母子健康手帳未発行」「乳幼児健康診査未受診」が多い。このことから、虐待死事例は、若い女性が物理的にも心理的にも子どもを受け入れ育てる準備が整わないまま出産に至り、短期間で死亡につながるものが推測できる。報告書では、これらの状況に対し、リスクを抱えた妊産婦の早期発見と、地域ネットワークの構築を繰り返し提言している。

ところで物理的・心理的に出産育児の準備が整わない理由について、やや古いが 2005 年に東京都が行った調査（東京都福祉保健局 2005）、および 1997 年に全国児童相談所長会が行った調査（全国児童相談所長会 1997）はさらに掘り下げた背景分析を行っている。これらの調査によれば、虐待の発生した家庭には「経済的困窮」「就労の不安定」「不安定な婚姻・ひとり親」「親戚・友人・近隣からの孤立」等の要素が重複して生じていた。児童虐待と貧困の関係を研究している松本も、社会的孤立や子どもと親の障害、親のメンタルヘルスの問題、ドメスティック・バイオレンスなど、多様な課題がいくつも重なり合う「複合的困難」という概念を用いて虐待家庭を分析している（松本 2013）。

上述の既存の調査・研究からは、現在の児童養護施設入所児童の半数以上にあたる被虐待児童の成育家庭が複合的困難を抱えているだろうことが伺われる。また、たとえ被虐待経験を持たず、短期入所目的の子どもであっても、一時的にせよ親族や民間サービスではなく児童養護施設を頼らねばならない家庭には、何らかの困難があるとも考えられる。このような児童養護施設入所児童とその成育家庭の状況について、「階層性」の視点から分析を行ったのが増淵（増淵 2008）である。増淵は養護問題を雇用労働者の労働問題に規定された、すべての子どものいる家庭の生活問題の一環と位置付けているが、その発生のリス

クはどの家庭にも等しくあるのではなく、雇用不安定層に集中しやすいことを次のように指摘する。

とりわけ、雇用・労働条件が不安定、あるいは失業している労働者世帯は、その生活基盤の不安定さから自助の成り立つ条件がより乏しく、社会問題として提起する要求や運動にも組織されずに地域から孤立しているため児童養護問題が集中的に現れていると考えられる。(増淵 2008 : 7)

増淵の「階層性」の視点をさらに発展的に継承しているのが堀場である。堀場は、増淵と同様に養護問題を「雇用労働者・自営業者などの社会階層にある子育て世帯の生活維持・再生産の行き詰まり・困難の問題」(堀場 2013 : 9) と定義した上で、働く人々の階層ごとに問題の現れ方に相違があるという「階層性」に着目し、とりわけ社会的養護に措置される子どもの家庭に養護問題が集中すると指摘する。

施設でくらす子どもの親の生活歴をみると、厳しい社会のしくみのなかで過剰な労働を強いられるか、労働の機会そのものからも切り離され、専門機関との接点がないなかで養護問題が引き起こされている。(堀場 2013 : 268)

さらに、児童養護施設の入所児童が置かれた現状を、わが国でも貧困研究で用いられる「社会的排除」の文脈から捉えようとする研究もある。谷口は、社会的排除に対して、一般に用いられる対概念の「包摂」ではなく、「脱出」という独自の概念を用いて、入所児童が施設生活を通じて主体的に排除状態を脱していく過程を丁寧に分析した(谷口 2011)。「包摂」が排除された人々を社会の側に組み入れるという望ましい状態像を示しているのに対して、ここで谷口の言う「脱出」とは、排除に対する軸を個人レベルに焦点化し、当事者の生活過程と主体性を強調した概念である。そのなかで、谷口は社会的養護の経験が、入所児童にとって必ずしも排除状態からの脱出の契機になっていない現状を明らかにしている。施設入所にあたって、子どもたちはそれ以前に脆弱ながらも結びついていた地域、学校からの断絶を経験する。谷口は、彼らが排除状態から脱出するためには、一度社会的養護においてしっかりとした帰属を実感する必要があるが、それが達成されないために脱出を妨げていると分析する。

子どもや当事者の生活過程の分析からは、生活拠点の移動に関わる社会関係の切断と再構築が明らかになった。そもそも、児童養護施設に入所するということは、これまで住んでいた生活拠点を移動することであり、子どもの入所前までの社会関係の切断や関係性が希薄になることを伴っている。その上で、子どもは施設を生活拠点として再び社会関係を築くものの、いずれ来る退所によって再び社会関係の拠点が切断される。ここからは、余儀なく繰り返される社会関係の起点である「定点」の移動が彼

／彼女らの居場所を崩し「抛りどころのなさ」を加速させている可能性が示唆された。」  
(谷口 2011 : 238)

しかも、社会的養護の経験そのものがそれ以前の排除された状態と比較しても脱出につながらないのは、児童養護施設自体が地域から排除された空間であり、そこに暮らす子どもたちが施設の立地している地域に迎え入れられないばかりか排除状態を強めている現状があることを指摘している。そのため、子どもたちは社会にしっかりと帰属する経験を一度も持たないまま、再び排除状態の退所へと向かうことになるのである。

児童養護施設に暮らす子どもたちが脱出できない主因は、社会的に排除された状態にあった子どもたちを援助していく体制の課題、生活している基盤である施設自体のもつ課題、ひいては社会全体の課題として還元される。逆説的ではあるが、排除されているから子どもは脱出に向かうことができないという結論が導き出されよう。」(谷口 2011 : 240)

一方、児童養護施設に入所する子どもたちを社会的排除の典型例とみなす西田（西田 2011;2012）は、入所児童が十分な学習支援を受けないまま低学力の状態に留め置かれ、学校でも「施設の子」であることを隠して生きるか、不良児として生きるかという極端な選択を迫られた末に、学校からの早期の排除につながり、その結果として「袋小路」的な職業キャリアしか積めないという社会的排除に至る過程を描き出している。

家族を頼ることができない者にとって、幼少期から成人した後まで、さまざまな形で不利、困難さが覆いかぶさる状況は、家族・親の支えが不可欠であるという「家族依存社会」としての日本の姿を浮かび上がらせる。そして、本来ならばその不利な条件をカバーすべき児童養護施設も十分な機能を果たせていない。さらに、社会の新メンバーに成員としての資質を身につけさせる役割を担う学校教育も、その任を果たせていないばかりか、困難な経験を強い、無力なまま社会に追いやる、排除する存在となっていることも明らかとなった。(西田 2012 : 223)

これらの谷口や西田の分析は、子どもたちが成育家庭や生まれ育った地域から排除されて児童養護施設に措置されるものの、児童養護施設それ自体が地域や社会から排除された空間であり、入所期間中に子どもの生家の生活基盤の安定化に寄与できないばかりか、直接的にケアの対象である子どもの自立に際しても、彼らが労働市場や地域社会に居場所を見つけ、排除状態から脱出していくことに十分な貢献がないことを示している。その上、深刻な養護問題が発生する家庭は、先にみたように生活基盤や人的ネットワークが不安定で地域からも孤立しがちな、いわば社会的に排除された家庭であった。したがって、児童養護施設に入所している子どもたちは、そもそも社会的に排除された家庭から、さらに子



どもだけが排除され、別の排除状態にある施設へと移動を余儀なくされている。このような状態を、筆者の言葉で「二重の排除」と呼ぶことにする。谷口らの研究からは、子どもたちがおかれたこの「二重の排除」状態からの「脱出」あるいは一般社会への「包摂」のための支援が児童養護施設では十分に行われていない可能性が示されたが、本論文の終章では、FSW が現状にどのように対応しようとしているかを分析する。

### （３）社会的養護におけるケアとソーシャルワーク

児童養護施設で入所児童の直接処遇にあたる職員は、児童指導員または保育士であるが、両者を総称してケアワーカーと呼ぶことがある。本研究でも上記の二職種を区別せず、直接処遇担当職員の意味でケアワーカー（以下 CW）の用語を使用している。わが国においては、入所施設職員の業務をケアワークとソーシャルワークに分けて理解する傾向にある。もっとも伊藤はこの点について、両者の区分が実際には不明瞭であるにもかかわらず、多くの研究者がケアワークとソーシャルワークの独自性や専門性を確立しなければならないという強迫観念に駆られていることを指摘し、両者の不可分性を認めてレジデンシャルワークの視点に立つことを推奨している（伊藤 2007）。だが、本論では FSW の位置づけとその役割を明らかにするために、さしあたりケアワーカーと呼んでおきたい。

上記の CW のうち、保育士は国家資格であるが、児童指導員は任用資格に過ぎない。四年制大学の福祉・社会・教育・心理学系の学を修めていること、教員免許を取得していること、および 2 年以上児童福祉施設で職務経験を有すること等、一定の条件を満たすことで認定される。平成 19 年度の「社会的養護施設に関する実態調査中間報告書」（厚生労働省 2007b）によれば、児童養護施設に勤務する児童指導員の有している資格は、教員免許（21.8%）、社会福祉士（12.2%）、保育士（10.1%）などとなっている。実際に児童養護施設の職員には、教員志望者や教員からの転職者もいる。保育士についても、保育士養成課程の教育内容が保育所保育に偏っており（大嶋 1989）、児童指導員、保育士ともに社会的養護に関わる専門職としての教育を十分に受けていないことも指摘されている（保延・堀尾 2009）<sup>viii</sup>。また、職員の離職率の高さも指摘されており（認定 NPO 法人ブリッジフォースマイル 2013）、専門的な資格を持たない職員が短期間で離職し、現場の経験が蓄積されにくいことも課題となっている。

現在の児童養護施設には、直接処遇担当職員のほかに、心理療法担当職員・個別対応職員・家庭支援専門相談員・里親支援専門相談員・職業指導員等の専門職員が加算配置されている。これらの専門職員が実際には直接処遇職員を兼務していること、また非常勤採用されていることは珍しくないが、職種の上ではケアワークとソーシャルワークおよびその他の専門職の担当職員が識別されている。ただし、それでは専門職種を兼務していない CW がまったくソーシャルワークを担当することがないのかといえ、必ずしもそうではない。この点については、本論文の中で明らかになる。

児童養護施設で行われる支援は多様だが、入所の過程に沿ってアドミッションケア、インケア、リービングケア、アフターケアと区分して呼ばれることがある（亀井 2011）。アド

ミッションケアは児童相談所での一時保護にあたり、正確には児童養護施設で行われるケアではないが、児童養護施設では子どもの入所に際して一時保護所に出向いて子どもと面接をしたり、一時保護中の子どもが入所予定の施設を見学することがあり、施設側では入所時の対応を重視している。これは、子どもが施設入所の目的を正しく認識し、入所に同意をしているか、少なくとも納得していることが、その後の施設生活を順調に送る上で重要だと考えられているからである。インケアとは文字通り施設での日常生活の援助であり、基本的な生活、学習、余暇等を含めた広範囲にわたる援助である。リービングケアは 1980 年代にイギリスの児童養護領域で提唱された概念で、インケアとアフターケアの中間に位置する退所準備および社会生活・家庭生活導入のためのケアである（山縣 2008）。アフターケアは施設を退所した子どもや、その家族に対して行われる支援である。家庭訪問、職場訪問、学校訪問などを通じて、社会生活への適応を支援するものである。アフターケアは 2005 年の児童福祉法改正以降、児童養護施設の機能として明記された。上記の 4 段階のケアは、前段階のケアを終了してから次段階のケアに移行するというものではなく、相互にオーバーラップしながら行われる。

また、一つの業務でもケースの段階に応じてどのケアにあたるかが変化することもある。例えば家庭訪問は、入所中であればリービングケアにあたるが、退所後であればアフターケアと呼ばれるだろう。業務内容としては同じ家庭訪問であっても、どの時期に行うかによって当然目的は異なるため、このような呼びわけが生じることになる。しかし重要なのは上記の区分ではなく、これらの支援が切れ目なく、連続的に行われるということである。アドミッションケアからアフターケア、そして援助の終結に至る一連のプロセスには、年齢と段階に応じた直接処遇と、治療や個別のニーズに対応する専門的なケアが含まれるが、入所児童とその家族の状況を把握し、いつどのようなケアを提供するのかというマネジメントを行うのがソーシャルワークである。現在は家庭支援専門相談員（ファミリーソーシャルワーカー）が職種名に冠しているように、ソーシャルワークの専門職であると認識されているが、上述のとおり、入所児童と家族の状況を的確に把握し得るのは、日常的にケアを提供する CW であり、両者の業務の不可分性が推測される。この点についても本論文の中で明らかになる。

### 3. 家庭支援専門相談員制度の概要と制度導入の経緯

#### （1）家庭支援専門相談員制度の概要

家庭支援専門相談員（FSW）は、入所児童の早期家庭復帰等を支援するための体制を強化する目的で、1999 年にまず乳児院に導入された。2004 年には厚生労働省通知「乳児院等における早期家庭復帰等の支援体制の強化について」（平成 16 年 4 月 28 日雇児発第 0428005 号）によって児童養護施設、児童自立支援施設、情緒障害時短期治療施設に拡大導入され、家庭支援専門相談員の業務内容が示された。2012 年に児童養護施設および乳児院に里親支援専門相談員が導入されたことを契機に、上記の通知は廃止され、新たに「家

家庭支援専門相談員、里親支援専門相談員、心理療法担当職員、個別対応職員、職業指導員及び医療的ケアを担当する職員の配置について」(平成 24 年 4 月 5 日雇児発 0405 第 11 号)(以下、新通知。厚生労働省 2012a)が通知された。この新通知には、家庭支援専門相談員の業務内容に加え、配置の趣旨や資格要件が新たに明記された。家庭支援専門相談員(FSW)の資格要件は、社会福祉士、精神保健福祉士、施設従事経験 5 年以上、児童福祉司の任用資格のある者とされている。なお、2011 年からは乳児院、児童養護施設等に FSW を配置することが義務化されている。

新通知によれば、FSW は「虐待等の家庭環境上の理由により入所している児童の保護者に対し、児童相談所との密接な連携のもとに電話、面接等により児童の早期家庭復帰、里親委託等を可能とするための相談援助等の支援を行い、入所児童の早期の退所を促進し、親子関係の再構築が図られることを目的」として配置されている。ここでは親子関係の再構築が目指されているが、どのような関係ならば再構築されたと言えるのか、何によって親子の関係を測定し得るのか、具体的な指標や指針は示されていない。厚生労働省は児童相談所に向けては児童福祉司が保護者指導する際の指針として「虐待を行った保護者に対する援助ガイドライン」(厚生労働省 2008b)を策定し、その中で「家庭復帰の適否を判断するためのチェックリスト」を示しているが<sup>ix</sup>、児童福祉施設の FSW に向けた同様のガイドラインやチェックリストは存在しない。このため、通知が示す「関係の再構築」とは極めてあいまいな目標と言えよう。一方で、同時に「入所児童の早期退所を促進」という明確な目標も示されている。しかし、実際にはどこに退所を促すのかということが不明のままである。このような現状を前提とすれば、FSW が実際に現場で何をどのように判断しているのか、またそれに基づいてどのような支援を行っているのかを明らかにすることに意義があろう。

ここではまず新通知の内容を確認しておきたい。新通知に明記された FSW の業務内容は以下のとおりである。

- (1) 対象児童の早期家庭復帰のための保護者等に対する相談援助業務
  - ①保護者等への施設内又は保護者宅訪問による相談援助
  - ②保護者等への家庭復帰後における相談援助
- (2) 退所後の児童に対する継続的な相談援助
- (3) 里親委託の促進のための業務
  - ①里親希望家庭への相談援助
  - ②里親への委託後における相談援助
  - ③里親の新規開拓
- (4) 養子縁組の推進のための業務
  - ①養子縁組を希望する家庭への相談援助等
  - ②養子縁組の成立後における相談援助等
- (5) 地域の子育て家庭に対する育児不安の解消のための相談援助

- (6) 要保護児童の状況の把握や情報交換を行うための協議会への参画
- (7) 施設職員への指導・助言及びケース会議への出席
- (8) 児童相談所等関係機関との連絡・調整
- (9) その他業務の遂行に必要な業務

ここでは広範な業務が列記されている。里親支援専門相談員が新設されたにも関わらず、里親委託の促進のための業務が FSW 業務に残されているのは、早期の家庭復帰の可能性を見極めたうえで、それが困難だと判断されれば、施設よりも家庭的な環境での社会的養護に早期に移行することが目指されていると読むことができる。2004 年の通知では、保護者に対しては「養育相談」、退所児童に対しては「生活相談」等の用語の使い分けがあったが、新通知ではすべて「相談援助」に統一されている。どのような相談であるか具体性をなくし、あえてあいまいな表現を用いることで、FSW の業務を限定しないねらいがあったとも考えられる。入所児童や保護者に対する直接的な援助ばかりではなく、退所後の新たな「場」としての里親や養子縁組家庭など、施設を退所した子どもの養育者への支援、さらには地域の子育て家庭に対する相談援助まで FSW 業務に明記されていることに注目しておきたい。

## (2) 家庭支援専門相談員制度導入の経緯

1999 年にはじめに乳児院に導入された家庭支援専門相談員制度が、2004 年には児童養護施設をはじめ児童自立支援施設、情緒障害児短期治療施設にも拡大して導入されることになった。この拡大に先立ち、「ファミリーソーシャルワーカー<sup>x</sup>」を児童福祉施設に配置することの必要性が社会保障審議会児童部会「社会的養護のあり方に関する専門委員会（2003 年～2004 年）」によって議論されていた。同専門委員会は、同じく社会保障審議会児童部会下に設けられた「児童虐待の防止等に関する専門委員会（2002 年～2003 年）」と連動して 2003 年 5 月に設置され、5 回の討議を経て「社会的養護のあり方に関する専門委員会報告」（厚生労働省 2003b）を提出した。委員は児童福祉、保健分野の研究者の他、児童福祉施設の施設長等で構成されている。討議された項目は以下の通りである。

1. 社会的養護のあり方について（全体論）
2. 施設養護のあり方について
  - ①施設の小規模化
  - ②生活機能と治療機能などのケア機能強化
  - ③ケアの連続性の確保
  - ④ケア担当職員の質・量的な確保
  - ⑤地域支援機能などの在宅支援機能強化
3. 家庭的養護（地域ケア）のあり方について
  - ①里親制度の普及・啓発

- ②専門性の確保
- ③里親支援機能の強化
- 4. 年長児童に対する自立支援について
- 5. 社会的養護の質の向上
  - ①児童の権利擁護の強化
  - ②サービス評価や施設入所に関するアセスメントの策定
  - ③関係機関との連携
  - ④社会的養護関係者に対する要請、研修の充実

ここでは、すでに「児童虐待の防止等に関する専門委員会」で、今後の児童虐待対策には子どもの自立・家族再統合・家族機能再生に向けた取り組みが必要不可欠であり、その取り組みには児童相談所・児童福祉施設・民間支援団体・医療機関等、子どもに関わるあらゆる機関がネットワークを組んであたなければならないと提言されており、今後の社会的養護は「家族再統合」「家庭支援」の役割を担っているのだという方向付けがあらかじめなされていた。同委員会は最終的に次の6点を報告書にまとめた。

- 1. 社会的養護のあり方について
- 2. 家庭的養護（里親・里親によるグループホーム等）のあり方について
- 3. 施設養護のあり方（施設サービス体系のあり方等）について
- 4. 家族関係調整及び地域支援について
- 5. 年長の子どもや青年に対する自立支援について
- 6. 社会的養護の質の向上

このなかで、「3 施設養護のあり方について」の具体的な提言に、「児童福祉施設には、子どもを取り巻く家庭や地域との調整など、自らがケースワークを進めるために家庭支援専門相談員（ファミリーソーシャルワーカー）を配置すべきである」と明記された。また「4 家族関係調整および地域支援について」の項目にも「児童福祉施設においては、施設に入所した子どもの家庭復帰や家族再統合に向けて、子どもへの支援のみならず、児童相談所等の幅広い関係者と連携しつつ、家族への支援や親権者との関係調整を適切に実施していくことが必要である」として、「子どもに対する支援を考える際には、併せて家族に対する生活支援や精神的な支援を考えることが必要である。」「児童福祉施設を退所して家庭に戻った子どもに対する在宅支援は、「親」を含めた「家族」を対象に取り組むことが重要である。」との提言が盛り込まれた。

上述の専門委員会で討議されたなかで、大きな比重を占めていたのは今後の社会的養護のあり方であった。厚生労働省によれば、わが国は諸外国と比較して、社会的養護がもっぱら施設養護に偏重しており、2012年時点で社会的養護に占める里親委託率は13.5%である（厚生労働省 2013a）。施設養護の大部分を占める児童養護施設も定員20名以上の大舎

制で運営される施設は今なお 50%を超えている。同委員会では、今後の社会的養護は里親や里親によるグループホームなど、小規模で家庭的な環境が望ましいとしながら、一方で現実的には現在の児童養護施設がすべて解体されることは困難であると認識している。そのため、施設においても従来の大規模集団での養護を改め、ユニット化、グループホーム化を図りつつ、家庭的な環境を整えていく必要性が指摘された。このような小規模・家庭的養護は今日の社会的養護の一致した目標である。さらに、児童相談所とは異なる視点から、ある程度子どもの生活の様子を把握したうえで、子どもに最適な環境を選択し移行させていくソーシャルワークの視点が児童養護施設に求められたものと考えられる。

同委員会の発足に際して当初厚生労働省が予定していた検討課題に加えて、実際の討議のなかからまとめられたことのなかに、「家族関係調整および地域支援」があった。これは実際に社会的養護の現場に携わる専門委員の実感から提起されたものであろう。その際、子どもが施設養護から離れて家庭復帰するにせよ、他の小規模な社会的養護に移行するにせよ、生家との関係やこれから暮らす地域の支えというものが重要不可欠だとの認識が示されているといえる。このような家族の「関係」と「地域」の支援の重要性という現場感覚が、実際にそれを調整し支援を行う専門職制度を希求した点も指摘しておきたい。

### （３）「ファミリーソーシャルワーカー」とは何か

さて、上述の社会的養護のあり方に関する専門委員会における議論のなかでは、すでに乳児院に家庭支援専門員が配置されているにもかかわらず、「家庭支援専門相談員」ではなく、「ファミリーソーシャルワーカー」の用語が使われている。

- ・子どもの養育とともにファミリーソーシャルワーカーとして、親御さんたちの関わりを児童相談所と問題を整理して、三者によるインテイクが必要になってくるんだろうと思います（厚生労働省 2003a：高橋委員発言）
- ・施設の中に例えば、何か各論になってきてしまいますけれども、ファミリー・ソーシャル・ワーカーを置いて、ある部分子どもの権利侵害が大きい部分については施設の方でファミリー・トータル・プランを担える方がいるというのも1つの案。  
（中略）今後児童相談所がすごく充実していく方向が望めるのであれば、それは1つの方向ですけれども、それが望めないということであれば、既存施設の中でファミリー・ソーシャル・ワーカーを置いて、その部分は担うという辺りかというのは議論を要するんですけれども、権利擁護の視点というのは一番大事ではないかと思えます（厚生労働省 2003a：才村委員発言）
- ・既に何人かの方からファミリー・ソーシャル・ワーカー、特に児童福祉施設に、もしそういうものが置かれるとしたら、その人たちというのは、地域の人たちと同様に、その施設を利用している子どもの家族への支援、あるいは関係調整を担うべきではないかという御意見がありました（厚生労働省 2003a：松原委員長発言）
- ・ファミリー・ソーシャル・ワーカーの役割という、児童相談所の体制が十分でないと、

多くのケースは入所させたら相談所の関わりはそこで止まってしまうみたいな、次にもっと忙しい、もっと重要なケースがあるというのが今の実態だと思います。では、相談所がちゃんとできたらそういうものは要らないかというと、施設の中でも家族に対する関わり方というのが、ある一定の視点をもってやらなきゃいけませんので、特定の職員、経験を持って、経験を重ねながらそういうことをやる職員がどうしても要る（厚生労働省 2003a：中田委員発言）

乳児院に先行配置されたのは家庭支援専門相談員という名称であるが、ここでもすでに「ファミリーソーシャルワーカー」という別名は使われている。専門委員会の議論の過程で家庭支援専門相談員よりむしろ「ファミリーソーシャルワーカー」が好んで用いられた背景には、「ファミリーソーシャルワーク」および「ファミリーソーシャルワーカー」の概念が、実は決して新しいものではなかったからではなかろうか。同専門委員会をさかのぼること 30 余年、社会的養護の現場では経験主義に依拠する名人芸的施設養護からの脱却し、「家庭復帰」や「家族関係調整」を志向し、子どもと家族に焦点をあてるファミリーソーシャルワークの重要性がすでに 1960 年代から指摘されており、「ファミリーケースワーカー」の配置を要望する運動も起きていたのである（北川 2010）。この時、「ファミリー・ケースワーカー」導入の必要性を中心になって強調した大谷は、その著書のなかで次のように述べている。

…現代社会の子ども達の成長発達過程における最も不安定な要素は、その親子関係の脆弱化という現実である。とすれば、施設養護における児童養護職員の眼は、対象児童の日々の行動や状況の背後にある家庭や親の存在とそのあり方にまでその視線が延び及んでいなければ、児童の心身成長発達のニーズを施設養護場面においてしっかりと受けとめることはできないといわなければならない。職員配置の点やその処遇技術水準の面ではまだまださまざまな制約をかかえているとはいえ、今後の施設養護においては、児童の背後にある家庭や親達に対する、いわゆるファミリー・ケースワークの働きかけを進展させていくことが絶対不可欠である。（大谷嘉朗 1974：25）

児童の施設養護のプログラム展開過程には、その背後にある親や家庭に対する働きかけを含まなければならない。施設内養護だけでは決して完結的・自己充足的には運ばれない。（中略）この家庭再調整のサービスこそがファミリーケースワークと称されるものである。（大谷嘉朗 1975：123-124）

最近いわゆる対象児童の質的变化に伴い、最低基準による施設職員群にファミリーケースワーカーを加えることが要請されたり、アフターケアのためのケースワーカーを置くように、といった現場側からの声は、施設における児童養護の技術方法論的枠組みの中でケースワークの技術をどうとらえているか、実践的にも理論的にも幾多

の疑問を残しながらも、わが国においてもようやく施設養護近代化（時代・社会・児童のニーズに即応するためといってもよい）のために、ケースワーク技術の導入の必要が感じ取られ始めた証拠といってもよいであろう。（大谷嘉朗 1975：232）

また秋山も、ファミリー・ケースワーカーの担うべき役割を整理しているが、養護施設に配置が必要な背景として次のように述べている。

児童相談所のワーカー自らが「職員のオーバーワークによる相談業務への障害が起こっている…研究の場も、時間も、保障もなく、指導者もいない。…いかにわれわれが無力であるか」と述懐しているのは、正に現在の児童相談所の状況を直視した率直な告白であろう。とすれば、家庭と施設を結ぶファミリー・ケースワーカーは、「施設においた方がよい、児相においたほうがよい」という意見は大体半々」と意見が分かれているものの、現在の児相の機構のままならば、施設におくことの方が現実的な方策となってくる。（秋山 1975：10）

ここでは、まさに現代にも通じる問題認識から、家族支援と家族調整の必要性、およびそれを担う専門職員の配置の必要性が述べられている。このような現場での問題認識や配置運動が 1960 年代から 10 年以上も続いたという経緯があるにも関わらず、職員配置基準を改正してファミリー・ケースワーカーが養護施設に配置されることはなく、運動自体も収束してしまった。北川は、この 1960 年代および 1970 年代にいったいなぜファミリー・ケースワーカーの配置に成功しなかったのか、その役割の重要性を説得できなかったのかという反省がないならば、2004 年に導入されたファミリーソーシャルワーカーも十分に活用され得ないと警鐘を鳴らしている（北川 2010）。

上述のように、1960 年代にはすでに「ファミリー・ケースワーク」の重要性が指摘されていた。一方で 2000 年代に入ると、今度は「ファミリー・ソーシャルワーク」の重要性が指摘されるようになった。後者の「ファミリー・ソーシャルワーク」が本研究の取り上げる家庭支援専門相談員制度へと発展するものであるが、両者は同一のものなのか、少なくとも連続したものなのであろうか。あるいは、まったく異なる問題認識、社会的背景の下に現れた概念なのであろうか。ある乳児院の FSW は今回の制度導入時を振り返って、次のように述懐している。

施設にワーカー機能が導入されたことに「やっとこの時代が来た」という気持ちも正直ありました。施設は子どもを健康に育てることが仕事で、家庭調整や今後の方向について考えることは児童相談所の仕事、という理解があって、施設は情報を提供しても児童相談所の決定には口をはさめないような力関係がなんとなくあるように感じていたのは、私だけではなかったと思います。（窪田 2008：117）



ソーシャルワーカーとしての機能が制度化されているか否かにかかわらず、社会的養護の現場では常にその必要性が認識され続けていたのかもしれないし、後に述べるようにすでに類似の実践が存在したのかもしれない。しかしたとえそうであるにせよ、30 年以上のブランクを経て今日ようやくその必要性が指摘されたこと、しかも児童福祉政策の中に明確に位置づけられたことは特筆すべきであろう。

だが上記のような長期の背景をもって期待されてきたファミリーソーシャルワーカーと導入された家庭支援専門相談員が同じものなのかどうかという疑問に答えるためには、そもそも「ファミリー・ソーシャルワーク」とはなにかが問われなければならない。横堀によれば、「ファミリーソーシャルワークは現代家族の生活機能の回復と強化（エンパワメント）を目的とする社会福祉実践である」とされる（横堀 2002）。ここでは、家族には、日々の労働力を再生産すること、次世代を再生産し、労働市場からのリタイア世代を養護することが、実際のケアのレベルでも、感情のレベルでも本来の機能として期待されているという前提があり、その機能が何らかの理由で阻害されている場合にその回復を図るための援助が「ファミリー・ソーシャルワーク」ということになる。これらの阻害は、子育て中の家族にのみ生じる問題ではない。したがって「ファミリー・ソーシャルワーク」自体は児童福祉政策に固有の概念ではない。だが、これを子育て中の家族に特化して解釈すると、「ファミリーソーシャルワークは子どもにとって家族による養育は不可欠であるという認識に立ち、家族が抱える様々な問題を家族の再統合に向けて解決していく技術」（徳永 2007）ということになる。すなわち、家族が本来の機能として持っているはずの子育て機能を十分に発揮できるよう、それを阻害している様々な問題を解決し、「家族の再統合」に方向づけていくソーシャルワークとさしあたりは定義できるかもしれない。しかし一方で、北川はわが国ではファミリーソーシャルワークの理論化が不十分だとも指摘している（北川 2010）。「ファミリー・ソーシャルワーク」とはなにかということが問われることなく、ともかく家庭支援専門相談員制度として走り始めてしまったというのが実態なのかもしれない。

#### 4. 本研究の位置

以上のように「ファミリー・ソーシャルワーク」に関してすでに多くの議論があったことを述べたが、本節では、あらためて児童虐待問題と家庭支援専門相談員制度、児童養護施設の専門性およびファミリーソーシャルワークに関連する先行研究を検討することによって、本研究の位置を明示しておきたい。なお、第 1 節で述べた本研究の目的において重要なキー概念である「家族再統合」については、章を改めて先行研究のレビューを行い、本研究で用いる定義を行いたい。

##### （1）家庭支援専門相談員制度

児童福祉施設に配置された家庭支援専門相談員をめぐっては、多様な立場からその必要

性やあり方に言及がなされている。例えば藤田は児童相談所の立場から次のようにその配置の意義を強調している。

保護者と子供という両者の間に位置して、状況をつねに把握し、情報の共有化と目標設定（ゴール）に向けた取り組みが、最前線でのコーディネーターとして今後に期待する役割は大きい。とくに児童相談所との連携のなかでは、保護者の最新の状況と子どもたちの状況をつねに把握し、最も良いタイミングを調整してもらうことは、施設でのファミリーケースワーカーにしかできない。施設側にこうしたケースの進行管理を含めて、家庭復帰の取り組みをする家庭支援相談員（ファミリーケースワーカー）を設置する優位性としては大きいと思われる。（藤田 2004：17）

障害者自立支援法以降、児童福祉司が障害相談や、養護相談に限っても新規の虐待通告への対応で多忙を極めている。また 2004 年には子どもに関する相談窓口が市町村に移譲され、児童相談の入り口が児童相談所ではなくなったことになる。これらを併せて考えれば、家族再統合へ向けたソーシャルワークという養護相談の出口を児童福祉施設職員へ役割を移譲することも、児童相談所の期待するところであるのかもしれない。日常的に子どもの様子を把握し、保護者との連絡も比較的緊密に取れることが期待される現場だからこそ、再統合支援も可能であろうというのは、家族再統合を加速していきたい行政の希望的判断でもあろう。そこには当然施設の回転率を上げて新規のケースに対応したいという施設経営上の意図も透けて見える。

児童福祉施設の外部からばかりではなく、施設内部にも FSW への期待は表れていた。石田らの調査では、児童福祉施設の施設長が FSW の役割に高い期待を持っていることが示された（石田ほか 2007）。ここでは FSW が児童福祉施設の経営者からは子どもの日常的なインケアではなく、リービングケアの担い手として、また保護者や児童相談所をはじめとする関係機関との窓口として、専門的な役割を果たすことが期待されている。制度導入以前より、独自にファミリーソーシャルワーカーを配置していた児童養護施設三光塾の施設長側垣一也は、社会的養護の担い手としての覚悟と、FSW 配置の意義を次のように語っている。

家族が家族として機能せず、家族間の課題、トラブルを家族の力で解決できない場合、虐待となって弱い立場である子どもにあらゆる暴力が向かう。そして、暴力を受ける子どものみが被害者ではなく、暴力でしか自らを表現できない親も苦しんでいることは言うまでもない。そのような経験を通して、私たちには、「三光塾が子どもを受け入れるということは、その家族も受け入れるということであり、施設として『子どもと家族に寄り添う』存在でありたい」という目標が生まれた。

「子どもと家族に寄り添う」ためには、施設内で子どものケアのみでなく、家族への積極的なサポートが重要な課題となる。それは、家族の自立の支援であり、家族と

して機能できるためのサポートである。さまざまな課題を、自分たちの力で、もしくは他者や社会制度・施策（支援）を活用して自らの生活を築き上げられるようになることである。これらのサポートは児童指導員、保育士の時間外の業務であり、日常業務にプラスされるものであった。しかしながら「子どもと家族に寄り添う」ために、そのプラスアルファの業務の必要性、重要性を認識し、職員としてファミリーソーシャルワーカー（以下 FSW）を配置した。（側垣 2004：55）

これらの主張にみられるように、すでに社会的養護の現場が家族支援の必要性を強く認識し、制度化への働きかけを積極的に行ってきたという側面があり、それがようやく認知されたということでもあろう。

ところが一方で、石田らの調査は、FSW の実際の業務をみると、施設内での子どもへの直接処遇の頻度が高いことを明らかにした（石田ほか 2007）。中山らの調査からも、児童養護施設への FSW の配置自体は進んでいるものの、専業での配置となると限られることが示されていた（中山 2008）。これらの事実の背後には、子どもを理解するためには直接処遇に携わり子どもと日常的な接触を持つことが有用だとする積極的な理由から、職員配置の都合上という消極的な理由まで、多様な理由があろう。だが、専門的な役割を期待されながら、実際には直接処遇も担わざるを得ないという実態の中で、CW に比べて FSW の仕事の専門性は施設内部でも理解されにくく、FSW 自身が自らの役割や業務を周囲にアピールしながら確立していかなければならない段階にあることがうかがえる。児童養護施設の FSW が自らの役割理解を明確にしていく過程と、FSW の専門性を CW に認知させる過程を分析した加藤は次のように述べている。

児童養護施設に求められるようになった家庭支援の機能を専門に担う職種として家庭支援専門相談員が導入された。しかし、職種に就けば何をすれば良いか細かく定められている状況とは異なり、FSW という社会的地位 *social position* に就いただけでは、FSW として誰にどのように関わるかという役割 *role* は明確にならなかった。CW や保護者との相互作用の過程を通して、役割を形成していく必要があった。実際に家族と関わる中で、FSW の役割を CW も理解し、両者の役割分担が明確になってきた。

この過程で一つ重要なことは、従来 CW が担っていた家族支援の役割を FSW が奪って一手に家族支援を引き受けたのではなく、CW がこれまでしてきたことや現在していることを尊重していることである。CW が担う家族支援の難しさや不十分さを FSW がカバーする一方、FSW が全ての家族に関わりきれないところを CW がカバーするという両方向での協力がされている。CW の経験や知識、能力、努力などを尊重することと、FSW としての専門的な力を活用してもらうこととのバランスが、FSW の役割を施設内に位置づける過程で重要な鍵になると思われる。（加藤純 2009：144）

加藤はここで FSW と CW が相互にそれぞれの業務をカバーしあいながらバランスをとっ

ていく中で、FSWの役割が施設内に位置づくとしている。しかし、このようなCWとFSWの業務が分かち難く結びついていることが、FSWの独自の業務遂行を困難にさせることを、本研究では調査を通じて明らかにすることになる。

加えて、制度導入にあたってリービングケア、それも子どもが元の家庭に戻っていくための支援ばかりに期待が集まるようになった現状に対して、社会的養護の使命が決して家庭支援専門相談員制度に期待された早期家庭復帰だけに矮小化され得ないことも指摘されている。以下に乳児院のFSWである窪田と、児童養護施設の施設長である伊達の意見を示しておく。

さて、家庭引き取りが増えたかどうかですが、もちろん否です。親子関係に焦点を向けなければならないケースは増加の一途です。できれば乳児院の措置年齢のうちに家庭復帰させたいというのは目標ではありますが、傷ついた心の回復には「大人を信用して良い」という経験が必要ですし、親御さんの変化も欠かせないことです。その上で親と子の関係を再形成していくわけですから、多くのケースは、長い時間をかけて多くの支援の手を継続しながら調整していくしかありません。

私自身は、従来どおり親が子どもに対して十分な親機能が果たせるように、また子どもが親に安心して甘えられるように、健康な親子関係が培われるようにという視点を見失わず支援していけばよいのではないかと、乳児院での働きかけが次に児童養護施設に、あるいは里親に引き継がれ、何年かのちに結果が出ることになっても良いのだろうと考えています。また支援が引き継がれていくうちに、子ども自身が親を理解し、親との付き合いの距離を決めることができる場合もあると思います。実は、子ども自身が納得できること、それこそがいちばん大事なのではないかとも考えるのです。(窪田 2008 : 120)

さて、子どもの保護は家族分離でもある。そこでこの「負」の意味合いを打ち消すために、家族再統合ということが叫ばれるようになるが、私は、この状況を少しぶかしく思っている。家族再統合は、親の失調、親子関係の不全、子どものつまずきや外傷から、その回復や発達に向かっていく複雑な過程であって、そうしたことがよく見えてこないからである。

また、どれだけ家族再統合に努力しても、それが叶わないケースが存在するということである。親の死別や失踪といった極端な場合を除いても、こうした事例は必ず出てくることになるので、児童養護施設から、このための家庭代替という役割を外すことはできない。家族再統合を掲げるだけでは、こうしたケースに対応できないことになるだろう。(伊達 2004 : 26)

前掲の『当施設の退所ケース』の中で、T男のケースは「家庭代替ケース」<sup>※</sup>にカウントしている。ことさら家族再統合を叫ばなくても、このように「家庭代替ケース」

の取り組みは、家族の関係と分かち難くすすんでいく過程なのである。(伊達 2004 : 29)

FSW をめぐってはその役割に児童福祉施設内外から期待が寄せられる一方で、そのような役割はこれまでも一貫して社会的養護の現場が担い続けてきたという主張もある。また専門的な役割を期待されながら、その業務に専従することは適わず、他の職員、あるいは FSW 自身でさえも、なにをどのように行う職種なのか理解できていないという実情も報告されている(加藤純 2009)。

このような現状から、FSW が児童福祉施設で専門的な役割を果たすためには、その位置づけ、および業務の内容、専門性の確立が喫緊の課題であると指摘できる。芝野は FSW の役割と専門性を明確化するために、実践モデル開発の枠組みを提示している(芝野 2004)。また FSW の資格要件を確立しなければ、心理職配置の際に見られたように、期待される成果を上げられないとの懸念も示されている(虹釜 2006)。

## (2) 児童養護施設の専門性

児童養護施設の入所児童に被虐待児等の特別なケアを必要とする子どもの割合が増加するにつれ、児童養護施設は従来の家庭代替機能、教育的機能だけでなく、より専門的な治療機能を担うことが要求されるようになる。さらに、早期に家庭復帰を実現させるための諸機能を担うことが期待されている。このような機能の必要性を、遠藤ら(遠藤・芝野 1998)は早くから指摘していた。遠藤らは、児童虐待対策においてわが国より先行しているアメリカの制度変遷を例に、わが国でも虐待家庭への介入・分離保護だけでは社会的養護が機能不全に陥ることを予見し、養育者と養育環境の永続性を重視するパーマネンシープランニングを視野に入れた家庭復帰援助プログラムの開発の必要性を主張している。そのうえで、現場レベルでの養育プログラムのプランニングが困難な現状を分析し、以下のようなプログラム実施手続きの開発を試験的に行っている。

家庭復帰に向けて計画的・効率的に処遇することを可能とするプログラムの実施手続き(procedure)を開発することにした。それは大きく、以下、4 つから構成されている。

- ①施設入所前より終結までの全体プログラム
- ②早期家庭復帰のための帰省プログラム
- ③ペアレント・トレーニング・プログラム
- ④施設・学校・地域の連携プログラム

①の「施設入所前より終結までの全体プログラム」は、施設に入所する前から終結にいたるまでの処遇の全体的な流れを鳥瞰的に示している。ここでは特に、「子ども自身」に対する援助が中心となる。

②の「早期家庭復帰のための帰省プログラム」は、子どもを家庭に帰省させるにあ

たって、家族調整をいかにして行えばよいのかを示す処遇のプロセスである。ここでは特に、「子ども自身」と「家庭」との関係に対する援助が中心となる。

③の「ペアレント・トレーニング・プログラム」は保護者に対して、いかにペアレンティング（親すること）の能力を身につけさせるのかという処遇のプロセスを示している。ここでは、「家庭」、特に「保護者」に対する援助が中心となる。これは、子どもの家庭復帰実現の要となるプログラムである。アメリカでは、家庭復帰の可否を決めるものとして、裁判所が参加を義務づけ参加状況を評価することが常識となっている。しかし日本では、こうしたプログラムの活用はほとんどない。

④の「施設・学校・地域の連携プログラム」は、学校や地域に対して、いかにして子どもを受け入れる態勢づくりをしていけばよいのかを示す処遇プロセスである。ここでは特に、「学校・地域」に対する援助が中心となる。（遠藤・芝野 1998 : 297）

このような先験的な取組みを部分的に継承する優れたプログラムの開発も進んでいる。たとえば野口（野口 2008）は、上述の遠藤らの区分でいえば③にあたるペアレンティング・トレーニングのプログラム開発を行っている。野口は児童養護施設の基幹職員という立場から、現場レベルで必要性が認識されながら、エビデンスに基づくトレーニングプログラムが存在していない現状を次のように指摘する。

日本においても、欧米と同様に、親子分離の施策から家族再統合へと児童虐待の施策はシフトしてきている。しかしながら、親子再統合への支援は始まったばかりであり、そのサービス、またその研究も少ない状況である。研究に関して言えば、欧米では介入評価研究が多く、その効果が実証されているものが多い。また無作為割付による対象を採った研究も多くなされていることを考えると、日本の研究の現状は緒に就いたばかりであると言える。事例研究も、その方法はバラバラで、効果測定を行ったものは少ない。児童虐待のケースにおいては、よりプライバシーに関しての配慮が必要となり、発表が難しいということもあろう。しかし、一方では、児童虐待の援助では、援助者により高いアカウンタビリティが求められることになる。どのようにエビデンスを採取するのかという問題は大きい。

繰り返しになるが、日本ではニーズの高さに対し、それに応じるプログラムが少ない状況だと言える。これらのことを考えると、児童虐待の家族再統合を援助するプログラム開発は大きな課題であるのと同時に、研究を行う仕組みを整えることの重要性が指摘される。これらのことから、プログラムにエビデンスを収集する仕組みを整え、そこから得られたデータを使った研究の方法を示すことの必要性が示された。（野口 2008 : 67）

そのうえで、問題把握から実践まで段階的なフェーズを経てマニュアル開発を行う研究手法である M・D&D 研究を用いて、家族再統合を目的としたペアレント・トレーニングの

実践モデルと実践マニュアルの開発を行っている。野口の研究は、従来児童養護施設が意図せずに行っていた子どもの養育を理論化し、その保護者への伝達を教育プログラムとして開発したことに意義がある。これにより、現場レベルで個別に行われていた養育のアドバイスを超えて、CWの資質に左右されないペアレント・トレーニングの実施が可能になるであろう。

しかし、遠藤らが示したような、子どもと家族に対する入所前から退所後に至るまでの一貫した支援を目的とし、さらに子どもや家族への支援を超えて地域までを支援対象とするような総合的なプログラムは、わが国ではまだ実現していない。分離保護された子どもがただ家庭復帰することにとどまらず、虐待家庭をいかにして社会の中心へと位置づけなおしていくのかという鳥瞰的な視点に立ったプログラムは、特に社会的養護の現場においては必要性さえも十分に認識されていないのかもしれない。

ところで先行研究にみられたこれらの支援プログラムは、主として社会的養護に措置された子どもの家庭復帰を目的として開発されたものであった<sup>xii</sup>。だが児童養護施設を退所するすべての子どもが家庭復帰<sup>xiii</sup>できるわけではない。また第2章で詳しくみるように、FSWは必ずしも家庭復帰だけを「家族再統合」と捉えているわけでもない。他方で、児童相談所への虐待通告事例の約9割は社会的養護へ措置されず、そのうち一部は在宅での児童福祉司指導となる。したがって、実際には子どもが社会的な自立を迫られながら、個々の親子にとって最適な距離を模索し、親子関係の修復を図ることもあれば、一度も親子分離を経験せず、親子関係の修復を図ることもある。今後はこのような幅広い「家族再統合」を達成するための支援プログラムも要請されるであろう。

### （3）ソーシャルワークの担い手としての FSW

上述の具体的な支援プログラムの研究がある一方で、児童虐待によって親子分離を経験した親子に対するより大きな支援枠組みに関わる研究もある。たとえば北川（北川 2010）は、施設養護が個別的な治療に特化したケアのみを専門性とすることを厳しく批判し、児童養護施設がソーシャルワーク組織として機能する必要があるとの認識に立って、児童養護施設のソーシャルワーカーに求められる資質について言及している。そのなかで、北川はソーシャルワークの視点から施設養護を次のように定義する。

子ども家庭福祉に連なる法制度が共通して掲げる理念や目標を達成するために、あるいは各人が保持する困難を跳ね返す〈力（resiliency）〉に着目しながら、環境との相互接触面に生じた施設を利用する子どもとその家族が抱える生活課題（life task）への処理能力（coping ability）を高め、応答性（responsiveness）の増進を図るために、人としての尊厳に充ちた生活の基盤となる衣食住並びに健康管理に関する知識と技術を駆使しながら、実際の業務は日常生活上の〈世話（care）〉を媒体（support media）に、子どもと家族の生活を支援し、権利を擁護する取り組み（practice of social work with care for living）、あるいは目的意識的ななかかわりの過程（purposeful supporting

process) と、それを計画し評価するまでの取組全体によって構成される（北川 2010 : 49)

すなわち、児童養護施設が入所児童に提供する充足した生活や日常のケアは、それ自体が目的であるのではなく、それらを媒体にして、子どものレジリエンシーの涵養を行い、且つ子どもと家族の生活を支援することが施設養護の目的であると見なされている。そのため、児童養護施設職員、とりわけ FSW には、以下に示す「クリティカルな眼差し」を持ったソーシャルワーカーとしてのアイデンティティの自覚を促している。

まず、「クリティカルな眼差し (critical perspective)」とは何かの説明をしてみたい。それは、事象や物事を単に「批判する」だけでとどまらない「内省」を促し、一見ゆるぎない、あるいは疑う余地もない科学的な証拠や現実を「脱構築 (deconstruction=一度、冷静になって自分自身について振り返ってみることの意)」しながら、利用者の「語り」を手掛かりに支援過程を利用者と共に「再構築」することを構想する「思考方法」をいう。言い換えれば、自分の意見（信念・信条）や所感を絶対化することなく、他の捉え方と相対化するなかで内省的に自己の知見を点検する意識的な作業（＝自己認識）と併せて、利用者が直面している「現実」への分析・理解を欠落させない視点に立って介入方法を共有できるように努めることを意味する。（北川 2010 : 67)

北川はこのように児童養護施設職員が持つべきソーシャルワーカーとしての視点および児童養護施設が担うソーシャルワークについて言及したが、これとは異なる視点から虐待ソーシャルワークについて言及したのが才村（才村 2005）である。才村は、施設養護よりさらに大きな児童福祉の枠組みで、ソーシャルワークの視点から児童虐待問題を捉えている。そのなかで、バイスティックのケースワーク原則と比較しながら、虐待ソーシャルワークの 7 原則として、①介入性、②迅速性、③権利性、④客観性、⑤主導性、⑥専門性、⑦開放性の 7 原則を定義している。さらに、特に家族再統合におけるソーシャルワークの役割として次の 6 点を挙げている。すなわち、①虐待の告知、ケア受講の勧奨と調整、②保護者への心理的援助、治療的教育と並行して行われるソーシャルワーク、③親子再接触に向けたソーシャルワーク（親子再接触プログラム）、④家庭復帰に向けたソーシャルワーク、⑤家庭復帰後のアフターケア、⑥家族再統合が不可能なケースに対する別のパーマネンシー・ケアの保障の 6 点である。ここで才村は、ソーシャルワーカーは、援助に非協力的な保護者に対し、支援のプロセスとゴールを明確に示す責任を負っていると述べている。また、保護者の社会経済的援助や養育環境の調整、家庭復帰後の家族を見守るセーフティ・ネットワークの構築までソーシャルワーカーの行う支援とみなしている。注意すべきは、才村の想定するソーシャルワーカーが FSW とは限らないということである。北川が児童養護施設におけるソーシャルワークに限定して言及したのに対し、才村は児童福祉というより広い枠組みでソーシャルワークに言及している。ソーシャルワーカーの所属につい



て明言はされていないが、当然想定されているのは児童福祉司であろう。しかし、現状ではここに挙げられたいくつかの役割は、児童養護施設の FSW が担っている。そのため、これらすべてを一人のソーシャルワーカーが担うのか、あるいは複数のソーシャルワーカーが分担し協働するのかという担い手問題は別途検討される必要があるだろう。

いずれにしても両氏の提言は児童虐待と家族再統合について広い視点に立ち、高い理想を示したものである。日々の業務に忙殺され、実践の理論化に失敗している現場に対し、理想論を示すことの重要性は否定できない。しかし、児童福祉行政や社会的養護の実践現場のなかから、実際に行われている支援の理論化の試みも忘れられてはならないだろう。

#### （４）本研究の位置

第 2 節でレビューしたように、これまでの研究において社会的養護への措置という深刻な養護問題は、一般子育て家庭に等しく起こり得ることではなく、労働市場と地域への不確かな参入に留まる不安定層に集中的に生じていることが確認されている。これに対し、家庭復帰という明確なゴールに向けては有効な支援プログラムの開発が開始されている一方で、家庭復帰しないケースや、親子分離以前のケースに対する家族再統合支援の理論化はまだ検討されていない。また、児童虐待問題を鳥瞰的な視点でとらえた、ソーシャルワークの理想的なあり方は示されているが、社会的養護の日々の実践をふまえた支援の理論化は充分とは言えないことを第 4 節（2）（3）であとづけた。

そこで本研究では、児童養護施設に勤務する FSW への質問紙およびインタビューの 2 つの調査を通じて、「家族再統合」支援を担う FSW が、日々の業務を通じて、入所児童の退所に際してどのような「家族再統合」を達成しようとしているのかを明らかにし、その意味を考察する。先行研究の中で、例えば谷口は社会的養護に措置された子どもの視点から、児童養護施設への入退所の経験をパターン化していたが（谷口 2011）、本研究では FSW の行っている業務および入所児童の退所パターンから、FSW が想定する「家族再統合」を検討することにしたい。検討の過程で、FSW が家庭復帰を妨げる要因をどのように認識し、それにどのように対応しているのか調査結果から分析を行う。その結果は第 4 章で詳述するが、FSW が保護者の子育てスキルのなさや保護者自身の自己認識の低さだけでなく、虐待家庭の生活基盤の脆弱性を認識していることがうかがえた。しかし、それにもかかわらず、児童養護施設や FSW の専門性を FSW 自身が限定的に認識しているために、自らの支援の範囲を限定していることが推測された。

今日の社会的養護においては、早期家庭復帰の促進が要請されており、家庭復帰を目的とした総合的な支援プログラムの開発が引き続き急務であることは否定しない。しかしすでに述べたように、社会的養護に措置されたすべての子どもが家庭復帰するわけではない。本研究では調査で得られたデータに密着しながら、「家族再統合」の重要な半分を占める、家庭復帰しない子どもと家族の関係修復に向けた支援を FSW がどのように行っているかにも着目し、FSW の考える「家族再統合」の理論化を試みるものである。

【文献】

- 安部計彦編著(2009)『一時保護所の子どもと支援』明石書店
- 相澤仁(2004)「家族再統合や家族の養育機能の再生・強化に向けて—児童虐待防止対策から」『世界の児童と母性』57,10-13
- 秋山智久(1975)「養護施設におけるファミリー・ケースワーク」『季刊児童養護』6(2),8-13
- 伊達直利(2004)「児童養護施設における家庭復帰の現状と家族再統合の取り組み」『世界の児童と母性』57,26-29
- 遠藤和佳子・芝野松次郎(1998)「養護施設における早期家庭復帰援助プログラムの研究開発(R&D)—パーマネンシーの保障に向けて—」『ソーシャルワーク研究』23(4),291-300
- 藤田恭介(2004)「児童相談所との関係性・施設ファミリーソーシャルワーカーへの期待」『季刊児童養護』35(2),10-13
- Goodman,R(2000)Children of the Japanese State ;The Changing Role of Child Protection Institutions in Contemporary Japan ,Oxford University Press(=2006,津崎哲雄訳『日本の児童養護—児童養護学への招待—』明石書店)
- ヘネシー澄子(2004)「アメリカにおける家族再統合の現状」『世界の児童と母性』57,62-64
- 保延成子・堀尾恵太郎(2009)「社会的養護の展開と課題(2)」『東京家政大学研究紀要』49(1),51-57
- 堀場純矢(2013)『階層性からみた現代日本の児童養護問題』明石書店
- 池谷和子(2009)『アメリカ児童虐待防止法制度の研究』樹芸書房
- 石田賀奈子・芝野松次郎・原佳央理(2007)「児童養護施設におけるファミリーソーシャルワーク実践に関する研究—乳児院への実態調査の結果から」『子どもの虐待とネグレクト』9(1),25-36
- 伊藤嘉余子(2007)『児童養護施設におけるレジデンシャルワーク—施設職員の職場環境とストレス』明石書店
- 亀井聡(2011)「社会的養護体系と子ども家庭福祉の課題」浅井春夫編『子ども家庭福祉』建帛社, 66-79
- 加藤純(2005)「社会的養護ニーズの基礎理解」北川清一編著『児童福祉施設と実践方法—養護原理とソーシャルワーク』中央法規,56-70
- 加藤純(2009)「ポスター・ビデオセッション 児童養護施設における家庭支援専門相談委員の役割確立と専門性形成の過程」『社会事業研究』8,142-145
- 加藤純(2010)「オーストラリアの児童虐待対策と社会的養護の動向」『世界の児童と母性』49,31-33
- 川松亮(2008)「児童相談所から見る子どもの虐待と貧困 虐待のハイリスク要因としての貧困」浅井春夫・松本伊智朗・湯澤直美編『子どもの貧困 子ども時代のしあわせ平等のために』明石書店, 84-111
- 北川清一(2010)『児童養護施設のソーシャルワークと家族支援—ケース管理のシステム化とアセスメントの方法』明石書店

- Kitsuse, John I and Spector, Malcolm B (1978) Constructing Social Problems, Menlo Parc, CA: Cummings Publishing Company (=1990, 村上直之・中河伸俊・鮎川潤ほか訳『社会問題の構築—ラベリング理論を超えて』マルジュ社)
- 小林美智子(2007)「子どもをケアし支援する社会の構築にむけて」小林美智子・松本伊智朗編『子ども虐待 介入と支援のはざま—「ケアする社会」の構築に向けて』明石書店, 25-63
- 窪田道子(2008)「現場実践レポート 乳児院の家庭支援専門相談員の役割」『子どもと福祉』(1), 117-120
- 増淵千保美(2008)『児童養護問題の構造とその対策体系—児童福祉の位置と役割』高菅出版
- 松本伊智朗(2007)「イギリスにおける政策方向と「ゆれ」」小林美智子・松本伊智朗編『子ども虐待 介入と支援のはざま—「ケアする社会」の構築に向けて』明石書店, 87-100
- 松本伊智朗(2010)「いま、なぜ「子ども虐待と貧困」か」松本伊智朗編『子ども虐待と貧困 「忘れられた子ども」のいない社会を目指して』明石書店, 9-44
- 松本伊智朗(2013)「子ども・家族が直面する複合的困難—調査対象事例の概況」松本伊智朗編『子ども虐待と家族—「重なり合う不利」と社会的支援』明石書店, 20-36
- 中山正雄編(2008)『ファミリーソーシャルワークと児童福祉の未来—子ども家庭援助と児童福祉の展望』中央法規
- 虹釜和昭(2006)「児童養護の今日的課題：児童養護実践の方向性」『北陸学院短期大学紀要』(北陸学院短期大学) 38, 31-41
- 西田芳正・妻木進吾・長瀬正子ほか(2011)『児童養護施設と社会的排除—家族依存社会の臨界』解放出版社
- 西田芳正(2012)『排除する社会・排除に抗する学校』大阪大学出版会
- 野口啓示(2008)『被虐待児の家族支援—家族再統合実践モデルと実践マニュアルの開発』福村出版
- 大原美知子(2001)「虐待不安を抱える母親たち—「首都圏一般人口における児童虐待の疫学調査から—」『心と社会』32(3), 66-72
- 大日向雅美(1999)「なぜ迷う、親たち—子育ての難しい時代」『児童心理』53(11), 1009-1017
- 大嶋恭二(1989)「児童福祉施設の運営」飯田進・大嶋恭二他『養護内容総覧』ミネルヴァ書房, 90-129
- 大谷嘉朗(1974)『施設養護の理論と実際』ミネルヴァ書房
- 大谷嘉朗・吉沢英子(1975)『養護原理』誠信書房
- Pelton, Leroy H(1994) The Role of Material Factors in Child Abuse and Neglect in Melton, Gary B. Barry(eds.)Protecting Children from Abuse and Neglect, The Guilford Press, 131-181 (=2006, 山野良一訳「児童虐待やネグレクトにおける社会環境的要因の役割」上野加代子編『児童虐待のポリティクス 「こころ」の問題から「社会」の問題へ』明石書店, 101 - 156)
- 才村純 (2005)『子ども虐待ソーシャルワーク論』有斐閣

- 才村純・山本恒雄・庄司順一ほか(2008)「児童相談所等における保護者支援のあり方に関する研究(1)保護者援助ガイドラインおよび家庭復帰適否判断のためのチェックリストの有用性に関する実証的研究」『子ども家庭総合研究所紀要』 45,195-234
- 芝野松次郎(2004)「今日的課題 施設ケアとファミリーソーシャルワーク」『社会福祉研究』 90,77-78
- 清水克之 (2010)「児童相談所から見る子ども虐待と貧困」松本伊智朗編『子ども虐待と貧困「忘れられた子ども」のいない社会を目指して』明石書店,45-70
- 汐見和恵(2010)「乳幼児の子育てと親の悩み・不安—子育てへの社会的支援の質と量への期待」松田茂樹・汐見和恵他『揺らぐ子育て基盤—少子化社会の現状と困難』勁草書房,39-60
- 側垣一也(2004)「再統合後の家族への支援」『世界の児童と母性』 57,54-57
- 杉山登志郎(2007)『子ども虐待という第四の発達障害』学習研究社
- 田中千穂子(2010)「「虐待不安」から見えるもの」『都市問題』 101(2),84-91
- 谷口由希子(2011)『児童養護施設の子どもの生活過程—子どもたちはなぜ排除状態から抜け出せないのか』明石書店
- 徳永幸子(2007)「家族福祉におけるファミリー・ソーシャルワークの視座」『活水論文集 人間関係学科編』(活水女子大学) 50,33-49
- 上野加代子 (1996)『児童虐待の社会学』世界思想社
- 上野加代子・野村知二 (2003)『〈児童虐待〉の構築—捕獲される家族』世界思想社
- 上野加代子 (2006)「児童虐待の発見方法の変化—日本のケース」上野加代子編著『児童虐待のポリティクス』明石書店,245-273
- 山縣文治(2008)「自立支援とリービングケア」東京都社会福祉協議会児童部会リービングケア委員会編『Leaving Care:児童養護施設職員のための自立支援ハンドブック』,1-2
- 山口春子(1985)「戦後社会福祉施設の研究 5 : 戦後混乱期の養護施設」『社会福祉学』(首都大学東京機関リポジトリ)1,231-250
- 山野良一(2006)「児童虐待は「こころ」の問題か」上野加代子編『児童虐待のポリティクス「こころ」の問題から「社会」の問題へ』明石書店,53-100
- 横堀昌子(2002)「ファミリー・ソーシャルワークの理論的枠組みと実践に関する一考察」『青山学院女子短期大学紀要』(青山学院女子短期大学) 56,56-107
- 全国社会福祉協議会(2009)『子どもの育みの本質と実践—社会的養護を必要とする児童の発達・養育過程におけるケアと自立支援の拡充のための調査研究事業報告書』

#### 【資料】

- 厚生労働省社会保障審議会児童部会(2003a)「社会的養護のあり方に関する検討委員会議事録」(第3回 2003年8月1日)
- 厚生労働省社会保障審議会児童部会(2003b)「社会的養護のあり方に関する検討委員会」報告書
- 厚生労働省(2004)「乳児院等における早期家庭復帰等の支援体制の強化について」(雇児発

第 0428005 号)

厚生労働省社会保障審議会児童部会(2005)「児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会」第 1 次報告

厚生労働省(2007a)「子ども虐待対応の手引き(2007 年改定版)」

厚生労働省(2007b)「平成 19 年度社会的養護施設に関する実態調査中間報告書」

厚生労働省(2008a)「児童養護施設入所児童等調査結果(平成 20 年 2 月 1 日現在)」

厚生労働省(2008b)「虐待を行った保護者に対する援助ガイドライン」

厚生労働省(2012a)「家庭支援専門相談員、里親支援専門相談員、心理療法担当職員、個別対応職員、職業指導員及び医療的ケアを担当する職員の配置について」(雇児発 0405 第 11 号)

厚生労働省(2012c)「措置解除等に伴い家庭復帰した児童の安全確保の徹底について」(雇児総発 1101 第 3 号)

厚生労働省(2013a)「社会的養護の現状について(平成 25 年 3 月版)」

厚生労働省社会保障審議会児童部会(2013b)「児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会」第 9 次報告

認定 NPO 法人ブリッジフォースマイル(2013)『全国児童養護施設調査 2012—施設運営に関する調査』

東京都福祉保健局(2005)「児童虐待の実態Ⅱ—輝かせよう子どもの未来、育てよう地域のネットワーク」

全国児童相談所長会事務局(1997)『『全国児童相談所における家庭内虐待調査』最終報告書』

- 
- i 1989 年度の児童虐待相談対応件数は 1,101 件であったが、2012 年度には 66,807 件になり、約 60 倍の増加である。児童虐待防止法制定の 2000 年、および同法・児童福祉法改正の 2004 年の直後にはそれぞれ急増が見られたが、近年もまた急激な伸び率を見せている。
- ii 米国で虐待通告件数が行政の対応能力を上回り、また子どもの分離保護件数の多さに対して批判が集まるバックラッシュ現象については、上野(上野加代子 1996)に詳しい。一方で、松本は虐待死亡事件を契機に対策強化に舵を切ったイギリスの児童虐待政策の変遷を例に挙げながら、いずれの国でも児童虐待対策は行き過ぎと不足の批判の間で「ゆれ」を経験するようであり、わが国も例外ではないと述べている(松本 2007)。
- iii ただし、池谷(池谷 2009)によれば、米国では安易に子どもを実の家庭から引き離して里子を激増させてしまったという反省から、里子に出す前の「家庭維持」の「適切な努力」と、再び子どもを実の家庭に戻すことを目標として「適切な努力」を行うことが義務づけられていると指摘する。
- iv ただし、ガイドラインにおいては「深刻な虐待事例の中には、保護者に対する指導・支援の効果がなく子どもが再び保護者と生活をともにすることが、子どもの福祉にとって必ずしも望ましいとは考えられない事例もある。このような場合についてまで家庭復帰を促進することが望ましいものとは考えられず、むしろ保護者と一定の距離を置いて生活することが子どもの福祉に資するものである」と家庭復帰について留保されており、措置解除にあたっては慎重なアセスメントと、家庭復帰後の状況把握を求めている(厚生労働省 2012c)。
- v 乳幼児期の母子関係の欠損が子どもの発達・人格形成に深刻な影響を与えるとの米英の研

---

究の輸入に基づいて、1950年代にわが国でも堀文次、瓜巢憲三らによって施設で育つ子どもたちの望ましくない特徴が集団養護によるものと指摘され、それらの特徴を「ホスピタリズム」と呼んだ。

vi ホスピタリズム論への反証として石井哲夫によって提唱された。家庭と施設の差異を前提に、集団生活の利点を生かした理論。

vii ホスピタリズム論への反論として、集団のなかにこそある人格形成の可能性を評価する養護理論として、積惟勝によって提唱された。

viii 保育士養成課程については、保育士のソーシャルワーク機能強化等を目的として、2010年にカリキュラム改正が行われている。

ix しかし才村らの調査（才村ほか 2008）によれば、このチェックリストを用いていない児童相談所が約6割に上り、明確な基準や指針に基づいた判断の重要性が社会的養護に携わる者の間に十分認識していないことが予想される。

x ここでいう「ファミリーソーシャルワーカー」とは家庭支援専門員制度の通称ではなく、家族を支援対象としたソーシャルワーカーの意で使われている。

xi 「家庭代替ケース」とは、伊達が施設長を務める旭児童ホームにおいて、長期の養護の後に社会的自立をさせるケースを指している。伊達は高年齢になってから入所し短期で自立するケースを「自立支援ケース」と呼んで区別している。

xii ただし、野口は「家族については、必ずしも血縁関係のある親子のみを対象とはしていないことを明確にするために、親を「親（保護者）」と表示」（野口 2008;20）している。ここでは親族や里親も保護者として想定されている。

xiii ここでは子どもが生家に帰っていくことだけではなく、親族や里親等とのパーマネントな養育関係に入っていくことも家庭復帰と見なすことにする。

## 第2章 家族再統合とは何か

### 1. 家族再統合概念の整理

前章では児童虐待問題および養護問題等に関連する領域の先行研究のレビューを通じて、本研究の位置を示した。本章では、さらに本研究のキー概念となる「家族再統合」についての議論を整理したうえで、あらかじめ本研究で用いる「家族再統合」の暫定的定義を試みる。

#### (1) 「家族再統合」とは何か

近年わが国の社会的養護分野で言及されるようになった「家族再統合」だが、この語の元になっている英語の「family reunification」あるいは「family reintegration」という用語は、諸外国において必ずしも社会的養護分野でのみ用いられてきたわけではなかった。たとえば「family reunification」は1950年代から1960年代にかけては、戦争被害による離散家族の再統合という文脈で言及されることが多かったし、1970年代に入ると、移民による離散家族の再統合という文脈で研究論文に登場する。家庭外でケアされている子どもの出生家庭への再統合という文脈で盛んに用いられるようになるのは、概ね1980年代以降のことである。また、「family reintegration」は高齢および障害のある入所施設利用者が地域生活、特に家族の元へ戻るといった文脈でも用いられてきた。ただし、わが国において「家族再統合」という場合には、ほぼ社会的養護の文脈で用いられている。

しかし社会的養護の文脈においても、家族を維持できる軽微な困難事例から、親子分離を伴う深刻な事例まで、実際には目指されているゴールに差があるにもかかわらず、同じ「家族再統合」という用語が使われている。そのため、「家族再統合」は論者と使用する文脈によって異なった意味を持ち、必ずしも明確な定義があるとは言えない。そもそも親子が具体的にどのような状態になれば「家族再統合」されたと見なされるのか、またそれをどのように測定するのかということは、まだ研究が始まったばかりなのである。そのため、「家族再統合」とは何かということが実は曖昧なままである（菅野ほか2008）との指摘もある。とはいえ、そこには論者の数だけ多様な定義が存在するというほどの混乱は見られない。むしろ「家族再統合」を広義に捉える立場と、狭義に捉える立場とに大別できる。本節では、両者の「家族再統合」概念について言及された先行研究を概観した上で、本論文中で用いる「家族再統合」概念の定義を暫定的に行う。なぜ暫定的になのかといえば、本研究の目的が児童養護施設のFSWが入所児童の退所に際してどのような「家族再統合」を達成しようとしているのかを実態調査から明らかにし、その意味を考察することであって、論述の過程でFSWの考える「家族再統合」の再定義を行うことになるからである。

#### (2) 広義の「家族再統合」概念

現在、「家族再統合」をもっとも広義に定義したものは、Maluccioらの以下の定義である

う。

家族再統合は、自宅外措置を受けた子どもを、実の家族と再び関係づける、計画に基づいた援助過程であり、子供たち、彼等の家族、里親、またはその他のサービス提供者への様々なサービスと支援を用いて行われるものである。その目標は、それぞれの子どもとその家族が、その時点でもっとも適切なレベルを回復し、維持することである。それは完全に家庭復帰をすることから家族の絆を確認するための面会を続ける等、様々な形がある。(Maluccio et al 1993) <sup>i</sup>

トムソンは論文のなかで、この定義を現在アメリカでもっとも広く取り入れられている定義であるとして採用している(トムソン 2005 ; 2006)。この定義に従えば、「家族再統合」とは親子のある特定の状態を評価する概念ではなく、あるゴールを目指して行われる支援の過程を指す概念である。またそこで設定されるゴールも、決して親子の同居に限定されるものではなく、幅広いレベルで考えられている。「その時点でもっとも適切なレベルを回復し、維持すること」という表現からは、親子の最適な関係は時とともに変化するものであり、ある局面で判断された最適なレベルが、常にその親子にとって最適なレベルであるとは限らないと解釈できる。したがって、当該親子の最適なレベルがどのようなものであるかは、社会的養護に措置されている間も、措置解除された後も常に問われ続けなければならない、そこで設定されたゴールにむけた不断的な努力が求められることになる。

わが国でも「親子が親子であり続けられる関係・形態の再構築・親子が安全かつ安心できる状態で互いを受け容れられるようになること・種々の援助を提供して、分離している子どもと家族との関係を再構築していく過程で、最適とされた統合形態(井戸 2004 ; 犬塚 2004)」と広義にとらえる視点が示されているが、このような捉え方は、子どもの入所期間中のケアに関わる人たちからの実践報告に多く見られた。

たとえば、乳児院で FSW を務める窪田は、子どもが親を受け入れ乗り越えていくまでのプロセスを重視して次のように述べている。

冒頭に「家族再統合」という言葉に戸惑いを抱いたと書いた。しかし、人にとって家族は自身のアイデンティティーであり、失ってはいけないものあるとも認識している。自己の親についてイメージを持てないでいる子どもたちが、将来に「自己」をも見失ってしまうケースも見ている。虐待を受けた子どもであれ、子ども自身が長い時間をかけて親を理解し踏み越えていくしかない。現実を現実として受け入れる作業をしてこそ生きていく力が生み出せるのだと思う。「家族再統合」という言葉は「一つ屋根に住む」ということだけをゴールとしているのではなく、子どもが親を認識するためお互いがよい関係でいられる距離を見つけることだと考えている。(窪田 2004 : 37)



児童養護施設長を務める菅原は、従来の養護事由とは異なる目的をもって施設に入所してくる高齢児の存在を挙げて、家族再統合が単純に家庭復帰だけを指していた時代とは異なる現状を次のように指摘する。

一般に、家族の再統合とは、家族が住む「家」に児童養護施設などの社会的養護施設から子どもが引き取られて家族と共に暮らすことと考えられる。

しかし、このところ小学高学年から中学生に、自分の生活を立て直したいと訴えて児童養護施設にやってくる子どもが増え始めている。光の子どもの家に 2000 年度から 2003 年度までの入所者 26 名中、小学 4 年以上が 11 名いるが、そのすべてがそうなのである。年齢が二桁になると自らの生き方を考えることが可能になり、自立に向かい自我を表現し始めると考えられる。したがって、家庭引き取りによる家族再統合の可能性は、経験的に入所後 2 年以内、子どもの年齢一桁が区切りであるといえる。

年齢が二桁になると、子どもが自立を果たした後、親たち家族と通常のかかわりを可能にすることも再統合の一つの形と考えなければならない。（菅原 2004 : 50）

同じく児童養護施設長を務める平田は、我々が素朴に過信しがちな家族イメージについて警鐘を鳴らし、その上で家族再統合は広義にとらえられるべきと指摘する。

再統合と一緒に暮らすことを意味するのであれば、家族の再統合はすべての虐待事例で最終目標にできるわけではない。いったんは家族の下に戻ったが、改めて施設を選んだ子どももいる。一緒に暮らすことは選ばなかったけれども親子の情愛を取り戻した父子もある。その家族ができることの中でその子どもが自分の存在を肯定して生きていくのに何が一番良いことなのかを子どもと一緒に考え、子どもが選ぶ手助けをしていくことが私たちの施設の役割だと考えている（平田 2004 : 38）

このような捉え方は、保護者の様子や子どもの成長をよく知る立場にあるからこそその現実的な決着点であるのかもしれない。上述の実践レベルでの感覚的な「家族再統合」理解を、研究者の立場から定義を試みたものに、才村の下記の指摘がある。

いずれにしろ、援助が必要なのは、同居の有無を問わず、家族機能が不全状態にあるすべてのケースであることを強調しておきたい。

したがって、家族再統合に向けた援助の目標も、別居していた家族が再び同居を始めことにのみあるのではなく、同居している家族にあっても、家族としての機能不全に陥っている場合には、家族機能が再生され、家族成員間の緊密で安定した情緒的關係が構築または再構築されることにあるといえよう。

さらに、別居している家族にとって、最も望ましい家族再統合は、家族機能が再生され、家族がともに暮らしながら豊かで安定した家族生活を享受できることであることは言うまでもないが、たとえ家族が離れて生活していても、その構成員が互いに家族の一員としてのアイデンティティを持ち、互いにその存在を受容することにより、情緒的なつながりが再形成されるようになるならば、これも家族が再統合されたと考えることができるわけであり、このような状況を実現することも家族再統合の 1 つの目標といえるであろう。

しがたって、分離ケースにおける家族再統合には、完全な家庭復帰、週末や長期の休みに定期的に外泊するなどの部分的復帰、面会、外出、外泊、電話、手紙などを通じて、家族の一員としてのアイデンティティを確認・維持できる機会を保障するなど、さまざまな形態が考えられる。(才村 2005 : 273)

一方でアメリカではそれと同時に、「計画に基づいた援助過程」ということが強く意識される。施設養護に措置できる期間の制限がわが国以上に厳密であることもあり、親子分離直後から「家族再統合」に向けた計画的な親子の面会が開始される(棚瀬 2005 ; 原田 2006 ; 2008 ; 池谷 2009)。子どもの安全が確保されるよう最善の注意を払いながらではあるが、面会の計画と短期間ごとの達成目標は明確にされ、理由なく親子再統合へのステップが延期されることはない。この点は、施設入所後しばらくは親子の面会を制限し、子どもが施設生活に順応することを優先するわが国とは大きな違いである。家庭復帰までのプロセスを明確にし、時をおかずにステップを進行させていくというアメリカの施策は、わが国の今後の「家族再統合」政策にとって示唆に富んでいる。もちろんこれは、効果の確認されている豊富なプログラムが前提である。一方で、短い期限を設けているために、もう少し時間をかければ「家庭復帰」できる可能性があるにも関わらず、里親委託の措置を取らざるを得ないなどの弊害も指摘されている(原田 2006)。

以上、わが国でも Maluccio らの家族再統合定義のなかで親子の「最適なレベル」に着目し、最終的に目指されるゴールの多様性が意識されているものの、プロセスの側面についてはあいまいなままにされている点をまず指摘しておきたい。第 4 章のインタビュー調査分析で、この点が実証される。

### (3) 狭義の「家族再統合」概念

上述のように、わが国では、「家族再統合」の定義は何かと問えば、比較的広義にとらえる傾向にはある。ところが、実際に「家族再統合」を目的として行われる支援プログラムが具体的に掲げるゴールは、明確に「家庭復帰」である傾向も同時に生じている。

たとえば児童相談所では、保護者指導を行う立場から、「家族再統合」をあえて狭義にとらえる傾向がある。児童福祉施設の中に FSW が配置されたが、そのことによって児童相談所が家庭支援から退いたわけではない。むしろ児童相談所もまた、2004 年の児童福祉法改

正によってますます明確にその責務を負ったとも言えよう。

鈴木は「家庭復帰」に至るまでの事例を取り上げながら、親子分離を行う介入と、家族再統合支援というベクトルの異なる業務を担っている児童相談所ならではの支援の困難を次のように述べる。

児相は強制介入とその後の家族再統合に向けた支援の異なる 2 つの役割を求められるが、この 2 つが矛盾し、連続したものとしてつながっていない現実直面している。つまり、強制介入はときに保護者と児相の関係を対立的なものとしてしまう。対立しないまでも、保護者は児相の指導に受動的に従うだけで主体性をもって虐待を解決しようとする動機は乏しい。そして、児相職員は強制介入と家族再統合という矛盾する 2 つの役割、機能をこなうなかでジレンマを覚える。(鈴木 2007 : 79)

犬塚は、そのような児童相談所と保護者の対立関係があるからこそ、児童相談所は保護者に対して次のような提示をしなければならないと述べる。

虐待を認めることが困難な場合でも「何をしたら返してくれるのかを言ってほしい。子どもを取りあげただけで放置しているのはあまりにもひどい」と訴える親は多く、子どもを取り戻す手段としてならば、児童相談所の指導を受ける姿勢を示すことは多いという印象です。この時に、再統合に向けた治療プログラムを提供できないと、親の怒りは児童相談所に向かい続け、虐待への気づきを促すことは困難となります。児童相談所は親の怒りを受け止めるとともに、引き取りに向けての道筋を示し、親自身の課題や努力目標を明らかにし、必要な援助メニューを提示することが必要です。(犬塚 2004 : 25)

全国の児童相談所が行っている家族再統合のためのプログラムを調査した才村らは、「家族再統合」を本来は幅広い意味があるとしながら、「本調査では『分離した家族が再び一緒に生活すること』と操作的に定義」(才村ほか 2005) している。また犬塚も東京都の児童相談所が行っている実際の家族再統合支援を「虐待を受けて家族と別々に暮らしている子どもとその親、および分離後家庭に戻った子どもと一緒に暮らしている家族を対象として、家族関係の(再)構築を目的に、親への治療的・教育的支援と親子関係修復のための治療・支援」(犬塚 2007 : 120) と紹介している。

他方、実証研究の立場からは、「家族再統合」を狭義にとらえたうえで、家庭復帰に向けた支援プログラムの開発がなされ、かつ問題点が指摘されている。たとえば大島らは、これまでの再統合支援が保護者側の準備だけを問題にしており、子どもにはケアプログラムしかなかったことを問題視している(大島ほか 2006)。岩田は、児童相談所で家庭復帰を判断するアセスメント尺度が使われ始めていることに対し、その妥当性が検討されていない

と批判する。また家庭復帰させることばかりが注目され、その後の「家庭復帰の維持」の重要性が認識されていないと主張している(岩田 2007)。加藤は分離から再統合までの一連の計画を立てるためのアセスメント指標が確立していないこと、また親支援のためのプログラム開発が急務であると指摘している(加藤曜子 2004a ; 2004b)。河合らは、家族再統合支援の重要課題であるペアレント・トレーニングの導入が始まったばかりでまだ効果測定がなされていないことを指摘し、その測定試行を行っている(河合ほか 2007)。

また、海外の研究を紹介しながら、わが国の「家族再統合」の実践について論じる論者も存在している。たとえば桐野は、アメリカ連邦法である「養子縁組と児童福祉に関する法律」(the Adoption Assistance and Child Welfare Act)における「family reunification」や、国連「the Guidelines for the Alternative Care of Children」に明記された「family reintegration」が家庭復帰の意味に用いられていることを指摘している(桐野 2013)。イギリスでは、子どもと養育者の関係、および養育環境の永続性を重視し、長期に家庭外措置されることのないように、早期の家庭復帰か代替家庭への委託措置が決定される(Thoburn=1998)が、桐野はわが国でも「家族再統合」をパーマネンシー・プランニングの中に位置づけるべきだと主張し、「家族再統合」の定義は広義には物理的に元の家庭に戻らない場合も含まれるが、「実践における用語としての定義は常に狭義の「子どもの家庭復帰」」(桐野 2006)だとしている。本村と若井も、海外の実践を紹介しながら、わが国では支援プログラムや実践する人材にまだ課題があることを示している(本村 2001; 若井 2005)。

先述の広義の「家族再統合」概念が、もっぱら社会的養護の実践現場から言及されたのに対し、狭義の「家族再統合」が児童相談所や研究者の実証研究において言及されていたことは興味深い。このような差が生じた仮説として、次の2点が考えられる。1点目として、社会的養護の現場と、保護者支援プログラム開発を行う研究者との間に、「家族再統合」に対する理解の明確な差があるということである。入所児童とその保護者の置かれた困難な状況を間近に見ている児童養護施設では、家庭復帰だけがゴールではないということが実感として認識されている。児童相談所の職員にも保護者の置かれた困難な状況が把握されていることは確認した通りであるが、本来的に保護者指導を行うべき立場の児童相談所およびそこで用いられる支援プログラムの研究者は、家庭復帰を目標としない保護者指導が想定しにくい。そのため自らの業務・研究目標を家庭復帰に求める傾向があると考えられる。また2点目に、1点目とも関連して、親子の関係を測定するアセスメント指標や保護者に対する支援プログラムは、ゴールを家庭復帰に限定するからこそ開発が可能だということが挙げられる。広義の「家族再統合」は理念としてはあり得るが、多様で流動的なゴールを取る家庭復帰以外の親子関係の達成を目的としたプログラムは、ゴールと同様に多彩でなければならず、現実的に策定は困難であろう。そのため、児童相談所や保護者指導プログラムの開発を目的とした研究領域からは、どうしても狭義の「家族再統合」概念が操作的定義とならざるを得ないと考えられるのである。

#### （４）なぜ「家族再統合」なのか

このように、わが国ではいまだ「家族再統合」をめぐる狭義の理解と広義の理解が混在している。とくに理念としては広義にとらえる傾向があるものの、実際に保護者への指導を行う行政機関である児童相談所が想定する目標は狭義の「家族再統合」である。また児童相談所の取り組みや「家族再統合」の可能性を測定する研究、具体的な保護者支援プログラムの開発が操作的概念として想定しているのも家庭復帰であった。そのため、それぞれの親子にとって最適な距離を見出すことという理解は理想として支持されながらも、実際のプログラム開発においては支援目標にしにくいという限界があった。ともあれ、「家族再統合」が児童福祉政策の中に位置づけられ、今後さらにプログラム開発・評価研究と実践が期待されることは間違いないだろう。

だが、このような近年の「家族再統合」ブームに対して、社会的養護の現場からはある種の冷静な視線が向けられていることもまた事実である。たとえば児童養護施設長を務める平田は次のように述べる。

日々被虐待児とともに過ごしている現場の感覚からすれば、児童虐待の対応の最終ゴールを「家族の再統合」とすることには不登校の治療目標を再登校にするような違和感がある。児童虐待が大きな社会問題として取りあげられるようになってから発見、保護、治療と対応策の範囲は少しずつ広がってきた。「治療を受けている子どもを早期に発見して保護し、治療して家族のもとに帰す」ということが現時点における一連の対応策になっている。しかし帰す先の家族の実態がどうなっているかをきちんと考えてみなくてはならない。当事者の誰もが「家族」という幻想に振り回されてしまう危険性がある。（平田 2004：38）

また同じく児童養護施設長の伊達は、社会的養護政策の転換を次のように批判する。

子どもの保護は家族分離でもある。そこでこの「負」の意味合いを打ち消すために、家族再統合ということが叫ばれるようになるが、私は、この状況を少しいぶかしく思っている。家族再統合は、親の失調、親子関係の不全、子どものつまずきや外傷から、その回復や発達に向かっていく複雑な過程であって、そうしたことがよく見えてこないからである。

またどれだけ家族再統合に努力しても、それが叶わないというケースが存在することである。親の死別や失踪といった極端な場合を除いても、こうした事例は必ず出てくることになるので、児童養護施設から、このための家庭代替という役割を外すことはできない。家族再統合を掲げるだけでは、こうしたケースに対応できないことになるだろう。

そして家族再統合が、児童養護施設の「回転率」を速くするために叫ばれているの

ではないか、という懸念もある。子ども虐待問題の増加に連動して児童養護施設が「満杯状態」となり、保護しなければならない子どもの受け皿が不足してきた。家庭にいたまま万一のことがあれば、すぐに責任追及につながりかねないご時世である。このため、保護に支障がでてくる状態の改善は、急務となってくるからである。しかしこれでは、ますます子どもの保護に収斂していくだけで、ケアから遠のいていくことになるだろう。(伊達 2004 : 26)

ここには、ともすると家庭支援専門相談員制度化以前から家族支援に長年尽力してきた者ならではの自負があり、今頃になって殊更に取り上げるほどのことでもないというような意識があるのかもしれない。早期に家庭復帰を行って再措置になった過去の事例から得た教訓、あるいは施設の「回転率」を上げようとする行政への不信もあるだろう。経験に裏打ちされた勘は、必ずしも非科学的と切り捨てられるものではない。しかし、入所児童の質や背景にある家族の抱えている課題は時代とともに変化するものである。家族そのものも変化を続けている。家庭支援専門相談員が今更のように制度化された背景には、ファミリーケースワーカー論が提起された当時とは似て非なる文脈があるとも考えられるのである。

それではなぜ今「家族再統合」なのだろうか。そこには我々の社会の持つ根強い家族への期待が感じられる。野々山は、我々の社会が持つ家族への期待と、それが叶えられないときの社会の側の受け止めを次のように述べる。

現代家族の多様化は、もはや自明になってきているのに、なぜそれが見えないままであるのか。それは夫婦の固定的な性別役割分業を前提にした核家族を家族形態の理念型と見なし、家族形態における核家族化を家族の近代化とし、いぜんとして夢を託しつづけているからである。そのかぎりにおいて現代家族の変動を家族の危機とみなす結果になってしまっている。(野々山 1992 : 3)

今日の児童福祉政策の根底にも、あたかも「あるべき家族像」があり、一時的に機能を阻害されている家族も、なんらかの支援によって本来の姿を取り戻せるのではないかと期待されているかのようである。そのような家族機能の回復が望めないまでも、親子間の接触を絶やさないことで、「家族的な」暖かさ、感情の交流を維持できるという期待は社会的養護の現場にも根強い。後者は必ずしも「あるべき家族像」が取り戻せないことを受け入れたより現実的な視点ではあるが、しかし理想的な家族が持っている多様な要素のうち、感情の交流という一要素は維持したいという点で、やはり家族への期待は高いと考えられるのである。

しかしながら「あるべき家族像」という概念は、政策が依拠するモデルとするには極めてあいまいな概念である。家族社会学の分野では、もはや「家族とは何か」を問うことは

不可能になったと考えられているという（上野千鶴子 2009）。そうではなく、「人々は、何を家族だと考えているか」を問わなければならないほどに、家族そのものが多様化しているからである。Gubrium と Holstein は「The Family」と呼ばれるものを、様々な場面における家族に関する記述の詳細な分析から脱構築してみせた。

私たちが各章で紹介してきた様々な記述という行為は、家族的なものが、観念であると同時に具体的な実態であることを示していると思われる。行為が、観念と「もの」とを統合するのである。だから、記述という行いに着目することが、私たちの間に答える足がかりになるだろう。家族は記述という行為の一対象であり、したがって単なる「もの」やきずなの客観的なセットではないし、単なる社会関係の質についての観念でもない。それは、経験を材料にして、解釈を通じて組み立てられた一つの対象（客体）である。家族的なものを記述する中で、私たちは、それに関わる当事者たちは、事実上、自分たちの社会関係についての日常的な認識に依拠して解釈作業をしているのだということを発見する。彼らは、その事柄についてさらに深く考えなければならなくなるときが来るまでは、そうした日常的な常識を程度の差こそあれ決定的なものだと見なしている。彼らの作業は絶え間のない定義の過程ではなく、むしろ、状況によってパターン化されているもののように見える。彼らの家族のきずなをめぐって、自明視されていた理解に挑戦するような事態が起こる。すると、そうした事態によって、私たちが「家族プロジェクト」と呼ぶものが発動されることになる。家族的なものの記述に関わる人たちは、たしかに、社会的構築の実践者である。しかし、彼らの作業は、夕食のテーブル、街頭、病院のなか、治療センター、カウンセリング機関、家庭裁判所といった、それが行われる場所での記述をめぐる諸条件に明らかに制約される。（Gubrium and Holstein=1997 : 319-320）

また、Gubrium と Holstein が実態としての家族はそれを認識する視点と切り離しては考えられないと指摘するように、ひとつの家族であっても、それに何を見るかということは、家族を見ているのが誰かということによって異なるだろう。社会的養護に措置された子どもの家族を考えたとき、子どもが期待する保護者の姿、施設職員が見ている家族の姿、行政や社会一般が求める家族の姿、地域社会が見ている家族の姿は、決して同一ではない。誰もが家族のある側面しか見ていないために起こり得るそのような家族像の不一致は、それぞれがそのような側面を家族に期待するために生じているように思われる。「あるべき家族像」や「The Family」は、誰がその家族を見ているのかという視点の差による像のずれを想定しないという意味で、我々が「家族」と聞いて一般的に想像する姿であるかもしれない。だが、我々が日々具体的に経験し実践する家族は、決して「あるべき家族像」ではない。とくに、虐待家庭のような社会的養護を必要とする家族は、婚姻関係の緩さを含めて様々な意味で生活基盤が脆弱であることはよく知られており（大澤 2008）、「あるべき家

族像」とは大きく異なっている。

それではなぜ、我々の社会はそれでも家族に期待するのだろうか。それは家族の変化、家族の危機、家族の崩壊が問題視されていてもなお、我々には家族に代わるもの、家族のオルタナティブが未だ見つかっていないから、と答えるほかあるまい。そうであれば、児童福祉政策が対象とする家族は「あるべき家族像」などではなく、Gubrium と Holstein が「Family」と呼んだところのものであるという出発点に立たなければならないのではないのか。それはあらゆるケースにおいて、「この家族にとって家族再統合とはなにか？」が個別に問われるということであり、その際の「家族」が誰の目から見た家族であるのかに注意が払われなければならないということである。そのうえでなお、個別具体的な家族再統合を超えて、もっとも深刻な課題を抱える家族に共通する「家族再統合」概念が存在すると考える。その一つのアプローチとして、分離された親子が必ずしも同居を果たせないことも、家庭復帰だけが親子にとってもっとも幸福なゴールとは限らないことも知り尽くしている社会的養護の現場職員の、現実認識と実際の業務と信念から再構築する方法があるのではなかろうか。

#### （５）本論文で用いる「家族再統合」の暫定的定義

上述のように、わが国では「家族再統合」概念が家庭復帰に限定される狭義の理解と、家庭復帰に限らず親子の最適な関係を回復するという広義の理解とに大別される。しかし広義に理解される場合でも、Maluccio らの定義に含まれるプロセスとしての要素が欠落していたり、親子関係のアセスメント指標開発や支援プログラム開発が狭義の「家族再統合」のみを念頭に置いたものであるなど、わが国の「家族再統合」をめぐる議論はまだ十分に成熟したとはいえない状況である。

このような現状を踏まえ、本論文では「家族再統合」をさしあたり以下のように定義しておきたい。「家族再統合」とは、「分離を経験した親子が、種々の援助の提供を受けて、再び親子としての関係を築く過程、およびその親子にとって最も適切な物理的・心理的距離を伴う関係を達成すること」である。

現実には、児童養護施設で用いられるアセスメント指標も、保護者支援プログラムも家庭復帰を想定したものであることに変わりはない。そのため、本論文でも、調査結果の分析の過程で「家庭復帰の可能性」をゴールの分節点と仮定している。しかし、本研究の調査対象が児童養護施設の FSW であり、彼らが達成しようとしている「家族再統合」とは何かを明らかにすることが本研究の目的であることから、ここでは上記のような広義の定義をひとまず念頭に置いて進めることが適切と考える。

## 2. 家庭支援専門相談員の考える「家族再統合」—アンケート調査から

上述の家族再統合概念の整理を踏まえ、児童養護施設に勤務する FSW が家族再統合をど



のようなものだと考えているのか、筆者の行った質問紙調査から明らかにしたい。それに先立ち、まず調査の概要と結果を簡潔に記述する。なお、調査票は巻末に掲載する。

#### (1) 調査概要

本調査は児童養護施設に勤務する FSW が、社会的養護実践の現場で「家族再統合」をどのように捉えて支援を行っているのかを、その実際の業務との関わりから明らかにすることを目的として行った。

##### ①調査期間

調査期間は 2010 年 11 月 1 日～11 月 30 日である。

##### ②概要

全国 579 の児童養護施設（調査当時の全施設）の家庭支援専門相談員を対象に、調査票（資料 17）を郵送し、回答を郵送で求めた。調査票は施設の方針や業務形態等について選択肢で回答を求める質問群、フェイスシートその他、以下の項目に関わる自由記述で構成した。児童養護施設に措置された子どもの主な退所ルートとしては家庭復帰、自立、および他の施設・里親等への措置変更がある。本調査では社会的養護が継続する措置変更を除き、社会的養護の終結として対照的な「家庭復帰」と「社会的自立」という 2 つの退所方法で、調査時点ですでに終結しているケースをそれぞれ 1 ケースずつ具体的に挙げてもらい、そのケースにおいて、入所児童の退所に向けたリービングケアの担い手である FSW がゴール決定をどのように判断し、それに向けて具体的にどのような支援業務を行ったか自由記述でたずねた。また合わせて社会的養護の課題とされる「家族再統合」について、日頃の業務を通じて考えていることを自由記述でたずねた。

##### ③回収率および分析対象

調査票の回収は 132 票、回収率は 22.8%であった。有効回答率は 22.6%である。

全国 579 施設の地域ごとの割合は、北海道 4%、東北地方 6%、関東地方 27.1%、中部地方 16.6%、近畿地方 19%、中国地方 7.3%、四国地方 4.8%、九州地方 14%、沖縄 1.4%である。回収した調査票 132 票を地域別にみると、北海道 1.5%、東北地方 6.1%、関東地方 27.3%、中部地方 17.4%、近畿地方 12.9%、中国地方 6.8%、四国地方 6.8%、九州地方 18.2%、沖縄 1.5%であった。北海道と近畿地方の回収率がやや低いことを除き、概ね偏りのないデータであると考えられる。

また分析対象とした自由記述は、回収した 132 票のうち、「家庭復帰」ケースについて記入のあった 90 票、「社会的自立」ケースについて記入のあった 60 票、また「家族再統合」について記載のあった 81 票を、それぞれ分析対象とした。

##### ④分析方法

自由記述の分析にあたっては KJ 法を用いた。KJ 法は記述を意味のまとまりごとに切片化するが、「家族再統合」についての考えは前後の文脈を大事にするためあえて切片化は行

わず、1人の回答を1データとして扱った。分析にあたり、回答者の勤務形態によって専業FSWと兼業FSWの2群に分けて分析を行った。勤務形態を重視したのは、第3章でFSWの実際の業務を分析するにあたり、FSW業務に専念できるか否かによって内容に差があるのではないかと考えたの同様に、「家族再統合」についての考え方にも影響があるのではないかと考えたことによる。

質的研究においては分析の妥当性の担保が重要であり、複数の視点によるチェックが求められる。本研究では筆者一人で分析を行ったが、既に同データを用いて、筆者を含む専門が異なる研究者・援助職者3名で行った分析があり（大澤 2012b）、今回の再分析にあたっては、以前の複数の視点による分析と随時比較し、結果に不自然な点のないことを確認しながら分析を行った。以下、分析によって得られたカテゴリー名を【 】, 概念名を『 』、データを「 」で示す。

なお、「家庭復帰」ケースおよび「社会的自立」ケースの具体的な2つのケースについての自由記述の分析結果と考察は第3章で詳述するため、本章では扱わない。

#### ⑤倫理的配慮

本調査は「日本女子大学ヒトを対象とした実験研究に関する倫理委員会」に申請し、承認を得た。また、回収した調査票はデータとして慎重に扱い、得られたデータは回答者の個人や所属が特定できないように、さらにケースが特定されることのないように配慮して分析を行った。

### (2) 結果と分析

選択肢を示して回答を求めた質問の結果は以下のとおりである。

#### ①回答者のフェイスシート

##### (a)回答した FSW の性別 (図 2-1)

男性 64 名 (49%)、女性 67 名 (51%) で、回答者の男女比はほぼ同程度であった。

##### (b)回答した FSW の年齢 (図 2-2)

20 代 7 名 (6%)、30 代 39 名 (30%)、40 代 41 名 (31%)、50 代 37 名 (28%)、60 代以上 7 名 (6%) で、30 代・40 代・50 代がほぼ同数ずつで、全体の約 9 割を占めた。FSW 業務が児童養護施設での勤務経験の浅い若手職員ではなく、中堅・基幹職員によって担われていることが推測できる。

##### (c)FSW 歴 (図 2-3)

1 年未満が 28 名 (21%)、1 年以上 3 年未満が 37 名 (28%)、3 年以上 6 年未満が 44 名 (34%)、それ以上が 17 名 (13%)、非該当・無回答が 5 名 (4%) であった。FSW 業務が特定の職員によって安定的に担われ始めている施設がある一方で、制度化から 7 年 (調査時点) のうちに、すでに何度かの担当者交代を経験している施設があることがうかがえる。

##### (d)FSW になる前の職種 (図 2-4)

児童養護施設の CW が 93 名 (71%)、児童養護施設の CW 以外の職種が 15 名 (11.5%)、

児童養護施設以外の福祉職が 5 名 (3.8%)、その他が 16 名 (12.2%)、無回答が 2 名 (1.5%) であった。CW とそれ以外の職種を合わせ、前職種が児童養護施設職員だった者の割合は全体の約 8 割に上る。

#### (e)現在の勤務形態

常勤の FSW が 127 名 (97%)、非常勤の FSW が 1 名 (1%) と大多数の FSW は常勤職員であった(図 2-5)。しかし、他職種との兼務状況をたずねると、専業 FSW は 36 名 (27%) にとどまり、兼業 FSW が 94 名 (72%) と他職種を兼務する者が多い結果となった(図 2-6)。それぞれに専業・兼業の理由を尋ねたところ、専業 FSW を配置する児童養護施設では FSW の業務量や専門性を重視した結果であるのに対し、兼業で FSW を配置する施設では、職員不足のためにやむを得ないという消極的な回答と、業務遂行のために日頃の子どもの様子を把握する目的でケアに携わるという積極的な回答とに二分された。兼業 FSW に兼務している職種をたずねたところ、主任 CW が 25 名 (26%)、CW が 44 名 (46%)、基幹職員が 7 名 (8%)、副施設長が 5 名 (5%)、スーパーバイザー職が 2 名 (2%)、その他が 5 名 (5%) と、主任 CW・CW を合わせて約 7 割が子どもの直接ケアの担当職員である<sup>ii</sup> (図 2-7)。

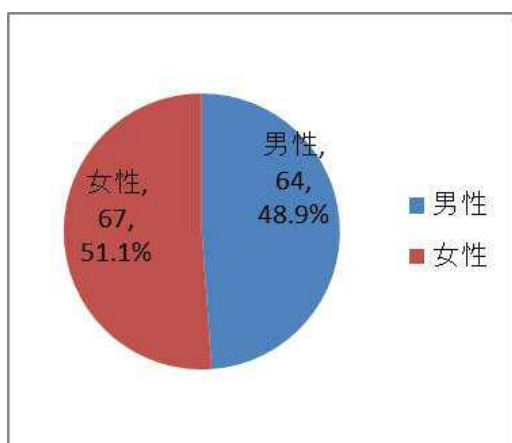


図 2-1 FSW の性別 (N=131)

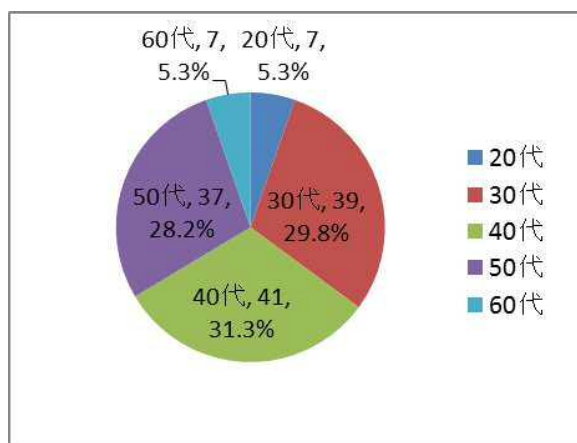


図 2-2 FSW の年齢 (N=131)

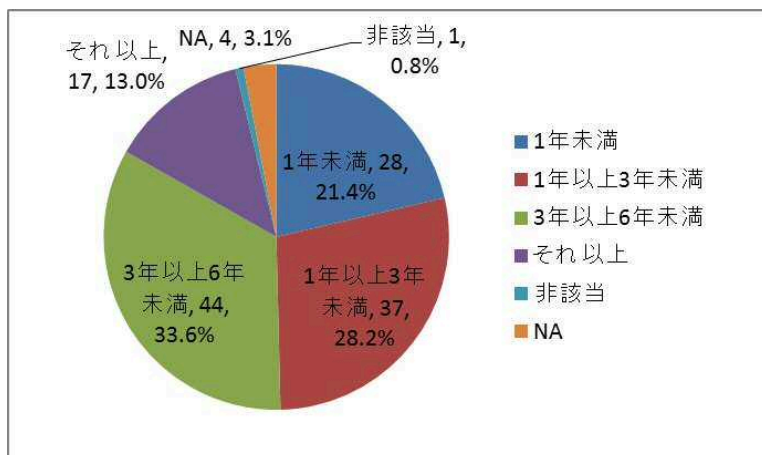


図 2-3 FSW 歴 (N=131)

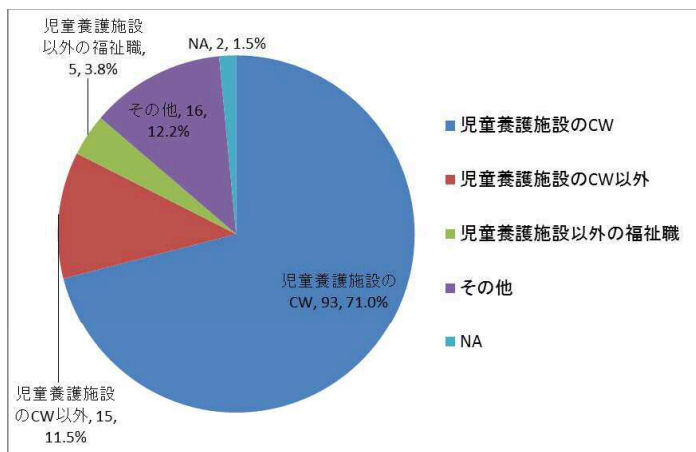


図 2-4 FSW になる前の職種 (N=131)

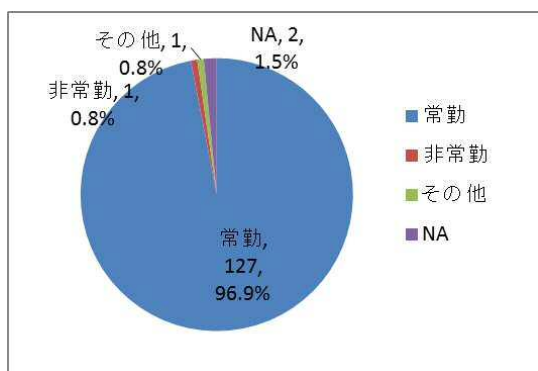


図 2-5 常勤割合 (N=131)

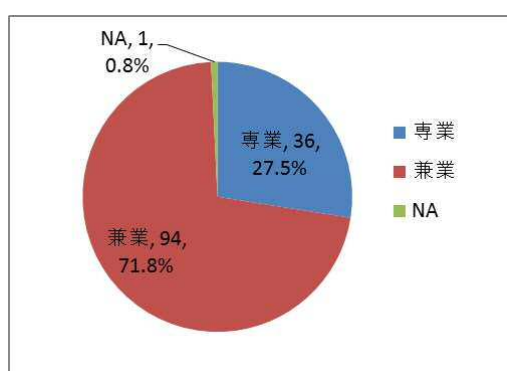


図 2-6 専業割合 (N=131)

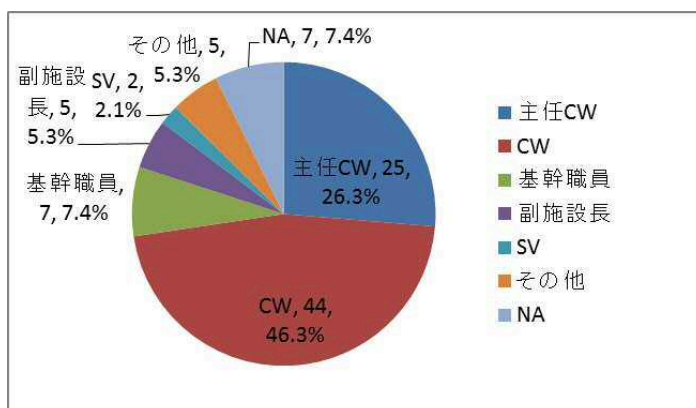


図 2-7 兼務している職種 (N=131)

上記の回答者の属性が、全国の FSW の母集団に対して偏りがないかどうかについては検証が難しい。現在までに厚生労働省統計の社会福祉施設等調査には家庭支援専門相談員の配置についてのデータはない。これまでに児童養護施設の FSW を対象に行われた大規模な調査としては中山らの 2006 年の調査があり（中山ほか 2008）、そこでは専業 FSW29%、兼業 FSW71%と、今回データとほぼ同様の割合が示されていた。また同調査では、FSW の全労働量に占める FSW としての職務の割合が 50%以下であると答えた者が 42%おり、単に兼業であるばかりでなく、FSW 業務の比重が他の業務より軽い者が少なくない実態がある。

## ②FSW 業務

### (a)FSW として行っている主な業務

現在 FSW として行っている主な業務を複数回答でたずねたところ（表 2-1）、過半数を超えたのは多い順に「ケース会議出席（90.1%）」、「家族との連絡調整（88.5%）」、「児童福祉司との連絡調整（87%）」、「担当 CW との連絡調整（86.3%）」、「家庭訪問（78.6%）」、「日常的な子どものケア（73.3%）」、「一時帰宅の調整（67.9%）」、「家族の元に帰すことを前提にした家族の面接（66.4%）」、「学校訪問（53.4%）」などとなっている。

FSW の勤務形態によって行っている業務に違いがあるか検証するため、勤務形態とのクロス分析を行ったところ（表 2-1）、「日常的な子どものケア」「学校訪問」を除くすべての業務で兼業 FSW より専業 FSW の方が多く行っていた。つまり、これは先にみた兼務の職種の多くが CW であったこととも一致する。一方、専業 FSW は「家庭復帰を前提とした子どもとの面接」「家庭復帰を前提とした家族の面接」「家庭訪問」「サービスの紹介・手続き代行」および里親委託に関する業務、退所者支援、地域支援・ショートステイ事業、要保護児童対策地域協議会出席、家庭復帰プログラム開発等を含む「その他」業務で兼業 FSW より多く行う傾向があった。

上記の結果を、厚生労働省通知（厚生労働省 2012b）に明記された家庭支援専門相談員が担うべき役割内容と直接比較することができるかどうか、一応参照してみたい。表 2-1 にあるように、保護者に対して行う面接や、児童相談所等関係機関との連携、ケース会議への出席はよく行われていたことが確認された。また、第 4 章で明らかにするが、施設職員への指導も FSW は行っている。一方で、今回の調査では家庭復帰と社会的自立という対照的な退所方法をとったケースについて質問したため、厚生労働省通知にある里親支援や養子縁組推進については FSW として一般に行っている業務の選択肢には含めなかったが、その他の具体的な回答にもこれらはほとんど現れていなかった。また、地域の子育て支援に対する相談についても同様である。

### (b)FSW のケースへの関与度（図 2-8）

FSW はどのくらいのケースに関わるか尋ねたところ、「ほとんどすべてのケースに関わる」が 55.7%でもっとも多く、次いで「必要がある時だけ関わる」29%、「半分程度のケー

スに関わる」6.1%となっているが、「あまり関わることはない」という回答も 3.8%あった。FSW の配置されている施設でも、まだすべてのケースが FSW の支援業務の対象とはなっていないことが分った。

FSW のケースへの関与度が、FSW の勤務形態によって異なるかどうか検討するため、ケースへの関与度と勤務形態のクロス分析を行った（表 2-2）。その結果、専業 FSW のほとんどはすべてのケースに関わっているのに対し、兼業 FSW ではすべてのケースに関わる割合が約半数に過ぎず、3 割程度は必要がある時だけ関わっていることが明らかになった。

#### (c) 児童養護施設と児童相談所の方針の一致度

子どもを家庭復帰させるかどうかをめぐって、児童養護施設側と児童相談所の児童福祉司との間で意見が分かれることがあるかどうかたずねたところ、約 8 割の施設ではそのような意見の不一致を経験していた（図 2-9）。そこで、意見が分かれたときの対応法をたずねたところ（図 2-10）、「意見が一致するまで担当児童福祉司となんども協議する」が 61.5%でもっとも多かったが、4人に1人は「児童相談所の決定に沿うように援助することが多い」と回答している。退所の判断をめぐっては、FSW は専門的な見地から強く意見することができない状況にあることが推察される。

#### (d) 退所方法をめぐる判断

子どもを家庭復帰させるか、社会的自立をさせるのかという退所方法の判断をめぐって、「そろそろ退所させてはどうか？」という最初の実際的な提案と、最終的な判断を、誰がどのくらい行っているかたずねた（表 2-3・表 2-4）。設問の趣旨が解りにくく、無回答の割合が高かったという制約はあるものの、最初の提案では児童福祉司よりもむしろ担当 CW や FSW、家族からの提案が多いのに対し、最終的な判断は児童福祉司、次いで施設長という傾向が示された。日常的に子どもと保護者の様子を把握している児童養護施設職員の方が、児童福祉司よりも退所に向けたきっかけを作りやすいことが伺える。しかし、最終的な判断については、FSW といえども決定権を持っていない。これには2つの理由が考えられる。ひとつは家庭支援専門相談員制度導入からの歴史が浅く、まだその専門性が認識されていないことである。いまひとつは現行の措置制度では措置権者である児童相談所の判断が常に優先されるということである。

退所の判断にあたって、アセスメントシートや、支援計画の進行をアセスメントする評価基準が決まっているか尋ねたところ、決まっていると回答した施設はわずか 12.2%で、大部分の施設では決まった形式を持っていなかった（図 2-11）。アセスメントシートのような科学的な判断指標を持っていることと、先述の退所判断について児童相談所と意見が一致しなかった場合の対処法に関係があるか確認するため、アセスメント指標の有無とのクロス分析を行った（表 2-5）。その結果、アセスメント指標を持っている施設ではほぼすべての回答が「意見が一致するまで担当児童福祉司となんども協議する」だったのに対し、指標を持たない施設では3分の1近くが「児童相談所の決定に沿うように援助することが多い」と回答している。ここでは、児童養護施設がケースに対する科学的で客観的な評価

指標を持つことによって、児童相談所と対等に協議できる可能性が示されたといえよう。

(e)FSW の研修機会（表 2-6）

FSW が業務の専門性を担保するために、スーパービジョンやコンサルテーションをうける機会があるかどうかたずねたところ、定期的にスーパービジョンやコンサルテーションを受けると回答したものがそれぞれ 9.9%,6.9%、困難ケースがあった時のみスーパービジョンやコンサルテーションを受けるとした回答が 32.8%,17.6%あったのに対し、そのような機会はないという回答も 30.5%と全体の 3 割を占めた。

表 2-1 FSW として行っている業務（複数選択 全体 N=131,専業 N=36,兼業 N=94）

		全体		勤務形態別			
		度数	%	専業		兼業	
				度数	%	度数	%
FSWとして 行っている 業務	児童福祉司との連絡調整	114	87.0%	34	94.4%	79	84.0%
	担当CWとの連絡調整	113	86.3%	34	94.4%	78	83.0%
	家族との連絡調整	116	88.5%	34	94.4%	81	86.2%
	ケース会議出席	118	90.1%	34	94.4%	83	88.3%
	家庭復帰を前提とした子どもとの面接	65	49.6%	22	61.1%	43	45.7%
	子どもの心理面接	9	6.9%	3	8.3%	6	6.4%
	日常的な子どものケア	96	73.3%	18	50.0%	77	81.9%
	児童養護施設運営に関わる事務	46	35.1%	15	41.7%	31	33.0%
	家庭復帰を前提とした家族の面接	87	66.4%	30	83.3%	57	60.6%
	一時帰宅の調整	89	67.4%	28	77.8%	60	63.8%
	家庭訪問	103	78.6%	32	88.9%	70	74.5%
	学校訪問	70	53.4%	18	50.0%	50	54.3%
	サービスの紹介・手続き代行	56	42.7%	20	55.6%	36	38.3%
	その他	17	13.0%	8	22.2%	9	9.6%

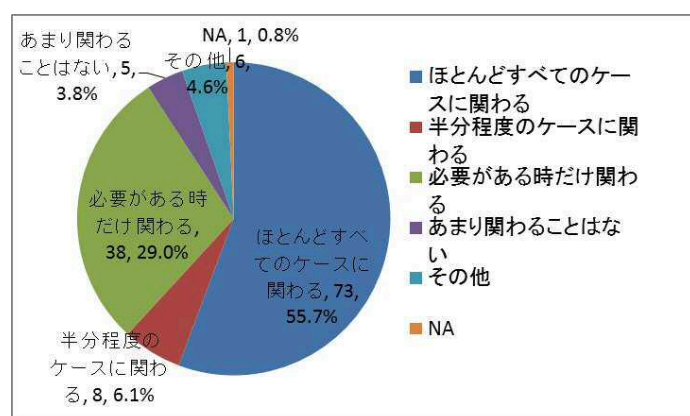


図 2-8 FSW のケースへの関与度（N=131）

表 2-2 クロス表 FSW のケースへの関与度と勤務形態 (N=131)

		専業か兼業か			合計
		専業	兼業	NA	
ケースへの関与	ほとんどすべてのケースに関わる	29	44	0	73
	半分程度のケースに関わる	1	7	0	8
	必要がある時だけ関わる	6	32	0	38
	あまり関わることはない	0	5	0	5
	その他	0	5	1	6
	NA	0	1	0	1
合計		36	94	1	131

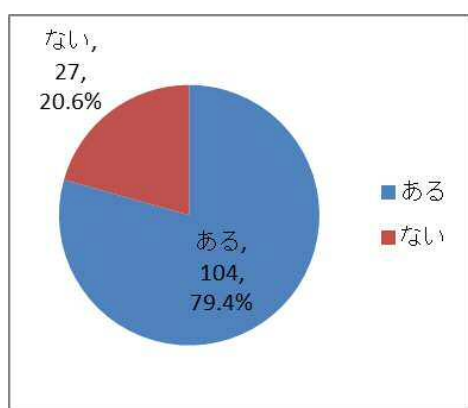


図 2-9 児童養護施設と児童相談所の判断の不一致経験 (N=131)

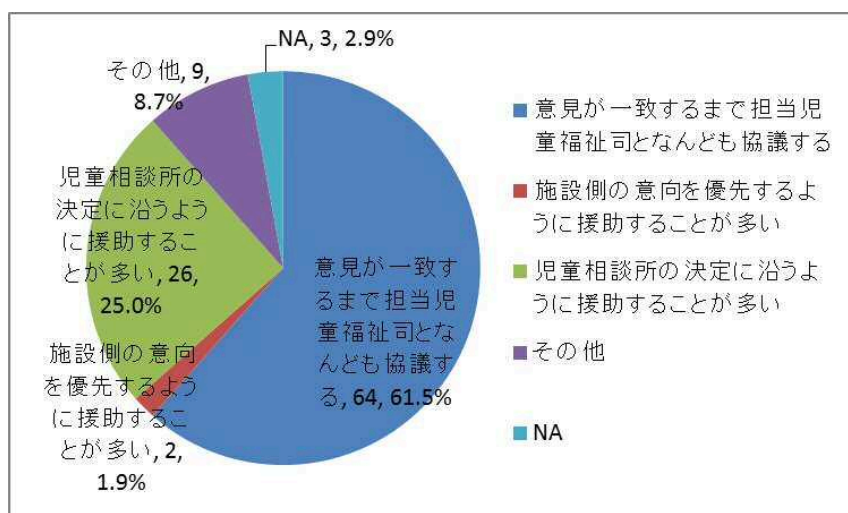


図 2-10 児童相談所と判断が異なった際の対応 (N=104)



表 2-3 退所についての最初の提案 (N=131)

	担当CW	FSW	施設長	児童福祉 司	家族	本人	その他
よくある	57	52	39	45	55	42	3
ときどきある	62	64	68	67	62	73	3
まったくない	7	6	16	13	9	7	非該当124
NA	5	9	8	6	5	9	1
合計	131	131	131	131	131	131	131

表 2-4 退所について最終的な判断 (N=131)

	担当CW	FSW	施設長	児童福祉 司	家族	本人	その他
よくある	35	41	69	99	38	39	8
ときどきある	43	40	41	25	58	53	1
まったくない	31	26	7	2	14	16	1
NA	22	24	14	5	21	23	121
合計	131	131	131	131	131	131	131

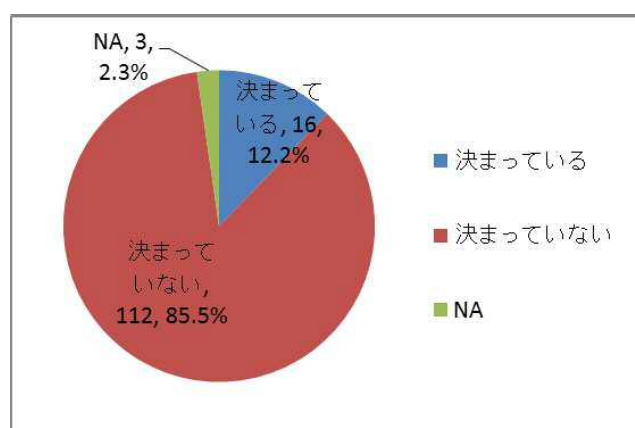


図 2-11 アセスメント基準の有無 (N=131)

表 2-5 クロス表 アセスメント基準と施設の対応方針 (N=104)

		施設の対応方針					合計
		意見が一致するまで 担当児童福祉司とな ども協議する	施設側の意向を優先 するように援助する ことが多い	児童相談所の決定に 沿うように援助する ことが多い	その他	NA	
アセスメ ント様式	決まっている	12	0	0	2	0	14
	決まっていない	50	2	26	7	2	87
	NA	2	0	0	0	1	3
合計		64	2	26	9	3	104

表 2-6 研修機会（複数選択 N=131）

	度数	パーセント
SVを定期的に受ける	13	9.9
SVを困難ケースのみ受ける	43	32.8
コンサルを定期的に受ける	9	6.9
コンサルを困難ケースのみ受ける	23	17.6
そのような機会はない	40	30.5
その他	12	9.2

### ③家族再統合についての FSW の考え

#### (a)「家族再統合」をどのようにとらえるか（表 2-7）

FSW が「家族再統合」という言葉をどのような意味でとらえて日々の業務を行っているか、選択肢を示して複数回答でたずねた。選択肢の作成にあたっては、「家族再統合」を親子の生活像の程度の問題であると仮定した。すなわち、生活の完全な共同から、完全な自立までの範囲で、両者の間に親族関係のあるものから順に段階的なバリエーションを設け、完全な共同をもっとも狭義、完全な自立をもっとも広義とした。選択肢は狭義の説明から広義の説明まで段階を追って示しているが、結果は広義のもの、あるいは逆に狭義のものから段階的に選択される割合が増えたわけではなかった。「子どもが虐待親を含む元の家族と一緒に住み、安全に生活できるようになること」というもっとも狭義の説明は選択率が最も高く 66.4%であったが、「子どもが自立した生活を営みながら、元の家族と定期的に会うなどして、良好な家族関係を築くこと」というもっとも広義の説明が次点の 48.9%であった。また、両者の間に位置づけた 3 つの説明と、「その他」の回答が 23.7%～30.5%と概ね同水準であった。「その他」のなかには、表現は多様ながら、問題は生活場所や誰と一緒に住むかということではなく「心の問題」であり、家族の関係を重視する見方が示されていた。この結果からは、望み得るならば「家庭復帰」は目指すべきゴールではあるが、子どもが社会的自立をすることになっても親子関係は再構築し得るとの判断から、前述の 2 項目が高く支持されたことが読み取れる。なぜ「家族再統合」達成の程度に沿って段階を踏まず、もっとも狭義ともっとも広義という二分する回答となったのかという点については、終章で改めて議論したい。

#### (b)家族関係を再構築することについて

家族関係を再構築することについて FSW 業務を通して日頃考えていることを自由記述でたずねた。ここでは、設問の範囲を超えて日々の業務での苦労や児童福祉の制度上の課題、子どもたちやその家族への思いなど、言葉を尽くしての回答が得られた。回答は勤務形態によって専業群と兼業群の 2 群に分類し、1 回答 1 データとして KJ 法により分析した。なお、分析に用いたデータは巻末に収録した（資料 1・資料 2）。

まず、専業 FSW の記述からは 4 つのカテゴリーと 13 の概念を抽出した (図 2-12・資料 1)。第 1 カテゴリー【家族の再構築とは何か】は『子どもが将来他者との適切な関係を持てるようになることを重視』『親子の最適な関係を見つけること』の 2 概念から構成された。ここでは、「(前略) いつも思うのは将来その子供が自分の子を持ったときに適切にかかわれる様、将来を見すえたかかわり方の支援が出来れば (中略)」「(前略) 施設へ分離した子どもを家族という「従来の関係性の中に戻す」のではなく、家族という「新しい関係性を作り上げていく」という考え方です」等の記述が見られたが、子どもを元の家庭や元の親子関係に戻すのではなく、親も含むがもっと広く想定された新しい人間関係の中に戻し、あるいは子ども自身にそのような人間関係を作り上げる力を涵養していくことが重視されているといえる。

第 2 カテゴリー【FSW として心掛けていること】は『親子双方の意向を聴きそれぞれの課題解決のサポートをすること』『時間をかけて取りくむこと』『プログラムに沿ってスピード感を持って取りくむこと』『子どもの自立を優先』『他機関との連携の必要性』『虐待現象にとらわれず家族の日常生活をサポートすること』の 6 概念から構成された。ここでは家族再統合までのスピード感で相反する 2 概念が抽出されている。いずれも現場の偽らざる感覚であろう。また「虐待という現象だけにとらわれることなく、家族の生育歴の流れを大きくとらえる中で、家族の問題を明らかにし、課題にとりくんでいきたい (中略)」等の記述からは、FSW の家族再統合観に関わる本質的な認識が垣間見える。被虐待児童の急増を直接の要因として、早期家庭復帰等の促進を期待されて導入された家庭支援専門相談員ではあるが、家族再統合のためには虐待行為ばかりに着目せず、その背後にある家族の課題そのものに焦点を当てていくという FSW の姿勢がうかがえる。

第 3 カテゴリー【今後家族再統合に必要なこと】は『親指導の必要』『分離前の家族支援の必要』『現在の制度上の限界』『多様な制度サービスの必要性』の 4 概念から構成された。親指導については「今最も強く感じていることは、「親の指導」をどこが、誰が行うのかということです (中略)」と FSW の役割であるかどうかに疑問を呈した記述がある一方で、「(前略) 親に対しても子どもに対してもじっくり、ゆったりと話を聞いてやれる存在として FSW が位置づけられればよい (中略)」のように、現状ではできていないとしても、FSW の役割として引き受けようとしている姿勢も見られた。

第 4 カテゴリー【FSW としての困難】は『対応困難』の 1 概念から構成された。対応困難とは、対応困難な親という理解である。

次に、兼業 FSW の記述からは同じく 4 つのカテゴリーと 12 の概念を抽出した (図 2-13・資料 2)。第 1 カテゴリー【家族の再統合とは何か】は『子どもの自立優先』『親子の最適な関係を見つけること』『見極めの重要性』の 3 概念から構成された。専業 FSW の記述に比べると、「家族再統合という言葉はいいが、そんなに簡単に再統合するケースは少ないと思う (中略)」「(前略) 施設でできることには限りがあり退所してすぐに家庭に帰るのではなく、自立に向けて就職させ、その後再統合できるような足がかりを作ることしかできてい

ない」等の記述にみられるように、家族再統合に否定的な見方が見られたが、これらは家族再統合を狭義に家庭復帰と認識していることが伺える。

第2 カテゴリー【FSWとして心掛けていること】は『日々の業務で心掛けていること』『親子関係の調整』『他機関との連携の必要性』の3概念から構成された。ここでは「(前略) 困った子供、困った親は、困っている子供、困っている親なので、そのことを忘れず仕事を遂行したいと思います」「(前略) 思いもよらないところで子供と切り離され、辛い思いをしている親は少なくない」等の記述にみられるように、虐待をした親もまた困っているのだということに FSW が共感的に寄り添おうとする姿勢がうかがえる。ところが一方で、「家庭、家族との直接的連絡を取って良いか悪いかということは、児相の判断であり、それを無視して家庭訪問や、家庭とのやりとりを行なうことは、越権行為だと考えています(中略)」「(前略) 一日も早く子供の幸せのために児相には親への教育に熱を入れて欲しいです(中略)」等のように、親への指導は施設の役割を超えているとの認識も見られた。むろん、それゆえに関係機関との連携の必要性が認識されているわけだが、児童養護施設の役割を限定的に理解していることは指摘できよう。このことは次の第3 カテゴリーにも共通する。

第3 カテゴリー【家族再統合政策の課題】は『親指導の必要性』『現行の FSW 制度の課題』『家族再統合に必要なもの』の3概念から構成された。第2 カテゴリーと同様に、「親への適切な指導が必要と考えますが、誰が親指導するのか決まっておらず(中略)」「家庭環境が整うよう支援する方策について、施設としてできる範囲がはっきりしない(中略)」等の記述からは、児童養護施設の役割を限定的にとらえていると推測できる。専業 FSW の記述からも親指導を引き受けることの困難性は見受けられたが、兼業 FSW の方がより親指導に対して拒否的であると見ることもできる。これは、他職種を兼務している多忙さからくるものと考えられる。

第4 カテゴリー【FSW業務を通して経験している困難】は『経験から見た家族再統合の難しさ』『FSWとして困難を感じていること』『家族再統合を困難にしている要因』の3概念から構成された。個々の FSW の日々の業務に基づく実感が語られているため、「児童養護施設での入所期間が長ければ長い程、子どもは親の問題を知り、再構築が出来にくくなる。(中略)」「急いだら失敗することが多い」のように、入所期間と支援の速度については正反対の意見も見られた。だが、子どもが施設でケアを受けて安定していく間に、親への支援がなされないために家庭復帰が困難なことや、そこへの支援には手が回らない多忙さが吐露されていた。

表 2-7 「家族再統合」をどのように考えるか（複数回答 N=127）

	度数	%
子どもが虐待親を含む元の家族と一緒に住み、安全に生活できるようになること	87	66.4
子どもが虐待親を除く一部の家族と一緒に住み、安全に生活できるようになること	31	23.7
子どもが元の家族以外の親族等と一緒に住み、安全に生活しながら、元の家族と定期的に会うなどして、良好な家族関係を築くこと	40	30.5
子どもが里親等と一緒に住み、安全に生活しながら、元の家族と定期的に会うなどして、良好な関係を築くこと	35	26.7
子どもが一人で自立した生活を営みながら、元の家族と定期的に会うなどして、良好な家族関係を築くこと	64	48.9
その他	32	24.4

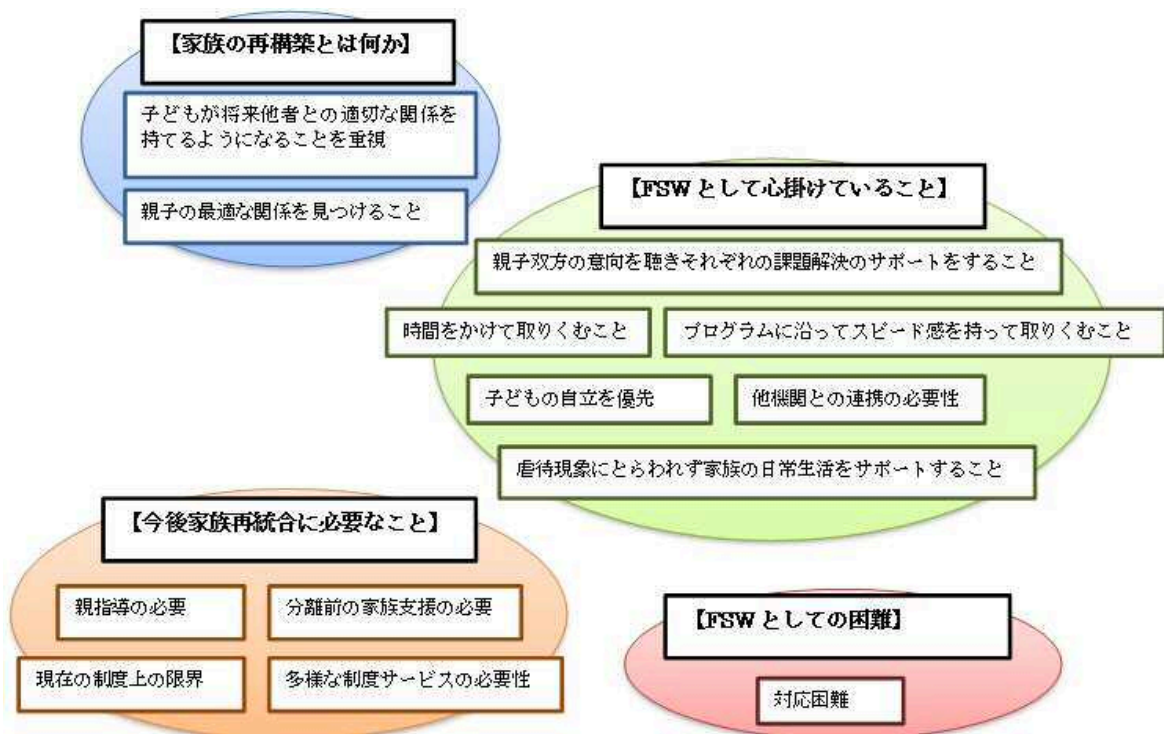


図 2-12 専業 FSW が家族関係を再構築することについて考えること

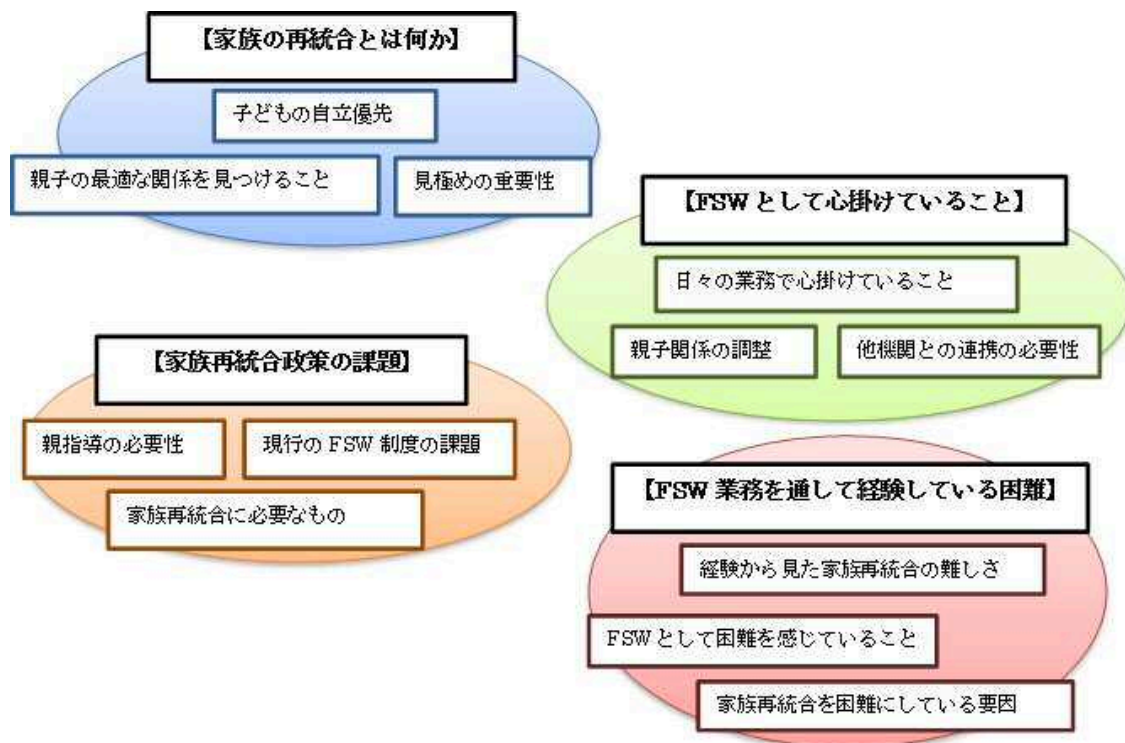


図 2-13 兼業 FSW が家族関係を再構築することについて考えること

### (3) アンケート調査にみる家庭支援専門相談員の考える「家族再統合」

上記にみたアンケート調査結果をもとに、児童養護施設の FSW が「家族再統合」をどのようなとらえているかを振り返っておきたい。

選択肢を示して回答を求めた FSW の「家族再統合」観では、もっとも狭義の説明がもっとも支持されていたが、次に支持されたのはもっとも広義の説明であった。両者の間に段階的に位置づけた「子どもが虐待親を除く一部の家族と一緒に住み、安全に生活できるようになること」「子どもが元の家族以外の親族等と一緒に住み、安全に生活しながら、元の家族と定期的に会うなどして、良好な家族関係を築くこと」「子どもが里親等と一緒に住み、安全に生活しながら、元の家族と定期的に会うなどして、良好な関係を築くこと」の 3 つの選択肢は、いずれも 30% 未満しか支持されていない。この結果から、FSW は部分的な統合よりも、「家族再統合」を家庭復帰か親子関係修復かという両極端の捉え方で理解していると見ることができる。だが、「その他」を選択した自由記述によれば、「誰と」「どこに」住むかということは、ただその家族の最終的な選択の結果に過ぎず、「家族再統合」自体を規定する要因とはみなされていない。むしろ、それぞれの親子にとって、物理的にも心理的にも最適な距離を見出し、良好な親子関係を築き直すことが家族再統合だとの主張も見られた。その結果、ある親子は同居するかもしれないし、また別の親子は直接の接触を避けた方がうまくいくかもしれない。居住の「場」を含む親子の生活像は、あくまでも家族再統合にとっては副次的なものだとの見解である。

一方、家族関係を再構築することについての自由記述分析は、一見して分かるように、専門群と兼業群はすべてのカテゴリー名ではほぼ一致している。しかし兼業 FSW の方がより困難場面を多く経験しているのか、実感している困難を記入したものが多かった。そのため「家族再統合」というのは、言うは易いが達成は簡単なことではなく、援助実践においては子どもの自立を優先するとはっきり述べた記述もあった。兼業 FSW は FSW 業務に専念できないために、様々な場面で困難を感じているとも考えられる。

いずれの群でも「家族再統合」を『親子の最適な関係を見つけること』という広義に捉えた理解が示されていた。専門群ではさらに一步進んで『子どもが将来他者との適切な関係を持てるようになることを重視』といった独自の解釈も示された。他方、兼業群では家族再統合の不可能性を主張し、またそれを理由として『子どもの自立優先』を支援の指針としていることが示された。その際の家族再統合は狭義に家庭復帰と認識されている点を指摘しておきたい。

「家族再統合」の達成には、子どもへの支援だけではなく親をはじめとする家族への支援が重要なことはいずれの群でも認識されているが、FSW の業務として引き受けるべきと考えているかどうかには差が見られた。専門群では、親指導が児童養護施設の役割なのか疑問を呈している回答者がいる一方で、今は不十分だが今後引き受けていくべき役割と認識されてもいた。他方で兼業群からは、児童養護施設の役割をより限定的に解釈し、FSW が親指導を引き受けることに否定的な記述が目立った。FSW が専門配置される施設では、FSW の役割に対する他の職員からの期待が高く、また自らの専門職意識も高いと考えられる。「家族再統合」が社会的養護の重要な課題であるという認識も当然高いだろう。そのため、困難を感じる場面はあっても、【FSW として心掛けていること】に見るような FSW 個人が何らかの信念を持って業務を行い、よりいっそう引き受けていこうと考えているとみられる。しかし兼業配置の施設の FSW は FSW 業務に専念することができず、他の職員と同様にシフト勤務をこなさなければならない。その多忙さから、「家族再統合」のための支援を児童養護施設だけが行うことに否定的であると考えられる。さらに言えば、その多忙さゆえに、「家族再統合」支援が児童養護施設だけに課せられたかのように、昨今の子ども家庭福祉政策の動向に猜疑的になっている可能性もある。

いずれにせよ上述の結果からは、児童養護施設の FSW は「家族再統合」を狭義に家庭復帰に限定すると達成が困難であるが、『親子の最適な関係を見つけること』と広義にもとらえていることが明らかになった。その際に、「誰と」「どこに」住むのかという具体的な生活像は「家族再統合」を規定する要因ではなく、副次的なものだと考える見方も存在していた。また、兼業 FSW がたびたび業務遂行上の困難を感じ、「家族再統合」を達成困難だと考える傾向にあるのに対して、専門 FSW はそれぞれに独自の信念を持って「家族再統合」支援にあたっていることが示された。

### 3. 分岐点としての「家庭復帰の可能性」

上述のとおり、アンケート調査結果から児童養護施設の FSW は「家族再統合」を家庭復帰という狭義の再統合に加えて、『親子の最適な関係を見つけること』と広義にもとらえていることが明らかになった。またその際、「誰と」「どこに」住むのかという具体的な親子の生活の「場」を含む生活像は「家族再統合」とは何かを規定しておらず、結果として表れるだけの副次的なものだという意見もあった。しかし、生活像が「家族再統合」によっていかに副次的なものであるとはいえ、社会的養護が終結する際の子どもの退所後の生活を具体的に想定すれば、それは「どこ」に帰すのかという「場」の問題となり、結局のところ家庭復帰かそうでないかの判断がまず FSW に求められることは必然であろう。

そして実はこの生活の「場」を含む生活像の違いが、FSW の実際の業務にも大きく影響を与えているものと予想される。なぜなら、施設退所後の子どもが「誰と」「どこに」住むのかという個別で具体的な生活像によって、退所までの間に達成しなければならない課題は当然変わってくるからである。たとえば子どもが元の家で保護者との生活に戻っていくならば、FSW は子どもに年齢相応の生活力を身に付けさせ、親子が慕い合う関係の構築をめざすことになる。その家庭の中で、子どもが親からどのような期待を受けているかということも無関係ではない。ただ食事や排泄、着替えなどの身の回りの自立ができていればよい場合もあれば、家の中での手伝いを要求される場合、家計の一部を担うことが期待される場合もあろう。むろん親からの子どもに対する期待は社会的に許容される範囲を超えてはならないが、これらの違いによって子どもが達成すべき自立のレベルは異なり、それに伴って FSW の支援課題も異なってくる。また一方で、子どもが社会的自立を迫られるのであれば、子どもには身の回りの生活力ばかりでなく、就労しひとりの社会人として生きていく力を身に付けさせなければならない。複合的な不利を背負って自立していく子どものために、その生活をサポートする地域ネットワークを構築することも FSW の役割であろう。このように、退所後の具体的な生活の「場」を含んだ生活像が、それまでに達成しなければならない課題を規定し、その課題解決に向けた FSW の業務も規定することになるのである。したがって、生活像それ自体は家族再統合の結果でしかないとしても、FSW にとって「家族再統合」がそれぞれの親子の最適な距離を見出すことだとすれば、その物理的・心理的距離を具体的に規定する生活像は決して無視できないのではあるまいか。なぜなら生活像は「家族再統合」とは何かということは規定していないが、その親子がどのような「家族再統合」を目指すのかということを規定するからである。

その際、退所後の生活の「場」を決定する判断を大きく左右するのが「家庭復帰の可能性」である。むろん、「家族再統合」がそれぞれの親子にとって最適な多様な形態をとるように、子どもの退所後の生活像もまた多様な形態をとり得るが、まずは「家庭復帰の可能性」の有無をめぐって、家庭復帰かそれ以外かの判断が、それらの多様な「場」に帰着する前提となろう。ある親子について、FSW がどのような「家族再統合」の達成を目指すかという課題設定をするためには、退所後の具体的な生活像がどのように想定するかを明確



にしなければならない。このため、FSWは「家庭復帰の可能性」を早期に見極めることが求められているといえる。次章では「家庭復帰ケース」と「社会的自立ケース」に対して、FSWがそれぞれどのような判断と業務を行っているかの分析を通じて、FSWが果たしている役割を明らかにしたい。

#### 【文献】

- 伊達直利(2004)「児童養護施設における家庭復帰の現状と家族再統合の取り組み」『世界の児童と母性』57,26-29
- Gubrium,J.F・Holstein,J.A(1990) What Is Family? Mayfield Pub.co(=1997,中河伸俊ほか訳『家族とは何かーその言説と現実』新曜社)
- 原田綾子(2006)「アメリカにおける家族再統合の取り組み」『世界の児童と母性』57,62-64
- 原田綾子(2008)『「虐待大国」アメリカの苦闘：児童虐待防止への取り組みと家族福祉政策』ミネルヴァ書房
- 平田美音(2004)「思春期児童と家族の再統合」『世界の児童と母性』57,38-41
- 池谷和子(2009)『アメリカ児童虐待防止法制度の研究』樹芸書房
- 井戸崇(2004)「児童相談所における家族再統合の取り組みー心理判定員の立場から」『世界の児童と母性』57,30-33
- 犬塚峰子(2004)「家族再統合ー児童相談所の取り組み」『発達』25(100),24-30
- 犬塚峰子(2007)「地域連携システムの可能性と問題点ー児童相談所における家族再統合支援の観点から」『児童青年精神医学とその近接領域』48(3),118-125
- 岩田充宏(2007)「家族再統合のアセスメント尺度の開発に関する探索的研究(2)一時保護所入所児童の家庭環境、親、子どもの要因の傾向と家庭復帰維持率の関連について」『子どもの虐待とネグレクト』9(1),37-45
- 菅野恵・安達祐美・渡部暁恵ほか(2008)「児童養護施設における児童と家族の関係調整に関する質的研究ー施設職員の役割に着目してー」『帝京大学心理学紀要』12,91-105
- 加藤曜子(2004a)「虐待する親へのケアー家族支援・家族再統合プログラムの必要性」『教育と医学』52(10),944-951
- 加藤曜子(2004b)「家族分離と再統合のためのアセスメント」『世界の児童と母性』57,22-25
- 河合直樹・野口啓示(2007)「ペアレント・トレーニングを用いた家族再統合への援助ー効果測定を試み」『子どもの虐待とネグレクト』9(3),373-383
- 桐野由美子(2006)「児童虐待における家族再統合」『児童青年精神医学とその近接領域』47(5),396-399

- 桐野由美子(2013)「親子分離後の家族再統合(家庭復帰)に向けた親支援を考える:アメリカ・国連のパーマネンシー・プランニングを枠組としたシステムを参考に」『子どもの虐待とネグレクト』 15(3),287-294
- 窪田道子(2004)「乳児院における家族再統合の取り組み—実践例を通してみる」『世界の児童と母性』 57,34-37
- Maluccio,A , Warsh,R and Pine,B(1993)Family Reunification:An Overview TOGETHER AGAIN—FAMILY REUNIFICATION IN FOSTER CARE Child Welfare Reague of America Washington,DC,3-20
- 本村真(2001)「今後の日本における里親制度推進の条件—日本の現状とカリフォルニア州における家族再統合サービスとの比較を通して」『人間科学』(琉球大学) 7, 43-72
- 中山正雄編(2008)『ファミリーソーシャルワークと児童福祉の未来—子ども家庭援助と児童福祉の展望』 中央法規
- 野々山久也編著(1992)『家族福祉の視点—多様化するライフスタイルを生きる』ミネルヴァ書房
- 大澤朋子(2008)「「虐待認識」の視点から見た児童虐待対策の課題:普遍的な子育て支援を目指して」『社会福祉』 48,21-33
- 大澤朋子(2012b)『施設退所時のファミリーソーシャルワーカーの業務についてのアンケート調査報告書(2012)』
- 大島剛・菅野道英・小川素子(2006)「一時保護中の被虐待児童と親の面会に関する調査研究—児童心理司(心理判定員)からみた子ども側の判断基準」『神戸親和女子大学大学院研究紀要』(神戸女子大学) 2,1-9
- 才村純(2005)『子ども虐待ソーシャルワーク論』有斐閣
- 才村純・渋谷昌史・柏女霊峰ほか(2005)「虐待対応等に係る児童相談所の業務分析に関する研究 児童相談所における家族再統合援助実施体制のあり方に関する研究要因との相関関係等に関する実証研究」『日本子ども家庭総合研究所紀要』 42,147-175
- 芝野松次郎(2004)「今日的課題 施設ケアとファミリーソーシャルワーク」『社会福祉研究』 90,77-78
- 側垣一也(2004)「再統合後の家族への支援」『世界の児童と母性』 57,54-57
- 菅原哲男(2004)「虐待を被けた子どもと家族の再統合をめぐって—親の願い、子どもの願い、そして…」『世界の児童と母性』 57,50-53
- 鈴木浩之(2007)「子ども虐待」への保護者参加型支援モデルの構築を目指して:児童相談所における家族再統合についての取り組み」『社会福祉学』 48(3),79-93
- 棚瀬一代(2005)「米国における児童虐待と家族再統合の試み」『法律時報』 77(3),91-95
- Thoburn,June(1994)CHILD PLACEMENT : Principles and Practice(=1998 平田美智子・鈴木真理子訳『児童福祉のパーマネンシー—ケースマネジメントの理論と実践』筒井書房)

トムソン,スティーヴン(2005)「児童養護施設における家族再統合：アメリカでの家族再統合の理念と欧米の実践経験や研究に基づく実践原則」『横浜女子短期大学紀要』(横浜女子短期大学 20,9-24

トムソン,スティーヴン(2006)「児童養護施設における家族再統合の実践：ケースの検討」『横浜女子短期大学紀要』(横浜女子短期大学) 21,35-46

上野千鶴子(2009)「家族の臨界—ケアの分配公正をめぐって」牟田和恵編『家族を超える社会学—新たな生の基盤を求めて』新曜社,2-26

若井和子(2005)「乳児虐待の早期発見と社会資源活用：再統合に向けた支援体制の組織化」『川崎医療福祉学会誌』(川崎医療福祉大学) 14(2),287-296

#### 【資料】

厚生労働省(2012b)「家庭支援専門相談員、里親支援専門相談員、心理療法担当職員、個別対応職員、職業指導員及び医療的ケアを担当する職員の配置について」(平成 24 年 4 月 5 日雇児発 0405 第 11 号)

---

<sup>i</sup> 原文は Maluccio 他 (1993) によるが、訳語はトムソン (トムソン 2005;2006) で翻訳引用された日本語訳を用いた。

<sup>ii</sup> 兼務する職種については自由記述をアフターコーディングしたため、主任 CW と CW の区別は回答者の回答に依拠した。また、「統括主任」のように施設の運営にも関わられる職種は「基幹職員」としてカウントした。

### 第3章 家庭支援専門相談員の2つの役割—アンケート調査事例分析から

#### 1. 家庭支援専門相談員の役割を明らかにする意義

前章に引き続き、本章でもアンケート調査の分析を行うが、ここでは児童養護施設の FSW の果たす役割を明らかにしたい。これまでに、第1章では児童養護施設に導入された家庭支援専門相談員制度が、何をどのように支援する専門職であるのか、その援助対象も援助手法も明確にされないまま、とにかく現場の努力に任せて走り出したという制度導入の経緯を述べた。つづく第2章では、アンケート調査結果から、実際には過半数の FSW が CW を兼務しており、そのために労働時間の面でも職業アイデンティティの面でも FSW としての自覚を持ちにくい可能性が示された。前章ではまた FSW が行っている業務についても触れた。それらの業務を行う上で、FSW は何らかの専門的価値を前提にしていると仮定することはできるが、しかし果たしてそれが FSW という専門職固有の価値であるのかどうかを実証することは困難である。FSW が誰をどのように支援する専門職なのかということがあいまいであり、かつ FSW としてのアイデンティティ形成が困難である以上、FSW としてどのような価値に基づいて援助を行うかということは、むしろ FSW の個人的な判断に委ねられる可能性がある。また兼業 FSW の多さは、職業アイデンティティのみならず、それぞれの専門的な業務であるケアワークとソーシャルワークを分かつて難しく一体化させ、あるいは両者を延長線上で考えることにつながるかもしれない。したがって、FSW が何を FSW という職種に付随する価値や専門性だと認識しているかということは、実際の業務や FSW の考えから判断していかざるを得ない。そのこと自体は問題ではあるが、FSW という職種の専門的価値を明らかにすることは本研究の課題ではない。

ここでは、FSW が実際にどのような援助を行っているかということに着目する。本研究の目的は FSW が業務を通じて入所児童の退所に際してどのような「家族再統合」を達成しようとしているのかを、実態調査を通じて明らかにし、その意味を考察することであるが、FSW の援助内容を明らかにすることによって、FSW が目指す「家族再統合」概念を明確にすることに接近できると考えるからである。

そこで、まず FSW がどのような判断のもとにどのような業務を行っているのか具体的に明らかにしたうえで、FSW がどのような役割を果たしているかを分析する。本章で扱うのは、アンケート調査のうち、回答者が取り上げた「家庭復帰ケース」および「社会的自立ケース」において、FSW として行った過去の事例における退所の判断と実践した支援内容についての自由記述である。自由記述により得られたデータは、次節で詳しく述べる分析視角に沿っていくつかのグループに分け、そのグループごとに内容を切片化し、KJ 法により分析した。次節より、FSW が「家庭復帰の可能性」の有無を判断した根拠、および設定したゴールに向けて実際に行った業務の分析結果を記述し、そこから浮かび上がる FSW の2つの役割について述べていく。

## 2. 分析視角

### (1) 事例調査の特徴

まず事例調査の特徴を記述しておく。調査全体の概要は前章で述べた通りである。アンケート調査では、FSW が過去に関わり、すでに終結しているケースから、「家庭復帰ケース」と「社会的自立ケース」をそれぞれひとつずつ取り上げてもらった。ケースの概要を把握するために、子どもの入退所時年齢と、入所中の子どもの様子や終結までのプロセス、子どもや家族の変化および支援内容等、記入できる範囲での概要説明を求めた。その上で、それぞれのケースについて、FSW として果たした役割や行った援助、および「家庭復帰の可能性」の有無を判断した決定的な要素を自由記述でたずねた。さらに、「社会的自立ケース」においては、家庭復帰しない子どもに対して家族との関係の持ち方について行った援助も同じく自由記述でたずねた。対象を終結したケースに限定したのは以下の理由による。第一に、現在進行中のケースでは、最終的にどのような退所となるのかがまだ定まらず、FSW の「家庭復帰の可能性」の判断も実践も流動的にならざるを得ない。第二に、入所していた時期を限定せず、すでに社会的養護が終結しているケースを取り上げる方が、現在進行中のケースを取り上げることに比べ、個人情報の特定がされにくいと考えられる。そのため回答者にとっても現在進行中のケースより記述できる範囲が広がると想定した。

回収した 132 票の調査票のうち、「家庭復帰ケース」について記載があったのは 90 票、「社会的自立ケース」について記載があったのは 60 票であった(表 3-1)。「家庭復帰ケース」の入所時年齢平均は 6.07 歳、退所時年齢平均は 9.46 歳、平均入所期間は 41.48 ヶ月であった<sup>ii</sup>。「社会的自立ケース」の入所時年齢平均は 9.57 歳、退所時年齢平均は 17.84 歳、平均入所期間は 100.68 ヶ月であった<sup>iii</sup>。「社会的自立ケース」の大多数は高校卒業時の自立退所である。「家庭復帰ケース」と比較して入所時高年齢の児童が多いこと、平均入所期間が 2 倍以上と長期に養護されていることが特徴である。

また、「家庭復帰ケース」90 ケースのうち、専業 FSW による回答は 23 ケース、兼業 FSW による回答は 67 ケースであった。「社会的自立ケース」60 ケースのうち、専業 FSW による回答は 16 ケース、兼業 FSW による回答は 42 ケースであった<sup>iv</sup>。両ケースにおける専業 FSW と兼業 FSW の割合は、ケースについて記述していない調査票も含めた全体の調査結果(専業 FSW27%、兼業 FSW72%)と比較しても、概ね同様の割合である。

「家庭復帰ケース」90 ケースのうち、退所時の年齢が 12 歳以下だったものは 67 ケース、13 歳以上だったものは 23 ケースであった。また「社会的自立ケース」で入退所時年齢の記載があった 57 ケースのうち、入所時年齢が 12 歳以下だった長期養護ケースは 41 ケース、13 歳以上だった短期養護ケースが 16 ケースであった。

表3-1 分析事例の概要						
	データ数			年齢等		
	全データ数	専業FSW	入退所時 12歳以下	入所時年齢 平均(歳)	退所時年齢 平均(歳)	平均入所期 間(月)
		兼業FSW	入退所時 13歳以上			
家庭復帰ケース	90	23	67	6.07	9.46	41.48
		67	23			
社会的自立ケース	60	16	41	9.57	17.84	100.68
		42	16			

## (2) 分析視角

分析にあたり、FSW が実際に行った業務は、回答者の勤務形態によって専業群と兼業群の 2 群に分類した。また、実際に行った業務および「家庭復帰の可能性」の判断根拠については、「家庭復帰ケース」の退所時年齢および「社会的自立ケース」の入所時年齢によって、それぞれ 12 歳以下と 13 歳以上の 2 群に分類した。

回答者の勤務形態によって分類したのは、前章でも FSW の業務内容が勤務形態によって異なるのを確認したように、実際のケースでも行った業務にどのような違いがあるかを確認するためである。また、同じく前章で FSW の家族関係の再構築にあたっての考えを勤務形態別に分析したが、このような考え方の差異は、実際に担われている業務内容と相互に規定し合うと考えられる。そこで、家族関係の再構築についての考えを規定し、かつその考えによって規定されているであろう支援内容を、勤務形態別に分析することにした。

入退所時年齢によって分類したのは、以下の理由による。子どもの年齢に基づく発達段階によって、家庭復帰や自立のための目標や、それまでに達成しなければならない課題が異なることが予想される。また入所期間の長さによっても、支援目標やどのような退所を目指すかが異なるであろう。そのため入退所時年齢は FSW の業務内容や判断の根拠に影響を与えると考えた。年齢区分を 12 歳以下と 13 歳以上としたのは次のような理由からである。まず「家庭復帰ケース」においては、退所後の家庭生活において、子どもがどのような存在であるかを想定した。つまり、子どもが全面的に保護者の世話を受けなければならない存在なのか、あるいはほぼ身の回りの自立を終え、場合によっては保護者の手助けまでもできる存在なのかという境界が、およそ小学校卒業程度であろうと仮定したことによる。また「社会的自立ケース」においては、入所時点でどのような退所を想定し得たかということ想定した。具体的には、入所時点で社会的自立を視野に入れていたかどうかということである。入所時年齢が低いケースであれば、明確に保護者のいないケースを除いてはまずは「家庭復帰の可能性」が模索されたはずである。しかしある程度高年齢になってからの入所であれば、家庭復帰と社会的自立の可能性は並列か、場合によっては初めから社

会的自立が目標となるであろう。そうした初期段階での見極めが、先ほどと同じく概ね小学校卒業程度を境になされると仮定した。

なお、分析に用いた全データは巻末に収録した（資料 3～資料 15）。

### 3. 家庭支援専門相談員の判断

まず、FSW があるケースについて「家庭復帰の可能性」の有無を見極め、「家庭復帰」あるいは「社会的自立」というゴール設定を判断した根拠となった事柄を、それぞれのゴールグループごとに、あらかじめ子どもの入退所時年齢によって2つのグループに分けて分析した。

#### （1）「家庭復帰ケース」の判断の根拠

退所時の子どもの年齢が 12 歳以下だった「家庭復帰ケース」において、FSW が家庭復帰の判断を行った根拠からは、次の 5 つのカテゴリーと 20 の概念が抽出された。すなわち、『親子・きょうだい関係の改善』『家族メンバー間の関係改善』『親子関係悪化』『親の心身の状況安定』『子どもの成長』の 5 概念から成る第 1 カテゴリー【当事者の変化】、『子どもの希望』『親の希望』『親子・家族の希望』『親の熱心さ』の 4 概念から成る第 2 カテゴリー【家庭復帰への意欲】、『復帰家庭の変形』『生活環境が整ったこと』『復帰家庭の安全確保』『復帰後の家庭を支える地域資源の存在』の 4 概念から成る第 3 カテゴリー【復帰家庭の安定】、『FSW と親との信頼』『順調なプロセス』『児相との連携』『今しかないという判断』の 4 概念から成る第 4 カテゴリー【FSW の管理下での判断】、『施設外の専門家の判断』『強引な引き取り』『判断への迷い』の 3 概念から成る第 5 カテゴリー【FSW の専門的な判断によらない決定】の 5 カテゴリーである（図 3-1・資料 3）。

一方退所時の年齢が 13 歳以上だった「家庭復帰ケース」において、FSW が家庭復帰の判断を行った根拠からは、次の 5 つのカテゴリーと 16 の概念が抽出された。『子どもの希望』『親子の希望』『家族の意向』の 3 概念から成る第 1 カテゴリー【家庭復帰への意欲】、『親の心身の安定』『子どもの成長』の 2 概念から成る第 2 カテゴリー【家庭復帰を可能にする変化】、『生活基盤の安定』『復帰家庭の変形』『再統合を困難にしていたメンバーの不在』『生活を支える地域体制』の 4 概念から成る第 3 カテゴリー【復帰家庭の再形成】、『児相との連携』『良いタイミング』『地道なプロセス』『FSW の希望』の 4 概念から成る第 4 カテゴリー【FSW の管理下での判断】、『児相判断』『強引な引き取り』『他の選択肢がない』の 3 概念から成る第 5 カテゴリー【FSW の専門的な判断によらない決定】の 5 カテゴリーである（図 3-2・資料 4）。

両者は 3 つのカテゴリー名で一致し、残るカテゴリー名でも類似が見られる。しかし、わずかずつニュアンスの違いがあり、とくに一致していない部分にそれぞれの特徴が見られる。

例えば低年齢群では【家庭復帰への意欲】に加えて、「子どもが母と会うことに緊張しなくなった」等の『親子・きょうだい関係の改善』、「母の再婚により、母自身の精神の安定」等の『親の心身の状況安定』、「母と養父と祖母の関係が良くなった事で、子どもが家に帰りたいと思う様になった」等の『家族メンバー間の関係改善』等の概念を含む【当事者の変化】や、「親の経済的自立」等の『生活環境が整ったこと』、「外泊が安定的にできていた事」等の『復帰家庭の安全確保』、「地域のセーフティネットの形成」等の『復帰後の家庭を支える地域資源の存在』、「母のところではなく、祖母宅（母方の祖母で）であった」「継父と子どもたちの関係構築」等の『復帰家庭の変形』等の概念を含む【復帰家庭の安定】が根拠になっている。子どもが小さいからこそ、親や子どもの希望や意欲に加え、当事者、とくに親がどれくらい変化したか、すなわちケアする大人になれたかどうかが問われていると考えられる。また、低年齢であるがゆえに復帰家庭が安定していることもとりわけ重視されているが、ここで言及されている復帰家庭とは、構成員の面でも、居住する場所の面でも、必ずしも入所前と同じ家族メンバーや住宅ではないことに注目したい。家族メンバーについては、新しい継父母が子どもの存在を受け入れていたり、親子の生活をサポートする祖父母の存在が期待されている。また居住の面でも、元の家に戻るばかりではなく、祖父母宅への復帰や、祖父母が地理的に近くに暮らしていることをもあらたな「家庭」とみなし、「家庭復帰」させている。

一方で高年齢群では、当事者の変化について、『親の心身の安定』は低年齢群と共通ながら、「親をささえながら、自分の生活が出来る年令になった」等の『子どもの成長』が含まれるなど、親の変化だけではなく子どもの変化に着目していることが特徴的である。たとえば親の養育力が十分に涵養されなかったとしても、すでに子ども自身が身の回りのケアを必要とする年齢ではないために、そのことが問題にならなくなると考えられよう。また、復帰家庭が家族構成員および居住地の面で入所前の家庭とは物理的に変形していることは低年齢群と共通していた。その際、低年齢群では主に新しい家族メンバーを迎えたり、サポートできる親族への期待が変形の中心であったのに対し、高年齢群ではこれに加え、『再統合を困難にしていたメンバーの不在』による復帰家庭の変形にも着目されている。このことから、子どもの家庭復帰にあたって、家庭がどのように変化することが望ましいのかということも、子どもの年齢によって違いがあることが示された。

家庭復帰に向けたプロセスが順当に進んだことを示す【FSWの管理下での判断】が両群で抽出されたが、ここでもニュアンスの違いが見られた。低年齢群では『順調なプロセス』と入所から一貫して復帰に至るプロセスが進行したことを示したのに対し、高年齢群では『地道なプロセス』と復帰に至るまでには必ずしも順調とばかりは言えない長いプロセスを経たこともうかがわせる記述があった。両群のプロセス進行における相違点はスピード感にあるようである。また、高年齢群からは『FSWの希望』という特徴的な概念が抽出された。これは家庭復帰できるという必要条件を満たしたという判断というより、家庭復帰して親子の生活を送るべきというFSWの個人的な価値が示されたものと言えよう。こ



のような個人的価値に基づく判断は、低年齢であれば再虐待のおそれがある危険を伴う。だがここでは高年齢群のケースであったこと、また「そのことで、将来家族を持つであろう本人が誤った家族観を培うことのないようにしたいと思ったから」という記述にみられるように、必ずしも復帰直後の親子の生活がゴールに設定されているのではなく、遠い将来を見据えての決断であったことを指摘しておきたい。

プロセスの進行が FSW の一定の管理下で進んだことが示された一方で、その対極にある【FSW の専門的な判断によらない決定】もまた両群で見られた。このカテゴリーには、児童相談所や医療機関などの児童養護施設以外の機関の専門家による家庭復帰判断がなされたものがある一方で、親の『強引な引き取り』、家庭復帰以外の方法がなく、消極的に選択された結果まで含まれている。一般に家庭復帰ケースは、児童養護施設からの退所の在り方としては成功事例であると考えられやすいが、現場の感覚としては必ずしも支援の成功事例であるとは言えないことが示された。

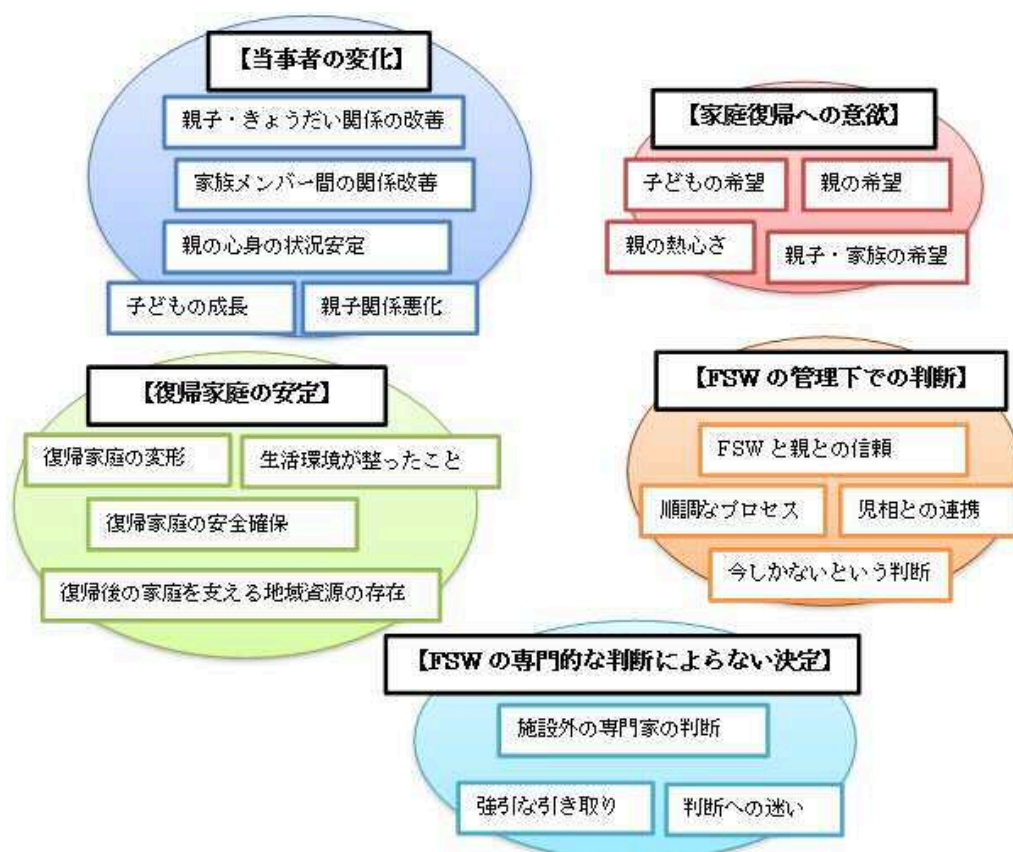


図 3-1 FSW の判断根拠（家庭復帰ケース／退所時 12 歳以下）

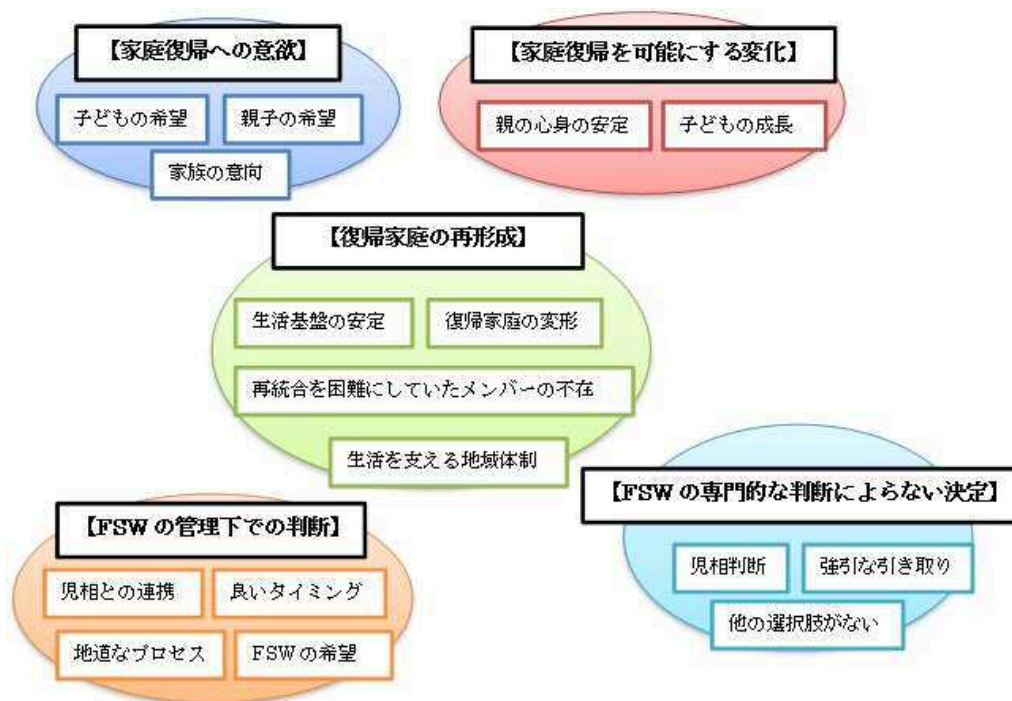


図 3-2 FSW の判断根拠（家庭復帰ケース／退所時 13 歳以上）

## （２）「社会的自立ケース」の判断の根拠

入所時の子どもの年齢が 12 歳以下だった「社会的自立ケース」において、FSW が社会的自立の判断をおこなった根拠からは 5 つのカテゴリーと 14 の概念が抽出された。すなわち、『家庭の不在』『生家の変化』『親の子ども拒否』『生活基盤の不安定』『養育不可能な親』『子どもの安全が守れない』の 6 概念から成る第 1 カテゴリー【帰れる家庭の不在】、『子どもへの無関心』『虐待の否認』『子の信頼への親の裏切り』の 3 概念から成る第 2 カテゴリー【変わらない親】、『子どもの希望』『復帰課題の不達成』『子どもの自立支援優先』の 3 概念から成る第 3 カテゴリー【子どもの自立支援】、『親子関係の整理』の 1 概念から成る第 4 カテゴリー【「家族再統合」の達成】、『FSW の迷い』の 1 概念から成る第 5 カテゴリー【FSW の迷い】の 5 カテゴリーである（図 3-3・資料 5）。

一方入所時の年齢が 13 歳以上だった比較的短期のケースからは 3 つのカテゴリーと 8 の概念を抽出した。『家庭の不在』『親の養育能力の不足』『再虐待のおそれ』『生活基盤の不安定』『親の子ども拒否』の 5 概念から成る第 1 カテゴリー【帰れる家庭の不在】、『子どもの希望』『子どもの自立優先』の 2 概念から成る第 2 カテゴリー【子どもの自立支援優先】、『児相判断』の 1 概念から成る第 3 カテゴリー【他の専門機関の判断】の 3 カテゴリーである（図 3-4・資料 6）。

両者は 2 つのカテゴリー名で一致した。入所時年齢の高年齢群では主に【帰れる家庭の不在】【子どもの自立支援優先】が自立させる根拠になっているのに対し、低年齢群ではそ

れに加えて「母が本児に関心がなかったこと」等の『子どもへの無関心』、「子どもの信頼に母親が裏切ることが多く、困難になった」等の『子の信頼への親の裏切り』、『虐待の否認』等の概念を含む【変わらない親】が抽出された。両群の違いは、養育期間の長さによるものと考えられる。すなわち、長い養護期間に家庭復帰への望みを持って援助を行ったものの、親の引き取りに肯定的な変化を引き起こせず、結果として復帰できるところまで至らなかったということであろう。本調査の分析対象となった長期ケースのほとんどは、平均在所期間の長さから推測して家庭支援専門相談員制度導入以前の入所ケースである。彼らの入所時点では今日ほど明確に短期での退所が目指されていたわけではないため<sup>vi</sup>、乳児院から措置変更し、高校卒業までの16年あまりを児童養護施設で養育されていたケースもある。もちろん粘り強い関わりが実を結んで家庭復帰に至ることはあろう。しかし長期の養育期間の間には、子どもは親の約束不履行や、引き取りがありそうで実現しない場면을繰り返し経験することになる可能性が高い。自らの努力が報われない経験を繰り返せば、子どもは努力することへの否定的な学習をすることにもなる。ここでは長期ケースほどFSWが親の変化に期待する半面、それに応えてもらえなかったことが、【変わらない親】として判断の根拠になっていたということを指摘しておきたい。

なお、いずれの年齢群でも【FSWの迷い】【他の専門機関の判断】等のFSWの消極的な判断が見られた。高年齢群では『児相判断』という、児童養護施設としては家庭復帰の可能性を検討していたが児童相談所の許可を得られなかったことを推測させる記述があった。また低年齢群では、社会的自立に至った後でも、その判断が本当に正しかったのかどうか、FSWが苦悩する様子が見られる。いずれの場合もFSWの専門性に基づいた判断ではないことは共通しているが、ここでもまた、低年齢群では長期ケースであるがゆえに、途中でゴール設定や支援目標の変更を余儀なくされ、判断根拠に「揺れ」が生じたと読み取れる。

ところが、長期ケースにおける社会的自立が家庭復帰の失敗とばかりは言えないカテゴリーも抽出されていた。【「家族再統合」の達成】がそれである。ここでは子どもだけではなく、家族も含め相互に向き合い、何ができて何ができないのかという課題の整理が済んだこと、それゆえにある意味で「家族再統合」が果たせたというFSWの判断に基づいて、あえて社会的自立が選ばれている。以上から、長期養護ではFSW自身にも判断に揺れが生じ、家庭復帰から社会的自立へとゴール変更せざるを得ないこともあるが、時間をかけて親子の関係を修復し、同居を伴わない「家族再統合」の可能性もあることが示されたといえよう。

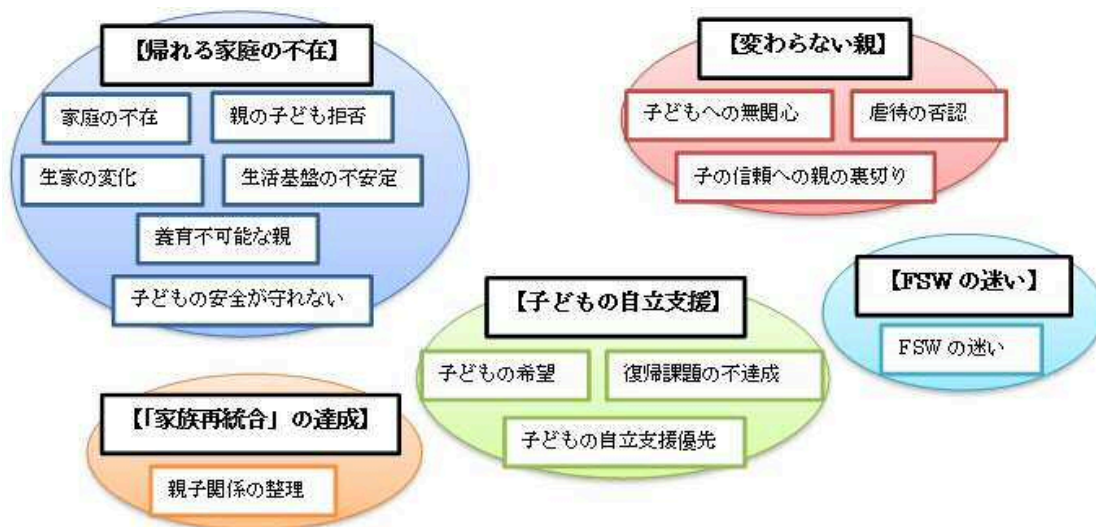


図 3-3 FSW の判断根拠（社会的自立ケース／入所時 12 歳以下）



図 3-4 FSW の判断根拠（社会的自立ケース／入所時 13 歳以上）

#### 4. 家庭支援専門相談員の業務

次に、前述の根拠に基づいて判断された「家庭復帰」あるいは「社会的自立」というゴールに向かって、FSW が実際にどのような業務を行っているのか分析した。その際、ケースの入退所時の子どもの年齢区分、および FSW が専業か兼業かという勤務形態によって、それぞれ 2 群に分けて分析を行った。

##### （1）勤務形態の違いに見る「家庭復帰ケース」の家庭支援専門相談員の業務

まず勤務形態による分類の結果から見ると、「家庭復帰ケース」で専業 FSW が行った業務からは 3 つのカテゴリーと 13 の概念が抽出された。『子どもの状況説明』『子育てのアドバイス』『親との信頼関係構築』『家庭状況の把握』『親子の生活再建支援』『親の味方役割』『地域でのサポート体制構築』『退所以降の関わり』の 8 概念から成る第 1 カテゴリー【親

を支えることで家庭復帰を目指す関わり】、『子どもの生活支援』『子どもの心に寄り添う支援』の 2 概念から成る第 2 カテゴリー【子どもへの支援】、『家庭復帰のプロセス』『関係専門機関との連携』『つなぎの役割』の 3 概念から成る第 3 カテゴリー【多様なアクターをつなぎながら家庭復帰へのプロセスを組み立てる支援】がそれである（図 3-5・資料 7）。

一方兼業 FSW が行った業務からは 5 つのカテゴリーと 22 の概念が抽出された。すなわち『子育てのアドバイス』『子どもの様子を知らせる関わり』『子どもの気持ちを伝える関わり』『親子の生活再建支援』『家庭復帰後のサポート体制の構築』『アフターケア』『親との信頼関係の構築』『家庭の状況把握』『親との話し合い』『新しい家族形成の準備』の 10 概念から成る第 1 カテゴリー【親への働きかけで家庭復帰を目指す関わり】、『保護者間の関係調整』『親子の関係調整』『児相と家族とのつなぎ役』の 3 概念から成る第 2 カテゴリー【拗れた人間関係を正す関わり】、『子どもの生活力をつけさせる支援』『子ども理解』『子どもの意向確認』の 3 概念から成る第 3 カテゴリー【子どもへの支援】、『関係専門機関との連携』『家庭復帰に向けたプロセス』『施設内での役割分担』の 3 概念から成る第 4 カテゴリー【多様なアクターをつなぎながら家庭復帰へのプロセスを組み立てる支援】、『家庭復帰に反対する関わり』『援助困難』『援助不能』の 3 概念から成る第 5 カテゴリー【FSW の関与機会不足】の 5 カテゴリーである（図 3-6・資料 8）。

両者を比較すると、2 つのカテゴリー名は一致し、1 つのカテゴリーが類似していた。しかしカテゴリーを構成する概念、具体的なデータに降りると、ニュアンスが異なっている。どちらの勤務形態の FSW も、家庭復帰を図るために親への働きかけを行い、その生活再建を図っているが、専業 FSW ほど上記の業務に特化しているように読み取れるのである。専業 FSW は子どもが帰る家庭の状況を把握し、地域の資源や関係機関等多様なアクターをつなぎながら、子どもが帰れる家庭を再建するプロセスを明確にし、その計画に沿って支援するという、ソーシャルワークの問題解決に焦点を当てたアプローチをとっている。一方で兼業 FSW もこのような業務を行っている。しかしそれよりもむしろ、「父親と母親の思いの違いを双方から伺い、整理する」等の『保護者間の関係調整』、「両親に捨てられた感をいなく本児に、両親との関係修復、家庭引き取りに至るまでの関係改善にかかる支援を児相と連携して行った」等の『親子の関係調整』で構成された【拗れた人間関係を正す役割】や、第 1 カテゴリーの構成概念である『子どもの気持ちを伝える関わり』、『家庭状況の把握』に留まらない『親との話し合い』に見られたような、より感情に訴えかける関わりを行っていることが特徴的であった。兼業 FSW の多くは CW を兼務していることから<sup>vi</sup>、日常的な子どものケアを通じて子どもの気持ちに触れる機会が多い。それゆえにいつそう子どもに対して親身になっているとも考えられる。また子どもの担当 CW として保護者に接する機会も多く、親子の間の橋渡しをすることを自らの業務と考えているようである。ここでは、とくに兼業 FSW が生活基盤の安定化や地域のサポートネットワーク作りという、家族生活を支える外的要因以上に、親子の情とでもいうべき、目には見えないが家族生活を支える内的要因を重視している点を指摘しておきたい。



専業群と兼業群でもっとも差が表れたのは、【FSW の関与機会の不足】というネガティブなカテゴリーが兼業群にのみ抽出された点である。『家庭復帰に反対する関わり』は、保護者の強い希望で引き取りが決まり、不安を感じた施設が反対意見を出したものの、結局家庭復帰に至った事例で行われた業務であった。『援助不能』は、CW がケースに深く関与しているために FSW の役割がなかったり、そもそも児童養護施設職員が関与することを許されず、FSW としてなにも援助をする機会が得られなかった事例から抽出されている。ここでも、FSW の判断と同様に、家庭復帰という一見退所の成功事例であっても、現場感覚としては必ずしも成功とはいえないことが示された。さらにそのことが FSW の勤務形態によって差異が見られ、兼業 FSW の方が FSW としての専門性を発揮できず、判断や支援の意図とは異なったゴールが導かれている点に注目したい。加えて、兼業 FSW は、ケースへの関与をめぐる施設内部での他の職員との役割分担を行っている一方で、そのために家庭復帰ケース支援は明確に CW の分担であり、自らは役割を持たないという場合もあった。このように早期家庭復帰等を目的として配置されたはずの FSW が、施設内で必ずしもその役割を担っていない現状も垣間見えるのである。

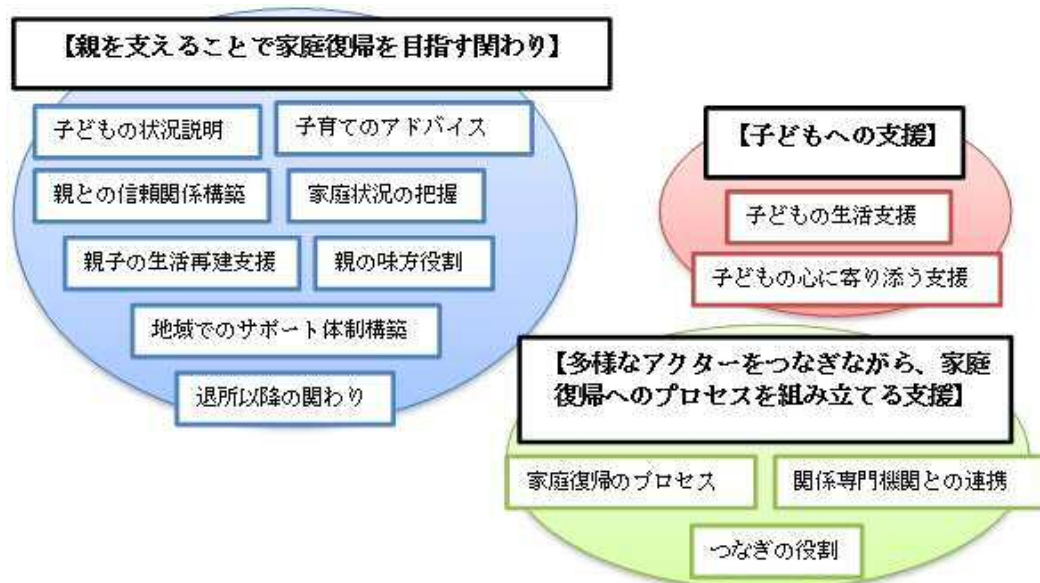


図 3-5 勤務形態別家庭復帰ケースの FSW の業務（専業 FSW）

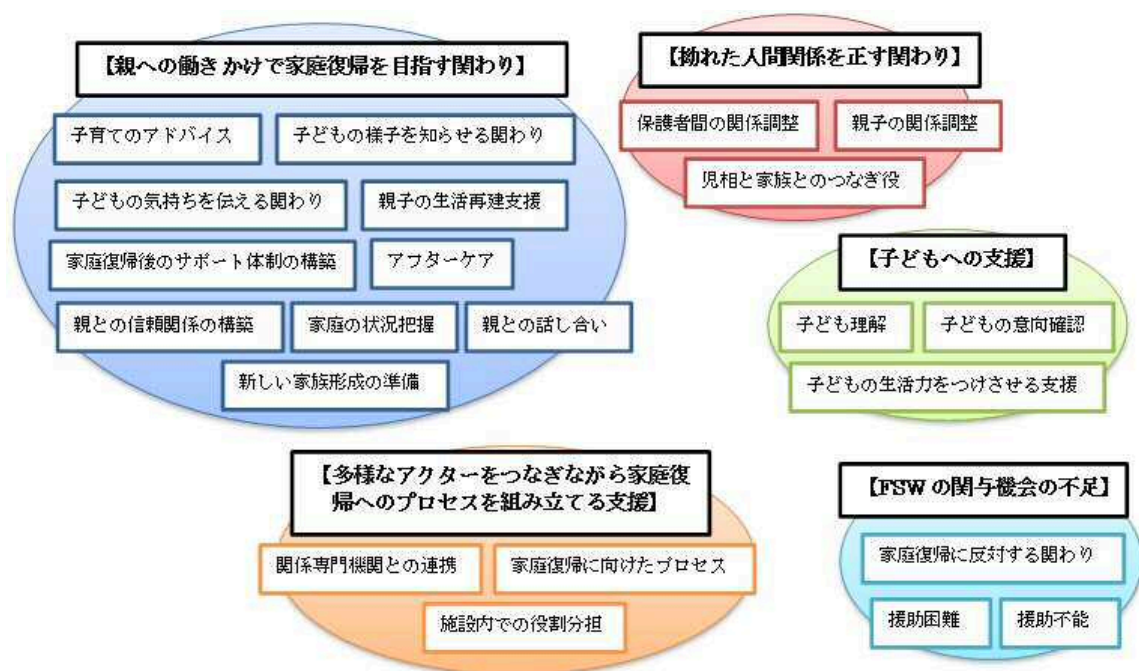


図 3-6 勤務形態別家庭復帰ケースの FSW の業務（兼業 FSW）

（２）退所時の子どもの年齢の違いに見る「家庭復帰ケース」の家庭支援専門相談員の業務

次に退所時の子どもの年齢による違いから FSW の行った業務を分析した。退所時の年齢が 12 歳以下のケースからは、5 つのカテゴリーと 18 の概念が抽出された。すなわち、『親の心に寄り添い信頼を得る関わり』『親の味方になる支援』の 2 概念から成る第 1 カテゴリー【親や家族の信頼を得る支援】、『生活基盤を安定させるための支援』『子育て方法に関する助言・指導』『家庭復帰後の親子の生活を支える体制づくり』『子どもに生活リズムを取り戻させる関わり』の 4 概念から成る第 2 カテゴリー【生活基盤を安定させるための支援】、『子どもの様子を知らせる関わり』『家庭状況の把握』『親との話し合い』『家庭復帰を目指したステップ』『新しい家族形成の準備』『関係機関との連携・調整』『子どもの意向確認』『施設内での役割分担』の 8 概念から成る第 3 カテゴリー【家庭復帰に向けたソーシャルワークプロセス】、『家族と児相とのつなぎ役』『家族メンバー間の仲介役割』『親子関係の仲介』の 3 概念から成る第 4 カテゴリー【家庭復帰を困難にする要因の除去】、『FSW 業務の不在』の 1 概念から成る第 5 カテゴリー【FSW 業務の不在】の 5 カテゴリーである（図 3-7・資料 9）。

一方で退所時の年齢が 13 歳以上のケースからは 4 つのカテゴリーと 18 の概念が抽出された。『親に子どもの様子を知らせる関わり』『親に子どもの気持ちを知らせる関わり』『子どもの意向確認』の 3 概念から成る第 1 カテゴリー【家庭復帰への方向づけ】、『子育てに

関する助言・指導』『親の生活基盤を安定させる関わり』『子どもに生活力を身に付けさせる支援』『家庭復帰後の親子の生活を支える体制づくり』『親子関係改善のための関わり』の 5 概念から成る第 2 カテゴリー【家庭復帰を可能にする生活づくりへの支援】、『家庭状況の把握』『親との信頼関係構築』『親との話し合い』『新しい家族形成の準備』『家庭復帰に向けたステップ』『関係機関との連携』『施設内での役割分担』『児童と親との仲介』の 8 概念から成る第 3 カテゴリー【家庭復帰に向けたソーシャルワークプロセス進行】、『援助困難』『家庭復帰への反対』の 2 概念から【援助困難】がそれである（図 3-8・資料 10）。

両者を比較すると、1 つのカテゴリー名でほぼ一致したほか、類似点も見られる。しかし構成概念をよく検討すると、退所時年齢が低年齢群の方がより親への働きかけを重視していることが読み取れる。すなわち『親の味方になる支援』『親の心に寄り添い信頼を得る支援』を通して『子育て方法に関する助言・指導』が受け入れられるような関係を築き、加えて【生活基盤を安定させるための支援】によって生活再建にも取り組んでいく。子どもへの働きかけは専らその子の特性を理解し生活リズムを取り戻させること、親子の関係が切れてしまわないように維持することに重点が置かれている。他方で、高年齢群では『親子関係改善のための関わり』によって親子関係に生じている問題を取り除き、『子どもに（年齢相応の）生活力を身に付けさせる支援』が行われている。このことから、子どもが小さいうちは家庭復帰後の子どもは専ら親の世話を受ける存在であり、そのために家庭の生活基盤の安定化や子育ての伝達が重要であると FSW が認識していることが推測できる。ところがある程度の年齢になると、子どもも一方的に親の世話を受けるばかりの存在ではなくなり、子ども自身が身の回りのことはできる上に、場合によっては親の手伝いもできるようになるため、子どもの生活力向上が重要であると考えられているようである。

いずれの群でも【FSW 業務の不在】【援助困難】等の再統合支援を専門とする FSW の専門性を否定するようなネガティブなカテゴリーが抽出された。低年齢群では、FSW がケースの担当ではないか、ケースに関わるチャンスを与えられないものであった。一方高年齢群では、FSW としてケースに関わりを持とうと努めたものの、困難や無力感を感じている。このような差が退所時の年齢差によるものであるかどうか確証はないが、子どもの年齢が上がるほど、担当 CW とは別に FSW として関わる部分が生じてくるのかもしれない。

これらのことから、子どもの年齢の低いうちは、FSW は親の生活改善と育児力の向上を支援課題として援助業務を行っているのに対し、子どもの年齢が上がるにつれて、親子関係の改善や子ども自身の生活力向上へと支援課題がシフトしていることが明らかになった。また、とくに子どもの年齢が低いうちは、子育ての困難を共有するなど親に対して共感的に寄り添うことで、信頼関係の構築に力を入れている。退所時の子どもの年齢が低ければ、たとえ家庭復帰できても子育てに困難が続くことが予想されるため、児童養護施設が親の味方であるとの印象を残すことで、いつでも援助を求められる余地を残そうとしているようである。

ただし、子どもの年齢に関わらず、FSW の専門的な援助が及ばない事例が存在している



こともうかがえた。

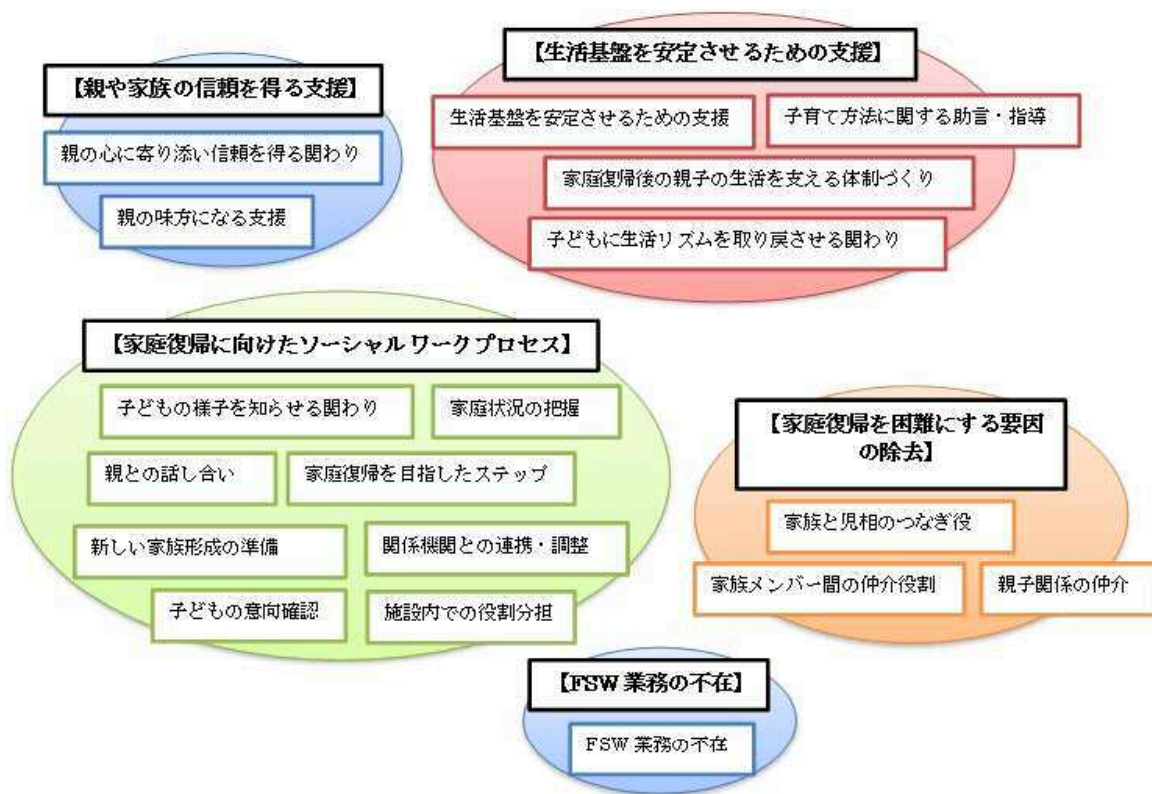


図 3-7 子どもの年齢別家庭復帰ケースの FSW の業務（退所時 12 歳以下）

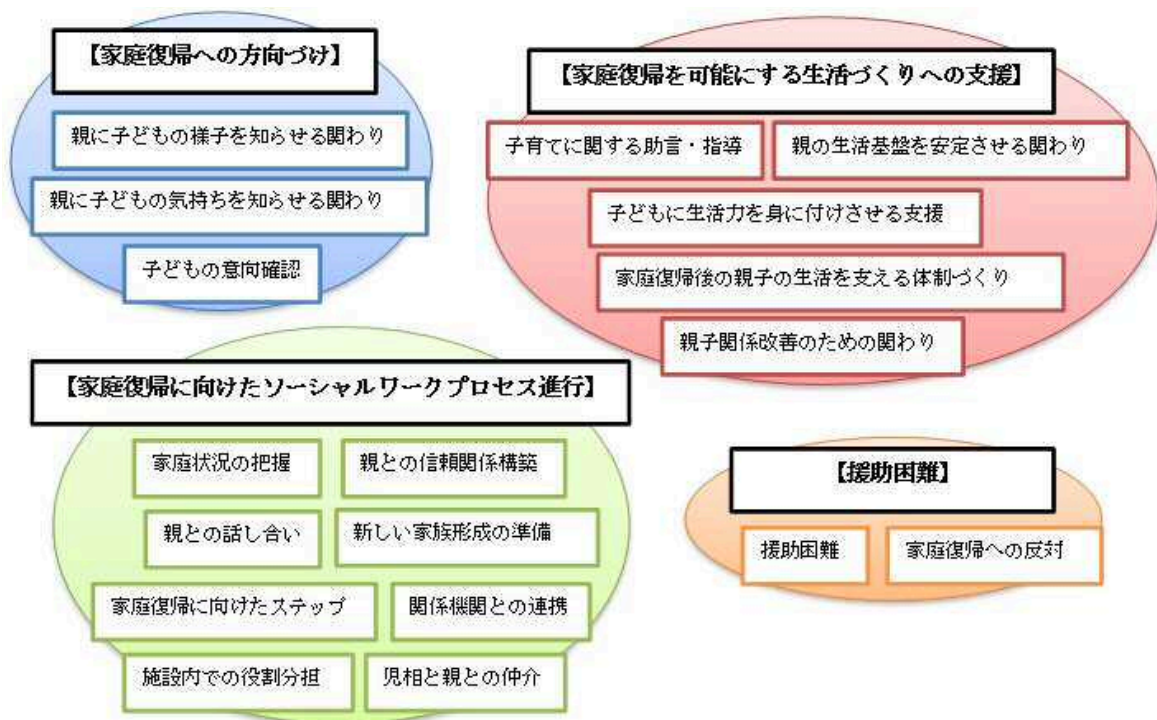


図 3-8 子どもの年齢別家庭復帰ケースの FSW の業務（退所時 13 歳以上）

### （3）勤務形態の違いに見る「社会的自立ケース」の家庭支援専門相談員の業務

次に、「社会的自立ケース」で専業 FSW が行った業務からは 5 つのカテゴリーと 10 の概念が抽出された。すなわち『親子の今後に関する協議』『親子・家族間の調整』『親役割の付与』『兄弟へのフォロー』の 4 概念から成る第 1 カテゴリー【家族関係の在り方への支援】、『子どもの心のケア』『自立を見据えた段取り』の 2 概念から成る第 2 カテゴリー【子どもの自立生活への支援】、『関係機関との連携』『職員間の調整』の 2 概念から成る第 3 カテゴリー【調整役割】、『親の状況把握』の 1 概念から成る第 4 カテゴリー【家族理解】、『援助困難』の 1 概念から成る第 5 カテゴリー【援助困難】の 5 カテゴリーである（図 3-9・資料 11）。

一方で兼業 FSW が行った業務からは 6 つのカテゴリーと 16 の概念を抽出した。『自立に必要な力をつけさせる支援』『自立生活を支える準備』『アフターケア』の 3 概念から成る第 1 カテゴリー【子どもの自立生活を直接支える支援】、『親役割の付与』『親をあきらめさせる援助』『親子間の調整』『親の関心をつなぎとめる関わり』の 4 概念から成る第 2 カテゴリー【親子関係を作り直す援助】、『親族との連携』の 1 概念から成る第 3 カテゴリー【家族を開く関わり】、『親の状況把握』『進路に関する関係者協議』『子どもの意向確認』の 3 概念から成る第 4 カテゴリー【自立の確認】、『子どものメンタルケアの手配』『見相との連携』の 2 概念から成る第 5 カテゴリー【調整役割】、『できることはすべて』『FSW としての業務の不在』『援助困難』の 3 概念から成る第 6 カテゴリー【FSW 業務範囲の未確立】

の6カテゴリーがそれである（図3-10・資料12）。

両者は1つのカテゴリー名で一致し、2つのカテゴリー名で類似していた。しかしここでもニュアンスの違いが見られた。例えば子どもの退所後の自立生活のためにどのような支援を行うかということをめぐる、専門FSWは「自立に際しての後見人との話し合い」「資格取得に向け受験対策を行った」等の『自立を見据えた段取り』のように、あくまでも自立までの段取りに焦点をあてている。一方の兼業FSWは、日常の具体的な生活スキルを身につけさせること、子どもが示す多様な症状の緩和に努めることを行い、退所した後も電話や訪問を行って、まるで実の親であるかのように細やかに接している。言い換えれば、専門FSWが子どもの自立に向けて必要な社会的資源等をマネジメントしているのに対し、兼業FSWはそれに加えて細々と子どもの世話を焼くという業務を行っている姿が浮かび上がってくるのである。

また家族関係のあり方をめぐっても、専門FSWと兼業FSWの間には行っている業務に現れる差異がある。専門FSWは『親子の今後に関する協議』、『親子・家族間の調整』と親子や家族の関係を淡々と調整している様子なのに対し、兼業FSWは「親に様子を伝え、関心を促す。関わってもらう中で、理解を促す」等の『親の関心をつなぎとめる関わり』を行う一方で、子どもに対しては「お互い一緒に暮らしたいと言っていたが、子にこれからの自分の人生について、親とのかかわりについて何度も話し合いをし、子が一人暮らしを希望し、親を説得した。父と子の関係がよい距離感となった」のように『親をあきらめさせる援助』という、方向性のまったく異なるアンビバレントな関わりを行っているのである。なぜこのような一貫性のない援助が行われているのだろうか。ここには、簡単には修復できない親子の傷ついた関係を前に、兼業FSWが親子双方の情動に訴えかけるような支援をしている現状が推察できる。社会的自立ケースは家庭復帰ケースに比べて養護期間が長期間におよぶが、担当CWとしての期間が長ければその分子どもの成長や気持ちをよく知り得る立場にある。子どもに対して家庭に帰してやれなかったという自責の念もあるかもしれない。そのため、専門FSWに比べれば、兼業FSWの方が子どもへの思い入れはどうしても強くなりやすく、より情緒的な関わりをベースとした支援になりやすいのではないか。

また、兼業FSWは実の親と子どもの関係への働きかけに加え、子どもの自立生活を支える親族との関係を構築するために、【家族を開く関わり】を行っていることが特徴的であった。これには実の親の元へは復帰させることが叶わなかったが、なにかあれば助けを求めることができる家族の範囲を拡大させておくという意味があると考えられる。ここには、子どもの自立生活を支える資源というだけでなく、兼業FSW特有の情緒の重視があるように思われる。

さらに、いずれの群からも援助の困難さは抽出されているが、兼業群からはそれに加えてFSWとしての固有の業務というより、子どもの担当CWとしての業務も含め、あらゆる支援を行っていることが読み取れる。しかしその一方で、自立に向けた支援は担当CWの

業務であって、FSW として関わることがないという例も見られた。長期に担当 CW として関わってきたことで、調査対象者の業務を多様化させ、どこまでが CW の業務でどこからが FSW の業務なのかという境界をあいまいなものにさせている可能性が示唆される。

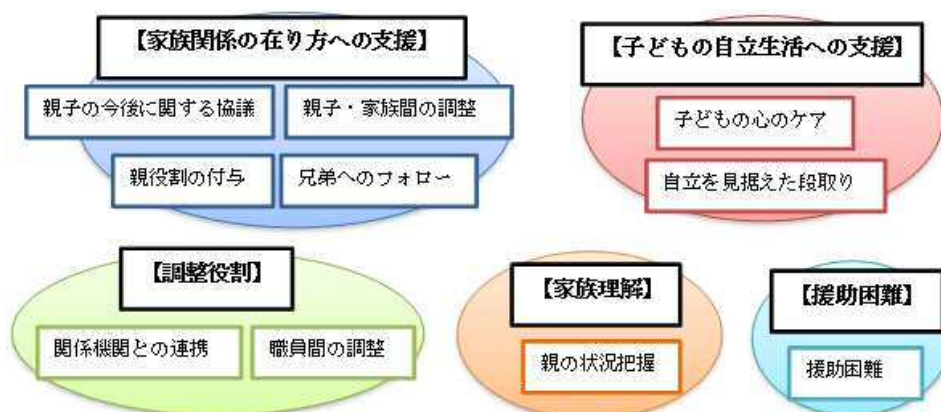


図 3-9 勤務形態別社会的自立ケースの FSW の業務（専業 FSW）

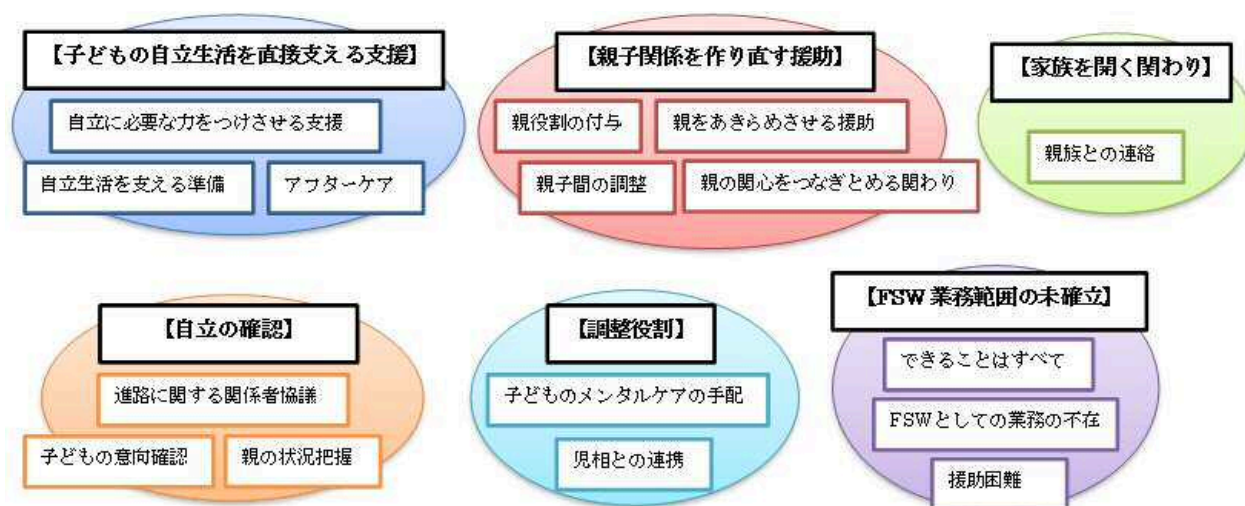


図 3-10 勤務形態別社会的自立ケースの FSW の業務（兼業 FSW）

（４）入所時の子どもの年齢の違いに見る「社会的自立ケース」の家庭支援専門相談員の業務

そこで、長期に養護しているか、比較的短期の養護で自立させることになったかという養護期間の違いで、FSW の業務に差異があるか検討するため、入所時の子どもの年齢を分

析軸に分析を行った。

入所時年齢が 12 歳以下だった長期養護のケースにおいて FSW が行った業務からは 5 つのカテゴリーと 15 の概念が抽出された。すなわち『親役割の付与』『親子関係維持の働きかけ』『自立を目指したプロセス』『子どもへの関心を促す関わり』『親をあきらめさせる関わり』『家族を開く関わり』の 6 概念から成る第 1 カテゴリー【自立を前提とした家族関係の再構築】、『親の生活状況把握』『子どもの意向確認』の 2 概念から成る第 2 カテゴリー【自立の確認】、『関係機関との連携・調整』『自立のための子どもの課題改善』『自立生活を支える体制づくり』の 3 概念から成る第 3 カテゴリー【自立生活準備】、『退所後の親代わり』の 1 概念から成る第 4 カテゴリー【親代わり】、『FSW 業務の不在』『できることはすべて』『援助困難』の 3 概念から成る第 5 カテゴリー【FSW 業務範囲の未確立】の 5 カテゴリーである（図 3-11・資料 13）。

一方入所時年齢が 13 歳以上だった短期養護ケースからは 2 つのカテゴリーと 8 つの概念が抽出された。『親の生活状況把握』『親子の限定的な関係の構築』『子どもとの話し合い』『進路決定のための関わり』『家族を開く関わり』『児相との連絡』の 6 概念から成る第 1 カテゴリー【自立決定のためのプロセス】と、『親に代わる役割』『自立生活のための準備』の 2 概念から成る第 2 カテゴリー【自立生活を支える役割】である（図 3-12・資料 14）。

両者を比較すると、カテゴリー名で一致はみられないものの、やはりいくつかの類似が見られた。だが入所時年齢の低い長期ケースの方がより多くのカテゴリーと概念を抽出しており、とくに第 1 カテゴリーに見られるように親子関係・家族関係に着目していることが特徴的である。低年齢群では、入所初期段階ではまだどのような退所を目指すのか明確に決まっていないこともありうる。そのため、「社会的自立ケース」のなかには、はじめから自立を目標としたケースもあれば、反対に家庭復帰の望みにかけて情緒的な支援を続けたものの、結果として復帰には至らなかったケースも含まれている。後者であれば、親子の関係が途切れないよう関係をつなぎ続けつつも、実際には子どもに家庭に帰ることをあきらめさせざるを得ない。加えて年齢の低いうちから長期に養護されているために、その子の成育歴を振り返り、発達上の課題を解決していくような長いプロセスでの支援もなされている。

他方で入所時にすでにある程度の年齢に達していた高年齢群では、はじめから親子の関係が限定的なものになることが FSW によって見込まれているかのようなのである。高校卒業という児童養護施設での養護の上限が目前に迫ってからの入所であり、思春期ゆえの親子間の葛藤を抱えての入所でもある。そのため、高年齢群からは「社会的自立」という明確なゴールに基づいて、FSW が淡々とプロセスを進めているように読み取れる。長期養護群では FSW 自身の複雑な心境を反映していた親子関係の調整も、ここでは自立に向けたプロセスの一環に位置付けられているといえよう。



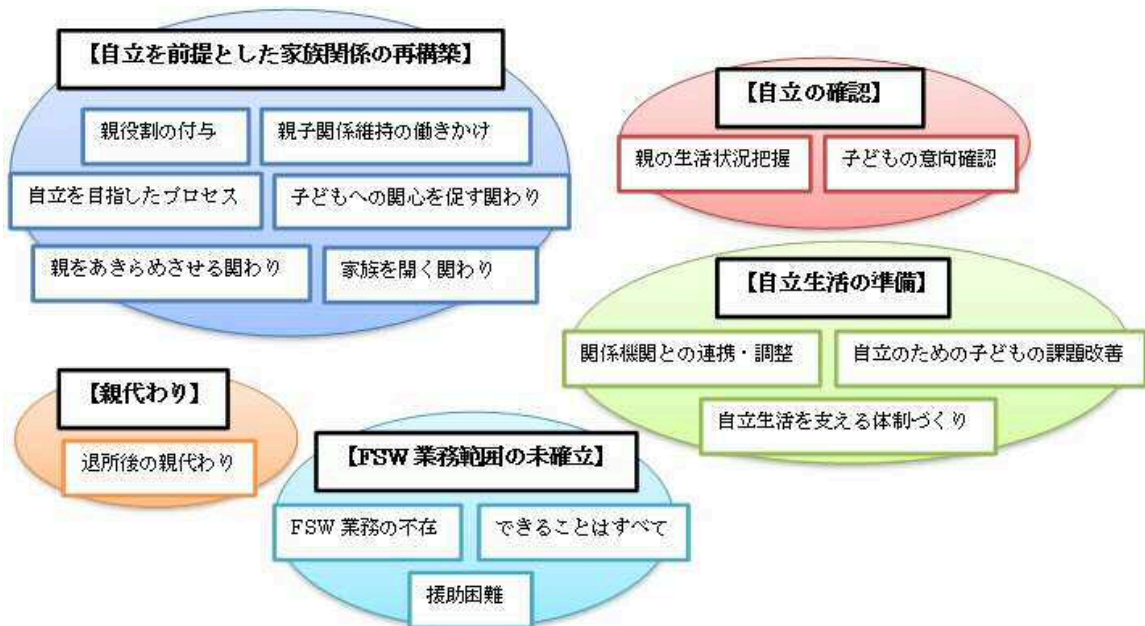


図 3-11 子どもの年齢別社会的自立ケースの FSW の業務（入所時 12 歳以下）

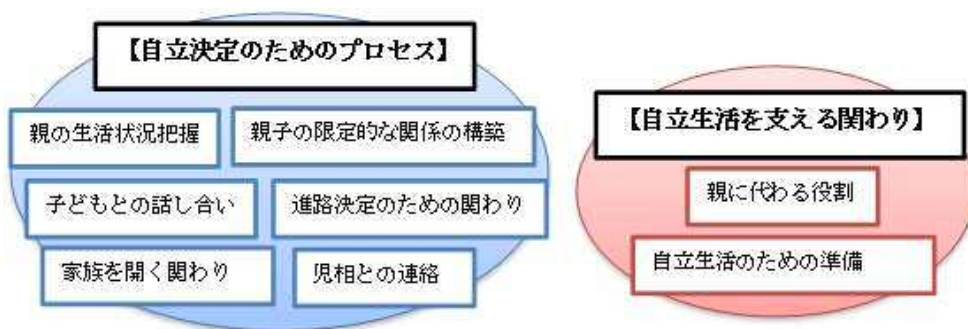


図 3-12 子どもの年齢別社会的自立ケースの FSW の業務（入所時 13 歳以上）

#### （５）家庭復帰しない子どもに対する家族との関係の持ち方に関する援助

最後に、「社会的自立ケース」において、子どもに対して家族との関係の持ち方に関して行った援助内容をたずねた。この設問に対しては得られたデータ数 54<sup>viii</sup>と限りがあったので、FSW の勤務形態や入退所時年齢で区分を行わずに分析した。

分析からは 5 カテゴリーと 18 概念を抽出した。すなわち、『子どもへの関心を途切れさせない努力』『親とのコミュニケーション』『拒否的な親との関係構築の努力』『親子の交流調整』『親へのアフターケア』『親の気持ちの伝達』『親への指導』の 7 概念から成る第 1 カテゴリー【親子をつなげる援助】、『条件付きの交流調整』『親との距離の取り方の指導』『切れない親子の縁と折り合いをつける助言』『親子の距離をおく関係調整』『子どもに状況を

理解させる援助』の 5 概念から成る第 2 カテゴリー【新しい親子関係の再構築への助言】、『子どもの気持ちの優先』『子どもの気持ちの傾聴』の 2 概念から成る第 3 カテゴリー【子どもの自立への意思決定の援助】、『助けの求め方の助言』『アフターケア』『親に代わる資源の調整』の 3 概念から成る第 4 カテゴリー【自立生活を支える援助】、『援助不可能』の 1 概念から成る第 5 カテゴリー【援助不可能】の 5 カテゴリーである（図 3-13・資料 15）。

ここでは、一緒に生活することも、頼ることも困難な親の現実を受けとめ、子どもに親をあきらめさせると同時に、たとえ子どもが交流を望まなくても決して切れない親子の縁とどのように折り合いをつけていくか、という難しい舵取りを FSW は迫られている。また、家庭復帰の可能性がないことが明らかになっていてもなお、親に対して何らかのアプローチを続け、子どもへの関心を引き留めようとしているが、ここではこれらの援助が親への援助ではなく、子どもへの援助に位置づけられていることに注意したい。「家庭復帰ケース」で親をケアできる大人に変える支援が、直接的には親への支援でありながら、その目的が子どもへの支援であったことにも通じている。「社会的自立ケース」においては、子どもへの親の関与度が「家庭復帰ケース」に比べれば格段に下がるが、それでも情緒的な関係を結ぶ対象となるよう援助することが、最終的には子どもの利益になると考えられているようである。

ここには、一見すると関係を断ってしまってもよいような親でさえ、子どもにとっては重要な他者であると思えず FSW の家族観が表れているといえよう。このような価値は、FSW という職種が共通して持つべき価値というより、むしろ CW としての価値か、調査対象者の個人的な価値である可能性がある。しかし多くの FSW が現在も CW を兼務している上に、専業 FSW もほとんどが CW 経験者であることから、二職種間の専門的価値の差異を弁別することは困難である。また、調査時点では家庭支援専門相談員の任用規定がなく、現在も独自の倫理綱領を持っていない。そのため、FSW としての専門的価値と個人的価値の境界もまた限りなくあいまいになりがちであると考えられる。

ところで、この分析【援助不可能】というカテゴリーが抽出されたことは象徴的である。なぜなら、調査では援助を行った場合に、その内容をたずねているので、とくに行っていないのならば自由記述の必要はなかったのであるが、あえて「行えなかった」という告白がなされているのである。ここには、この FSW が本心では親元に戻ることなく自立していく子どもに対して、実親との関係の作り方について何らかの助言なり指導なりすべきであり、あるいは援助したいと考えているにも関わらず、実際にはそれができなかったことを後悔している姿が浮かび上がる。先に実際に行った業務で確認したように、施設内での業務分担が決まっており、FSW として関わる余地がなかったのか、あるいは親や子どもが FSW の助言に耳を貸さなかったのかもしれない。しかし、実際にどのような援助が行われたのかということ以上に、FSW は親子の情緒的な結びつきを重視しているのではないかと考えられるのである。

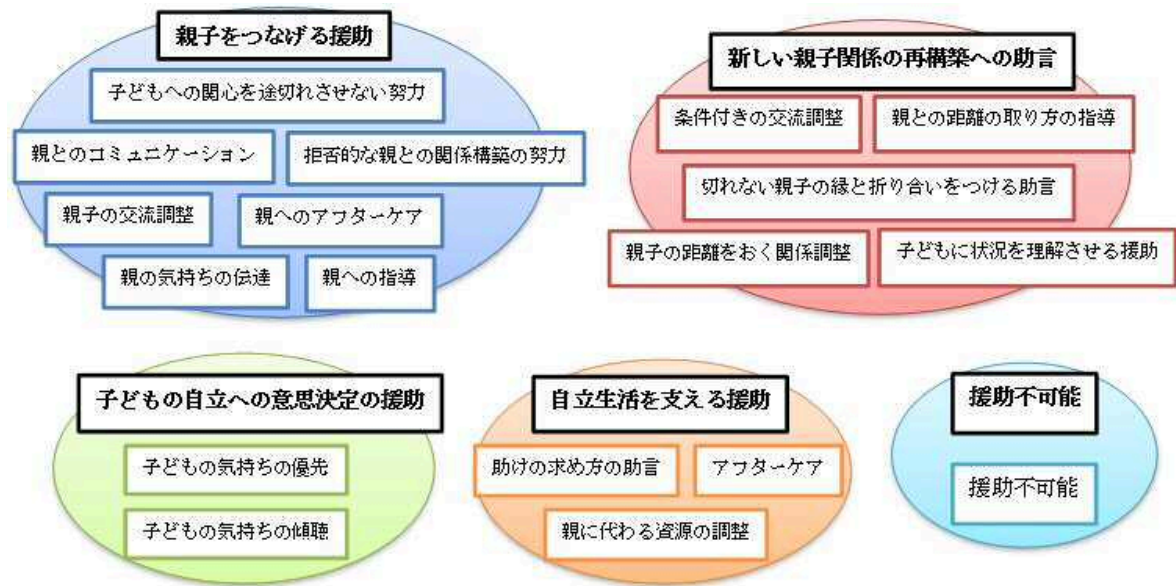


図 3-13 家族との関係の持ち方に関する援助

## 5. 家庭支援専門相談員の 2 つの役割

### (1) 家庭支援専門相談員の 2 つの役割

上述の分析結果は、家庭復帰か社会的自立かという退所方法の違い、退所時の子どもの年齢や入所期間の長さ、専業か兼業かという FSW の勤務形態の違いにも関わらず、類似したカテゴリー名が抽出されるという特徴があった。しかし前節で検討したように、カテゴリーを構成する概念やデータのレベルではニュアンスが異なっていた。これらの下位概念やデータの差異を念頭に置き、FSW が特定のケースについてなんらかのゴールを判断し、それに向けて援助する専門職として果たす役割を次の二つに分類してみたい。ひとつは FSW が家庭復帰の判断をし、それに向けて支援を行う役割で、これを仮に「家庭支援役割」と名付けてみよう。一方、FSW が社会的自立の判断をし、子どもの退所後の自立生活の体制を整えていく業務を通じて果たしている役割を「社会的自立支援役割」と呼ぶことにする。どのようなケースでも FSW はその業務を通じて二つの役割を果たしていると考えられるが、ケースによってどちらの役割がより強調されるかということに濃淡がある。また、FSW には家庭復帰と社会的自立のいずれのゴールへの途上にも、なんらかの意味での「家族再統合」が意識されていたが、ここでもやはりケースによって「家族再統合」の捉え方が異なっていた。そこで、本節では二つの役割がどのような場合により表出されやすいのか、FSW が認識している「家族再統合」概念との関わりに焦点をあてて検討したい。

### (2) 「家庭支援役割」の 3 つの支援と「家族再統合」



「家庭支援役割」を家庭復帰の判断とそれに向けた支援を行う役割と定義したとおり、主に家庭復帰ケースで「家庭支援役割」が担われていると見ることができる。そこではFSWは親子の【家庭復帰への意欲】や復帰プロセスが順調に進んだこと、とくに子どもの年齢が低い場合は【復帰家庭の安定】と【当事者の変化】を根拠として家庭復帰を判断し、親への働きかけを重視しながら生活再建や子育てスキルの伝達、復帰後の地域での子育て支援体制づくりを行っていた。ここで意識されている「家族再統合」は狭義に家庭復帰であり、「家庭支援役割」は親子が支え合って一緒に生活するというより、親を「子どもをケアできる大人」にし、家庭を「子どもが帰れる場」にする役割だと言えよう。その際FSWによって「復帰家庭」とみなされているのは、必ずしも施設入所以前と同じ家族構成メンバーと住居ではない。親の離婚・再婚に伴う継父母や異父母きょうだいが新たに家族構成メンバーに加わることで、祖父母をはじめとする親族との同居や近居によって親子がサポートを受けられる環境になることも含めて「復帰家庭」だと考えられており、FSWが親族を巻き込むことによって『復帰家庭の変形』を積極的に引き起こす『新しい家族形成の準備』もまた「家庭支援役割」の表れと考えられる。

このように家庭復帰ケースで「家庭支援役割」が担われることは言うまでもないが、実は社会的自立ケースでも「家庭支援役割」は部分的に表出されている。例えば『親の生活状況把握』は家庭が子どもにとって帰れる「場」か、少なくとも自立後の生活を援助できる存在かどうかの確認であると考えられる。また【自立を前提とした家族関係の再構築】も、家庭復帰ケースで確認した【当事者の変化】を目指した関わりが十分には成果をあげず、途中から限定的な親子関係の構築へシフトしていくプロセスとも読める。社会的自立ケースにおいて、FSWは元の家庭へ子どもを復帰させない判断をしている一方で、入所以前の家庭を超えて子どもの『家族を開く関わり』を行っている。ここでは自立を前提としながらも、祖父母やおじ・おばを巻き込み、子どもが「家族」と呼べる家族構成メンバーを拡大する試みがなされている。子どもの元の家庭は『養育不能な親』のように父母が頼りにならず、『家庭の不在』に似たように時には住居まで喪失しているかもしれないが、家族の範囲を拡大させることで子どもになんらかの意味で「家庭」を用意して自立させるというこれらの働きかけもまた、「家庭支援役割」によるものといえよう。

すでに確認したように、家庭復帰ケースは社会的自立ケースに比べると平均退所時年齢が低く、平均入所期間も短いことから、子どもの年齢が低いうちに親に対する集中的な支援を投下することで、早期の家庭復帰実現の可能性が高まると考えられる。その結果として、FSWの「家庭支援役割」が家庭復帰ケースにより重点的に表れているといえよう。もっともFSWの働きかけひとつで親が変わり、問題が解決するというわけではない。児童虐待という深刻な事象の発生の背景には、生活上の複数の不利やパーソナリティの問題など多様な課題の積み重なりがある。これらの課題解決に必要な資源が不足していることも、解決するのは当事者であってFSWではないこともまた確かである。FSWが生活基盤の安定化の重要性を認識しながらも、実際の業務となると様々な葛藤を抱えていることについ

では第 5 章で詳しく検討する。

ところで「家庭支援役割」を担って行われる FSW の支援は、次の 3 種類に大別できるだろう。すなわち、家庭復帰後の親子の生活環境を整えていく「生活安定化型」支援、親子の良好な関係構築を目指す「関係改善型」支援、および「家庭」を構成するメンバーや住居を必要に応じて変形させる「家庭再構成型」支援の 3 種類である（図 3・14）。

「生活安定化型」支援には、親子の生活基盤を安定させるため就労支援や、社会資源の紹介、各種手続きの代行、親子を支える地域ネットワークの構築などが含まれる。家庭復帰を果たした親子が特定の地域に生活するという具体的な「生活像」を実現し、親子の生活の「場」を作る支援が「生活安定化型」支援だと言えよう。家庭復帰ケースで FSW が行った業務からも、「父親の支援、保護課につなげる、居住先の確認、支援団体につなげる」「母の生活保護受給、権利擁護を使い経済的安定を図った」「再就職への支援、協力」などの経済的安定化、「地域の中で支えていただくネットワーク作り」「地域カンファレンス」「復帰先の学校へ施設での生活状況報告」「家庭引き取りの為のケース会議（児相、学校、民生委員、教育委員会、市福祉課、施設）に出席」等、地域ネットワークの構築を通して、生活基盤の安定化が図られていることがわかる。

「関係改善型」支援には、親に対する子どもの特質・子育てスキルの伝達や、子どもに対する年齢相応の発達支援を通じて、親子が適切に慕い合う関係の形成を目指す支援が含まれる。親と子の双方に対して、対人関係形成にかかわる個人的な資質に働きかけることで、関係改善を図ろうとする支援と言えよう。FSW の業務からは、「母親の不安を解消するためにケアワーカー・FSW と母親で交換ノートを作り、小学生のお世話の方法を具体的に伝えたら母親も安心していった」「家庭への復帰訓練として毎週帰省させ、課題を母と話し合う」など、子育てスキルの習得や、「年齢相応の基本的生活面の自立」などを行って、復帰後の親子の関係改善を図っていることがわかる。

「家庭再構成型」支援には、継父母・親族への連絡や、親族との同居・近居に向けた話し合いなどが含まれる。入所以前の家庭を構成していた家族メンバーや住居を超えて、親族や新しい姻戚を積極的に巻き込みながら、必要に応じて家族メンバーを拡大・縮小し、住居を選択していく家族の戦略に対して FSW が行う働きかけであると言えよう。ニュージーランドのファミリーグループ・カンファレンス制度を紹介している林は、わが国においても家族を「ひらく」という発想が、とくに児童虐待への対応で効果を発揮するのではないかと述べているが（林 2008）、このように家族の範囲を拡大したり、時には縮小したりというコントロールが社会的養護の現場で意識されていることは注目に値する。

社会的養護に措置された子どもが家庭復帰を果たすには、上述の「生活安定化型」支援、「関係改善型」支援および「家庭再構成型」のいずれも不可欠である。前節で見たように、専門 FSW は「生活安定化型」支援を重視し、兼業 FSW は「関係改善型」支援を重視している傾向が見られた。他方、「家庭再構成型」支援は兼業 FSW の方がより行っているが、子どもの年齢や退所方法による差異は見られず、普遍的な支援であった。いずれにしても、

これら 3 つの支援を通じて「家庭支援役割」を担いながら、質的にも物理的にも入所以前とは異なる「家庭」に子どもを復帰させるということが、FSW が想定するひとつの「家族再統合」のパターンであると考えられる。

### （３）「社会的自立支援役割」の２つの支援と「家族再統合」

家庭復帰ケースでの FSW の業務はほぼすべて家庭復帰というゴールに向かっており、「家庭支援役割」が強調されていたのに対し、社会的自立ケースの業務はもう少し複雑であった。まず、社会的自立ケースにおいて子どもの自立後の生活を支える体制づくりや、子どもの発達課題の解消に関わる業務は「社会的自立支援役割」によるものと言えるだろう。だがそれに加えて、ここでは「家族再統合」が広義に捉えられ、家族が子どもの自立生活を間接的に支える資源の一つと考えられている。むしろ、「家庭復帰の可能性」が無かった時点で、親が子どもの生活を経済的・人的に支える存在には成り難いことは間違いない。可能性として残されているのはわずかな情緒的つながりでしかないのである。しかしこのような限定的な親子関係の構築を、FSW は自立支援の文脈から再構築しようとしていることがわかる。先に見たように、親子関係を改善し、新しい関係を構築するということだが、ある時点までは「家庭支援役割」によるものであったのに、社会的自立というゴールを判断したところから、一転して「家庭支援役割」は「社会的自立支援役割」の一部へと移行していると考えられる。

もちろん、家庭復帰ケースにおいても部分的に「社会的自立支援役割」は表出されている。子どもがその年齢相応の生活力を身に付け、親の支えとなれるよう自立させる関わりがこの役割によるものであろう。「家庭支援役割」がとりわけ子どもの年齢の小さいうちに強調されているものであったのに対し、「社会的自立支援役割」は子どもがある程度の年齢に達してから必要とされる役割であると言える。

ところで「社会的自立支援役割」による子どもの社会的自立への支援は、次のように大別できるだろう。すなわち、退所およびその後の自立生活に向けて体制を整えていく「環境整備型」の支援と、子どもの発達課題を解消し、自立力を養い、時には親代わりとなる、「成長促進型」の支援の２種類である（図 3-14）。

前者には就労指導や住居の手配、雇用主や親族・学校・地域の資源などを動員して、子どもの地域での生活を見守るネットワークを構築しておくことなどが含まれる。社会的自立ケースで FSW が行っていた業務からも、「自立に際して後見人との話し合い」「本児の退所後、入所するグループホームと社協とのケース会議や話し合いを細かく行った」「職安に本児とも同行し、職業を決めるため支援する。職安からの就職面接依頼を受け職場面接におじと同行（県外）採用となり就職準備、職場赴任の同行まで行う」などのように、退所後の具体的な生活を見据えて、きめ細かい自立準備を行っていることがわかる。

後者には虐待等の過去の経験から受けた心の傷を回復し、心身の発達に遅れや障害があれば治療すること、身近の自立ができるよう生活の訓練をすること、社会的に自立をして

いく覚悟を涵養するとともに、他者を頼れる力を身に付けさせることなどが含まれる。FSWの業務には、「安心して生活ができる環境の中で様々な体験を積みながら大人に頼る事が素直にできるよう支援に努めてくる」「本児の成育歴の整理」「自立に対する不安について、相談受付」など、子どもの感じている不安を解消し、自立力を高める心を行っていることが示されていた。

上記の2つの支援はどちらも一人の子どもが自立していくためには欠かすことのできない支援である。しかしこれらの役割を一人の職員で担うことには無理があろう。分析結果の考察で確認したように、前者の「環境整備型」支援は専業FSWがよく行い、後者の「成長促進型」支援は兼業FSWがよく行っているという差異があった。このことから、「成長促進型」支援はどちらかというとCWの業務と共通した業務であり、FSWに固有の業務と呼べるのは「環境整備型」支援であるということが出来るかもしれない。このことは、第2章で検討したFSWの日頃行っている業務の勤務形態による比較や、前節で検討した「家庭復帰ケース」における支援内容のFSWの勤務形態による比較とも共通する。すなわち、兼業のFSWがより親子の情緒的なつながりに着目しているのに対し、専業FSWが家族の生活基盤の安定化を目指した社会制度の紹介や手続きの代行を行う傾向があったことである。

以上から、「社会的自立支援役割」を担いながら、これらの2つの支援を通じて、親との限定的な関係を再構築し、子どもを社会的自立へと導いていくFSWの業務が明らかになった。さらに、社会的自立ケースにおいてもFSWは「家庭支援役割」で確認した「家庭再構成型」支援を行い、元の家庭を超えて何らかの意味で「家庭」と呼べる存在を子どもに用意して自立に向かわせていた。このように、入所以前の家庭は消失してしまっても、親との限定的な関係を保つ一方で、子どもが心身共に全面的に頼ることはできないとしても新たな「家庭」を再構成し、実際には一人での生活を送るという生活像を想定する社会的自立もまた、FSWによって想定される「家族再統合」のひとつのパターンであると考えられる。

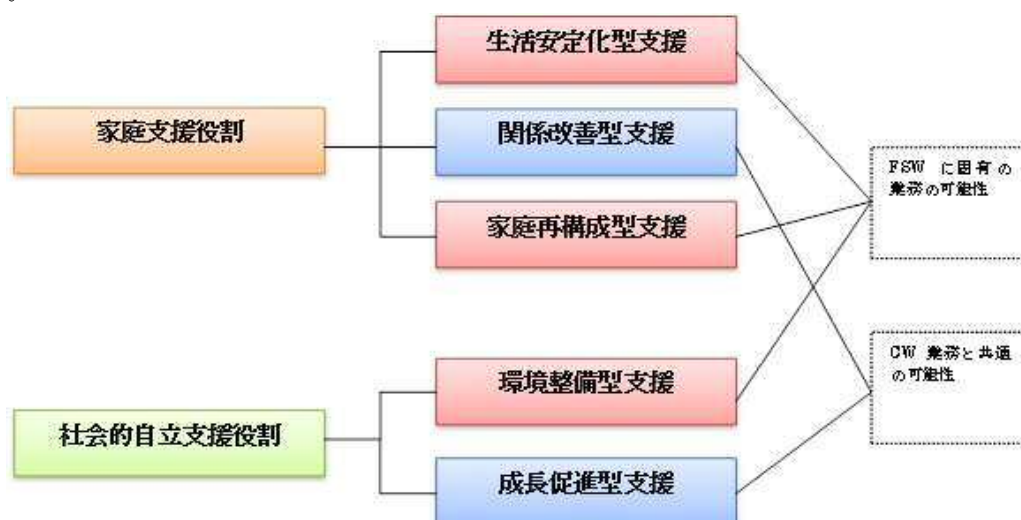


図 3-14 FSW の 2 つの役割と 5 つの支援型

#### （４）家庭支援専門相談員に固有の業務の可能性

上述から、次のことが明らかになった。**FSW**の担っている役割には「家庭支援役割」と「社会的自立支援役割」の２つの役割がある。それぞれを構成している「関係改善型」支援および「成長促進型」支援は、子どもや親という個人に働きかけ、情緒的、人間的成長を促す支援である。このタイプの支援は専業**FSW**よりも兼業**FSW**が重視していることから、**CW**の業務と共通性が高いと考えられる。他方で「生活安定化型」支援および「環境整備型」支援は、子どもや親子が施設退所後にどこでどのように暮らすのかという具体的な生活像を基に、その生活をいかにして支えるか、環境に働きかける支援と言える。このタイプの支援は専業**FSW**の方が兼業**FSW**より重視していることから、**FSW**に固有の役割であると考えられる。さらに「家庭再構成型」支援もまた、家庭復帰か社会的自立かというゴールの形態や子どもの年齢による差異は見られない普遍的な支援である。これは家庭復帰、社会的自立のいずれの「家族再統合」パターンにおいても、入所以前の「家庭」の家族構成メンバーや住居に拘らず、親子や子どもの必要に応じて家族構成員や住居を自在に変形させ、「家庭」を質的にも物理的に変化させる家族の戦略に働きかける支援であり、**FSW**に固有の業務と言えよう。

このように**FSW**の行っている支援には、**FSW**に固有と考えられるものと、**CW**の業務との境界があいまいなものが存在していた。ところが実際の業務では、たとえ専業**FSW**であっても「生活安定化型」および「環境整備型」の支援に特化して行うことはできない。なぜなら**FSW**に固有の業務と思われるこれらの業務は、**FSW**が日頃働いている施設内で完結する業務ではないからである。家庭復帰が可能かどうかを判断するにあたっては、子どもや家族が退所後に暮らす具体的な地域に足を運び、家庭訪問を通して家族の生活状況を確認しなければならない。地域にどのような資源があるのか調査し、時には自治体の市役所や児童家庭支援センター等と交渉して、必要なサポートを引き出さなければならない。保育所や学校、親族宅を訪問し、子どもや家族の特性に理解を求め、特別な配慮と支援を依頼しなければならない。これらは子どもの退所にあたって**FSW**が最低限行わなければならないものであるが、このほかにも**FSW**に期待される重要な役割がある。たとえば家族の生活基盤の不安定さに対しては、親が必要な就労支援を受けられるよう、ハローワークなどの支援機関に同行したり、生活保護の申請に同行する必要があるだろう。親の疾病・障害・アディクション等に対しては医療機関への同行や支援団体への橋渡しが必要となる。多重債務を抱えていたり、DV等の対人トラブルの被害者である場合には、司法や支援団体へつなげることなどが必要だと考えられる。

このように、**FSW**は児童養護施設職員の中では施設と外部資源を繋ぐ役割を担っており、施設内に留まっていたは本来務まらないはずである。だが、施設に所属している**FSW**が、施設を超えて業務を行うことは、実際には容易ではない。これには施設の立地の問題も大きい。児童人口の多い大都市部に立地している施設では、入所児童は比較的近隣の市町村から措置されており、地域訪問に多大な時間を要するわけではない。だが小都市に位置す

る施設には、同県内各地から子どもが措置されるため、FSW はより多くの時間を費やさなければならぬ。専門の FSW であってもこうした施設外での業務時間の捻出は必要なだけ確保できるとは言い難い。CW 兼務の FSW であれば、他の CW と同様にシフト勤務を行わなければならない、FSW として自由に外出できる時間はさらに限られるだろう。

上述の課題を考慮すれば、FSW の専門化と、CW との業務分担の明確化は必然であるように思われる。だが、それでは CW 業務との境界があいまいな業務を CW に委任し、FSW に固有と思われる業務に特化することを FSW が選ぶかといえ、必ずしもそうはならないようである。この点については第 4 章のインタビュー調査分析を踏まえた上で、第 5 章でさらに詳しく検討したい。

#### 【文献】

林浩康(2008)『子ども虐待時代の新たな家族支援—ファミリーグループ・カンファレンスの可能性』明石書店

大澤朋子(2012b)『施設退所時のファミリーソーシャルワーカーの業務についてのアンケート調査報告書(2012)』

- 
- i すでに終結しているケースとしたことから、関わっていた時期の職種については FSW に限定していない。ケースの入所当時は CW として関わりを持っていた事例も含まれる。
  - ii 「家庭復帰ケース」「社会的自立ケース」とも、入退所時年齢について月齢が記載されていない場合は n 歳 0 ヶ月として扱った。
  - iii 「社会的自立ケース」については入退所時年齢の記載があった 57 事例の平均をとった。
  - iv 「社会的自立ケース」については、ケース概要のみ記入され、FSW の行った業務や判断根拠について無記入のものがあ、分析対象としていないので合計数が一致しない。
  - v たとえば知的障害児の生活実態調査のために翻訳・開発された「新版 S・M 社会生活能力検査」でも、13 歳までを対象とした検査項目に身辺自立度が含まれている。本研究ではこれに学齢期の区切りも考慮して、小学校卒業前後を分類の軸とした。
  - vi) 2004 年の改正児童福祉法には「規定による措置の期間は、当該措置を開始した日から二年を超えてはならない」の文言が明記され、施設入所児童が短期にパーマネントなケアに委ねられるべきことが明示された。
  - vii) アンケート調査結果からは、回答者の 72% が兼業の FSW であり、そのうち 7 割強はケアワーカーを兼務していることが分かった (大澤 2012b)。
  - viii) この設問に回答のあった調査票数は 50 であった。

## 第4章 「帰せる家庭」をめぐるインタビュー調査から

### 1. はじめに

第3章では、FSWが入所児童の「家庭復帰」の可能性を早期に見極めた上で、家庭復帰か否かのゴール設定を行い、そのゴールに向けて「家庭支援役割」と「社会的自立支援役割」の2つの役割を果たしながら援助を行っていることを明らかにした。なかでも「家庭支援役割」は児童の生家を、子どもが安全に生活するにふさわしい、帰れる「場」に変化させる役割であると考えられる。このことから、「家庭復帰」の可能性のある状態とは、一義的には子どもの生家が今現在「帰せる家庭」であるとFSWによって判断されることであるが、それだけではなく、援助を通じて「帰せる家庭」に変化し得ると判断されることも含まれる。それでは、子どもの生家が「帰せる家庭」であること、あるいはそう変化する可能性を妨げているものはどのようなものだとFSWは考えているのだろうか。また、それらの阻害要因に対して、FSWはどのように対処しようとしているのだろうか。

上記の問いを検討するにあたり、本章ではFSWへのインタビュー調査データの分析を行うことにしたい。FSWの語りからは、FSW自身がFSWの業務とは何か、FSWの果たすべき役割とはどのようなものだと考えているかということが、仕事への現状認識や困惑とともに表れている。またその背景には、インタビュー対象者の個人的な家族観や親子観、家族再統合観があると考えられる。これらの多様な要素が混在した語りの分析を通じて、次第に子どもの生家の何が問題で、FSWとしてどのように関わっているのかという上述の問いへの答えが浮かび上がってくると考えられる。

### 2. 調査方法と分析方法

全国の児童養護施設に勤めるFSWに郵送でインタビュー調査の依頼を行い、協力の申し出を得られた方の中から、専任と兼任、都市部の施設と地方の施設に偏りのないように6名を選出し、訪問した。訪問期間は2010年11月～2011年3月である。

インタビューは事前に郵送したインタビューガイド（資料18）をもとにしながら、状況に応じて質問の範囲を超えて自由に語ってもらう半構造化面接を、ひとりにつきおおよそ90分間ずつ行った。本研究では「家庭復帰の可能性」は分析のポイントであるが、「家庭復帰」のための判断基準を問うことがインタビューの目的ではない。アンケートの回答を補いながら、FSWとしての日頃の実感を自由に語ってもらう中から、対象者が持っている問題意識や価値を抽出することを目指した。したがって、質問紙はあくまでもインタビューのガイドラインとして用い、この範囲にこだわらずに対象者が重要だと考えることを語ってもらう方法を取った。インタビューは録音し、逐語録を起こしてテキストデータとした。

倫理的配慮としては、この調査で得られたデータは本研究のみに用い、回答者および回答者の所属がわからないようデータの取り扱いには留意する旨を書面と口頭で説明し、承

諾書を取り交わした。また、「日本女子大学ヒトを対象とした実験研究に関する倫理審査委員会」による倫理審査において承認されている。

本研究ではデータの分析に際して SCAT (Steps for Coding and Theorization) 分析法を採用した。SCAT は大谷 (大谷尚 2007 ; 2011) が提唱した質的データ分析法である。この方法は比較的小規模の質的データからも理論を導けること、複数の小規模データから得られた理論から、より大きな理論を導き出せることに特徴がある。また、質的データ分析に際しては分析の妥当性の担保が重要であるが、SCAT では分析の結果とともに、データそれ自体と分析過程が記述されるため、反証可能性が高まる点が研究者 1 名での分析にも適している。

SCAT の実際の分析過程について記述する。まず表計算ソフトを用いたマトリックスの中に、セグメント化したテキストデータを記述する。それぞれのセグメントに対し、

- < 1 > データの中の注目すべき語句
- < 2 > それを言いかえるためのテキスト外の語句
- < 3 > それを説明する語句 (概念)
- < 4 > そこから浮き上がるテーマ、構成概念

の順に 4 段階のスマールステップを踏みながらデータをコーディングしていく。次に< 4 >で導き出された概念をすべて用いて、ストーリーラインを書き起こす。大谷はこのストーリーラインを「データに記述されている出来事に、潜在する意味や意義を、主に< 4 >に記述したテーマを紡ぎ合わせて書き記したもの (大谷尚 2007)」と定義している。さらにこのストーリーラインを断片化し、箇条書きにすることで、論理記述を行う。ここで導かれる論理は、さしあたってこのデータから言えることである。

本研究では、6 名のインタビュー対象者から得られた語りのテキストデータをそれぞれ SCAT を用いて分析し、6 通りのストーリーラインを書いた。この 6 通りのストーリーラインから導き出された 80 の論理記述を、内容のまとまりごとに 13 のカテゴリーに分類した。なお、ここでは論理記述の内容に複数の要素が含まれる場合、ひとつの論理記述を複数のカテゴリーに含めることにした。80 の論理記述の番号は巻末の分析表を参照されたい。

### 3. 調査対象者

次節で分析結果を示す前に、インタビュー対象者とその所属施設について簡潔に記述しておく。

①A 氏 M 学園勤務 (小都市・社会福祉法人) 専業 FSW 30 代男性 FSW 歴 3 年

M 学園は、西日本地域の小都市に立地し、社会福祉法人が運営する児童養護施設である。設立から 50 年以上の歴史を持ち、定員約 60 名の中舎制施設である。A 氏は教員資格を持ち、M 学園に児童指導員として約 10 年勤務した後、専業 FSW として勤務して 3 年になる。



②B氏 S学園勤務（大都市・社会福祉法人） 専業 FSW 30代男性 FSW歴2年

S学園は東日本地域の大都市に立地し、社会福祉法人が運営する児童養護施設である。50年以上の歴史を持ち、定員約50名で、ユニット型の本園と5つのグループホームで運営されている。B氏は児童指導員として中途採用され、7年間勤務した後、専業 FSW となって2年目である。

③C氏 R学園勤務（大都市・社会福祉法人） 専業 FSW 30代男性 FSW歴3年

R学園は東日本地域の大都市に立地し、社会福祉法人が運営する児童養護施設である。50年以上の歴史ある施設で、定員は約50名である。小舎制の本園と3つのグループホームを運営している。C氏は児童指導員として約10年勤務した後、専業 FSW となって3年目である。

④D氏 H学園勤務（小都市・社会福祉法人） 兼業 FSW 30代女性 FSW歴1年

H学園は西日本地域の小都市に立地し、社会福祉法人が運営する児童養護施設である。定員約50名で、7つのグループホームによるコテージシステムで運営している。D氏は卒業後、福祉職ではない仕事についていたが、児童福祉に関心があり、ボランティア等で児童ケアに関わった経歴を持つ。直接処遇職員として8年勤務した後、スーパーバイザー職として4年勤務している。スーパーバイザーと FSW を兼務するようになって1年目である。

⑤E氏 P学園勤務（小都市・公立） 兼業 FSW 30代男性 FSW歴1年

P学園は西日本地域の小都市に立地する県立の児童養護施設である（運営は県社会福祉事業団）。定員約40名の大舎制施設である。地域の小中学校から遠く、立地には恵まれていない。E氏は幼稚園教諭の職歴を経て、県事業団に就職した。P学園に児童指導員として5年勤務し、そのうち1年は FSW を兼務している。インタビュー時点で近く異動が予定されている。

⑥F氏 W学園勤務（小都市・社会福祉法人） 施設長 50代男性 FSW歴20年以上

W学園は東日本地域の小都市に立地する児童養護施設である。社会福祉法人が運営している。定員約25名の大舎制の本園とグループホームがあり、約50年以上の歴史ある施設である。F氏は民間企業での職歴を経て、W学園で児童指導員、FSWを経験した後、同法人のV学園で児童指導員、FSW職に就いた。現在はW学園施設長を務めているが、20年以上の FSW 歴を持つ。

インタビュー対象者はいずれも CW として児童養護施設に勤務した経験があり、5名は5年～10年の CW 歴を経て近年 FSW として着任した中堅職員である。A氏・B氏・C氏は

インタビュー当時専業 FSW であったが、D 氏はスーパーバイザー職を、E 氏は CW 職を兼任していた。F 氏は V 学園（W 学園と同法人）の専業 FSW だった時にインタビュー協力の申し出を得たが、インタビュー時点では W 学園の施設長に就任していた。V 学園、および W 学園での FSW 経験を持つベテラン職員である。

6 名のインタビュー対象者については、アンケート調査返送時に協力の申し出があった人の中から、施設のある地域や兼務状況に偏りのないよう留意して選出した。自発的な協力者に限定されているという点で、無作為抽出ではなく、対象に「FSW として発言したいことがある人」という偏りが生じていると考えられる。しかし、それは言い換えれば家庭支援専門相談員制度や社会的養護の現状や課題に自覚的な職員であるといえる。全数を対象とした質問紙調査よりも、課題の核心により迫るためには、このような選出方法にならざるを得ないを考える。

#### 4. 6つのストーリーライン

分析から得られた 6 通りのストーリーラインは以下の通りである。下線太字で表記したのはステップ<4>で導き出されたテーマ、構成概念である。SCAT 分析の全過程は巻末の表を参照されたい。なお、収録したデータは、インタビュー対象者と所属施設が特定されないように、必要に応じて文言の削除・変更を行っている。

##### （1）A 氏のストーリーライン

[A-1] A 氏は約 10 年前の入職当時と比べ、入所児童の変化、要保護児童カテゴリーの変化を感じ、特に入所児童の保護者に対しては対応の難しさを感じている。その中で児童養護施設の業務の変化がある一方、以前から不変の業務もあり、家庭復帰に向けた家庭支援専門相談員制度導入と現場感覚の不一致に FSW としての自身の業務内容への戸惑いを感じている。

[A-2] これまでの児童養護施設について、現場職員の社会的養護観は利用者の立場に立って早期家庭復帰を援助するものではなく、A 氏は援助職の専門性への疑問を抱いている。社会的養護観の地域特性のためか、児童相談所の入所児童への関与もほとんどなかったため、社会的養護の旧弊さを感じていた。しかし家庭支援専門相談員制度導入後、緩やかな変化が起きており、早期家庭復帰へと援助方針の転換が図られている。

[A-3] 家庭復帰に向けては地域のネットワークづくりのため関係機関との連携が重要だが、児童相談所や児童養護施設、その他機関等にはアクター間の序列がある。保護者とのつながりを持っている FSW は復帰に向けた施設の主体性を発揮して、措置権者である児童相談所に対する情報の伝達役割を担っている。その結果、徐々に力関係の変化が生じ、家族支援の役割分担ができるようになってきた。しかし、親への要求水準をめぐるはそれぞれの支援者のまなざしの差異がある。例えば施設職員はわずかなことでも親の変化への気づ

きがあり、完璧な子育てを要求しない姿勢、親へのまなざしを持っている。一方で児童相談所や市町村等の行政は達成不可能な高い水準の子育てを親に要求する。支援に際しても介入時の慎重さをめぐって施設と行政は共通理解を得にくい。

【A-4】 家庭支援専門相談員制度が導入されても、組織内では FSW の役割のあいまいさがあり、これは FSW の援助手法の不在によるのではないかと感じている。また制度導入した現在でも関係機関の問題認識の温度差があるために、入所児童の情報収集時の困難を経験している。児童養護施設では制度化以前からの家庭支援が行われていたが、これは入所児童の質が変化して家庭復帰に向かうためには家族の変化が基本だと考えられているからである。

【A-5】 入所児童の自立支援計画がうまくいかない背景には、施設のアセスメント能力の不足がある。支援プロセス全体の俯瞰をし、誰がいつどのような支援を行うのかといった支援プロセスの明確化がされていないこと、支援計画の客観性の不足が課題であった。A 氏はこれは支援計画の中に当事者の声を反映しないというクライアント主義の不在から起こるものと解釈していた。明確なゴールを示さない児童相談所にも問題はあり、入所前後の情報の齟齬のために子どもが不安定になることもある。そこで、FSW が積極的に地域に向いていくという情報収集の姿勢が欠かせない。

【A-6】 関係機関との間では、市町村との温度差、行政の危機感のなさを感じている。家庭復帰には今現在ではなく、先を見据えた働きかけを行うことで、子どもが帰る地域の支援力を涵養することが重要である。しかし FSW の活動地域は子どもが帰る地域とは異なっているため、地域との協働のための努力が欠かせない。特に一般市民にも虐待サバイバーの現状の周知ができるような働きかけを行うようにしている。

【A-7】 現在はあいまいになっている家庭支援の理想的な役割分担について、A 氏はプランニングを専門に行うという児童相談所の役割の提言をしている。しかし結局個々の支援者の資質の問題が大きい。児童養護施設でも援助者倫理の欠如を感じさせる人もおり、ソーシャルワークの浸透に課題がある。現場では自然に身に付くと思われがちな専門スキルのトレーニングの必要性を指摘している。A 氏自身も FSW として、家庭支援プログラムの不足を実感している。事例と実践の不整合のために、現状では実践の中から FSW の実践プログラム構築を行っている現状である。

【A-8】 一般社会からの社会的養護への要求水準についても危機感を持っている。職員は児童養護施設の独自性を確立させ、施設に何ができるのか説明責任を負っていると考えている。具体的には被虐待児に対する治療機能を持ち、職員が専門性の獲得をし、自らの専門性の自覚を持つこと、また専門スキルの習得、スキルアップに努めることが必要である。しかし地方では SV の不足もあり、スキルアップ機会は限られている。助言を行う SV の権威もスーパーバイズの効果に影響を与える。

【A-9】 家族再統合について、CW の安定が子どもの安定に影響を与えるため、担当と子どもとの関係をきちっと結ぶことが、まず最初の家族再統合へのステップであると考えてい

る。現在の施設では集団養護の限界を感じており、小規模化が必要だが、それは支援者の質の子どもへの影響も考慮しなければならず、支援者の力量が問われる。それでも施設や里親、ファミリーグループホームなど多様な社会的養護担い手の共存ができ、児童相談所や保護者が選択可能な社会的養護になることが理想だと考えている。FSW としては保護者対応に子ども把握が不可欠なため、直接援助に関わることもある。そのなかで、子どもの変化は見えやすいが、家庭を変えることは容易ではなく、FSW の孤立感、FSW の無力感を感じている。

## (2) B 氏のストーリーライン

[B-1] B 氏は FSW として家庭に綿密に関わろうという意欲を持っているが、その根底には CW 時代の家庭支援のやり残し感がある。しかし家庭への関わりを増やしても家庭復帰ケースが増加しないのは、入所期間より慎重さの優先という施設の方針のためである。家庭への関わりを通じて感じることに家庭復帰を妨げる親の不器用さがある。児童相談所は多忙で親を理解しきれないため、代わって状況を把握するという児童福祉司と FSW の補完的關係が成立している。家庭復帰の判断をめぐっては児童相談所へ提言できる立場にあるが、これは日頃から復帰条件としての連携について連携の努力をして情報の即時共有を図る習慣ができていることによる。

[B-2] FSW が制度化され、職員全体が家庭支援意識の保持をするようになった。これまでの子どものケアだけではなく家庭までという援助対象の拡大が起これ、施設内・関係機関間でも FSW 職の浸透が見られる。家庭支援の意識化の歴史は制度化以前からあるが、近年とりわけ強くなった。CW は徹底的なアセスメントをもとに支援計画を立てるが、支援計画に基づいてやる意識が不十分で支援計画と実践の齟齬が生じている。CW は子どもサイドに立てることが利点だが、それゆえ CW の家庭復帰への消極性が生じてしまう。FSW は親サイドに立ち、親の意向を伝えて説得するという CW と FSW の関係が成立している。職員間の良好な関係には目標共有の必要性があり、その際子どもは親が全てということを CW に伝える。

[B-3] ケースワークは児童相談所の役割だが、B 氏は児童養護施設の役割分掌でもありと考えている。特に入所児の家族支援はやるべきだと考えているが、ケースバイケースでどちらが表に立つか柔軟な支援者の選択も行っている。本来児童養護施設のケースでない利用者もいるが、どこが引き受けるかを考えるより 即応性の優先の姿勢で引き受けている。またそうした利用者への情のモチベーション化を行っている。子どもからの要求は当たり前と考えている。一方で情だけではなく、客観性の保持も意識されている。入所段階から早期の支援過程の俯瞰を行い、ツールを用いて問題状況の総合的な判断を行っている。

[B-4] 退所時期については児童相談所と施設の協議、次いで家族と本人の意向確認という復帰判断のプロセスを経る。時間はかかるが、慎重さを期すというプロセスの目的・プロセスの意図がある。また子どもに対して「そのくらいしてあげないと」感を持っている。

[B-5] FSW を専業にするかどうかは FSW 配置の施設の意図 によるが、たとえ専業でも、現状の一施設一名配置は 業務量と配置の不均衡 があると感じている。直接処遇に関われなため、直接的な子ども理解の限界 があるが、情報補足のための職員連携 を積極的に行うことで補っている。

[B-6] 退所にあたっては 復帰条件としての入所理由改善 が不可欠だが、最もネックになるのは 復帰を妨げる経済問題 で、これは 復帰しても心配 が続く。解決のための情報提供はできるが直接解決できないため、FSW の家庭支援の周辺性 を実感している。

[B-7] わが国は諸外国に比べて 社会的養護の水準の低さ があり、比較的条件が良いとされる都市部でもなお 絶対的水準の低さ を感じている。また法的にも 子どもの安全確保ができない制度 状況にある。

[B-8] 児童養護施設は、外部の批判より目の前の問題 に追われている。本来、基本的機能としての自立 を担っているが、しかしまず 虐待からの回復の優先 があり、それから養育、自立、再統合という 家族再統合に至るステップ につながる。そのため 虐待ケアは使命 だと考えている。また退所児にとって 家代わりであるべき施設 を目指している。FSW 業務としてのアフターケア があり、これはすべての子どもに共通する アフターケアの普遍性 である。特に高齢入所児は入所期間に限りがあり、在所期間と要支援期間のギャップ があるため、アフターケアをやるべきだが、FSW 業務の原則と限界 がある。こうしたアフターケアには 親子交流の促進 も含まれる。そもそも 家族再統合定義の不在 があるが、親子の交流維持 だけでも再統合と言える。究極には 僅かなつながりでも家族 であり、そのためには子どもが 理想的な親を諦めありのままの親を受容 することが不可欠である。もともと関係の基盤がないところなので、社会的養護利用者への まなざしの特殊性 によって再統合と呼ばれるが、細いつながりという現象自体はありふれたものである。

### (3) C 氏のストーリーライン

[C-1] R 学園では毎年度初めに 家庭復帰目標による子どもの峻別・優先順位の決定 を行い、家庭復帰支援を強化する子どもを選別する。選別に際して 強化群峻別規定の不在 のため、実際には 直感からの総合的判断 をしている。従来の家庭的養護に加え、伝統への上乗せとしての家庭復帰支援 を開始した。家庭支援専門相談員制度導入期は、初期 FSW のマネジメント優先性 により家庭介入よりもケース管理の視点が強かったが、C 氏が FSW になってからは特に 家庭支援の意識化 に力を入れている。現在も基本的には 親対応は CW・計画策定は CW・FSW はマネジメント というように、家庭復帰支援は CW、ケース管理は FSW の業務分掌がある。

[C-2] 家庭復帰支援にあたっては、短期間で家庭復帰させるという強い意志 を持って 退所時期の明確化 を行い、支援全体像の意識化 を行う。なんとなく帰せないのではなく、親子分離の原因除去への発想転換 をし、一つひとつの 支援意図の自覚 を職員に求める。こうした方針の背景には、児童養護施設はテンポラリーな生活場所 であり、生活は「家族は家族」

で」が根本という施設の代替性の認識がある。しかし、子どもを直接ケアする CW は CW のケースとの密着性のためにケースを客観視できにくい。そこで複数の職員が複合的視点から子どもを立体的分析できる強みを生かし、職員の専門的視点の涵養を行っている。

[C-3] C 氏は児童相談所との情報共有は密に行っていると自認しているが、一方で連携相手の個人差による連携・目標共有の困難さも感じている。それは関係機関間の序列のため、C 氏の発言が重視されないという、児童養護施設の低位性による。施設職員自体も自らの施設・専門職意識の下位性を甘受しているところがあり、施設の専門性の説得力獲得の必要性を感じている。また行政の対応の硬直性・子ども優先視点の不在・予防発想の優先のために、協働困難性を感じている。それでもうまく機能すれば有力な連携機関への期待も持っている。

[C-4] C 氏は児童養護施設には専門性としてのケアワークがあると考えている。親への共感や同じ子を見ていて苦労の共有できるのが CW の強みでもあり、親と CW の間には子育ての協働意識が芽生える。親に接して感じるのは親の自信喪失であり、親の自信回復を促すために子育てスキル・心構えの伝達を行っている。しかし CW は自らの専門性の無自覚のため、支援を意図せずに行う。そこで C 氏は FSW として CW に専門性覚知への促しを行い、援助目標の意識化を促している。

[C-5] 家庭復帰を困難にしている原因としては、根底に夫婦間問題がある。特に複合的な不利状況が重なっている家庭ほど困難である。これらの問題の根本解決は FSW には不可能で、C 氏は FSW 業務の周辺性・FSW の無力感を感じている。そのため支援ネットワークの増設によって多角的に支援の輪を広げることが重要だと考えている。児童養護施設は家庭の問題に対し、周辺の支援、親の支持的機能しか果たしえないが、それは「少し楽」に向けた支援である。具体的には、親は子育てからの一時的離脱を許されることによって子どもへのまなざしの転換が起こり、我が子の新発見をすることになる。理想の子ども像への執着を捨て、子育ての喜びの再発見ができる。こうした変化は主に子どもの成長によってもたらされるため、家庭復帰支援には子どもへのアプローチの可能性もあるが、多くは親へのアプローチの優先がされる。

[C-6] C 氏はケースのアセスメントにあたり、アセスメントツールを用いるが、ツール利用とアセスメントのギャップがあると感じている。むしろ客観的スケールに対する情緒的対話の優位性があるのではないか。時には FSW の連帯による情報共有も行う。それでも支援のプロセスの俯瞰視点を持ち、支援過程の可視化を行うことは重要である。なぜなら見通しと支援達成の連動性、課題数と復帰判断の相関があるからである。そのため、ケースの持つ課題の整序・焦点化、段階的ゴールのスケジュール化が不可欠である。また計画に基づいて支援が進行しているか、プロセスの検証も絶えず行う。こうした支援の PDCA サイクルがファミリーソーシャルワークであると C 氏は考えている。このサイクルが功を奏するためには施設内の職員連携が不可欠であり、関係機関間のネットワーク内部の情報コントロールも必要になる。この役割を行うのが FSW であり、SW はケースマネージャーと

考える所以であるが、まだ SW 的発想の不足を反省している。

**[C-7]** 全ケースで早期家庭復帰を目指す、不明瞭な説明が子どもに与える悪影響を考慮して、子どもには不用意な約束はしない。子どもが失敗経験の負荷を負って自立しなければなくなるからである。高齢入所児は親子関係修復の時間不足になる場合もある。しかし、家庭復帰に至らなくとも、C 氏は家族再統合としての生い立ちの価値づけは必ず行っている。

**[C-8]** FSW は直接ケアを介した子ども理解により、子どもの本音の感受ができる立場にある。面接の前提としての関係構築ができていなければ、子どもの非言語メッセージの感受もできない。生活を共にしていない関係機関に対しては子どものアドボケート役割を通して本音受信の促しを行う。

**[C-9]** 制度導入時は何事も手探りで、初期 FSW の実践的貢献があったと感じるが、今日では横のつながりもできて FSW の連帯感がある。C 氏は兼任・専任のいずれの立場も経験したことから、FSW の兼任の不可能性を痛感している。C 氏は児童養護施設が家庭復帰支援を積極的に行うべきとの家庭支援専門相談員制度導入の政策意図の受け止め方をしている。各方面からのプレッシャーも前向きに受け止め、FSW への期待と意欲を感じている。しかし、ケースにのめり込み過ぎないようにプレッシャーへの対処術、バーンアウト予防は必要である。

#### (4) D 氏のストーリーライン

**[D-1]** H 学園には職員に伝統への上乗せ技術をつけさせる研修システムがある。職員構成が若く、経験不足や専門性の自覚が課題となっているため、技術の均質性の担保を目的として導入した。職員間での技術の伝承によってケアの技術共有を図っている。子どもに社会性の補足教育を行い社会スキルの反復学習させるための技法が特徴である。また、施設長や SV などによる子どもへの聞き取り調査等の非 CW による子どもの権利保障の工夫もしている。これは子どもと職員双方のリスク管理も目的としている。

**[D-2]** SV の業務は CW に専門的援助の理解と CW の自己覚知を促す CW の教育である。施設の方針から逸脱しないよう CW の実践方針補正を図るなど SV の後方性が特徴である。D 氏ら SV が FSW を兼任するようになってから FSW 期間の限界が明らかになり、FSW の定期交代が始まった。FSW としての分掌範囲は SV として担当の範囲と重なり、他の SV と FSW 業務の分担をしているが、D 氏は業務量の多さから一人制の限界を感じている。そもそも CW と FSW とでは FSW 業務の不可分性があり、支援計画策定など職員間の共同業務も多い。その際 FSW は生活場面での情報収集を行う。また職員配置の制限から FSW もケアにあたることもある。

**[D-3]** D 氏は施設内での自らの役割をケースマネージャーとしての FSWと理解しているが、家庭支援専門相談員制度導入前からのマネジメント職の不変性はある。ソーシャルワークは FSW 一人が行うものではなく、職員の共同責任体制ができています。制度化によって

専門性要求の認識はあるものの、FSW がソーシャルワークを行うという FSW 業務範囲への懷疑を抱いている。そのため、H 学園では FSW と管理職との協働体制ができている。

[D-4] H 学園では生活と関係のパーマネンシー、生活場面のパーマネンシーを重視しており、入所から担当 CW とホームを可能な限り変更しない。そこで CW のアセスメント力の涵養を目指している。入所直後は集中的なアセスメント期間とするが、定期的に支援計画の再検討も行う。もともと不変的・普遍的目標としての家庭復帰を掲げていたが、子どもの指導に際しては家庭の存在を視野に入れて、施設と家族が生活再建への協働を目指している。最終的に親子による親子関係の維持ができることが理想である。

[D-5] 中高生からの入所児は在所期間の制限のために短期だが、一方で一定数の長期入所児も存在している。ただし、D 氏は広義の家庭復帰観を持っており、ケアや扶養をめぐる親子役割逆転の家庭復帰もあり得ると考えている。ゴール設定と入所期間には関係があり、不明確な目標では長期化しやすい。進学時は関係再編適正期と見なして家庭復帰を目指す、家庭状況の急変は支援計画への影響を与えやすい。

[D-6] 家庭復帰が困難な要因としては家族の不在、家庭の不在、養育能力の不在、親の生活不安、生活基盤の脆弱性、などがある。反対に引き取りがスムーズにいく要因は親の再統合意欲の強さ、親と職員の関係構築があり、うまくいっている時には子どもの変化、子どもの意欲を引き出すこともある。しかし、親が子どもに与える物と関係のアンバランスさのために、子どもは実態とかい離れたちぐはぐなメッセージを受け取り、努力は報われないという負の学習をする。高年齢児は現実への絶望も経験する。親の見切りとあいまいな期待の相反性から抜け出し、親に対して現実的な期待に留め、現実受容をするためには、親の見切りを促し、現実直視力をつけさせる必要がある。そのため、家庭支援より自立支援が優先される。

[D-7] H 学園はアフターケア用の設備を持っているが、一時的な利用に留める非永続的なサポートであり、職員も非常設のサポートにしている。施設が卒園生の拠り所であるために、安易に帰ってくるのではないかと職員に現実逃避の警戒感を抱かせ、それより居場所開拓力の涵養が必要だと考えているからである。そのため設備は復帰訓練機会に使われることが多い。親子分離のまま卒園した場合、施設は親子の結節点であるため、親子の退所後の仲介役割も担っている。

[D-8] D 氏は FSW の役割を支援体制の構築を行うこと、ネットワーク構築者としての FSWと捉えている。関係機関との目標の共有度と措置期間の相関があるため、目標共有、協働関係の構築が欠かせないが、一方で能力差と成功度の相関もある。そのため FSW には支援体制構築能力が要求される。親指導者の必要性を感じており、基本的には親の児童相談所・子の施設という分担だが、FSW として親への課題提示を行うこともある。

[D-9] 家庭復帰に向けては 複層的な支援計画を立て、退所に向けては多面的な計画策定を行い、客観性の担保を考慮しながら退所への再評価を行う。退所判断に与えるアセスメント精度の影響は大きく、情報量と予防措置の相関もある。正確で十分な情報を得るため



に情報収集・評価目的の明確化が重要だが、近年は情報取得の困難さを感じている。特に児童相談所から得た情報利用の制限のため、過去の経歴取得の困難さに直面している。

[D-10] D氏はH学園が地域の支援を受けていると思う反面、施設と一般社会との間には社会性獲得に対する評価の断絶があり、反社会性への過剰な注目が起こりやすいことを気にかけている。非親和性と旧弊なイメージの払拭のために地域へ施設を開く必要がある。また職員・子ども評価の一体性があることから、施設の専門性を活かした地域貢献が必要だと考えている。

#### (5) E氏のストーリーライン

[E-1] P学園は公立の児童養護施設のため、職員の非永続性があるとE氏は指摘する。入所児・退園生にとっては愛着の形成困難な施設だが、退園生には関係の優先で対応する職員を決めている。職員にとってはバーンアウトしにくいという職員の非永続性の利点もあり、E氏自身も労働環境への満足を抱いている。

[E-2] E氏がFSWになってから、P学園では人手不足という職員配置の意図からFSW配置の変化があった。E氏はFSWとCWの兼務をしており、仕事の進め方は二職種の反復的な業務進行である。CWを兼務することについて直接処遇の利点があるが、FSW業務に就いている時間は組織内の負担になっているのではないかと危惧する。E氏自身はFSWが専業であるべきかをめぐって理想の職員配置のあいまいさを感じている。現状はFSW専従時間の確保がなければ立ち行かない忙しさがあるが、これが妥当な兼務バランスではないかとも感じている。

[E-3] FSWの専従領域として児童相談所との連絡がある。児童相談所とは協働でのアセスメントを行う。児童相談所に対しては頼めば叶えられるという児童相談所への要求と満足があり、E氏は児童相談所への信頼を抱いている。相補的な協働体制の構築によって親との関係構築の優先性も確保できる。CWと児童相談所との間の意見調整を迫られる場合もあるが、概ね関係機関との良好な関係を保っているのは、緊密性維持の努力をしているためであり、連携の満足度は高い。

[E-4] その他親子の関係再構築の模索、里親と子どもの仲介業務、保護者対応、措置時対応などを行っている。里親は入所児に関係の擬似体験を提供している。双方の柔軟なスケジュール調整をしながら関係を深め、半永続的な擬似キンシップの提供をされている子どももいる。

[E-5] 入所児については周期的な計画検討を行い、主に分離の原因、親子の意向を復帰判断の根拠とする。しかし家庭の不安定、見通しの不確定性から、家庭復帰事例の不在、復帰可能ケースの不在が現状である。そのため全体に長期入所傾向にあり、実際には家庭復帰プロセスの未知性がある。したがって現実の支援には就労自立の優位性がある。

[E-6] 職員間で家族再統合とは何かという概念共有機会の不在はあるが、E氏自身は広義の家族再統合概念を採用しており、FSW業務には家庭復帰支援に矮小化されないゴールと

業務の多様性があるとしている。親子関係維持への働きかけも含めると、FSW 業務の普遍性が明らかになる。E 氏は今後は家庭支援の積極性も必要だとし、良好な再評価の促進が施設にできる家庭支援だと考えている。

[E-7] 近年、FSW の施設間交流も始まり、児童相談所ともケースを介さない意見交換ができるようになった。業界内には FSW の名称と業務実態の乖離が生じている現状もあり、E 氏は FSW の効果的な活用が必要だと指摘する。家庭支援専門相談員制度導入によって FSW 配置の制度的根拠ができたが、さらなる 制度の安定運用への要求もしていきたい。

[E-8] E 氏は P 学園がもっと 地域へ施設を開くべきだと考えているが、地理的困難さも抱えている。地域社会の施設に対する 偏った認知への葛藤もあるため、啓蒙機会の獲得希望を持っている。

#### (6) F 氏のストーリーライン

[F-1] W 学園は立地の特徴から、親からの隔離目的で措置される児童が多い。全国的には 家庭復帰判断の地域差があるが、W 学園は 入所傾向と期間の一致が見られ、入所期間はやや長い。しかし今日の社会的養護は 復帰可能性への執着を持って支援にあたるため、思いがけない復帰を果たせるケースがある。例えば 引きとり可能な親の急浮上が起こるケースである。こうした例は措置前の 児童相談所一時保護期間中の調査時間不足に起因するため、入所後に補完的に情報収集する 児童福祉司と FSW の補完関係が成立している。F 氏は児童相談所とは 情報共有を密にすることで 協働感覚の向上が起こると感じている。

[F-2] 現在全国的に ケースと定員のミスマッチが生じており、児童相談所は 入所期間を見通した措置の躊躇があつて 措置判断の消極化が起きている。早期家庭復帰のためには 適正な情報収集時期があり、情報は早く正確に入手したいが、W 学園では人道的配慮から 事前情報に拘泥しない受け入れ姿勢をとっている。

[F-3] 家庭支援専門相談員制度化直後に比べると、次第に 家庭復帰意欲の妥当な水準を見出せるようになった。児童福祉司にも個人差があるため 行政対応のブレはあるが、日頃の親子の様子を知り得る 施設の情報優位性から、施設が 児童相談所への進言力を持つようになった結果と F 氏は見ている。そのため、関係者会議の発議は施設からか、施設が親のアドボケートをする場合が多い。関係機関間の情報共有を行い、社会資源の連携が図られる。

[F-4] F 氏は FSW 業務の非新規性を指摘するが、施設によっては 形式と実態の解離が生じており、専門職化の要求がされたと分析している。FSW として研修を通じて 関連知識の獲得をしたり、事例検討をするが、事例と実践のギャップ、社会資源のケースによるギャップを感じることもある。

[F-5] 「家庭復帰」の 広義解釈を行えば、高卒時点でも一定数は家庭復帰可能なため、帰せないのは失敗例であると F 氏は考えており、働きかけ不足による ソーシャルワークの失敗が起こっている。一方で年齢によって 復帰判断ポイントの変遷があり、ケアニーズの減少と復帰可能性には相関がある。F 氏は 家庭復帰のタイミングとして 中卒時の最終性を指

摘している。特に幼児期の家庭経験の重要性は代えがたく、タイミングの目測は不可欠である。F氏は時には家庭復帰成功の限定的保障に基づいた思い切った判断も下すべきだと考えているが、ケースの背景評価の個人差もある。しかし高齢入所児は中卒までの支援時間の制限があつてソーシャルワーク時間不足になる。そのため親との関係形成の時間不足も生じる。入所期間は親の状況からの見通しで推測するが、親は子どもほどには短期で変わらない親子の時間感覚の差もあつて、長期化しやすい。

[F-6] 入所児の親は最底辺の自己像を持っているため、F氏は **FSWは親サイド**に立つ意識、自ら同じ目線に下りていく姿勢によって対等性の追求をし、なんでも言える関係づくりが不可欠だと考えている。一方でソーシャルワークの過程では厳密さの要求をし、要求へのレスポンス評価を通して関係を築く。遠方でも面接に来ることも親の意欲の測定になっている。親の社会的地位・内省力と復帰可能性の相関がある。復帰が近づくと同様に面会させるプロセスと帰宅頻度の相関があり、親子双方の家族一体感の形成を促す。それでも復帰後の予測不可能性は払拭できず退所後の予測困難性がある。こうした一連の支援過程には **FSW業務のサイクル性**が見られる。親との関係構築の第一歩として、F氏は FSW の第一印象の重要性を指摘する。親に負けない職員であるためには、共同生活による子ども把握の必要を無視できない。

[F-7] F氏はベテラン職員として **FSWの育成**に関心を持っている。そもそもソーシャルワークを **CWの業務としてのソーシャルワーク**であると考え、**CWの延長にある FSW**という視点で捉えているため、課題は **CWの FSWとしての育成**である。施設の規模によって **FSW業態の差異**があり、ひとつは一人ですべて担う個人技型、もうひとつは複数の CW が行うソーシャルワークを FSW が管理する統括型である。現在は職人技時代の終焉を迎え、チームワークの時代であるため、チームワークを可能にする FSW、マネジメント機能としての FSWの存在が求められている。チームで行う利点として着眼点による選択、有効性による支援者選択が可能ながある。

[F-8] 後進指導にあたっては、個人スキルと組織力のバランスを考慮し、FSW が全て担うのではなく、**CWと FSWの協働**を心掛けている。ところが、近年はケアスキルの世代間格差があり、まず CW のケア力の向上が欠かせない。**SWの前提としての CW キャリア**が課題となっており、ケアワークのパターンプラクティスが必要である。したがって F氏は協働による後進育成意識に基づいて **CW 育成のための分担**を行う後進育成のためのマネジメントを担当している。具体的には、ケアワークとソーシャルワークの接点から始めさせ、CW でなければ知り得ない事柄についての **CWが行うソーシャルワーク**を担わせる。復帰の判断は CW と FSW がツールに基づく共同アセスメントを行う。

[F-9] F氏はケアワークとソーシャルワークの連続性を強調する一方で、両者はケースとの距離感において似て非なるものだとも考えている。CW が FSW になるためには、介入程度の見極めができるようにならなければならない。このような指導体制のためには、F氏は基幹職員が兼任するという **FSWの理想的兼任像**を持っている。

[F-10] 施設規模・形態によって、子どもの施設構造による把握しやすさに差がある。FSW が把握しにくい場合には、直接処遇機会の創出の努力が必要である。施設規模と職員配置の兼ね合いもあり、分散小規模化する場合にはマネージャーとしての FSW が求められる。

[F-11] 家族再統合について、F 氏は究極のゴールとしての親の許容に向かうような支援の長期的展望、長期的な再統合計画が必要だと考えている。そのために、子どもには限定的親受容の勧めをする。また退所後の自立に向けて人生観の提示、楽観的人生観の勧めも行っている。こうした支援は、CW としても FSW としても行うべき、ケアワークとソーシャルワークによる親子関係維持、ケアワークとソーシャルワークの視点からの生い立ちの価値づけである。

## 5. FSW の語りによる 13 のカテゴリー

分析からは、前節で記述した 6 通りのストーリーラインから、80 の論理記述が導かれた。本節では、この 80 の論理記述を内容のまとまりごとに 13 のカテゴリーに分類し、詳細に考察する。

### (1) 家庭支援専門相談員制度導入による変化

家庭支援専門相談員制度導入によって現場で起こった変化と認識されていたこと、あるいは変化はたいしてなかったという記述も含めて、制度それ自体の導入に関係のある記述は以下の 10 の論理記述である。

- 1)入所児童の背景はこの 10 年でかなり変わった
- 2)児童養護施設の業務には変わったものと、不変のものがある
- 3)家庭支援専門相談員制度導入の政策意図と現場感覚は解離しており、FSW の業務は不明確である
- 5)関係機関間には方針決定権の序列があったが、施設の発言力が大きくなりつつあり、援助方針にも転換が見られる
- 17)子どもから家族への支援対象の拡大が起こり職員に家庭支援意識が浸透した
- 28)家庭的養護の伝統への上乗せとして家庭復帰支援を行う
- 40)C 氏は制度導入への期待と、それに応えたい意欲を感じている。
- 45)D 氏は FSW が一人でソーシャルワークを行う権限に懐疑的である
- 63)すべてのケースに復帰可能性への執着を持って家庭支援し、思いがけない復帰に至るケースがある
- 68)FSW は専門職化が要求されたが、業務に新規性はない

まず指摘できるのは、家庭支援専門相談員制度導入によって、児童養護施設の現場で「家

庭支援」が意識されるようになり、入所児童の退所時期や支援の全体像が常に意識されるようになったと FSW が認識していることである。「家庭支援」自体は家庭支援専門相談員制度導入以前にもそれぞれの児童養護施設で取り組まれていたことであるが、より明確に児童養護施設の役割として認識されたこと、FSW のみならず CW も意図的にこれに取り組む姿勢ができつつあることが、ストーリーラインの記述からも読み取れる（〔B・2〕〔C・1〕〔C・2〕）。また例えば C 氏は、家庭支援専門相談員制度の創設を、「家庭支援」を児童養護施設が積極的に担うことを社会的養護政策から期待されている証拠と受け止め、各方面からのプレッシャーを感じながらも期待に応えたいという熱意を持っていた（〔C・9〕）。C 氏は後に見るように、児童養護施設が他機関から一段下に見られることで、連携のしにくさ、協働しにくさを実感しているのだが、それにもかかわらず FSW というポジションの可能性を高く評価している点は注目に値する。

一方で、制度導入による変化が認識されていない記述もあった。A 氏のストーリーラインからは基幹職員やベテラン職員が古い社会的養護観を捨てきれず、「家庭支援」への関心があまり高くないこと、FSW の役割が施設内でも定まっておらず、自らのポジションにまいまいさを感じていることがわかる（〔A・1〕〔A・4〕）。しかし A 氏自身はこの現状を批判的に認識していることを指摘しておきたい。

ところが、家庭支援専門相談員制度導入自体をいくぶん否定的にとらえている例もあった。D 氏は今日の社会的養護政策が児童養護施設の「家庭支援」への関与を要請している現状、およびそうせざるを得ない背景はよく理解しているものの、一施設職員である FSW が一人で入所児童の家庭のソーシャルワークを担う制度的根拠に否定的であった（〔D・3〕）。このような認識は、行政主導で家庭支援専門相談員制度が導入されたものの、FSW 業務の指針が明示されることもなく、現場の努力に任されている現状を反映しているといえよう。児童養護施設の持つケアワークの専門性への意識が高いために、FSW の置かれた対照的にあいまいな状況に不満を感じているとも理解できる。

このような家庭支援専門相談員制度への期待と不満という二分した評価に対して、ベテランらしい見解を示したのが F 氏であった。F 氏によれば、児童相談所の機能がオーバーフローしている現状や、施設間の「家庭支援」能力の差を是正するために家庭支援専門相談員制度の創設が希求されたのは事実だが、FSW が担っている業務自体に新規性はない（〔F・4〕）。また制度導入直後は家庭復帰という大命題に向かって、F 氏の言葉を借りれば児童相談所も児童養護施設も「家庭復帰だー！やるぞー！」と舞い上がっていたが、次第に現実的な水準へと落ち着きをみせているという（〔F・3〕）。児童養護施設の常時満床状態を是正したいという政策側の意図に対して、当初は児童養護施設もそれに呼応したものの、施設の専門性は家庭復帰に矮小化されないという長年の経験から生み出された専門性の自負に照らして、本来の支援に戻ったとも考えられよう。

だが、上記に見た家庭支援専門相談員制度への態度には、施設の立地による見逃しがたい差異があるようである。制度導入を好意的に受け止め、FSW の業務に熱意を持っていた

B氏とC氏は大都市部の施設に勤務するFSWであった。一方、FSWの立場のあいまいさに疑問を抱いたA氏とD氏は地方都市の施設に勤務していた。児童人口の高い都市部の施設ほど、ベッドの回転率に対する外部からのプレッシャーは当然高いであろうし、利用できる社会資源が広い地域に分散している地方は「帰れる家庭」作りが都市部に比べて困難かもしれない。E氏は、5年間の在職期間中に家庭復帰を果たした事例が1例もないことを告白している（[E-5]）。したがって、家庭支援専門相談員制度導入による変化は、全国の児童養護施設に一律に生じたのではなく、地域によって偏在している可能性がある。

## （2）FSWの果たす役割

FSWの施設内での役割と、他機関との関係でFSWが果たしている役割、また「家庭復帰」にあたってFSWが果たすべき役割について記述があったのは、以下の13の論理記述である。

- 3)家庭支援専門相談員制度導入の政策意図と現場感覚は解離しており、FSWの業務は不明確である
- 9)親子が帰る地域で先を見据えた働きかけを行い、地域の支援力を涵養することが重要である
- 15)多忙な児童相談所に代わりFSWが家庭に関わるという補完関係が成立している
- 19)子どもと家族への情によって入所児の家族は見るべきだが、その視点には客観性の保持が意識される
- 22)直接子どもを把握できないため、職員間連携で補足する
- 29)支援計画の策定、親対応はCW、ケース全体のマネジメントはFSWという業務分掌がある
- 35)FSWはCWにケアの専門性を自覚させる
- 41)生活を共にする施設は子どもの本音を感受でき、他機関にアドボケートする役割を負う
- 44)SVの業務はCWの教育と自己覚知の促進である
- 46)H学園ではCWとFSWは共同で支援計画を立て、FSWと管理職は共同でソーシャルワークの責任を負う
- 51)FSWの役割は支援ネットワークを構築することである
- 64)入所前に児童福祉司が終えられなかった情報収集をFSWが担っている
- 76)CWをFSWとして育成するため、協働する

まず施設内でのFSWの役割について検討したい。いずれの施設でもCWとFSWの間には何らかの業務分掌があるだろうが、分析からは子どものケアのみならず支援計画の策定もCWが担当するのに対し、FSWはケース全体のマネジメントを行っている実態が浮かび上がってきた。これはストーリーラインにも表れていた（[C-1][C-6][D-3][F-8][F-10]）。

施設内で FSW に与えられた独立の業務があるというより、あるケースをめぐって、他職種との間に役割を分担する関係が生じているといえよう。特に D 氏の記述からは、支援計画は CW と一緒に策定し、ソーシャルワークは基幹職員と共同責任を負うというように、ケースに関わる複数の業務を他職種と共同で行っていることが読み取れた。

マネジメントとは異なり、CW の教育を FSW の役割として挙げている例も見られた（[C-2] [C-4] [D-2] [F-7] [F-8]）。これには D 氏のように、CW の実際の業務場面を観察し、専門的な概念を用いてフィードバックする意図的なスーパーバイズを行っているものから、CW が自然に行っているながら自覚していないケアワークの専門性を、日常の職員間の交流の中で自己覚知を促していくような働きかけを行うものまで幅広く見られた。いずれにしても FSW 自身が CW としてのキャリアを持った中堅職員であるからこそ果たせる役割であると同時に、CW 職を離れたからこそケアワークの専門性を客観的に認識でき、教育的な立場に立てるのだとも考えられる。また FSW が CW に対して管理職的な立場にあることもうかがわせる。F 氏はこのような指導的な立場にあることと、すべての CW はソーシャルワークができるべきだとの信念から、自らの FSW としての業務を CW に間近に見せ、部分的に手伝わせるという OJT を行っており、FSW がソーシャルワーク業務を独占的に行うことに否定的であった。

その一方で、FSW としての施設内での自身の役割をはっきりと自覚できていない例も見られた。A 氏は専業 FSW でありながら、「なにをやっていいのか、というのが正直なところで」と告白している。周囲に参考にしたいと思うような FSW もおらず、すべてが手探りで、実践のなかから独力で理論構築しなければならない孤独感をも感じている（[A-4] [A-7]）。E 氏は CW 職との兼務であるために、FSW としての役割と CW としての役割を反復的に担わなければならない。このような業務形態が FSW としての業務遂行の妨げになるというよりは、自らが FSW でいなければならないために他の CW に負担をかけているのではないかと危惧している（[E-2]）。ここには CW の慢性的な人員不足から、E 氏が FSW でいることに他の CW に対して負い目を感じ、FSW としてのアイデンティティを持ちにくい現状が垣間見える。

次に他機関との関係での FSW の役割を見ていこう。まず認識されていたのは、児童相談所をはじめとする関係機関への情報提供者としての役割である。子どもと生活を共にし、子どもの様子を誰よりも把握しているのみならず、保護者との接点も多いのが FSW である。この立場を根拠に、児童相談所への情報提供を行ったり（[A-3] [B-1] [E-3] [F-3]）、子どもや家族が望みながら発言できずにいることを代弁する役割を果たしている（[C-8]）。

また、「家庭復帰」に向けて、親子を支える地域の支援体制を構築すること、その人的ネットワーク作りが FSW の主要な役割だとも認識されていた（[A-3] [C-6] [D-8]）。A 氏は、勤務している施設と、子どもが帰っていく地域との物理的な距離が仕事を困難にすることもあると考えていたが、D 氏はどのようなネットワークができたかによって親子の支援能力に差異が生じることから、このネットワーク作りにこそ FSW の手腕が問われると考

えていた。

上記の役割認識から、いずれにしても FSW は自らが所属する児童養護施設と他機関との接点になっていることは間違いない。例えば B 氏は窓口としての FSW を認識してもらえようように児童相談所に対して積極的にアピールしていた。これらの行政機関と FSW の関係については次に詳しく見ることにする。

### (3) 関係機関との関係

FSW が児童養護施設の代表として接点を持つ外部機関として、児童相談所や基礎自治体は大きな位置を占めている。行政機関以外には児童家庭支援センターや保育所・学校等との関係を持っている。FSW がこれらの機関の職員との関係を、どのように認識しているかについて、以下の 9 つの論理記述が挙げられた。

- 5)関係機関間には方針決定権の序列があったが、施設の発言力が大きくなりつつあり、援助方針にも転換が見られる
- 7)市町村との問題認識の温度差が情報収集の困難さを生じさせている
- 15)多忙な児童相談所に代わり FSW が家庭に関わるという補完関係が成立している
- 16)児童相談所とは連携の努力によって情報の即時共有ができる
- 33)関係機関間の序列のため、他機関との協働のしにくさを感じている
- 56)児童相談所と緊密な関係を保つ努力の成果が出ているので、他機関との関係には満足している
- 64)入所前に児童福祉司が終えられなかった情報収集を FSW が担っている
- 65)児童福祉司と FSW は情報共有を密にすることで協働感覚の向上が起こる
- 67)施設の情報優位性のため、施設が児童相談所への進言力を獲得した

ほとんどの FSW は、措置権者である児童相談所の児童福祉司と対等な関係を築いていると認識しているようである。これは前章でアンケート調査の分析をした際、退所の判断を巡って児童相談所と意見が異なった場合の対応で、「意見が一致するまで担当児童福祉司となんども協議する」と回答した割合が高かったこととも一致している。

ところでこのような対等な関係は初めから存在していたわけではなく、以前は関係機関間に権力の序列ないし序列感情があり、施設は下に見られていたものの、徐々に力関係に変化が生じたり（[A-3]）、双方が緊密に連絡を取り合う努力をして何でも言い合える関係を維持したり（[B-1] [F-1]）している。しかしそうした努力にもかかわらず、どうしても関係機関間の序列の下位におかれた施設は発言力が弱いと感じている FSW もいる（[C-3]）一方で、児童相談所にはお願いすればすぐに聞き入れてもらえる関係だと考えている FSW もいる（[E-3]）。ここには必ずしも対等な関係ではないにもかかわらず、その関係への満足度に差異があるようである。これは自身の FSW としての専門性の自負と関係があるかも



しれない。さらに、F氏は対等な関係を超えて、児童養護施設の方が児童相談所よりも立場が強いと感じていた（[F・3]）。F氏は児童相談所が児童養護施設の反対を押し切って子どもを家庭復帰させたものの、不調を起こして再措置になるなどの前例がこうした力関係の逆転の背景にあると分析していたが、ベテラン職員としてこの分野で児童福祉司以上の経験を持っているという自信が、両者の関係に影響を与えていることも十分考えられよう。

また、明らかな序列意識ではないものの、関係機関との間に問題認識の温度差を感じている例も見られた。A氏はケースのアセスメントのためには正確で十分な量の情報が欠かさないが、自治体がその情報の必要性を認識しておらず、たびたび情報収集時に困難があったと語っている（[A・3] [A・4] [A・6]）。D氏も家庭復帰に向けては関係機関がひとつの目標を共有する必要があると指摘するが、それができないためにゴールまでの道のりが必要以上に長くなる経験をしている（[D・8]）。しかし両氏はこれらの現状に不満を抱いているばかりではなく、FSW側からの積極的な働きかけによって状況を改善したいという意欲を持っていた。このような意識もまた、FSWとしての専門性の自負の表れと言えるのではないか。

さらに、C氏は児童家庭支援センターとの関係について触れながら、児童家庭支援センターが家庭復帰に反対すると児童相談所もそれに倣う傾向にあり、やりづらさを感じていると語っている。またこれらの関係機関からは、児童養護施設は子どもの日常的なケアのみを行う機関であると誤解を受けていることを明かした。しかしそのような誤解に基づく連携のしにくさにもかかわらず、C氏自身は児童家庭支援センターの可能性を高く評価しているようである（[C・3]）。

#### （４）施設の立地条件

調査では、インタビュー対象者はたびたび自らの勤務する施設の立地や、それに伴う社会的養護観、行政との関係について述べていた。論理記述では次の５つが該当する。

- 4)地域特性のため、現場職員の社会的養護観は旧態依然としており、FSWの業務は不明確である
- 13)地方には職員のスキルアップ機会が不足している
- 24)わが国の社会的養護は絶対的低水準にあり、比較的条件の良い大都市部でも不足を感じる
- 61)児童養護施設の偏った理解を解消するために、施設は地域に施設を開き、地域住民を啓蒙する必要があるが、地理的困難さがある
- 62)家庭復帰の判断には地域差がある

インタビュー対象者の所属する施設は大都市部に立地する施設と、小都市に立地する施設とがあった。F氏は、児童相談所や児童養護施設の家庭復帰の判断には地域間格差がある

と述べているが（〔F-1〕）、語りからはそれぞれの施設の立地に伴う状況が表れていた。

たとえば A 氏は、所属する施設が小都市にあり、児童相談所の児童福祉司や周辺施設の FSW や基幹職員を見ても古い社会的養護観から離れられず、ソーシャルワークとは何かということを考えたこともなさそうな人々に囲まれた地域特性に不満を抱いている。わずかな数年前までは児童相談所が家庭復帰の促進に熱心ではなく、一度施設入所させたら「入れっぱなし」であったのも、地域の特性だと A 氏は認識している。養護の質を向上させるためには職員の専門性を高めることが不可欠だが、しかし地方ではキャリアアップの機会も制限されていると感じている（〔A-2〕〔A-7〕〔A-8〕）。同じく小都市の施設に勤務する E 氏も、施設に地域住民や近隣の学生ボランティアを招きたいと考えているが、立地の不便さからかなわないと考えていた（〔E-8〕）。B 氏は、大都市の施設は職員配置や就学支援等で他地域より有利な自治体加算を受けられることを認めているが、それでもなおわが国の社会的養護の水準が世界的に見て低位であると認識していた（〔B-7〕）。

入所期間については、大都市部の施設ほど入所期間が短いというおおよその傾向があるようである。C 氏の勤務する R 学園ではすべてのケースで 3 年以内の退所を目標に、家庭復帰できる子どもの峻別を行い、支援を行うが（〔C-1〕〔C-2〕）、E 氏は P 学園に勤務して 5 年間、家庭復帰事例がないことを告白している（〔E-5〕）。F 氏の勤務する W 学園は、受け入れ児童の特殊性から、入所期間は長引く傾向にあるが、それでも家庭復帰させる場合もある（〔F-1〕）。

上述のような入所期間の地域差は、主に入所待機者リストという施設外部からのプレッシャーによる差だと考えられよう。児童相談所への虐待通告件数が多い大都市部では入所待機者が多く、早期に退所させて次の子どもを入所させる必要に迫られる。F 氏は、児童相談所も入所期間の長期化を見通して、なかなか入所措置に踏み切れない実態があることを明かした（〔F-2〕）。一方で待機者がさほど多くない地域では、家庭復帰にむけて積極的なソーシャルワークを行うというモチベーションが児童養護施設・児童相談所共に高まらないのかもしれない。W 学園は小都市に立地しているものの、措置される子どもは大都市部の子どもであることから、やはりプレッシャーを受けているものと考えられる。だが、とくに家庭復帰の困難が見込まれる子どもを受け入れていることから、短期間での退所は不可能である。このような家庭復帰に対するモチベーションの地域差が入所期間のみならず、児童養護施設の専門性にも影響していることが伺えた。この点は（9）で再度検討する。

#### （5）「家庭復帰」に対する FSW の考え

FSW の語りからは、子どもの退所時のゴールのひとつである「家庭復帰」をどのように考えているかが読み取れる 8 つの論理記述が抽出された。

アンケート調査分析から明らかになったように、多くの FSW は家族再統合を狭義に元の家族の元へ復帰することとはとらえておらず、広義に理解をしていた。しかし実際の退所をめぐるのは、「家庭復帰」をゴールとするか否かで、FSW の援助方針も異ならざるを得

ない。従って、FSW が「家庭復帰」をどのように捉え、意識しているかを知ることは重要である。

- 17)子どもから家族への支援対象の拡大が起これ職員に家庭支援意識が浸透した
- 30)家族は家族で生活すべき、施設はテンポラリーな生活場面という認識がある
- 31)短期での家庭復帰を目標に、どうやって課題を克服するかという視点を職員が共有する
- 48)広義の家族再統合概念を持てば、ケアや扶養の親子役割逆転の家庭復帰もありうる
- 58)家庭復帰判断のポイントとプロセスは定まっているが、実際に復帰させる事例はほとんどない
- 69)家庭復帰できないケースはソーシャルワークの失敗である
- 70)家庭復帰のタイミングとして中卒時が最終段階である
- 71)家庭復帰に対する限定的保障でもタイミングを重視した思い切った判断がなければ復帰できない

まず指摘できるのは、家庭支援専門相談員制度導入による変化でも述べられていたが、「家庭復帰」という退所法が明確に目標化され、職員間で共有されるようになったという変化を、FSW が肯定的にとらえている点である。その変化は、以前はほとんど意識されず事例もなかったが、家庭支援専門相談員制度導入時期と前後して意識化されてきた（[A-2]）ものから、もともと家庭復帰を目標に家族への支援を行っていたものの、さらに明確に意識化され、職員全体が共通の目標として認識するようになった（[B-2] [C-1] [D-4]）ものまで幅は広い。当然のことながらすべてのケースを家庭復帰させられるわけではなく、FSW も家庭復帰だけが「家族再統合」ではないと認識しているのだが、しかしこの変化については概ね肯定的に受け止められているのである。実際には家庭復帰ケースを経験していない E 氏も、それが要請されていること自体は肯定的に認識しているようである（[E-5]）。F 氏は自身が FSW として関わったケースとそうでないケースを引き合いに出しながら、家庭復帰できないケースはソーシャルワークの失敗だと断定する（[F-5]）。そのうえで、家庭復帰させるにはタイミングの見極めが重要であり（[D-5] [F-5]）、ある時点で思い切って家庭復帰させるという大胆な決断の必要性を主張する。C 氏もまた、早期に家庭復帰させるのだという目標に向かって、全職員が強い意志を持って課題を克服するという施設の方針に自信を示している（[C-2]）。

このような認識の背後には、子どもの生活場面とはどうあるべきなのかという FSW の価値観が潜んでいるようである。F 氏は特に子どもの年齢が低い時期にこそ家庭生活というものを経験させる必要性を説いており（[F-5]）、C 氏は児童養護施設がどれほど家庭的な生活環境を提供しようとも、それは家庭そのものにはなり得ず、テンポラリーな生活場面であると認識している（[C-2]）。そして、今はまだ FSW や CW が仲介しなければ保てない親子の関係を修復し、家族が家族だけでやっていけることを理想としている（[D-4]）。も

っともここで D 氏の想定している「やっていける」状態とは、必ずしも生活の共同を指していないことは注意が必要である。ここには一見すると、親子が共に生活することより親子の良好な関係こそが重要だと認識されているかに見える。しかしその反面で、「家庭復帰」を低年齢の子どもが親にケアされる関係に戻ることという理解を超えて広義に理解し、日常のケアや扶養関係が逆転するか、少なくとも減少する高年齢での「家庭復帰」にも肯定的な見解を示しているのである（[D-5] [F-5]）。FSW が持つこのような複雑な家族観については、（8）で再度検討することにした。

#### （6）「家庭復帰」支援のプロセスで重視すること

では実際に FSW が「家庭復帰」に向けて支援を開始する時、どのようなことを重視しているのだろうか。これには以下の 8 つの論理記述が該当した。

- 27) 家庭復帰強化群の峻別を行うが、基準は存在せず総合的に評価する
- 31) 短期での家庭復帰を目標に、どうやって課題を克服するかという視点を職員が共有する
- 38) 見通しの立たない支援は達成できない 課題の整序・焦点化を行い、段階的ゴールの設定、目標達成の評価の一連の PDCA サイクルを通してファミリーソーシャルワークを図る
- 52) アセスメントの精度が支援計画の実効性に影響を与える
- 57) 里親は入所児童に半永続的な擬似キンシップ体験を提供している
- 58) 家庭復帰判断のポイントとプロセスは定まっているが、実際に復帰させる事例はほとんどない
- 64) 入所前に児童福祉司が終えられなかった情報収集を FSW が担っている
- 73) 支援過程には厳密さを要求し、レスポンスを評価するというマネジメントのサイクルが FSW 業務である

インタビュー対象者から共通して指摘されたのは、ゴールとプロセスの明確化であった。今日では新規入所ケースばかりではなく、在所しているすべてのケースで家庭復帰を検討することが半ば常識化しつつある。もちろん、C 氏の所属する施設のように、すべてのケースを 3 年以内に家庭復帰させるという大目標を掲げることもあれば、一応可能性を探るという水準にとどまる場合もあるが、「今はどうしようもないと思われていても、これくらいの可能性があってもつないでいくじゃないですか。それが FSW の考えですね、今ファミリーソーシャルワークの。」と F 氏が語るように、わずかの可能性にも執着し、家庭復帰を目指す傾向にある。だが、そうは言っても本当にすべてのケースが一律に家庭復帰に向かうわけではない。そこで、当年度集中的に働きかけを行う家庭復帰強化群を峻別することになる（[C-1]）。この強化群の選定は児童養護施設が行うだけではなく、児童相談所でも検討され、施設に通達される。その判断は時に現場感覚と異なっていることがあるが、異議申し立てができるかどうかは先に見た行政機関との関係によるようである（[F-3]）。

選定された強化群については、退所時期の設定やそれまでの達成課題の明確化が行われる（〔C-6〕〔D-5〕）。具体的な支援計画は担当の CW が策定し、FSW がマネジメントを行う（〔B-2〕〔C-1〕）といった業務分掌のあり方は先に見た通りであった。この時、退所時期が不明確であると長期化しがちであることや、達成課題が無数にあるようでは家庭復帰には時期尚早だという FSW の経験から得られた傾向も語られた。A 氏は支援のプロセス全体を俯瞰し、誰がいつどの部分を担うのかという職員間・関係機関間の共通理解がないことが支援を困難にしていると分析している（〔A-5〕）。

このようなゴールとプロセスの明確化にあたって不可欠なのはケースの情報収集とアセスメントである。アセスメントに不備があると退所の判断にも影響を与えるため（〔D-9〕）、情報の確実性が要求される。児童相談所が措置までの間に取得できなかった情報を、FSW が代わりに収集する役割を担っているという意識や（〔F-1〕）、退所後に親子が生活する地域に直接足を運んで情報を得る努力をする（〔A-5〕）ことなどが語られていた。

こうして得られた情報をもとに、ケースは徹底的にアセスメントされるとともに、職員がケースをアセスメントする客観的な視点を身に付けることが要求されているが（〔B-2〕〔D-4〕〔E-3〕）、一方でこのようなツールを用いたアセスメントの客観性と、職員と子ども・家族との間の情緒的な関わりとのバランスのありようも指摘されていた。B 氏は客観性を担保しつつも、入所児童やその家族への情を大事にする姿勢を施設長から学んでいた（〔B-3〕〔B-4〕）。C 氏も定型のアセスメントツールを用いればマトリクスは埋まるが、そのこととケースのアセスメントが正確にできることとの間にはどこか差があると感じており、家族との情緒的なやり取りの中からでなければケースを深く理解することはできないと考えていた（〔C-6〕）。

もうひとつ「家庭復帰」プロセスで重視されていたのは、子どもの虐待からの回復である（〔B-8〕）。一言で回復といっても幅が広いが、なかでもここで指摘されているのは子どもが他者との関係を築く力の回復と言えるだろう。A 氏は子どもが親ともう一度良好な関係を築き直す最初のステップとして、子どもが担当の CW との関係をきちんと築けることを重視している（〔A-9〕）。また E 氏の施設で導入されている短期里親制度も、子どもが近い他者、自分を守り育ててくれる大人との関係を築く能力の涵養を目的としていると言えるだろう（〔E-4〕）。

上述した「家庭復帰」プロセスで重視されるポイントには、実は家族、家庭への働きかけに触れたものがほとんどない。あるとしても、わずかに支援のスケジュールに家族が乗っているかどうかや、児童養護施設と児童相談所の要求水準に家族が達しているかどうか審査されているばかりである。一度は親子分離の措置を受けた親子が再びともに暮らせるようになるか否かのプロセスでは、社会的養護提供者側の計画と実践だけではなく、当事者である親と子自身の課題意識と課題解決姿勢が欠かせない。Trotter は非自発的なクライアントに対するソーシャルワークが効果的に機能する要因として、クライアント自身によって定義づけられた問題の解決を目標とすることを挙げているが（Trotter=2007）、「家

家庭復帰」プロセスにおいても、親が現状の何を問題と認識し、どのように解決に取り組もうとしているかを FSW は理解している必要がある。しかし FSW の語りには、そのような視点は表れてこなかった。ここに児童養護施設の FSW による「家庭復帰」支援の限界があるように見えるが、この点は (10) で再度検討したい。

#### (7)「家庭復帰」を妨げるもの

上述したように、今日の児童養護施設で「家庭復帰」が一応は目指されるべきものと了解され、ゴール設定や支援計画が設定されるにもかかわらず、実際にはすべてのケースが家庭復帰を果たせるわけではない。それではどのような要因が家庭復帰を妨げていると FSW は考えているのだろうか。該当したのは 4 つの論理記述である。

- 8) ケースのアセスメントをし、援助プロセス全体を俯瞰する視点の欠落が計画のとん挫を招いている
- 18) CW は子どもサイドに立つあまり家庭復帰への消極性が生じ、支援計画と実践の齟齬が生じる
- 23) 退所を妨げる家庭の経済問題は復帰後も心配が続く
- 69) 家庭復帰できないケースはソーシャルワークの失敗である

最も大きな問題として捉えられていたのは、家庭が不安定であるという点である。そもそも児童虐待が生じる背景には生活基盤の脆弱さ、とりわけ貧困があることは繰り返し指摘されているが<sup>ii</sup>、FSW の語りにも家族の経済状況が家庭復帰を妨げているとの認識が示されていた ([B-6] [D-6] [E-5])。経済的な問題が措置時点での課題であれば、当然それが改善されなければ家庭復帰は達成できない。D 氏は実際には生活が未だ困窮しており子どもを引き取れないにも関わらず、子どもに引き取りが近いのではないかと惑わせるような態度を親がとることも、状況をより困難にすると語っている。同様に、経済的な問題に加え、状況を不必要に難解にする要因に、親の不器用さ ([B-1]) や家族間の不和 ([C-5]) があり、これらの諸問題がもっとも先鋭化して現れるのが家族・家庭の不在 ([D-6]) という状況である。このような不安定な家庭では、たとえ家庭復帰に向けて準備をしていたとしても、不意に先の見通しが立たなくなる可能性は払拭できない ([D-5] [E-5])。しかし家庭の生活基盤の安定へは、FSW といえども児童養護施設が貢献できないのが現状である。この点については、(11) で再度検討したい。

児童養護施設側の問題を、家庭復帰を妨げるものとして挙げた例もあった。F 氏は入所児童が家庭復帰できないことを「ソーシャルワークの失敗」と痛烈に批判している ([F-5])。F 氏は自身の経験から、義務教育終了時点で家庭復帰できなければ、それ以降の家庭復帰が困難になることが解っており、子どもの年齢を強く意識して働きかけを行うという。復帰の判断をめぐっては、遠い将来にわたっても親子が問題なく共に生活できるというような

大目標を掲げるのではなく、現時点ではおそらく大丈夫だと思われるという程度の水準であつても、思い切った決断をすることの重要性を主張している。ただし、この決断には担当者の性格が大きく影響するため、F氏も慎重さを重視するあまりに思い切れない人があることを認識している。CWもまた、思い切った決断から遠ざかりがちであることが指摘されていた。C氏は、子どもと緊密な関係を築くCWは、FSWに比べて子どもへの愛着が強くなり、家庭復帰に消極的になりがちだと分析していた（[C-2]）。CWの情緒的な問題も含め、A氏が指摘するように、子どもと家族の現状のアセスメントの不備、ゴールまでの支援プロセスの不明確さもまた、家庭復帰を妨げていると言えよう（[A-5]）。これは先に確認した支援プロセスでFSWが重視するポイントとも一致する。重要なポイントであるからこそ、このようなアセスメントによる課題と支援プロセスの明確化を行う姿勢の欠如が家庭復帰を妨げることになるのである。

#### （８）FSWの家族観

（５）でFSWが家庭復帰をどのように考えているのか考察したが、ここでは彼らの家族観から検討を加えてみたい。該当する論理記述は以下の８つであつた。

- 26) わずかなつながりでも家族であり、理想的な親を諦めありのままの親を受容すること、親子の交流維持も家族再統合である
- 30) 家族は家族で生活すべき、施設はテンポラリーな生活場面という認識がある
- 39) 家庭復帰に至らなくても、家族再統合としての生い立ちの価値づけを行う
- 48) 広義の家族再統合概念を持てば、ケアや扶養の親子役割逆転の家庭復帰もありうる
- 49) 親や児童相談所が出すあいまいなメッセージは子どもを混乱させる。高齢児は親を見切り、現実を受容する力が求められる
- 59) 家族再統合は家庭復帰だけに収斂されず、FSWの業務は普遍的である
- 79) 家族再統合の究極のゴールは親の許容である
- 80) 長期的展望に立った生い立ちの整序、親子関係の整序が不可欠である

再度確認をしておくと、FSWの認めている「家族再統合」の定義は、狭義の家庭復帰だけではなく、幅広いものであつた。アンケート調査でも「子どもが虐待親を含む元の家族と一緒に住み、安全に生活できるようになること」という狭義の理解に次いで、「子どもが一人で自立した生活を営みながら、元の家族と定期的に会うなどして、良好な家族関係を築くこと」という広義の理解が多く選択されていたことを確認した。FSWの語りからも、同様の記述が見られた（[B-8] [E-6] [F-5]）。

この広義の家族再統合観を支えているのが、「わずかなつながりでも家族は家族」というFSWの家族観である（[B-8]）。理想的には親子は生活を共にし、仲介者なしでも関係が維持できる状態を希求しながら（[C-2] [D-4]）、一方でFSWは親が子どもほどに変化でき

ないこと（〔F・5〕）、子どもが頼りたいと思っても頼ることのできない親がいること（〔D・6〕）を冷静に見極めている。その上で、高年齢児に対しては親元に帰って生活を共にすることをあきらめ、一人で生きていく覚悟を決めるよう、親の見切りを促していくのである（〔D・6〕〔F・11〕）。

そこで、FSWは家庭復帰ができてできなくても、いやむしろできないからこそ、子どもたちが退所する前に生い立ちの価値づけ、親子関係維持への働きかけを行うのである（〔B・8〕〔C・7〕〔F・11〕）。そしてここで目指されているのは、いつの日か親を許容できるようになることなのである（〔B・8〕〔F・11〕）。

「最終的にその親に対してね、線香一本でもあげられるようになれば成功したのかなと思ってるの。骨拾えりゃ成功かなと思ってるの、最終ラインでね、虐待受けてきた子どもたちの。」

上記のF氏の語りには、まさに究極のゴールとも言うべき家族観が示されている。

ところで、先に、親子のケア・扶養関係が逆転しての同居さえ許容するFSWの複雑な家族観は見た通りである。わずかなつながりさえ家族と認める家族観とは、一見アンビバレントであるようにも見える。FSWの真意はどちらにあるのだろうか。これはやはり、誰とどのように暮らすのかという生活像よりも、親子の関係を重視していると考えるのが妥当であろう。なぜなら、彼らはゴールを退所時点ではなく、子どもがいつか他者と特別に親密な関係を築くことができた時、また親と死別した時に、究極のゴールとして親を許せることを目指しているのである。FSWはこれほどまでに親子の関係を特別視していることができようが、同時に、視点を変えればそのような関係修復は容易ではないということの表れでもあろう。

#### （9）児童養護施設の専門性

次に見るのは、FSWは何を児童養護施設の専門性だと考えているのかという点である。児童養護施設は従来の養護機能に加え、退所に向けたリービングケア、退所後のアフターケア、家庭支援等、多様な機能が期待され、実際に果たしてもいる。だが、そのすべてを必ずしも児童養護施設の専門性と考えているわけではないようである。該当した論理記述は以下の12であった。

4)地域特性のため、現場職員の社会的養護観は旧態依然としていてクライアントを尊重するという福祉職の専門性には疑問がある。

25)入所期間と要ケア期間にずれがあり、アフターケアは入所しているすべての子どもに普遍的に必要

32)チームで複数の視点から子どもを把握し、職員の子どもを見る目を涵養する



- 34)児童養護施設の専門性としてのケアワークのスキルを親に伝達し、自信の回復を促す
- 42)CW のケアの均質性を担保するため、伝統への上乗せ技術の研修を導入している
- 43)研修の目的は CW がケアを自覚的にやり、子どもが社会スキルを身に付けられるよう反復練習するものである
- 46)H 学園では CW と FSW は共同で支援計画を立て、FSW と管理職は共同でソーシャルワークの責任を負う
- 47)H 学園では生活と関係のパーマネンシーを重視し、子どもの生活場面を変えることなく担当 CW がアセスメントできる能力を涵養している
- 50)アフターケアは臨機応変に対応するが、子どもが新天地で居場所を切り拓く力をつけるよう、居心地よくしすぎない
- 74)親に負けない FSW は第一印象と子どもの直接把握が必要である
- 75)FSW の専門性は CW の専門性の延長にある
- 77)ファミリーソーシャルワークとケアワークはケースとの距離感において異なっている

児童相談所への虐待通告数の増加を背景に、社会的養護への措置が検討される子どもは増え続けている。一方で社会的養護の受け入れ態勢には限界があり、本来は情緒障害児短期治療施設を利用すべき、より治療的な関わりを必要とする子どもも児童養護施設に入所せざるを得ないミスマッチが生じている。B 氏は、本来は児童養護施設の対象ではない子どもたちも、援助を必要としている限りは引き受けることが児童養護施設の役割だと考えていた（[B-3]）。そしてそのような子どもたちを引き受ける以上、児童養護施設は子どもの虐待で受けた傷からの回復という機能を持たなければならない（[B-8]）。A 氏も今後の児童養護施設は社会に対してどのような専門性があるのか明らかにする説明責任があるとし、治療的機能を例に挙げている（[A-2] [A-8]）。

上記の治療機能の基礎になるのが、養護機能、すなわちケアワークである。FSW は児童養護施設の専門性はなにを差し置いてもまずケアワークであると考えており（[C-4] [C-5] [D-1] [D-2]）、この認識が次に見る児童養護施設にできる「家庭支援」の根拠となっていた。F 氏はケアワークをファミリーソーシャルワークの基盤となるスキルだと考えており、したがってすべての CW は FSW としてのトレーニングの途上にあるものと捉えられていた（[F-7] [F-8] [F-9]）。しかし、CW は自身が行っているケアワークの専門性を認識していない傾向にあり（[A-8] [B-2] [C-2] [C-4] [D-1]）、先に見たように、FSW が CW に専門性の自己覚知を促していた。このような FSW と CW の関係ばかりではなく、児童養護施設には心理職もいる。この複数の職種、多数の職員の専門的な視点で子どもを捉えることができる点を、児童養護施設の専門性だと見ることもできよう（[C-2]）。

さらに、入所中のインケア、退所に向けたリービングケアを超えた退所後のアフターケアも児童養護施設の機能だと捉えられていた。ここには、入所期間中に不足したケアを退所後も補足的に行うことは当然だという立場と（[B-8]）、児童養護施設が退所者の拠り所

になるあまり、現在の人間関係をないがしろにするのではないかと懸念する立場（[D・7]）とに分かれた。前者では、アフターケアはインケアの延長と捉えられているため、アフターケアもまた児童養護施設の専門性と考えられている。一方後者では、アフターケアは余剰のサービスとでもいうべき認識であり、児童養護施設の専門性だとは捉えられていない。したがって、いずれの施設でもインケアは児童養護施設の専門性だと考えられていたが、どのような支援までをインケアに含むと認識するかによって専門性の認識が異なっているのだと考えられる。

#### （10）児童養護施設にできる「家庭支援」

（9）では FSW が児童養護施設の専門性をどこに見出しているか検討した。その結果、インケアこそが最大の専門性だと考えられていることが明らかになった。インケアというのは、基本的には入所児童に対して行われる、日常生活への支援である。それでは、このような専門性を持つ児童養護施設にできる「家庭支援」とはどのようなものだと FSW は考えているのだろうか。該当したのは以下の 5 つの論理記述であった。

6)施設職員は親に過剰な期待を抱かず、できないことを許容するまなざしがあるが、行政は要求水準が高く、共通理解が得られない

14)CW 時代の不全感が家庭への関わりモチベーションになっている

34)児童養護施設の専門性としてのケアワークのスキルを親に伝達し、自信の回復を促す

37)親支援は「少し楽」を目指す それは子育てから一時的離脱し、子どもを見るまなざしに変化が生じて我が子を新発見することによる

72)自己評価の低い親に FSW は自ら下りていく姿勢で視線を合わせ、何でも言える関係づくりにつとめる

やはりまず指摘できるのは、ケアワークを根拠にした家庭支援である。児童養護施設の専門性であるケアワークのスキルを親に伝達し、親が子どもを見るまなざしに少し変化を引き起こす支援をすることが児童養護施設に可能な家庭支援だと考えられていた（[C・4] [C・5]）。その際、FSW は決して親を批判せず、共感的に寄り添うことで誰よりも親の味方になり、何でも話せる関係を構築する（[C・4] [C・5] [F・6]）。F 氏は自尊感情の低い親に対して上段から助言をするのではなく、同じ視線まで下りていく姿勢を重視していた。A 氏も、児童養護施設職員は行政機関職員と異なり、親に多くを求めすぎず、親のわずかな変化にも気づく視点を持っていると自負している（[A・3]）。

しかしながら、このようなインケアに由来する子育てスキルの伝達は、インケアに主に従事している CW にこそふさわしい役割だとも考えられる。家庭支援を期待される家庭支援専門相談員制度と、実際に児童養護施設の CW の専門性として発揮される子育てスキルの伝達が家族支援である、ということとのギャップは埋めがたく思われる。この点で、B 氏

は CW だった時代に十分な家庭支援ができなかった不安全感と対比させながら、FSW として家庭支援に積極的に関わる意欲を示していた（[B-1]）。子どもの様子や養育の苦労を直接把握しているのはあくまでも CW であり、CW から親へ子育てスキルを伝達することが望ましい場合もあるだろう。反面、(7) で考察したように、CW は担当している子どもと緊密な関係を築くあまり、ケースを客観視できず、親に対して最適な助言者になり得ない可能性もある。そこで、FSW が CW と親との間に立ち、CW に対しては指導的な立場を、親に対しては味方となる立場をとりながら、実際の「家庭支援」としては子育てスキルの伝達ということが生じているのだと解釈できよう。

#### (11) FSW として感じる困難

先に見たように、FSW は家庭支援機能を果たすことを囑望されていながら、実際にできる家庭支援は CW の専門性である子育てスキルの親への伝授が中心で、家庭が抱える生活基盤の不安定さという問題になかなか手が出せなかった。ここでは、FSW が業務遂行の上で感じている困難について検討をしてみたい。該当したのは 8 つの論理記述であった。

- 6)施設職員は親に過剰な期待を抱かず、できないことを許容するまなざしがあるが、行政は要求水準が高く、共通理解が得られない
- 7)市町村との問題認識の温度差が情報収集の困難さを生じさせている
- 10)家庭支援のプログラム、職員の研修の機会が不足しており、実践から理論を構築する途上にある
- 12)直接処遇は子どもの変化が見えやすいが、FSW は家庭の変化を導くのが困難で孤立感を感じる。
- 20)家庭復帰を妨げる根本原因に介入できず、FSW の家庭支援の周辺性を感じる
- 33)関係機関間の序列のため、他機関との協働しにくさを感じている
- 36)FSW は家庭復帰を妨げる根本原因を解決できないため、周辺性、無力感を感じている
- 45)D 氏は FSW が一人でソーシャルワークを行う権限に懐疑的である

すでに指摘したとおり、親子分離のうえ子どもが児童養護施設に措置された根本原因である児童虐待の背景要因としての生活基盤の脆弱性や家族間の人間関係の不安定さに、FSW は直接介入することができない。背景要因が改善しなければ家庭復帰が望めないにも関わらず、FSW はその改善に直接働きかけることができないということに、FSW は無力感や周辺性を感じていることがわかった（[A-9] [B-6] [C-5]）。このことは CW の業務との対比の中でも、子どもは目に見えて成長するため、職員も喜びを感じるが、親の変化は思うように望めず、無力感につながりやすいことが示されていた（[A-9]）。また、こうした困難を感じる背景には、FSW としての専門的なスキルを身に付ける機会が不足していることや（[A-8]）、そもそも児童養護施設の一職員が子どもの家族を対象としたソーシャル

ワークを担うことの根拠に懐疑的であり（[D・3]）、施設内でも FSW の役割があいまいなままに置かれている（[A・4]）ことが示された。

一方、FSW 自身にも明確な役割として認識されていた行政機関との関わりにも困難が語られた。それはケースに対する問題認識に温度差があり、情報収集に困難を来すことから始まり（[A・4] [A・6] [D・9]）、行政の柔軟性を欠いた対応に不満を抱き、協働しにくさを感じていること（[C・3]）、また行政が子どもの家族に対して非現実的なほど過大な要求をしていると FSW には感じられること（[A・3]）等として示された。ここには FSW が自らの専門性として明確に認識している連携機能だからこそ、それが阻害されることに FSW としての困難を感じている様子がうかがえる。

## （12）児童養護施設の将来に向けた課題

先述した FSW として感じる困難に加え、児童養護施設が抱えている課題について語られた点を整理しておく。該当した論理記述は以下の 7 つであった。

- 11) 児童養護施設が専門的な独自性を保持し、職員が専門スキルの向上に努めなければ、社会的養護が必要とされなくなるという危機感を抱いている
- 24) わが国の社会的養護は絶対的低水準にあり、比較的条件の良い都市部でも不足を感じる
- 53) 施設へのまなざしの非親和性と古いイメージを払しょくするため、地域へ施設を開くことが必要である
- 54) 職員の非永続性が子どもには愛着の障害となり、職員にはバーンアウト予防になっている
- 60) FSW が名目だけにならないよう、より活用される必要がある。特に積極的な家庭支援が求められる
- 61) 児童養護施設の偏った理解を解消するために、地域に施設を開き、地域住民を啓蒙する必要があるが、地理的困難さがある
- 66) 児童相談所は入所期間の見通しと施設定員を考慮して措置に消極的である

ここでは多様な論点を示されたが、最初に現在の児童養護施設の水準についての指摘を見ておこう。B 氏は所属する施設を、自治体加算がついて比較的恵まれていると認識しながらも、我が国の社会的養護の絶対的な職員配置水準の低さを批判している（[B・7]）。職員の頻繁な交代も避けられず、子どもにとっては職員とのパーマネントな関係を構築しづらい状況である（[D・1] [E・1]）。A 氏は現状のままでは児童養護施設が社会から必要とされなくなるのではないかと危機感を抱き、児童養護施設でなければできない専門性の獲得が必要だと指摘している（[A・8]）。そのためには施設規模の改善が不可欠だが、小規模化すれば今以上に CW の個人的な力量が問われること（[A・9]）、一人の FSW が全ケースを一元管理することが困難になり、ケアユニットの責任者と FSW との間でソーシャルワーク

業務を巡って新たな業務分掌の必要性が生じることが指摘された（〔F・10〕）。

近年は児童虐待問題が社会的に関心を集め、タイガーマスク現象<sup>iii</sup>によって児童養護施設も脚光を浴びる事態となった。しかしそれでも児童養護施設が存在や役割が地域社会には理解されず、入所児童が学校や地域社会からの排除を経験していることから、児童養護施設が地域にもっと開かれていく必要性が指摘されていた（〔A・6〕〔D・10〕〔E・8〕）。

### （13）勤務形態と施設規模

最後に、FSW としてどのような勤務形態が理想的だと考えているか、その語りから分析したい。アンケート調査では、専門の FSW は全体の 27%、他職種を兼業の FSW は全体の 72%であった。アンケートでもそれぞれに利点と欠点が挙げられていたが、ここでもいずれの立場からも利点が語られている。該当した論理記述は以下の 3 つである。

#### 21)FSW の業務量と配置の不均衡がある

55)CW と FSW の兼務は忙しく他の職員への負担があるが、子どもを把握できる利点もあり、現状の兼務割合は妥当である

#### 78)施設規模・形態によって FSW の最適な配置は異なる

兼業の FSW からは、業務量の多さの不満はあるものの、兼業であることを好意的に受け止める見方が語られた。E 氏は自身の業務形態を振り返りながら、FSW と CW をおよそ同程度の割合で兼業している現状を、「専任にしてももらえればそんなありがたいことはない」と言いながら、程よいバランスだとも語っている（〔E・2〕）。

一方、専門 FSW からは専門であることを重視する語りが見られた。C 氏は兼業と専門のいずれも経験した立場から、専門でなければとても勤まらない職種だと考えている（〔C・9〕）。ケアワークを担当しないことで、子どもの様子を直接把握する機会は兼業 FSW に比べて限られているが、CW との緊密な連携や、子どもと接する機会を持つ努力をすることによって情報を補っている（〔B・5〕〔D・2〕）。また、たとえ専門であったとしても、施設の規模が大きい場合や、グループホームが点在しているタイプの施設では、1 名の FSW がすべてのケースを把握することはおよそ不可能であるとも指摘された（〔B・5〕〔D・2〕）。児童養護施設の小規模化、ユニット化、グループホーム化は今日の社会的養護政策の基本方針でもある。そのため、地域に分散した施設で 1 名の FSW が業務に困難を来すことは今後ますます現実味を帯びた懸念であろう。

このような現状に対応するために、F 氏はチームで対応するという理想を持っている（〔F・9〕）。F 氏は、もともとすべての CW がファミリーソーシャルワークを行えることを理想と考えており、実質的にはグループホームやユニットの責任者がソーシャルワークを行いながら、施設全体を統括する FSW を置く形態が今後増えるのではないかと予想を語った。

FSW が兼業であるか専業であるかにはいずれにも利点と欠点があることは見た通りである。制度導入時の厚生労働省通知<sup>iv</sup>によれば、専業配置することが求められていた。2012 年の新通知<sup>v</sup>では新たに資格要件も設定されたところである。だが、FSW が専業で配置されさえすれば、問題が解決するというわけにはいかないようである。施設の規模や職員配置状況、関係機関や地域の資源との関係等の諸条件によって、FSW をどのように配置することが理想的なのか、まだしばらく現場での試行錯誤が求められるのではないかと。

#### (14) まとめ

上述の 13 カテゴリー全体を振り返っておこう。

インタビュー調査時点は児童養護施設に家庭支援専門相談員を配置できるようになって 7 年目、配置が義務化される前年のことであった。調査からは、FSW が施設全体で早期家庭復帰への取り組みを意識的に行うようになったという変化を自覚している一方で、家庭復帰事例数そのものはあまり変化がないことが示された。FSW としての役割は施設内の他職種、施設外の関係諸機関との連携が中心だが、行政機関をはじめとする地域の関係機関の職員とはケースの状況判断をめぐって認識に差があり、連携の困難さを感じている。このような困難さや、家庭復帰への動機づけには施設が立地している地域間格差があることが伺えた。また、勤務形態や施設規模等によっても、業務に差があることが浮き彫りになった。

FSW は家庭復帰を妨げるものに家庭の脆弱さがあると認識している。だが児童養護施設の専門性は子育てスキルの伝達と、それを介した親との信頼関係構築に集中的に現れており、FSW は家庭復帰についてはプロセスとゴールを明確にして支援を行っているが、家庭の脆弱さに直接介入する手段と権限を持たないと考えていた。そのため、家庭復帰だけが「家族再統合」ではないと考える一方で、親子関係の維持には強い関心を持ち、わずかなつながりでも家族であると考えていた。

#### 6. 「帰せる家庭」から親子関係の維持へ

前節で詳しく見たように、入所児童の生家が「帰せる家庭」であるかどうかを判断し、かつ「帰せる家庭」へと変化するよう支援するという家庭支援専門相談員制度導入の政策意図、FSW への役割期待に対して、FSW 自身は肯定的な受け止め方をしている場合と、批判的な受け止め方をしている場合とがあった。それでも現実には FSW は客観的な判断基準に基づいて「帰せる家庭」か否かを判断するのみならず、保護者との情緒的な対話を通して判断を行っていた。ここで FSW によって判断される「帰せる家庭」の阻害要因とは、入所の原因となった児童虐待が生じた背景にある生活基盤の脆弱さおよび保護者の心身の健康上の問題である。この児童虐待の背景にある根本の要因が解消されなければ、家庭復帰は望めないが、FSW は保護者と密接に関わる立場から、保護者が経済的にも人的ネット

ワークの面でも脆弱な状態に置かれていることをよく把握している。

「底辺層の人間なの、すごく。で、自己評価低いんです、親も。空があったら地上があつて、海面から 5 m、10m、チョウチンアンコウの世界まであるわけじゃないですか。チョウチンアンコウの世界ですよ、親御さんて。自己評価低いし、近所との関係性も取れないし。そういう親御さんが多いんですよ。」(F 氏の語りより)

しかし、実際には、FSW は保護者の生活基盤を安定させることに貢献できるような手段も権限も有してはいない。児童養護施設が保持している専門性は専ら子育てスキルであり、スキルの伝達を通じてのみ、入所児童の家庭に関わることが可能になる。FSW 個人がこの子育てスキルを有しているとしても、それは CW としてのキャリアから獲得した専門性に過ぎず、FSW の専門性とは言い難い。わずかに専門性と呼べるものがあるとすれば、自己評価の低い保護者に対して視線を合わせ、対等な関係を築くスキルであろう。多くの FSW は、行政職員にはこのような要支援者と対等な立場に立とうとする視点が欠如しており、そのために支援の効果が上がらないと認識していた。それに対して、FSW たちは対人援助職としてのアイデンティティを持ち、保護者に対して一方的で指導的な態度を取ることに批判的であった。そのため保護者の信頼を得て、子育てに関しては助言を与える立場を得る努力をし、実際に獲得してもいる。しかし、保護者が置かれている脆弱な生活基盤に介入し、問題の解消に関わるソーシャルワークとなると、彼らはまったく無力な存在であり、「帰せる家庭」であることを阻害する根本要因に介入できない周辺性、無力感が認識されていた。しかもこれは FSW の勤務形態には一切関係なく、専門の FSW であっても家庭に介入するソーシャルワークを行えていなかった。

そこで、FSW の意識は「帰せる家庭」の構築というゴールを通り越し、究極のゴールとしての親子関係の維持に向かっていく。それは子どもが保護者に日常生活上も精神的にも依存し、世話を受ける関係に戻る年少児の家庭復帰でも、扶養関係が減少・逆転する高齢児の家庭復帰を目指すのでもなく、居住形態を問うことなく、細いつながりで辛うじて保たれている親子の関係を肯定しようというものである。もちろん「帰せる家庭」という概念は FSW によって完全に放棄されてしまうのではなく、理想として堅持されてはいるのだが、ゴールというよりはむしろ目標としうるか否かの分岐点として認識されているようである。ここには、親子はいかにあるべきかという FSW の価値が反映されているのだが、その価値は FSW という職種に共有された専門的価値というよりも、個人的な価値であるようである。子どもの本音を感受できる立場にある児童養護施設の職員として、子どもが今は一方的に依存できる子ども期を与えてくれなかった親を許すことができず、今後一切の関わりを持ちたくないと思う気持ちを受容するのだが、一方で遠い将来、最終的には親を赦し、自分の親であることを認められる日が来ることを願っている。これは親子関係に対する過剰な神聖視とも取れる FSW の価値の表れであるように見える。しかし、保護者の生

活基盤への介入を閉ざされた FSW にとって、子どもへの支援を通して達成の可能性が残された親子関係の維持は、最後に残された専門的な支援と言えるのかもしれない。

#### 【文献】

- 松本伊智朗(2013)「子ども・家族が直面する複合的困難—調査対象事例の概況」松本伊智朗 編著『子ども虐待と家族—「重なり合う不利」と社会的支援』明石書店
- 大谷尚(2007)「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案--着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 教育科学』(名古屋大学) 54 (2) , 27-44
- 大谷尚(2011)「質的研究シリーズ SCAT:Steps for Coding and Theorization--明示の手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法」『感性工学』10 (3) ,155 - 160
- Trotter,Chris (2006) Working with Involuntary Clients:A Guide to Practice,2<sup>nd</sup> ed.(=2007, 清水隆則監訳『援助を求めないクライアントへの対応—虐待・DV・非行に走る人の心を開く』明石書店)
- 上野加代子・野村知仁(2003)『＜児童虐待＞の構築—捕獲される家族』世界思想社
- 山野良一(2006)「児童虐待は「こころ」の問題か」上野加代子編著『児童虐待のポリティクス』明石書店,53-100

- 
- i ここでの F 氏の FSW 歴には、家庭支援専門相談員制度導入以前からの経歴が含まれるため、制度によらず「ファミリー・ソーシャルワーカー」を担当していたという意味である。
- ii たとえば上野・野村 (2003)、山野 (2006)、松本 (2013) など。
- iii 2010 年の年末に伊達直人と名乗る匿名の人物から群馬県内の児童養護施設にランドセルが寄贈されたことが報道されたのを契機に、全国の児童養護施設に学用品の寄贈や寄付が相次いだ。継続的な支援に結びついた例も見られるが、一過性の流行との見方もあり、評価は定まっていない。
- iv 雇児発 0428005 号通知「乳児院等における早期家庭復帰等の支援体制の強化について」
- v 雇児発 0405 第 11 号通知「家庭支援専門相談員、里親支援専門相談員、心理療法担当職員、個別対応職員、職業指導員及び医療的ケアを担当する職員の配置について」



## 第5章 家族再統合と家族関係修復をめぐる

### 1. 家庭支援専門相談員制度への期待

本章では、第2章から第4章で分析した調査結果をもとに児童養護施設の FSW が考える「家族再統合」について考察を行う。この考察に先立って、もう一度家庭支援専門相談員制度導入の背景として、(1) 児童養護施設措置待機児童の増加、(2) 児童相談所の対応能力の限界、(3) 「家族再統合」概念の導入の3点を示し、併せて同制度が負っている期待に比べて、この制度それ自体がまだ未成熟段階にあることを確認しておきたい。

#### (1) 児童養護施設措置待機児童の増加

第1章の問題の背景および家庭支援専門相談員制度導入の経緯で述べたように、1990年代初頭以降の児童相談所への児童虐待通告件数は増加し続け、多数の子どもが児童養護施設への措置待機状態に置かれている。そのため、児童養護施設は入所児童とその家族に必要な支援を行うことで、早期に子どもを退所させ、施設養護を必要とする次の子どもを受け入れることを要請されている。ここには施設養護を必要とする子どもの増加という需要側と、全国の児童養護施設の総定員数というサービス供給側の著しくのバランスを欠いた状況があり、このため FSW の役割発揮によって施設の回転率を上げることで問題に対処したいという政策の意図が透けて見えている。児童養護施設も 1990 年代初頭の入所児童数の減少期に、被虐待児童を積極的に受け入れることでこれを補ってきた経緯があり、結果として対応の難しい子どもに対するケアの専門性を蓄積してきたことから、インタビュー調査でも被虐待児童の受け入れとその治療を社会的使命と捉える見方が示されていた。

#### (2) 児童相談所の対応能力の限界

同様に、児童相談所の対応能力の限界も家庭支援専門相談員制度導入の背景にあった。才村（才村 2005）は、諸外国に比べてわが国では児童人口に対する児童福祉司の人数が少ないために、児童福祉司一人が担当するケース数が多すぎることに加え、児童福祉司の担当ケース数と専門性に自治体間格差が大きいことを指摘している。とくに都市部では担当ケース数がとりわけ多い傾向にある。その結果、養護相談のうち、施設入所措置を取らないケースでは児童福祉司が保護者への指導を行う一方で、ひとたび児童養護施設に措置された子どもと保護者に対しては、さしあたり子どもの安全が担保されていることから、優先順位が下がりがちである。FSW へのインタビュー調査でも、児童福祉司は入所させた児童を「入れっぱなし」にしているという不満が語られていた。そこで、児童福祉司に代わって入所措置された子どもの家族に対する支援を行い、早期退所させることが期待されたのが FSW であった。

### （３）「家族再統合」概念の輸入

また、わが国の社会的養護のあり方も検討の対象とされてきた。厚生労働省社会保障審議会児童部会の付設専門委員会である「社会的養護のあり方に関する専門委員会」（2003）は、従来の大規模養護から家庭的養護への転換を要請した。同じく全国児童養護施設協議会制度検討特別委員会による『子どもを未来とするために一児童養護施設近未来像Ⅱ』（全国児童養護施設協議会 2003）でも、被虐待児等の特別なニーズを持つ子どもへの専門的なケアを展開するためには、施設の小規模化を推進すべきことを確認している。近未来像Ⅱが示された 2003 年時点で全国の児童養護施設は約 7 割が大舎制施設であった。同委員会ではこれらすべてを直ちに地域小規模児童養護施設に転換することは実現不可能であるが、個々の施設の努力によってユニットケアを導入し、将来的には地域分散型養護に転換していくというビジョンを示している。こうした提言の背景には、里親への措置委託が一般的な諸外国と比較して、わが国の社会的養護が大規模入所施設に偏重していることへの批判がある（津崎 2009；Goodman=2006）。加えて要養護児童と養育者との間の永続性を重視するパーマネンシー・プランニングという視点の導入（Thoburn=1998；遠藤・芝野 1998；志田 2002）や、社会的養護に措置された児童と実の親との関係再構築を重視する「家族再統合」概念（Maluccio et al.1993）が輸入された。その結果として、子どもが養育される環境として、養育者との愛着を結びにくい大規模施設より、家庭的な養護を提供できる小規模施設や里親がふさわしいと考えられるようになっていく。さらに可能な限り家庭復帰を果たすか、親子の間に何らかの関係を結び直し、関係を維持できることが望ましいと考えられるようになった。

### （４）家庭支援専門相談員制度への期待

上述のように、①要養護児童と社会的養護の受け皿との需給バランスが崩れ、措置待機児童が増加し続けていること、②虐待通告急増による児童相談所の対応能力の限界、③児童虐待対応先進諸外国からのパーマネンシー・プランニングの視点と「家族再統合」理論の輸入を背景として、児童福祉司に代わって入所児童とその保護者に対する支援を行い、早期の退所を目指す役割を負ったのが FSW であった。

家庭支援専門相談員制度は 2004 年に児童養護施設に導入されているが、児童福祉法に定める職員配置基準に規定され、配置が義務化されたのは 2011 年、さらに FSW の資格要件が規定されたのは 2012 年のことである。明確な業務指針が示されないまま、各施設の努力によって職員配置を行い、行うべき業務を模索することを余儀なくされてきた。本研究の調査時点では回答のあった施設の約 7 割は CW 等との兼業配置であったが、回答しなかった施設のなかには、まだ FSW を配置していなかった施設もあったと推測できる。インタビュー調査では「なにをしたらいいのか、というのが正直なところで」という、FSW の心情の吐露も見られた。自らの業務と専門性を手探りしながら、家庭支援専門相談員制度の周知から行っているのが現状であろう。このような状況の中で、で少しずつ FSW の業務が確

立し、専門性が構築されてきているとすれば、それはひとえに全国の FSW 経験者の努力によるものと言えよう。しかし、調査からはそのような個人的な努力では克服しがたい課題があることが示された。

## 2. FSW の立ち位置と業務の周辺性

### (1) CW の延長としての FSW の専門性

第 3 章ではアンケート調査の自由記述分析から、FSW の果たす二つの役割を明らかにした。「家庭支援役割」と「社会的自立支援役割」の二つは、「家庭復帰ケース」と「社会的自立ケース」のいずれのケースにおいても発揮されていることを示した。ただし、その表れ方には、「家庭復帰ケース」と「社会的自立ケース」の間に差異が見られた。

「家庭支援役割」は、保護者をケアできる大人へと変化させ、入所児童の生家を「帰せる家庭」へと変化させる役割であった。「社会的自立ケース」においても、子どもの生家と親が、自立した子どものサポート資源になりうるか否かをチェックするという意味で、この役割が限定的に現れていたが、この役割がもっぱら発揮されていたのは「家庭復帰ケース」である。それは「家庭復帰ケース」の方が子どもの入退所時年齢が低いことに起因していると考えられる。子どもの年齢が低いほど大人のケアを必要とするため、保護者のケア能力や家庭の養育能力が要求されるからであり、また子どもの年齢の低いうちの方が、子育ての苦労の共有を通して、親への働きかけが可能だと判断されているためである。これら保護者のケア能力と家庭の養育能力の向上を達成するために FSW が行っていたことは、アンケート調査で得られた結果（第 3 章）もインタビュー調査で得られた結果（第 4 章）も一致していた。すなわち、親に寄り添い、その味方になり、施設での子どもの様子を知らせて成長を共に喜び、子どもの特性に合わせた子育てスキルを伝授し、親の努力や成長を評価することである。

一方「社会的自立支援役割」は、主には子どもが一人で独立した生活を営める力をつけさせ、その生活を支える地域のネットワークを構築しうるような支援として発揮されていた。親子分離を伴う児童養護施設への措置ケースは、一時的なものであるにせよ深刻な親子関係の分断を経験している。このため、FSW は「家庭復帰ケース」「社会的自立ケース」いずれのケースでも、まず親子関係を整理し修復する働きかけを行っていた。家庭復帰が可能なケースであれば、この親子関係の修復は「家庭支援役割」の発揮の中で行われる。しかし家庭復帰を目指して支援を続けたものの、ある時点でそれが不可能であると判断されたとき、支援のゴールと性質が変化してくる。すなわち、その支援はまず子どもに親と同居しケアされる生活をあきらめさせつつ、社会的自立を目指す方向へ転換される。だが、同時に親子の縁が完全に切れてしまわないための、限定的な関係構築を促すという支援に変化するのである。インタビュー調査では、子どもの生い立ちを整理し、自らのルーツとしての親を「いつか受け入れられる」ための素地作りの重要性が語られていたが、ここに

「社会的自立ケース」における親子関係の修復の内容が端的に示されているといえよう。

上述の二つの役割は、各ケースのどの段階で強調されるかによって差異があるが、実は二つとも FSW の職種に特有の役割というよりは、一面では CW の職種に依拠した役割であるようにみえる。特に子どもの特性に合わせた子育てを模索し、これを親と共有しつつ、子どもの成長を共に喜んだり、社会的自立へ向けて生活力を身に付けさせるような働きかけは、常に生活を共にしている CW でなければできないことである。そのため、直接ケアワークに従事しない専業の FSW は、CW との連携を重視している。自らの子どもとの関わりでは不足する情報を CW から得て補った上で、初めて関係機関とも保護者とも FSW として対応できるのである。

反面で、完全に CW の視点に立つては見えてこないケースの客観的な理解や、保護者に対する非審判的な態度、地域資源を組織化していく関わりはケアワークというよりソーシャルワークによるものであると理解できる。だがこれらのソーシャルワークの視点は、上述のケアワークの視点の存在を前提にして成立するものであることが、FSW 自身によって強調されている。したがって FSW の専門性はケアワークの専門性と、ソーシャルワークの専門性との統合されたところにあり、換言すれば基盤としてのケアワークの専門性に、ソーシャルワークの専門性が上乘せされたものだと思われる。

## （２）FSW 業務の周辺性

FSW が上述のケアワークの専門性を根底に持つソーシャルワークを行っている一方で、2つの調査からは、FSW が家庭復帰を妨げている要因が親の子育てスキルの欠如だけではないことも認識していることが示された。第3章で見たアンケート調査では、社会的自立ケースでは子どもの入所時年齢に関わらず【帰れる家庭の不在】というカテゴリーが抽出されていた。ここには保護者の養育能力の未熟さとともに、生活基盤の不安定さや家庭そのものが存在しないことが含まれている。第4章で見たインタビュー調査でも、家庭復帰を妨げる要因として保護者の経済的な不安定さや両親間・祖父母間の関係の悪さが着目されていた。施設入所者の多くを占める虐待家庭に経済的、人的資源を含む生活基盤の脆弱さが見られることは、先行研究でも指摘されていたとおりである。たとえば西田ら（西田ほか 2011）の児童養護施設退所者の生活実態調査によれば、施設経験者の家庭的背景として「親の就業の不安定さと貧困」「家族構成の不安定さ」「親の疾病・障害、精神的不安定さ」の3点が特徴として挙げられている。

本調査対象者が生まれ育った家族とは、経済的困難・貧困や家族構成の不安定・不定形さ、親の疾病や障害、さらには虐待としても表れることになる家族関係における困難さ—これら重層的な困難を抱え持った家族であった。そして、児童養護施設入所に至る過程は、そうしたさまざまな困難や不利のそれぞれが原因となり結果となりながら、分かちがたく絡み合い蓄積されていく過程であった。それは各種調査研究の統

計データから浮かび上がる、施設入所児童とその家族の姿と重なっており、家族的背景という点では、彼／彼女らは施設経験者の典型であるといえる。そして、そうした成育家族に見られる困難さや不利は、施設入所後も継続しており、なかには困難さが深刻化さえしている。(妻木 2011 : 38)

しかしインタビュー調査からは、これらの生活基盤の脆弱さは FSW としての立場からは支援不可能な課題として認識されていることが示された。児童養護施設に所属する FSW が、保護者への子育てスキルの伝達や情緒的共感を超えて、保護者の生活そのものに踏み込み、その改善に働きかけるような職権がいかなる根拠に基づくものなのか不明瞭であることが背景にある。

また、従来の児童福祉が今日では子ども家庭福祉と呼ばれ、広く一般子育て世帯を対象とした子育て支援が指向されるなかで、親子分離を伴う社会的養護は必然的に特殊な位置を占めざるを得ない。子どもを育てている保護者自身や、子どもが育つ場としての「家庭」を支援するのではなく、子どもだけを分離保護する点で異質な政策と言える。児童相談所が対応する虐待相談の約 9 割が在宅での児童福祉司指導となり、親子の生活が維持されることと比較しても、分離保護という社会的養護の特殊性は自明であろう。つまり、子ども家庭福祉政策がどれほど在宅の親子維持を志向しようとも、どうしても子どもだけを保護せざるを得ない深刻な例外が社会的養護事例といえる。

しかも、今日の社会的養護は家庭的養護を志向してますますケア単位を小規模化し、地域に分散化している。この小規模化、地域分散化が進めば進むほど、FSW は実際の子どもの生活から切り離され、CW の専門性に規定された FSW の専門性が発揮しにくくなるという矛盾を生じさせている。インタビュー調査で F 氏が繰り返し指摘したように、施設が分散すればするほど、FSW が一人で FSW の業務を担うことが困難になり、ホームごとの FSW と全体を統括する FSW による協働体制が要請されることになる。

そのため、FSW は入所児童の生家が陥っている生活基盤の困難な状況を認識していながら、そこに直接介入する職業的基盤を持ちえないばかりか、社会的養護が子どもにとってよりよい養護を目指して小規模化・地域分散化していくために、児童養護施設の専門性を活かした保護者支援を行う際に基盤となるはずの CW の専門性からも隔絶されていく可能性を持つという矛盾を抱えている。児童養護施設の組織内部で FSW としての独自性を見出そうとすれば、専門性の基盤であるケアワークから遠ざかる。他方で社会的養護の関係機関ネットワーク内部で FSW としての独自性を見出そうとすれば、子どもの生家の生活基盤に介入する職業的根拠から遠ざかる。FSW はこのような難しい立ち位置のなかで、制度導入時に期待された多大で広範な役割の周辺にとどまらざるを得ないというジレンマを抱えていると考えられる。

### 3. FSWが見据える2つの未来

#### (1) 子どもが経験する二重の排除

これまで主に FSW の視点からその役割を分析してきたが、視点を転じて、児童養護施設に措置される子どもにとって、社会的養護とはどのような経験であるかに着目してみたい。すでに先行研究にもあるように、児童養護施設への入所児童は近年わが国でも使われ出し、「社会的排除」概念でしばしば捉えられている。第 1 章でも指摘したとおり、子どもにとっての社会的養護の経験は、二重の排除状態としてとらえることが可能である。

家族内で児童虐待が発生し、親子分離の必要性が判断されたとき、わが国ではほとんどのケースで子どもが家から退出することになる。性的虐待や父母間の DV で虐待者に接近禁止命令が出される等の少数のケースを除き、虐待者である保護者が家から退去することは稀である。前節で述べたように、今日の子どもの家庭福祉は一般子育て世帯を対象としており、虐待通告により児童相談所の介入を受ける家庭でさえ、大部分は在宅での福祉司指導で終了する。そのなかで親子分離せざるを得ないケースとは、これ以上在宅での指導を続けることが子どもの生命の安全を損なうと判断された重篤なケースである。そのため、行政にも、一般市民の間にも、子どもを分離保護することへの心理的抵抗はほとんど存在していない。子どもを危険な家族から保護する親子分離は、行政や社会的養護の視点から見れば、子どもの福祉に適ったことなのである。

しかし子どもやその保護者の視点から見れば、これとは異なる側面が見えてくるはずであろう。子どもだけを家族から退出させて保護する親子分離は「家族からの子どもの排除」であり、さらにはほとんど崩壊寸前だった家族間のつながりを決定的に破壊し、「家族の解体」に至らしめる。このことはまた、子どもにとっても、親子分離が行われたことに対して、自らの行動や存在に原因があったのではないかと罪悪感を抱かせる原因にもなっている。檜原らの調査によれば、児童養護施設に入所している子どものなかには、施設への入所を「自分が悪いから」と考えている子どもが一定数いることが報告されている（檜原ほか 2009）。また保護者の入院、拘禁により子どもが保護されたケースでは、家族メンバーがすべて「家庭」から退出してしまい、「家庭」そのものの解体が生じている。子どもが育つためには、子育ての「場」である家庭と、親子を中心とした近親者間の情緒的な結びつきの可能性が不可欠であるが、皮肉にも子どもの福祉を図ろうとすることで、子どもをその「場」から引きはがし、情緒的な結びつきを断絶させることになるのである。もちろん、そうした介入が行われるのは、「家庭」としての「場」も情緒的結びつきもすでに崩壊しており、介入しないよりは良い結果が得られるとの判断がなされているケースである。それでも、必要に迫られて親子の関係を分断した行政と社会的養護は、もう一度親子の関係をつなぎなおすという義務を負うことになる。

また、深刻な児童虐待に至るケースは、不安定な就労と所得、夫婦関係・親族ネットワークの不安定さ、地域・交友関係からの孤立等の課題を抱えていることが知られている。こうした家族は、就労面でも人的ネットワークの面でも確かな帰属を持たず、社会的に排

除された家族だということができよう。今日の社会保障制度の多くが、社会の中心に位置を占めている一般世帯を対象にしているのに対し、これらの家族はもっとも政策的な配慮を必要としているにもかかわらず、社会の周縁へと追いやられ、政策の恩恵を十分に受けていない。たとえば 2000 年代には国民健康保険の保険料未納のために、医療機関に受診できない子どもの存在が社会問題化した。また転居を繰り返したり、居住している自治体に住民票が置かれていないために、虐待の兆候が発見されていたにもかかわらず、児童相談所が介入できない事態が起きている。地域の子育て支援機関として期待されている児童家庭支援センターや保育所も、利用していなければ、家族の異変に気づくことはできない。だが重篤な虐待が生じる家庭は、度重なる不利の経験ゆえに、自ら支援を求めることは少ない。労働市場からも、地域社会からも、行政サービスからも周縁に追いやられ、一般的な子育て支援も、彼らがもっとも必要とする選別的な支援も届きにくい、社会的に排除された家族なのである。

したがって、社会的養護に措置される子どもは、社会的に排除され周縁に追いやられ、いつ社会からドロップアウトしてもおかしくない家庭に生まれ育ちながら、さらにその家族から自分だけが排除されるという二重の排除を経験しているとみることができる。もちろん上述したように、子どもの家族からの排除は、ドロップアウト寸前の家庭からの子どもの救出ではある。だがそのような福祉の理屈は、子どもが安全な家庭復帰を果たすか、完全に親をあきらめられるようにならなければ理解されないであろう。そのため、社会的養護はこの一時的な親子分離を、まずは子どもにとって、可能であれば親や家族にとっても必要な良い経験だったと事後的に認識を変える責務を負っている。この親子分離を親子にとってどのような経験に変えるのかという点において、今回の調査において FSW は以下の 2 つの未来を見据えていると判断できる。すなわち、「帰せる場」としての家庭と、「赦せる親」との親子関係である。

## （２）「帰せる場」としての家庭

FSW が見据える 2 つの未来のひとつは、「帰せる場」としての家庭である。これは退所直後という比較的近い将来の具体的な生活がイメージされた未来像である。

社会的養護に措置された子どもの生家は、生活基盤の脆弱さと子育てスキルの欠落、また親子間の情緒的結びつきの希薄さによって子育ての「場」とはなり得ないと判断され、措置に至った。ここで述べる子育ての「場」とは、第一に時間的に、第二に空間的に、公私のサポートネットワークに支えられながら子どもが成長するまで持続的に存在する「家庭」を指す。重篤な虐待が発生した入所児童の生家は、父母間の関係や、実親とパートナーとの関係が不安定で、子どもを含めた家族としての関係を長期に継続することができない。またこの不安定な関係や経済的理由から居所を頻繁に変えるなど、空間的にも持続性がない。むしろ現代では離婚・再婚は決して珍しい事象ではなくなり、それに伴い父母の離婚や継父母との生活を経験する子どもも増えている。また転居それ自体に子どもの成育

を妨げる要素があるわけではない。家族間の関係が安定していれば、転居によって「家庭」が崩壊することはないであろうし、あるいは居所が安定していれば、時に家族の構成員に変動があっても、子どもは帰属意識を持つこともできよう。だが重篤な虐待ケースでは、居所と家族関係が同時に、そして常時不安定であるところに問題がある。さらにこれらのケースでは、公的にも私的にも生活や子育てをサポートするネットワークからも切り離されている。ここでは子どもは父母・継父母との関係にも、日々帰るべき家にも永続的な帰属意識を持ちえず、明日は今日と同じ生活が送れるのかどうか分からない不安定な状態に置かれる。安部らの調査、および浅井らの調査でも、児童相談所に一時保護された子どもたちが保護されて良かったと感じるのは、衣食住というあたりまえの生活が満たされ、安心できたときであることが報告されている（山屋 2009；大澤 2012a）。社会的養護に措置された子どもの生家は、すでに子育ての「場」としての「家庭」ではなくなっていたと言える。

それでも、子どもの入所措置を契機として、保護者に対しても指導や支援が与えられることで、FSWは子どもの生家が時間的・空間的に永続性を持った「家庭」になり得ると判断することもある。判断するのみでなく、入所児童の生家を「家庭」にするという目標を持って働きかけるのがFSWであった。FSWが担う「家庭支援役割」は子どもの生家を「帰せる場」としての「家庭」に変化させる働きをするものであったことは第3章で確認した。

FSWが「帰せる場」としての「家庭」を、あるケースの未来に見出す時、それは明確に家庭復帰ケースだということができる。他方、社会的自立ケースは、子どもに生家が「家庭」であることを諦めさせることが支援の中核であった。したがって、FSWが見据える「帰せる場」としての「家庭」は、家庭復帰という近い将来に設定された、ある地域での、居所と同居者が固定され、どのようなネットワークによって支えられながら生活するのかという極めて具体的なイメージを持って捉えられている。第3章では家庭復帰ケースの入退所時年齢が社会的自立ケースに比べて低年齢であることを示したが、子育ての「場」としての「家庭」を必要とするのは、比較的低年齢の子どもであろう。そのため、FSWが「帰せる場」としての「家庭」を未来像とする対象は主に年少児である。その際、子どもが帰っていく「家庭」は必ずしも入所以前の家族メンバーと居所を同一にするのではなく、祖父母をはじめとする親族が加わったり、近居してサポートするなど、家族の範囲に変化がある場合があった。このような家族範囲のコントロールもまた、「家庭」を整えるFSWの援助といえる。

### （3）「赦せる親」との親子関係

一方で、入所児童の生家が「帰せる場」としての「家庭」にはなり得ないと判断した時、FSWはもうひとつの未来を見ていると考えられる。それは、「赦せる親」との親子関係である。今日の社会的養護ではすべてのケースで早期の家庭復帰は一応の目標とされる。しかし実際には様々な理由から入所児童の生家は「家庭」にはなり得ず、あるいは年少児で



なければ、このような「家庭」を日常的に必ずしも必要としているわけではない。

第4章で分析したように、FSW は主として高齢児に対しては、子どもに親を諦めさせ、自立するための支援を行っていた。だがその際、あきらめるべきと見なされたのは、子どもを「家庭」に迎え入れてくれる親であって、親子関係そのものではなかった。むしろ、現実には極めて限定的であっても、親子の縁が完全に途絶えてしまわないことが重視されていたのである。親をあきらめざるを得なかった子どもにとって、親とは慕おうとしても愛情を返してくれず、「家庭」に迎え入れられたいというあたりまえの望みを叶えてくれなかった存在である。同世代の若者に比べて、学業の達成度や就労の安定性、経済的基盤、困った時に頼れる人的資源等で圧倒的に不利な状態での自立を迫られるのも、親が頼れる存在ではなかったことに起因する。そのため、これから自立しようとする子どもが児童養護施設を退所する時点で親に恨みを抱き、関わり合いを持ちたくないとも考えることも、自然なことといえよう。FSW はそのような入所児童の感情を十分に理解しているが、そのうえであえて親子関係の継続を主張するのである。この時 FSW によって眼差されている未来は、子どもの退所直後ではなく、10 年後、20 年後、時にはもっと遠い未来の親子関係である。元入所児童が他者との親密な関係を築く時、子どもを得て親となった時、親を亡くした時、自身が年老いた時、いずれの時点であるかは明確にされないまま、人生のどこかの時点で、あるいは節目ごとに、親を赦し、親の存在を許容することが期待されている。関わりを断ちたいと望んでいた親を赦し許容することは、すなわちその親の子どもである自分自身を許容することでもある。先に F 氏が述べたように、「最終的にその親に対してね、線香一本でもあげられるようになれば成功したのかなと思ってるの。骨拾えりや成功かなと思ってるの、最終ラインでね、虐待受けてきた子どもたちの」との表現は、この時間の不確かさを象徴的に示しているといえよう。

さらに、親を赦せるまでにかかる時間が不確かなことに加え、その際の親子の物理的・心理的距離についても不問とされていることに注目したい。親子が実際に連絡を取り合ったり、互いに生活を支え合っているのかどうかという具体的な生活のあり方も、互いに本心から信頼し合っているのかという心の距離も、ここでは一切問われることはない。このように時間的にも生活イメージでも具体性を欠いたまま、いつか子どもが「赦せる親」との親子関係を自ら見出すような支援が漠然と期待されているのである。

#### 4. 「場」への包摂と「関係」への収斂

本節では、前節で考察した FSW が入所児童の退所にあたって見据えている2つの未来をもとに、FSW が考える「家族再統合」が2つのパターンに整序されることを示す。2つのパターンとは、子どもが子育ての「場」である「家庭」に再び迎え入れられる「場」への包摂と、家族が解体されて親子間の二者関係に縮小していく「関係」への収斂とである（図 5-1・図 5-2）。以下にそれぞれの特徴と課題を検討する。

### (1) 「場」への包摂

主に年少児のケースにおいて、FSW が入所児童の生家を「帰せる場」になり得ると判断すれば、そのケースは家庭復帰という具体的なゴールに向かって支援が進行する。FSW は親に対して働きかけることで親をケアできる大人に変え、入所措置に至るほど「家庭」としての機能を失っていた生家を、子どもを「帰せる場」としての「家庭」へと修復していく「家庭支援役割」を担う。家族再統合政策でもっとも統合度が高いゴールである家庭復帰は、一度は家族から排除された子どもが「家庭」へ再び迎え入れられることであると言える。この「家庭」は前節で述べた通り、子育てのために各種ネットワークに支えられながら、また時に家族構成メンバーや居所を変化させながらも、空間的・時間的に一定程度持続的に存在する「場」である。FSW の考える家族再統合のひとつのパターンは、このような意味での子どもの「場」への包摂であると言えよう。社会的養護への措置は子どもの「家族からの排除」を意味した。社会的養護が終結するとき、今度は子どもがただ単純に元の家族へ戻るのではなく、子育てという目的のために一定期間存続する「場」へと包摂されていくことが期待されていると理解できる。

ところでこの「場」の概念は、当然のことながら親子が共に暮らせる空間、つまり安定的な住居であるのみならず、以下のものを含む。すなわち、特定の住居に安定的に住み続けることを可能とする生活基盤の安定性や、家族成員間の持続的で安定した情緒的関係、および彼らが家族として存続することに対する社会的承認である。そもそも親子分離を伴って社会的養護に措置されたケースは、生活基盤の不安定さから社会の周縁に追いやられ、家族成員間の関係の不安定さから家族は解体しつつあった。そのため、生活基盤の安定化と家族成員間の関係の安定化を図ることなしに、入所児童の生家が「場」になることはあり得ない。したがって、子どもを「場」へと包摂することは、必然的に「場」すなわちその「家庭」を社会の中に安定的に位置づけることを伴うのである。「家庭」の社会への包摂なしに子どもの「場」への包摂もまた成し得ないと言えよう。二重の排除を経験した子どもが、排除状態からの脱出を図るためには、「場」への包摂と「場」の社会への包摂という二重の包摂が不可欠になる。

ただし、「家庭」の社会への包摂の程度については留意が必要であろう。彼らが社会の中心にしっかりと包摂されるわけではないことは、家庭復帰させることを決意する FSW にもしっかりと認識されている。ある FSW は、家庭の経済的な不安定さを家庭復帰の後も続く心配として語っていた。また別の FSW は、長い目で見れば「家庭」は再び社会の周縁へと追いやられ、ドロップアウトする可能性もあると認識しながら、今しばらくの間は「場」となり得ると判断されれば、思い切って家庭復帰させるという決断をすることが子どもの福祉に適うことであるとの認識を示していた。このように、仮に家庭復帰が果たせても、「家庭」そのものは必ずしも社会の中心に確固たる位置を占められるわけではないのである。

そのため、「場」への包摂というパターンの家族再統合が安定的な再統合であるためには、

「家庭」自体も社会の中に包摂されるための支援が必要となる。**FSW**が行う子育てスキルの保護者への伝達もその一つであろう。また児童家庭支援センターや保育所の利用など、家庭復帰に向けて構築される地域のネットワーク、生活基盤の安定化を目的とした就労支援や社会保障制度の利用なども、「家庭」を社会に包摂しなおすための手立てと見なすことができる。だが、次節で詳述するように、このような生活基盤の安定化に直接寄与する支援を**FSW**が行うことは極めて困難である。また、実際にはこれらの支援を通じて「家庭」を社会の奥深く、中心へと位置付け直すことは極めて困難であろう。それでも少なくとも家庭復帰が果たせる程度に「場」が成立することが、**FSW**の考える「家族再統合」の達成のひとつのパターンであったといえよう。



図 5-1 「場」への包摂

## (2)「関係」への収斂

一方で、**FSW**の支援や児童相談所の指導にもかかわらず、入所児童の生家が子どもを包摂し得る「場」となり得ないとき、**FSW**はもうひとつの家族再統合のパターンを模索することになる。「場」の成立しないところには父母や親子、きょうだい等の複数の関係から成立する有機的で複合的な家族は存在しない。なかでも親と子の関係は、元の家族に戻れないばかりか、徹底的に分断されてしまっているように見える。その断絶は、社会的養護の原因でもあり、同時に長期にわたる親子分離の結果でもある。このような状況に対して、**FSW**はもはや複合的で有機的なつながりである家族を目指すのではなく、ただ今にも断絶しそうな親と子の二者関係を辛うじて繋ぎとめ、親子関係を新構築することに働きかけるようになる。ここにはもはや社会に包摂されるべき「場」は存在せず、ただ親と子の個人の関係が存在するだけである。こうして「場」への包摂の可能性が放棄された家族再統合は、そのもっとも対極にあるパターンとしての親子という二者間の「関係」へと収斂していく。

前節で考察したように、親子関係は入所児童が退所を迎える段階では決して良好なものではない。子どもは親に対して怒りとあきらめの感情を抱き、今後関わり合いたくないとさえ感じていることもある。親は子どもに対して関心を持たないことが**FSW**によって家庭

復帰の阻害要因だと見なされていたが、時には子どもに対して依存的な態度を示すこともある。自立していかなければならない子どもにとって、親が経済的・精神的負担となることは **FSW** も望んでおらず、ここには一見するとこのまま親子の関係を断ってしまう方がよいように思われる状況がある。しかしそれにもかかわらず、**FSW** は親子関係の継続と回復にこだわっていた。この親子関係に対する過剰な執着と期待の理由として、次の二点が考えられるだろう。

まず第一に、我々の社会には社会慣習的に親子やきょうだいという近親者でなければ果たし得ない役割が多く存在していることである。就職や転居の際の保証人、借金の連帯保証人、治療や介護の同意といった実利的な制度は、場合によっては子どもを危険にさらすことさえある。だがこれらは多くの場合もっとも近い親族である家族に期待されている役割である。また姓の継承や先祖の祭祀などは、必ずしも日常生活に密接した問題とは言えないが、近親者でなければ引き受けることができないという点では、先の実利的な問題以上に制限がある。文化に深く根差した慣習というものは、実用性の如何に関わらず無視できない問題となることがある。

我々の社会が親子関係に過度に期待する理由の第二に、人は本来関係の中に生まれてきて、血縁・地縁からなるコミュニティの中で成長するものであるという広く支持されている価値がある。とくにそうしたコミュニティの最小単位である家族との関係は良好であるべきで、たとえ子どもが自立して物理的には親と距離をおいて生活していても、情緒的つながりを断ち、コミュニティから切り離されてしまっただけでは生きていけないと、**FSW** でさえ確信しているようである。

しかし上述の2つの理由は、**FSW** と我々の社会が共に抱くいわば家族幻想のようなものかもしれない。我々の社会には確かに近親者でなければ果たしにくい役割は存在する。また近親者間の情緒的つながりを保ち、コミュニティへ帰属することの重要性は否定しがたい。しかし、それが果たして本当に親子関係でなければならないのかということは問われなければならないだろう。「場」への包摂を果たした家庭復帰事例には、実の父母ではなく祖父母やおじ・おば宅への引き取りもあり得る。イギリスのバーナードズの研究からは、バーナードホームで育った子どもが大人になってから肉親を探す際、配偶者や子どもの後押しがきっかけとなって探し始めることが指摘されている。また、探す肉親も必ずしも親ではなく、きょうだいであることもある (Pugh1999)。情緒的つながりとコミュニティへの帰属だけが問題なのであれば、必ずしも実親との関係でなくてもよいはずである。上述のイギリスの例からは、肉親捜しの前提に今現在の家族との情緒的な結びつきがあることが主要なファクターであることが示されていた。もっとも、社会的養護に措置されるケースはそもそもが社会への不確かな帰属しか持たず、親もまた祖父母やきょうだいとの関係が深いとは言い難い。そのため、再構築し得るわずかな対象が実の親と子である場合もあるだろう。

いずれにせよ、「場」への包摂をあきらめ、「関係」への収斂というパターンをたどるケ

ースにおいては、自立した子どもと、子どもを迎え入れられなかった親の双方が社会の周縁に追いやられていることは想像に難くない。今日の我々の社会では、近親者とコミュニティから切り離された者は、上述のように様々な実利的な不利益を被ることになる。しかも不利な状況の重なりは、成立する可能性のある人間関係をも分断させる。そのため、多くの課題があるにもかかわらず親子関係の再構築を重視するのであれば、親と子の双方を社会の中心に向かって包摂しなおすためのサポートが不可欠になるが、それは誰によってどのようななされていくことになるだろうか？

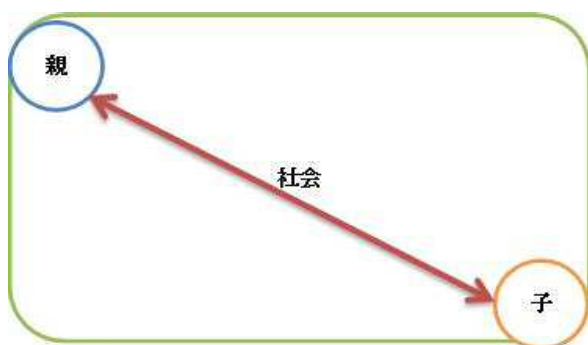


図 5-2 「関係」への収斂

## 5. FSW のジレンマ

### (1) FSW の独自性

家庭支援専門相談員制度導入の過程で確認したように、FSW は何をどのように支援するのかという明確な業務指針をいまだに持っていない。それぞれの施設で手探りをしながら業務を確立し、専門性を模索しているところである。その中で FSW の専門的役割だと思われるものの一部は、実は CW の専門的役割の延長であった。FSW の業務自体は CW の業務との分化が進みつつあるが、その背後にある専門性は、CW の専門性と分かち難く結びついているのである。このことは、調査協力者の約 7 割が CW を兼務しながら FSW 業務を行っていたことと、専門の FSW も CW としてのキャリアを持っていたことから、どこまでが CW の専門性でどこからが FSW の専門性なのかということがますます自覚されにくいのではあるまいか。

しかも、今も多くの施設が大舎制施設で運営されており、そこで FSW が CW を兼務することによって、CW と FSW の専門性の分化が自覚されないまま、連続的に実践されている現状がある。だがこのような実践も、ユニットの独立性が高まり、あるいはグループホームとして施設が地域に分散していくことによって、次第に FSW が専門化されていくだろう。その時、FSW は CW として無意識に得ていた情報を得る手段と、日常業務で発揮していた CW の専門性を発揮する機会とを同時に失うことになる。社会的養護が入所児童にとってより養育者との愛着を結びやすく安心できる場であらうとすればするほど、FSW は入所児童

と密接に関わる機会から遠ざけられるのである。早期の退所を目標とするのであれば入所児童の変化を常時把握し、保護者と子どもの情報と子育ての苦労を共有することが欠かせない。一方で同じく早期の退所を目標とするのであれば、業務量から見ても、他機関との連携にかかる時間の確保という点から見ても、専門化することが期待されている。この FSW として専門分化しながらも、CW としての専門性を保ち続けなければならないという矛盾に対して、FSW からは現行制度より実践的な対応法が示された。

その一つは、FSW をあえて専門化しないというものである。FSW と CW の兼務は個人にとっても、交代勤務を組むチームメンバーにとっても負担は大きい。しかしそれよりも日常的に子どもをケアして CW としての専門性を確保しながら FSW 業務を行う利点があると思われていた。ただし、そのためには現状の一施設一名配置の家庭支援専門相談員制度ではすべての子どもに対応することができない。この問題の解消には CW を兼務する複数の FSW 配置が求められるだろう。

もう一つには、発想を逆転させ、CW が FSW の専門性を身に付けるというものであった。そこではすべての CW が子どもの日常のケアを超えて、ソーシャルワークの視点を持って保護者支援も実践でき、子どもや家族の生活する地域資源のネットワーキングもできるようになることが期待されている。FSW は個別にソーシャルワークを行う CW のスーパーバイザーとなり、施設全体を統括する役割としてケースの背後に引き下がることになる。だが CW がソーシャルワークの視点を身に付けるためには、一定程度の経験が不可欠である。現状のような早期離職率の高い現状を改善しなければ、実現の困難な方法であると言わざるを得ない。

いずれにしても、上記の 2 つの対応案は FSW の専門性と CW の専門性をますます不可分なものにしていくだろう。担当児童との間に強い愛着を結ぶことが求められる CW にも、多忙のために入所措置後のケースに積極的に関わる事が困難な児童福祉司にもできなかった「家族再統合」を担わされた FSW であるが、その専門性を発揮しようとすればするほど、FSW としての独自性はあいまいなものにならざるを得ないという矛盾を抱えている。

## （２）期待と現実の矛盾

FSW は家族幻想ともいえる親子関係への強い期待を持って、実際には家庭復帰できないケースにおいても、親子の「関係」への収斂というパターンの家族再統合を目指して支援を行っていた。ここで目指されるのは近い将来ではなく、いつのこととははっきりしない遠い将来の親子の「関係」である。それも居所を同一にすることや、経済的支援、介助や保育等の手を貸しあう関係といった、目に見える関係の構築ではなく、親を赦すというような目には見えない心境の変化が想定されている。このような支援は目標の達成にきわめて長い期間が想定されている。そのため社会的養護に措置されている期間だけでは支援が終了せず、アフターケアも行われている実態がある。家庭支援専門相談員制度導入の目的にも、「親子関係の再構築が図られること」という文言があり、FSW の業務が短期集中で

はなく長期的な支援となることが想定されているようである。

しかし一方で、家庭支援専門相談員制度は「児童の早期家庭復帰、里親委託を可能とするため（中略）入所児童の早期の退所を促進」することも目的としており、そもそも上記の目的との間には想定期間の矛盾がある。家庭支援専門相談員制度導入の背景に急増する児童虐待通告と需給バランスの崩れがあったことを考慮すれば、同制度が実際には入所児童を早期に退所させることを期待されて導入されたことは明らかであった。そのため、FSWは「場」への包摂をあきらめたケースにおいては遠い将来を視野に入れた長期的支援を志向しているのに対して、家庭復帰させるか他の社会的養護に措置変更するかという差異はあれ、早期に児童養護施設を退所させるという圧力を受けることになる。しかも、児童養護施設という集団養護の形態が子どもにとって一時的な経験であるべきだとの養護理念に基づいての早期退所勧奨というよりはむしろ、入所措置を必要とする待機児童が問題認識されていることに基づいている。その結果、FSWは養護の専門的視点とは異なる判断基準に基づいて入所児童の退所を検討することを迫られる。質問紙調査からも、子どもの退所をめぐる児童相談所と児童養護施設の判断が異なった時、児童相談所の判断に基づいて退所が決定していくことが多いと回答した施設が一定の割合で存在することが明らかになった。同様に、自由記述からもFSWや児童養護施設は退所に反対していても、強引な引き取りによって退所が決定するケースがあり、FSWが無力感を感じていることが示された。ここには子ども家庭福祉制度のなかでFSWの専門性を軽視する傾向さえうかがわれる。

こうしたFSWに対する入所児童を早期退所させることを期待する圧力は、結局のところ医療ソーシャルワーカーに期待されたベッドコントロールの機能と共通するものがある。医療ソーシャルワークはその理念の上ではクライアントの自己決定を尊重し、尊厳のある生活をエンパワーすることをうたっている。しかし現実には、医療機関の専門機能分化に伴って、疾病ごとにあらかじめ設定された入院期間を超えずに退院させることが強く期待されている。入所施設である児童養護施設では、医療機関ほど短期の利用が想定されているわけではない。また現在の医療制度がそうであるように、入所期間の長期化によって措置費が縮小され運営を圧迫する構造にはなっていない。だが施設養護を必要とする子どものリストという無言の圧力が、今後ますますFSWを専門性に基づいた支援理念に反してベッドコントロールへと駆り立てる可能性は否定できないだろう。

### （３）家庭支援専門相談員制度の限界

最後に、調査分析と考察から明らかになった家庭支援専門相談員制度の限界を３点示しておきたい。この３点はそれぞれ独立した問題というよりは、相互に関連し影響し合っている。

第一点は、FSWがファミリーをソーシャルワークする権限の不在である。児童福祉施設である児童養護施設では、入所児童のケアが第一義である。保護者への支援は、あくまでも子どもの福祉を図る目的で正当化されるに過ぎない。とくに子育てスキルを超えて保護

者の生活に介入する権限は、児童相談所しか有していない。しかも、FSW が関われるのは入所期間と、退所後のわずかな期間のみである。一度は断絶した親子の関係を結び直すにも、虐待が生じるほどの生活基盤の脆弱さを改善するにも、決して十分な時間があるとは言えない。そのため、入所児童が退所していくとき、家庭復帰であれ社会的自立であれ、社会の中心にしっかりと生活基盤を確立できるわけではない。社会的養護からは離れて、辛うじて子どもを「場」へと包摂できた家族も、個としての生活を始めざるを得なかった子どもやその親も、あいかわらずいつドロップアウトしてもおかしくない社会の周縁に追いやられたままであることが少なくないだろう。FSW が考える 2 つのパターンの「家族再統合」が達成されるためには、これらの「家庭」も個人も社会の中心に包摂され直す必要があった。しかし、入所期間中でさえ FSW がとくに経済的な基盤の改善に介入する根拠は乏しく、またひとたび社会的養護から離れてしまった家族や個人に対して、個人的な情熱で彼らの生活を安定に導くだけの権限は存在していない。

第二点は、FSW が行う「家庭」や個人を支えるための地域のネットワーキングの有効性の問題である。FSW は社会的自立する子どもに対しては、退所までに就労できるよう支援を行うが、保護者の就労や転職に直接支援ができる立場にはない。そのため生活基盤の経済的側面には関わりにくかった。他方で、子どもが帰っていく「家庭」や自立する子どもが生活を始める地域に対しては、児童家庭支援センターや保育所・学校、民生委員、保健所、福祉事務所などを動員し、親子の生活をサポートするネットワーク構築を行っている。FSW のこうした機能は CW の専門性を超えて極めてソーシャルワーク的な専門性の表れであった。しかし、地域の中で親子の生活を安定的に開始させようとするこれらの関係者の努力も、常に成功するとは限らない。彼らの生活は措置前と比べれば安定しているように見えても、社会の周縁に位置することには変わらないことが多いであろう。そのため、虐待家庭がそうであったように、就労や人間関係の安定性が低く、居住の流動性は高い可能性がある。こうした状況は何事も継続しにくいという彼らのパーソナリティに帰すものではなく、今日の社会構造に深く根差した問題である。しかし、せっかくサポート体制のネットワーキングがなされても、彼らが移転してしまえばそのサポート機能は無効となる。しかも、現状では移転前のネットワークから移転先の各機関に情報提供し、新たな地域ネットワークが行われることは極めて稀である。彼らの脆弱な生活基盤を外部から補強する目的で行われるのがネットワークであるにもかかわらず、その脆弱さゆえに避けられない移転によって十分な効力が発揮されないという課題が生じている。

第三点は、保護者を教育するプログラムが不足しているために、FSW と入所児童の努力にもかかわらず、子どもの生家を子育ての「場」にすることが困難である点である。もっとも先行研究で確認したように、近年すぐれたペアレントトレーニングの開発が急ピッチで進んでいる。これらのトレーニングは児童相談所で行われるばかりでなく、児童養護施設でも取り入れられ、一定の成果をあげてはいる。しかし今回の調査で FSW が家庭復帰の判断を行うポイントに保護者の意欲が示されていたように、これらのトレーニングが成功



するか否かは保護者の意欲に左右されるだろう。だが、保護者が意欲的に指導に応じないのは、パーソナリティの問題ばかりではなく、保護者自身の生活基盤の脆弱さから、応じる時間的・精神的余裕がないこととも関連している。生活に困窮している保護者に必要なのは、高い費用を支払って受けるカウンセリングなどではないのである（Pelton=2006）。だがある FSW は、子どもが努力を重ねても保護者がそれに報いないとき、子どもは努力することや自らの将来に否定的な見方をするようになると分析していた。保護者の生活基盤を安定させる取り組みが必要な一方で、わが国でも雇用訓練・住宅保障・所得保障と連動しつつ、一定の強制力を伴った保護者教育プログラムを導入しない限り、FSW と子どもばかりが虚しい努力を重ねる状況が続くだろう。

これら、FSW が保護者や退所後の子どもの生活基盤の安定化にまで介入することの根拠の不在、ネットワーキングの有効性、および有効な保護者教育プログラムの不在という、相互に関連のある 3 つの制約の中で、家庭支援専門相談員制度が、期待されている早期家庭復帰の促進と、家族再統合の達成を進めるには、大きな限界があるといえよう。

#### 【文献】

遠藤和佳子・芝野松次郎(1998)「養護施設における早期家庭復帰援助プログラムの研究開発(R&D)--パーマネンシーの保障に向けて」『ソーシャルワーク研究』23(4),291-301

Goodman,R(2000)Children of the Japanese State ;The Changing Role of Child Protection Institutions in Contemporary Japan ,Oxford University Press(=2006,津崎哲雄訳『日本の児童養護—児童養護学への招待—』明石書店)才村純(2005)『子ども虐待ソーシャルワーク論—制度と実践への考察』有斐閣

Maluccio,A , Warsh,R and Pine,B(1993)Family Reunification:An Overview TOGETHER AGAIN—FAMILY REUNIFICATION IN FOSTER CARE Child Welfare Reague of America Washington,DC,3-20

檜原真也・藤澤陽子(2009)「児童養護施設の子どもは施設入所をどのように捉えているのか—入所時のアセスメント面接と生活場面の記録の分析を通して」『臨床心理学』9-2, 230-240

西田芳正・妻木進吾・長瀬正子ほか(2011)『児童養護施設と社会的排除—家族依存社会の臨界』解放出版社

大澤朋子(2012a)「子どもの声から考える実践と運営の課題」浅井春夫研究代表『児童相談所—一時保護所における子どもの暴力問題の考察と提言—全国アンケート調査とインタビュー調査を踏まえて—』

Pelton,Leroy H.(1994)The Role of Material Factors in Child Abuse and Neglect in

- Melton, Gary B. Barry (eds.) Protecting Children from Abuse and Neglect, The Guilford Press, 131-181 (=2006, 山野良一訳「児童虐待やネグレクトにおける社会環境的要因の役割」上野加代子編『児童虐待のポリティクス「こころ」の問題から「社会」の問題へ』明石書店, 101-156)
- Pugh, Gillian (1999) Unlocking the Past: the impact of access to Barnardo's childcare records Ashgate Publishing Ltd
- 才村純 (2005) 『子ども虐待ソーシャルワーク論』有斐閣
- 志田民吉 (2002) 「オーストラリアの福祉事情(2) 児童福祉の改正動向 (パーマネンシープランニング)」『社会福祉研究年報』(12), 64-78
- Thoburn, J (1994) Child placement Ashgate Pub Co (=1998, 平田美智子・鈴木真理子訳『児童福祉のパーマネンシー—ケースマネジメントの理念と実践』筒井書房)
- 妻木進吾 (2011) 「頼れない家族／桎梏としての家族—生育家族の状況」西田芳正編著『児童養護施設と社会的排除—家族依存社会の臨界』解放出版社, 10-39
- 津崎哲雄 (2009) 『この国の子どもたち—要保護児童社会的養護の日本的構築』日本加除出版
- 山屋春恵 (2009) 「一時保護中の子どもたち」安部計彦編『一時保護所の子どもと支援』明石書店, 141-160
- 全国児童養護施設協議会編 (2003) 『子どもを未来とするために—児童養護施設近未来像Ⅱ』

---

<sup>i</sup> たとえば平成 24 年度の虐待通告件数は約 66,000 件であった。そのうち 9 割は相談から居宅での児童福祉司指導で終了するが、1 割の約 6,000 件はより積極的な介入が必要とされる。これは全国の児童養護施設の定員数約 3 万人に対して、2 割に相当する。毎年定員の 2 割近い親子が新規に入所措置を必要としている計算になる。

## 終章

終章では、はじめに本研究で得られた知見を整理する。つづいて本研究の中心課題とした、FSW が達成しようとする「家族再統合」を、実態調査分析の結果をベースに改めて定義しなおし、この「家族再統合」のもつ構造を、その背後にある社会の価値を含めて位置づける。さらに、現行の家庭支援専門相談員制度の制約と、同制度を発展的に機能させるための方策を検討する。最後に本研究の限界と課題を示しておきたい。

### 1. 児童虐待・社会的養護と FSW

第1章では、児童虐待の社会問題化およびそれへのわが国の対策のプロセスを3期に時期区分して考察し、その対策の一環として、児童養護施設をはじめ児童福祉施設に家庭支援専門相談員制度が導入された背景を分析した。児童養護施設は終戦直後に急増し、時代とともに入所児童の措置理由を変えながら存続してきたが、1990年代以降は被虐待児を積極的に受け入れている。現在は入所児童の過半数に何らかの被虐待経験があり、さらにその背景には親の経済的困難・不安定就労、親族・近隣からの孤立、不安定な婚姻・ひとり親など複合的な不利が存在している。2004年に児童養護施設に家庭支援専門相談員制度が導入された背景には、児童虐待相談件数の増加に伴う措置待機児童の増加、児童相談所の対応の限界、入所型児童福祉施設の利用期間短縮の課題、および「家族再統合」概念の海外からの紹介等、社会的養護に関する社会的要請の変化があった。さらに同制度がどのような社会的背景のもとに構想されたのか、「ファミリーソーシャルワーカー」のルーツを検討した。また、児童虐待問題、家庭支援専門相談員制度、社会的養護およびファミリーソーシャルワークに関連する先行研究の検討から本研究を行った。

第2章では、第1章に引き続き本研究のキー概念である「家族再統合」を先行研究の検討から整理した。「家族再統合」は、広義に理解すれば親子分離され社会的養護に措置された子どもと親とが、あるゴールを目指して行われる支援の過程であり、ゴールとは家庭復帰に限定されず、その親子に最適なレベルで設定されるものである。しかし、児童相談所職員および研究者の多くは狭義に家庭復帰を想定していた。これは、「家族再統合」に関する研究が「家族再統合」を達成するための支援プログラム策定や、アセスメント指標作成を目的としており、家庭復帰をゴールとしないプログラム開発が想定しにくいためであると考えられた。一方、むしろ社会的養護の現場では「家族再統合」を広義に理解する傾向があった。本論文では「家族再統合」を、「分離を経験した親子が、種々の援助の提供を受けて、再び親子としての関係を築く過程、およびその親子にとって最も適切な物理的・心理的距離を伴う関係を達成すること」とであると暫定的に定義した。

つづいて全国の児童養護施設へのアンケート調査から、FSWの考える「家族再統合」とは何かを分析した。FSWが「家族再統合」の不可能性を主張する時には、「家族再統合」は専ら家庭復帰を指しており、その反面で多くのFSWは「家族再統合」を広義にとらえて

いることがわかった。その際、「誰と」「どこに」住むかということは結果に過ぎず、「家族再統合」は、あらかじめ規定されるようなものではないという意見もあった。しかし、「誰と」「どこに」住むかという退所後の具体的な生活像は、それまでに FSW が行う支援のゴールおよびそれに伴う業務の内容を規定すると考えられる。したがって、FSW にはまず狭い意味での「家族再統合」すなわち「家庭復帰の可能性」の判断が現実課題として求められることになることが示された。

第3章では、第2章にひきつづきアンケート調査結果の分析を通じて FSW の果たす役割を明らかにした。FSW は目指すべき「家族再統合」を達成するために、FSW として専門的な役割を担っていると考えられるが、その役割は実際の業務や、業務遂行時の判断から明らかになると仮定した。そこで、実際に過去に担当し、既に退所したケースのなかから「家庭復帰につながったケース」および「社会的自立に至ったケース」をそれぞれ具体的に一つずつ挙げてもらい、それぞれ FSW としてそのようなゴールをどのように判断し、そのゴールに向けて具体的にどのような支援を行ったかをたずねた。その自由記述回答を、子どもの入退所時の年齢および FSW の勤務形態によって分類したうえで、KJ 法によって分析した。

その結果、FSW は「生活安定化型」支援・「関係改善型」支援・「家庭再構成型」支援の3つの支援を通じて「家庭支援役割」を、また「環境整備型」支援・「成長促進型」支援の2つの支援を通じて「社会的自立支援役割」を果たそうとしていることがわかった。「関係改善型」支援および「成長促進型」支援は子どもや親個人に働きかけるもので、CW の業務との共通性が高い。一方「生活安定化型」支援および「環境整備型」支援は、退所後の具体的な生活像を念頭に、それを実現するために地域の関係機関等に働きかけるもので、FSW に固有の業務である可能性が示唆された。また、「家庭復帰」「社会的自立」のいずれのゴールでも、『新しい家族形成の準備』『家族を開く関わり』と概念化された業務が行われており、つまり「家庭再構成型」支援が行われていたといえる。たとえ「家庭復帰ケース」であっても、子どもは必ずしも家族構成メンバーや居所が元の家族と同じところへ復帰するわけではない。親の離婚・再婚、および祖父母をはじめとする親族との同居・近居によって、家族構成メンバーも居所も最適な形態へと変化させていくことがあるが、FSW はそれを家族の戦略として積極的に評価し、支援している。「社会的自立ケース」では、頼りにならない実親に代わって、親族である祖父母等を子どもが何らかの意味で「家族」と認識できるよう、「家族を開く」支援がなされていた。FSW が「家族再統合」という時に想定している家族の範囲は、上述のように意図的に開かれており、戦略的に「家族を開」いていく支援もまた FSW に固有の業務であると判断できる。

ところで「家庭支援役割」は入所児童の生家を帰ることのできる「場」にするものであり、家庭復帰の可能性のある状態とは、今現在「帰せる家庭」であると同時に、援助を通じて近い将来「帰せる家庭」になり得ると FSW によって判断された状態である。

そこで、第4章では「帰せる家庭」になることを何が妨げていると FSW が考えているの

か、および何を社会的養護が達成し得る支援のゴールと考えているかを明らかにするために行った、地域や施設の性格の異なる6施設のFSWへのインタビュー調査で得られたデータの分析を行った。データ分析には、SCAT分析法という4段階のスモールステップを踏みながらテキストデータの抽象度を上げていく質的分析方法を用い、13の概念と80の論理記述が生成された。

その結果、家庭支援専門相談員制度導入によって、児童養護施設職員全体に早期家庭復帰への意識づけはなされたものの、家庭復帰ケース数自体に目立った変化はないことがわかった。FSWの主たる役割は施設内外で連携を結ぶことであるとFSWは認識しているが、関係機関職員の個人的資質や地域特性によって連携のしやすさには差がある。とくに家庭復帰への動機づけには地域差が大きいことが示唆された。「帰せる家庭」になることを妨げている要因として、FSWは復帰家庭の生活基盤の脆弱さを認識している。しかし、児童養護施設の専門性は専ら子育てスキルの伝達と、それを通じて親との間に信頼関係を構築することに集中する傾向が強く、FSWは家庭の多様な脆弱性に介入する権限も手法も保持していないと考えていた。そのため、一方では家庭復帰だけが「家族再統合」ではないと考え、たとえ家庭復帰させるとしても絶対に成功するという強い見通しを持っているわけではなく、家庭復帰にはある時点での思い切った判断が必要だという認識があった。他方、家庭復帰できない場合でも、親子関係の維持に強い関心を示している。専業FSWであってもFSWに固有と思われる業務に専念できるわけではなく、復帰家庭の変容を促せないことが、FSWを究極のゴールとしての親子関係の維持に向かわせているといえよう。

第5章では、第4章までの議論を踏まえた上で、FSWの考える「家族再統合」とは何かを、子どもとその親の家庭の側から再検討した。子どもの保護を目的とした児童養護施設への入所措置は、子どもにとっては家庭からの排除経験であり、しかもその家庭自体も複合的な困難を抱えて社会の周縁においやられた存在であるという「二重の排除」状態に陥っていることが少なくない。子どもの安全確保のためにやむを得ず取られた「二重の排除」としての親子分離を、親子にとって価値ある体験に変えていくために、FSWは2つの未来を見据えて支援していることが調査からは浮かび上がってきた。ひとつは近未来に「帰せる場」としての家庭であり、もうひとつはいつかは「赦せる親」との関係を構築することである。FSWの考える「家族再統合」は、この2つの未来によって、「場」への包摂および「関係」への収斂の2パターンに分岐されていく。ここでいう「場」とは時間的・空間的に一定の持続性を持った子育ての「場」として成立する「家庭」のことである。一度は「家庭」から排除された子どもが、ふたたび「場」に包摂されることは、同時に「場」それ自体も社会の中心へと包摂しなおす二重の包摂が必要である。むしろ、現実には後者を十分見極められなくとも「帰せる」と思い切って判断することが大事だとの強調もあった。一方、そのような子育ての「場」が成立しないとき、FSWの目指す「家族再統合」は親子の二者「関係」へと収斂していく。そこには、一見すると永遠に切り離した方がよさそうな親との縁でも繋ぎとめてくることが、子ども自身にとって重要だとするFSWの価値が存

在している。だが、このようなわずかなつながりがいつ実現するかは不問にされている。また施設からは「社会的自立」したはずの子どもも、その親も、あいかわらずそれぞれにコミュニティから切り離され、社会の周縁に位置づけられていく可能性は否めず、それぞれに対してサポートが必要だとの認識はある。だが、それは FSW の職分を超えており、誰によって担われるのかは不明なままである。

## 2. 「家族再統合」とは何か

### (1) 「家族再統合」の再定義

本研究の目的は、児童養護施設において「家族再統合」支援を担うとされる FSW が、所属する施設の方針、FSW の専門的価値と家族観、および FSW の業務を通じて、入所児童の退所に際してどのような「家族再統合」を達成しようとしているのかを、実態調査を通じて明らかにし、その意味を考察することであった。FSW は厚生労働省通知によって配置が明記された専門職であるが、しかし「なにを」「どのように」支援する専門職であるのかはあいまいなままである。また、現状では過半数の FSW が CW を主とする他職種を兼務しており、FSW としてのアイデンティティ形成、および FSW に固有の業務の認識が困難な状況にある。そのため、FSW の個人的価値や家族観に基づいて支援が行われている可能性もある。だが、本研究における FSW の行っている業務の分析および FSW の果たす役割の検討においては、FSW がどのような「家族再統合」を達成しようとしているのかがかなり明らかになった。論を進める前提として「家族再統合」を暫定的に定義しておいたが、ここで改めて FSW が達成しようとしている「家族再統合」を定義しなおしておきたい。

FSW が達成しようとしている「家族再統合」とは、「分離を経験した親子が、種々の支援により双方の課題を達成して、子育ての「場」としての「家庭」へ子どもが包摂されること、および物理的・心理的距離に関わらず親子の「関係」を維持すること」であると定義できる。これは、はじめに述べた狭義の定義でもあり広義の定義でもあるように見えるが、ここで重要なのは、まず「場」への包摂の可能性すなわち「帰せる家庭」の判断が先にあり、これが不可能と判断された時に「関係」のつなぎとめに方向転換することである。また、想定される「家族」の範囲は入所以前の家族構成メンバーに限定されず、それぞれの家族の戦略および FSW の意図的な支援によって家族が「開か」れ得る。

したがって、FSW はまず家庭復帰の可能性を見極めたうえで、ゴールを設定し、それに沿った支援を行うことになるが、たとえ「家庭復帰」というゴールを設定しても、そこで想定される「家庭」は単に虐待という事象がなくなるという質的な変化だけではなく、家族構成メンバーも居所も変化し得るものとみなされている。一方で、家庭復帰が望めないとしても、実親とのわずかなつながりの維持の他に、祖父母をはじめとする親族を子どもにとって何らかの意味で「家族」と呼べる存在へと開いていこうと支援する。このことから、FSW は入所以前の元の家族への執着は持たないものの、何らかの意味で「家族」を維

持するということに強い関心を持って支援を行っていると言える。

## （２）「家族再統合」の構造

上述の結論は、FSWの「家族再統合」理解が狭義でもあり、広義でもあることを示している。しかしそこには、まずは狭義の「家族再統合」をめざし、その後広義の「家族再統合」に向かうという順序があることに着目したい。今日の社会的養護は、終戦直後の養護施設がそう信じられていたように、子どもが18歳を迎えるまでただ家庭代替機能を果たせばよいというものではない。親子関係に傷ついた子どもの治療、発達上の課題への支援、子どもの成育家庭支援、自立支援など、多様な機能を発揮することを、しかもわずか数年という短い時間内で優れた結果を出すことを期待されている。しかし実際には、いくつもの制約があり、必ずしも狭義の「家族再統合」が達成されるわけではない。

まず第一に、入所期間という時間的制約がある。狭義の「家族再統合」すなわち家庭復帰を目指すには、親子分離の期間は短い方がよく、子どもの年齢も低い方がよいとFSWは考えていた。そのため、スピード感を持って援助することを重視するFSWがいる一方で、一度傷ついた親子の関係は短時間で修復できるものではなく、じっくりと時間をかけて取り組むべきだとの主張も見られた。すべての子どもに退所までの期限を設定して早期の家庭復帰を目指す施設もあるが、それはすなわち「帰せるときに帰す」というFSWの思い切った決断を要することでもある。施設入所時の子どもの年齢が高くなれば親子関係の修復はより難しくなり、子ども自身が達成しなければならない課題も増えるため、退所までの時間に行くべき支援には優先順位をつけざるを得ない。どのケースでも「家族再統合」への努力はFSWによって続けられるが、時間的制約によって目指されるゴールが狭義から広義へと変更されることが少なくないのである。

第二に、施設の立地条件の制約がある。都市部と地方では、「家庭復帰」にあたって家族が利用できる地域の資源に差がある。子どもが今現在暮らす施設と、実際に子どもが帰っていく地域との間の物理的距離も、都市部と地方では異なる。都市部の施設のFSWであれば比較的狭い範囲内で、児童相談所、地方自治体、民間支援団体などとのサポートネットワークを構築しながら頻繁に家庭訪問することも可能であろう。しかし地方の施設であれば家庭訪問に要する時間は都市部に比べて長くなり、その分FSWの負担となる。広範囲を担当する児童相談所や偏在する民間支援団体との連携にも都市部より困難が増す。施設職員が専門職としての研鑽を積む機会も限られ、FSWがソーシャルワークを実感できずにいる実態も垣間見えた。一方で、施設の回転率に対する圧力にはこれとは異なる差がある。地方の施設では、理念としては早期の家庭復帰を掲げていても、実際に短期間で家庭復帰させなければならないという切迫感は都市部ほどにはない。だが都市部の施設には、児童相談所一時保護所で入所措置を控えている子どもの存在がプレッシャーになり、家庭復帰に多少の不安を抱えながらも退所させざるを得ない実態がある。

したがって、ここには、地域の利用可能な資源の有無や早期退所への圧力といった外的

条件によって FSW が「思い切った家庭復帰」を一度は目指しながら、それが達成されなければ広義の「家族再統合」を目指さざるを得ないという、二重に仕組まれた構造が存在しているといえよう。アンケート調査で示された「家族再統合」理解の二分した回答は、FSW の実際の業務のもつこのような構造から導き出される必然的な結果であったと考えられる。

だが上述の FSW が考える「家族再統合」の構造には、当然次のような疑問が残ることになる。すなわち、なぜ狭義の「家族再統合」を目指せないにもかかわらず、「家族再統合」それ自体をあきらめることがないのか、という疑問である。なぜ親をあきらめ、子どもを社会的に自立させるだけではいけないのか。なぜきょうだいや里親、施設職員、あるいは新たに出会う他者ではなく、実の親や親代わりの親族との関係でなくてはいけないのか。被虐待児が虐待親を擁護し、理想化する現象は知られており、子どもの親に対する認知の歪みを修正することは、社会的養護に求められる治療的な関わりでもある。本調査からも、子どものあきらめきれない親への思いを理解しながら、親を見切らせていく FSW の支援も確かに存在していた。一方で、子どもが親への怒りを持ち続け、もはや関係を断ちたいと望んでいるにもかかわらず、より長期的展望からその関係を維持させようとする FSW の姿も浮き彫りになった。それほどまでに FSW が執着する親とは、家族とはいったい何であろうか？これは本研究の範囲では答えの出ない問いである。ただひとつ付言するとすれば、そこにはやはり FSW の個人的価値、あるいは我々の社会の家族に対する伝統的価値が根底にあるのではないだろうか。

### 3. 家庭支援専門相談員制度の課題と展望

児童養護施設の FSW が目指す「家族再統合」には、上述したように狭義の「家族再統合」を経由して広義の「家族再統合」に向かうという構造が存在していた。また、入所期間という時間的制約や施設の立地という地域的制約があり、「家庭復帰」を目指せない場合もあるが、それでも FSW はなんらかの意味で家族に執着し、関係のつなぎ止めとしての「家族再統合」を目指していた。家族関係にこだわることの背景には、家族とはなにかという簡単には答えの出ない問いが存在している。

そこで最後に、FSW の個人的価値や、その背景にあるわが国の社会文化的価値を前提としたうえで、社会的養護が被虐待を含めた要保護児童のケアと家庭支援を期待される現状に対し、現在進行中の家庭支援専門相談員制度がより発展的に機能するためには、どのような課題と展望があるかを検討したい。ここには大きく①FSW の配置、②地域の支援力、③家庭支援専門相談員の業務指針策定という 3 つの課題があると考えられる。

まず第一に、FSW の配置に関する課題である。現行の FSW はあくまでも児童福祉施設に配置された施設職員であり、子どもの成育家庭に対する指導はもちろん、支援でさえも児童福祉司のような職権を持たない。多くの FSW が CW を兼務しながら、どうにかして FSW としての業務を確立しようと奮闘しているというのが実態であった。だが、「家族再



統合」に焦点を当てれば、狭義であれ広義であれ、FSW が活躍するフィールドは、施設内から家族が生活する地域社会へと拡大することになるだろう。決して施設内の事務室で、あるいは子どもと向き合うだけで完結する業務ではない。子どもが家族とともに、あるいは自立して生活をする実際の地域に出向き、支援ネットワークを築く必要があるからである。

このようなネットワーキングは、本来ならば児童相談所の役割であった。したがって、児童福祉施設への家庭支援専門相談員制度の導入はいわば児童相談所の業務の一部分を FSW が肩代わりすることであると言っても過言ではない。むしろ、ある FSW は多忙な児童相談所に代わって入所児童とその家族の支援をすることは児童養護施設の当然の使命であると考えていたし、また別の FSW はこのような代替行為が児童相談所に対するある種の恩となり、対等な関係を築くことに役立っていると考えてもいた。しかしこのようなネットワーキングには多大なエネルギーと時間が必要とされるが、過半数が兼任である FSW の中で、自由に施設を離れられる職員は決して多くはないだろう。

また、社会的養護のあり方も今後ますます変化していくと推測される。従来の大舎制施設は、ユニット化、地域小規模化が進むことになるだろう。生活単位が小集団化し、一つの建物から複数の建物へ、さらに地域の住宅街のなかに点在していく流れはますます加速すると予想される。このような施設自体の変容は子どもの養育環境を考慮すれば当然のことではあるが、一方で FSW にとって、子どもの日常的な様子を把握しにくくなるデメリットがある。なぜなら子どもを理解するには、改まった面接からだけでなく、日常場面の観察や生活場面面接が欠かせないと多くの FSW が認識しているからである。そのため、FSW には複数の寮や住宅を日替わりで訪問し、子どもたちと寝食を共にする努力が求められるが、これもまた CW を兼任している FSW が単独で担うのは困難な業務であろう。

このような FSW の配置上の制約がありながらも、児童養護施設の FSW たちの間には、ケアワークを児童養護施設が提供できる支援の基盤としながら、そこにソーシャルワークを上乗せすることで家庭支援を行おうとしている兆しが見えていた。児童養護施設においては、ケアワークとソーシャルワークの内容と担当者を明確に区別し、複数種の専門職による他職種連携を図るよりも、両者が一体となったレジデンシャルワークの向上を目指す方がより現実的なものかもしれない。これはわが国の入所施設がケアワークとソーシャルワークをそれぞれの専門性に依拠して確立しようとしながらも失敗してきたことを考えても、実践現場では経験的に了解されていることだとも考えられる。

こうしたケアワークとソーシャルワークの一体化は、施設の小規模化という現実にもまた適合的である。ある FSW が提言していたように、一施設に一人しかいない FSW が地域に点在した小規模施設の子どもの様子をすべて把握するより、生活単位ごとの CW が FSW の業務を担い、全体を統括する FSW を置くという発想は理に適ったことのように思える。別の FSW は、自らの目で把握できない子どもの様子については、担当の CW と連携することで情報の補足に努めていた。また別の FSW は、すべての CW が子どものアセスメントを行えるように CW のスキルアップを図ることが施設全体の養護の質の向上につながると考

えていた。CW が FSW 業務を担えるならば、FSW に現在生じているような情報不足は回避され、専業 FSW はソーシャルワークも行う CW のスーパーバイザーとしての役割を担うことになる。実際に、現在でも FSW たちはベテラン CW としての立場から、CW たちの指導にあたっている。したがって、すべての CW がソーシャルワーク的視点を持って家庭支援まで行えるようにすることは、FSW の配置上の制約を乗り越える一つの方策と言える。むしろ、CW ひとりあたりの業務量が増えることを考慮し、職員配置基準の見直しは検討されるべきである。

第二に、地域の支援力の課題がある。児童福祉司一人が担当する地域の範囲、児童家庭支援センターや保育所・学校の立地や職員の状況、民間支援団体の有無など、地域に存在する資源には、施設の立地による差異がかなりの程度存在する。このため、施設がどのような地域に立地し、その地域にどのような存在として受け入れられているかということが FSW の業務の質や連携のしやすさの制約となっている。たとえば施設が近隣の住宅街に溶け込み、住民や商店にコミュニティのメンバーとして受け入れられているのか、郊外に立地し学区でも孤立しているのかということが FSW の業務の内容に影響を与えるだろう。児童相談所や地方自治体、児童家庭支援センター、児童委員らと施設との物理的な距離の近さは、一般的に言えば、都市部の施設に有利である。もちろん常に都市部の施設が地方の施設に比べて資源に恵まれるとは限らず、連携の程度や質は実際のところ個々の職員の質によるところが大きい。FSW とも、児童福祉司や連携機関職員の個人差が大きいことをたびたび語っていた。また、自治体職員との間には問題認識に温度差があり、親子を支えるサポート資源になりにくい実情も浮かび上がった。

だが、たとえ連携機関が頼りにならないとしても、FSW は地域との連携を断ってしまうことはできない。なぜなら、そもそも入所児童の成育家庭は子どもや子育てについての課題を抱えているわけではないからである。親子の関係のみが問題なのであれば、FSW の個人的な努力だけで解決が可能かもしれない。しかし実際には、子どもを社会的養護に委ねざるを得ない家族においては、親子間の他にも夫婦間、親族間、近隣住人との関係など、人間関係に限っても多様な課題を抱えていることは稀ではない。また就労の安定性や経済的な問題、親自身の心身の問題など、複合的な課題を抱えているのが普通である。したがって、FSW が対象とするファミリーは、児童福祉の範疇に収まらない多様な課題を抱えた存在なのである。

そのため、子どもが成育家庭で生活できない理由が親子関係の悪化にあると見なされていても、そうした関係悪化の根底にある複合的な不利の状況を改善しない限り、家庭復帰の達成が困難な状況を変えることはできない。そのような根本的な課題への支援は、ある FSW がはっきりとそれはできない部分だと述べていたように、児童養護施設に所属する FSW 一人で対応することは過剰な期待であろう。それにもかかわらず、現状として多くの FSW が対象ファミリーの困難な状況によく寄り添い、生活の安定化を支援しようと試みている現実があった。

このような FSW の努力がより成果をあげるためには、やはり地域の支援力の強化と児童福祉の枠を超えたサポートネットワークの構築が不可欠であると考ええる。FSW は本来児童福祉司が担っていたいくつかの役割を肩代わりしているが、このようなソーシャルワーカーの分担配置は児童福祉施設のみではなく、地域の中に置いてもよいはずである。2004 年の児童福祉法改正で市町村が児童相談の窓口になったことから、自治体職員は当然ソーシャルワーカーとしての役割が期待されている。また、児童家庭支援センターにも期待したい。児童家庭支援センターはソーシャルワーカーを配置して、地域の親子を対象に電話相談からひろば活動、家庭訪問にいたるまで幅広く活動しており、こうした活動により、すでに地域のファミリーソーシャルワークの拠点としての機能を果たし始めているといえる。だがそれも個々の職員の力量によるところが大きく、ひいてはどのような職員配置をするかという自治体の判断による差が生じている。FSW も児童家庭支援センターとうまく連携できれば重要な資源になると位置づけていたことから、地域のファミリーソーシャルワーク力の強化は現状改善のひとつの方向であろう。

同時に、家族の抱える複合的な困難に寄り添うには、児童福祉のみではない連携が模索される必要があろう。具体的には児童相談所と福祉事務所、学校と医療機関など、要保護児童対策地域協議会を通じて少しずつ連携が取れはじめているところがある一方で、まだ不十分と思われる異分野の機関間連携である。例えば、近年医療の分野では、ネグレクト児の口腔衛生に問題がある場合が多いことから、歯科医療と地域保健との連携による児童虐待のスクリーニングと早期対応が注目されている(たとえば大川 2008)。また、保育所においても、従来の日中保育の提供と育児に関するアドバイスという機能を超えて、保育士が多様な問題を抱える家族に対応できるソーシャルワーカーであることが期待されている。一方で、貧困や生活困難に対応する福祉事務所では、対象となる家族の中に養護問題のある子どもや介護問題のある高齢者・障害者の存在を認識していながら、児童福祉・障害者福祉部門との連携が十分取られていない実態がある。児童相談所も対象家族が多様な問題を抱えていることを認識しながら、あくまで児童福祉の範疇で課題解決にあたろうとする傾向にある。だが、児童養護施設入所児童の成育家庭にとって親子関係は問題の一部に過ぎないという現実を踏まえたうえで、親子の地域生活を多面的にサポートできる体制づくりが急務であろう。

上述のような地域の支援力の強化とサポートネットワークの構築によっても、児童養護施設 FSW の果たす役割が軽減されることはないだろう。だが、現在のように児童相談所のみにある家族へ介入する権限と、児童福祉施設に過重に負わされている家族支援への責任を、地域の諸機関と分担することは可能になるのではないだろうか。そうすることで、現行の制度をより効果的に活用できる可能性が広がると考える。

第三に、家庭支援専門相談員の業務指針策定の課題である。すでに述べたように、厚生労働省は児童相談所の児童福祉司が保護者支援を行う際の業務指針や家庭復帰の可否を判断するための基準は策定しており、それに付随する家庭復帰の可否を判断するチェックリ

ストもある。このチェックリストを準用している FSW もいるが、児童福祉施設の家庭支援専門相談員の業務指針を独自には策定していない。本研究からは FSW が現場で実際に子どもの退所をどのように判断し、そのゴールに向けてどのような業務を行っているかについてかなり明らかになったが、上述の種々の制約等により、FSW としての業務内容や家庭復帰の可能性をめぐる判断には施設ごと、あるいは FSW ごとにかなり差があることもわかってきた。また、CW を兼務する兼業 FSW や CW 歴を持つ FSW が多く、FSW としての職業アイデンティティを確立しにくい可能性も示唆された。このような現場での判断や業務の実態を前提に、全国の FSW の参照基準となるような業務指針は策定できないだろうか。

上述の児童福祉司が用いる家庭復帰の可否を判断するチェックリストは、FSW にも活用可能であるが、児童養護施設の入所児童のすべてが家庭復帰を果たせるわけではない。FSW の業務は家庭復帰の可否を判断することだけではなく、その判断に基づいたゴールを設定し、それに向けての支援を行うことであった。そのため、家庭復帰の可能性が判断された後に具体的にどのような支援を行うのかということこそが重要である。家庭復帰の可否が判断されれば、次の支援ステップが明確に定まっている米国などとは異なり、わが国では判断後の支援ステップそのものを FSW が個別に模索しなければならない状況がある。

このような状況を乗り越えるために、ある程度統一され、全国の FSW の参照基準となるような実効性のある業務指針が必要であることはいうまでもない。施設の立地による地域資源の差についてはすでに検討したが、それらの外的条件が入所児童のケアのあり方に地域差を生じさせていることも、社会的養護の現場に入所から退所に至るまでの一貫した支援の基準や FSW の業務指針がないことによる影響といえよう。ちなみに、米国やオーストラリア等においては家族再統合の可否を判断する基準やアセスメント指標があり、ソーシャルワーカーの業務指針となっている。だが児童福祉行政および社会的養護の形態が国により異なるため、そのような業務指針をそのままわが国に輸入することには無理があろう。これらの家庭復帰判断の基準およびその後の支援に関わる業務指針の国際比較を含む基準研究、指針研究は今後の課題である。いずれにしても、FSW 職に就く職員が、それまでの経歴や外的条件に関わらず、ある一定程度の支援水準を達成できるような業務指針の策定が望まれる。

#### 4. 本研究の限界と今後の課題

本研究ではアンケートおよびインタビューの2つの調査を通じて、FSW が達成しようとする「家族再統合」とは何かを明らかにした。以下に、本研究の限界と課題を述べる。

1点目は、本研究の対象の限界である。本研究では児童養護施設からの退所ケースのうち、「家庭復帰ケース」「社会的自立ケース」に限定して検討を行った。しかし実際には、他種施設や里親への「措置変更ケース」も存在している。筆者は本研究で再定義した「家族再統合」概念を「措置変更ケース」にもある程度適用可能だと考えている。「措置変更ケ

ース」においては、ある時点で家庭復帰が断念され、子どもは里親等との親密で永続的な関係が保障された「場」へと入っていくが、それでも実親との関係が完全に断たれるわけではないという点で「社会的自立ケース」と同様であると考えられるからである。また、里親との関係も、子どもの自立後にも一定のつながりが維持されることを想定して「開かれる、ある種の家族関係であると考えられよう。家庭復帰の断念が「場」への包摂の可能性を排除しない点でより複雑ではあるが、上述の2つの「家族再統合」パターンは維持されていると考えられる。しかしやはり社会的養護が継続するケースについて、本研究が到達した「家族再統合」の定義が本当に当てはまるのかどうかは、実証的に検証される必要があるだろう。

2点目は、FSW という職種に付随する専門的価値の問題である。制度それ自体のあいまいさゆえに、FSW としてのアイデンティティを形成しにくいことは推測できるが、今後 FSW としての専門的価値が成立し得るのか、その価値が FSW 職にあるすべての児童養護施設職員に共有され得るのかという点には踏み込めなかった。また FSW としての業務も、兼務する他職種、とくに CW の業務と分かち難く結びついていることは示唆されたが、果たして FSW に固有の業務が明確にされうるのか、あるいは社会的養護の現場でその必要があるのかという点は検討が十分ではない。むしろ両者を区分せず、レジデンシャルワークとして専門性を高めていくことが現実的な路線である可能性も示唆された。この点についても、今後家庭支援専門相談員制度のさらなる効果を期待するならば、避けることはできない検討課題である。

3点目は、本研究の範囲の限界である。調査対象を児童養護施設に勤務する FSW としたことで、彼らが認識している課題や、直面している困難はある程度明らかになったと考える。それは、児童養護施設の職員の努力だけでは解決しがたい、今日の子ども家庭福祉政策の構造に関わる課題であった。FSW の「どこまでやるべきなのか」という悩みはまた、筆者の悩みでもある。児童養護施設に所属する FSW が、地域社会に対して、また退所した子どもや家族に対してはたしてどのような支援が現実的に行えるのだろうか。現行の家庭支援専門相談員制度を強化し、複数配置や CW の FSW 化を検討すべきか。あるいは地域の中に FSW を配置し、施設 FSW や児童福祉司と責任を分担しながら、地域のファミリーサポート力を強化する道を模索すべきなのか。さらに、入所児童やその家族が抱えている困難の複層性を考慮すれば、児童福祉の範囲だけで解決を図るのではなく、多分野連携がますます重要性を持つだろう。今後はより広い視点から、児童養護施設の FSW の職分と、それを越えた支援の分担の在り方を研究する必要があると考えられる。

上述の本研究上の限界と課題は、一研究者が調査等を通じて検討し、解決策を示すには限界がある。今後は社会的養護の現場の職員と課題を共有しながら、これらの課題を発展的に解消できるような研究・開発をすることが重要だと考える。

## 【文献】

大川由一(2008)「児童虐待に対する歯科専門職の関わり」『千葉県立衛生短期大学紀要』  
27(1/2),161-164

## 謝辞

最後に、本研究の中心となっている 2 つの調査にご協力いただいた全国の児童養護施設 FSW のみなさま、日々の実践経験を語っていただいた 6 名の FSW の方々に深く感謝申し上げます。アンケート調査には日々の業務が多忙で答える余裕がないというメモだけ添えられて返却されたものや、全国から寄せられる多数のアンケートに困惑し苛立っている旨の添え書きも見られた。回答をいただけなかった施設の多くも、協力できないほどの多忙さを極めていると推察できる。そのような忙しい現場から 132 名の FSW にお寄せいただいた貴重なデータと、夜勤明けでお疲れのところや業務の合間を縫ってインタビューのために時間を割いてくださった 6 名の FSW から得られたデータを、どうにかして現場の実践に役立つ成果としてお返ししたいと考えていたが、かなり時間が過ぎてしまったことを反省している。得られたデータをどのように分析するべきか迷っていたという事情があるが、矢継ぎ早に政策が展開していく児童福祉の領域では、一刻も早く分析を進め、得られた知見を現場にお返しする責務が研究者にはあると思う。今回、博士論文の形でひとまず成果をお返しすることができて大変うれしく思う。

また、論文作成にあたっては主査・副査の先生方に丁寧な指導をいただいた。副査の渡部律子教授、林浩康教授には、ドラフトを丹念に読んでいただき、博士論文として完成させるための建設的なサジェスチョンを多数いただいた。指摘いただいた点をすべて論文に盛り込むことはできなかったが、今後の課題としたい。主査の岩田正美教授には、研究の設計から論文執筆まで、手取り足取りのご指導をいただいたことに感謝申し上げたい。プールサイドでいつまでも準備体操していないで早く飛び込みなさいと調査に向けて背中を押してくださり、なかなか分析が進まない時はたびたびディスカッションの時間を割いて今後のデータ分析や研究の進め方に多大な示唆をいただいた。研究者となる覚悟がなかなか決まらない弟子で誰よりも心配をおかけしたと思う。このたび 5 年掛かりでようやく博士論文をまとめられたのは、ひとえに先生のご指導のおかげである。論文だけでなく、研究者として独り立ちできるよう長年ご指導いただいたことに深く感謝申し上げます。

本研究が全国の社会的養護の現場で困難な業務に取り組む職員の実践の一助になれば幸いである。社会的養護の現場で職員の実践の役に立ち、また支援を必要とする困難を抱えた親子にとって役立つ研究をこれからも続けていきたい。

2014 年 3 月

資料1 家族関係を再構築するという事についてFSW業務を通じて考えていること(専業FSW)

カテゴリー	概念	データ
家族の再構築とは何か	子どもが将来他者との適切な関係を持てるようになることを重視	再構築に関して親子のかかわり方は年々、子供の成長に応じて変化していくのだと感じています。いつも思うのは将来その子供が自分の子を持ったときに適切にかかわれる様、将来を見すえたかかわり方の支援が出来ればいつも考えています。
	親子の最適な関係を見つけること	<p>まずは安心、安全。生きていてもよいという実感を感じられる事から、自己受容とつながられれば在園期間はよいと思われれます。その後、大人になる中で他者(特に家族、自分を受け入れてもらえなかったという事を含めて)受容できる事を確認していく事がFSWの作業だと思っています。虐待されたから虐待する親になるという学説は何の根拠なのか理解できないと思います。家族の再構築とは、そういう事ではないでしょうか。</p> <p>親と子が適切な関係を取り戻すことで、親の感心をつなぎとめる事も構築過程である。家庭復帰が目標ではなくその親子の適切な距離感が復帰であったり、施設利用をすることで、親子がその関係を自覚できることが必要。</p> <p>家族は一緒にいなくても良好な関係が築ける。</p> <p>家庭復帰を目指すことだけが家族再統合ではないので、家庭復帰だけを目標にはしないようそれぞれのケース状況に即した支援をしていきたいと考えている。</p> <p>家族の再構築としてでなく、新構築として考えています。施設へ分離した子どもを家族という「従来の関係性の中に戻す」のではなく、家族という「新しい関係性を作り上げていく」という考え方です。</p>
FSWとして心掛けていること	親子双方の意向を聴きそれぞれの課題解決のサポートをすること	<p>親、子ども両方の想いをきちんと聴きとること。親・子のせいにしない。職員が子を見るのではなく、あくまでも親の手伝いをさせてもらえるだけであることをきちんと伝え、一緒にどうしていくかを考える。</p> <p>家族関係は、本人も家族もお互いの話を聞いて、伝えることが大事。なかなか連絡を取れないが、うまく連絡できるようにして行く。</p> <p>私自身、今年度よりFSW職に就いたため、まだ家族再統合の場面に立ち会ったことがありません。現在家庭復帰に向けて面会等調整、対応する中で、本当に安全な環境に子どもを帰すことは難しく、家庭復帰後も児相をはじめ、地域の見守りが重要であると考えております。その中で施設に入所している間、子どもは親への対応、親は子どもへの対応を身につけ、困難な場面を家族が乗り越えられるよう、できる限りのサポートをしていきたいと思っています。</p>
	時間をかけて取りくむこと	<p>一度養護施設に入所した子どもが家族関係を再構築するという事は、容易ではない。何故、入所することになったのか子どもは知る権利をもっているし、親からの虐待が理由であれば親の振り返りと子どもへの謝罪はあるべきだと考える。特に家庭復帰する場合は不可欠なものである。家庭復帰でも、家族交流でも家族と過ごす際、子どもが安心感をもてているということがバロメーターとなる。また家庭復帰の場合、リスクの少ない体制を作るためには、児相と協働し、段階を踏んで状況改善を図る。その上で、児相と施設双方が安全を確認できた場合に、家庭復帰を実現すべきである。時間はかかっても家庭復帰の作業は丁寧にすすめるべきだと常々考えている。</p> <p>家族の再構築は家族、本人、園、児童相談所が皆で納得しなければすまないと思います。家族の中には入れないために引き取り後、虐待の事実があり再入所となったケースがありました。焦らずゆっくりと関係をつくり、引き取り後は近所への聞き取りや家庭訪問等を行い、見守り態勢をつくる事も大切だと思います。出来る事であれば子どもが小さいうちに家族が一つになれたほうがよいと思います。</p>
	プログラムに沿ってスピード感を持って取りくむこと	入所と同時に再構築のプログラムを子どもと家族の課題とを明確にして丁寧に取り組んでいかないと、入所が長期化すればするほど家族として、生活をしていくのは、難しいと感じています。家族のできない所を施設が手伝うそのような形でできればよいと思っています。
	子どもの自立を優先	私は保育士という立場で子ども達を見てきました。子どもが求める親の気持がいつもともなっていない現状にどう対応するといいいのか迷うことが多々あります。親を求める子どもでも親は日々の生活に追われ子どもの事を忘れる訳ではないのだから忘れたようになっている…。親が何十年と生きてきた生活スタイルをたかが2～3年の私が子どものためだと「こうしろあ～しろとは言えない。」子どもが自立して、生きていける事を基本として日々接しています。基本私は保育士ですから。
	他機関との連携の必要性	<p>家族関係を再構築するという事は、施設のFSW単独でなしえることは考えていません。地域の民生委員や児童相談センター福祉司と家族で情報共有し、ネットワーク機能をいかせられるよう努めています。又、子ども自身の声をきちんと受け入れられるように施設のケアワーカーとも情報収集に努めています。</p> <p>何が正しいかは、様々な意見、関係機関の見解の中から皆が納得したものである。</p> <p>いかなる親でも親は親。親を否定する事は子どもを否定してしまう事につながると思います。子どもがしっかりと自立するまでの期間、施設が出来ること、出来ないことを冷静に考えて、出来ない事は誰にになってもらうのか、どうすればそれが出来るのか、自分なりの考えを持ち、まわりの人と相談しながら少しずつよい方向にむかう事が出来る様に自分自身力をつけていきたいと思っています。</p> <p>児童の措置に関する決定権は児童相談所にあるため、児童福祉司との連携が不可欠</p>
	虐待現象にとらわれず家族の日常生活をサポートすること	<p>再構築には様々な形があるので、一辺倒の支援は出来ない。家族の思いや、壊れかけていたものを、子どもの施設入所という誰もが望まない形になったことで、大人が気づき修復していけば良い。そして、同じ事を繰り返さないサイクルに戻していく過程が大切。子どもが家族を思う気持は深いものがある。施設では日々のさりげない生活を大切にしていくこと。</p> <p>虐待という現象だけにとらわれることなく、家族の生育暦の流れを大きくとらえる中で、家族の問題を明らかにし、課題にとりくんでいきたいと考えています。また、課題だけではなく、家族員それぞれのエンパワメントも大切にしています。</p> <p>各ケースの家族に対し、まじめに、しんけんに取り組む事と、当事者だけでは解決できない様々な問題を解決しやすいように援助してもらえする方法を探し伝えていかなければと考えます。</p>

今後家族再統合に必要なこと	親指導の必要	<p>児童養護施設には、被虐待児が措置され、いろいろあケア、支援を行なっていますが、虐待親に対してのケア、支援がどのようになされているのかが全く見えてきません。特に親が納得せずに措置された場合は、ほとんどが家庭との連絡すらとれない状況です。そのようなことで、再統合など考えられないのが現実です。そのままの状態が放置されているのが現状と言っても過言ではないと思います。そのような親への対策はないのでしょうか。</p> <p>今最も強く感じていることは、「親の指導」をどこが、誰が行うのかということです。現在児童養護施設に入所している子どもたちは、虐待はもちろんのことほとんどが親の問題が原因である。よって家族再統合するために一番にやらなければならないことは「親の指導」であり、これを担うシステムが全くないということが最大の問題（課題）だと考えている。</p>
	分離前の家族支援の必要	一度措置入所した児童を家庭に帰すのは大変な作業で子どもにとっては施設入所自体が精神的な負担となる事も少なくない。親子を分離する前に家族の問題を解決し在宅での生活が続けられるような地域のサポートシステムが必要だと思う。
	現在の制度上の限界	<p>FSWが1人配置されたからといって家族関係が再構築できるとは思えません。ケアワーカーがFSW的な視点をもって子どもや家族と関わる方がよいと思うこともたくさんあります。本当にFSWを活かすなら、こも人も増やすべきです。</p> <p>施設で家族を支援していくには限界がある。措置権を持っている児相を通しての調整には限界を感じている。児相職員で過程調整をするのか、施設がどこまでできるのか、でどこまでしてよいのか考えている。</p>
	多様な制度サービスの必要性	<p>親の治療、子どもへの治療、それぞれに関わる人、システムが必要。そのためには、親に対しても子どもに対してもじっくり、ゆったりと話を聞いてやれる存在としてFSWが位置づけられればよい。又、他機関との連携は重要であり、再統合の為に地域に帰ることを前提に幅広く、長い目で見守っていけるような連携が必要と思う。</p> <p>児相の在り方の変化、ソーシャルワークの浸透性の必要、保護者支援プログラムの取得、地域支援の確立、アセスメントの重要性（関係機関との相互理解）</p>
FSWとしての困難	対応困難	対応困難な親に対する理解はもちつつも、実際の対応に苦慮することがあります。



資料2 家族関係を再構築するということについてFSW業務を通じて考えていること(兼業FSW)

カテゴリー	概念	データ
家族の再統合とは何か	子どもの自立優先	虐待のなかでも性被害については、再構築は出来ないと思う。家族の形はいろいろあり、親子が快ち良い形であれば、一般的なものとは違って良いと思う。又、子どもが親をあきらめ、気持ちを切り替えて自立するのも良いと思う。自分の家族を持てたり、幸せになる事が大切と思う。
		家族の再統合は目標としているものの、現実には非常にむずかしく、時間もかかる。施設でできることには限りがあり退所してすぐに家庭に帰るのではなく、自立に向けて就職させ、その後再統合できるような足がかりを作ることしかできていない。
		家族再統合という言葉はいいが、そんなに簡単に再統合するケースは少ないと思う。月・日は経過するが虐待親には全く変化は見られない。家族再統合がむずかしいケースについては、自立を前提に進路を決めて行く。間22才が理想と思われる。
	親子の最適な関係を見つけること	構築できていなかったものを“再構築”はできない。家族関係を重視することは担当ケアワーカーとの関係を軽視することにつながりかねない。適切な距離間をつかんで、お互い納得できることが家族関係の調整だと思う。
		無理に生活を共にするより、精神的に繋がりが持て、良好な関係を維持できることが重要だと思います。引きとりだけが家族再統合ではないと考えています。その家族にとってお互いに良好な関係構築を目指しています。
FSWとして心掛けていること	見極めの重要性	それぞれの家族における親子関係の現実を踏まえた上で、その家族にとっての適切な距離感を理解することが大切だと考えている。“それなりの関係”を維持するための家族の関わり方を、当事者を含めて模索していきたいと思う。子どもを守る為にも、親の不安や戸惑いに対する共感の至誠を忘れずにいることが、親が子ども理解への支援(子育てのアドバイス)を素直に受け入れることにつながると考えている。
		一度くずれた家族は修復が難しい。元の家庭に戻る事が理想であるが、その可能性が少ないのであれば、なるべく家庭に近い環境で安全に生活していけることが望ましいと思う。再構築するか自立をめざし家族に頼らず生活するかは、施設生活の中で、十分見極め検討していくことが大切だと思う。
		どれだけ子ども本人、子どもの家族と信頼関係を築くことができるか、どうすればそれができるのか？
	日々の業務で心掛けていること	親があつて自分がある事をまず認める。知的に問題がなければ、本人が判断すべき事で、必要以上にむつかしく考えない事が大切。
		子供にも、家族にも添うという事は、大変精神力のいることです。でも困った子供、困った親は、困っている子供、困っている親なので、そのことを忘れず仕事を遂行したいと思います。
		入所の経緯がとても大切だと思っています。虐待に敏感な世の中になっているので、思いもよらないところで子供と切り離され、辛い思いをしている親は少なくない。
FSWとして心掛けていること	親子関係の調整	親子が一緒に生活するのが、自然だと思う。そのためには、障害となる物を取り除くことで、一日も早い再構築を願っています。
		状況を客観的に判断し、こどもにとって一番安心安全な環境で生活できることを考える。
		子どもと親の関係が切れないような支援(電話や手紙など)を心がけたいと思っています。
	他機関との連携の必要性	本人、家族の意向を充分聴いた中で調整していくこと。
		子どもの達は自分で選ぶことなく、大人の理由で施設入所になるケースがほとんどである。子どもの気持ちを最優先に考えながらも、そうせざるを得なかった親の気持ちを忘れずにケースワークを行い、関係の再構築を行って行く。
		家族と本人が望む、家族再統合を支援し、達成される事が実現されるよう努めております。
FSWとして心掛けていること	親子関係の調整	親が子を思う気持ちと子供が親に思う気持ちのずれが一緒に生活していない期間が長ければ長い程に出てくるので、親への説明は大変難しいと感じています。年齢が高くなる程に困難になるので、日頃から親と良好な関係を築けるようにと心掛けています。
		子どもの気持ちをしっかりと取り、親との関わりに反映させる。就労など多くのことを支援しなければならないケースが多いので、親への様々な角度からの支援を多くもつ。
		親子の中に入りお互いの気持ち、考えている事を橋渡し役が出来れば良いと思います。
	他機関との連携の必要性	それぞれの気持ちや考え方をともに、それらを調整していくことが大切
		家庭、家族との直接的連絡を取って良いか悪いかということは、児相の判断であり、それを無視して家庭訪問や、家庭とのやりとりを行なうことは、越権行為だと考えています。入退所に向けて、家庭側の準備を行なうのが、児相の福祉司の仕事、施設側の準備・調整を行うのが、FSWの仕事だと思います。施設としては、児相から措置を受けているので児相の方向性に合わせて、業務遂行するのみです。
		1つの目標に向って当事者、関係者が努力しなければいけない。
FSWとして心掛けていること	親子関係の調整	単独でできるものではありません。関係機関と連携を大切に、行っているところです。
		子相との情報交換、保護者との信頼関係作りを大切にすることが大切だと考えています。
		施設は子ども中心、児相は親中心、FSWは間に入っている調整役と思うが、施設側のFSWは、施設職員の考えに影響を受けやすい。特に虐待の親は意識も含め、家族再統合には時間がかかると思うが、理解出来ない親もいる。児相・関係機関等との連携が必要であると強く感じる。
	他機関との連携の必要性	施設は児童養護のみでなく、児相と共に、家庭復帰が徐々に進んでいる段階で、家庭訪問もできることはとても安心材料である。面会、外泊、長期外泊が可能になり、親と子が安心の場であれば良し。一日も早く子供の幸せのために児相には親への教育に熱を入れて欲しいです。施設ももちろん連携をしつつ。
		関係者、関係機関と良好な関係を築き、情報交換できること、目標に向けて具体的な取り組みが計画的に行えることが家族の再統合には必要だと思います。
		親への適切な指導が必要と考えますが、誰が親指導するのか決まっておらず、児相と施設で親への評価に差異を感じますが、措置権者の児相の判断に従わざるを得ないという現実があります。
FSWとして心掛けていること	親子関係の調整	個々のケースにもよるとは思うが虐待そのものが子どもにとって大きな衝撃であるのに、家族再構築は早々に容易くできるものではない。長い期間を経て、じっくり着実なステップを踏まなければならないが、そもそも一番の問題は保護者の養育意識、関心の低さが問題であり、これをいかに引き上げていくかが課題ではないだろうか。
		虐待をする保護者との再構築は、保護者の支援も必要で、長い期間で徐々に関係を築くことが大切だと思います。また一緒に住まなくても距離を置いて関係を保つことも支援の仕方だと思います。
		基本的に保護者への法的な支援システムが必要であると思う。虐待を生んでしまつてこ要因はけ一すによって違うことから、保護者を専門的にサポート及び指導していくシステムが必要とされると思う。児相、施設だけでは手に負えない状況となっており、郁分の対策がなければこれ以上の進展はないと考える。
	他機関との連携の必要性	保護者に対する指導プログラムが必要。子どもが成長しても、親が成長しなければ再統合後も同じ事の繰り返し。
		一端バラバラになってしまった家族を元の状態に戻すことはとても難しい。再統合には、親の自信回復が必須。自信をどう回復させていくかが重要。

家族再統合政策の課題		<p>家族というものは、他者が最も介入しづらい聖域である。問題を抱えた家族であればなおさら難しい。FSWが家族を再統合しようなどとはおこがましい限りである。国は、こうしたデリケートな問題について児相に責任を押しつけ、児相は施設に丸投げしている状況である。施設の中にFSWという専門職を設けたことも、ごまかしでしかない。日本の現在の家族問題を多角的に捉えた、抜本的な解決策が必要である。家族制度、学校制度の見直しが必要。</p> <p>「施設」というある意味「普通の環境」の中で子どもの傷を少しでもいやそうと格闘していてもいざ帰す環境をよく知ってみると、いくら子どもを育てなおしても親にも多くの傷がある場合が多い。その結果子どもの「家に帰りたい」という思いをかなえられないケースが多くなってきている。FSWとしてどこまで関わるべきなのかどこまで関わっていかねばよいのかを含めて「再構築する」事を考えていかないとかえせない子どもが増えてしまう。そこには返してほしい親とかえせない施設が対立してしまう構図がすけてみえる。今後はこういった事にも社会の目を向けていかねば、と考えている。</p>
	現行のFSW制度の課題	<p>家族の機能が低下している中で再構築は非常に困難な作業となっています。児相との連携が不可欠ですが、児相もマンパワーの不足。プラス、スキルのある職員も不足。施設もセンスのある職員が不足。システムを作っても、それを実施する職員を育てていかないと難しいと思います。(児相、施設ともに)</p> <p>兼務では、出来ない業務であり、自身の人格を高め、広い視野を持ち関わっていかないと、失敗が許されない業務であるため、困難である。また、施設の規模や体制において、複数配置する必要があると強く感じる。専門知識において、研修の機会が少ない為向上出来ないことも、悩みの一つである。</p> <p>親への支援、指導が重要であると考えているが、施設としての業務として職場での近いが低い。また現実的に施設の直接処遇職員数が十分ではない中で、家族再統合への支援は優先できない現状。施設卒園後の子ども対への支援が途切れがちなこと、生活上で困難を抱えやすいことを考えると、家族関係を再構築していくことが、今後の児童福祉の柱になってくるものと考えています。</p> <p>先に記したが、以前は児童指導員が日常で行っている業務と変わらないものとしてとらえられていたが、現在はきちんとFSWの業務を行うことの重要さを考えると大事な職務であると思っています。それぞれの施設の考え方もありますが、一生懸命行えば行う程兼務では難しいと感じてきた。</p> <p>一施設一名の配置は少ない。きちんと対応するならば10家族程度しかたいうできない。FSWに求められる業務が多い。家族支援のみでなく、里親やアフターケア等も含まれている。</p> <p>家庭環境が整うよう支援する方策について、施設としてできる範囲がはっきりしない。センターとの連携をどのようにするのが大きな課題だと思う。</p>
	家族再統合に必要なもの	施設全体の理解。ケアワークの充実
	経験から見た家族再統合の難しさ	<p>年齢のひくい児への無理なひきとりが多くなった。親の生活が入所前と変わらないのに金銭的理由で無理なひきとりが多くなった。親親関係が大切。</p> <p>急いだら失敗することがとても多い</p>
	FSW業務を通して経験している困難	<p>子どもは施設で課題をクリアして成長するが、その家族への援助は実際難しく関わりにくさを持っている。</p> <p>児相と保護者が敵対関係になっているケースも少なくなく丸投げや逆に訴訟等のケースが発生していることもある。このようなケースの場合施設の立場が非常に難しいことを実感している。</p> <p>子供へのケアのエネルギーより、その子供の家族、家庭に対してのエネルギーを使うことが事例として増えている。児童養護施設職員(FSWを含めて)が抱え込まなければならないものが多すぎるのが現場の実感である。</p> <p>児童養護施設での入所期間が長ければ長い程、子どもは親の問題を知り、再構築が出来にくくなる。入所児からの計画性が重要だと思うが、担当の児童もいるため、余裕がないのが現状。</p> <p>いそがしすぎる。休む日がほとんどない。しかし、子どものためには、どんな親であっても親と一緒に第一を考える。</p>
	家族再統合を困難にしている要因	<p>安定した就労先がない事で家庭に帰れずにいる親子が一番かわいそうに思います。経済力はあっても親が子を愛せず家庭に帰れない子もいる事がとても残念です。</p> <p>再構築するには、親等のおかれている経済的社会的条件が大変厳しいということ。</p>

資料3 FSWの判断根拠(家庭復帰ケース/12歳以下)

カテゴリー	概念	データ
当事者の変化	親子・きょうだい関係の改善	子どもが母と会うことに緊張しなくなった
		父子関係が良好
		本人と母、兄弟との関係性の回復
		親子関係が良好になり、再統合するのに問題がないと判断した
		虐待という事象が発生した要因を整理していく中で、修正可能と判断できたこと(父の養育上の技術の問題であった)
	家族メンバー間の関係改善	母子関係が少しずつ改善
		復帰プロセスの中で母が過去の虐待の振り返りができ、子どもに謝罪すると共に子どもが勘違いしていた入所の経緯を訂正できたこと
		家族の再構築が実現できそうであったから
	親子関係悪化	姉がおり、姉妹関係を大事にしたかった
		父が母のリスクを理解
家庭復帰への意欲	親子・きょうだい関係の改善	母と養父と祖母の関係が良くなった事で、子どもが家に帰りたと思う様になった
		夫婦間の絆が回復したこと
		父子関係が悪くなった
		母の再婚により、母自身の精神の安定
		母の気持ちの変化(安心感か?)
	親の心身の状況安定	離婚した実母の生活が安定して、子どもへの執着を父親が育てるという点で一致をみた点
		養父、母、異父弟が生活を営んでおり、養父の病状が安定した
		父の体調がよくなったこと
		子どもの成長
		小学校入学(成長している)
家庭復帰への意欲	子どもの希望	本児の希望
		子ども自身が親に対して持っている思い
		本人がハッキリ生活の変化、本人の環境の違いに直面しても努力していく決意を確認出来た事
		本児自身が家に帰りたという強い気持ち
		子が帰ることを希望
		子どもが家族と一緒に生活したい強い気持ち
		本人の気持ち(家で暮らすのを本当は望んでいる)
		子の親への思い
		子供の意向
		子ども家庭での生活を希望したため
		対象児童自身が家庭復帰を望んだ事
		本児が望んでいる
		児童の意向
		C(本児)の強い希望と学校のサポート体制
		子ども達も「帰りた」という希望があった
	親の希望	本人の希望
		施設の話し合い(子供の訴え)
		母親の強い子どもに対する思いを感じたこと
		実母が子どもを引き取りとの要求が高かった
		母親が何とか子ども達と生活したいという気持ち
		親の子への思い
		母の意志(家で養育可能な生活基盤作り)
		母の強い子に対する思い
		両親ともに本人を愛していた。一日でも早く引き取りたい希望を打ち出していた
		母親の気持ち
		母の引き取り希望
		保護者が子どもを引き取る意思が強く
		父の子どもに対する思い
		母の強い意志
		保護者の強い希望
家庭復帰への意欲	親子・家族の希望	母親も継父との中で、引き取りについて意志を持てた事
		親子の意思の堅かった事
		家族、本人ともに家庭復帰の希望があった
		家族の意志と本人の意志
		基本的に父子ともに家庭復帰を望んでいたこと
		たくさんの課題がありましたが、それでも子どもを思うM(母)の気持ち、子どももMと暮らしたい思いを大切に
		し、Mの少しの変化で判断をする
		母親の希望も強く子ども本人ものぞんでいた
		母、子共に暮らしたいというモチベーションの高さ
		母子共に家庭復帰を望んでいること
	親の熱心さ	保護者がアルコール依存症が親子の別離を引き起こすことをしっかり受けとめられて、努力していった事で、児童福祉指導措置に変更した。
		母親が何かあった場合は、園、児相に相談しながら子育てができるようになった
		子どもと接する事が出来る様になった親(親が中心の生活パターンの変化)
		実母が抱えこまず相談できる様になった
		上記のアセスメントシートの状況が協議を重ねながら、課題を改善することで、親子双方が大きく改善された
	親の熱心さ	母の熱心さ
		母親は苦しくなったら誰かに相談したり訴えることが出来る
		母が支援に対して前向きであり解決に至った事(子供と一緒にいる事で母は頑張れると考えた)
		母子が引きとりに向けたプログラムに取り組み、変化が見られた
		父が児相の引き取りプログラムに協力して実行することができたこと

復帰家庭の安定	復帰家庭の変形	実父の協力
		家族の支え
		祖母の協力
		支える親族が母のそばにあり充分母子を支えられること
		疎遠の父方祖父が家庭に父子を迎えて一緒に取り組もうとされた点
		祖父母の愛情、年齢、経済力
		父方祖父母の積極的な支援
		本人も母も祖母宅を望んだ
		母のところではなく、祖母宅(母方の祖母で)であった
		環境的に祖母宅の方が良いと判断したため
		祖父母のサポート
		継父と子どもたちの関係構築
		新しく母になる女性の希望
		保護者をサポートする家族(祖父母)との同居が出来たこと
		両親の協議離婚の成立
	生活環境が整ったこと	母と交際男性との生活環境の整備がされ、本児らの居場所も確保されたこと
		継父の理解と経済的な安定があった事
		再婚者の人柄
		継母の子育てに対する姿勢
		母親の再婚による生活改善
	復帰家庭の安全確保	親の経済的自立
		養育者が家に帰ってこれたこと(弁護士を通じきちんとしたかたちで帰ってこれたこと)
		母だけではなく、見守りの出来る父が現れた事が大きな要素
		受け入れる環境が整った事
		家庭の経済的な安定
FSWの管理下での判断	生活環境が整ったこと	経済的な裏づけができたこと
		(父の)再就職で生活の基盤が整ったこと
		母親の意思と生活の改善(仕事を夜から昼に変えた。子どもを受け入れるための生活環境を整えた。母を抑制できる人(内父)の存在)
		外泊が安定的にできていた事
		虐待をしていた男性の存在がすでにない
	復帰後の家庭を支える地域資源の存在	本児以外のきょうだいが家庭で問題なく生活していたこと
		家庭復帰後本児の居場所があるかどうか、暖かく迎えられているか
		家庭訪問等で復帰への確認、復帰後の家庭訪問
		児相が家庭訪問、母子の面会を繰り返し、安全を確認。転校先の学校とも事前に情報共有できていた
		継父からのDVがなかった事
	FSWと親との信頼	協力者が作れ、しっかりとした支援が得られた事
		施設にSOSをいつでも出せる関係付けができた事
		関係機関を作れた事(福祉事務所、健所等)
		地域のセーフティネットの形成
		子相との連携と居住地での生活基盤での相談したり協力者がいると言う安心の為に整備が出来た事
	順調なプロセス	出身地域にケースを見守るネットワークがしっかりしていた(医師、保健師、学校、児相等)
		地域(行政)の支援を受け入れやすい家族であったこと
		母子支援施設での生活が継続でき、周りのフォローが得られること
		学校、地域のサポートがあること
		長期外泊も経験し、「学校とのつながり」もできている
	児相との連携	本児らの小学校通学、入園の準備がきちんとでき、学童保育の利用が可能になったこと
		家庭訪問を受け入れ、それなりに信頼関係が築けた点
		継母、実父とFSWの信頼関係の構築
		帰省や外出が増えた
		入所時に、4年生に進級する時期を復帰の目標として母自身も目標に向かって努力された事が家庭復帰につながったと思う
	今しかないという判断	スケジュール通りに行えたこと
		児相もOKした事
		子どもが家庭に帰るにあたり、安心して帰せるという判断が、児相、施設双方で認識できたこと
		児相と連携
		この機会(小学校入学)を逃すと保護者のひきとりに対する意欲が維持できないと思ったから
FSWの専門的な判断による決定	施設外の専門家の判断	母…何年間も離れて生活する中で、母の目標は子どもをひきとる事であり、その為に仕事も頑張ってきた。ひきとれないなら仕事もしたくない等「マイナス思考」が見られるようになってきた。
		ネグレクトされた児がこのまま思春期まで施設で育つということについて、人格形成上どうなのか、強い疑問があった(暴力性は環境因によるものが大きいと感じていた)
		父の病状が悪化し親子で暮らせる時期が今しかないという児童相談所の判断
		「早期」引き取りについては児相判断。園としてはもう少し様子をみたいと希望していた(父母の関わりプラス本児の発達面での課題より)
		医療への信頼感(母親の)
	強引な引き取り	児相の判断
		母親が不法滞在であったため、強制送還された
		入管指示
		子相の判断
		精神科退院されていたが、病院側から大丈夫という判断が出た
	判断への迷い	母の病氣回復と母親の担当DrのOKが出た事
		病院のサポート・判断
		引き取り希望が強すぎたこと
		両親からの強引な引き取り
		現在も問題は多々あり、判断は？と悩むこともあります。現在アフターケア継続中
		母へのアプローチを実施することで変化があるかもしれないと思い、行動していった事が、結果的に良い結果となった

資料4 FSWの判断根拠(家庭復帰ケース/13歳以上)

カテゴリー	概念	データ
家庭復帰への意欲	子どもの希望	それ(母の強硬な姿勢)に伴う本人の意志
		何よりも児童が家に帰りたいと強い希望があった
		本児の強い家庭復帰の意志
		本人の思い
		本児の希望、意志
		本児の意志
		子どもの意向
	親子の希望	父子共に望んでいる
		父と子の気持ち(家庭復帰したいという希望)
		本人と保護者
		母子共に親い合い、子の積極的愛情表現が出来ていたこと
		母の子への愛情、子の母への愛情(絆の強さ)
家庭復帰を可能にする変化	親の心身の安定	本児の帰りたい気持ちが強いことと、母親も本児と一緒に生活をしたい気持ちがあり、両者の気持ちが一致したこと
		母子それぞれの同居意思。母子分離の納得が双方共にできておらず、状況の認識を行わせ納得を促す為
		家族の意志(本児含め)
	子どもの成長	祖父母、本人の意志
		家族の意向
		父親の精神状態
	生活基盤の安定	父が定期的にカウンセリングを受けている事
		母親の退院と病状安定
		親の変化
復帰家庭の再形成	復帰家庭の変形	子の生活状況の安定
		施設(担当、心理士)の本児への適切な支援
		親をささえながら、自分の生活が出来る年令になった
	再統合を困難にしていたメンバーの不在	母親の生活基盤が出来たこと(母親知人の支援大)
		経済的に安定している
		同居男性が社会性はある為母親への支援可
	生活を支える地域体制	本人の受け入れ
		母の継続的な就労
		母親の元に戻すことに心配はあったが母親なりの努力と伯父伯母のサポートを受けられることがはっきりした
FSWの管理下での判断	児相との連携	祖父母の協力が得られたこと
		祖父母との同居
		祖母という協力者が身近にいた事
	良いタイミング	両親を支えるキーパーソンとしての弟夫妻の協力
		父が単身赴任である事
		帰省の際には実家で親子で過ごし、父の宿泊は実家という約束をかわす
	地道なプロセス	実母が継父と別れる
		各機関のケアの充実、連携の確立
		福祉的資源の活用
FSWの専門的な判断による決定	児相判断	児相(GW)の粘り強い支援を対応
		施設、相談所の判断
		高校進学で節目
	他の選択肢がない	時期を逃すと統合が困難になり、絆が切れる恐れがあった
		父親の行動はゆっくりではあるが、提示に対して実行してくれる
		春・夏・冬の長期休暇帰省、連休での頻繁な規制が実現していたこと
	強引な引き取り	家庭引き取りの要件の達成度
		3か月間の家庭復帰試験期間本児の福祉が著しく阻害されるということはないと判断
		本人家族が自分を支えているのだと言葉でなく身体をもって知ってほしかった
FSWの専門的な判断による決定	児相判断	そのことで、将来家族を持つであろう本人が誤った家族観を培うことのないようにしたいと思ったから
		児相の決裁
		児相の意向
	他の選択肢がない	問題行動(事件)の発生
		卒業後の受け入れ先がないこと(施設入所を本人が拒否)
		社会に出ても自立ができない
	強引な引き取り	施設生活への不満から、生活に支障をきたす事も多くなった
		母の強硬な姿勢
		母の強い引き取り希望

資料5 FSWの判断根拠(社会的自立ケース/12歳以下)

カテゴリー	概念	データ
帰れる家庭の不在	家庭の不在	実父が特養ホームに入所していること
		母は行方不明、父はケイム所
		受け皿となる親族がいなかったため
		養育者の行方がわからなかったため 住民票を残して家出したため
		父の施設入所
		帰る場所がない状況にある
		親権者である父は行方不明
	生家の変化	親類との同居も無理だったこと
		継母の拒否
		継父の承諾がえられなかった
		兄が家に入った(本児と兄の中はきわめて悪い)
		母親が同居男性の元に入り込んだこと
	親の子ども拒否	実父が内縁の女性が出来てしまい、子ども達に目が向かなくなった
		父と継母の間に2人の子どもが生まれ本児の居場所がない
	生活基盤の不安定	母親も受け入れ困難
		親の快い承諾が得られない
		経済的な部分
		父親が仕事を転々していた
		父の生活状況が全く見えないこと(就労、住居など)
		経済的な理由
		父の生活基盤
変わらない親	養育不可能な親	経済面
		経済的に母子の生活は困難であったこと
		母親の生活力、金銭感覚のなさ
		実母の症状に大きな改善が見られなかった事
		母親が養育の不安を持っていたこと
		疾病の為、養育不可
		母親の本児に対して養育能力が難しい点
	子どもの安全が守れない	父の生活もアルコールに依存し入所時の状況と変わりなかった事
		母は本児の面倒を見れる人ではない
		実母の病状が思わしくない
		父親の週2回の透析が必要であった事
		実兄の素行
		家族内性虐待
		母親と内縁男性との不仲
子どもの自立支援	子どもへの無関心	親権者ではないが母とは全く交流はなく、虐待者であったため(母は本児への思いが無かった)
		母が本児に関心がなかったこと
		母の関心が衰退していった
	虐待の否認	全く愛情が感じられなかった
		母は引きとりの希望をはっきり施設に伝えきれなかった
	子の信頼への親の裏切り	しばらくの間、虐待を認めることができなかった
		母が本人に謝罪が出来なかった
		父の虚言
		子どもの信頼に母親が裏切ることが多く、困難になった
		父親の口先丈の言動歴から危うさを抱いていたが、結局父親自信の口から本人へ引き取りはないと通知された
子どもの自立支援	子どもの希望	高校に入り、冬・夏の家庭への一時規制の際の本児のこずかいを財布から盗み母親が使う
		本児の希望
		本人の希望(まきこまれる、労働搾取の不安)
		本人が自立したい、親元へ戻ることを拒んだ
		親に対する拒否感が強く、関わりを持とうとしなかった
		子が復帰を拒んだ(小5、小6の時)
		子どもが社会自立をめざすようになり、それを援助した
		本児が家庭に帰る事に対し、難色を示した
		子どもが帰る事を希望しなかった
		本児が親として母を認めれない
子どもの自立支援	子どもの自立支援優先	本人の気持
		本人の強い意志
		本児が父に対して恐怖心を持っていた事
		本人の自立課題
		身体的虐待による影響が大きく、そのトラウマを退所するまでの期間で払拭することができなかった事
		C(本児)の生活状況の不安定さ
		本人の就労支援
		後見人との調整
		「家族再統合」の達成
		親子関係の整理
FSWの迷い	FSWの迷い	家族員それぞれの向き合いと出来ることの整理がきちんと行えたこと(家族皆の理解)
		その判断は現在検討中です

資料6 FSWの判断根拠(社会的自立ケース/13歳以上)

カテゴリー	概念	データ
帰れる家庭の不在	家庭の不在	父親の行方不明
		父親が死亡したこと
		祖母の死
		両親に関する情報がほとんどなかった為
	親の養育能力の不足	父母の養育能力が低かったため
		父はアルコール中毒であり、状況の改善が見込めなかった
		母の不安定さ(精神的に不安定で本児のために進学資金を用意したといいながら嘘であったりする事実も母が別の男性をこどもたちに紹介したり、本児のアルバイト代を借りに来たりという現実を客観的に判断できるようになった
子どもの自立支援優先	再虐待のおそれ	家には虐待をした父しかいない状況で、本児を守る家族がいなかったため 再度虐待になる可能性 虐待の可能性
	生活基盤の不安定	家庭の経済的課題がクリアできなかった 生活基盤の欠如
	親の子ども拒否	両親が家への復帰を望まなかったこと 子が施設生活に大変満足していたこと
	子どもの希望	本人の意志
		本児の加害者への憎しみと対応が滞りがちの保護者に対するいらだちが増加していった事
		本児の気持ち
		本人の希望(虐待されたことをとても深く傷つき心の中のわだかまり…としてもっていたこと)
		本人の意志
		父に対する気持ちに変化(実際の虐待者は母だった。父は思っていた程は恐くなかった)
他の専門機関の判断	児相判断	本児の気持ちの変化(母が恋しく一緒に暮らしたい→母の真の姿を理解し母から離れるようになった)
		子どもの状態(家族拒否)
		先ず自分ひとりで生きていける力を身に付けるという基本的な考えに基づいて決定。依存からの脱却
		児相の許可が下りなかった

資料7 勤務形態別家庭復帰ケースのFSWの業務(専業FSW)

カテゴリー	概念	データ
親を支えることで家庭復帰を目指す関わり	子どもの状況説明	担当職員と私のペアで子ども中心の話とこの年で起きうる状況について説明をしたり 子どもの状況説明
	子育てのアドバイス	家庭訪問にて両親への助言指導 再婚者へ本児の特徴や求める関わり指導 外泊中の家庭訪問 交流における養育観点のていじ 子育て方法についての勉強会の開催
		家庭への復帰訓練として毎週帰省させ課題を母と話し合う 面会の立会いや外泊中の家庭訪問を行い、親子の関わり方についてアドバイスをした
		子供の成長を一緒に喜び、子育ての楽しさを母と共有出来るようにした
		母親の話しを丁寧に聴くこと。依存的になりがちな方なので、支援の範囲をこちら側も流されないことに留意
	親との信頼関係構築	施設への信頼感を持ってもらう 母とのコミュニケーション
		父母の面接 外出、外泊時の交流状況について、ケアワーカーから聞き、共通認識をもってきた
	家庭状況の把握	家庭訪問 家族再統合にむけての父母との話し合い 母、家族との面会、通信、帰省の窓口 家族の状態、家庭環境について母、祖母から細かく話を聞き、安心して生活できる環境かを確認し、それが継続できるよう促した
		家族との調整 母、継父、合同及び個別の面接を実施
		制度の活用手続き 仮釈放を求める意見書を出す
		父親の支援、保護課につなげる、居住先の確認、支援団体につなげる
		母の生活保護受給、権利擁護を使い経済的安定を図った
	親子の生活再建支援	保護者理解者また代弁者となる 実母のサポート(ケアワーカーとの家庭訪問)
	親の味方役割	両親がその場の中で(居住地)出来る為のネットワークを作る 地域の中で支えていただくネットワーク作り
	地域でのサポート体制構築	退所後、見相含め、三者協議を行った
	退所以降の関わり	退所時の同席 アフターケアでの関わり方確認
子どもへの支援	子どもの生活支援	登校刺激
	子どもの心に寄り添う支援	子どもの意向確認 父との交流後、子どもの様子を見て、必要があれば面接を行い、子どもの気持ちに寄り添った 方向性決める園内会議への出席
多様なアクターをつなぎながら家庭復帰へのプロセスを組み立てる支援	家庭復帰のプロセス	一時帰宅の調整 家庭復帰への課題整理 DO計画作成への協議(園内、見相と協議) 外泊プログラムの策定 協議にあたり、見相も施設も親、子それぞれの状況を判断するアセスメントシートを活用した
		見相との連絡・調整 関係者会議への同席 学校との連絡・協議 見相、医療機関との連携 見相CWとのカンファレンス及び合同での家庭訪問 見相、保護者と連絡調整をする 復帰先の学校へ施設での生活状況報告 見相、児家セン、地域の社会福祉課等との状況共有、役割分担の明確化 関係機関の調整。どうしてもパーソナリティ障がいに対する理解がとぼしかった
		見相、保護者、学校など他機関との連絡、調整 見相と協働しながら、引取りに向けてリスクの少ない体制を作るため、母、協力者である祖母を交えて何度も協議を行うようにした 児童相談所と一緒に地域の関係機関を何度もケース検討会議を開き引き取りに向けてM(母)への支援を考える
		関係機関の連絡(保健師、見相、保護課、施設、施設心理士、民生員、警察) 学校との連絡 児童相談所との連絡、調整 見相への連絡調整
		面会の立会い 父子間の感情の整理
	つなぎの役割	特にこれといったものはないが、一つあげるとすれば、保護者と見相のつなぎの役割を果たすことができたということかもしれない 担当職員と家族とのスムーズな連携を図る



資料8 勤務形態別家庭復帰ケースのFSWの業務(兼業FSW)

カテゴリー	概念	データ
親への働きかけで家庭復帰を目指す関わり	子育てのアドバイス	実父の子育て支援 父子家庭としての準備、助言 経済(1か月の収入、支出のバランス)的な助言、子どもの接し方(子より自分の遊びを優先する親) 親へのアドバイス、養育に関する不安を受けとめた 父親宅への家庭訪問、養育アドバイスをおこなう 母親の不安を解消するためにケアワーカー・FSWと母親で交換ノートを作り、小学生のお世話の方法を具体的に伝えたら母親も安心していった 父指導 母からの電話相談も受けていました 内容は「こんな時どのような対応をすればいいの?」など こちらからの連絡を増やし、子どもの様子、手紙、学校からのお知らせを郵送し
		母親の様子を知らせ安心させる 父母参加行事への促し 本児の様子を定期的に報告 施設でのこどもの状況の情報提供
		子どもの気持ち伝える関わり 子どもの気持ち、スタッフからの情報を伝え、父親の決心を促す 担当職員と共に家庭訪問を実施して本児の意向を伝え、家族統合の必要性を話した 父(親権者)との本児の意志、希望を伝えること 母への本児の気持ちを伝え、引き取りについて了解を得る
		親子の生活再建支援 再就職への支援、協力 母の生活安定を考え生保申請の為のカンファレンス作り 手当の案内 引越しの手伝い 母親の生活基盤の安定化支援(母親との面談、市役所への生保受給相談、母親の知人宅訪問3件、児相との調整)児相の母親引取は当初から否定的であった為 2年間引き取りの希望が強く変わらなかったため、ショートステイの利用があることなど社会資源を知らせたり、相談出来るようにして引き取りした 生活環境改善のアドバイス(就労時間について話したり、金銭について話したり)
	家庭復帰後のサポート体制の構築	協力者を作った 地域の確認・数年後、妹の引き取りを見据えての地域助言、学童クラブの把握 家族の再統合を目途とし、本人が安心して帰れる環境を整えること 本児らの祖父母の居場所をつぎとめる 地域カンファレンス 本人が家に戻ったことを想定して母子ともに必要なとりくみを計画し、退所に向けて実施
		アフターケア 見守り 退所後のアフターケア
		親との信頼関係の構築 母親の心の安定と児童との関係維持 父親との信頼関係構築(ひんぱんなやり取り) 父親を支えながら、母親とも信頼感を作っていた 実母自身の成育歴や子どもの関わり方、本児に対する想い、生活のことなど話を聞き、受容するように心掛けた 父との連携 母親の心的ケア 保護者との関係を築き、困っていることなどを話しやすいように努めた 母子の面会、母子の宿泊をセンターで行い、家族調整を行いながら母親は当園を信頼されるよう配慮した 母の子供と共に生活したいという思いが時として薄れたり、くじかれることが有ったりした時に母に添うように特に留意した 母の思い、気持ちを共有 面会、外泊の時、母親の体調の事等話をする場面を設定する事を心掛けていた 母親の希望はなるべく聞く様配慮した 保護者が来寮時に色々なお話をするといい形での関わりはします 実父との信頼関係づくりを心がけ、アドバイスを受け入れられる土台作り時間に時間をかけた 母へのメンタルケア(相談相手として)
		家庭の状況把握 家庭訪問 居住状況の確認 経済状況把握 家庭の様子を聞く。生活状況の把握 家庭訪問の実施と家族の生活状況の把握 児相の担当福祉と一緒に家庭訪問を行い保護者の経済面や支援をしていただく方、就労等について話し合う このケースにおいてキーパーソンとなったのは母方祖母であり、祖母を通じて母親の状況を把握し適切な支援がなされる。その結果薬物依存から脱却させる事ができた事が大きかったと思う 家庭訪問による環境確認
	親との話し合い	母親との面会 親への面談(施設内、児相内、家庭訪問) 親との面接 父は児相、施設との面談を拒否するため母に仲介に入ってもらい、本児の受け入れ等を相談する 電話での保護者対応 面談 家族への面接(規制時、面会時等)
		新しい家族形成の準備 祖父母と施設との話し合い、祖父母の相談窓口 母、同居している男性との話し合い 実父、新しい母との話し合い(本児の園での生活実態の説明)

拗れた人間関係を正す関わり	保護者間の関係調整	父母間の関係調整
		母と養父と養父方祖母の関係調整
		父親と母親の思いの違いを双方から伺い、整理する
		母親に対し継父との関係に終止符をうつよう助言
	親子の関係調整	親子の関係調整
		母親と児童との再構築に力を入れる。面会や一時帰省を通して少しづつプロセスを増やし
		両親に対する捨てられた感をいなく本児に、両親との関係修復、家庭取り取りに至るまでの関係改善にかかる支援を児相と連携して行った
		本児と保護者の意思確認をしたうえでの調整
	児相と家族とのつなぎ役	妹と母の面接の場面にも立ち会い、児童を含めた家族全体の関係を見守り、母の関わりでの支援や相談に
		児相と父親の間に入る調整役
		児相、家族(父)との調整
		入所当時は母が児相不信を起こし、ともかく母との関係が途切れないように努力。2年目からやっと児相とつながる
子どもへの支援	子どもの生活力をつけさせる支援	児相、家庭との連絡調整全般
		児相、家族との調整役
		担当と母の間に入り意思調整をした
		児童相談所の担当ワーカー母親との関係が悪く、間に入って関係調整を行った
	子ども理解	年齢相応の基本的な生活面の自立
		本児の進路の援助
		学力も少し遅れている様に思われ、宿題等職員が側に付いて取り組ませた
		大きな声ではっきりと話す事
	子どもの意向確認	プレイセラピー(引きとりに向けてのセラピー含む)
		子どもの観察を通し、入所前に身に付けている子どもの“当たり前(普通)”への理解に努める
		子どもへの面談(思いの言語化、親を許すためのとりくみ等)
		児童との面接による確認
多様なアクターをつなぎながら家庭復帰へのプロセスを組み立てる支援	関係専門機関との連携	本人との話し合い
		児相との役割分担
		関係機関との調整
		児童相談所に情報を提供し、父親を交えた協議を何度も行った
		児童福祉司との連絡を緊密にとる事により児童の生活の状態や精神的な変化を伝え、保護者の連絡や面会等を増やしていくようにした
		児相との調整(面談、条件設定、条件の確認作業)
		児相との連携、関係機関会議参加
		普段の児童の様子、幼稚園の様子等情報交換
		関係者会議の開催についても児相が動くよう促すことも多々あった
		児相福祉司との連携
		家庭引き取りの為のケース会議(児相、学校、民生委員、教育委員会、市福祉課、施設)に出席
		児相、園との話し合いに参加
	家庭復帰に向けたプロセス	関係機関とのカンファレンス
		要保護児童対策連絡協議会個別ケース検討会出席
		各機関との連絡調整
		退所に至るまでの児相との連携調整
		児相ワーカーとの連携
		地域福祉コーディネーターに依頼、支援会議を数回持った
		児相を仲介とし、とり計らって頂く。今のように施設が直接家庭訪問はできなかった。本当に確かなのか“ことば”のみで不安は多し
		児相との密な情報交換
		学校との協議(施設から通っていた学校と新しい学校)
		児童相談所との連絡・調整等が主であり、児童への援助、親との協議は、担当指導員等が主に行った
		3つの家のとり行い
		帰省の計画
FSWの関与機会不足	施設内での役割分担	施設内での親子宿泊体験調整
		ケースのマネージメント
		実母、継父、本児の援助課題を整理し、解決にむけて支援を行う
		外泊の調整
	家庭復帰に反対する関わり	スケジュール調整
		母宅への帰省を実施する
		面会外泊等の日程調整
		担当職員との連携
	援助困難	FSW専任でなくユニットももっているため報告相談の業務になってしまう
		ケース担当との連携をおこなう中で本児、児相への対応のアドバイス等
		28条ケースであったが母親の強い希望により家庭裁判所の審判により家庭引きとりとなる予定だったが、受け皿となる母親の養育監護能力への不安不服申し立てする
		継父との対応には苦慮した
	援助不能	母親に会わせてもらうことは無かったため、何もできませんでした
		主になって動くのは担当保育士の為、FSWが大きく関わる事は少ないです

資料9 子どもの年齢別家庭復帰ケースのFSWの業務(退所時12歳以下)

カテゴリ	概念	データ
親や家族の信頼を得る支援	親の心に寄り添い信頼を得る関わり	父親を支えながら、母親とも信頼感を作っていた 実母自身の成育歴や子どもの関わり方、本児に対する想い、生活のことなど話を聞き、受容するように心掛けた 母親の心的ケア 子供の成長と一緒に喜び、子育ての楽しさを母と共有出来るようにした 母親の話を丁寧に聴くこと。依存的になりがちな方なので、支援の範囲をこちら側も流されないことに留意 保護者との関係を築き、困っていることなどを話しやすいように努めた 母子の面会、母子の宿泊をセンターで行い、家族調整を行いながら母親は当園を信頼されるよう配慮した 母の子供と共に生活したいという思いが時として薄れたり、くじかれることが有ったりした時に母に添うように特に留意した 母の思い、気持ちと共有 施設への信頼感を持ってもらう 面会、外泊の時、母親の体調の事等話をする場面を設定する事を心掛けていた 母親の希望はなるべく聞く様配慮した 妹と母の面接の場面にも立ち会い、児童を含めた家族全体の関係を見守り、母の関わりの支援や相談に 実母のサポート(ケアワーカーとの家庭訪問) 母とのコミュニケーション 実父との信頼関係づくりを心がけ、アドバイスを受け入れられる土台作り時間に時間をかけた 母へのメンタルケア(相談相手として) 仮釈放を求める意見書を出す 保護者理解者また代弁者となる
	親の味方になる支援	再就職への支援、協力 母の生活安定を考え生保申請の為のカンファレンス作り 制度の活用手続き 経済(1か月の収入、支出のバランス)的な助言、子どもの接し方(子より自分の遊びを優先する親) 2年間引き取りの希望が強く変わらなかったため、ショートステイの利用があることなど社会資源を知らせたり、相談出来るようにして引き取りした 父親の支援、保護課につなげる、居住先の確認、支援団体につなげる 母の生活保護受給、権利擁護を使い経済的安定を図った 生活環境改善のアドバイス(就労時間について話したり、金銭について話したり) 母からの電話相談も受けていました 内容は「こんな時どのような対応をすればいいの？」など 母親の不安を解消するためにケアワーカー・FSWと母親で交換ノートを作り、小学生のお世話の方法を具体的に伝えたら母親も安心していった 担当職員と私のペアで子ども中心の話とこの年で起きうる状況について説明をしたり 家庭訪問にて両親への助言指導 親へのアドバイス、養育に関する不安を受けとめた 交流における養育観点のていじ 父子家庭としての準備、助言 子育て方法についての勉強会の開催 実父の子育て支援 父指導 面会の立会いや外泊中の家庭訪問を行い、親子の関わり方についてアドバイスをした 地域の中で支えていただくネットワーク作り 見守り 地域カンファレンス 両親がその場の中で(居住地)出来る為のネットワークを作る アフターケアでの関わり方確認 協力者を作った 登校刺激 子どもの観察を通し、入所前に身に付けている子どもの“当たり前(普通)”への理解に努める 学力も少し遅れている様に思われ、宿題等職員が側に付いて取り組ませた 大きな声ではっきりと話す事 プレイセラピー(引きとりに向けてのセラピー含む)
生活基盤を安定させるための支援	子育て方法に関する助言・指導	こちらからの連絡を増やし、子どもの様子、手紙、学校からのお知らせを郵送し 母親の様子を知らせ安心させる 父母参加行事への促し 本児の様子を定期的に報告 子どもの気持ち、スタッフからの情報を伝え、父親の決心を促す 子どもの状況説明 家庭訪問 児相CWとのカンファレンス及び合同での家庭訪問 外泊中の家庭訪問 家庭の様子を聞く。生活状況の把握 家庭訪問の実施と家族の生活状況の把握 このケースにおいてキーパーソンとなったのは母方祖母であり、祖母を通じて母親の状況を把握し適切な支援がなされる。その結果薬物依存から脱却させる事ができた事が大きかったと思う 家庭訪問による環境確認
	子どもの様子を知らせる関わり	家庭状況の把握

家庭復帰に向けたソーシャルワークプロセス	親との話し合い	父母の面接 母親との面会 父との連携 家族再統合にむけての父母との話し合い 親への面談(施設内、児相内、家庭訪問) 親との面接 母、家族との面会、通信、帰省の窓口 電話での保護者対応 児相の担当福祉と一緒に家庭訪問を行い保護者の経済面や支援をしていただく方、就労等について話し合う 面談 家族への面接(規制時、面会時等)
	家庭復帰を目指したステップ	3つの家のとり行き 帰省の計画 一時帰宅の調整 施設内での親子宿泊体験調整 家庭復帰への課題整理 外泊プログラムの策定 DO計画作成への協議(園内、児相と協議) 家族の再統合を目的とし、本人が安心して帰れる環境を整えること 協議にあたり、児相も施設も親、子それぞれの状況を判断するアセスメントシートを活用した 外泊の調整 スケジュール調整 家庭への復帰訓練として毎週帰省させ課題を母と話し合う 面会外泊等の日程調整 本人が家に戻ったことを想定して母子ともに必要なとりくみを計画し、退所に向けて実施 再婚者へ本児の特徴や求める関わり指導
	新しい家族形成の準備	実父、新しい母との話し合い(本児の園での生活実態の説明) 祖父母と施設との話し合い、祖父母の相談窓口 児相と協働しながら、引取りに向けてリスクの少ない体制を作るため、母、協力者である祖母を交えて何度も協議を行うようにした 母、継父、合同及び個別の面接を実施
	関係機関との連携・調整	児相との役割分担 児相との連絡・調整 関係者会議への同席 児相、医療機関との連携 学校との連絡・協議 児童福祉司との連絡を緊密にとる事により児童の生活の状態や精神的な変化を伝え、保護者の連絡や面会等を増やしていくようにした 児相との調整(面談、条件設定、条件の確認作業) 児相、保護者と連絡調整をする 児相との連携、関係機関会議参加 復帰先の学校へ施設での生活状況報告 児相、家庭との連絡調整全般 普段の児童の様子、幼稚園の様子等情報交換 関係者会議の開催についても児相が動くよう促すことも多々あった 児相、児家セン、地域の社会福祉課等との状況共有、役割分担の明確化 児相福祉司との連携 家庭引き取りの為のケース会議(児相、学校、民生委員、教育委員会、市福祉課、施設)に出席 関係機関の調整。どうしてもパーソナリティ障がいに対する理解がとぼしかった 児相、園との話し合いに参加 児童相談所と一緒に地域の関係機関を何度もケース検討会議を開き引き取りに向けてM(母)への支援を考慮 関係機関とのカンファレンス 関係機関の連絡(保健師、児相、保護課、施設、施設心理士、民生員、警察) 学校との連絡 児童相談所との連絡、調整 児相を仲介とし、とり計らって頂く。今のように施設が直接家庭訪問はできなかった。本当に確かなのか“ことば”のみで不安は多し 児相との密な情報交換 学校との協議(施設から通っていた学校と新しい学校) 児相への連絡調整
家庭復帰を困難にする要因の除去	子どもの意向確認	子どもへの面談(思いの言語化、親を許すためのとりくみ等) 児童との面接による確認 子どもの意向確認 父との交流後、子どもの様子を見て、必要があれば面接を行い、子どもの気持ちに寄り添った
	施設内での役割分担	方向性決める園内会議への出席 担当職員との連携
	家族と児相のつなぎ役	入所当時は母が児相不信を起し、ともかく母との関係が途切れないように努力。2年目からやっと児相とつながる 児相、家族との調整役 担当と母の間に入り意思調整をした 特にこれといったものはないが、一つあげるとすれば、保護者と児相のつなぎの役割を果たすことができたということかもしれない 児童相談所の担当ワーカー母親との関係が悪く、間に入って関係調整を行った 担当職員と家族とのスムーズな連携を図る
	家族メンバー間の仲介役割	父母間の関係調整 母と養父と養父方祖母の関係調整 父親と母親の思いの違いを双方から伺い、整理する 家族との調整
FSW業務の不在	親子関係の仲介	母親の心の安定と児童との関係維持 親子の関係調整 面会の立会い 退所時の同席 父子間の感情の整理
	FSW業務の不在	母親に会わせてもらうことは無かったため、何もできませんでした 主になって動くのは担当保育士の為、FSWが大きく関わる事は少ないです。保護者が来寮時に色々なお話をするといい形での関わりはします

資料10 子どもの年齢別家庭復帰ケースのFSWの業務(退所時13歳以上)

カテゴリー	概念	データ
家庭復帰への方向づけ	親に子どもの様子を知らせる関わり	施設でのこどもの状況の情報提供
	親に子どもの気持ちを知らせる関わり	担当職員と共に家庭訪問を実施して本児の意向を伝え、家族統合の必要性を話した 母への本児の気持ちを伝え、引き取りについて了解を得る 父(親権者)との本児の意志、希望を伝えること
	子どもの意向確認	本児と保護者の意思確認をしたうえでの調整 本人との話し合い
家庭復帰を可能にする生活づくりへの支援	子育てに関する助言・指導	父親宅への家庭訪問、養育アドバイスをおこなう
	親の生活基盤を安定させる関わり	手当の案内 母親の生活基盤の安定化支援(母親との面談、市役所への生保受給相談、母親の知人宅訪問3件、児相との調整)児相の母親引取は当初から否定的であった為
	子どもに生活力を身に付けさせる支援	年齢相応の基本的な生活面の自立 本児の進路の援助
	家庭復帰後の親子の生活を支える体制づくり	退所後、児相含め、三者協議を行った 引越しの手伝い 地域の確認・数年後、妹の引き取りを見据えての地域助言、学童クラブの把握 本児らの祖父母の居場所をつきとめる 退所後のアフターケア(家庭訪問)
	親子関係改善のための関わり	両親に対する捨てられた感をいなく本児に、両親との関係修復、家庭引取りに至るまでの関係改善にかかる支援を児相と連携して行った
	家庭状況の把握	居住状況の確認 経済状況把握 家族の状態、家庭環境について母、祖母から細かく話を聞き、安心して生活できる環境かを確認し、それが継続できるよう促した
	親との信頼関係構築	父親との信頼関係構築(ひんぱんなやり取り)
家庭復帰に向けたソーシャルワークプロセス進行	親との話し合い	児童相談所に情報を提供し、父親を交えた協議を何度も行った 父は児相、施設との面談を拒否するため母に仲介に入ってもらい、本児の受け入れ等を相談する
	新しい家族形成の準備	母親に対し継父との関係に終止符をうつよう助言 母、同居している男性との話し合い
	家庭復帰に向けたステップ	母親と児童との再構築に力を入れる。面会や一時帰省を通して少しずつプロセスを増やし 実母、継父、本児の援助課題を整理し、解決にむけて支援を行う 母宅への帰省を実施する
	関係機関との連携	関係機関との調整 児相、家族(父)との調整 児相、保護者、学校など他機関との連絡、調整 各機関との連絡調整 要保護児童対策連絡協議会個別ケース検討会出席 退所に至るまでの児相との連携調整
		児相ワーカーとの連携 地域福祉コーディネーターに依頼、支援会議を数回持った 児童相談所との連絡・調整等が主であり、児童への援助、親との協議は、担当指導員等が主に行った 外出、外泊時の交流状況について、ケアワーカーから聞き、共通認識をもってきた
		施設内での役割分担 ケースのマネージメント FSW専任でなくユニットももっているため報告相談の業務になってしまう ケース担当との連携をおこなう中で本児、児相への対応のアドバイス等
		児相と親との仲介 児相と父親の間に入る調整役
		援助困難 継父との対応には苦慮した
援助困難	家庭復帰への反対	28条ケースであったが母親の強い希望により家庭裁判所の審判により家庭引きとりとなる予定だったが、受け皿となる母親の養育監護能力への不安不服申し立てする

資料11 勤務形態別社会的自立ケースのFSWの業務(専業FSW)

カテゴリー	概念	データ
家族関係の在り方への支援	親子の今後に関する協議	母への援助機関と子どもの援助機関との協働の調整 母親の病院のSWと家庭訪問をするなど医療と連携し、母子の今後について検討した 本人と母との意思調整と本人の決意確認等
	親子・家族間の調整	家族関係の調整 向き合いの設定(本児一家族)
	親役割の付与	進路決定期の親の意向確認 母への連絡(車の免許取得に関する保証人のお願い) 父親のプライドもあり、父親としての尊厳はできる限り発揮して頂いた(保証人、卒業、入学式等への出席)
	兄弟へのフォロー	兄弟へのフォローも担当保育士と一緒にいった 自立に対する不安について、相談受付
	子どもの心のケア	本児の成育歴の整理 C(本児)との面談 就職後のアフターケア、相談
子どもの自立生活への支援	自立を見据えた段取り	高校進学、就職に向けての支援 自立に際しての後見人との話し合い 資格取得に向け受験対策を行った 地域の障害者福祉施設と連携して、本児に必要な社会資源について相談し、退所後の生活で困らない様に環境を整えた
	調整役割	キーパーソンは子相であるがこの中でのケース作りでの協議 連絡 市、生保ワーカー、児相との関係、家族支援内容の共有、必要に応じて家族、児相、施設、本児の家族会議の打診、調整 児相に実父とのなり方に関して相談や連絡を行う 関係機関との連絡調整 ヘルパー 病院への働きかけ 学校(三者面談)との調整 職員間の意見調整もする
家族理解	親の状況把握	グループケア施設での生活をしていたため、ケアワーカーの個別対応がしっかりととれていたため、本児の様子を定期的にきき、現状把握していたのみ 関係が途切れない様、本児の様子についても伝える方、途中で生活が波紋した時の支援についての確認 母親の話しを聴くこと 母との面会調整 父の生活状況の確認(児童福祉司と共に)・就労先訪問、家庭訪問 父親に対して、節目の面接を実施しながら、児の意見を尊重しながら、進学、就職を決定してきた 当時は担当CWとして保護者への訪問、面接などを行う ケアワーカーとFSWでの実母との面会調整
		援助困難
援助困難	援助困難	FSWになってからは、まず施設に来てもらわないといけなかったので、定期的にアプローチするが厳しかった

資料12 勤務形態別社会的自立ケースのFSWの業務(兼業FSW)

カテゴリー	概念	データ
子どもの自立生活を直接支える支援	自立に必要な力をつけさせる支援	簡単に言えば見立てと導きの糸口を明確にする。ある程度は線路を引いてあげないと具体的な像が結ばない。そこに力をそいだ 本人の自立にむけた援助課題のアセスメント 暴力的な立ち振る舞いがどうしても出てしまい対応には苦慮する事になる。虚言も多く、自己の正当性のみを主張するという傾向強く大人への不信感をいかにうめていくかが大きな課題となる。 安心して生活できる環境の中で様々な体験を積み重ねながら大人に頼る事が素直にできるよう支援に努めてく 退所するまでチェック症状は改善されなかった。心理面の安定化、身体的虐待によるトラウマの解消という処遇に努めてくる
	自立生活を支える準備	本児の退所後、入所するグループホームと社協とのケース会議や話し合いを細かく行った 後援会の協力を得る 住居を借りたり入所中は上記の生活指導をしていました 就労支援も手伝う 自立支援に向けた後見人との調整と方針の共有 職安に本児とも同行し、職業を決めるため支援する。職安からの就職面接依頼を受け職場面接におじと同行(県外)採用となり就職準備。職場赴任の同行まで行う 本児の努力もありアルバイト、奨学金制度へのはたらきかけ 退所後、本人の支援者となる社会資源のネットワーク作り
	アフターケア	現在もアフターケアとして関わりを持っています 本児にとり施設は本当に家族にかわる物であり、今は家に帰省せず、施設に帰省して来る 子どもが社会自立した生活の様子を家庭訪問、電話で確認し、相談にのる 自立後のアフターケアを実施した 他府県遠方へ住み込みで就労したが、再三に励まし、家庭訪問も数回行い、母親代わりをして一日を一緒にすごし、関わって孤独でない事を教えた。又淋しくなったら我慢せず担当や家族に連絡をとることを話した。その後も関係は良好である 社会人となり、結婚。二児の母親となり必要な親交りを行っている 退所した後も支援を行った 長く勤務させて頂いている為卒業していった(自立)子ども達が家庭を持ち子どもの親になって私宅に訪問して来ますが自分の子どもの様な感覚で受け入れ喜んでます 自立に向けた準備としてFSWの役割と保護者の役割を明確にして、役割分担した
親子関係を作り直す援助	親役割の付与	また自立のための準備など母親の役目を与えた 入所以来会う機会がなかった父を(本児の同意を得て)招き、本児と面会。就職先の保証人になってもらう
	親をあきらめさせる援助	母親との生活は児童にとって無理という事を児童に伝えながらも親子関係を途切れさせないようにして来た事 母(住所を転々としたり、連絡が取れなくなったり)への対応を無駄でも懸命に試みる事が本児の気持ちの転換点であったかと思われる お互い一緒に暮らしたいと言っていたが、子にこれからの自分の人生について、親とのかかわりについて何度も話し合いをし、子が一人暮らしを希望し、親を説得した。父と子の関係がよい距離感となった 月に一回父の面会につれていくこと 一緒に父親と面会した
	親子間の調整	本児の思い、実母の思いを聞き、パイプ役としてつなげていくことを重視した 父との関係改善のため、一時帰省に伴う家庭訪問時の父子間の調整 母親と本児達の面会調整を行いながら、担当と共に母親と本児の関係改善を支援した 同居男性との別れを決意した母親と子どもの調整をする 面会の立ち合いや、 父と本児の関係調整 母親は“なぜ自分だけが施設に入っているのか”と尋ねられると交流が出来なくなっていた。母子の間に入って仲介役として思いを言葉にして伝えることに徹した
	親の関心をつなぎとめる関わり	父への手紙のやり取り 継母への手紙でのアプローチ 親に様子を伝え、関心を促す。関わってもらう中で、理解を促す 母親への接触再開受け入れ実現 親子の関係が切れないう、日帰り帰宅等会う機会をつくるよう色々試みた。しかし親子の関係は厳しくなる一方であった
家族を開く関わり	親族との連絡	父方叔父との話し合い 父方祖父母との連絡、面接等の設定 親族との連絡調整 保護者になる兄弟姉妹への密な連絡や おじ宅家庭訪問(本児生まれて初めて実家訪問となった)

自立の確認	親の状況把握	児相と連携し父と面談をくりかえす
		母親が人材派遣で職場、住居、交友関係など転々とされるが、常に話を聞き理解を示した
		家庭訪問を何度も繰り返し、家族と施設の関係が良くなるよう働きかけた
		入所児童の能力的な問題を理解し、かかわるように両親に伝える
		父親宅への家庭訪問
		家庭訪問
	進路に関する関係者協議	面会の折には必ず同席させて頂き、実母の現状を傾聴しました。実母も自分の置かれている立場を知ると、私共も強く復帰の口を伝えられず苦しい所でした。実母が母として一人立ちできれば(強い意志の元)社会人となった娘と共に生活できたのでは…と今でも方針に誤りはなかったか考えます。娘が実母を嫌がっていたことを重視した結果ですが
		児相との面会による本人の親への意向確認
		自立支援計画に伴って、学校教育の見極めを行い、関係機関との調整、連絡を図った
		非常に処遇困難な児童であったことから頻繁に父親、児相、学校へ報告、連絡、調整、協議を実施した
		卒業と同時に就職自立が本人の意向であったのでそれに向けて進路検討し、保護者、児相と協議し決定した
		進路検討会を予定をたてて実施する旨段取った
調整役割	子どものメンタルケアの手配	学校へは退学届等支援(挨拶)する
		本児が学校やめる際、母とおじに連絡し、児相にも相談依頼する
	児相との連携	児相のワーカー、両親、担任に同席してもらい、本児の就職等進路決定について話し合いを行った
		子どもの意向確認(児相と一緒に)
FSW業務範囲の未確立	子どもの意向確認	本人との話し合い
		心理士との定期面接会日調整
	児相との連携	児相との連絡調整
		児相との連携
	児相との連携	児童相談所との話し合い
		児相との連携
FSW業務範囲の未確立	できることはすべて	できることは全て一緒に祖母の葬式をあげた
		自立に向けては担当職員が中心となることが多く、SWとして関わる事は少ない。一職員として生活支援にはかかわる
	FSWとしての業務の不在	FSWになって日が浅く専門的な関わりはありません。担当保育士としての関わりの中援助して来ました
		中途退学、就職自立という選択肢もあったが父からの卒業して祖父元か父親元から通勤させる縁故就職との主張に実質的振回された
	援助困難	生活保護世帯であった。又、弟の障害年金ある程度の収入はあったが、全く経済観念がなく、先にお金を使うタイプであった。FSWにも何度かお金を借してほしいと連絡が入る。いろいろ援助、指導もしたが、改善は見られなかった
		生活保護世帯であった。又、弟の障害年金ある程度の収入はあったが、全く経済観念がなく、先にお金を使うタイプであった。FSWにも何度かお金を借してほしいと連絡が入る。いろいろ援助、指導もしたが、改善は見られなかった



資料13 子どもの年齢別社会的自立ケースのFSWの業務(入所時12歳以下)

カテゴリー	概念	データ
自立を前提とした家族関係の再構築	親役割の付与	<p>また自立のための準備など母親の役目を与えた</p> <p>母への連絡(車の免許取得に関しての保証人をお願い)</p> <p>父親のプライドもあり、父親としての尊厳はできる限り発揮して頂いた(保証人、卒業、入学式等への出席)</p>
	親子関係維持の働きかけ	<p>月に一回父の面会につれていくこと</p> <p>母親との生活は児童にとって無理という事を児童に伝えながらも親子関係を途切らせないようにして来た事</p> <p>一緒に父親と面会した</p> <p>母親と本児達の面会調整を行いながら、担当と共に母親と本児の関係改善を支援した</p> <p>親子の関係が切れないよう、日帰り帰宅等会う機会をつくるよう色々試みた。しかし親子の関係は厳しくなる一方であった</p> <p>同居男性との別れを決意した母親と子どもの調整をする</p> <p>面会の立ち合いや、</p> <p>母親への接触再開受け入れ実現</p> <p>母親は“なぜ自分だけが施設に入っているのか”と尋ねられると交流が出来なくなっていた。母子の間に入って仲介役として思いを言葉にして伝えることに徹した</p>
	自立を目指したプロセス	<p>本児の成育歴の整理</p> <p>卒業と同時に就職自立が本人の意向であったのでそれに向けて進路検討し、保護者、児相と協議し決定した</p> <p>向き合いの設定(本児一家族)</p> <p>本人の自立にむけた援助課題のアセスメント</p>
	子どもへの関心を促す関わり	<p>関係が途切れない様、本児の様子についても伝える方、途中で生活が波紋した時の支援についての確認</p> <p>親に様子を伝え、関心を促す。関わってもらう中で、理解を促す</p>
	親をあきらめさせる関わり	<p>お互い一緒に暮らしたいと言っていたが、子にこれからの自分の人生について、親とのかかわりについて何度も話し合いをし、子が一人暮らしを希望し、親を説得した。父と子の関係がよい距離感となった</p>
	家族を開く関わり	<p>父方叔父との話し合い</p> <p>継母への手紙でのアプローチ</p> <p>本児が学校やめる際、母とおじに連絡し、児相にも相談依頼する</p> <p>家族関係の調整</p> <p>おじ宅家庭訪問(本児生まれて初めて実家訪問となった)</p>
自立の確認	親の生活状況把握	<p>父への手紙のやり取り</p> <p>母親の話を聴くこと</p> <p>児相と連携し父と面談をくりかえす</p> <p>母との面会調整</p> <p>進路決定期の親の意向確認</p> <p>自立に向けた準備としてFSWの役割と保護者の役割を明確にして、役割分担した</p> <p>母親が人材派遣で職場、住居、交友関係など転々とされるが、常に話を聞き理解を示した</p> <p>当時は担当CWとして保護者への訪問、面接などを行う</p> <p>ケアワーカーとFSWでの実母との面会調整</p> <p>面会の折には必ず同席させて頂き、実母の現状を傾聴しました。実母も自分の置かれている立場を知ると、私共も強く復帰の口を伝えられず苦しい所でした。実母が母として一人立ちできれば(強い意志の元)社会人となった娘と共に生活できたのでは…と今でも方針に誤りはなかったか考えます。娘が実母を嫌がっていたことを重視した結果ですが</p> <p>児相との面会による本人の親への意向確認</p> <p>父親に対して、節目の面接を実施しながら、児の意見を尊重しながら、進学、就職を決定してきた</p> <p>父の生活状況の確認(児童福祉司と共に)・就労先訪問、家庭訪問</p>
	子どもの意向確認	<p>子どもの意向確認(児相と一緒に)</p> <p>C(本児)との面談</p>

自立生活準備	関係機関との連携・調整	連絡 母親の病院のSWと家庭訪問をするなど医療と連携し、母子の今後について検討した 自立支援計画に伴って、学校教育の見極めを行い、関係機関との調整、連絡を図った 非常に処遇困難な児童であったことから頻りに父親、児相、学校へ報告、連絡、調整、協議を実施した 市、生保ワーカー、児相との関係、家族支援内容の共有、必要に応じて家族、児相、施設、本児の家族会議の打診、調整 児相との連携 児童相談所との話し合い 児相に実父とのなり方に関して相談や連絡を行う 関係機関との連絡調整 学校へは退学届等支援(挨拶)する 学校(三者面談)との調整 ヘルパー 病院への働きかけ
		自立に対する不安について、相談受付 暴力的な立ち振る舞いがどうしても出てしまい対応には苦慮する事になる。虚言も多く、自己の正当性のみを主張するという傾向強く大人への不信感をいかにうめていくかが大きな課題となる。 安心して生活できる環境の中で様々な体験を積み重ねながら大人に頼る事が素直にできるよう支援に努めてく 退所するまでチック症状は改善されなかった。心理面の安定化、身体的虐待によるトラウマの解消という処遇に努めてくる 心理士との定期面接会日調整
		後援会の協力を得る 高校進学、就職に向けての支援 住居を借りたり入所中は上記の生活指導をしていました 就労支援も手伝う 自立に際しての後見人との話し合い 自立支援に向けた後見人との調整と方針の共有 職安に本児とも同行し、職業を決めるため支援する。職安からの就職面接依頼を受け職場面接におじと同行(県外)採用となり就職準備。職場赴任の同行まで行う 本児の努力もありアルバイト、奨学制度へのはたらきかけ 退所後、本人の支援者となる社会資源のネットワーク作り 現在もアフターケアとして関わりを持っています
	自立のための子どもの課題改善	自立に際しての後見人との話し合い 自立支援に向けた後見人との調整と方針の共有 職安に本児とも同行し、職業を決めるため支援する。職安からの就職面接依頼を受け職場面接におじと同行(県外)採用となり就職準備。職場赴任の同行まで行う 本児の努力もありアルバイト、奨学制度へのはたらきかけ 退所後、本人の支援者となる社会資源のネットワーク作り 現在もアフターケアとして関わりを持っています
		後援会の協力を得る 高校進学、就職に向けての支援 住居を借りたり入所中は上記の生活指導をしていました 就労支援も手伝う 自立に際しての後見人との話し合い 自立支援に向けた後見人との調整と方針の共有 職安に本児とも同行し、職業を決めるため支援する。職安からの就職面接依頼を受け職場面接におじと同行(県外)採用となり就職準備。職場赴任の同行まで行う 本児の努力もありアルバイト、奨学制度へのはたらきかけ 退所後、本人の支援者となる社会資源のネットワーク作り 現在もアフターケアとして関わりを持っています
		後援会の協力を得る 高校進学、就職に向けての支援 住居を借りたり入所中は上記の生活指導をしていました 就労支援も手伝う 自立に際しての後見人との話し合い 自立支援に向けた後見人との調整と方針の共有 職安に本児とも同行し、職業を決めるため支援する。職安からの就職面接依頼を受け職場面接におじと同行(県外)採用となり就職準備。職場赴任の同行まで行う 本児の努力もありアルバイト、奨学制度へのはたらきかけ 退所後、本人の支援者となる社会資源のネットワーク作り 現在もアフターケアとして関わりを持っています
		後援会の協力を得る 高校進学、就職に向けての支援 住居を借りたり入所中は上記の生活指導をしていました 就労支援も手伝う 自立に際しての後見人との話し合い 自立支援に向けた後見人との調整と方針の共有 職安に本児とも同行し、職業を決めるため支援する。職安からの就職面接依頼を受け職場面接におじと同行(県外)採用となり就職準備。職場赴任の同行まで行う 本児の努力もありアルバイト、奨学制度へのはたらきかけ 退所後、本人の支援者となる社会資源のネットワーク作り 現在もアフターケアとして関わりを持っています
		後援会の協力を得る 高校進学、就職に向けての支援 住居を借りたり入所中は上記の生活指導をしていました 就労支援も手伝う 自立に際しての後見人との話し合い 自立支援に向けた後見人との調整と方針の共有 職安に本児とも同行し、職業を決めるため支援する。職安からの就職面接依頼を受け職場面接におじと同行(県外)採用となり就職準備。職場赴任の同行まで行う 本児の努力もありアルバイト、奨学制度へのはたらきかけ 退所後、本人の支援者となる社会資源のネットワーク作り 現在もアフターケアとして関わりを持っています
		後援会の協力を得る 高校進学、就職に向けての支援 住居を借りたり入所中は上記の生活指導をしていました 就労支援も手伝う 自立に際しての後見人との話し合い 自立支援に向けた後見人との調整と方針の共有 職安に本児とも同行し、職業を決めるため支援する。職安からの就職面接依頼を受け職場面接におじと同行(県外)採用となり就職準備。職場赴任の同行まで行う 本児の努力もありアルバイト、奨学制度へのはたらきかけ 退所後、本人の支援者となる社会資源のネットワーク作り 現在もアフターケアとして関わりを持っています
	自立生活を支える体制づくり	後援会の協力を得る 高校進学、就職に向けての支援 住居を借りたり入所中は上記の生活指導をしていました 就労支援も手伝う 自立に際しての後見人との話し合い 自立支援に向けた後見人との調整と方針の共有 職安に本児とも同行し、職業を決めるため支援する。職安からの就職面接依頼を受け職場面接におじと同行(県外)採用となり就職準備。職場赴任の同行まで行う 本児の努力もありアルバイト、奨学制度へのはたらきかけ 退所後、本人の支援者となる社会資源のネットワーク作り 現在もアフターケアとして関わりを持っています
		後援会の協力を得る 高校進学、就職に向けての支援 住居を借りたり入所中は上記の生活指導をしていました 就労支援も手伝う 自立に際しての後見人との話し合い 自立支援に向けた後見人との調整と方針の共有 職安に本児とも同行し、職業を決めるため支援する。職安からの就職面接依頼を受け職場面接におじと同行(県外)採用となり就職準備。職場赴任の同行まで行う 本児の努力もありアルバイト、奨学制度へのはたらきかけ 退所後、本人の支援者となる社会資源のネットワーク作り 現在もアフターケアとして関わりを持っています
		後援会の協力を得る 高校進学、就職に向けての支援 住居を借りたり入所中は上記の生活指導をしていました 就労支援も手伝う 自立に際しての後見人との話し合い 自立支援に向けた後見人との調整と方針の共有 職安に本児とも同行し、職業を決めるため支援する。職安からの就職面接依頼を受け職場面接におじと同行(県外)採用となり就職準備。職場赴任の同行まで行う 本児の努力もありアルバイト、奨学制度へのはたらきかけ 退所後、本人の支援者となる社会資源のネットワーク作り 現在もアフターケアとして関わりを持っています
		後援会の協力を得る 高校進学、就職に向けての支援 住居を借りたり入所中は上記の生活指導をしていました 就労支援も手伝う 自立に際しての後見人との話し合い 自立支援に向けた後見人との調整と方針の共有 職安に本児とも同行し、職業を決めるため支援する。職安からの就職面接依頼を受け職場面接におじと同行(県外)採用となり就職準備。職場赴任の同行まで行う 本児の努力もありアルバイト、奨学制度へのはたらきかけ 退所後、本人の支援者となる社会資源のネットワーク作り 現在もアフターケアとして関わりを持っています
		後援会の協力を得る 高校進学、就職に向けての支援 住居を借りたり入所中は上記の生活指導をしていました 就労支援も手伝う 自立に際しての後見人との話し合い 自立支援に向けた後見人との調整と方針の共有 職安に本児とも同行し、職業を決めるため支援する。職安からの就職面接依頼を受け職場面接におじと同行(県外)採用となり就職準備。職場赴任の同行まで行う 本児の努力もありアルバイト、奨学制度へのはたらきかけ 退所後、本人の支援者となる社会資源のネットワーク作り 現在もアフターケアとして関わりを持っています
親代わり	退所後の親代わり	本児にとり施設は本当に家族にかわる物であり、今は家に帰省せず、施設に帰省して来る 子どもが社会自立した生活の様子を家庭訪問、電話で確認し、相談にのる 社会人となり、結婚、二児の母親となり必要な親変りを行っている 長く勤務させて頂いている為卒業していった(自立)子ども達が家庭を持ち子どもの親になって私宅に訪問して来ますが自分の子どもの様な感覚で受け入れ喜んでます 就職後のアフターケア、相談
		グループケア施設での生活をしていたため、ケアワーカーの個別対応がしっかりととれていたため、本児の様子を定期的にきき、現状把握していたのみ FSWになって日が浅く専門的な関わりはありません。担当保育士としての関わりの中援助して来ました できることは全て 兄弟へのフォローも担当保育士と一緒にいった 中途退学、就職自立という選択肢もあったが父からの卒業して祖父元か父親元から通勤させる縁故就職との主張に実質的振回された 生活保護世帯であった。又、弟の障害年金ある程度の収入はあったが、全く経済観念がなく、先にお金を使うタイプであった。FSWにも何度かお金を借してほしいと連絡が入る。いろいろ援助、指導もしたが、改善は見られなかった FSWになってからは、まず施設に来てもらわないといけなかったので、定期的にアプローチするが厳しかった
		グループケア施設での生活をしていたため、ケアワーカーの個別対応がしっかりととれていたため、本児の様子を定期的にきき、現状把握していたのみ FSWになって日が浅く専門的な関わりはありません。担当保育士としての関わりの中援助して来ました できることは全て 兄弟へのフォローも担当保育士と一緒にいった 中途退学、就職自立という選択肢もあったが父からの卒業して祖父元か父親元から通勤させる縁故就職との主張に実質的振回された 生活保護世帯であった。又、弟の障害年金ある程度の収入はあったが、全く経済観念がなく、先にお金を使うタイプであった。FSWにも何度かお金を借してほしいと連絡が入る。いろいろ援助、指導もしたが、改善は見られなかった FSWになってからは、まず施設に来てもらわないといけなかったので、定期的にアプローチするが厳しかった
		グループケア施設での生活をしていたため、ケアワーカーの個別対応がしっかりととれていたため、本児の様子を定期的にきき、現状把握していたのみ FSWになって日が浅く専門的な関わりはありません。担当保育士としての関わりの中援助して来ました できることは全て 兄弟へのフォローも担当保育士と一緒にいった 中途退学、就職自立という選択肢もあったが父からの卒業して祖父元か父親元から通勤させる縁故就職との主張に実質的振回された 生活保護世帯であった。又、弟の障害年金ある程度の収入はあったが、全く経済観念がなく、先にお金を使うタイプであった。FSWにも何度かお金を借してほしいと連絡が入る。いろいろ援助、指導もしたが、改善は見られなかった FSWになってからは、まず施設に来てもらわないといけなかったので、定期的にアプローチするが厳しかった
		グループケア施設での生活をしていたため、ケアワーカーの個別対応がしっかりととれていたため、本児の様子を定期的にきき、現状把握していたのみ FSWになって日が浅く専門的な関わりはありません。担当保育士としての関わりの中援助して来ました できることは全て 兄弟へのフォローも担当保育士と一緒にいった 中途退学、就職自立という選択肢もあったが父からの卒業して祖父元か父親元から通勤させる縁故就職との主張に実質的振回された 生活保護世帯であった。又、弟の障害年金ある程度の収入はあったが、全く経済観念がなく、先にお金を使うタイプであった。FSWにも何度かお金を借してほしいと連絡が入る。いろいろ援助、指導もしたが、改善は見られなかった FSWになってからは、まず施設に来てもらわないといけなかったので、定期的にアプローチするが厳しかった
FSW業務範囲の未確立	FSW業務の不在	グループケア施設での生活をしていたため、ケアワーカーの個別対応がしっかりととれていたため、本児の様子を定期的にきき、現状把握していたのみ FSWになって日が浅く専門的な関わりはありません。担当保育士としての関わりの中援助して来ました できることは全て 兄弟へのフォローも担当保育士と一緒にいった 中途退学、就職自立という選択肢もあったが父からの卒業して祖父元か父親元から通勤させる縁故就職との主張に実質的振回された 生活保護世帯であった。又、弟の障害年金ある程度の収入はあったが、全く経済観念がなく、先にお金を使うタイプであった。FSWにも何度かお金を借してほしいと連絡が入る。いろいろ援助、指導もしたが、改善は見られなかった FSWになってからは、まず施設に来てもらわないといけなかったので、定期的にアプローチするが厳しかった
		グループケア施設での生活をしていたため、ケアワーカーの個別対応がしっかりととれていたため、本児の様子を定期的にきき、現状把握していたのみ FSWになって日が浅く専門的な関わりはありません。担当保育士としての関わりの中援助して来ました できることは全て 兄弟へのフォローも担当保育士と一緒にいった 中途退学、就職自立という選択肢もあったが父からの卒業して祖父元か父親元から通勤させる縁故就職との主張に実質的振回された 生活保護世帯であった。又、弟の障害年金ある程度の収入はあったが、全く経済観念がなく、先にお金を使うタイプであった。FSWにも何度かお金を借してほしいと連絡が入る。いろいろ援助、指導もしたが、改善は見られなかった FSWになってからは、まず施設に来てもらわないといけなかったので、定期的にアプローチするが厳しかった
		グループケア施設での生活をしていたため、ケアワーカーの個別対応がしっかりととれていたため、本児の様子を定期的にきき、現状把握していたのみ FSWになって日が浅く専門的な関わりはありません。担当保育士としての関わりの中援助して来ました できることは全て 兄弟へのフォローも担当保育士と一緒にいった 中途退学、就職自立という選択肢もあったが父からの卒業して祖父元か父親元から通勤させる縁故就職との主張に実質的振回された 生活保護世帯であった。又、弟の障害年金ある程度の収入はあったが、全く経済観念がなく、先にお金を使うタイプであった。FSWにも何度かお金を借してほしいと連絡が入る。いろいろ援助、指導もしたが、改善は見られなかった FSWになってからは、まず施設に来てもらわないといけなかったので、定期的にアプローチするが厳しかった
		グループケア施設での生活をしていたため、ケアワーカーの個別対応がしっかりととれていたため、本児の様子を定期的にきき、現状把握していたのみ FSWになって日が浅く専門的な関わりはありません。担当保育士としての関わりの中援助して来ました できることは全て 兄弟へのフォローも担当保育士と一緒にいった 中途退学、就職自立という選択肢もあったが父からの卒業して祖父元か父親元から通勤させる縁故就職との主張に実質的振回された 生活保護世帯であった。又、弟の障害年金ある程度の収入はあったが、全く経済観念がなく、先にお金を使うタイプであった。FSWにも何度かお金を借してほしいと連絡が入る。いろいろ援助、指導もしたが、改善は見られなかった FSWになってからは、まず施設に来てもらわないといけなかったので、定期的にアプローチするが厳しかった
		グループケア施設での生活をしていたため、ケアワーカーの個別対応がしっかりととれていたため、本児の様子を定期的にきき、現状把握していたのみ FSWになって日が浅く専門的な関わりはありません。担当保育士としての関わりの中援助して来ました できることは全て 兄弟へのフォローも担当保育士と一緒にいった 中途退学、就職自立という選択肢もあったが父からの卒業して祖父元か父親元から通勤させる縁故就職との主張に実質的振回された 生活保護世帯であった。又、弟の障害年金ある程度の収入はあったが、全く経済観念がなく、先にお金を使うタイプであった。FSWにも何度かお金を借してほしいと連絡が入る。いろいろ援助、指導もしたが、改善は見られなかった FSWになってからは、まず施設に来てもらわないといけなかったので、定期的にアプローチするが厳しかった

資料14 子どもの年齢別社会的自立ケースのFSWの業務(入所時13歳以上)

カテゴリー	概念	データ
自立決定のためのプロセス	親の生活状況把握	家庭訪問を何度も繰り返し、家族と施設の関係が良くなるよう働きかけた 父親宅への家庭訪問
	親子の限定的な関係の構築	母(住所を転々としたり、連絡が取れなくなったり)への対応を無駄でも懸命に試みる事が本児の気持ちの転換点であったかと思われる 父との関係改善のため、一時帰省に伴う家庭訪問時の父子間の調整 入所児童の能力的な問題を理解し、かかわるように両親に伝える 入所以来会う機会がなかった父を(本児の同意を得て)招き、本児と面会。就職先の保証人になってもらう
	子どもとの話し合い	本人との話し合い
	進路決定のための関わり	簡単に言えば見立てと導きの糸口を明確にする。ある程度は線路を引いてあげないと具体的な像が結ばない。そこに力をそそいだ 進路検討会を予定をたてて実施する旨段取った 児相のワーカー、両親、担任に同席してもらい、本児の就職等進路決定について話し合いを行った
	家族を開く関わり	父方祖父母との連絡、面接等の設定 親族との連絡調整 保護者になる兄夫婦への密な連絡や
	児相との連絡	児相との連絡調整
		自立後のアフターケアを実施した
		他府県遠方へ住み込みで就労したが、再三皿で励まし、家庭訪問も数回行い、母親代わりをして一日を一緒にすごし、関わって孤独でない事を教えた。又淋しくなったら我慢せず担当や家族に連絡をとることを話した。その後も関係は良好である
自立生活を支える役割	親に代わる役割	一緒に祖母の葬式をあげた 退所した後も支援を行った
	自立生活のための準備	本児の退所後、入所するグループホームと社協とのケース会議や話し合いを細かく行った 資格取得に向け受験対策を行った
		地域の障害者福祉施設と連携して、本児に必要な社会資源について相談し、退所後の生活で困らない様に環境を整えた

資料15 家族との関係の持ち方に関する援助

カテゴリー	概念	データ
親子をつなげる援助	子どもへの関心を途切れさせない努力	学園便りなど定期的に送り、関係を切らないようにした 関係を継続していくために、文書の発送、電話、家庭実習を続けた 関心が薄れる中で、関心をつなぎとめるよう進路決定期など相談していった 成長の節目には、相談報告、確認 子どもの成長(写真、学校の成績表)を年に2回保護者宛に郵送している
	親とのコミュニケーション	家庭訪問 母との面会 父との面会を重ね、最終的には、本人の意向を大切にすることを父も理解してくれた 電話連絡 思いを言葉にして伝えた
	拒否的な親との関係構築の努力	母:一度交流を願う手紙を送ったが拒否、それ以降児相から確認してもらったが、交流の希望 父:本児の様子を知らせる手紙を送っていたが、最後となった面会でお金を子どもにせがんだため、それ以降は児相を通して様子を伺っていた。その後行方不明となり音信不通
	親子の交流調整	積極的な父との関係調整 父の面会につれていくこと 定期に於いて面会の実施または外出の実施 定期的な家族への情報提供や連絡を密にとる必要性をアドバイスした
	親へのアフターケア	就労赴任後も本児の状況を時々父に連絡している。就職後半年を経て、本児から直接携帯電話の保証人の依頼が出来るようになった 援助ホーム、就職先に父との連携の道筋をつけた
	親の気持ちの伝達	施設入所にはなったが、親が大切に思う気持ちを持っていると、存在を肯定できるように支援 母親の愛情はある事を子どもに伝えるように、母親から手紙を出してもらったり、誕生日には電話をもらったりした 児相が間に入り、親の考えなどを伝えたり手紙を渡したりする 実母との面談、実母の病院のケアマネージャ・ヘルパーとの面談を実施して実母の気持ち様子把握→G(本児)との面談
	親への指導	母親金銭の前借りを子どもの貯金にまで手をつけていた。→たとえ子どものものは親のものといえども、拒否すること、またきちんと借りた分は返済することと母親に要求し、実施する 父親への助言・指導
新しい親子関係の再構築への助言	条件付きの交流調整	但し、本人の意向も有り、母からの連絡なしで本人からの連絡は良いとの許可を母に貰う 祖母、母を通して外泊を検討したり、父親と一緒に同席して頂いたり、父と二人になる場面を極力少なくしながら父との関係を少しずつ改善して頂く努力を行った 条件付きの一時帰省を実施した。例)父と本児が二人つきりにならないために、必ず兄が在宅していることと、家庭訪問を実施すること GW、盆等長期休暇の際は母宅ではなく、当園に帰省することにした。その間一度は祖母宅へ弟と共に帰省し、家族関係を作っていくことにした
	親との距離の取り方の指導	本児へ、親とのキョリのとり方、金銭的な部分の話をする 距離の取り方 親と子の距離感 自分の生活を一番に、家族を気にかけるように 父に住居を教えないこと 父にお金を貸さないこと 以上(居所を教えない、金を貸さない)を守って、父と関係を維持していくこと(画やメールなど)
	切れない親子の縁と折り合いをつける助言	自立をしていく上で保証人であったり健康保険証であったり関係が途切れていると将来的に困る可能性がある子どもには伝えている 数年前から行方不明の母親との関係 万が一のことがあれば実施であるあなたに警察から連絡があると思うのでその時は何年後であっても施設へ連絡をしてくるように、私が一緒に行くから
	親子の距離をおく関係調整	児相と相談し、本人の生活が安定するまで退所したことを伝えなかった。母親との関係には距離を取るようにはしました
	子どもに状況を理解させる援助	どのような親であれ、その親があつて自分が生存するという事を認めさせるという作業(c034カウンセリングを含めて) 虐待のふりかえりを行い、なぜ家庭に戻れないのか自分で理解させることが重要 実母の状況について説明し、一緒に生活する事は出来る状況ではない事を伝えて来た。本児もそれなりに一緒に生活については無理との判断をして来ていた 助言として、自身で頑張らなければならないことを伝え続けた 原因は何か、子供に話し傾聴し、担当職員と共に話す機会を多く持つ
	子どもの自立への意思決定の援助	気持ちを聞き、本人の希望通りの進め方をした すべて本人の気持ちを優先した 本人の相談にはのって、話は聞いたが、縁を切りたいという思いは伝えられなかった 児相で月1のカウンセリングも受ける
自立生活を支える援助	助けの求め方の助言	困ったときの助けの求め方等具体的に話をする 能力的に低かった為、家族内の心配ことは相談できる人を本人に伝えた(公的機関の相談)
	アフターケア	アフターケア実施 後見人や親族との関係の維持 それにかかわるもの(兄夫婦との関わり)を多くとり入れていくようにした
援助不可能	援助不可能	行えなかった

## A氏(M学園)へのインタビューデータ

No.	発話者	テキスト	(1)テキストの中の注目すべき語句	(2)テキストの中の語句の言い換え	(3)左を説明するようなテキスト外の概念	(4)テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	(5)疑問・課題
1	筆者	今年は学会の開催で虐待防止で盛り上がっていますか？					
2	A	そんなにそういうのではないかな。K県は意外と施設同士のつながりはあるけど、そういったのは(虐待防止の取り組み)はなかったなあ。K県は遅れていてですね。昔ちゅうのかな。そういうような形がまだまだ根深い。					
3	筆者	職歴は？					
4	A	ホームに何年いたのかな。8年から9年ホームにいて、平成10年からだから。それからFSWになった。					
5	筆者	完全に専属ですか？					
6	A	そうです、はい。なにをしていいの、というのが正直なところ。	なにをしていいの、というのが正直なところ	業務の内容がはっきり決まっていない、わからないことに戸惑いがある	不明確なFSW業務に対する戸惑い	業務内容への戸惑い	
7	筆者	K県は専属が多いですか？					
8	A	いや、やっぱり施設長の考えによると思っていて、だいたいでも、主任指導員が主にFSWをやっている形ですね。					
9	筆者	FSW制度が導入されて、なにか変わったことはありますか？					
10	A	当初私が働いたときには、家族がほとんどいなかったというのかな。施設が家族を含めて支援するという形ではなくて。私が下りたくらいからほとんど家族がいらつやあって、家族との対応がもう難しくなってきた。やっぱりいろいろ、苦情じゃないけれどもいろんな話をしてこられるようになったので、少しずつ変わってきたかなと思うんですけど。	家族がほとんどいなかった／家族との対応がもう難しくなってきた	以前の入所児童は身寄りがいない子どもばかり／親に関わることが難しくなってきた	入所児童の背景の変化 業務内容の変化 支援の困難さ	入所児童の変化 業務の変化 対応の難しさ	家族がいない子どもも多い／つぐらまで多かったのか？
11	筆者	入所児の背景が変わったということですか？					
12	A	入所している背景も、入所理由は変わってきていると思います。	入所理由は変わってきている	入所理由の変化			
13	筆者	初めの頃は両親のいない子が多かった？					
14	A	ほとんど多かったですね。虐待というのはほとんどなくて、すべて家庭養護困難で振り分けられている子どもさんばかり。でも10年くらい前からK県でも発達障害とかそこらへんがちらほらやってくる、子どもさんと家族が。で、国も偏すと。家族の再統合というようになったので、そのあたりかな。	虐待というのはほとんどなくて／10年くらい前からK県でも発達障害とかそこらへんがちらほらやってくる	現在とは入所児の背景が全く違う／新しい入所カテゴリーの登場	入所児童の入所事由の変化 入所カテゴリー	要保護児童カテゴリーの変化	
15	筆者	率直なところ帰せと言われても難しいですか？					

16 A	そうです、帰せないなかで、FSWが置かれて、結局K県もうちの施設もそうだけど、じゃ何をやってたかという。何も現状は変わらなくて、もともと寮の担当に入っていたから、私は入った時から家族の家を見に行ったり、近所の人から話を聞いたり、そういう延長からまず始めたことですね。本を読んで、全国的にどんなふうになっているのかな。	何も現状は変わらなくて、そういう延長からまず始めたこと	制度だけが先行している状況／これまでもやってきたことから始める	制度の先行 制度と現状のギャップ 変わらな業務	制度導入と現場感覚の不一致 不変の業務	
17 筆者	他の施設のFSWとの交流はありますか？					
18 A	K県は会ってます。月に何回かな、3回から4回。研修会と連絡協議会が会ってると、なんかみんなファミリーソーシャルワークがわかってるのかな？ っていう感じが、正直なところ。なんでもいうのかな、家族に対する考えとか、接し方とか、どうしても上からっていうの？ 目線が、ダメな家族とか、支援しても厳しいんじゃないかって。聴く、っていうのがすごく下手なんだろうな。聴いて受け入れると。	みんなファミリーソーシャルワークがわかってるのかな？ っていう感じが、正しく、っていうのがすごく下手	新しい概念が浸透していない／専門的なスキルを保持していない人が多い	専門家の不在 傾聴姿勢の不足	援助職の専門性への疑問	ソーシャルワークがわかっていない感じがする職員が多いのは地域の特徴か？
19 筆者	他のFSWと話していてそう感じますか？					
20 A	そうですね。まあ年配の方が多から、だいたい昔の施設養護。だからふーん、って感じですよ。なにしろとかな、と思うけど。	昔の施設養護／なにしろとかな	旧態依然とした養護方針／援助の意図が不明	養護方針についての不満	社会的養護の旧弊さ	社会的養護観に世代によるギャップがあるのか？
21 筆者	家族のケアを見相に代わって施設がやるようになってきましたか？					
22 A	どうなんだろうね。これもK県の話になっていかんけど、これまでは完全に、本当に一度預けたら施設に福祉社は来ない。担当福祉司も来ない、児相の施設訪問調査が始まって4年くらいだから、それぐらいからですね。個別に支援計画を見に行って、子どものことを気にしてくるようになったのは。	これまでは完全に、本当に一度預けたら施設に福祉社は来ない	以前の児童養護では、児童相談所は施設に預けるだけ	以前の児童相談所の入所児童への関与	入所児童への関与	
23 筆者	入ればなしですね。					
24 A	入ればなし。	入ればなし	一度入所すると児福司が関わらない	児童相談所の措置姿勢	入所児童への関与	
25 筆者	家庭に帰るといふことも？					
26 A	なかったです。強引な引き取り以外は、18歳までいるというような形で。私も入った頃はそう思っていたし、他の職員もそんな風に思ってたよ。家族の元に帰れるとか帰すちゆうことはなかったもんね。	18歳までいるというような形／家族の元に帰れるとか帰すちゆうことはなかった	対象年齢上限までの入所／家庭復帰を検討することがなかった	入所児童の傾向 退所判断の傾向	現場職員の社会的養護観	
27 筆者	それに比べると今はいろいろ取り組みがあるようですね？					
28 A	施設も帰れるなら帰してあげよう、思うんですよ。なんでもかいいろんな社会資源とかを使ったりするこの子どもは帰れるんじゃないかと思うと、児相に話し、児相にも動いてもらったりします。お父さんとかお母さん方にも今の現状をどんな風にお考えになっっているのかとか話を聞いたり、でもあ引き取りたいということで話を聞くと、家庭訪問一緒にしますから経済状況とかいろいろあると思うから、そこら辺をしつかりやっていきましようねって、少しずつなるとか来ているところですね。	施設も帰れるなら帰してあげよう／少しずつなるとか来ている	満期退所から途中での家庭復帰へと発想の転換／変化は徐々に起こっている	施設の支援方針の転換 変化のスピード	援助方針の転換 緩やかな変化	

[illegible]

42 A	だからすぐくむくずかしい保護者だから、入るときも関係機関は上手に入ってもらわないと、一回遮断さすと、だいたい遮断させるのね。そこそこ上手に、難しいお母さんだから上手に入ってくたさいみたいな。まあ比較的にしてくれているのはしてくれていますね。そのあたりの共通理解が非常に難しいですね。	関係機関は上手に入ってもらわないと／共通理解が非常に難しい	介入への慎重さが求められる／関係機関間の温度差がある 同じ目標を共有できない	介入時の難しさ 関係機関の連携	介入時の慎重さ 共通理解	
43 筆者	目標の共有ができていくのですか？					
44 A	できにくい、とくに精神疾患を抱えた保護者の方が、パーソナリティ障害とか、お母さんだけが悪いわけじゃない。クレマーマーの部分もあるけど、はき違えるつちゅうのかな。「クレマーマーでうるさいから施設に長く入った方がいい」みたいな感じで聞こえるんですよ。家でも完璧な養育ができない。でもお父さんがいらつしやったり、他の人がいろいろな支えをすると生活できてると思うんですね。親も一緒に過ごしたいし子どもと一緒に過ごしたいんだから。朝はしっかりとご飯は食べさせるとか忘れ物させるといふとか、文句を言ったらいかんとか。なんか、普通言いますし、いいんじゃないかと思うとこんなんですけどね。そこらの外部との役割分担は誰が決めるのかな。	お母さんだけが悪いわけじゃない／はき違えるつちゅうのかな／いいんじゃないかと思う	親子分離の原因は一つだけではない／専門的な見方をできない関係者が多い／親が子育てを完璧にできないことを許容していないのではないか	親子分離の原因に対する見方 支援機関の専門性への疑問 親を見るまなざし	完璧な子育てを要求しない 親へのまなざし	
45 筆者	児童養護施設として主に引き受けているのは子どものケアですか？					
46 A	そうですね。入所中は子どものケアと保護者の定期的な面会とか相談とか。出た後は、なんやかんや言ってもやはり繋がっていったところは施設だから、今、月1とかのペースでお母さんとこに会いに行ったり、あとは学校とか、そのあたりですね。学校には話に行ったり、連絡をとりながら、何かあればすぐ行きますからと言ってます。	なんやかんや言ってもやはり繋がっていったところは施設だから	措置権は児相にあるも、保護者とのつながりは施設にある	施設と親とのつながり	保護者とのつながり	
47 筆者	子どもは環境が変わってストレスがありますね。					
48 A	そうですね。県内各地から来るから。ちよっと不登校になったりね、しょうがない面もあるんですよ。だからちよっと待ってくれて。					
49 筆者	FSWが制度化されて難しいと感じるところはありますか？					
50 A	私自身もそうだけど、まだまだしっかりとFSWのやっていく仕事ができなくていいというのが実感なんですよ。施設そうだけでなく、施設の中でFSWが何屋さんの？ちゅう形だから。なかなか難しいですね。4つ家があるから。そこそこうまくやったりするけど、それぞれの役割があるということが、まだ理解がまだまだかな。	まだしっかりとFSWのやっていく仕事ができなくていい／施設の中でFSWが何屋さんの？ちゅう形	FSW業務が確立していない／施設内でもFSW業務が浸透していない	FSW業務の形成 組織内での役割分担	FSWの役割のあいまいさ	
51 A	手法というのかな、できてない感じがありますよね。アセスメントから自立支援を考えるにあたって、むずかしいですよ。	手法というのかな、できてない感じ	FSW業務が確立していない感じ	専門的手法の不在	FSWの援助手法の不在	
52 A	あと情報、どこで取るか。ほしい情報がすぐもらえないつちゅうのかな。感じている温度差がちがうから、なんでそんなことが必要なんだろう？という感じ。いろいろ家族のこととかもアセスメントするためにいろいろな情報がある中でしかできない、児童票からだけではわからないわけだから、それに対して適切に対応してもらえないから大変ですね。そうすると、アセスメントが弱いと結局現場の子どもたちの生活が問題が起きて右往左往する。	ほしい情報がすぐもらえない／感じている温度差がちがう	情報収集が困難／関係機関でも問題の捉え方が違い、危機感のなさを感じる	アセスメント時の困難 関係機関との足並みのそろわなさ	情報収集時の困難 問題認識の温度差	



53	筆者	制度化する前、そういうことはどなたが担当していましたか？	家庭訪問とか保護者との関係はすつとやっていたり、す／やっぱり家族が変わらない限り子どもは変わらない	入所児童の保護者への関わりは以前から継続的に行っている／もともと重要なのは家族の変化	FSW制度導入前の家庭支援のあり方 ケースの変化の基礎になるもの	制度化以前からの家庭支援 家族の変化が基本	
54	A						
55	筆者	自立支援計画がうまくいかないとき、何がネックになっているんでしょう？	自立支援計画に行くまでのアセスメント能力の問題かと、私は。やっぱり今のままでは弱いんだらうな。救世軍・世光寮に塩田さんていらっやあって、あの人が自立支援計画を立てるときのアセスメントから、計画にもって行く、綿密にプランをたてて、援助をやって行く。そこに行き着かないと、そのなかで子どものケアワーカーがどんな役割をするとか、FSWがなにをやるかとか、児相が何をやるかとか、そこをきっちり最初の段階で立て切ってしまう、なにか変化があればその都度変えてみていくということがまず大事かなと。	自立支援計画に行くまでのアセスメント能力の問題で立て切ってしまう	自立支援計画のネックになっているもの 援助過程のフローと役割分担	アセスメント能力の不足 支援プロセスの明確化	
56	A						
57	A	自立支援計画が今までは職員の仕事で、保護者の思いを反映させないとかに描いた餅じゃないけど、何の効果もあがってこない。でもいままで聞くということが正直無かったです。日常のすく細かいことが気になって大きな目標には向かっていけないという感じがなか。職員が困っていることは子どもが困っていないかもしれないのに、そんなことを直したい自立支援計画かな。意味合い的。	自立支援計画が今までは職員の仕事で、保護者の思いを反映させないとかに描いた餅じゃないけど、何の効果もあがってこない。でもいままで聞くということが正直無かったです。日常のすく細かいことが気になって大きな目標には向かっていけないという感じがなか。職員が困っていることは子どもが困っていないかもしれないのに、そんなことを直したい自立支援計画かな。意味合い的。	支援計画の客観性の不足／専門職のスキル不足の傾向の姿勢が不足している	支援計画の問題点 クライアント主義の不在	支援計画の客観性の不足 クライアント主義の不在	
58	筆者	ゴールの決定よりも入所段階でのアセスメントに課題があるということですか？					
59	A	はい、あると思います。家族に帰せるケースなのか帰せないケースなのかは、その段階できちっとある程度見通しをもって、そのためにいろいろな情報もいるし、そこを力をいれたいというまじは行かないんだらうなあと。	その段階できちっとある程度見通しをもって	入所段階からゴールを見据えておくこと	支援プロセスを俯瞰するまなざし	支援プロセス全体の俯瞰	
60	筆者	入所時に児童相談所が見通しを立てていないのですか？					
61	A	そうですね。児童票は子どもと一緒に来る。子どもと一緒に。					
62	筆者	どういいうお子さんが来るかの説明は？					
63	A	簡単にあります。名前が何で、何年生で、でも来てふたを開けてみると、家族に問題が大きくなったり、ネグレクトだったりいるんな背景があるから。結局そうやって入っちゃうとそこからまた生活は混乱していく。	ふたを開けてみると、家族に問題が大きくなったり	入所前に得ている情報と実際の背景の違い	入所と情報収集のシステムの問題	入所前後の情報の齟齬	
64	筆者	お子さんが来てからわかることが多いのですか？					
65	A	多いですね。					
66	筆者	児相が聞けなかったことを施設が補っている感じでしょうか？					

67 A	そうですね。聞くことは多いですね、わからないから地域に出向いて、いろんな人と話して聞く。そのなかでわかった情報じゃなければやっぱりわからない。	そのなかでわかった情報 じゃないから	自分の足で稼いで得た情報でなければわからないこともある	情報への積極的なアクセス	情報収集の姿勢	
68 筆者	施設外との関係で困っていることはありますか？					
69 A	市町村との温度差はありますよね。入所中でもいろいろなところに行きますけど、理解をしめしてもらえないところがある。	市町村との温度差はあります	行政と施設での危機感の違い	市町村への不満	市町村との温度差	
70 筆者	具体的にどんな感じでしょうか？					
71 A	危機感がないんですよね、行政って。何をしてあげられるのかとか。あるものでしか使えないじゃないですか、行政って。サービスも。この人たちのためにサービスをちよっと変えてあげようとか、ふやしてあげようとか。	危機感がないんですよ、行政ってね、行政って	行政は自らの職務として考えていない	市町村への不満	行政の危機感のなさ	
72 A	そこらへんが、でもやってくれるところはやっぱりありますもんね。だから足を運ぶしかないと思って。遠からうが行って話をし、て。一人で行くこともたまにあるけど、担当の職員と一緒に行くことが多いから。評面は今では広がって。そこからかな。	だから足を運ぶしかない	関係機関と危機感を共有するためには直接話し合うことが有効	関係機関との協調のための働きかけ	協働のための努力	
73 A	私はFSWだから、子どもが地域に帰ったときとか、お母さんと地域で過ごすから、子どもの普段の生活と違うところで仕事を大部分やっている。今は見えないけど、先、帰っても帰らなくて、その地域にいないわけだから、そこで生活ができる大切さっていうのがある。地域の関係機関が力をつけてくれると、入所の数も少なくなるし、みんな生きやすくなるんじゃないかかなと思ってはいらるんですけどね。	子どもの普段の生活と違うところで仕事を大部分やっている／今は見えないけど、先、帰っても帰らなくて、その地域にいないわけだから、そこで生活ができる大切さ	本来子どもが生活するべき地域ではないところがFSWの活動地域／現時点ではなく、将来を考えると地域で生活できることが大事	FSWの活動地域 現在より将来を見据えての働きかけ	FSWの活動地域 地域の支援力 先を見据えた働きかけ	家族より地域への働きかけをしているのか？
74 筆者	一般の方には理解されにくいですが					
75 A	虐待とか児童養護施設とかもわからないから、でも市町村とずっとやりとりをして、私K市なんだけど、防止月間だから講演を依頼されて。児童養護施設をもっと知ってもらいたいということでも児童養護施設と虐待、死ぬことも大変なことだけど、虐待を受けた子どもたち施設で生活していること、その機会をいただけたらいいなと思っていて。今までは全然接点なかったけど、そうやって施設のことにも市の人が目を向けてくれたり地域にケアできるチャレンスができたら。なかなか目に見えないじゃないですか、障害がある人じゃないから。最近の施設の子どもたちもきれいな洋服を着てるし。見た目は全然変わらないうえ、周りから理解してもらえないのが現状。かたまりする子が多いから、周りから理解してもらえないのが現状。で、しようがないかなと思うんですけど、いろいろな問題が出て、施設の生活でやっとならなければ、そりや問題は出るだろうと。	虐待を受けた子どもたちが施設で生活していること、その機会をいただけたらいいなと思っていて	死亡事例だけが注目を集めるのではなく、サバイバーの現実が知られるようになることを望んでいる	部外者の被虐待児へのまなざしに対する希望	虐待サバイバーの現状の周知	
76 筆者	児童相談所のあり方についても書いてもらいますか？					

77 A	仕事が多すぎるんだと思うんですよね。児相が家族支援のプランとか、最初の導入の窓口でやる係が児童相談所に変わればいいんじゃないかな。海外とかは法的な形で保護者を分離して決定もやるけど、今の児相はなんでもかんでもやるから手が回らなくて敵対もせせんなし寄り添ったりもせなから。難しいから児相がもつと児相の仕事が明確化していただくかで施設のSWがどんなふうになっているのか。一緒に家族支援をやっていく形が理想なんじゃないかな。いまだどっちつかずなんですよね。どっちが何をやってるのって。結局私たちには権限がないから児相の判断だよなっていうのって。結局私たちが仲良くなくて、もう一回児相と仲良くなる。施設を通してもう一回関係を改善してもらいたいような形ですね。	家族支援のプランとか、最初の導入の窓口でやる係が児童相談所に変わればいいんじゃないかな。一緒に家族支援をやっていく形が理想	児童相談所の役割が多すぎるので、家族支援の導入専門の役割になるのがいい／児相と施設が協働して家族支援をするところが理想的な形	児童相談所の機能への要望 協働のあり方	児童相談所の役割の提言 家庭支援の理想的な役割分担	
78 筆者	引き離すのは児相以外の機関がやる方がよい？					
79 A	いいような気がしますよね。					
80 A	相談所の職員の先生の資質っていうのかな、いろんなところから来らしてですね、やっぱり福祉職の人がいいかな。人によりますね。大きな課題じゃないかな。	相談所の職員の先生の資質っていうのかな	児福司の資質問題	児童相談所の構造的な課題	支援者の資質の問題	
81 筆者	保護者支援についてはいかがでしょう？					
82 A	保護者支援をやろうと思ったときのメニューの引き出しがないから使えない。いろんなものがあって組み合わせることができれば現状も変えられるんじゃないかと思って。いろんなところで研修とかあつて身につけないと、少ない引き出しでは合わない保護者の方にはね。それが大きいのかなと思って。	保護者支援をやろうと思ったときのメニューの引き出しがない	FSWとして家族支援のプログラムの不足を感じる	家族支援プログラムの不足	家族支援プログラムの不足	
83 筆者	具体的には？					
84 A	プログラムも使えないもんな。					
85 筆者	日本で開発されたプログラムは少ないですね					
86 A	ですね。どこかがやっているのを見て、そうだねと思って、そのとおりに進まない。	そうだねと思うけど、そのとおりに進まない	事例は参考になるが、そのまま実践に導入できない	事例と実践の不整合	事例と実践の不整合	
87 筆者	開発する人が必要ですね					
88 A	あつた方がいいですね。実践から積み上げて今は行く状況です。	実践から積み上げて今は行く状況	FSWの個別の実践から議論を構築していく段階	家族支援プログラムの現状	FSWの実践プログラム構築	
89 筆者	どのくらいで蓄積されていくでしょうね					
90 A	どのくらいでできるでしょうね。全国的にもまだ積み上げがない。					
91 筆者	10年くらいすると変わりますか？					
92 A	そうだと思います。劇的に変わるんだと。					

93 A	<p>資質であると思うんですよね、その人の仕事を上での。私はもともと教員の畑で。入ってきて、福祉の人間は違うという話はあるけれど、子どもだからと思うけど、対人援助の感じがしないんですよね。保護者に関しても。ちゃんと人として援助して行くんだというところがすべてにおいて欠けているだろうなと思いますね。うちの職場もすっかりしてない。みんな学んでくるのかなという感じがします。人としてやべっていて応答の仕方とか、基本的なところがない。私自身がわからなかつたし、下りてやる中でやっぱり必要なんだなと思って学んで練習するわけですよ。子どもたちがいるから練習材料はいっぱいあるから。子どもを通して練習させてもらう。自分がこんなふうに言ったら全然ダメなんだね、保護者の方に対してはダメだなとか思いつながら。聴き方とか、話し方とか、受け取り方とか、すごく大事なことでと思うけど、当たり前だと思われているんじゃないのかな、できて。福祉の人間はできて当たり前だと。でもきっちり訓練をしないといけない問題と思う。</p>	<p>対人援助の感じがしない ノちゃんとして援助して行くんだというところがすべてにおいて欠けているノ福祉の人間はできて当たり前だと。でもきっちり訓練をしないといけない問題</p>	<p>福祉職の姿勢が対人援助職らしくないノクライエントを人として尊重するといふ援助職の倫理が欠けているノ福祉職は対人援助技術をとももも持っていると思われているが、トレーニングを受けなければできない</p>	<p>援助職の姿勢 倫理の欠如 トレーニングに対する認識のなさ</p>	<p>援助者倫理の欠如 専門スキルのトレーニングの必要性</p>	<p>福祉職はトレーニングを受けてきた人が就いていないのか？</p>
94 筆者	<p>ソーシャルワークの浸透というのを書いています</p>		<p>ソーシャルワーク概念の不浸透</p>			
95 A	<p>ソーシャルワークがなんなのかというのがまだ。</p>	<p>ソーシャルワークがなんなのか</p>	<p>ソーシャルワーク概念の不浸透</p>	<p>ソーシャルワークの浸透</p>		
96 筆者	<p>浸透はどの範囲で考えていますか？</p>					
97 A	<p>児童養護の現場で。今も生活のなかでもなかなかならばソーシャルワークじゃないけど、同じことだと思うんですよ。ある程度の理論と技術が確立していないかという点なんだと思う。昔はお父さんお母さんの代わりでそこさえあればよかったけど、今は家族もいるし子どももいるから、ソーシャルワークのあれがないとできない。今のままではいなくなるんだというのが実感。</p>	<p>今は家族もいるし子どももいるから、ソーシャルワークのあれがないとできない</p>	<p>身の回りの世話を越えた児童養護の専門性が必要とされている</p>	<p>旧来の社会的養護への批判的なざし</p>	<p>社会的養護への要求水準</p>	
98 A	<p>今の施設がなくなるといふ危機感があります、やっぱり。地域に還元とかやっても、ショートステイ事業とかトワイライトとか養護施設がやっているけど、民間がやってもいいんじゃないかと思うんですよ、安い単価でもっと自由に。地方分権の中では、普通の民間がやる時代が来るんだと思うんですよ。いろいろ変わっているなかで、養護施設っていったい何してるの？どんなことができるの？って言われたときに、きちんと回答ができるのか。それをもって、これから困ってくる家庭にアドバイスとか支援とかできないと、民間がやってもいいんじゃない？と思う。コストダウンで。そうじゃない、福祉のなかでできるところ。虐待を受けた子どもたちに対しては治療的な療育ができる技術があれば、ただご飯食べさせて、ただではないけれどもいろいろな思いがあるから。それは大事な要件だけれど、なにかがなければ必要とされない。児童養護施設がそこに、地域の中にあっても。危機感はあるんですよ、ご飯が食べられなくなっちゃう。</p>	<p>養護施設っていったい何してるの？どんなことができるの？きちんと回答ができるノ虐待を受けた子どもたちに対しては治療的な療育ができる技術がなければ</p>	<p>児童養護の専門性を説明できるノ被虐待児の治療機能が求められている</p>	<p>専門性の説明責任 社会的養護の果たすべき機能</p>	<p>児童養護施設の独自性 説明責任 治療機能</p>	<p>児童養護施設が治療機能を担うなら、情短との関係は？</p>
99 筆者	<p>近未来像に地域への貢献が明記されましたが、今の施設にはどんな要望に見えますか？</p>					

100 A	そうですよね、だから今の15人の規模は大きい。5、6人で地域の中でやっていると、なかなか近未来像じゃないけど、うちにも児童家庭支援センターもあるけど、うちの本体施設がひっくるめてやっていると、いろんな保護者が困った時、民間じゃできないこと、民間じゃできないこと、急に一時的にお母さんと子どもを一緒に預かるとか、そういうことまでしている、そこからネットワークでつながっていったところまでではないと厳しいような気がします。そんな時代になってくるから、10年後20年後はまた変わっていく。	民間じゃできないこと、民間じゃできないこと	営利企業にはできなくて福祉施設にしかできないことを明確にし、それができるスキルを備えておく	福祉の役割の明確化	児童養護施設の独自性 専門スキルの習得	民間ができるようなサービスを提供しているのか？
101	施設の方角性を示していくということですね					
102 A	いかんと思いますね。ケアワーカーもそうだが、自分たちのできる専門性を高めていくことが必要で、啓蒙していった。子どもが通うのは一番大きいのは学校だから、学校の先生の教育システムの中にも、子どもを理解するために施設の職員が講義に行っているとか。いろんなことにつながっている、それでサポートしてくれる場が広がって行くんじゃないかなと思う。	ケアワーカーもそうだが、自分たちのできる専門性を高めていくことが必要	CWも含め、児童養護の専門性を自覚し、スキルアップさせていくことが必要	児童養護の専門性の自覚と向上	専門性の自覚 スキルアップ	
103 A	でもきちんとした知識がないと必要とされないんじゃないですか。感情論だけではうまくいかないですね。私も教育の現場からおったから、学校ひとつとついても、リアリティがないかな。家族が崩壊して行く今のこの大変な、これからますます大変になっていく子どもさん家族がいるのに、目を向けていくのもいいですけど、それがおおきな違いだろうなと思うんですけど。	きちんとした知識がないと必要とされない	専門性を持たない、無自覚でいる専門職は他の専門職から頼りにされない	他職種から必要とされる専門性	専門性の獲得	CWの専門性とはなにかな？
104	自分の専門性を理解して役割分担することが必要ですね					
105 A	必要ですね、全然できてないけど。K県も遅れてっからね。子どもの権利とか申し訳ないけどあまり考えない。K県の中では少しでも思っていてみんなやっているといるような状況ですよ。					
106	家族再統合についてお考えのことを教えてください。					
107 A	一回壊れたり、よくない関係を、入所中に少しでもよくしてあげるというためには、担当と子どもがきちんと結ばないと次繋がらない。保護者との関係を少しずつ中に入って調整をやっていく。うまくいけば再統合になる。それで家庭に帰ればさらに再統合という意味合いは強くなるんだらうけれど、帰れなくても子どもにとつて親が大事な存在だから、そこはむずびつけて、ちよといひつなものは修正してあげたりしていくことではないかなとは思っていますけど、ね。難しいですね、思春期に入るとすぐまた揺れちゃうから、家族像が。	担当と子どもがきちんと結ばないと次繋がらない	親子関係を改善するために、子どもが身に付けるべき他者との関係をまず担当CWとの間でしっかりと結ばないと、復帰につながらない	家族再統合へのステップ	家族再統合へのステップ 担当と子どもとの関係	
108 A	専門家の人も都会に行くとたくさんいらっやって、力を借りやすい。地方にはそれがいないから、自分たちで模索して終わっちゃう。そこが大きい違うんじゃないかと思うんですね。	地方にはそれがいないから、自分たちで模索して終わっちゃう	スキルアップやスーパーバイズの機会が不足している	スーパーバイザーの不足	スキルアップ機会 SVの不足	

109 A	人間で権威のある話はしっかり聞いて変えようという気持ちになるみたいだから。話を聞いて帰って「こうしたらいいよ」と言ってもダメだもんね。誰か来てもらって、こうしたらいいよと言うと、「それがいいよね」とかって、同じこと言うのに、受け手の方が受け取ってくれないから。私が悪いんだなと思って。伝え方が悪いんだな、日頃の関係が悪いんだなと思ったりはするんですよね。	権威のある話はしっかり聞いて変えようという気持ちになるみたい	信頼できる専門家からのアドバイスの方が受け入れやすい	助言の受け入れられやすさ	SVの権威	
110 筆者	今SVは受けていますか？					
111 A	九州看護福祉大学に上石先生っていらっしゃるので、月1回はケースの検討会に来ていただいています。精神科の病院のSWにも来てもらって。お医者さんは来てくれないからSWに来てもらった。					
112 A	FSWも必要だけど、子どもと向かいあう職員の思いとか技術とかが、安定して生活がおちつかない何事にもつながらない。	子どもと向かいあう職員の思いとか技術とかが、安定して生活がおちつかない何事にもつながらない	CWのスキルやモチベーションが子どもの安定につながる	CWと子どもの安定の関連	CWの安定	
113 A	そのためには小規模化とか。ある意味施設養護がダメなところがありますよね。養子縁組とか里親とか必要だと思うんです。お互い共存すればいいんじゃないかなと思うんですよ、いろんな中で選択していく。親も選択する。こっちはダメあつちがダメと昨日も口論になってたけど、頑張りよらすな。施設養護は確かに今はダメだけど、大規模で入れてやっていくので意欲がないと思ってるけど、でも施設養護も悪いところばかりではなくていいところもあるわけだから。共存してやっていけばいいんじゃないかな。	お互い共存すればいいんじゃないかな。親も選択する	施設養護、里親等、親子を支える資源が複数あるという行政は複数の資源から最善のものを選択でき、家族も自分たちに必要な資源を選択できるという	社会的養護の多様性の承認 選択可能な社会的養護	社会的養護担い手の共存 選択可能な社会的養護	
114 筆者	大舎制の育ちあいは今難しいですね					
115 A	その通り。育ちあいきらんですもん。かといって里親さんも1対1で抱え込んで、それをサポートするところがないとまた非常に難しくなったりしますもんね。	育ちあいきらんですもん	個々の子どもの課題が大き、集団養護の利点を活かされない	集団養護の困難性	集団養護の限界	
116 A	福岡子どもの村を見学に行き話を聞いてきて、ある意味施設の職員がああいった形でやるとか、いいのかなと。小規模ではやりたいたいですけど、予算の面と、職員の人数は力がないとできない。ちやうど職員も今過渡期で若い人がいて、ベテランがいなくなって職員がある程度にならないと作っても難しいのかなと。中身がよくないと次につながらないから。	ある程度は力がないとできない／中身がよくないと次につながらない	小規模養護は職員の力量が問われる／職員の力量がよくなると子どもの成長につながらない	集団規模と職員の力量の関連 職員の力量の子どもへの影響	支援者の力量 支援者の質の子どもへの影響	
117 A	小規模に入りたいたいの問題はあるんですけど、子どもという方が楽しい。やっぱりいろいろ問題はありますが、家族の問題って大きくて、1人では何もできないじゃないですか、SWって。子どもの問題も変わらなければいけません、向かい合うなかで変化が見えやすい。だから子どもの方が好きだな。今はSWだから。	家族の問題って大きくて、1人では何もできないじゃないですか、SWって	SWとして家族の問題に一人で立ち向かっている感覚 何もできない感	FSWの孤独感 無力感	FSWの孤立感 FSWの無力感	
118 筆者	ケアワーカーの仕事もされていますか？					

119 A	そうですね、たまに要請を受けたら、やっぱり暴れたりしたらですね。あと大休事務所のところにいるから、子どもたちが問題があったら来るんですよね。そういう時に対応します。やっぱり子どものことも知らんと保護者に話してもできないし。だから行くようにしてるけど、完全に抜けた形です。	やっぱり子どものことも知らんと保護者に話してもできない	保護者対応のために子どもを理解しておく必要性	子ども把握			
120 筆者	直接ケアの方が好きですか？						
121 A	楽しいね。正直楽しいとこですよ。						
No.	発話者	テキスト	(1)テキストの中の注目すべき語句	(2)テキストの中の語句の言い換え	(3)左を説明するようなテキスト外の概念	(4)テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	(5)疑問・課題

ストーリーライン	<p>A氏は約10年前の入職当時と比べ、入所児童の変化、要保護児童カテゴリーの変化を感じ、特に入所児童の保護者に対しては対応の難しさを感じている。その中で児童養護施設の業務の変化がある一方、以前から不変の業務もあり、家庭復帰に向けた家庭支援専門相談員制度導入と現場感覚の不一致にFSWとしての自身の業務内容への戸惑いを感じている。社会的養護観これまでの児童養護施設について、現場職員の利用者に対する等々な立場に立って、早期家庭復帰を援助するものではなく、A氏は援助職の専門性への疑問を抱いている。地域特性のため、児童相談所の入所児童への関与もほとんどなかったため、社会的養護の旧弊を感じていた。しかし家庭支援専門相談員制度導入後、緩やかな変化が起きており、早期家庭復帰へと援助方針の転換が図られている。</p> <p>家庭復帰に向けては地域のネットワークづくりのため関係機関との連携が重要だが、児童相談所や児童養護施設、その他機関等にはアクト間の序列がある。保護者とのつながりを持っているFSWは復帰に向けた施設の主体性を発揮して、措置権者である児童相談所に対する情報の伝達役割を担っている。その結果、徐々に力関係の変化が生じ、家庭支援の役割分担ができるようになってきた。しかし、親への要求水準をめぐってはそれぞれの支援者のまなざしの差異がある。例えば施設職員はわずかなことでも親の変化への気づきがあり、完璧な子育てを要求しない姿勢、親へのまなざしを持している。一方で児童相談所や市町村等の行政は達成不可能な高い水準の子育てを親に要求する。支援に際しても介入時の慎重さをめぐって施設と行政は共通理解を得にくい。</p> <p>家庭支援専門相談員制度が導入されても、組織内ではFSWの役割のあいまいさが、これはFSWの援助手法の不在によるのではないかと感じている。また制度導入した現在でも関係機関の問題認識の温度差があるために、入所児童の情報収集無時の困難を経験している。児童養護施設では制度化以前からの家庭支援が行われていたが、これは入所児童が変わって家庭復帰に向かうために家族の変化が基本だと考えられていたからである。</p> <p>入所児童の自立支援計画がうまくいかない背景には、施設のアセスメント能力の不足がある。支援プロセス全体の俯瞰をし、誰がいつどのような支援を行うのかといった支援プロセスの明確化がされていないこと、支援計画の密着性の不足が課題であった。A氏はこれは支援計画の中に当事者の声を反映しないというクライアント主義の不在から起こるものと解釈していた。明確なゴールを示さない児童相談所にも問題はあり、入所前後の情報観の齟齬のために子どもが不安定になることもある。そこで、FSWが積極的な地域に出向いていくという情報収集の姿勢が欠かせない。</p> <p>関係機関との間では、市町村との温度差、行政の危機感のなさを感じている。家庭復帰には今現在ではなく、先を見据えた働きかけを行うことで、子どもが帰る地域の支援力を涵養することが重要である。しかしFSWの活動地域は子どもが帰る地域とは異なっているため、地域との協働のための努力が欠かせない。特に一般市民にも虐待サバイバーの現状の周知ができるような働きかけを行うようにしている。</p> <p>現在はいまいちになっている家庭支援の理想的な役割分担について、A氏はプランニングを専門に行うという児童相談所の役割の提言をしている。しかし結局個々の支援者の資質の問題が大きくい。児童養護施設でも援助者倫理の欠如を感じさせる人もおり、ソーシャルワークの浸透に課題がある。現場では自然に身に付くと思われがちで専門スキルのトレーニングの必要性を指摘している。A氏自身もFSWとして、家庭支援プログラムの不足を実感している。事例と実践の不整合のために、現状では実践の中からFSWの業務プログラムの構築を行っている現状である。</p> <p>一般社会からの社会的養護への要求水準についても危機感を持っている。職員は児童養護施設の独自性を確立させ、施設に何ができるのか説明責任を負っていると考えている。具体的には被虐待児に対する治療機能を持ち、職員が専門性の獲得をし、自らの専門性の自覚を持つこと、また専門スキルの習得、スキルアップに努めることが必要である。しかし地方ではSVの不足もあり、スキルアップ機会は限られている。助言を行うSVの権威もスーパーバイザーの効果に影響を与える。</p> <p>家族再統合について、CWの安定が子どもの安定に影響を与えるため、担当と子どもとの関係をきちんと結ぶことが、まず最初の家族再統合へのステップであると考えている。現在の施設では集団養護の限界を感じており、小規模化が必要だが、それは支援者の質の子どもの影響も考慮しなければならず、支援者の力量が問われる。それでも施設や里親、ファミリーグループホームなど多様な社会的養護担い手の共存ができ、児童相談所や保護者が選択可能な社会的養護になることが理想だと考えている。FSWとしては保護者対応に子ども把握が不可欠なため、直接援助に関わることもある。そのなかで、子どもの変化は見えやすいが、家庭を変えようとは容易ではなく、FSWの孤立感、FSWの無力感を感じている。</p>	1.入所児童の背景はこの10年でもかなり変わった 2.児童養護施設の業務には変わったものと、不変のものがある 3.家庭支援専門相談員制度導入の政策意図と現場感覚は解離しており、FSWの業務は不明確である 4.地域特性のため、現場職員の社会的養護観は旧態依然としていてクライアントを尊重するという福祉職の専門性には疑問がある。 5.関係機関間には方針決定権の序列があったが、施設の発言力が大きくなりつつあり、援助方針にも転換が見られる 6.施設職員は親に過剰な期待を抱かず、できないことを許容するまなざしがあるが、行政は要求水準が高く、共通理解が得られない
----------	--	--

理論記述	<p>7.市町村との問題認識の温度差が情報収集の困難さを生じさせている</p> <p>8.ケースのアセスメントをし、援助プロセス全体を俯瞰する視点の欠落が計画のとん挫を招いている</p> <p>9.親子が鼎る地域で先を見据えた働きかけを行い、地域の支援力を涵養することが重要である。</p> <p>10.家庭支援のプログラム、職員の研修の機会が不足しており、実践から理論を構築する途上にある</p> <p>11.児童養護施設が専門的な独自性を保持し、職員が専門スキルの向上に努めなければ、社会的養護が必要とされなくなるといふ危機感を抱いている</p> <p>12.直接処遇は子どもの変化が見えやすいが、FSWは家庭の変化を導くのが困難で孤立感を感じる。</p> <p>13.地方には職員のスキルアップ機会が不足している</p>
さらに追及すべき点、課題	<p>・入所児童の変化は地域特性によるものか？</p> <p>・社会的養護親の旧弊性は地域特性または世代によるものか？</p>



Ｂ氏（Ｓ学園）へのインタビューデータ

No.	発話者	テキスト	(1) テキストの中の注目すべき語句	(2) テキストの中の語句の言い換え	(3) 左を説明するようなテキスト外の内容	(4) テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	(5) 疑問・課題
1	筆者	必要に応じて関わるといのは、本園のお子さんのことですか？					
2	B	えーとですね、52名の半分だからで25から30近いかなみたいな感じですね。					
3	筆者	GHのお子さんも？					
4	B	見えています。今日ちょうど対応したのはグループホームです。					
5	筆者	職歴は？					
6	B	22歳の12月に中途で入ったんですね。その年もカウントすると入職9年目ですね、FSWは2年目ですね。					
7	筆者	では最初の7年間はCW？					
8	B	そうですね。					
9	筆者	FSWが制度化される以前からお勤めですね					
10	B	そうですね、ちょうど同じくらいですね。					
11	筆者	制度化の前で家庭復帰のプロセスや数に変化がありましたか？					
12	B	お恥ずかしい話なんですが、家庭支援専門相談員が制度化されて充実したかというと、S学園はしていないんですね。自分がなってきたからですね、本格的に始まったのは、プロセスというのは満足というか、ぜんぶ綿密にできているとはいえないんですが、やろうとは思ってますね。話し合いの頻度を増やしたりとか。家庭訪問もなかなかできていなかったってことも、自分も現場にいて園がゆい部分があったので、やるようにしてましますね。帰すケースはたぶんたいして変わっていないと思いますね。	自分も現場にいて歯がゆい部分があったので	CWとして親対応が十分できていなかったことへの反省	CW時代の反省点 支援の非優先性	CW時代の家庭支援のやり残し感	
13	B	逆に慎重にしているからこそ、これはもうちょっとまだというケースもあるでしょうし。慎重にやってくるから帰せるケースというのもあるでしょうけど、そこは何とも言えないかと思えますね。	慎重にしているからこそ、これはもうちょっとまだだよ	状況を軽視しない／入所期間の長期化を恐れない	慎重さ丁寧さの肯定	入所期間より慎重さの優先	
14	筆者	入所の段階で先の見通しを持っていらっしゃるのですかね？					
15	B	そうですね、してましますね。					
16	筆者	計画通りに進まないこともあると思うが、何がネックになっているますか？					

17 B	ほとんどいろいろなケースがあるので何とも言えないですけど、子どもはたいていみんな帰りたいので。親がまず、親も子どものことを大切に思っている親の方が多いとは思いますが、やっぱりだいたい共通するのは不器用ですね。不器用ですね、とていこう思います。ここで一本電話を入れておけば兄相にも印象がよいのに、入れなかったがために「若手難しですね」って流されちゃったりとか。兄相は何百ケースもかかえているので、兄相が全部細かいケースを把握するのは物理的に無理だと自分では思っているんで、そこを補うのが自分の仕事だと思っています。そうなる、自分たちの方がおそろしく兄相さんよりは親御さんのことはわかっているんですね。なので、ああこもう少しいろんなだけ、ああ惜しいなああっていうのがありますよね。	だいたい共通するのは不器用／兄相が細かいケースを把握するのは物理的に無理だと自分では思っているんで、そこを補うのが自分の仕事	如才なく振る舞える親がいない。印象を損ねてしまう／児童相談所の過剰業務をフォローする。詳細を把握しマネジメントするのがFSW	ネットワークとしての親の要領の悪さ／児童相談所の補完機能	家庭復帰を妨げる親の不器用さ。児童福祉司とFSWの補完的關係	
18 筆者	そういう時は家族にアドバイスをされますか？					
19 B	そうですね、声かけをしますね。それがまずありますけど、それ以外にも家の状況とか、経済的な状況とか複合的に考えて判断するべきだと思うので、今サエックシートみたいな便利なのがあるかありますよね。そこをやればリチャエックしながらやるようにしていますね。	それ以外にも家の状況とか、経済的な状況とか複合的に考えて判断するべきだと思うので	多様な課題の全体を見ての判断が求められる	問題状況の俯瞰 総合的な判断	問題状況の総合的な判断	
20 筆者	制度化されて、児童養護施設への期待も変わっていますか？					
21 B	家庭支援というところの意識は少しずつできてきてはいるんですけど、児童福祉法に入ったのはもう少し前ですね。家庭支援がそこにはたぶん入ったのはもう少し前ですね。なかなか現場としても意識としては回らないと思うんですけど、家庭支援専門相談員という役割があって、こういう役割だよねってことをみんなにインフォメーションすることで変わってくると思います。だから制度化されてしばらく経つからだと自分では思いますが、そこを今自分もいろいろとやっているんですけど、専門職制度委員会があるんですけど、心理で構成されている委員会なんですけど、話しを聴くとここ数年、各施設で家庭支援専門相談員というのがだいぶ認識されてきたという印象を持ちますね。	家庭支援というところの意識は少しずつできてきてはいるんですけど、児童福祉法に入ったのはもう少し前ですね。家庭支援がそこにはたぶん入ったのはもう少し前ですね。なかなか現場としても意識としては回らないと思うんですけど、家庭支援専門相談員という役割があって、こういう役割だよねってことをみんなにインフォメーションすることで変わってくると思います。だから制度化されてしばらく経つからだと自分では思いますが、そこを今自分もいろいろとやっているんですけど、専門職制度委員会があるんですけど、心理で構成されている委員会なんですけど、話しを聴くとここ数年、各施設で家庭支援専門相談員というのがだいぶ認識されてきたという印象	児童養護施設の役割変化の認識 子どもから家庭へ視点の移動／業界全体で専門職が浸透してきた	役割認識の変化 援助対象の拡大／専門職の浸透	家庭支援意識の保持 援助対象の拡大 FSW職の浸透	
22 筆者	この地域でもそんな状況ですか？					
23 B	だとも思いますが、最初からすごくやられているところはありますけど。今はようやく半数以上はきいているかな。今でもまだFSWがローテーション入っているところもあります。					
24 筆者	大都市部は恵まれている方だと思いますが、それでもまだまだなんでしょうね？					
25 B	制度の問題ですか？それはまだまだです。イギリスなんかと比較すれば逆転ですね。うちの施設は県の中でも上乗せしてついているんですけど、この前計算したら、子どもが1.7から1.8人に対して職員が1人だったかな。	制度の問題ですか？それはまだまだです	最低基準以上でも社会的養護の水準は低い	社会的養護水準の低減	社会的養護の水準の低下	
26 筆者	そうとう手厚いですね					



39 B	施設長は情はすごいです。アフターケアも施設長がやっているケースもいまだにありません。施設長じゃなきゃ動かない保護者もあつたりしますし、そこは使い分けだと思います。	そこは使い分け	施設長とFSWは有効な方が前に出る	有効な支援者の選択	柔軟な支援者の選択	
40 筆者	役割分担というよりは目の前の子どものために動くということでしたね					
41 B	それは感情論。もうひとつは客観論も持っていて、シートみたいなのでチェックしてみたりとか。児相と話しあってですよね。退所は。	客観論も持っていて、シートみたいなのでチェック	情だけで仕事はしないツールを用いて客観的にケースをアセスメントする	客観性の保持 ツールの使用	客観性の保持	
42 筆者	退所は入所時の見立てに沿って決定しますか？					
43 B	そうですね、入所時の見立てがまず目標ですよね。見立てを通して、支援していったら、やっぱり難しいのであればそこはじゃあもう少しこうだねとか。	入所時の見立てがまず目標	スタート時点でゴールまで見定める	支援過程全体の俯瞰	早期の支援過程の俯瞰	
44 B	どちらかというと、他の施設聞くと児相の方が帰す帰すというらしいが、S学園ではこちらからの方から「これちょっと難しいんじゃない？」ということのことが多いかもしれないですね。	こちらの方から「これちょっと難しいんじゃない？」ということの方が多いかもしれない	児童相談所に意見することが多い／慎重な判断を伝える	専門的な立場からの提言	児童相談所へ提言できる立場	
45 筆者	児相がそろそろと言ったとしても？					
46 B	しても。年初めとか年度初めに家庭復帰候補のシートって来るんですよね、AランクBランクCランク。それがBランクとかCランクとかついていると、それは違うんじゃない？とすぐ電話しちゃいますね。それはあまりにも時期尚早なんじゃないですか？って感じですね。	すぐ電話しちゃいますね	即時連絡 常に情報共有する	即時の情報共有	情報の即時共有	
47 筆者	福祉司と話し合える素地ができているのですね					
48 B	できるよう心がけてますし、できないと帰せないの、しよっちゅうしよっちゅう電話します。そうすると、向こうの方も特定の名前でB先生お願いしてますって感じで電話がかかってきますね。	出来るように心がけていますし、できないと帰せないの	連携の努力 家庭復帰を可能にする条件としての連携	連携の努力	連携の努力 復帰条件としての連携	
49 筆者	児相にもFSWとして認識されている？					
50 B	そうだと思います。FSWという認識はどうかかわらないですけど、児相との役割はBだとわかっていると思いますね。					
51 筆者	直接ケアには？					
52 B	入ってます。原則週1回入ってます。					
53 筆者	宿直ですよね。それだけで子どもを把握するのはむずかしいのでは？					

54 B	難しいです。週1回泊まって、4寮舎あるので、4週間に1回しか泊まれないですね。原則でいえば、おっしゃるとおりです。把握はできないですね。できないので、職員とのコミュニケーションが大変になりますね。うちは原則週1回は全体の会議があるので、そのあと寮舎とかGH単位での会議があって、そのほとんどの会議に参加をして情報仕入れたり。あとは気がなったらすぐに寮舎に電話をしよう。泊まりはまだ入らないと、それこそわからなくなっちゃうかなと思いますね。	把握はできない／職員とのコミュニケーションが大変／気がなったらすぐに寮舎に電話	現状の勤務体制ですべての子どもの理解すること は困難／子どもの情報の補足手段としての職員連携／即時連絡	子ども理解の困難さ 情報補足のための連携	直接的な子ども理解の限界 情報補足のための職員連携	施設職員にできるソーシャルワークとは何か？
55 B	本来はよろしくないとは思いますが、泊まりはしてくれなっているのだからだとは思いますが。本来は専任でいてほしいというのが。ローテーションに入らなければダメだと言われますからね。でも自分はまあ、ひとつのところに入っているわけではないので。					
56 筆者	退所の最終的な判断は合意を得てするのですか？					
57 B	そうですね。					
58 筆者	児相のSWと施設と、家族と、子どもと一緒に話し合い？					
59 B	一緒に話し合います。事前に最初は児相と施設で話し合いをして。その後保護者、そのあと子どもを入れて、何段階にわけて。	最初は児相と施設で話し合い／その後保護者、そのあと子どもを入れて	児相と施設から家庭復帰の計画を始める／プロセスには当事者も参加させる	復帰判断のプロセス	復帰判断のプロセス	
60 筆者	何回もやる？					
61 B	何回もやりますね。めんどくさいですけど、慎重になるし、子どもにとってもいいです。	めんどくさいですけど、慎重になるし、子どもにとってもいい	時間はかかるが間違いない方法を取る	判断プロセスの目的	プロセスの目的	
62 筆者	手厚いですね					
63 B	手厚いかどうかはわからないですけど、そのくらいしてあげないとかわいそうですよ。	そのくらいしてあげないとかわいそう	子どものことを考えた結果としての行動	判断プロセスの意図	プロセスの意図「そのくらいしてあげないと」感	
64 筆者	退所後のアフターケアを担当されていますか？					
65 B	できているケースもあるし、できていないケースもあります。原則自分がやろうにはしてありますが限界はありますので。今日の午前中は退所した子と一緒に母親の家に。一緒に住めないで、一緒にお母さんの家に行きました。高校卒業して就職してる子です。	原則自分がやろうにはしてありますが限界はあります	アフターケアもFSWの業務だが、こなしきれない	FSW業務の原則	FSW業務の原則と限界	
66 筆者	退所間もないお子さんですか？					
67 B	そうですね。3月に退所したので1年目ですね。まだ施設とはつながりをもってますね。					
68 筆者	子どもにとっては家が2つあるような感覚なのでしょうか？					
69 B	その子の方はお母さんの方は自分の家という感覚はないかな。この前はそつと「僕には実家っていうのがないんだよね」と言っていた。本来であれば施設がやらなきゃいけないんだけど、もちろんそう思っているんだけど、その子はまだそう感じてないのはいくつかないことなんです。「そうだね、いつでもこっちに遊びにきなよ」って感じですね。」	本来であれば施設がやらなきゃいけないんだけど	子どもにとつて施設は家の役割を担うべき	子どもにとつての施設の存在意義	家代わりであるべき施設	

70 筆者	制度上の課題があれば			経済的な理由がネックになる	家庭復帰を妨げる制度上の課題		
71 B	根本は経済ですよね。経済状況はやっぱり根本になると思うので、支援はかなり増えていると思うんですけど。	根本は経済			復帰を妨げる経済問題		
72 筆者	養護施設としては助けることが難しい部分ですよ						
73 B	無理ですね、公的機関じゃないので。紹介はできませんね、情報を与えることはできませんけど、できないですね、働きかけることくらいしかできないですね。	情報を与えることはできませんけど、できないですね		社会資源の情報提供はできる 根本的な問題の解決は図れない	FSWの家庭支援の周辺性		
74 B	いま難しいケースがあって、そこは特別なケースなんですけど、お父さんが出所されることで、性的な問題があったので入所だったの、実際に入っている子ではなくてお姉ちゃんなんですけど。満期で出所なので、制度上の問題があると思うんですけど、DVだとかを守るような制度が確立されてない。接近禁止命令とか、そういうことも充実していないのが現実なんです。とっても難しいケースです。	接近禁止命令とか、そういうことも充実していないのが現実		日本の法律が子どもの安全を守るようにできていない	子どもの安全確保ができない制度	FSWとして隣接領域に働きかけることはないか？	
75 B	もう一個のケースは、お母さんがとても努力しているので3月に退所を目指しているんですけど、なかなか給料が、派遣のお仕事で難しく。手当とかいろいろな上乗せに乗せて控除を設けて月額20万切るくらいです。たぶんお家に帰れるケースなので帰りますけど、その後がちゃんと心配ではあります。お母さんが病気をされちゃったりとか。そう言ったときにお金をどうするか心配ですね。	お母さんが病気をされちゃったりとか。そう言ったときにお金をどうするか心配		家庭復帰しても保護者の状況が悪くなったときに対応できるか不安がある	復帰しても心配		
76 筆者	入所理由が経済的な問題であることも？						
77 B	ありますね。入所する時は生活保護にかかってなかったけども、帰るときは生保かけて帰すというケースもあります。生保だから帰せないということはもちろんないの。そこは改善と見なすと思います。入所理由がそのままではもちろん帰せないですよ。	入所理由がそのままではもちろん帰せない		復帰の判断には主訴の改善が必要	復帰条件としての入所理由改善		
78 筆者	自立支援計画が予定通り進まないこともあると思いますが						
79 B	自立支援計画書はお恥ずかしい話S学園はお飾りになってますね。うちだけじゃなくてそういうところがかなり多いんです。立てて、そこはいろいろアセスメント、そこは語れます。ほんとにアセスメントして立てます。ただそれが絵に描いた餅になってしまいうことは多い。	ほんとにアセスメントして立てます。ただそれが絵に描いた餅になってしまいうことは多い		ケースの分析は丁寧に行うが、支援計画に沿って支援をできない	支援計画と実践のギャップ		
80 筆者	アセスメントは入所時にするのですか？						
81 B	入所だけでなく、変わったも。みなが頭で自立支援をつねに入れて支援、ケアをしているかというと、そうじゃないと思います、正直なところ。やっている寮舎ホームもありですけどね。	みなが頭で自立支援をつねに入れて支援、ケアをしているかというと、そうじゃない		職員の意識に支援計画が根付いていない	支援計画に基づいてやる意識	自立支援計画の必要性は現場から出てきたのではないのか？	
82 筆者	いろいろな立場からプレッシャーを受けるポジションではないですか？						
83 B	その通りですね。子どもからはプレッシャーとは感じない、というか子どもの主張は当たり前のことなので、それはいいと思ってます。子どもの家族もまあそうですね、無理な要求をされる方もいますけどね。	子どもの主張は当たり前のこと		入所児が職員に要求するのは当然	子どもからの要求は当たり前前		

84	筆者	担当と家族、児相の意見が分かれる時があると思うが、FSWが調整をする？	担当の職員は子ども目線であるべき	CWは子どものサイドに立つべき				
85	B	そうですね、それが多いですね。担当の職員は子ども目線であるべきだと思いますし、それでいいと思います。	親支援は自分の役割／現場の職員を説得する言葉は必要	親サイドにはFSWが立つ／親のアドボケートをしてCWを説得する役割	CWの立ち位置	CWは子どもサイド		
86	B	ただそれだけではうまくいかないの、その部分は親支援は自分の役割。そこは現場の職員を説得する言葉は必要です。現場の職員の言うところは正しいと思う時もありますし、そうなるときは自分が家族の方を「それはちょっとないんじゃないですか」と言う役割ですね。	担当はエゴも入ってくる／帰そうとする人は少ない／最終的には家庭再統合を目標にすることを見んなわかって欲しい		FSWの立ち位置	FSWは親サイド CWとFSWの関係		
87	筆者	担当CWから退所を言いだすことはありますか？						
88	B	担当はエゴも入ってくると思うんです。なかなか帰そうとする人は少ないと思います。担当は広く視野をもってほしい、最終的には家庭再統合を目標にすることをみんなわかって欲しいんですけど、現場で働く人ともうまいわかってますし。	子どもは親が全てでなんですよ、すべてじゃないんですよ	CWがどれほど愛情を注いでも親には敵わないと伝える／実際には親の存在はそこまで大きくない	CWの養育姿勢	CWの家庭復帰への消極性 目標共有の必要性		
89	B	でも子どもは親が全てでなんですよ、すべてじゃないんですよ、って言うようなことを伝えるのが自分の役割です。年度初めに施設内研修をして、家庭支援という立場からの研修をしたりしてるんですけど。	子どもは親が全てでなんですよ、すべてじゃないんですよ		子どもにとつての親の存在意義	子どもは親が全て		
90	筆者	業界外からプレッシャーを受けることはありますか？						
91	B	ないかな。改正があったって、措置児童のって新聞に載っているのをみればプレッシャーなくもないんですけど、そんな気にしているヒマがないのかもですね。世論やマスメディアって記事は探しますし、気にしてはいますけど。児童養護施設っていうより児相じゃないですか、児相はかなりの叩かれちゃいますよね。児童養護施設もそんなにね、恩寵園の時はすごく叩かれたのかな。それもだいたい風化してるでしょうね。自分の性格的なところでもあると思うんですけど。	そんな気にしているヒマがない	多忙で施設外の雑音に煩わされている場合ではない	組織外からの批判の届かなさ	外部の批判より目の前の問題		
92	筆者	家族の関係を作り直すことについて伺えますか？						
93	B	さきほどの午前中に行った子どももなんかは、一緒に暮らすことはかなり難しいと思ってました。入所時は一緒に住んでたんですけど、この子は2年くらいいかなかったのかな、今の状況で考えても一緒に暮らすことはさせたくないし、本人も望んでいないですし、ただ再統合という言葉が適切かどうかは別ですが、再統合はしようと思ってます。	再統合という言葉が適切かどうかは別ですが、再統合はしようと思ってる	家族再統合の定義は不明 親子関係を整理することは必要	再統合定義 親子の交流の維持	家族再統合定義の不在 親子の交流維持		
94	B	なので住む場所は違うんですけど、親子関係の修復はしてあげたいですね。まず子どものためにしてあげたいし、お母さんのためにもしてあげたいですね。一緒に暮らしても、週1回会っても月1回会っても、極端な話年1回でも、通じていければ家族ですもんね。	極端な話年1回でも、通じていければ家族	僅かなつながりでも持てれば家族といえる	細いつながりでも家族	僅かなつながりでも家族		
95	B	たぶん養護施設じゃなくても、家庭でも年に1回しか帰らないことありますよね。基盤がないからそういう言葉が出てくるのだと思うんですが。だからありええると思います。	基盤がないからそういう言葉が出てくる	もともと絆を持っていない家族だから再統合というが状態としてはありきたり	利用者へのまなざしの特殊性	まなざしの特殊性		

96 筆者	家族関係の再構築が養護施設の一環の役割？	虐待のケアをすることは、使命／養護施設で本来は治療じゃない／養護施設の役割っていうのは自立になるんだらうけど	児童養護施設は被虐待児のケアをすべき／そもそもの機能は養育／子どもの自立をさせることが基本の役割	児童養護施設がすべきこと／基本的機能 基本的役割	虐待ケアは使命 基本的機能としての自立	
97 B	一番と言えど、虐待の役割ではないですけど。今はなんなんですかね、施設の使用って。虐待が半数以上なので虐待のケアをすることは使命だと思えます。養護施設の根本にならば治療じゃないですからね。養護施設って本来は治療じゃないですよ。そう考えていくと、養護施設の役割っていうのは自立になるんだらうけど。					
98 筆者	施設に要求されることが増えているのでしょうか？					
99 B	増えてますね。実感？自分まだ浅いんで、実感までは行ってないんですけど、養育とか、自立の前に、まず虐待のケアをしてあげないといけない。そこから養育、自立といったら、再統合になると思うので。分離したまま修復することもあり得ますかね、ので、あり得ますね。	虐待のケアをすることは、使命／養護施設で本来は治療じゃない／養護施設の役割っていうのは自立になるんだらうけど	児童養護施設は被虐待児のケアをすべき／そもそもの機能は養育／子どもの自立をさせることが基本の役割	児童養護施設がすべきこと／基本的機能 基本的役割	虐待ケアは使命 基本的機能としての自立	
100 筆者	先ほどのケースは、お子さんがまだお母さんを家族と思えていないのですか？					児童養護施設の機能は変化するのか？
101 B	未だと言うよりも、今は持ちたくないんじゃないでしょうかね。今ちょっと強れ動いてると思うので、小っちゃいころは家族だと思ってたでしょうけど、今は持ちたくないと思えますね。もうちょっと年齢を重ねないと、言葉は悪いけどあきらめだめというか、親はしょうがないんだっていうか、それでも自分の親なんだと思うので。	養育とか、自立の前に、まず虐待のケア／そこから養育、自立といったら、再統合になる	児童養護施設は被虐待児のケアをすべき／そもそもの機能は養育／子どもの自立をさせることが基本の役割	児童養護施設がすべきこと／基本的機能 基本的役割	虐待からの回復の優先 家族再統合に至るステップ	
102 B	だから一緒に行動しないと交流がストップしてしまっちゃうんですね。別に交流ストップしてもいつかつくつければいいと思うんですけど、それができないといけないので、だったら定期的に間に入って交流させてあげたほうがいいかなという考えですね。	言葉は悪いけどあきらめだめというか、親はしょうがないんだっていうか、それでも自分の親なんだ	子どもが親を許容し、受容していくこと	親の理想化の諦め ありのままの親の受容	理想的な親を諦め ありのままの親を受容する	
103 筆者	頻度は？					
104 B	2ヶ月に1回くらいですかね。					
105 筆者	卒園生全部にするわけではないですが、多いですね					
106 B	それはみんなだと思えます。アフターケアに関しては電話や訪問含めれば月10回くらいかな。自分の上に主席指導員という立場の、施設長の次ですけど、がいて、提携型グループホームというちょっと特殊なGHIに、そこなんかはものすごい量のアフターケアをやってますね。	それはみんな	アフターケアは全ケースで必要なこと	退所後支援の普遍性	アフターケアの普遍性	
107 筆者	ホームごとに方針が違うのですか？					
108 B	提携型のGHIはちょっと特殊なので、Y学園からの措置変更のみを受け入れるGHですね。やっぱりY学園さんにはたから大変なケアスぱっからで高校生のみのGHなので、高校1年生から入る子もいれば、高3はいないのかな、そこから関係を作っている送り出しまでやらなければならぬので、やっぱり時間が少ないんですよ。やっぱりアフターケアもこなしていけないと最終的な自立には結びつけられないんだと思うんですね。そこはちょっと特殊なので頻度としてはものすごい多いですね。	アフターケアもこなしていけないと最終的な自立には結びつけられない	入所期間が短い子どもは退所後までケアが続く	支援期間と在在期間のずれ	在在期間と要支援期間のギャップ	



109 B	個人と職員が繋がっているケースはたくさんあります。それはそれでよいとして、一応自分がFSWもアフターケアは業務に入っているの のでやるようにしています。	自分がFSWもアフターケアは業務に入っているの でやるようにしています	退所後の関わりもFSWの業務内	FSW業務内容	FSW業務としてのアフターケア	(5)疑問・課題
No.	発話者	テキスト	(1)テキストの中の注目すべき語句	(2)テキストの中の語句の言い換え	(3)左を説明するようなテキスト外 の概念	(4)テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して) (5)疑問・課題

ストリーライン	<p>B氏はFSWとして家庭に綿密に関わろうという意欲を持っているが、その根底にはCW時代の家庭支援のやり残し感がある。しかし家庭への関わりを増やしても家庭復帰ケースが増加しないのは、入所期間より慎重さの優先という施設の方針のためである。家庭への関わりを通じて感じることに家庭復帰を妨げる親の不器用さがある。児童相談所は多忙で親を理解しきれないため、代わって状況を把握するという児童福祉司とFSWの補完的関係が成立している。家庭復帰の判断をめぐっては児童相談所へ提言できる立場にあるが、これは日頃から復帰条件としての連携について連携の努力をして情報の即時共有を図る習慣ができていくことになる。</p> <p>FSWが制度化され、職員全体が家庭支援意識の保持をするようになった。これまでの子どものケアだけではなく家庭までという援助対象の拡大が起こり、施設内・関係機関でもFSW職の浸透が見られる。家庭支援の意識化の歴史は制度化以前からあるが、近年とりわけ強くなった。CWは徹底的なアセスメントをもとに支援計画を立てるが、支援計画に基づいてやる意識が不十分で支援計画と実践の齟齬が生じている。CWは子どもとサイドに立てることが利点だが、それゆえCWの家庭復帰への消極性が生じてしまう。FSWは親サイドに立ち、親の意向を伝えて説得するというCWとFSWの関係が成立している。職員間の良好な関係には目標共有の必要性があり、その際子どもは親が全てということをCWに伝える。</p> <p>ケースワークは児童相談所の役割だが、B氏は児童養護施設の役割分掌でもあって考えている。特に入所児の家庭支援はやるべきだと考えているが、ケースバイケースでどちらが表に立つか柔軟な支援者の選択も行っている。本来児童養護施設のケースでない利用者もいるが、どこが引き受けるかを考えるより即応性の優先の姿勢で引き受けている。またそうした利用者への情のモチベーション化を行っている。子どもからの要求は当たり前と考えている。一方で情だけではなく、客観性の保持も意識されている。入所段階から早期の支援過程の俯瞰を行い、ツールを用いて問題状況の総合的な判断を行っている。</p> <p>退所時期については児童相談所と施設の協議、次いで家族と本人の意向確認という復帰判断のプロセスを経る。時間はかかるが、慎重さを期すというプロセスの目的・プロセスの意図がある。また子どもに対して「そのくらいしてあげないと」と感を持っている。</p> <p>FSWを専業にするかどうかはFSW配置の施設の意図によるが、たとえ専業でも、現状の一施設一名配置は業務量と配置の不均衡があると感じている。直接処遇に関われないため、直接的な子ども理解の限界があるが、情報補足のための職員連携を積極的に行うことで補っている。</p> <p>退所にあたっては復帰条件としての入所理由改善が不可欠だが、最もネックになるのは復帰を妨げる経済問題で、これは復帰しても心配が続く。解決のための情報提供はできるが直接解決できないため、FSWの家庭支援の周辺性を実感している。</p> <p>わが国は諸外国に比べて社会的養護の水準の低さがあり、比較的条件が良いとされる都市部でもなお絶対的基準の低さを感じている。また法的にも子どもの安全確保ができない制度状況である。</p> <p>児童養護施設は、外部の批判より目の前の問題に追われている。本来、基本的機能としての自立を担っているが、しかし虐待からの回復の優先があり、それから養育、自立、再統合という家族再統合に至るステップにつながる。そのため虐待ケアは使命だと考えている。また退所児にとって家代わりであるべき施設を目指している。FSW業務としてのアフターケアがあり、これはすべての子どもに共通するアフターケアの普遍性である。特に高齢入所児は入所期間に限りがあり、在所期間と要支援期間のギャップがあるため、アフターケアをやるべきだが、FSW業務の原則と限界がある。こうしたアフターケアには親子交流の促進も含まれる。そもそも家族再統合定義の不在があるが、親子の交流維持だけでも再統合と言える。究極には僅かながらでも再統合であり、そのためには子どもが理想的な親を認めあひのまの親を受容することが不可欠である。もともと関係の基盤がないところなので、社会的養護利用者へのまなざしの特殊性によって再統合と呼ばれるが、細いつながりという現象自体はありふれたものである。</p>	<p>14. CW時代の不安全感が家庭への関わりモチベーションになっている</p> <p>15. 多忙な児童相談所に代わりFSWが家庭に代わり補完関係が成立している</p> <p>16. 児童相談所とは連携の努力によって情報の即時共有ができる</p> <p>17. 子どもから家族への支援対象の拡大が起こって職員に家庭支援意識が浸透した</p> <p>18. CWは子どもとサイドに立つあまり家庭復帰への消極性が生じ、支援計画と実践の齟齬が生じる</p> <p>19. 子どもと家族への情によって入所児の家族は見るべきだが、その視点には客観性の保持が意識される</p> <p>20. 家庭復帰を妨げる根本原因に介入できず、FSWの家庭支援の周辺性を感じる</p> <p>21. FSWの業務量と配置の不均衡がある</p> <p>22. 直接子どもを把握できないため、職員間連携で補足する</p> <p>23. 退所を妨げる家庭の経済問題は復帰後も心配が続く</p>	理論記述
---------	--	--	------

さらに追及すべき点、課題	<p>24.わが国の社会的養護は絶対的低水準にあり、比較的条件の良い大都市部でも不足を感じる</p> <p>25.入所期間と要ケア期間にずれがあり、アフターケアは入所しているすべての子どもに普遍的に必要</p> <p>26.わずかながらでも家族であり、理想的な親を諦めありのままの親を受容すること、親子の交流維持も家族再統合である</p> <p>・FSWは、職員数・職員配置を含めなにを理想的な児童養護施設だと考えているのか</p> <p>・児童養護施設の機能の時代的な要請、FSWの行うソーシャルワークと児童相談所の行うソーシャルワークとの違いはなにか？</p> <p>・社会的養護の現場の職員が、地域や周辺領域に働きかけられることはなにか？</p>
--------------	--

## C氏(R学園)へのインタビューデータ

No.	発話者	テキスト	(1)テキストの中の注目すべき語句	(2)テキストの中の語句の言い換え	(3)左を説明するようなテキスト外の内容	(4)テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	(5)疑問・課題
1	筆者	C先生の職歴は？					
2	C	職歴13年目です。					
3	筆者	FSWとしては？					
4	C	3年目です。					
5	筆者	それまではCWとして？					
6	C	そうです。					
7	筆者	アンケートに必要なケースだけとありましたが、ケース数は？					
8	C	積極的に家庭復帰に私に関わっているケース数は12～13ケースですね。毎年年度初めに優先順位をつけて、今年度のこのケースについて積極的にケースワークをしていこうということになるんですけど、それ以外にもやはり保護者対応とか、関係機関対応の方でケアワーカーだけで困難なケースが出てくれば、ちよとスポットの私が入ったりとか、あるいは他の管理職が入ったりという形で対応していく。	毎年年度初めに優先順位をつけて	年に1回、家庭復帰させる児童とそうでない児童を峻別する	復帰目標による子どもの峻別・優先順位の決定	家庭復帰目標による子どもの峻別・優先順位の決定	どんな基準で峻別するのか？
9	筆者	C先生の前にFSWは？					
10	C	いたんですけど、もともと管理職としていた年配の方だったんですけど、管理職という形で、副園長兼だったんですけど。その方は積極的に家庭復帰に入っていくというよりはケースの管理というような形で関わりました。	積極的に家庭復帰に入っていくというよりはケースの管理	家族への介入より全体のマネジメントを行う	マネジメント業務の優越性	初期FSWのマネジメント優先性	個人差？施設の方針？
11	C	私に代わってから、もう少しいろいろなことをやろうということで、家庭復帰プログラムの開発とか。そんな大きなものじゃないんですけど、今までもFSWが配置される前から施設として家庭復帰の支援はやってきたわけですね。ただそれはどうしてもCWが片手間でやったり、児相頼みになってしまっているところがあったので。そこを意識して、意図的に支援ができるようにいろいろなことを見直そうということで、それをプログラムと言っているかわかりませんが、あれども、整備していった、書式から考え方から。	意識して、意図的に支援	家庭支援を念頭に置く何をやっているのか自覚する 計画的に介入する	家庭支援の意識化 意図的な家庭支援	家庭支援の意識化 意図の自覚	
12	筆者	それまではCWが担当ケースについてSWやっていたわけですね？					
13	C	そうですね。					
14	筆者	制度化以降FSWに一本化したのですか？					

15 C	一本化したとは言っても結局今も家庭復帰への支援の実施主体はCWなんです。私が一手に引き受けているわけではなくて、だから私も管理職なんです。ケースのいわば連行管理のなところをやっている。具体的にいうとアセスメントから始まって、支援計画策定、実施の計画、評価をしていく一連のプロセスを私の方で管理させて頂いている。今まではどうしてもCWがやっていると、宿直勤務の中でやっていきますから、児童相談所と連絡つけないといけないので電話できないという感じで、連絡が遅くなってしまったりとか、まとまった時間電話ができないとか、あるいは相談所に行くので相談させてくださいというところかなかなかできなかったんです。それを私が、電話できないなら伝えたり、業務が流れて行ってしまいますから、一日一日が。あの件確認するとか、次回の外泊どうするかチェックして行く。例えば今までは保護者との外出とか、ある程度は目標もってやってはきてたんですが、その意図をもう少し明確にして、そうすることによってその先に何があるのか、どうつながって行くのかを描きながら、そういう意識が変わってきたという感じ。	家庭復帰への支援の実施主体はCW/いわば連行管理のなところをやっている/意図をもう少し明確にして、そうすることによってその先に何があるのか、どうつながって行くのかを描きながら、そういう意識が変わってきた	親への関わりはCWがやる/FSWは全体のマネジメント/何をやっているのか自覚する 支援の全体像とゴールを明確にする 職員の仕事に対する認識の変化	CWとFSWの業務分担 / 支援意図の明確化 職員の意識変化	家庭復帰支援はCW、ケース管理はFSW 支援全体像の意識化	そのような業務分担は自然にできてきたのか？意図的にそうしたのか？
16 筆者	職員全体で？					
17 C	そうです。Rプロジェクトでも家庭復帰の目標を入園後3年以内とすることでこちらは目標にしています。これはまあ実現できるかは別として、それくらいの意気込みでやりましょうと。	それくらいの意気込みで	絶対に3年で帰すという強い意志を持って取り組む	復帰までの年限	短期間で家庭復帰させるという強い意志	
18 筆者	すべてのケースを？					
19 C	はい、当然無理なケースもあるんですけども。うちの前園長が、自立支援計画案を立てるんですけど、そこで「この一年間で家庭復帰させるという計画を立てなさい」と言っていたんです。					
20 筆者	すべてのケースで？					
21 C	すべてのケースで。当然みんな無理だというわけなんです。じゃ無理なんだからどうしたらむりだと。じゃあそれを補うにはどうすればいいの。克服するにはどういうことが必要なのか？そういうことを考える。最初から虐待だから無理です、保護者が病氣だから無理ですということではなくて、それを補うすべはないのかともう一度頭をひねっていかう発想なんです。	それを補うすべはないのかともう一度頭をひねっていかう発想	何が家庭復帰を妨げており、どうやれば解消できるのか視点をええながら考えていく	親子分離の原因の明確化 原因除去に向けた発想転換	親子分離の原因除去への発想転換	
22 C	3年以内という大きな目標についてはなかなか難しく、平均で在園機関が4.4年なんです。					
23 筆者	全国的には短い方ですか？					
24 C	うーん、どうでしょうね。何年か前の調査、最近全国調査がなかなか公表されなくて、H21に公表されたものは平均4.7年だからそれほど短いわけじゃないですね。ただ、今4.4年なんですけど、その頃うちは平均3.7年くらいだったの、多少短いかな、というところですね。					

25 筆者	3年以内を目標として、帰せそうかどうかの判断はいつしているのですか？								
26 C	これはもう入園前から見相とはその話をしていますね。どういうケースで、こちらが受けられるかどうか？年齢、性別によって部屋の関係で預かれるかどうかもありますが、その話の次くらいにします。というのはやっぱりうちの基本的な考えの3年というのがありますし、	入園前から見相とはその話をして	退所期限をあらかじめ明確にしておく 見相とのゴールの共有	退所以前からの退所時期の明確化	退所時期の明確化				
27 C	あと、基本的には養護施設は子どもを育てるところではなくて、一時的に預かるという発想なんです。だから本当に家族の体制が整えば、いつでも家庭復帰させようという姿勢なんですね。やっぱり家族のなかで起こってしまっただけの出来事、不具になって離れて生活しなければいけない。だからその出来事、不具合が解消すれば帰れるわけですから、そこをどうやって解消させるか？ということですね。なるべく早く戻った方がいいし、そのためにここでは預かっていきます。一刻も早くと言ったらあれですけど、今の考え方は18歳か15歳まで育てよう、という発想でしたけど、今は全然、むしろ18で高卒で自立していくんだなんて自立支援計画を立てると、なんでそうなるんだといわれる。	基本的には養護施設は子どもを育てるところではなくて、一時的に預かるという発想／家族の体制が整えば、いつでも家庭復帰させようという姿勢	施設は子どもの永続的にケアするところではないテンポラリーな生活提供／家庭環境が改善したら帰るのが基本	子どもが永続的にケアされるべき場所／家庭復帰が基本	児童養護施設はテンポラリーな生活場所				
28 C	もちろん高年齢で来た子どもなんかも混雑として、関係修復ができない、間に合わないというケースも中にはありますから、そういうケースは別になってきますけど、それでも高1で来たが、ネグレクトだったんですけど、高3で帰りましたね。	高年齢で来た子どもなんかも混雑として、関係修復できない、間に合わない	高年齢児は問題が複雑 親子関係を整理する時間が足りない	親子関係修復の時間不足					
29 筆者	何とかして帰したいということですか？								
30 C	はい、やはり根本にあるのは、家族は家族で生活すべきだろうということなんです。施設はどうしても集団で、家庭的と言っても家庭そのものにはなりませんが、家庭そのものを整理しながらそこに帰っていく、あるいは家族との関係をもう一度整理して別々に住んでいるけれども家族としては成り立っているというようにするほうが、そういう形を整えていく方が将来的にいいんじゃないか。家族関係は一生ものなので、18まではここで何とか周りが大人が見てられても、そのさきどうするの？ということ。	根本にあるのは、家族は家族で生活すべき／家庭的にはなりませんが、家庭そのものにはなりませんが、18までは何とか周りが大人が見てられても、そのさきどうするの？	元の家族で成立すること／基本的な生活は代わりの家族で成立できる努力をしておかないと、子どもが大人になっても立ち行かない	家族の根本性 施設の代替性 18歳以降の支援者不在状況	「家族は家族で」が根本施設の代替性				
31 筆者	それまでの間に関係を作り直す？								
32 C	そうです。それが書かせていただきましたけど家族再統合だろうなと思います。								
33 筆者	入所前から家族の課題、入所期間中にクリアすべき課題を明確にして入ってくるのでしょうか？								
34 C	そうです。								
35 筆者	家族への支援として制度化以降はじまったことはなにかありますか？								
36 C	うちはもともと積極的にやっていたと思うんです。児童相談所との連絡も非常に頻繁ですし、ケースカンファレンスも頻繁です。	児童相談所との連絡も非常に頻繁	児童相談所とも常に情報共有している	関係機関との連携	児童相談所との情報共有				

	あとはほぼ同時に児童家庭支援センターができましたので、家庭復帰はそこでの連携が非常に強くなって。それはいいところと悪いところがあって、今までは家庭に帰すのは地域に帰すことなので、地域の受け入れをどうするかという児童相談所をお願いして関係機関、例えば民生委員さんとか生活保護のワーカーさんとかに集まってもらった会談しようということにしても、なかなかそういう場が持たなかったりして、最後は見切り発車でいうこともあったんですが、最近では家庭センターがコーディネートしてくれたりするんです。そして、ケースがあるとかじゃ関係機関集めますよというところで、私たちが一参加者でいう場合もありますし。逆に、逆もあるんですよ、市ね、自治体によっては機能していないところもあるんですよ。市町村の一事務部門と言いますが、役所的な仕事しかしてくれなくって、なおかつ家庭復帰させたいと準備してきたんですけど、散々準備してきて、じゃあ関係機関会議を開くとその場ですごい反対されることもあるんです。どこかはわいわいがX地域なんです、地元なんですけど、X地域のケースで家庭復帰せようとする支援センターが非常に抵抗を示すんですね。X地域は生活レベルは高いのが経済的なことのケースは多くなくて、保護者の方の精神疾患が多いんです。ケースとしては、地域としては病気の親の元に子どもを帰すことに非常に抵抗を示す。今落ち着いているのだからこのままでもいいじゃないかという。子どもも落ち着いてるし、親も落ち着いてるし。一緒にしたら大変だからいいじゃないですかといううん。どのケースもそうなんですよ実は。カンファレンスは開いてくれるんですが、聞く前に相当時間かかりますけど、内容も毎回モヤモヤを抱えて帰ってくる感じ。自治体によっては非常に手際よくやってくれて、関係機関から情報収集してくれて、あるいは関係機関集めてくれて、お膳立てしてくれて、そういう支援ができるとか、保健センターはこうします、学校関係どうしますかとか。その場で決めていって、やっていきますように、情報集約は施設がやりましょう、以上、みたいな感じがするんじゃないでしょうか。	ほぼ同時に児童家庭支援センターができたことで、家庭復帰はその連携／私たちは一参加者でという場合／自治体によっては機能していない／毎日もやもやを抱えて帰ってくる感じ	FSW制度と児童家庭支援センターの設置が同時期ケースによって連携の手が異なる／児童家庭支援センターが仕切られる／アクターのひとつでいられる／地域格差、個人差が大い／連絡はできていない／連絡はできない目標を共有できないものかしかな	ケースごとに連携相手を選択できる／連携・目標共有の困難性	連携相手の個人差による連携・目標共有の困難さ				
37 C					なので自治体によって能力、レベルが様々なんですけども。基本的にはやってくださるところが多いので、やりやすく。というのは児童相談所の児童福祉司は多忙で連絡すら付かない方が多いので。家庭復帰の課題を検討したくても時間がとれないが、そうした時に児童相談所とはある程度の話はあるので、具体的なところで家庭支援センターと連絡取り合せて、このケースどうなんだろうというのと、じゃあ訪問看護師に聞いてみようとしようという形で、そういう意味では連携を、うまくいけば非常に有力な機関のひとつだと思っています。	児童家庭支援センターは連携が有効にできれば効果が期待できる機関	関係機関への期待と失望	連携機関への期待	
38 C					SWが入ったかどうかというより、機構の連携がしやすいになった。支援機関が増えたことでもあるし、連携がしやすくなったのはありますね。地域の中で要保護児童支援協議会がありますから、そこでのつながりもできただけで関係機関同士が連携とりやすくなったという背景があります。	児童家庭支援センターは連携が有効にできれば効果が期待できる機関	関係機関への期待と失望	連携機関への期待	協働体制の構築しやすさ
39 C					FW制度自体より関係機関同士の認識の問題で協力体制がとれるように変化してきた	FW制度自体より関係機関同士の認識の問題で協力体制がとれるように変化してきた	関係機関への期待と失望	連携機関への期待	協働体制の構築しやすさ

40 筆者	児童家庭支援センターが反対するから帰せないというのはルールにはないですね？	児童相談所もそこにはないのか	児童相談所が施設より児童家庭支援センターの発言を重視する傾向がある	関係機関の発言権の序列			
41 C	ですけども、児童相談所もそこにはなんか遠慮しているのか、そうは言ってもこうしようということにはならないで、足並みそろえちゃう。支援センターがこういってるので、みたいなことを言われちゃう。	児童相談所もそこにはないのか				児童養護施設の低位性	
42 筆者	最終の決定は児相ですよ？						
43 C	ですけど、児童家庭支援センターの反対の中では難しいのが現状です。						
44 筆者	Rプロジェクトの中にFSWの確立とありましたが、実際にどういこうとをやっているのか教えてください。						
45 C	先ほどからお話しているように、私が一手に何かを引き受けてという形ではなくて、基本的には保護者の対応であるとか、基本方針の策定のベースを作ったりするのはCWなんです。一番子どもと生活をとらして、話を聞いているので、ベースを作るのは当然と認るところなんです。ただ内容は私の方で、あるいは管理職で確認しないといけないですし。あととしては計画自体が妥当なのかという検証していかないといけないので、私がいいますけど。	保護者の対応であるとか、基本方針の策定のベースを作ったりするのはCW/管理職で確認しないといけない	親対応の最前線はCWが担当する。支援計画もCWが策定する/FSWはケースのマネジメントの一環として計画をチェックする	CWとFSWの業務分担	親対応はCW 計画策定はCW FSWはマネジメント		
46 C	問題が発生して、子どもだけが家庭から離れたわけですよ。子どもだけが施設に措置されて、一方で親は在宅。今までは子どもは施設にいてるわけなんですけど、親と施設のやりとりって子どもと事に関して、例えば次の外泊とか、最近学校でこうなんですものか、保育園と親みたいな感じがしたんです。保護者の課題へのアプローチは児相がメインだったのこういう感じだったんですけど。それを（児相と施設からの）二本立て、児家センからの3本立てにしよう、あるいは他機関というふうな形にしよう。これはプレッシャーをかけるわけでもなく、支援の網を広げていきましようというかたちですよ。親を支えるネットワークがあって、横のつながりがでてる。こうなってくるとCWだけでは難しいところですよ。	保育園と親みたいな感じがするプレッシャーをかけるわけでもなく、支援の網を広げていきましようというかたち	施設職員と子どもの親の関係は、施設内での子どもに関する事象一つひとつを話題にする感じ。子育ての責任を双方が分担している意識/親への支援の手が揃えることは、追い詰める目的ではない支援をサーフェイネットワークのように張り巡らせる目的	親と職員の子育ての協働意識/支援ネットワークの構築	子育ての協働意識 支援ネットワークの増設		
47 C	私の場合は、この問題はなぜ発生したのかという検証から始めていくんです。ここでアセスメントシート作成ということになるんですけど、なかなかうまくいかないですね。チェックリストはできるんですけど、保護者の養育能力はどうかとか、経済状況などなどはできるんですけど。それで家族の問題がアセスメントできるかどうかと決まってしまうんですね。最終的には人情的な親御さんとの話のなかから出てくるものかと思っています。いろいろな形でアセスメントして、あるいはいろいろな機関からの情報集約をして、これが問題だったんだろうと問題をひとつ挙げるわけですよ。ひとつどころかいくつもあるわけですよ。虐待の背景もいろいろあると思います。今うちも8割くらいが虐待を受けた子どもたちですが、虐待自体は大きな問題ではないと思います。むしろその背景の貧困や病気やいろいろなことがあると思うんですけど。そこをつきつめていって連携で支えて行く。	この問題はなぜ発生したのかという検証から始めて/チェックリストは出来るんですけど/それで家族の問題がアセスメントできるかという決断でそれではない/最終的には人情的な親御さんとの話のなかから出てくる	生じている問題の原因究明を最初にする/アセスメントツールは使うだけで成功しない/チェック項目をすべて埋めても家族を分析したことにはならない/客観的なスケールを超えて情動的な対話の中から必要な情報が出てくる	原因追究から始める/ツールの利便性とアセスメントのギャップ/情緒的対話の優位性	ツール利用とアセスメントのギャップ 客観的スケールに対する情緒的対話の優位性	ツールを使うメリットはなにか? ツールの問題か、使用者の技術の問題か?	

48 C	<p>そうしたときに、じゃあ連携して支援する内容はなにかな？を検証する。当然児相や児童センターとかいろいろなところと相談しながらですよね。こうじゃないかあんじゃないか、私はこう思うんだけど、うちから見るとどうだよとか、いろんな意見を聞いていて。施設がやるのもどうかなということがあるが、現状ではやっているという感じですね。最終的には児相に話してこういう支援が必要ですねというところになって。カンファレンスを開いて役割分担し、期間を定めて。当然その支援中にいろいろな問題が起きるので、また病気になることもか、外泊中にこういう問題が起きたとか、また刑務所入っちゃったとか、いろいろなあるんですけども、そういうことに対しても修正しながら変えながら取り組んで行って、設定した期間終了のところまで評価して、どのくらい達成できたか、できなかったところはどこで達成できなかったか検証して、もう一回最終的には家庭復帰、家族で生活しようということまで支援を続けていく、その一連の流れをファミリーソーシャルワークだと思ってるんですよ。</p>	<p>設定した期間終わったところで評価して、どのくらい達成できたか、できなかったところは何故達成できなかったか検証して、もう一回最終的には家庭復帰、家族で生活しようということまで支援を続けていく、その一連の流れをファミリーソーシャルワークだと思ってるんですよ。</p>	<p>支援計画に沿って目標の達成度合いと問題点を再評価するPDCAサイクルを通して最終ゴールまでの道をつけること。支援過程の全体像をファミリーソーシャルワークと呼ぶ</p>	<p>支援のPDCAサイクルファミリーソーシャルワークの意味するもの</p>	<p>支援のPDCAサイクルファミリーソーシャルワーク</p>	
49 C	<p>施設としては何を中心にやろうという気はないんですけど、本来は児相だと思ってるんですよ。ただFSWが配置された時点である程度、ある程度の役割を施設に任せたいという意思表示だと私は思っています。なので児相もOWが「こうしたいんです」って言ってもなかなか通じないんですけども、私が「こうしたいです」と言う通じたりするんですよ。そういう意味ではこのポジションができてよかったなと思ってるんですけど。</p>	<p>施設としては何を中心にやろうという気はないんですけど、FSWが配置された時点からある程度、ある程度の役割を施設に任せたいという意思表示だと私は思っています。なので児相もOWが「こうしたいんです」って言ってもなかなか通じないんですけども、私が「こうしたいです」と言う通じたりするんですよ。そういう意味ではこのポジションができてよかったなと思ってるんですけど。</p>	<p>施設が望んで中心役割を果たしているわけではない／家庭支援専門相談員制度導入が家庭支援を担わせたいという政策意図を表している</p>	<p>家庭支援専門相談員制度導入の政策意図</p>	<p>家庭支援専門相談員制度導入の政策意図の受け止め</p>	
50 筆者	個別に連絡するよりも？					
51 C	<p>内容は一緒なので困ったなと思うんですけどね。OWには私を利用してもらえばいいと言っているんですけど。施設の中にもOWがいて、SWがいて、管理職がいて、心理がいたり、ここでの連携をつくって、ここが一体になっていることが大事。このつながりとか、この部分とか、どこかで不具合があるとうまく行かなかったりするんです。一番大事なのは情報の共有だと思っています。今何が起きているのか、昨日どんなことがあったのかの情報がきちんとか共有されていることが何より重要だと思います。私の施設内での役割はそういうことだろうと思っています。だからOWから「児相からこういう連絡があった」と私が聞けば他の管理職につなげて行くし、「児相から連絡あったことお母さん知ってるの？」「いや知らないです」ということであれば連絡しますし、それぞれ進捗状況に差があるといけないわけじゃないですか、それぞれが認識していかないといけないので、ここをなるべく平均的に足並み揃えて行くようにすることがソーシャルワーク的な機能のひとつかなと思います。</p>	<p>ここでの連携をつくって、ここが一体になっていることが大事／情報の共有／なるべく平均的に足並み揃えていくようにすることがソーシャルワーク的な機能のひとつ</p>	<p>施設内での職員間の連携ができ、目標を共有し一つのゴールに向けて同じ働きができることが重要／職員間、関係機関間で情報量に差が出ないよう管理することがFSWIに課された専門的な役割のひとつ</p>	<p>機関内部での連携・情報レベルのコンテンツロール</p>	<p>施設内の職員連携 ネットワーク内部の情報コンテンツロール</p>	



52 筆者	FSWはマネジメント的な役割が大きいのですか？				SWの役割はケースを管理すること			
53 C	そうですね。SWはケースマネージャーですからね。		SWはケースマネージャー			SWの基本業務	SWはケースマネージャー	
54 筆者	組織の内部でのマネジメント、他組織との関係のマネジメントと両方やっているわけですね？							
55 C	そうですね。							
56 筆者	施設から家族への支援は？							
57 C	一つは、一番大きいのは、1回子育てが破綻しているわけですから、家族の中で、そうすると親が自信を失っている可能性が非常に高い。子育て私にはできませんとか、また叩いてしまいませんか。施設の専門性の一番大きい部分はケアワークなので、その部分で「こういうやり方ありますよ」とか「お母さんまわがってないですよ。ただこうしたらもっと案にできるかな」という話をCWから伝えてもらう。ということが有効です。	親が自信を失っている可能性が非常に高い／施設の専門性の一番大きい部分はケアワーク		親は子育てに失敗した落伍者だという自覚を持っている可能性がある／施設は親が苦手としている子どものケアを専門としている	親の自信喪失 施設はケアが専門	親の自信喪失 専門性としてのケアワーク		
58 C	生活上の課題、金銭的なことや病気のことや私たちが正直専門外の部分です。むしろ子育てのデクニツクや心構えを伝えたり、客観的に見て「大丈夫だよ、できてよ、やってみよう」という話をしながら、親としての自信をも一度つけてもらったりとか。支援して行くにあたって、外泊の中で一緒にご飯つくってみようとか、最近ホットケーキいらないなら焼けるようになったので一緒に作ってみてとか。すごく上手でした、と帰ってくるとその後にながっていきまよね。その部分が施設としては一番大きいかなと思います。	子育てのデクニツクや心構えを伝えたり／親としての自信をも一度つけてもらったり		親が苦手なケアのスキル、子どもとどのように関わればよいかの伝達、継承／親にやり直せるという意識を持たせる	子育てスキルの伝達 親の自信回復支援	子育てスキル・心構えの伝達 親の自信回復		
59 筆者	そういうことは昔からやっていたのでは？							
60 C	そうですね。あんまりそこをCWは自分たちの専門性に気づいていないことが結構強かったんです。	CWは自分たちの専門性に気づいていない		職員が自分の仕事を無自覚に行っている	専門性に無自覚なCW	専門性の無自覚		
61 筆者	無意識に専門的なことをやっていたのですね							
62 C	そうですね。「私たちは家政婦みたいな存在です」みたいなことを、特に古くからやっている方なんかは。そうじゃなくて、それは専門性ですよという話をして、それが一番CWの強みじゃないですかと、普段実践子どもたちを見て育てているのは私たちなので。そういうことを伝えたりとか。	家政婦みたいな存在／それは専門性ですよという話を		誰でもできる労働の担い手／FSWはCWに業務の専門性を自覚させる働きかけをする	非専門職の自覚 専門性の自己覚知を促す	専門性覚知への促し		
63 C	あとは親の苦勞に共感できること。「大変だよなあの子、あの言い方はないよね、確かに毎日あれだたら参っちゃうよね」みたいなところを親と共感し、その上で「私たちこういうふうにしてるよ、こういう言い方したらわかる時あるよ」とか、そういう話を。そうすると親御さんも「大変なんですほんとに参っちゃうんです」と言いながら。「でもだんだんできる様になってきましたよ。学校もちゃんと行ってますよ」なんていうと、「ほんとですか？」とか言ったりして。	親の苦勞に共感できること		CWの強みは同じ子どもを育てて大変さを共有できること	親への共感姿勢	親への共感 苦勞の共有		
64 筆者	普通の家庭で児童センを利用して受けるようなレクチャーと同じような感覚でしょうか？							

65 C	そうですね。当然前から児家センが関わってあればそこと一緒にだと思うし、関わってなければ、一から児家センということになる。親のなかには色々な人が家に入るのはいやだという人もいらっしゃるから、そこのつきあいはほっぽりにしておいて、こちらの方で。当然そこは児家センとも確認しながらです。							
66 C	子どもや親と近くに頻繁にやりとりをして、子どもとはいも生活しているわけですが、焦りだとか悩んだとか迷いだとかをダイレクに受け取るので、そこをこういう機関がちゃんと認識しているのかという投げかけをできる。子どもを現相に呼び出して聞き取りをしますというも本音をしゃべらないですよね。「中学卒業まで帰らなくいいと言っていましたよ」と言われても、日々の生活では違う表現をしたりする。もう一度考え直して欲しい、もう一回子どもの心を聞き取ってくれないかと促すこともできます。	焦りだとか悩んだとか迷いだとかをダイレクに受け取る／機関がちゃんと認識しているのかという投げかけ	施設職員は常に子どもに接しているのでも子どもの本音を知り得る／関係機関が子どもの本心を受けとめているのか確認する役割を負う	子どもへの親密性 子どもの本音の感受 関係機関の受信力のチェック	子どもの本音の感受 音受信の促し			
67 C	あるいは身体症状に出ていますよ。去年家庭復帰したケースでも、子どもはどうしても帰せないと、母親の元に帰せないというケースがあったんですが、ただその子が幼稚園でも身体症状、チェックが出たり、「死にたい」といってペランダから下を見ていたりしたことがあったので、これももうそろそろ限界じゃないかと投げかけして、その投げかけをもとに、そのケースは児家センがやってくれて、とんとん拍子で家庭復帰が決まったケースです。そういう意味では子どもが本当になにか訴えたいことをアドヴァケートして行く役割じゃないかと思っています。	子どもが本当になにか訴えたいことをアドヴァケートしていく役割	子どもが自ら言えない本音を、子どもに代わって関係機関に伝えていく役割	本音の代弁役割	子どものアドボケート役割			
68 C	制度上の難しさ・課題…うーん。どうしても施設で下に居られるところあるんですよ。いろいろなところから。施設は子どもの面倒見てればいいんだといわれたことでもあります。私たちが考えてきたことを主張しても仕方ないので、計画の妥当性、方向性を私たち以外の機関とも相談していかないといけないんです。福祉関係の人って医療機関の人に弱いんです。ドクターがこう言っていると聞くとそうなる。CWは心理にも弱い。心理職がこういっていると聞くとそのとおりになってしまふ。そういう意味ではまだ未熟なんです。	施設で下に見られるところある／計画の妥当性、方向性を私たち以外の機関とも相談していかないといけない／福祉関係の人って医療機関の人に弱い	関係機関に序列がある／支援計画の妥当性を関係機関と共有する必要性／関係機関間の序列 自ら他の専門職に従ってしまふ	施設の発言力の下位性 計画妥当性の説得必要性 専門職意識の下位性	関係機関間の序列 施設・専門職意識の下位性 説得力獲得の必要性		どのような理由で序列が生じるのか？	
69 C	制度が始まってだいぶ経ちますが、まだSW的な発想に、考え方がなっていない。そう言われたからそうしますってしまふ。本来ならこういう意見があるという意見があるという専門家の考えをまともにとめて、SWがどうするか、そういう発想にならないか、どうしても言われたとおりにという基本的な発想で難しいなと思う。逆に言う方は言う方で、言えはそのおりや言っている発想があるのかと思う。施設がごちゃごちゃ言ってるけどどうだから、みないな。	まだSW的な発想に、考えがなっていない／いろいろな専門家の考えをまともにとめて、SWがどうするか、そういう発想にならない	多様な意見を調整するといふSWの専門性を発揮できない／多様な意見の整理、取捨選択をできる専門職になるべき	SW的発想の不足 意見 調整機能の不足	SW的発想の不足			
70 筆者	押し切られてしまふ？							
71 C	はい。ドクターがこういっているから無理ですと児童家庭支援センターにいわれたり。そうじゃないんじゃないかと思うんですが。							

72 C	一番はそういうところがあって、二番は行政機関との交渉が難しい。1番は児童相談所です。2番目は児童家庭支援センター。(難しいというの?)柔軟性がないというか。どうしても最近、一時期よりは家庭復帰に慎重になっているんですね。	柔軟性がない	行政の対応が硬直的で 融通が利かない	行政の対応の硬直性	行政の対応の硬直性
73 筆者	事故があっけいはいけないということですか?				
74 C	そうです。去年の事故以来そう慎重になっているんですね。それまではわりとイケイケだったんですよ。				
75 筆者	児相の年間目標とか聞きますね				
76 C	ノルマがあるんじゃないかというくらい、ほんとに。それが今慎重ですよ。なにがあるかという計画見直し、外泊中止。外泊中止のケースが最近よくありますね。外泊中に問題が起きたとか、家庭復帰を目標に外泊を積重ねてきたんですけど、子どもがちょっと学校で問題を起こしたとかいうとすぐ外泊中止。事故防止が先にたつのかなと思う。	事故防止が先に立つの かな	子どもと家族の幸福よりも 非難を恐れる気持ちの方が 優先される	児相の自己防衛性の優 先	予防発想の優先
77 筆者	児相と同じゴールを見ているのでしょうか?				
78 C	うーん、ケースにもよるんですけどね。あるいは児童福祉司にもよるんですけど。そこが大きいかもしれない。非常に優秀な方、すごくいい働きをしてくださる方もいて、そういう方とは一緒に仕事をしたい。楽しいなどやがりがいを感じるんですけど、難しさを感じる方の方が多いです。制度上っていうとはずれますけど、現状はそんな感じ。結局子どもだけが大きくなってっちゃう。	難しさを感じる方の方が 多い。結局子どもだけが 大きくなってっちゃう	関係機関の個人差が大 きい。協調しにくさを感じ る人が多い。支援方針 が決まらないうちに子ども が成長してしまう	関係機関との協調しにく さ。放置される子ども の失敗	協調困難性 子ども優先 視点の不在
79 筆者	子どもには入所時に期間を説明していますか?				
80 C	はっきりとは言えないところもあるのですが、はっきり決まっている子はいるので、例えば入院期間とか、そういう子には話をしますけども、そうじゃない子については、「お母さんと一緒に暮らせるようになるまでがんばろう」というところでもちよと濁すとか。どうしても子どもは期待が高まってしまうし、子ども同士の会話で「僕は来年度に帰るから」とか出てくるので。やっぱりそれが実現できなかったときに子どもが不幸になる。小2で帰るんだと言っておきながら去年18で出て行った子もいますから。その子に責任はないです。でもその子が背負い込んで出て行かなくてはいけません。	子どもは期待が高まっ てしまう。その子が背負い 込んで出て行かなくてはい けない	家庭復帰できるかどうか 不明瞭な話をすると子ども もは帰ると信じてしまう 。家庭復帰調整の失敗 経験を抱えて子どもは退 所しなければならぬ	不正確な情報子どもに 与える影響。不適切な経 験の供与	不明瞭な説明が子どもに 与える悪影響。失敗経験 の負荷
81 筆者	予定していた外泊がなくなるのは子どもにとってもショックでしょう				
82 C	そうですね。なのではっきりとは伝えないケースが多いです				
83 筆者	一緒に暮らせないのはどんなことが障害になることが多いですか?				
84 C	うーん。私は一番突き詰めていけば、親の夫婦間の問題。	親の夫婦間の問題	家庭復帰を妨げているの は子どもや親子の問題で はなく、家族構成員間に 課題がある	ネックとしての家族間の 問題	夫婦間問題
85 筆者	夫婦間の問題?				



101 C	やっぱりわが子ですから。やっぱり親としては当然子どもにはこういうことができて欲しいとか、こういう大人になってほしいとか期待がある。それはみんなそうだと思う。ただそれらがうまくやってくれないとかそのとおりにならないと集りが出たりイライラしたりなんてこいつはみたいところがあるのかと思っています。	親としては当然子どもにはこういうことができてほしいとか、こういう大人になってほしいとか期待がある	親はあってほしい子ども像を持っている	あるべき子ども像の保持	理想の子ども像への軌着	
102 C	だから子ども自身の努力でどうにかできることはした方がよい。内容が適切な範囲ならですけど。例えば小学生なのに筆が使えないなら、それは社会一般から見ても少し練習しようとか。そういうところで、子どもが努力して家庭復帰につながることもあるんですけど、親との関係だけじゃなくて。そういうところは私たちの方で伝えて、練習させて。	子ども自身の努力でどうにかできることはした方がよい	親の期待に対して応えることが可能な部分は応えようと関係が改善する	子どもの変化による関係改善の可能性	子どもへのアプローチの可能性	
103 C	ただ子どもにも原因があることってそうそうはないんです、こういった施設に子どもが来ざるを得なくなるような状況って。そこは見方を変えてみるとか、クールダウンして客観的に見てもらうことが大きいかな。	子どもにも原因があることってそうそうはない／見方を変えてみるとか、クールダウンして客観的に見てもらう	子どもの変化で改善することは稀／親の子どもへの視点を変換する 子どもへのまなざしを変える	子どもへのアプローチの期待薄感 親へのアプローチの優先性	親へのアプローチの優先	
104 C	あとは親子がすごく密着しちゃって一つになっていた家族もあるんです。子どもが親の意思に振り回されていた。親は「この子は私がいけない何もできない」と言っていた。そこを離してあげると子どもは成長したりするんです。今まで蓋があったり、ましてや集団生活の中で大きい子の見よう見まねで。良いことだけでなく言葉遣いが悪くなったりもあるんですけど。でも成長するんです。そういう意味では子どもが成長して喜ばない親はいない。	子どもが成長して喜ばない親はいない	子どもが変化する親の刺激になる 子どもの成長は親の喜び	子の育ちによる子育ての喜びの取戻し	子育ての喜びの再発見	
105 C	(支援計画)立てることが困難な計画は実現が難しいと思うんです。あまりにも無理な計画を立てると、どこかでひずみが出てきますよね、計画自体に。ここでこういつてのになんでこうなのかとか、この目標達成させるのにこの支援だけでいいのかなとか。	立てることが困難な計画は実現が難しい	支援計画の見通しが立たないことは達成も困難	想像のつかない支援は達成不可能	見通しと支援達成の連動性	
106 筆者	計画はCWが立てるのですか？					
107 C	そうですね、基本的には。それを私と主任の方で中身を確認して、施設で共有。うちは全職員が検討することになっているので、会議の1週間まえに全職員に閲覧するようにして。会議で意見を出します。相当時間かけてやるんですけど、会議自体は。					
108 筆者	1回の会議で何ケースくらい？					
109 C	GH入れて8ホームあるもので、4回に分けてやるので1回2ホーム、そうするとだいたい12〜13ケース。長い時は4〜5時間やっています。1年に1回しか立てていないので、施設によってはよちよち見直したりとかあるみたいですけど。そういう意味では非常に大きな計画なので。					
110 筆者	この1年間どうするかということですね？					

111 C	1年間どうするかでもだし、いつまでにどうするかを上げないといけ ない。「家庭復帰を目指す」とか、「可能性について見極めていく」 なんて表現を使うとそうとういことになりまね。いつまでもこど うするか。明確な目標を立てていかないと。そうしないと支援内 容がぼやけたものになってしまいますので。	明確な目標をたてていか ない	大雑把な計画ではなく、 詳細に明白な目標を立て るべき	ケースのスケジュール化 支援過程の可視化	支援過程の可視化	
112 筆者	資料にあったものが支援計画の書式ですか？					
113 C	それはさらに具体的な計画です。今言いたいままにどうするとい うのは自立支援計画です。資料の書式はこの1年何をやるのかと いうこと。年度初めに優先順位を立てて、今年度家庭復帰さ せましようということになれば必ずこれを立てなくちゃいけないもの です。自立支援計画ってあまり具体的なことが書けないので漏れ が出てくるんです。支援計画に沿ってやっているつもりでも、これ がどうだったっけ？とか。1行で書いていることを、具体的にこの目 標をどう達成させるのかとか、もう少し細かい計画が欲しいときに使 います。					
114 C	これはもう一回見て行くわけですが。家庭復帰について、アセスメン トについて、インテークについて、もう一回現状を見ていく。この中 で具体的に何が課題か考えてみましょうということやっていく。 例えば今年度家庭復帰させようとしているの中3の子がいるんで すが、ここに来るまでに貧困とか父親からの暴力とかいろいろあつ たんです。その子を家庭復帰させるんですね。ほんとにごちゃご ちゃとしてるんです。何が課題か、何を支援するかをもう1回ア セスメントしたら、要は親の養育能力の問題ももちろんあったんで すけど、一番は母親の精神疾患だったんですが、子ども自身の社 会性が非常に幼かった。母親と共存関係にあればいいんじゃない のかな。父親の暴力は母親に依存する子どもに対して怒ってい いた。父親が望んでいたのはそれほど高いことではないということが 聴きとりで分かったんですけど、高校行って、できれば大学行っ て、それほどいいところなくてもいいから就職して欲しい、ただそ れだけだった。このままでは無理そうだしという父親の不安からだっ た。だからここで「まず君は勉強しよう、高校入ろう」と話をして、中 卒と同時に家庭復帰させようと思っています。塾も通って。だいが マシになってきた。当然外泊もさせながら。冬休みもほぼまるまる 外泊させて自宅から冬期講習に通って、そういった中でいろいろ 衝突はあったんですけども、親も見る目が変わってきて、子どもも 「あの親父無理だよ」とかいいながらきっちりやってきて、ごちゃっ としている課題をもう一回整理して焦点を絞っていく。	ごちゃっとしている課題を もう一回整理して焦点を 絞っていく	複合的で絡み合った課題 の整理を行う・優先順位 をつけ、集中して取り組 む課題を明確化していく	原因の解きほぐし 課題 の整理 優先課題の焦点 化	課題の整理・焦点化	
115 筆者	いつまでに何をということですね					

116 C	<p>そうです。いつまでに何をするか、一つの課題について、子どもの社会性が低いとか、(票)ここは実施主体なんです。例えば施設かもしれないし、児童相談所かもしれない。場合によっては保護者かもしれないし、誰がですね。ここは段階。第1段階第2段階第3段階。期限を設定して、いつまでに、どういう目的のために何をするか。学力の問題であれば学習ボランティアをつけるとか、冬期講習に何日通わせるとか。一方で生活課題についても、夜型の生活から規則正しい生活に変えるとか。本当はもっと細かいんです、今みたいな言い方だとダメなんです。規則正しい生活をさせる、そのために何をするか？そのくらい細かい感じが、</p>	いつまでに何をするか？ そのために何をするか？ そのくらい細かい感じで	計画はゴールだけでなく、プロセス全体のタイムスケジュールも明確にする	支援過程の俯瞰 プロセスのスケジュール化 段階的ゴール設定	プロセスの俯瞰視点 段階的ゴールのスケジュール化	
117 C	<p>立てるのはすごく大変ですが、これのいいところは、そこまで細かく立てておくと、何をしたいかチェックしやすい。達成したかしていないかというところで評価しやすい。第一段階で支援目標に上げていて達成できないところは第二段階に即時乗り越えられるわけですね。そうして最終的な目標に近づいて行きますよというもののなんです。</p>	何をして何をしたいのか チェックしやすい	計画が明白だと、達成状況の検証ができる	PDCAサイクルへの貢献 支援の検証	プロセスの検証	
118 筆者	計画はいつまでに埋めるのではなく、随時埋めていくのですか？					
119 C	基本的にはロードマップとしては最後までつくっておくんです。					
120 筆者	積み残した分を繰り越す感じで？					
121 C	<p>そうですね、評価を入れると同時に書き換えて行く。課題ごとに立てて行くんです。この課題が5つも6つもあってもいいや、やっぱり難しいですね。考え直したほうがいいんじゃないかと。それはアセスメントが間違っているのか、あるいは家庭復帰がまだ時期じゃないのかもしれないという判断にもなる。</p>	この課題が5つも6つもあってもいいや、やっぱり難しい	多数の課題が羅列される 支援計画は、家庭復帰までの短期計画とはみなされない	重点課題焦点化の必要 家庭復帰判断のポイント	課題数と復帰判断の相関	
122 筆者	CWの子どもを見る目が問われますね					

123 C	<p>そうなんです。ただやっぱり私たちのいいところは1人で子どもを見ているわけではなくチームでやっています。施設集団として相当数の職員いますから、いろんな専門家の目で見て子どもを評価するっていう発想があるの、「私のときはこうですよ」とかいろいろ意見を集めて、こうやればこの子でできるんじゃないのとか、総合的にみてどうなのかを評価してあげる。CWだけではなく私やセラピスト、あるいは学校の先生にもお話を聞いたりしますの、そういうところではこれができるのか、できないのか。子どもが得意なこととは分かるんですけど、致命的にできないのか、本当にできないのか、この間やってましたよ」ということになれば、希望の糸をつないでいく。そこからつづいていくこともあります。「おうち帰ってお母さんと一緒にできる？」とか。私からすることは稀で、CWから話んですけど。職員も子どもを見る目をそうやって鍛えられていくものだと思います。普段生活を共にしているなかではどうしても親と一緒にできたりするわけですけど、一歩引いてこの子が家庭に帰るために何が必要なんだろうとか、本当に必要なのかなという目で見ていくと変わっていくと思います。あるいはすごい冷静に、これは私に怒ってるんじゃないかな、子どもがキレてたりしても私にキレてるわけじゃないとか。</p>	1人で子どもを見ているわけではなくチームでやっています／いろんな専門家の眼で見て子どもを評価するという発想／職員も子どもを見る目をそうやって鍛えられていく	複数の専門家が子どもに関わる強みがある／多様な視点、異なる専門的視点から子どもを総合的・立体的に理解するという考え／子どもも分析能力を伸ばしていく	子どもへの複合的視点 立体視／専門的視点の涵養	複合的視点 立体的分析 専門的視点の涵養	
124 筆者	家庭復帰させる子どもの優先順位の決め方は？					
125 C	<p>はっきりしたスケールはないんです、正直に言えば。それも問題なんですけど。例えば入園前に、この子はこの時期に家庭復帰目標でと言っていたようなケースは、</p>	はっきりしたスケールはない	家庭復帰に向けて重点的に働きかけるかどうかの峻別に明確な規定はない	家庭復帰強化群の峻別 既定の不在	強化群峻別規定の不在	アセスメントツールと復帰判断との関係は？
126 筆者	そろそろですね、					
127 C	<p>そうですね。言っていたとおりに順調に進んでいけば復帰にという話になるし、あとは外泊や交流状況をみて、いけるんじゃないの？／そんなに待たなくても、ということがあれば。それはもう総合的に判断してという形になるかな。</p>	いけるんじゃないの？／総合的に判断	職員の直感的判断／基準に沿うのではなく全体を見て判断する	直感のきっかけ化／測定 にやらない判断	直感からの総合的判断	
128 筆者	そういう話はCWからあげるのですか？					
129 C	<p>これがですね、そうなんですけども、CWだけではほとんど客観的な判断が難しい場合もあるわけです。そういう意味では私と主任が入って、「何が課題でこの子帰れないの」という投げかけをして、本当にそこまで待つ必要があるのかということをもう一度考えて、そこできちんと論理的にこれとこれが解決していません、解決にはあと1年では足りませんということであればなほほどということになりまして、「まだ無理じゃないですかね」というレベルだと、「もう一回考えてみよう」ということになってくるんです。そういうことを突き詰めていって、やはりタイミング的に今じゃない？今年じゃない？という話になると、順位が上がってくる。</p>	CWだけではほとんど客観的な判断が難しい	CWは子どもを主観的に見がち 入り込み過ぎる客観的に家庭復帰の時期を判断できない	CWの主観傾向 入り込み ケースとの距離の不 足	CWのケースとの密着性	
130 筆者	CWがすべての子どもに明確な援助目標を持つように変化したようですね					
131 C	それはありますね。それは確かにありますね。その意識はすごく変わってきた。	意識はすごく変わってきた	職員全体の意識の変化	援助目標の意識化	援助目標の意識化	



132	筆者	変化は最近のことですか？	うちの伝統としては家庭的ということはいいよから言ってきたので、それは伝統として受け継ぎつつ、それに加えて家庭に帰す試み	伝統的な家庭的養護を継承しながら、家庭復帰への試みを開始した	伝統の継承 追加的試み 家庭復帰への挑戦	伝統への上乗せとしての 家庭復帰支援	
133	C	数年…先代の園長先生の考え方が非常に強いかなと思います。3年以内と言いつつ先代の園長がソニーワークの発想を持ち込んだかなと思います。それまではケアワーク中心で、それはうちの伝統としては家庭的というところは最初から言ってきたので、それは伝統として受け継ぎつつ、それに加えて家庭に帰す試みをやっています。					
134	筆者	時代に先駆けてとり組んでいる施設ですね					
135	C	FSWのスキル、他の施設でもっと新しい取り組みをされているところもありますし、SW同士の研修会でこれはすごいなと思うことも結構あります。そういう意味では自分はまだ出遅れていると思ってるんですけど。					
136	筆者	FSWどうしの横の繋がりは結構ありますか？					
137	C	児童部会の中に専門職制度委員会があって、私もそこに所属しているんですけど。2ヶ月に1回くらい会合があったり、研修会も年に2回くらいあったり、そういうところに出て、私自身も個人的に以前従事者会という施設の職員の運営委員をやっていたので、その時に一緒にやっていた人たちが、結構いままFSWをやっているんですね。それは結構心強いというか、なにかちょっと困ったことがあったりすると、電話して聞いてもらったり、ちょっと見せてくださいますよとか。	結構心強い	FSW同士の横のつながり、連帯感がある	FSW同士の連帯感 相談 できる感	FSWの連帯感	
138	C	あとはケースの中でも措置変更で来ているものとか、いったん家庭復帰になって再措置で来ている子とかいると、その施設のFSWに連絡とって、そちらでの状況はどうでしたかなんて。そうするとびくびくされる方もいるんです。やっぱり再措置になったことは元の施設には連絡行かないので。					
139	筆者	同じ施設に行くことは？					
140	C	ないです。児相の方針としてはいないです。必ずしも空いているわけではないということもあると思うんですが。そういう時は専門職同士で連携とって。	専門職同士で連携をとって	施設間のつながりで情報共有する	インフォーマー的な情報共有	FSWの連帯による情報共有	児相を介さないのか？
141	C	私はFSWの制度ができたときからのSWではないので、最初からやってきた方たちで本気で試行錯誤で、何もかも状態が国からの通知一枚で始めた方たちは開拓してきた方たちなので、その人たちの話を聞く参考になるし、勉強になる。	最初からやってきた方たちで本気で試行錯誤	FSW制度導入時から担当している人は実践の中から組み立てている	初期FSWのフロンティア性 実践の積み重ね	初期FSWの実践的貢献	
142	筆者	まだFSWを置いていないところも多いようです。					
143	C	兼任が多いですね。もうそろそろ兼任を認めないことになるらしいんですけど。施設の中には2代目3代目というところもありますよね。それすごいなと思うんです。施設の方針で、色々な職員に経験させるところはわりと早め、2年くらいで入れ替わったりしている。					
144	筆者	こちらが専任で置いているのは施設長の方針ですか？					



155	筆者	常に仕事が頭にあるのでしょうか？							
156	C	切り替えがうまくないと続かないのかな。当然残ってはいまずけども、スイッチをかけるというか。独身時代には飲みに行ったりして切り替えたり、ビデオ一本借りてきて切り替えたり。スイッチの切り替えを学んでいくのかな。今は自分の家族がいるので、自分の子どもと遊んだりすると忘れて、子どもが小さいので私自身も生活に追われるところもあるんですが、そういうなかで自然に忘れてたりという感じですかね。やっぱりプライベートが充実していいとむずかしいのかな。のめりこもると思えばいくらでものめりこめる仕事なので。ただそうなってくると…それが全てになってしまうので。	切り替えがうまくないと続かない	職務とプライベートの線引きができないほどのストレスがある	プレッシャーへの対処 没頭しすぎない パーミアウト予防	バーミアウト予防			
157	筆者	同居ではないゴールを設定して3年間で再統合ということもありますか？							
158	C	あります。							
159	筆者	大きいお子さんですよ？							
160	C	基本的にはそうなりますよね。あるいは里親さん…里親さんに行くようなのはもともとと統合する家族はなかなかいないんですけど。							
161	C	ただ子どもの中で自分の生い立ちを整理しておく必要があるのかなと思っています。一緒に住めない、例えば遠方に住んでいて、病氣ですとか、一緒に住むことは適わないし、交流することも難しい、けれども自分はこの誰から生まれてどういう生活を経て自分は今ここにいるのかということとをきちんと整理してあげることと再統合かなと思ったりするんですよね。そのもやもやを抱えたまま社会に出すと子どもは間違いないでダメになるので、つまづくので、あなたにはこうやって生まれてきて、いろいろな人に変えられて、という話を。	子どもの中で自分の生い立ちを整理しておく必要がある／どういいう生活を経て自分は今ここに居るのかということとをきちんと整理してあげることと再統合	子ども自身が出生から今日までを整理し受け入れることが必要／途切れている記憶や複雑な状況を解きほぐし、生い立ちの整理を支援することも家族再統合の一部	複雑な生い立ちの整理 子どもの自己受容 家族再統合の手法	家族再統合としての生い立ちの価値づけ			
No.	発話者	テキスト	〈1〉テキストの中の注目すべき語句	〈2〉テキストの中の語句の言い換え	〈3〉左を説明するようなテキスト外の概念	〈4〉テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	〈5〉疑問・課題		

ストーリーライン	<p>R学園では毎年度初めに家庭復帰目標による子どもの峻別・優先順位の決定を行い、家庭復帰支援強化する子どもを選別する。選別に際して強化群峻別規定の不在のため、実際には直感からの総合的判断をしている。従来の家庭的養護に加え、伝統への上乗せとしての家庭復帰支援を開始した。家庭支援専門相談員制度導入期は、初期FSWのマネジメント優先性により家庭介入よりもケース管理の視点が強かったが、C氏がFSWになってからは特に家庭支援の意識化に力を入れている。現在も基本的には親対応はCW・計画策定はCW・FSWはマネジメントというように、家庭復帰支援はCW、ケース管理はFSWの業務分掌がある。</p> <p>家庭復帰支援にあたっては、短期間で家庭復帰させると強い意志を持って退所時期の明確化を行い、支援全体像の意識化を行う。なんとなく帰せないのではなく、親子分離の原因除去への発想転換をし、一つひとつの支援意図の自覚を職員に求める。こうした方針の背景には、児童養護施設はテンポラリーな生活場所であり、生活は「家族は家族で」が根本という施設の代替性の認識がある。しかし、子どもを直接ケアするCWはCWのケースとの密着性のためにケースを客観視できにくい。そこで複数の職員が複合的視点から子どもを立体的分析できる強みを生かし、職員の専門的視点の涵養を行っている。</p> <p>C氏は児童相談所との情報共有は密に行っているとは自認しているが、一方で連携相手の個人差による連携・目標共有の困難さも感じている。それは関係機関間の序列のため、C氏の発言が重視されないという、児童養護施設の低位性による。施設職員自体も自らの施設・専門意識の低位性を甘受しているところがあり、施設の専門性の説得力獲得の必要性を感じている。また行政の対応の硬直性・子ども優先視点の不在・予防発想の優先のために、協働困難性を感じている。それでもうまく機能すれば有力な連携機関への期待も持っている。</p> <p>C氏は児童養護施設には専門性としてのケアワークがあると考えている。親への共感や同じ子を見ていて苦勞の共有できるのがCWの強みでもあり、親とCWの間には子育ての協働意識が芽生える。親に接して感じるのは親の自信喪失であり、親の自信回復を促すために子育てスキル・心構えの伝達を行っている。しかしCWは自らの専門性の無自覚のため、支援を意図せずに行う。そこでC氏はFSWとしてCWに専門性認知への促しを行い、援助目標の意識化を促している。</p> <p>家庭復帰を困難にしている原因としては、根底に夫婦間問題がある。特に複合的な不利状況が重なっている家庭ほど困難である。これらの問題の根本解決はFSWには不可能で、C氏はFSW業務の周辺性・FSWの無力感を感じている。そのため支援ネットワークの増設によって多角的に支援の輪を広げることが重要だと考えている。児童養護施設は家庭の問題に対し、周回の支援、親の支持的機能しか果たしえないが、それは少し差し止めた支援である。具体的には、親は子育てから一時的離脱を許されることによって子どもへのまなざしの転換が起こり、我が子の新発見をすることになる。理想の子ども像への執着を捨て、子育ての喜びの再発見ができる。こうした変化は主に子どもの成長によってもたらされるため、家庭復帰支援には子どもへのアプローチの可能性もあるが、多くは親へのアプローチの優先がされる。</p> <p>C氏はケースのアセスメントにあたり、アセスメントツールを用いるが、ツール利用とアセスメントのギャップがあると感じている。むしろ客観的スケールに対する情緒的対話の優位性があるのではない。時にはFSWの連帯による情報共有も行う。それでも支援のプロセスの俯瞰視点をもち、支援過程の可視化を行うことは重要である。なぜなら見通しと支援達成の運動性、課題数と復帰判断の相関があるからである。そのため、ケースの持つ課題の整理・焦点化、段階的ゴールのスケジュール化が不可欠である。また計画に基づいて支援が進行しているか、プロセスの検証も絶えず行う。こうした支援のPDCAサイクルがファミリーソーシャルワークであるとC氏は考えている。このサイクルが功を奏するためには施設内の職員連携が不可欠であり、関係機関間のネットワーク内部の情報コントロールも必要になる。この役割を行うのがFSWであり、SWはケースマネージャーと考える所以であるが、またSW的発想の不足を反省している。</p> <p>全ケースで早期家庭復帰を目指すのが、不明瞭な説明が子どもにも与える悪影響を考慮して、子どもには不意な約束はしない。子どもが失敗経験の負荷を負って自立しなければならなくなるからである。高齢入所児は親子関係修復の時間不足になる場合もある。しかし、家庭復帰に達しなくても、C氏は家族再統合としての生い立ちの価値づけは必ず行っている。</p> <p>FSWは直接ケアを介した子ども理解により、子どもの本章の感受ができる立場にある。面接の前提としての関係構築ができていなければ、子どもの非言語メッセージの感受もできない。生活を共にしていない関係機関に対しては子どものアドボケート役割を通して本章受容の促しを行う。</p> <p>制度導入時は何事も手探りで、初期FSWの実践的貢献があったと感じるが、今日では横のつながりもできてFSWの連帯感がある。C氏は兼任・専任のいずれの立場も経験したことから、FSWの兼任の不可能性を痛感している。C氏は児童養護施設が家庭復帰支援を積極的に行うべきとの家庭支援専門相談員制度導入の政策意図の受け止め方をしている。各方面からのプレッシャーも前向きに受け止め、FSWへの期待と意欲を感じている。しかし、ケースにのめり込み過ぎないようプレッシャーへの対処術、バーンアウト予防は必要である。</p>
理論記述	<p>27. 家庭復帰強化群の峻別を行うが、基準は存在せず総合的に評価する</p> <p>28. 家庭的養護の伝統への上乗せとして家庭復帰支援を行う</p> <p>29. 支援計画の策定、親対応はCW、ケース全体のマネジメントはFSWという業務分掌がある</p> <p>30. 家族は家族で生活すべき、施設はテンポラリーな生活場所という認識がある</p> <p>31. 短期での家庭復帰を目標に、どうやって課題を克服するかという視点を職員が共有する</p> <p>32. チームで複数の視点から子どもを把握し、職員の子どもの目を見る目を涵養する</p> <p>33. 関係機関間の序列のため、他機関との協働しにくさを感じている</p> <p>34. 児童養護施設の専門性としてのケアワークのスキルを親に伝達し、自信の回復を促す</p> <p>35. FSWはCWにケアの専門性を自覚させる</p> <p>36. FSWは家庭復帰を妨げる根本原因を解決できないため、周辺性、無力感を感じている</p>

	<p>37. 親支援は「少し楽」を目指す それは子育てから一時的離脱し、子どもを見るまなざしに変化が生じて我が子を新発見することによる</p> <p>38. 見通しの立たない支援は達成できない 課題の整序・焦点化を行い、段階的ゴールの設定、目標達成の評価の一連のPDCAサイクルを通してファミリーソーシャルワークを図る</p> <p>39. 家庭復帰に至らなくても、家族再統合としての生い立ちの価値づけを行う</p> <p>40. C氏は制度導入への期待と、それに応えたい意欲を感じている</p> <p>41. 生活を共にする施設は子どもの本音を感じ受でき、他機関にアドボケートする役割を負う</p> <p>・復帰目標の子どもの峻別・復帰の判断をめぐるアセスメントツールと職員の間感の関係</p> <p>・関係機関間の序列の発生原因と解消方法</p>
さらに迫及すべき点、課題	

D氏(H学園)へのインタビューデータ

No.	発話者	テキスト	(1)テキストの中の注目すべき語句	(2)テキストの中の語句の言い換え	(3)左を説明するようなテキスト外の概念	(4)テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	(5)疑問・課題
1	筆者	こちらは職員の研修制度が充実していると伺いましたか？					
2	D	今から5、6年前、ボーイズタウンというアメリカのオマハにある施設がありまして、そちらの方が小舎を大体80くらいを全部ファミリー……夫婦でされている小舎制なんですけど、そちらの方に勉強しに行こうということ。もともと小舎制養育研究会の会長さんが日本の中では今後の先駆けになっていくものがないかということで、今までのものを崩さずに私たちのスキルアップにつながるようなものはないかということ。いろいろなところに見学にも行かれて、探されていて、ようやくボーイズタウンに出会われていて。今日本でもLDとか発達障害系の分野で、もともとあったSSTとか、トレーニングの概要が、その、もともとボーイズタウンから派生しているものが回りまわって日本にも普及している部分もあるみたいで。それは、お子さんであるとか、別に障害に限ったことではなく、丁寧に、生きていくうえで必要な社会スキルを繰り返し子どもたちに教えることによって身に付けていくというプログラムなんですけども。そちらにみなさん何度が足を運ばせていただいて、私たちもそちらの方に施設長含め何度が足を運ばせていただいて、ぜひ日本でも同じプログラムを導入できないかということで、こちらのH学園とF学園の方でまず二施設からサテライトホームとして始めてみようということ。2年前からスタートさせていただいたんですけれども、そのプログラムが研修も充実していて、やっぱり一度受けた研修だけではなかなか継続できないということで、実際に働いている中で実践的に自分たちのスキルアップにつながるような研修プログラムもあるので、直接処遇やSVなど役職に分けて研修を受けています。	今までのものを崩さずに私たちのスキルアップにつながるようなものはないか／丁寧に、生きていくうえで必要な社会スキルを繰り返し子どもたちに教えることによって身に付けていくというプログラム	伝統的な養護を継続と職員の技術の向上の共存 上乗せ技術／当たり前の生活 普通の生き方を伝達 反復的な学習	伝統的養護の継承 上乗せの技術向上／生きる技法の反復学習	伝統への上乗せ技術 社会スキルの反復学習	
3	筆者	たくさんの先生が研修を受けていらっしゃいますね？	同じものを共通理解する	知識の共有	知識共有	技術共有	
4	D	そうですね、やっぱり同じものを共通理解すること、					
5	D	私たちの施設の弱みは、強みでもあるかもしれないですけど、職員がすごく若いんです。年齢層も若いですし、勤務年数も一番上で10年目の職員なので、なかなかスキルアップであるとか、もともと今までの経験が活かさない。この歴史もあるんですけど、そこを活かしながら私たちが継承していくことが難しかったので、どうしても職員のスキルアップ、自分自身で何をやっているのかってことを自分自身で自己覚知するためのには、やはり研修を受けてちゃんと何をやっているのか、ただ子どもの衣食住を提供するだけではなく、処遇支援をしていかなければいけない。養育というところでは何をしなければいけないかは、研修であるとか学びがないと、とてもじゃないけれど内部だけでは追いつかないということもありまして。	職員がすごく若い／今までの経験が活かさない／何をやっているのかってことを自分自身で自己覚知する	職員構成の弱点 キャリアの不足 キャリアの不活用 専門性の自覚	職員の経験不足 専門性の自覚の自覚	経験不足 専門性の自覚	職員と子どもとの関係の持続性の課題は？

6 D	寮長がいろいろところで会長をしていることもあって、この研修がいいのではないかと、実際に目にしたものなことでこれは信じられるというものを、私たちにも研修が受けられるようにということと、一つ一つのものをみんなで共有するためには、多くの人が同じ研修を受けていることがどうしても前提になってきますので。	多くの人が同じ研修を受けていることがどうしても前提	職員研修の同一性 員の均質性が大事	スキル共有 性の教育の同質	技術の均質性の担保	
7 筆者	みなさんが研修を受けると、その期間の体制はどうなっているのですか？					
8 D	大人数といっても4人が最高だったんですね。					
9 筆者	何回かに分けて研修を受けられたのですね。					
10 D	そうですね、分けて参加させていただいて。向こうの先生もこちらに来てレクチャーしてくださることもあったんですけども。あと私自身そのプログラムのトレーナーのコースを受講したので、そちらの内容を寮内研修で共通理解を図るような形で、皆が同じものをということ。なかなか実践に活かしたり、頭でわかっているけど、それを実際に取り組むとなると簡単なことではないと思うので難しい部分はありますけども。	寮内研修で共通理解を図る	研修成果の伝達 共有教育の	教育の伝承	技術の伝承	
11 筆者	そういう研修を取り入れられたのは施設長のお考えですか？					
12 D	そうですね。					
13 筆者	SW歴は1年目と同じでしたが、入職して何年ですか？					
14 D	私は9年目になります。					
15 筆者	学校を卒業してすぐこちらに？					
16 D	私は26歳まではまったく違う仕事に就いていたので。福祉の部分はボランティアであったりとかでフリースクールに関わるようなことがあったんですけども、もともと児童養護施設に関心を持っていたというよりは、子どもの支援の団体に属心があって見学に行かせていただいたり、1年間住み込みのボランティアをしたりというようなことがあったんですけども。					
17 筆者	こちらにいらして8年間は直接援助職ですか？					
18 D	そうですね、もともとSVの仕事は今これで4年目になるんですけども。そのうちの1年がFSWで今やっているなかで。					
19 筆者	こちらの施設ではFSWはおひとりですか？					
20 D	今はそうですね。でも同じ業務を担っている者は他に2名おります。役職としてはSVですね。					
21 筆者	同じように分担しているのですか？					
22 D	そうですね。					
23 筆者	前にFSWをされていた方はどんな方でしたか？					





37 D	SVの仕事は日本の主任とは違って、直接処遇で働く職員さんの継続的なトレーニング中であるとか、実際にホームに職員を観察に伺って、直接働いているところを見て実際にどんな処遇をしているのかでフィードバックを行っているような仕事があるんですけど。	直接処遇で働く職員さんの継続的なトレーニング／どんな処遇をしているのかあとでフィードバック	マネジメントではなく教育 CWの業務の評価と教育	CWの教育	CWの教育	CWの教育	FSWの業務とSVの業務はどのように分かれているのか？
38 D	フィードバックについても一つ一つの概念であるとか、たとえば「優しい」とも同じように「優しい」が何を理解してないといけない、その概念を理解し、それを使うことでどういかにいいかという理由付けをすべてにおいて、指導の部分でも関係構築の部分でも専門職としての職員のスキルでも、いろんな部分で、私たちの基本としているテキストがあるんですが、それに沿って、同じように職員さんの自分の強みと弱みを把握し、自分の強みをより向上させるために弱い部分をどう改善していけばいいのかというフィードバックを行うのがSVの仕事としてあるんですけど。	概念を理解し、それを使うことでどのようにいいのか／職員さんの自分の強みと弱みを把握	援助の枠組み理解 専門用語に流されないで理解し実践する／CWの自己覚知	援助枠組み 専門性の理解 CWの見覚知	専門的援助の理解 CWの自己覚知		
39 D	それは直接処遇の職員が一番最前線で子どもを見ているので、彼らが施設の方針からズレることなく、子どもを傷つけずに一番いい形で自分たちの個性を活かしながら施設の中で子どもを養護してもらおうのが一番なので、そうあってもらえるようにSVはサポートする役割。その役割を分けて勉強させていただいているということがあったので、その辺がとても専門化している部分。	直接処遇の職員が一番最前線で子どもを見ているので、彼らが施設の方針からズレることなく／SVはサポートする役割	CWの方針と施設の方針の一致を目標とする／SVはCWの後方支援	CWの実践指標提示 SVとCWの関係	CWの実践方針補正 SVの後方性		
40 D	あと入所のときにアセスメントセンターであるとか、アセスメント期間として入所してきたときの情報を子どもたちがここに来て今までの状況とガラッと変わってしまうのでどういうことが推測されるのかということ自分たちで一定期間観察する時に、アセスメントセンターについている職員が子どもたちを見て、これから先の処遇計画を立てていくということをしていた時もあったので。今はアセスメントセンターというホームはなくなりましたけど、入所してから1か月期間は子どもたちの様子を見て、今後の支援計画を立てる上で何を配慮しないといけないとか、子どもの特徴、ケースの概要などをすべて把握して見立てをしていくっていうようなことをしています。	アセスメントセンター／入所して来たら1か月期間は子どもたちの様子を見て	入所後一定期間は集中的に子どもを観察する	アセスメントに適した期間 集中的な観察	集中的なアセスメント期間		
41 筆者	アセスメントセンターというのはホームとは別に置かれていたのですか？						
42 D	そうですね。専属の職員がいて。うちの職員が若いこともあったんですけど、一番最初に関わった職員との関係性ってものすごく大きくなって、その職員さん自身が客観視できないと、関係構築が深まってしまうと、次の家に移行する時に子どももその関係性をとても良かったものを語っていていかないといけないことがあって、一度家族の元を離れて傷ついた子どもが一時保護所に行って、と転々とするのがあまり良い経験ではないということ、	一番最初に関わった職員との関係性ってものすごく大きくなって／転々とすることがあまり良い経験ではない	子どもが最初に出会う職員の重要性／担当が次々変わることを否定 生活拠点を頻繁に移動させたくない	CWとの関係の継続性・生活拠点の継続性重視	生活と関係のパーマネンシー		

43 D	そこを踏まえてアセスメントできる職員というのとはかなり経験が伴っていないと難しいということ、お家に来た時にその職員がアセスメントする力をつけていく方がいいでしょうということで、ちよつとまだ今どの形が一番いいのかわからない感じがらにはなっているんですが…。	お家に来た時にその職員がアセスメントする力をつけていく方がいい	最初の職員が子どもを評価できることを目指す「全職員のアセスメント力強化」	CWのアセスメント力強化	CWのアセスメント力の涵養	CWのSW化を図るといふことか？
44 筆者	それはどのくらい前まであったのですか？					
45 D	去年まではありました。					
46 筆者	2008年まで					
47 D	はい。					
48 筆者	形態としてはお子さんが入ってくる家なんですか？					
49 D	はい、建物としては同じホームのひとつのお家を。					
50 筆者	方針が決まった別家の家に移動するわけですか？					
51 D	そうです。					
52 筆者	それは本当に点々としてまいりますね。					
53 D	そうですね。					
54 筆者	こちらの施設の平均入所期間はどのくらいでしょう？					
55 D	平均だと今年になるのかな…平均値として最近の子たちを割り出してなかったです。だいたいここ数年は傾向としては短い子が多いです。というのも親がいる子たちがとても多い、増えてきているというのがあって、入所してから退所までの期間は短い。あともう一つは中学校から退所(18歳)までいる子が結構多くて、うちは乳児院もないので、幼児さんから来るよりも比較的年齢が高い子たちが入所して来ると、中学生からだと6年しかないもので、そういう意味でもたぶん4、5年くらいの子たちが一番多いんじゃないかと思っています。	傾向としては短い子が多い／中学生から退所までいる子／中学生からだと6年しかない	短期入所の傾向／高齢での入所は卒園までの時間が少ない、それが短期化の一要因	在学期間の限度 短期化傾向	在学期間の制限	
56 D	ただ、その子たちとは別に、長期でいる子は本当にずっとになるので、平均するとそのあたりになってしまうかもしれないですけど、割合としては2割か1割はいつも、18年くらいいる子たちがでてはきますね。	長期でいる子は本当にずっと	長期入所児童が一定の割合でいる	長期入所児の一定性	一定数の長期入所児	
57 筆者	家庭に帰るお子さんたちは初めからそういう見込みで入ってくるのですか？					
58 D	何とも言えないのが実際のところ。もちろん入所のときから退所を意識しておかないと、なんだかわからない理由でズルズルになるので、何がどうなると退所なのかということは明確にしておいて、もちろん入所はしてくるんですけど、やはり親の状況がコロコロと変わってしまったり、逆に良い方に変わることもあるけれども、方々に変わることもある。退所の計画を立てていてもすぐ退所できればいいんですけど、退所の計画を立てていてもすぐ退所できないと制限がない、立てて目途がなかったお子さんでも急に親御さんがここ最近意欲的に取り組むとか、誰かと結婚され生活基盤ができたという、予測もしてなかった事態で引き取りができることもあるので、一概になんとも言えないところはありますね。	入所の時から退所を意識しておかないと、なんだからズルズルになる／親の状況がコロコロと変わってしまったり	ゴールを明確にしておく不明確だと不必要に長期化する／家庭状況の突如たる変化がある	ゴールの明確さと入所期間の関係 支援計画に影響を及ぼす家庭状況の急変	ゴール設定と入所期間支援計画への影響	

59	筆者	計画は定期的に見直しされるのですか？							
60	D	そうですね。今のところ自立支援の処遇計画は半年に1回見直しするので前期末後に分けて。	自立支援の処遇計画は半年に1回見直し	支援計画の定期的な再検討	支援計画の再検討				
61	筆者	全員の計画を見直すのですか？							
62	D	そうですね。それとやっぱり入学のときですね。卒業して小学校に上がるとか中学校に上がるとか、そういう時期には本当に家庭復帰ができないのかということはもう一度現相とも検討しなして、やはり進学るときは子どもたちにとっても人間関係で言うところ関係が崩れても一から作りやすい時期でもあるので。	やっぱり入学の時／進学のときは子どもたちにとっても人間関係で言うところ関係が崩れても一から作りやすい時期	関係再編の適正期	関係再編適正期				
63	筆者	その時期に合わせて帰れるものなら返したいと？							
64	D	そうですね、はい。							
65	筆者	入所児童数は定員いっぱいですか？							
66	D	今年度は満員ではなく2、3人少ないときもあった。							
67	筆者	全員の計画を立てるのは大変な作業だと思いますが、支援計画は担当のCWが立てるのですか？							
68	D	うちのところは処遇計画書はPCG上でネットワークでつながっているんですが、基本的には担当とSVが共に立てます。	担当とSVが共に立てます	支援計画の共同作成	職員間の共同業務				
69	筆者	SV3人で分担されているのですか？							
70	D	そうですね、2軒、3軒で分担しているので。							
71	筆者	ホームごと？							
72	D	はい、ホームごとに。							
73	筆者	今は直接ケアは担当されていますか？							
74	D	担当していませんね。							
75	筆者	宿直も？							
76	D	ほんとに稀ですけど、今日も偶然ホームに入っているんですけど。勤務的な状況で、どうしても長期休暇を複数名がとると、日程とかによっても私も直接子どもたちと関わる機会がないと回らない時もあるのです。	日程とかによっても私も直接子どもたちと関わる機会がないと回らない	職員配置の都合 非CWも直接処遇に入らざるを得ない	職員配置の制約 非CWのCW配置の必要性				
77	筆者	1ホームの職員数はどうなっていますか？							
78	D	今は担当職員とアシスタント2人のところと、もうひとつは新しい取り組みをしているところは担当2名とアシスタント1名で常時2人いるようにしているところと、一人でいるところがあるんですけど。基本的にGHは定員数が6名と少ないので一人の職員が交代で見えるような形になっています。							
79	筆者	1名で対応するのは大変ですね。							
80	D	そうですね。でも地域の方にぜひいぶん支えられている部分もあるのです。	地域の方にぜひいぶん支えられている	地域との密着 周囲からの支援	地域の支援体制				
81	筆者	GHはすべてこの周辺にあるのですか？							



100 D	一日を通してホームに行って観察することもありますが、なにか物事が起こった時にも職員との対応と子ども自身が今どう考えているかを確認することもあるのと。	ホームに行って観察	子どもの生活場面に出入りしていく	生活場面観察	生活場面での情報収集	
101 D	あと今年度から子どもたちにアンケートを取るようにしていて、「生活アンケート」っていうのを、ちょっと今年に1回か2回か考えているところなんですけど、担当職員から自分は一人の人間として大事にされていると思うとか、担当職員は人とうまくかかわることを教えてくれているか、というような内容が5つくらい項目がありまして、日常生活の中で担当職員から傷つけられたり何か見えない部分がないかという聞き取りを聞かなくていい職員が聞くということで、関わっていないSVが聞くということで、副委員長も同席して話を聞くようにしています。	生活アンケート／関わっていないSVが聞く	子どもへの調査 直接ケアしない職員が調査する	子どもの権利保障 ケアの質の担保	非CWIによる子どもの権利保障	
102 筆者	ペーパーではなく面接ですか？					
103 D	面接でひとりで呼んで。					
104 筆者	小さいお子さんから？					
105 D	はい、年齢に合わせて聴き方で。					
106 筆者	どんな内容が上がってきますか？					
107 D	いい意見もあれば、職員をよく思っていない部分の話も出てくることもあるんですけど。あなたの実名で担当に聞くことではないから、でも事実は担当に確認させてもらうという話を子ども自身が了承した上で、担当の方にもあなたのホームの中からこういう話が上がっているけど、なにか誤解を招くようなことであるのであれば、自分の身を守るためでもあるいは子どもの身を守るためでもあるからこういうことか伝えてほしいと話をして。	自分の身を守るためでもあるし子どもの身を守るためでもある	子どもと職員面方の安全重視 一方的な利害ではない リスク管理と幸福の両立	子どもと職員のリスク管理	リスク管理	
108 筆者	子どもがホームを移ることはありますか？					
109 D	基本的にはないようにはやっているとありますが、きょうだいが分散して入所してきた場合などに統合するとか、やっぱりホームの解体であるとか、いろんな事情によって移動することはゼロではないです。	基本的にはないようには移動することはゼロではない	子どもの生活場面を転々とさせない努力／移動はあり得る	生活場面の持続性の担保	生活場面のパーマネンシー	
110 筆者	基本的には最初に入ったところですってですね。					
111 D	そうですね、基本的に。					
112 筆者	アフターケアに力を入れてもらっていらっしゃるようですが、そのことと、家族再統合との関係を教えてください。					

113 D	早い段階でというのはもちろん一番なんですけれど、親によってはどれだけ時間を割いたとしても、子ども自身が親と適切な距離をとらなければ親の現実を受けとめて、どう関わっていいか親との距離をとっていくのか、頼ることは一生かかっても難しい親御さんかもしれないしやるので、誰にどんなサポートを受けながら、だけだと親として存在しているところを受け入れていかなければいけないし、自分も求めている部分もあるけれど、自分もまだ子どもなので保護してほしい気持ちもあるから、やはりその部分で現実を受け止めていく力は高年齢児には必要になってくるかなと思います。	頼ることは一生かかっても難しい親御さんかもしれないしやる／現実を受けとめていく力は高年齢児には必要	親の頼れなさ 変化のなさ あきらめ／高年齢児は親の現状を理解する力 あきらめて自立に向かう力が必要	親の不変性 親を見切る力 高年齢児の現実対応力	親の見切り 現実直視力	
114 D	小学生と中学生高校生とで変わってくるのは、中学生は先が見えてくるので、自分の現実と向き合う機会が増えてくる分、ものすごく自尊心が低くなったり、絶望的な未来を思い描いて死にたい！と言ったりする子もいるので、そういう意味で自分の中に可能性であるとか、こうすればまだやっていけるんだという希望を持つうえでは、高年齢児のケアの方が親の支援よりも子どもへの支援も含めて強くなっていくかなと思います。	中高生は先が見えてくる／高年齢児のケアの方が親の支援よりも子どもへの支援も含めて強くなっていく	現実的なままなし 近い将来としての現実への絶望／親支援よりも自立が優先される	現実理解 現実への絶望 自立支援の優先性	現実への絶望 家庭支援 より自立支援	
115 D	もちろん高年齢児であらうが低年齢児であらうが親自身に長く定期的にサポートしてくださる機関とか、ご友人とか家族関係は引き取りに向けて影響していくことなので、その部分も否めないですけど、でも子ども自身も現実を受け止めていく力かというものが備わっていないと帰ってからうまくいかないケースも多くなってしまうので、お互いに希望だけを抱いて、実際に一緒に過ごしてみたら違ったということもあるから。	子ども自身も現実を受け止めていく力／お互いに希望だけを抱いて、実際に一緒に過ごしてみたら違った	親に過剰な期待を抱かない あきらめを知る力／親子の期待の不一致 期待と現状のずれ	現実受容力 過剰な期待の放棄	現実受容 現実的な期待	
116 筆者	アフターケアの施設を建てたのは、アフターケアの要望があったからですか？					
117 D	私も建った時のことを確認してたわけではないんですが、やっぱり帰ってくる場所があるという安心感はずごく違うと思う反面、帰ってくる場所があるために、今目の前にある人間関係と向き合わずにこちがあるからと思ってしまう部分もあって。彼らにとってはここで生活してきたことについて、ここの人間関係はずごく大事だけれども、また新しい新天地での人間関係の中で本当に悩みを抱えたときに、一番聞いてもらえた方がいいのは、身近にいた人の方が、自分の家庭状況や仕事の状況もわかる。その中で助けを求められることをその人たちができないと、常にここに求めてきても100%応えきれない部分に絶対に出ているので、そう思うとここの家を提供したとしても、どれだけサポートしたとしても、やはり新天地でどれだけだけの人間関係と助けを求める力がつけられているかということが必要になってくるかなと思います。	帰ってくる場所があるという安心感／帰ってこれる前にはある人間関係と向き合わずにこちがあるからと思ってしまう部分もあって。彼らにとっては新天地でどれだけだけの人間関係と助けを求める力がつけられているかということが必要	卒園生の抱り所 安心基地／安易に戻って来ないでほしい／卒園後におかれた場所で居場所を自ら作れる力があるかどうか	安全基地としての施設 現実逃避の可能性 場所開拓力の必要性	現実逃避への警戒感 居場所開拓力の涵養	帰ってこなくてよいようなリーピングケアを行っているか？
118 筆者	退所後も人間関係の作り方の支援が必要ですか？					
119 D	必要な場合もありますね。					
120 筆者	アフターケアの家は入所施設ですか？					

121 D	入所の問題ではないですね。もともとお正月であるとか盆休みとか、子どもが生まれたり、もしくは仕事がなくなってしまう時に一時的にこちらに来て宿泊できるというもので。宿泊施設で、入所のタイプではないですね。		一時的にこちらに来て宿泊できる	短期宿泊機能がある	スポット的なサポート機能	非永続的なサポート	
122 筆者	専属スタッフは？						
123 D	いなくて、必要に応じてその子を知っている職員であるとか、その子がいちばんわかる職員がその時随時合わせて。でも実際にそんなに多くの利用があるわけではないので。年間通しても片手で数えるぐらいの利用数しかないです。		必要に応じてその子を知っている職員	専属職員を置かない 臨時機応変に対応する体制	非常設の対応	非常設のサポート	
124 筆者	それでショートステイをやってらっしゃるのですか？ そちらの方が利用は多い？						
125 D	利用は多いですね。						
126 筆者	ショートステイは他にあまりないですか？						
127 D	そうですね、近くの児相さんの方から一時的に親が出産をする時であるとか、ショートステイだけではなく、もうすぐ家庭復帰を備えている親御さんがお家に帰る前に一時的に体験的として一緒に暮らしてみたいというところで祝日だけを朝昼晩と食事をお母さんが作って過ごすことがどうかというところだったり、一緒に子どもと丸一日みてどうかということを見てもらったり、そういうことに利用することもありますね。	家庭復帰を備えている親御さんがお家に帰る前に一時的に体験的として一緒に暮らしてみる	家庭復帰訓練として利用する	家庭復帰訓練と提供	復帰訓練機		
128 筆者	その時は職員は入らずにですか？						
129 D	そうですね。						
130 筆者	そういうのは必要でしょうね。一時帰宅とは別にやっているのですか？						
131 D	そうですね。						
132 筆者	FSWの制度化でなにか変わったことはありましたか？						
133 D	正直、このインタビューの内容からでも、変わったというところは特にないですね、制度化されて、私たちの施設自身では。なぜかというところ、ただ制度化されたとしても、基本家庭復帰は私たちのどのお子さんについても目標であって、その取り組みは専門分化されていくという部分では主任とかもともと上の役職がされてきたことだと思ふ。名前がFSWという役職としてできたことについては国もそういったことが大事なんだということを認めたということについて、それは大事なことでいいと思いますけど、でも仕事内容としてそんなにやってくるってことではないと思います。	どれだけ制度化されたとしても、基本家庭復帰は私たちのどのお子さんについても目標／仕事内容としてそんなにやってくるってことはい	もともと全ケースで家庭復帰が目標だった 制度化による変化ではない／制度化はされても業務内容は不変	基本目標としての家庭復帰 業務の不変性	不変的・普遍的目標としての家庭復帰		
134 筆者	家庭復帰を目標とするのは昔から同じことでしょうか？						

135 D	<p>そうですね、もともと被災孤児で親がいないところからのスタートで、先代はその子たちがいつか家族を持ったり、社会の輪の中に一人の存在として生きていくために集団の中で家族単位であるとか会社単位の中で人と気持よく生きていたり、家の中で収入を得て、その収入でご飯を賄い服を買い、そういった生活を大事にしてきていて、それは親が存在している子については親とおなじに話していくものだと思うので、その輪の中に親が入らないのはおかしな話だと思うので、その子たちにとってもそここの家のまえに自分の家がつかかりあるので、そこに帰っていくというのはずっと同じ、変わらないことです。</p>	親が存在している子について親とともにつくっていく／その子たちにとってもそここの家の前に自分分の家がつかかりある／そこに帰っていくというのはずっと同じ、変わらない	当たり前の生活への復興・再建は親と施設の協働による／施設と家庭の両立／家庭復帰目標の不変性	施設・親共同での生活再建 定位家族の存在 不変の家庭復帰目標	生活再建への協働 家庭の存在	
136 筆者	制度化以前は上の役職が同じことをやっていたのでしょうか？					
137 D	<p>そうですね。基本的には指導員であるとか、私たちのところでもずいぶん役職のところでは担う人の形が変わってきてはいるんですが、担当とは別にそのケースについて客観的に把握している職員が大体は同じような仕事の役割を担っています。</p>	担当とは別にそのケースについて客観的に把握している職員が大体は同じような仕事の役割を担っています	CWではなく全体をマネジメントする職員が常について	マネジメント職の不変性	マネジメント職の不変性	
138 筆者	それは常に2、3人です？					
139 D	そうですね。					
140 筆者	FSWとして、施設から期待されている役割はなんだと思いますか？					
141 D	<p>期待されていると言われるとはつきりにはわかりませんが、この仕事をされていて大事だと思うのは、連携とネットワークづくりはとても大事です。</p>	連携とネットワークづくり	他機関、複数のアクターをつないでいくポジション	支援体制の構築	支援体制の構築	
142 D	<p>それがものすごく個人の力量によって左右してしまうところがある。っていうのは見相さんにしてもそうだし、職員さんにしてもそうなんですけど、その人の経験年数であるとかその人の人とか成りとか人間関係の構築の上手さで、ネットワークが広がっていくので、親分その子のサポートや親の支援がどんなに広がっていくので、親も信頼ができるしそのネットワークの中に入っていて、いろんな役割の人たちがお互い信頼関係で結ばれていくようなネットワークづくりができる体制が整っているときには本当に引き取りが早いんですけど、それが見相さん個人の考え方もあれば、見相によっても考え方が違ったり施設によっても考え方が違うという部分では、どこに行っても同じということではなく、その方針や考え方、個人の行動力によってすごく左右されてしまう部分は実際に起こってきているので。そこをみると、やはりネットワークや連携をうまく図れる体制をいかに作っていくかということがこのFSWの仕事にはとても求められていると思います。</p>	個人の力量によって左右してしまう／ネットワークが広がれば広がる分その子のサポートや親の支援がどんなに広がっていく／ネットワークや連携をうまく図れる体制をいかに作っていくかということがこのFSWの仕事にはとても求められている	アクターの個体差が影響／連携範囲と親子支援が連動して広がる／アクターを上手につないでいく能力 みんなで支える態勢を整える能力の要求	支援者の能力に規定される支援の成功 支援体制構築能力の要求	能力差と成功度の相関 支援体制構築能力	
143 筆者	子どもや家族を支える周辺の部分ですね					
144 D	<p>そうですね。ネットワークもそうだし、親御さん自身に明確な目標を提示できる人がいないと、親も変わらないまま子どもを受け入れてしまったら、また同じことが起きてしまうことがあるので。</p>	親御さん自身に明確な目標を提示できる人がいない	保護者への指示 課題とゴールを指示するポジションの必要性	保護者指導者 ゴール提示者の必要性	親指導者の必要性	



145 D	やはり入所に至るまでには何らかの課題があって、その課題がどのように改善されていったのかということが具体的に明確な目標を持っておかないと、子どもも「どうして僕にこんなかわらない」ということになる。親もなぜ子どもが目の前にいないのかわかんないだと、その辺のケースワークをしっかりとっておかないといけません。目標を明確に明示して、それを共有できる見相と施設の関係性、それから学校もそうだし親御さんもそうなんですけど、同じ目標を持って一つの方向に向かえる人がいない。サポートだけが大事なのではなくて、ひとつの目標を皆が信じて同じ方向に向かえるという関係性	目標を明確に明示して、それを共有できる見相と施設の関係性／同じ目標を持て／一つの方向に向かえる／一つの目標を皆が信じて同じ方向に向かえるという関係性	ゴールの明確化と共有 見相と施設の協働関係を維持する／目標の共有 支援方向の一致 関係 機関の信頼関係 協働意識の保持	関係機関間の目標共有 協働関係の構築	目標共有 協働関係	
146 筆者	家族には課題を提示されるのですか？					
147 D	そうですね、課題っていうのもありますし、言葉はどうであれ「まずここをがんばってみよう」ということでもあると思うし。					
148 筆者	家族もアセスメントするのですか？					
149 D	そうですね、自立支援計画表は子どもの部分と、支援者、保護者の部分と、それ以外の部分もあるかもしないで、その支援者の部分と、それから地域という3つ、厚生労働省から3つの課題を。	自立支援計画表は子どもの部分と、支援者の部分と、それから地域という3つ	支援計画の多面性 チェックポイント、視点の複層性 対象ごとのゴール設定	複層的な支援計画	複層的な支援計画	
150 筆者	これ(用紙)ですか？					
151 D	これは違いますね、これは退所に向けてのアセスメントの用紙なので。自立支援計画表というのがたぶんこの施設にもあるの。厚生労働省から提示されているのも本人と支援者、家族の部分と、それから地域、それぞれの短期目標、長期目標、それから経過、評価が明示できるような自立支援計画表をつくるようにと求められているので、その部分を私どもも基本に自立支援計画表を立てているので、その3つの視点から振り返りはしています。子どもだけではなくて。	本人と支援者、家族の部分と、それから地域／短期目標、長期目標、それから経過、評価	アセスメント・支援対象の複層性／支援のスパン、進行状況、アセスメント	計画策定の多項性	多面的な計画策定	
152 筆者	施設が家族とも常に連絡をとらないといけないわけですか？					
153 D	そうですね。					
154 筆者	それがなかなか取れないようにだと長引いてしまう？					
155 D	はい。					
156 筆者	家庭復帰を一番困難にしているものはなんでしょう？					
157 D	一つは明確に親がいないケース。	明確に親がいないケース	家庭・家族の不在	家庭・家族の不在	家族の不在	
158 筆者	家がない					
159 D	そうですね、住む家自体がないとなると、親族もなかなか引き取りがむずかしくなるケース。	住む家自体がない	家庭・生活拠点の不在	生活空間の不在	家庭の不在	
160 D	それから親が精神疾患の親御さんとはとても難しいですね。それから虐待者の考えが改められないケース。虐待をしていた、変わらない。	親が精神疾患／虐待者の考えが改められない	養育者の養育能力の不在	養育能力の不在	養育能力の不在	
161 筆者	それでは逆に、うまくいくのはどういうケースでしょうか？					

162 D	一つはやはり親御さん自身に引き取る意欲が高いケースはほんとに早く。児相さんがこういう取り組みをしようと言われたも、前向きに取り組める。施設側の意見もちゃんと聞いて改善をしようという意思が感じられるケースについては引き取りは早いです。	親御さん自身に引き取る意欲が高いケース	親の強い意志 復帰への意欲があること	親の再統合意欲の強さ	親の再統合意欲の強さ
163 D	でもそれについてもやっぱり施設の職員との関係性であったり、児相の職員との関係性も、もともと親御さんが意欲的であっても、やはりその人がいい人で、信じてこの人と一緒にやっていたいと思えないケースというのは、なかなか関係性が悪くなれば引き取りが遅くなってしまうので、どれだけ親御さんといいい関係が作っていかれるかということによると思うんですけど。	施設の職員との関係性／どれだけ親御さんといいい関係が作っていかれるか	施設職員と親の信頼関係が築けていること	親と職員との関係構築	
164 D	もちろんでもやっぱり親が引き取りに向けて意欲的になってきていて、子どももそれに向けて行動が変わっていく。「引き取りのためには僕ががんばっている」という意識が高いお子さんは比較的行動も早くに改善されていくことが多いので。	子どももそれに向けて行動が変わっていく／意識が高いお子さん	親の行動が子どもの変化を引き起こす／子どもの意識 復帰意欲が高い子ども	子どもの変化 子どもの意欲	
165 筆者	小さくても？				
	そうですね。お子さんで一番怖いのは、もうすぐ引き取りだと思っていたことが、あれ今年も無理だった今年も無理だった今年も無理だったと期待を裏切られることが続いてくると、子どもも自分を大事に思えなくて、なかなか良い行動を取ったところで自分は不適切な結果しか得られないというような絶望感を多く持ってしまうんですけれども。	良い行動を取ったところで自分は不適切な結果しか得られないというような絶望感	不適切な学習 努力に報いがない経験の積み重ね	負の学習	
167 D	もともと期待していなかった子は、自分で生きていくしかないという覚悟ができていく子については先を見通した行動がとれることが多いいので、親御さんがあいまいな返事をしたり、なんとなん引き取れるようなことを言うとおきながら引き取れないケースで、児相さんともななくその辺をはっきりさせないというのはなかなか引き取りが長引いて、子どもも行動が落ち着かないお子さんが多くくる傾向にはあるかなと思います。	自分で生きていくしかないという子に動機ができていく子については先を見通した行動がとれる／あいまいな返事／児相さんともななくその辺をはっきりさせない	あきらめがある子は現実的な行動を取れる／子どもにあやふやな期待感を抱かせる反応／児相がゴールを不明確にしてお	親の見切り 現実直視 根拠のない期待感	親の見切りとあいまいな期待の相反性
168 筆者	期待が裏切られるのはショックですね				
169 D	そうですね。だいたいそういうお母さん方は施設に対して物とかを送ってこられて、子どもたちがかわいそうだと思うって引き取れないこと、物を送ってこられて、物をたくさん子どもたちは得たりとか、好きなものを得られるから、もう引き取ってもらえるんじゃないかと思っけども引き取りがなかったりとかしてきます。物には満たされなくて、関係は全然できていかないケースがすごく多いですね。	物には満たされていて、関係は全然できていかない	愛情表現としてのモノと関係のアンバランスさ プレゼントに対する親子の認識の相違	物と関係のアンバランス	
170 筆者	お母さんは子どものことを思っていないわけではないのですね。				
171 D	そうですね。				
172 筆者	でも状況が整わないと				
173 D	でもそういうことが一番子どもたちにとってはしんどい状況ですね。				
174 筆者	状況が整わない原因というのは？				

175 D	一番は子どもと一緒に生活していくことに対してすごく不安の高い...	子どもと一緒に生活していくことに対してすごく不安	親の復帰への不安 共同生活への恐れ	親の復帰不安	親の生活不安	
176 筆者	引き取りに不安が？					
177 D	そうですね。					
178 筆者	それは外泊などの事前の取り組みでは解消しないのですか？					
179 D	そうですね。					
180 筆者	親の性質によるものでしょうか？					
181 D	難しいんですけど微妙な経済力で。やっぱり経済的にも裕福なわけではないので、帰ってくる現実苦しい面もある。子どもも支援してほしい、いろいろ自分たちの要望は叶えてほしいと思っけても、親自身に生活能力がないお母さん方が多いんですけど。やっぱり生活能力がない中でも子どもたちには良い思いをさせて引き取りが間近だという感覚があると、子どもたちは「家にどうして帰れないんだ」という怒りを持つし、お母さんとしては「家にはお金がなくて、私は子どもを育てるところまではできないということに、	微妙な経済力／生活能力がないお母さん方／子どもたちには良い思いをさせて引き取りが間近だという感覚	中途半端な経済基盤／親の生活力の不在／子どもにも与える楽観的なメッセージと現状の距離	生活基盤の脆弱性 ちぐはぐなメッセージ	生活基盤の脆弱性 ちぐはぐなメッセージ	
182 D	児相から不明確な目標であったり、施設としては物よりもまずはお母さんとの関係性をもって言っても、みんなが言っていることがバラバラなので、結局ネットワークの中に、みんなが一つの目標に向かっていけないケースは遅くなっていく傾向にあります。	みんな言っていることがバラバラ／みんなが一つの目標に向かっていけないケースは遅くなっていく	関係者の考え、目標、現状認識の不一致／目標共有できないと長期化する	目標の不一致	目標の共有度と措置期間の相関	親への支援で誰が中心になっていくのか？
183 筆者	そういう時、FSWとしてはどのように関わるのですか？					
184 D	一つは目標を明確に指し示して、まずそれをお母さん方が受け入れてくださるかどうかなのはあるんですけど、そのためには児相さんにも親御さんは連絡を取られるので、児相と施設との方針が合わないと言っていることがマチャマチャになってしまいうので、児相さんと同じ目標を早く持てるようにしていきたいと思っています。	目標を明確に指し示して	ゴールをはっきりさせて、親に示す	親への課題提示	親への課題提示	
185 D	親御さんの方の身近な部分にいらっしゃるのとは児相さんの方が距離的にも関わりの頻度も向こうの先生の方が多いので。子どもの部分では私たちが支援していけるんですが、親御さんの部分の支援はFSWと言えども、親御さんがこちらに足を運んでくださってもやはり児相さん抜きには。措置権者は児相さんなので、その部分との連携になってくるかなと思います。	親御さんの方の身近な部分にいらっしゃるのとは児相さん	親に近い立場にあるのは施設より児相	親サイドの児童相談所	親の児童相談所・子の施設	
186 筆者	アセスメントシートはどの段階で？					
187 D	これは本当に退所の話が少し考えられるんじゃないかというケースについて、じゃあ今見落としている部分はないかということで評価を直すときに使うシートですね。	見落としている部分はないかということで評価を直す	アセスメントシートの使用場面 退所の最終チェック	最終アセスメント	退所への再評価	
188 筆者	一度きりではなく何度も使うのですか？					
189 D	使うケースもあれば、1回で退所がスムーズにいくケースもあります。					







227 D	言います。それでも後でとか、今はありませんかということもある ので。								
228 筆者	子どもだけが先に来てしまう？								
229 D	そうですね。								
230 筆者	H県の一時的保護期間は短くないですが、それでも情報を取りきれ ていないのでしょうか？								
231 D	ケースバイケースなので全員が一時的保護所を経過してくるわけ もなかったり。前の施設に一度どこかで入所して、また家庭復 帰してまた措置になるという、措置変更ではないけれども家庭復 帰する前の施設にいたときの様子が全く分かっていなかったりというお 子さん多いんじゃないかって。ケースを読むと家よりもそっちの施設の 経歴が長かったときに、その中でどんな経験をしてきたかという ことが施設の中のことなので、他の施設に見相も伝えきれない部 分もあるのかなと思うんですけど。	家よりもそっちの施設の 経歴が長かったときに、 その中でどんな経験を してきたかということな ので、他の施設の中 の施設に見相も伝え きれない	過去の福祉利用歴が開 示されない	経歴取得の困難さ	経歴取得の困難さ				
232 筆者	前の施設に連絡取ることとは？								
233 D	することもあります。でも見相から頂いた資料なので、勝手に前の 施設に連絡するわけにはいかないの、見相さんを通して、どう いう風にしていくのかということばケースによって違います。	勝手に前の施設に連絡 するわけにはいかない	情報利用の制限 児相経 由の情報は見相経由でし か確認できない	情報利用の制限	情報利用の制限				
234 筆者	FSWとしてプレッシャーを感じることは？								
235 D	処遇計画を私たち個人で立てているわけではないので、その責任 が一手に私たちにくることはまずないので、そこまで施設のなかで プレッシャーになるとはいくつかはありますが、家庭復帰に向けて取り組み始 めていたことがうまくいかなかったときに、今後どう見立てをしてす いこうかというストレス度はみんなが一概に感じるとは思いません けど、そこまで個人が一人で抱え込んでというほどこの役職的に 個人が抱え込んで一人でケースワークしているような形でこはし ていないのかなと思います。	役職的に個人が抱え込 んで一人でケースワーク しているような形でこは していない	個人責任を追及される体 制ではない	チームプレイ	職員の共同責任体制				
236 筆者	担当とSVがベアになっているのですかね？								
237 D	そうですね。その部分で私たちが決断したことを寮長も同じ責任を 担って、それを外部機関に出しているような感じなので、そこまで 一人の負担として私一人がケースワークをしているわけでもない ので。	私たちが決断したことを 寮長も同じ責任を担って	FSWと施設長が共同責任 を負う	FSWと基幹職員の協働体 制	管理職との協働体制				
238 筆者	一度壊れてしまった親子関係をもう一度作り直すことについてお 考えのことをお話しください								

239 D	もちろん一緒に暮らすことだけではなく、退所した後、お子さんと家族が安全で安心して暮らしている環境をどういう風に保つていけるかという部分については、家に帰すだけではないという風にはなっていない。家族や子どもたちが長いから先から先を一番いい形で過ごしている。けれど親との関係が切れるわけでもないし、子どもとの関係が切れるわけでもない。そこはいいが、含めてはなにより安心して生活しているような関係性はない。子ども自身距離を置いていた方がいいことでもあるかもしれないし、まず子ども自身が自立をして親と関係を作っていくことも必要かもしれないです。長い目で見たときに最も安全に生活していき、しかも私たちが頼らなくても自分たちでそれが継続していけるような生活が一番望ましいとは思っています。	家族や子どもたちが長いから先から先を一番いい形で過ごしている。けれど親との関係が切れるわけでもないし、子どもとの関係が切れるわけでもない。そこはいいが、含めてはなにより安心して生活しているような関係性はない。子ども自身距離を置いていた方がいいことでもあるかもしれないし、まず子ども自身が自立をして親と関係を作っていくことも必要かもしれないです。長い目で見たときに最も安全に生活していき、しかも私たちが頼らなくても自分たちでそれが継続していけるような生活が一番望ましいとは思っています。	家族と子どもの長期的に最も適切な親子関係を探る。施設職員が介入せず、家族だけで維持できる。最適な親子関係を親子だけで維持できることが理想	ロングスパン 最適な親子関係の維持	親子による親子関係の維持	
240 筆者	本日はここに書いてほしいということがあればなんでもお話しください					
241 D	私はこの制度が制定されてこの仕事一本で専門的にされている人がいると思う。子どもたちのケースについているような問題が関わっていると思うので、警察に関わることもあれば病院の先生との関わりもある。ほんとにいろいろなケースワークだと思わなくて、そうすると今見えてくるのってさっき言ったような自分が主になって動くというよりもネットワークをどれだけうまく使っているか、情報の共有をどれだけスムーズに行っているかという環境づくり	自分が主になって動くというよりもネットワークをどれだけうまく使っているか、情報の共有をどれだけスムーズに行っているかという環境づくり	FSWが中心になるのではなく、アクターをいかにつなぎ、情報共有の体制を作れるか	主体はネットワーク ネットワーク構築役割	ネットワーク構築者としてのFSW	
242 D	だけれども本日の意味で専門的にやっていくには、そういったいろいろな知識も網羅しながら組み立てていくところまでできていないといけないと思うんです。	知識も網羅しながら組み立てていくところまでできていない	知識を踏まえたソーシャルワークスキルの必要性の認識	ソーシャルワークスキルの必要性	専門性要求の認識	
243 筆者	組み立てとは？					
244 D	いろいろな障害者であつたりいろいろな問題があると思うんですけど、その知識も入れて、ネットワークづくりだけではなく、目標を立てるところも明確に行えるような力量が固わるんじゃないかと思うんですけど。そういったことで一人の人がそこまでできる量は私はどこにあるのかなと思う。私はまだ経験もとても浅いですが、そこまでの仕事にたいして専門的に今行っているわけではなく、いろいろな方をインタビューされたり、見られて、実際にそういう風に取り組みされている方がいるならば学ばせていただきたいです。	一人の人がそこまでできる量は私はどこにあるのかなと思う	FSWがソーシャルワークすることの負担への疑い	ソーシャルワーク担当への疑い	FSW業務範囲への疑い	
245 筆者	SV職に就かれる方のキャリアはだいたい10年目ぐらいですか？					
246 D	キャリア的には私が2番目に長いからいかなので、それ以下という本場に若くなってしまうので、実際には比較的長くなる職員がたしかにそういう仕事を担っていますけど、10年という実際の数字は出せないです。					
247 筆者	その時点で比較的長い職員が担うのですか？					
248 D	そうです。					
249 筆者	FSWは管理職？					



250 D	はい								
251 筆者	基幹職が就く施設もあります。中間層がつくのは施設長のご意向ですか？								
252 D	もともと副寮長と寮長がしていなかったものもあるんですけど、やっぱり寮長と副寮長は管理職で本場に現場というのは全く日常的に見ることができない部分もあると思うんですね。そうすると直接処遇は直接処遇で日常に関わりすぎているので、すごく細かく見える分客観視できない。全く日常的な細かさの部分ではわからないというところになると、情報的には親と関わる頻度であつたり兄相さんとの連携の取り方であつたりでは指導員やSV職の職員が一番全体像を見渡せるというところで、FSWの仕事をしていますけど、最終決定権は副寮長や寮長にも同意、というのが確認はしているのですね。そこで一緒に責任を担ってもらっているところはあるんですけど、だから私たちが勝手にソーシャルワークをしているわけではなく、役職として私たちが担っているわけでもないという部分で言うところ、その責任は寮長も副寮長も担っているとお考えいただけますか？	指導員やSV職の職員がいちばん全体像を見渡せる	ケースに触れながら、俯瞰できるのは指導員やSV職	俯瞰的立場のFSW	ケースマネージャーとしてのFSW				
253 D		私たちが勝手にソーシャルワークをしていないわけではなく、関係職員と共同責任を負う	FSWだけがソーシャルワークするのはなく、関係職員と共同責任を負う	FSWと基幹職員の協働体制	管理職との協働体制				
254 筆者	施設全体の方針なんですね								
255 D	そうですね								
256 筆者	法人に高齢者施設もあるが、寮長は兼任？								
257 D	違います。親族ですけど、こちらの施設長の方が理事長を兼任しています。								
258 筆者	常に施設にはいない？								
259 D	そうですね								
No.	発話者	テキスト	〈1〉テキストの中の注目のすべき語句	〈2〉テキストの中の語句の言い換え	〈3〉左を説明するようなテキスト外の概念	〈4〉テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	〈5〉疑問・課題		

H学園には職員に伝達への上乗せ技術をつけさせる研修システムがある。職員構成が若く、経験不足や専門性の自覚が課題となっているため、技術の均質性の担保を目的として導入した。職員間の技術の伝承によってケアの技術共有を図っている。子どもに社会性の補完教育を行い社会スキルの反復学習させるための技法が特徴である。また、施設長やSVなどによる子どもへの聞き取り調査等の非CWIによる子どもへの権利保障の工夫もしている。これは子どもと職員双方のリスク管理も目的としている。

SVの業務はCWIに専門的援助の理解とCWIの自己覚知を促すCWIの教育である。施設の方針から逸脱しないようCWIの実践方針補正を図るなどSVの後方性が特徴である。D氏はSVがFSWを兼任するようになつてからFSW期間の限界が明らかになり、FSWの定期交代が始まった。FSWとしての分業範囲はSVとして担当の範囲と重なり、他のSVとFSW業務の分担をしているが、D氏は業務量の多さから二人制の限界を感じている。そもそもCWIとFSWではFSW業務の不可分性があり、支援計画策定など職員間の共同業務も多い。その際FSWは生活場面での情報収集を行う。また職員配置の制限からFSWもケアにあたることもある。

D氏は施設内での自らの役割をケースマネージャーとしてのFSWと理解しているが、家庭支援専門相談員制度導入前からのマネジメント職の不変性はある。ソーシャルワークはFSW一人が行うものではなく、職員の共同責任体制ができている。制度化によって専門性要求の認識はあるものの、FSWがソーシャルワークを行うというFSW業務範囲への懐疑を抱いている。そのため、H学園ではFSWと管理職との協働体制ができている。

ストーリーライン	<p>H学園では生活と関係のパーマネンシー、生活場面のパーマネンシーを重視しており、入所から担当CWとホームを可能な限り変更しない。そこでCWのアセスメント力の涵養を目指している。入所直後は集中的なアセスメント期間とするが、定期的に支援計画の再検討も行う。もともと不変的・普遍的目標としての家庭復帰を掲げていたが、子どもの指導に際しては、家庭の存在を視野に入れて、施設と家族が生活再建への協働を目指している。最終的に親子による親子関係の維持ができることが理想である。</p> <p>中高生からの入所児は在所期間の制限のために短期だが、一方で一定数の長期入所児も存在している。ただし、D氏は広義の家庭復帰親を持っており、ケアや扶養をめぐって親子役割逆転の家庭復帰もあり得ると考えている。ゴール設定と入所期間には関係があり、不明確な目標では長期化しやすい。進字時は関係再編適正期と見なして家庭復帰を目指すが、家庭状況の急変は支援計画への影響を与えやすい。</p> <p>家庭復帰が困難な要因としては家族の不在、養育能力の不在、親の生活不安、生活基盤の脆弱性、などがある。反対に引き取りがスムーズにいく要因は親の再統合意欲の強さ、親と職員の関係構築があり、うまくいっている時には子どもの変化、子どもの意欲を引き出すこともある。しかし、親が子どもにも与える物と関係のアンバランスのために、子どもは実態とかけ離れた大きなメッセージを受け取り、努力は報われないという負の学習をする。高年齢児は現実への絶望も経験する。親の見切りとあいまない期待の相反性から抜け出し、親に対して現実的な期待に留め、現実受容をするためには、親の見切りを促し、現実直視力をつけさせる必要がある。そのため、家庭支援より自立支援が優先される。</p> <p>H学園はアフターケア用の設備を持っているが、一時的な利用に留める非継続的なサポートであり、職員も非常設のサポートにしている。施設が卒園生の拠り所であるために安易に帰ってくるのではないかと職員に現実逃避への警戒感を抱かせ、それより居場所開拓力の涵養が必要だと考えているからである。そのため設備は復帰訓練会に使われることが多い。親子分離のまま卒園した場合、施設は親子の結着点であるため、親子の退所後の仲介役割も担っている。</p> <p>D氏はFSWの役割を支援体制の構築を行うこと、ネットワーク構築者としてのFSWと捉えている。関係機関との目標の共有度と措置期間の相関があるため、目標共有、協働関係の構築が欠かせないが、一方で能力差と成功度の相関もある。そのためFSWには支援体制構築能力が要求される。親指導者の必要性を感じており、基本的には親の児童相談所・子の施設という分担だが、FSWとして親への課題提示を行うこともある。</p> <p>家庭復帰に向けては複層的な支援計画を行い、退所に向けては多面的な計画策定を立てて客観性の担保を考慮しながら退所への再評価を行う。退所判断に与えるアセスメント精度の影響は大きく、情報量と予防措置の相関もある。正確で十分な情報を得るために情報収集・評価目的の明確化が重要だが、近年は情報取得の困難さを感じている。特に児童相談所から得た情報利用の制限のため、過去の経歴取得の困難さに直面している。</p> <p>D氏はH学園が地域の支援を受けていると思う反面、施設と一般社会との間には子どもの社会性獲得に対する評価の断絶があり、反社会性への過剰な注目が起こりやすいことを気にかけている。非親和性と旧弊なイメージの払拭するために地域へ施設を開く必要がある。また職員・子ども評価の一体性があることから、施設の専門性を活かした地域貢献が必要だと考えている。</p>
論理記述	<p>42. CWのケアの均質性を担保するため、伝統への上乗せ技術の研修を導入している</p> <p>43. 研修の目的はCWがケアを自覚的にを行い、子どもが社会スキルを身に付けられるよう反復練習するものである</p> <p>44. SVの業務はCWの教育と自己覚知の促進である</p> <p>45. D氏はFSWが一人でソーシャルワークを行う権限に懐疑的である</p> <p>46. H学園ではCWとFSWは共同で支援計画を立て、FSWと管理職は共同でソーシャルワークの責任を負う</p> <p>47. H学園では生活と関係のパーマネンシーを重視し、子どもの生活場面を変えることなく担当CWがアセスメントできる能力を涵養している</p> <p>48. 広義の家族再統合概念を持てば、ケアや扶養の親子役割逆転の家庭復帰もありうる</p> <p>49. 親や児童相談所が出すあいまないメッセージは子どもを混乱させる。高年齢児は親を見切り、現実を受容する力が求められる</p> <p>50. アフターケアは臨機応変に対応するが、子どもが新天地で居場所を切り拓く力をつけるよう、居心地よくすぎない</p> <p>51. FSWの役割は支援ネットワークを構築することである</p> <p>52. アセスメントの精度が支援計画の実効性に影響を与える</p> <p>53. 施設へのさまざまな非親和性と古いイメージを払しょくするため、地域へ施設を開くことが必要である</p> <p>・他職種を兼務している場合、FSWとしての職分と、他職種の職分をどのように認識し、業務を分けているのか？</p> <p>・職員の入れ替わりの多さによって、児童養護施設が行える支援に違いはあるのか？</p>
さらに追及すべき点、課題	

E氏(P学園)へのインタビューデータ

No.	発話者	テキスト	(1)テキスト中の注目のべき語句	(2)テキスト中の語句の言い換え	(3)左を説明するようなテキスト外の概念	(4)テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	(5)疑問・課題
1	筆者	FSWとしての職歴はどのくらいですか？					
2	E	1年目。ここに来て5年です。					
3	筆者	事業団の職員ですか？					
4	E	そうです。転勤はあります。卒業後別の職業(幼稚園教諭等)、そのあとどこにきました。異動は分らないが、3年が基本と言われているのですが8年くらいいる方もいます。希望も出しますし、急にということもあります。	転勤はあります／3年が基本	職員の異動 短期での交代の可能性	職員の非永続性	職員の非永続性	
5	筆者	前にFSWをされていた方は？					
6	E	います。今次長です。去年一年だけで、その前にもう一人。転勤してしまいました。その人が最初のFSWだと思います。					
7	筆者	こちらの施設でFSW職につく基準はありますか？					
8	E	管理職に近い立場の人が今までなっていました。私が初めて違う立場でなりました。	私が初めて違う立場	FSW配属の基準変更 非管理職の配属	FSW配置の変化	FSW配置の変化	
9	筆者	若手にしたいということでしょうか？					
10	E	どうなんですかね、人材的に不足しているところもあると思うんですけど。年配の方が方が有利なことあると思うんですけど、家庭、家族に関わるときに。	人材的に不足している	職員構成の都合 人手不足	FSW配置の意図	職員配置の意図	
11	筆者	今は一人で担当されていますか？					
12	E	そうです。家庭支援という意味ではそれぞれの担当が窓口になって保護者と対話という情報交換している方もいます。私より長く勤めている方もいて、その方の方が親御さんとうまく連絡が取れたりというところがあるので、そういう方についてはすべてではないうですけどお願いして。やはり保護者の方も信頼関係ができてしゃべりやすい方もいるので。ただ相談相談所との連携についてはほとんど私が。もちろん次長、園長のときもありんですけど。	家庭支援という意味では、それぞれの担当が窓口になって保護者と対話という情報交換している方もいます／相談相談所との連携についてはほとんど私が	親対応はCWも担当／関係機関との窓口はFSW	職員間の分担 CWとFSW業務の不可分域 FSWの専従領域	FSWの専従領域	
13	筆者	FSWが制度化される以前の窓口はどなたが？					
14	E	おそらく園長、次長だったと思うんですけど、そこらへん僕も聞いたことはいないです。					
15	筆者	こちらの施設の平均入所期間はどのくらいですか？					
16	E	短いと1年くらい……一時保護を抜くと短くて半年くらいですかね。					
17	筆者	長いと18歳まで？					
18	E	そうです。					
19	筆者	家庭復帰のケースはどのくらいありますか？					

20 E	ほとんどないですね。私の経験5年のなかで、家庭に帰ったのが2件くらいですね、しっかり家庭に帰ったのが。	ほとんどない	家庭復帰事例の不在	退所傾向	家庭復帰事例の不在	5年間家庭復帰事例がないのは地域特性か施設の特徴か？公立であることとの関係は？
21 筆者	それは学齢期の途中で帰ったケースですか？					
22 E	そうですね。そういうのは。あとはほとんど18歳まで行きますね。	ほとんど18歳まで行きます	上限年齢まで措置が続く	長期入所の一般性	長期入所傾向	
23 筆者	県立で難しいお子さんを預かっているせいですか？					
24 E	そういう風に言われることもあるんですけど、必ずしもそうでもないかなと思います。					
25 筆者	それでも帰らないんですか？					
26 E	そうですね、今年もすべての子どもについて家庭に帰せるかどうか検討したんですけど、なかなか難しい子が多くて。					
27 筆者	児相の意見でも難しいと？					
28 E	そうですね。相談の結果ですね。					
29 筆者	全国的には帰す方向だと思いますが、それは1県の特徴でしょうか？					
30 E	どうなんですか？全国的にどうなんですか？施設によるという話も聞きますね。施設は帰そうとする施設もあるという話も聞きますけど。実際に一つずつ今入っている子らを検討した結果ちよと今ところは帰せないとか、帰したいけど引き取り拒否だとか、そういうケースが多いですね。	実際に一つずつ今入っている子らを検討した結果ちよと今ところは帰せない	全ケースでアセスメントの結果家庭復帰困難	復帰に否定的な判断	復帰可能ケースの不在	入所ケースの復帰判定基準は？
31 筆者	帰すにあたってなにがネックになっているのでしょうか？					
32 E	金銭的なことと、何らかの病気というか、そこらへんがありますね、なかなか働けないという。結局金銭的なことになってくるんですけど、原因をたどると体が悪いとか、精神的に不安定だとか、そういうことで収入が不安定な、安定しない家庭が多いですね。	金銭的なこと／何らかの病気／収入が不安定な、安定しない家庭	生活基盤の脆弱性／心理的要因	家庭復帰を妨げる要因	家庭の不安定	
33 筆者	退所時の進路はどうなっていますか？					
34 E	就職の方が多いですね。ただ今年の退所児は一人なんですけど、その子は進学すると言っているの、結果的に進学が多いということになりましたけど。例年ではやっぱり、他はほとんど就労ですね。	就職の方が多い／ほとんど就労	就労自立の優位性	退所後傾向	就労自立の優位性	
35 筆者	県立施設の特徴はどんなことでしょうか？					



47 E	やり方にもよると思うんですけど。その人の、事務所にしても子ども ものこととよく見ながらという方であればできると思います し。きつとそれが理想だとは思いますが、それは専任にしても えればそんなありがたいことはないですけど、実際問題それだけ では回らないところもある。他のところはどうかでしょうね？私も 知りたいところです。		専任にしてももらえればそ んなありがたいこととはな い／実際問題それだけで は回らない	専任願望 専任の方が案 ／職員配置上の困難 人 手不足 どちらが理想と は言い難い	職員配置への希望 職員 配置上の制限 理想の職 員配置	理想の職員配置のあいま いさ	
48 筆者	県立施設は職員配置が手厚いのでしょうか						
49 E	はい、周りの話を聞くと、たぶんそうなのかなと感じてはいますけ ど。みなさん結構疲弊してやめられていく方が施設はあるって聞か れますけど。まあ転勤があるってのがね、転勤することで息抜き ができる方もいると思うので。難職率は低いのかも知れないです。	転勤することで息抜きが できる方もいる	職員のバーンアウトを避 ける勤務体制	異動の予期しない効果		職員の非永続性の利点	
50 筆者	FSWとしてどんな業務をされていますか？						
51 E	思いつくところから言うと、児相と施設と連絡を取り合ってまず家 庭復帰ができるかどうか検討して、できない、もしできれば それに向かって進めていく。家庭訪問とかね、福祉司さんと一 緒に行って進めていく。できないのであれば、家族とどうやって途 切れないうようにしていくかということを考えていく。家族と引き離し たいという場合もあるので、それならそれでどうやって支援していく ということをして。	児相と施設と連絡を取り 合ってまず家庭復帰でき るかどうかが検討／家族と どうやって途切れないう ようにしていくか	児相と協働でのアセスメ ント／親子の関係維持の 模索	FSW業務内容 ケースの アセスメント 親子関係再 構築の模索		協働でのアセスメント 関 係再構築の模索	
52 E	あと里親さんとの連絡であったり、子どもたちの配置というか、マツ チングだったり。	里親さんとの連絡／マツ チング	支援者とのコンタクト 入 所児と支援者との引き合 わせ	仲介業務		仲介業務	
53 筆者	里親への措置変更をするということですか？						
54 E	えーとですね、ショート里親といって、I県ではあるんですけども、 他の県だとファミリーホームとか、週末里親とか、名前は違いま いですけど。I県ではショート里親といって週末に帰省させても らったり、その手配だとか、里親会、里親さん集まってもらって 意見交換してもらったり、帰ったら帰ったでこんな風だったよとい う話を聞いたりということもあります。	ショート里親	休暇時の短期里親制度				
55 筆者	移設内で開催するのですか？						
56 E	そうですね、ここに来てもらってやってもらったり。どんな様子だっ たかは電話で聞いたり、送ってきただけだった時に聞いたり。						
57 筆者	帰れない子をお願いするのですか？						
58 E	そうではなくて、ほとんどの段階では帰せない子ばかりなのであ れですけど、そういう風ではなくて。ショート里親さんは、私のイ メージでは親戚みたいな感じで付き合ってたまに会うおじさんお ばさんみたいな感じが合ったらええとありがたいですけど、お 願いしてるんですけど。だから家庭はあって、という子ばかりなの で。一応保護者の方にもショート里親さんと言ってね、こういう方 がみえて、帰れない時に遊びに行かせてもらってますという話を 保護者の方にもさせていただいています。	親戚みたいな感じで付き 合ってたまに会うおじさ んおばさんみたいな感じ	キンジップの疑似体験 距離のある永続的な関係	親族関係の体験		関係の疑似体験	
59 筆者	頻度はどのくらいでしょうか？						

60 E	子どもによって全然違うんですが、それこそ今年の前半までは週に1回、毎週帰省させていたでいる里親さんもいましたね。ただその子どもだんだん大きくなってきて中学生くらいになるとね、「オレはいいわい」ってなってくるので。そういう子はちょっと疎遠になってしまったりするんですけど。あと長期休暇のたびにだとか。月に1回という子もいますし。その子だったり、里親さんの状況によっていろいろ違うので。	その子だったり、里親さんの状況によっていろいろ違う	子どもと里親双方の事情に合わせて流動的に調整する	流動的なイベント調整	柔軟なスケジュール	
61 筆者	同じ里親さんにも願っているのですか？					
62 E	そうですね、大体なになにちゃんにはこの里親さんだねという風で、少しずつ関係を深めていってもらう。					
63 筆者	そのマッチングを施設がするのですか？					
64 E	そうですね。養育里親ということになると児童相談所が絡んでやってもらうんですけど、ショート里親については施設で登録して、施設で割り振って。	ショート里親については施設で登録して、施設で割り振って	FSW役割としての里親マッチング	FSW業務内容	仲介業務	
65 筆者	今どのくらい活用されているのでしょうか？					
66 E	20家族登録していただいて、ただその方たち全員に子どもを預けられるかっていうのかなかなか子どもの状況だったり預けてもらえん方もみえますね。中にはあの子がお嫁さんに行くまではと断ってくださる方とかもいるので。	中にはあの子がお嫁さんに行くまではと断ってくださる方とかもいる	永続的な関係の申し出 疑似親類関係	疑似キンシップ体験提供の申し出	半永続的な疑似キンシップ	
67 筆者	いつごろからある制度ですか？					
68 E	勉強不足ですけど、私が入ってきたときにはもうあったので、なんの疑問もなく。					
69 筆者	FSWの仕事としてあったということですか？					
70 E	そうですね、今はP学園ではそういう仕事になっていますね。あと保護者との連絡ですね。家庭訪問だとかになるとほとんど私が伺っていますね。あと新入所の関係ですね。一報いたいただいて、もちろん園長最終長絡んでのことになりますけど、どういう家庭でとか、相談センターと連携取りながらということでも。	保護者との連絡／新入所の関係	FSW業務 保護者対応 措置時の対応	FSW業務内容	保護者対応 措置時対応	
71 筆者	児童相談所に行って入所前のお子さんとか会うようなことはありますか？					
72 E	そういうこともありましたね。お子さんによっては女の子でなかなか男性より女性の方がという時もありますので、そういう時はまた別の職員にお願いしたりということはありません。					
73 筆者	入所児の先の見通しはどのように立てられていますか？					

74 E	今年に関しては、検討して大体これくらいだろうというのはあるんですけど。この子もかして行けるかもしれんねというところで家庭訪問するとやっぱり難しいねというのでも、それが婚姻調停中でうちにいる、それが終わったらということでも、それがいつ終わるかかわからないのね。なかなかその、「お金が貯まった」と一緒ですよね。お金が貯まったっていつ貯まるのっていうことなんですけど、はっきりした具体的な目標は立ちにくいといえ、立ちにくいですね。	この子もかして行けるかもしれんねということでも家庭訪問するとやっぱり難しいねというのでも、はっきりした具体的な目標は立ちにくいといえ、立ちにくい	復帰可能性の再検討 家庭状況把握すると復帰困難が明らかになる／明確なゴールが定められない	退所の見直し、アセスメント結果による復帰困難計画の不確定性	見通しの不確定性	家庭復帰に対するモチベーションの低さの原因はなにか？
75 筆者	具体的に、どういう段階の何を見て判断されるのでしょうか？					
76 E	まず入所理由が一番最初に来るとは思うんですけど。たとえば保護者の拘留が終わったということであればわりとはっきりしますよね。	入所理由	親子分離の原因が解消したか	家庭復帰判断の根拠	分離の原因	
77 E	他の子に関しては、面会だとかそういうのを重ねていくうちに保護者の方も引き取る意思が、まず引き取りの意思ですよ、保護者の。それから子どもたちの意思を聞き取って、そこでマッチしてからのことにはなると思うんですけど。でもやっぱり保護者の引き取り要求が強ければそれを、虐待でなければ聞きながら、でもまあ子どもが帰りたいということになればまたなかなか難しいです。	引き取りの意思／子どもが帰りたいということにあればまたなかなか難しい	親子の意向／子どもが拒否すると復帰を進めない	家庭復帰判断の根拠	親子の意向	
78 E	それこそ1年経ったりしてこの子帰せるかという検討を、大体でも半年に1回くらいするんですけど。1年に1回計画立てて、相談所と話しして、そこで帰せそうだなという子についてはアプローチしていきます。そこで帰せない子についても半年に1回は支援の見直しをするので。それは施設内でなんですけど。施設内でもこの子帰せるのではないかとということになればまたこちの方から児相に連絡してということになりますし、児相の方も保護者の方の生活環境がだいぶ変わって行けそうだと思うんですけど、まだそういうことの方から連絡をもらええるとは思いますが、まだそういうことが無いので。なんとも、現実にはないので、長期になっていくパターンが多いですね。	この子帰せるかという検討を、大体でも半年に1回くらいする／まだそういうことが無い／現実にはない、長期になっていく	全ケースの定期的な再検討／復帰事例の不在 長期化傾向	支援計画再検討の周期 家庭復帰プロセスの未知性	周期的な計画検討 家庭復帰プロセスの未知性	
79 筆者	業務で参考にしている本はありますか？					
80 E	FSWについては何冊かあったかな…あまりFSWだからって読んだ本はないですけど。いくつか心理学の本とか読んだり、でもそれはFSWのためかといったら違ふんですけど。里親とは何かという本とか。日々の業務の、子どもの。					
81 筆者	他施設のFSW同士の交流はありますか？					
82 E	今年度からFSWだけの集まりを年に3回だったかな。2、3回。今年からだと思います。	今年度からFSWだけの集まり	FSWの技術向上機会が開始した	施設間交流	FSWの施設間交流	
83 筆者	各施設からの要望で始まったものですか？					
84 E	そういうことなんですよ、きつと。私も今年度からなんでもなんでもないんですけど、いろいろ情報交換したり、この間は児相からも参加していただいて。児相の方にお願ひすることだとか、普段児相の方が思っみてえることを意見交換した回もありましたね。	情報交換	他機関・他施設のFSWと相談できる機会	ルーチン外の懇談機会	ケースを介さない意見交換	





101	筆者	そういうケースへの援助はどういうものですか？						
102	E	関係を切らさないようにということです。具体的に言うとうと、参観日だとか学校行事にこまめに声をかけるとか、学園行事に声掛けさせてもらったり、帰省だとかそういうことをお願いしますという電話をしたり。ちょっと難しいということであれば家庭訪問とか、来ていただいで面接してどういう風に思っておられるか聞き取りたりしていますね。	関係を切らさないように	関係維持型		親子維持型支援	親子関係維持への働きかけ	
103	筆者	帰せなくてもFSWの仕事はあるんですね						
104	E	そうですね、あると思います。取り方にもよると思いますが、それは家族再統合じゃないからと言われたら全然仕事になってないのかもしれないですけど、P学園でもそういう位置づけでやっているの、仕事はなくなることはないです。もうちょっと少なくてほしいくらいですね。	仕事はなくなることはない	家族再統合の広義理解によるFSW業務の普遍性		FSW業務の普遍性		
105	筆者	それがFSWとして施設から期待されている役割ですか？						
106	E	そうですね、そういう風にとっています。						
107	筆者	児相に期待することはありますか？						
108	E	あまり感じたことないですね。そういう風に思った時はすぐにお願ひしてしまおう。しかも児童相談所さんも断られたこと、よほどなのので。	そういう風に思った時はすぐにお願ひしてしまう	児相との良好な関係要求できる関係	関係機関との良好な関係		関係機関との良好な関係	
109	筆者	連携は十分取れている？						
110	E	そうですね、たぶんうまく連携が取れていると思います。一緒に飲みに行ったりするので。	たぶんうまく連携がとれていると思う	児相との関係への満足	FSWの連携への満足度	連携の満足度		
111	筆者	意見が食い違うことはないのですね						
112	E	そうですね、私は特に感じたことないですね。結構まめに電話したり。家庭訪問とかあると一緒に言かせていただいたり。行くときはぜひ声をかけてくださいと伝えてあるので。	結構まめに電話したり	緊密な連携を取る	連携の努力	緊密性維持の努力		
113	筆者	制度化されてかえってやりにくくなったと感じることはありませんか？						
114	E	制度化前がわからないので、比べることはできないんですけど。						
115	筆者	制度上の課題だと感じられることは？						
116	E	家庭に帰す…再統合のとらえ方でずいぶん違うとは思いますが、でも全般的に家庭に帰すだけが再統合じゃないという風な考えです。SWが動いていないところもあると聞くので、全体的にもっと機能できるといいかなと思うけど、私自身は必要なことだと思えますし。	全体的にもっと機能できるといいかな	FSWの専門性発揮の必要性の認識 業界全体でFSW活用が必要	制度上の課題 FSW活用の必要性	FSWの効果的な活用		
117	筆者	もっとあればいいと思うものは？お金ですか？						
118	E	それはもちろん、そこは一番大きいところですけど。お金があれば一番いいんですけど、人件費だとかに食われてしまっていますけど。	お金があれば一番いい	運営基盤の安定	制度への要求 制度運用の基盤	制度の安定運用への要求		

119 E	あんまりやっていて、ケース自体で困ることはありますけど、制度上で困ったことは特に、あんまり感じたことではないですね。他の人がどう感じているかはあれですけど私自身は、困ったら児相に相談すればなんとかかなというパターンが多いので。	制度上で困ったことは特に、あんまり感じたことではない／困ったら児相に相談すればなんとかかなる	現状の困難には遭遇していない／児相が頼りになる	現状への満足 児相への信頼感	児童相談所への信頼	
120 筆者	困るのはどんなときでしょう？					
121 E	子どもとの直接の処遇の中での方が多いですね。ケアの方で、担当の求めていることと児童相談所の求めていることがたまに違うことがあるんですね。この子は面会をもうちょっと進めたいと児相は思っているんですけど、その辺の食い違いはあるんです。それは間に入って、こちらの思いを伝えたり、児相の方にも伝えますけど。もっと経験豊富な方もいるので相談したりして、施設としての考えをある程度出して担当にも伝えてという感じですね。困るといっても相談すれば解決することだと思うので、そこまで深刻ではない？	担当の求めていることと児童相談所の求めていることがたまに違うことがある／困るといっても相談すれば解決する	CWと児相の意見の相違 板挟みのFSW／困難度は低い 解決可能	軽度の困難事例 ケース 理解の相違	意見調整	
122 筆者						
123 E	そうですね。連携上手にとれば。ただ忙しいですよ、やっぱり。	忙しい	業務に忙殺されている	業務量と時間のアンバランス	忙しさ	
124 筆者	専業ならもっと時間がとれるのにと感じますか？					
125 E	専業ならもっと時間が取れるのになと思う反面、子どもの状況は分かりにくくなるかもしれないですね。今は程よいと思いますけど。	今は程よい	CWとFSWの業務バランスの良さ	業務バランス	妥当な業務バランス	
126 筆者	家族再統合とは何かということが施設内で共有されていますか？					
127 E	あんまりそこについてはしつかりと話し合ったことではないですね。私もあんまり経験がなくて、自分で本で見たリインテグレーションで調べたりして、どういふもんなんだろうと。結構アンケートとかも多めで。それで気づかされることもあって。どういふ風に思ってるんだらう、わからんわと思ったりして、いい機会にはなるなと思ったりします。	しつかりと話し合ったことではない	家族再統合について職員間での意識共有はしていない	家族再統合概念の共有の不在	概念共有機会の不在	
128 筆者	仕事をしていたプレッシャーを感じることはありますか？					
129	あんまりプレッシャーを感じるというところはないんですけど。日々の仕事に追われるというところはあるんですけど。仲を取り持たなければいかんわというところはあるんですけど。職員同士の関係も悪くないと思うので、割と良いことというか意見も…私が間に入らなくても直接言い合えたりしているんで、あんまりプレッシャーを感じたことはないかもしれないですね。	あんまりプレッシャーを感じたことはない	板挟みの困難もない	職場への満足	労働環境への満足	
130 筆者	施設外からの視線の厳しさを感じることは？					

131 E	あ、それは感じますね。地域の方からですよね、それはありますよね。そこはこれからどうにかしていかなければいけないとちよūd 思っていたところで。「施設の子なんやね」と子どもたちが言われる。特にタイガーマस्क騒動で、P学園にも来たんですけれど、「児童養護施設って、あそこから来た人なんやね」と子どもたちが言われて、それを「自分らここにおるの悪いことなんかな?」とかいう子どももいました。発達に遅れのある子は多いんですけれど、そういう中で施設に入ってる子はバカな子が施設に入ってるんやないの?」そんな見方を子どもだから仕方ないんですよね。でもそういうのでつらい目にあっている子もいたんで、もっとこちらのほうから学園とこういうところなんだよということをもっと発信していかなければいけないなと思ってのことです。	地域の方から/もっと発信していかなければいけない	周辺からの批判的なまなざしを感じる/情報開示の必要性	施設外からの視線 地域への自発的な開示の必要性	地域へ施設を開く	
132 筆者	地域の方を施設に招待したりは?					
133 E	秋に学園祭とか、夏祭りとか、ボランティアは常時募集しているんですけれど。そういうところではやっていますけれど、場所的にも山中でなかなか地域の方と交流というのが難しくて。登校する時には分団とってこの地域はここで固まって、という感じなんですけれど、ここはもうここだけでひとつの地域になってしまっていますので、やっぱり難しいですよね。あと自治会もなかなか入れずにいるので。	場所的にも山の中でなかなか地域の方と交流というのが難しく/自治会もなかなか入れずにいる	地域交流の困難さ 立地条件の不利/地域への所属ができない	地理的条件 地域への開示の困難性	地理的困難さ	
134 筆者	学校は遠いのですか?					
135 E	遠いです。小学校は歩いて行かなければいけないんですけど、最寄駅の向こうなので、4キロ弱。帰りは登りだからきついですよね。中学生は自転車使えるんですけど、行きはいいですけど帰りはきついですね。					
136 筆者	近くに大学もないようですね。					
137 E	そうですね、学生ボランティアさんイベントごとのときに来てもらうことが多いですね。					
138 筆者	日常的なボランティアは					
139 E	むずかしいですね、そういうのがあるといいんですけどね。					
140 筆者	なにか工夫されていますか?					

141	E	<p>広報誌出してるんですけど、もう少し幅広く出すとか、学校と連携をとって。いま幼稚園に行っている子もいるんですけど、その幼稚園の子はP学園はこういうところなんだということがわかりながらいられてくれるんですけど、小学校に入るところか知らないです。そういう子たちに、そういう子たちというからお母さんたちです。僕もこの間上の者と話しててびっくりしたんですけど、学校の保護者の方とかで「悪いことしたらP学園入れちゃうよ」みたいなことをね、そういうことあるよって話を聞くんです。それって子どもにとってはまったく間違った知識を与えてしまってる。そういうことを言われればやっぱり「バカだからP学園行ってるんやな」とか「施設行ってるんやな」という風になってきてしまうのですね。そういうのが無いように園長なり小学校で話させてもらう機会だとかそういうのを増やしていければ。まあ学校とも今小学校は特にいい関係でいるので、そういうところで話をさせてもらえたらなあ。保護者に対してですね。他の方に話せばいいんじゃないかなと。</p>	<p>やっぱり施設ってどういうところが知らない／そういうのが無いように園長なり小学校で話させてもらう機会だとか／保護者に対してですね。他の方に話せばいい</p>	<p>一般社会の無理解 養護施設の情報不足／一般への開示・広報のチャンネル／地域の大人に施設を理解してもらう</p>	<p>社会の無理解 広報機会の獲得 啓蒙機会の獲得希望</p>		
142	筆者	<p>児童養護施設自体が知られていないのですね</p>					
143	E	<p>そうなんです。タイガーマスクとかでこういうところがあるというのは知られたんですけど、虐待を受けた子たちが今はたくさん入っているという情報も流れるじゃないですか。そうするとここから通っている子たちはほとんど虐待を受けてる子たちなんだと見られるのも悲しいこと。その辺が知ってもらえることはすくなくいいんだけど、そういう風にみられるのは悲しいところで。公の場で話す機会を作ってもらって施設長が理解を求めようかな話してもらったりというのはやってほしいなと思います。でもわからんでもないんですけどね、知らない人からしてみれば「あそこ入れちゃうよ」と言ってる子どもが黙ればね。それが悲しいなとは思ってますね。</p>	<p>知ってもらえることは、すごくいいことなんだけど、そういう風に見られるのは悲しい</p>	<p>児童養護施設が有名になる利点と、被虐待児の集団と見なされることの複雑な心境</p>	<p>偏った理解 複雑な心境 偏った認知への葛藤</p>		
144	筆者	<p>FSW業務の課題だと感じられることは？</p>					
145	E	<p>勤務が半分は自由じゃないですけど、FSWとして動かしてもらっているところがあるのでいいんですけど、そういう時間がしっかり保障されないといけない仕事だとは思いますが、出ることが多くなるので、相談所に行ってみたり、家庭訪問行ったり面会に行ったりというところもあるのですね。</p>	<p>そういう時間がしっかり保障されないといけない仕事</p>	<p>FSWとしての業務時間の確保が不可欠</p>	<p>業務の課題 専従時間の確保 確保</p>	<p>FSW専従時間の確保</p>	



No.	発話者	テキスト	(1)テキストの中の注目すべき語句	(2)テキストの中の語句の言い換え	(3)左を説明するようなテキスト外の内容	(4)テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	(5)疑問・課題
	ストーリーライナー	<p>P学園は公立の児童養護施設のため、職員の非永続性があるとE氏は指摘する。入所児・退園生にとっては愛着の形成困難な施設だが、退園生には関係の優先で対応する職員を決めている。職員にとってはバーンアウトしにくいという職員の非永続性の利点もあり、E氏自身も労働環境への満足を抱いている。</p> <p>E氏がFSWになってから、P学園では人手不足という職員配置の変化があった。E氏はFSWとCWの兼務をしており、仕事の進め方は二職種の反復的な業務進行である。CWを兼務することについて直接処遇の利点があるが、FSW業務に就いている時間は組織内の負担になっているのではないかと危惧する。E氏自身はFSWが専業であるべきかをめぐって理想の職員配置のあいまいさを感じている。現状はFSW専従時間の確保がなければ立ち行かない忙しさがあるが、これが妥当な業務バランスではないかとも感じている。</p> <p>FSWの専従領域として児童相談所との連絡がある。児童相談所とは協働でのアセスメントを行う。児童相談所に対しては頼めば叶えられるという児童相談所への要求と満足があり、E氏は児童相談所への信頼を抱いている。相補的な協働体制の構築によって親との関係構築の優先性も確保できる。CWと児童相談所との間の意見調整を迫られる場合もあるが、概ね関係機関との良好な関係を保っているのは、緊密性維持の努力をしているためであり、連携の満足度は高い。</p> <p>その他親子の関係再構築の模索、里親と子どもの仲介業務、保護者対応、措置時対応などを行っている。里親は入所児に関係の類似体験を提供している。双方の柔軟なスケジュール調整をしなから関係を深め、半永続的な類似キッズの提供をされている子どももいる。</p> <p>入所児については定期的な計画検討を行い、主に分離の原因、親子の意向を復帰判断の根拠とする。しかし家庭の不安定、見通しの不確実性から、家庭復帰事例の不在、復帰可能ケースの不在が現状である。そのため全体に長期入所傾向にあり、実際には家庭復帰プロセスの未知性がある。したがって現実の支援には就労自立の優位性がある。</p> <p>職員間で家族再統合とは何かという概念共有機会の不在はあるが、E氏自身は広義の家族再統合概念を採用しており、FSW業務には家庭復帰支援に矮小化されないゴールと業務の多様性があるとしている。親子関係維持への働きかけも含めると、FSW業務の普遍性が明らかになる。E氏は今後は家庭支援の積極性も必要だとし、良好な再評価の促進が施設にできる家庭支援だと考えている。</p> <p>近年、FSWの施設間交流も始まり、児童相談所ともケースを介さない意見交換ができるようになった。業界内にはFSWの名称と業務実態の乖離が生じている現状もあり、E氏はFSWの効果的な活用が必要だと指摘する。家庭支援専門相談員制度導入によってFSW配置の制度的根拠ができたが、さらなる制度の安定運用への要求もしていきたい。</p> <p>E氏はP学園がもっと地域へ施設を開くべきだと考えているが、地理的困難さも抱えている。地域社会の施設に対する偏った認知への葛藤もあるため、啓蒙機会の獲得希望を持っている。</p>					
	論理記述	<p>54. 職員の非永続性が子どもには愛着の障害となり、職員にはバーンアウト予防になっている</p> <p>55. CWとFSWの兼務は忙しく他の職員への負担があるが、子どもを把握できる利点もあり、現状の兼務割合は妥当である</p> <p>56. 児童相談所と緊密な関係を保つ努力の成果が出ているので、他機関との関係には満足している</p> <p>57. 里親は入所児童に半永続的な疑似キッズ体験を提供している</p> <p>58. 家庭復帰判断のポイントとプロセスは定まっているが、実際に復帰させる事例はほとんどない</p> <p>59. 家族再統合は家庭復帰だけに収斂されず、FSWの業務は普遍的である</p> <p>60. FSWが名目だけにならないよう、より活用される必要がある。特に積極的な家庭支援が求められる</p> <p>61. 児童養護施設の偏った理解を解消するために、地域へ施設を開き、地域住民を啓蒙する必要があるが、地理的困難さがある</p>					
	さらに追及すべき点、課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭復帰へのモチベーションの低さと、施設の特性・職員の専門職アイデンティティに関係はあるか？</li> <li>・施設内部、外部からFSWがどのように見られているのか？</li> <li>・職員の異動がある公立施設で、パーマナンス・保障や職員の専門性・専門職意識の担保はどのように行っているのか？</li> </ul>					

F氏(W学園)へのインタビューデータ

No.	発話者	テキスト	(1)テキスト中の注目すべき語句	(2)テキスト中の語句の言い換え	(3)左を説明するようなテキスト外の概念	(4)テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	(5)疑問・課題
1	筆者	今日お聞きできるのはV学園のご経験ですか？					
2	F	V学園と、初期の頃はW学園でもお答えできると思います。もともここです17年間やっていますから。この学園というのはいくつもの建物の中でやっていますから、ほぼソーシャルワークもやってたんです。1年目から。やらざるを得ないような状況で、家族再統合の問題も。数はそれほど多くはありませんが、組んだということはございます。5年間は専任でいらしてはいるんですが、両方で経験的なことで言えば事例数だけはいっぱいあります。	ほぼソーシャルワークもやってたんです。1年目から。やらざるを得ないような状況	入職直後からソーシャルワークを担当 他の選択肢がない 当然やるべきという環境	環境に強制されたソーシャルワーク	CWの業務としてのソーシャルワーク	
3	筆者	V学園は県立の施設なんですか？					
4	F	J県の土地建物は民間委託という形でまだJ県の所有なんです。民間移譲という形で貸与なんです。1回目の契約で私が行って、5年契約なのでもう1年残ってますが、今年の1月に結果が outcome で、12月から調査が入っていて、インタビュー形式で入っていて、この事業所を適当と認めると。他はどこも手を挙げません。挙げるわけないんです。だって儲からないもん、児童は。それでやっているのね。					
5	筆者	ではJ県の施設なんですね。お子さんは？					
6	F	100%J県。こもそうです。100%県の民間運営委託施設なんです。					
7	筆者	それで加算がついているのですか？	ここは人員配置が厚い				
8	F	そうです。ここは人員配置が厚いよ。25人でワーカーが今のところね、定数で11人。ケアワーカーが11人。2対1か。園長も指導員校だから。厚いんです。ありえない。V学園だってケアワーカー19に、事務室に3人いるでしょ？個別とFSと基幹がいて、直接処遇25人だよ。2対1ですよ。					
9	筆者	遠方からの入所が多そうですが、保護者の面会はどのような感じですか？					
10	F	傾向的には、逃がすケースが多いんです。親からちよと難しそうとか、自宅に近くない方がいいケース。あるいは親がもうどうしようもないから復帰できないだろうなと思われケースを逃がすんです。	傾向的には逃がすケースが多いんです。親からちよと難しそうとか、自宅に近くない方がいいケース	親子分離が目的のケース容易に親が近寄れないことにメリットがある 復帰を目指さない	親子分離企図 家庭復帰の否定	親からの隔離目的	施設の立地による入所児童の傾向の差があるのか
11	F	ただし、今はどうしようもないと思われていても、これくらいの可能性があってもつないでいくじゃないですか。それがFSWの考えです。今、今アミリーソーシャルワークの。それでV学園でも、え、これはちよとないだろうなと思ったケースであつたという間に帰しちゃったケースもあるのね、お父さんがガラッと変わって。そのかわり虐待者じゃないから。それで行ったというケースもあります。もうちよと時間がかかるかなと思ったケースで早まったこともありません。それも実践ですよ。	これくらいの可能性があつてもつないでいく／これはちよとないだろうなと思つたケースであつたという間に帰しちゃったケースもある	わずかなつながらに賭ける傾向／不可能と思われたケースも短期で復帰があつた	わずかな可能性に賭ける傾向 / 思いがけない家庭復帰事例	復帰可能性への執着 思いがけない復帰	





23 F	ワーカーとして子どもとの内容とかガッツリ把握したうえで親と対峙していかなくてはいいですね。親から求められて応えられるのは直接見ている職員なんです。この園長とかFSWの強みは間近で見ているから。うんと強いんです。これがユニット化したりGHで分散化していくとそうはいかないので。	親から求められて応えられるのは直接見ている職員	親に対して引け目を感じない、競り負けないのは子どもと日常を共にし、様子を把握している職員	親に負けない職員 親以上の子ども把握の要求	親に負けない職員	
24 F	結構縛り入れてるんです。FSWに対して。泊まりをするなっていうのがあるんだけど、泊りをしないといけない、見えないところもあるんです。ユニットが進んじやうと。見ていかないと。その時だけやりやいってわけじゃないから。いろいろ特化してやっていいうやり方もありますけど、結局は入り込んでいかないとわからないと思うよ。	泊まりをしないと逆にできない、見えないところもある／結局は入り込んでいかないとわからない	FSWはケアにあたらないことになっているが、宿直の時に子どもの様子がよく見える／外から眺めるのではなく、生活を共にしなければわからない	直接ケアから見えてくる子ども 生活共有の必要性	共同生活による子ども把握の必要	
25 F	だから共同でやるとか。統括していくのはFSWなんだけど、CWと共同でやるとかというのが主流だと思います。	統括していくのはFSWなんだけど、CWと共同でやるとかというのが主流	FSWはマネジメントをし、FSW業務自体はCWがやる 二人三脚	CWとFSWの二人三脚	CWとFSWの協働	
26 F	でも反面、FSWの良さは、親サイドにつけるといふ良さがあるんですよ。親にきっちりつける。親に寄り添うという形ですね。決して親の悪口を言わない。親の言い分をとにかく認めていく。ていうところで、否定をしないというところが大事だなと。児童相談所とやることにその姿勢を崩さないでおいというところで成功した事例もありますけど、親不信が激しいお母さんお父さんいるもの。取られるわけですよ、子どもを。児相、なに？って感じなんですよ。	FSWの良さは、親サイドにつける／親にきっちりつける	子どもを担当しないFSWは親の味方になれる	FSWは親の味方	FSWは親サイド	
27 筆者	児相との役割分担は？					
28 F	やります。私がここまで突っ込むから頼むね、という。一緒にやってくると阿吽の呼吸になっちゃうんですよ。あ、突っ込んだなと思うと、ここでもとめようかと思うたり、私の方から突っ込んで、児相がうまくとめたりとか、共同作業できる場合があるの。児福司と連携が取れると。ただ情報共有はすぐにやるの。電話が入ってきたら、お母さんからこういう電話が入ったよと、児相から。施設にこういう電話が入ったよとすぐに情報交換しちゃう。そうすると合わせることができる。それうんと大事なんです。	一緒にやってくると阿吽の呼吸になっちゃう／情報の共有はすぐにやる	児相とも長年協働してくと自然に息が合う／常に連絡を取り合う 保持している情報の同一性	児相との協働感覚の向上／情報一体化	協働感覚の向上 情報共有	
29 筆者	それができていないと？					
30 F	できません。分裂しちゃう。					
31 筆者	こういう施設だと、家庭復帰の割合は低いんですか？					
32 F	低いですね。この例は出せないけれど。V学園で今年3人出るんですよ、高校生が。そのうち2ヶース引き取り。					
33 筆者	就職で？					
34 F	いや進学で。昨年だと引き取りが結構いたの。結構多かったですよ。昨年は。					
35 筆者	全対象では割合はどのくらいですか？					

36 F	今年ここだったって半々だよ。二人出るんだけど。向こうは引き取りがあった2人。要は、ソーシャルワークの失敗っていうのがあって、高校で普通は引き取られるってないんですよ、高卒で。進学だって。だいたい中学の時帰さないとかダメなの、すんなりいくのは。普通は。普通はですよ。だって帰せる状況にあれば、中学生高校生って自立できていんだから。介助必要じゃないしさ。だからそれは申し訳ないけど児童相談所の失敗なんだよね。負の遺産。私SWだったから帰しちゃった。っていうケース、中3の時に。家庭復帰しなさいということ。だから結局もうちょっと働きかけ強くてもよかったかなって思うよね。通常なしでしょ、高卒は大体引き取りはないでしょ、どここの学園でも。特にJ県なんかはそこらへんはつきりして三分のーくらい引き取りがあるって聞きますよ。うちも帰そうと思えば帰せちゃうよ高3だけ。	ソーシャルワークの失敗 ／中学の時帰さないとかダメ／中学生高校生って自立できていんだから／児童相談所の失敗なんだよね。負の遺産	家庭復帰への働きかけ不足 足 児相の怠慢／復帰のタイミング 中卒時がラストチャンス／高齢児は身の回りのケアのニーズがない 親の子育ての負担が少ない	アプローチ不足 ケース進行の失敗 家庭復帰のタイミング 中卒時の最終性 年齢によるニーズの 変化 復帰とケアニーズの 反比例	ソーシャルワークの失敗 家庭復帰のタイミング 中卒時の最終性 年齢によるニーズの 変化 復帰とケアニーズの 反比例	ソーシャルワークの失敗 家庭復帰のタイミング 中卒時の最終性 年齢によるニーズの 変化 復帰とケアニーズの 反比例
37 F	ただ途中で帰せるケースが今ないから。高齢児が多いので、中学から来ると大体ムリ。小学校から中学の1年生くらいから来れば中3で帰せるっていうのがありますけど、中2の今頃とか中2の半ば以降で学園に措置されたケースはもうほぼ絶望と思っというていいよ。ワーク出来ないよ。	中学から来ると大体ムリ ／中2の半ば以降で学園に措置されたケースはほぼ絶望／ワーク出来ない	高齢入所は困難 復帰に 向けた支援の時間不足 ソーシャルワークのプロ セスが間に合わない	時間的制限 ソーシャル ワーク時間不足	時間的制限 ソーシャル ワーク時間不足	支援時間の制限 ソー シャルワーク時間不足
38 筆者	ワーク出来ないとは？					
39 F	まず親との関係が、FSWと保護者との関係を構築するのにやはり時間をかけないと無理ですよ。1年かかりますよ。関係ができてさあこれから始めようという時に、子どもが養育教養から高校に進学というのがあるから、そうすると待たなくてはいけないわけですよ。そうするとほとんど無理ですね。	FSWと保護者との関係を 構築するのにやはり時間 をかけないと無理	復帰への働きかけの基礎 作り 親と対話できる状況 作り 慎重に構築	基礎形成の時間不足	基礎形成の時間不足	関係形成の時間不足
40 筆者	子どもにも不利になるからですか？					
41 F	進学不利になるし、転校もできないし。高校に入れてしまおうたいてい行かせちゃうね、施設の子は。					
42 筆者	それで3年待たなくてはいいけない？					
43 F	そう。ありえますね。まああんまり変わらないけどね、親は。	あんまり変わらないけど ね、親は	親子間の時間感覚の差	親子の時間感覚の差	親子の時間感覚の差	親子の時間感覚の差
44 筆者	帰せるか帰せないかは、どこを見て判断しているのですか？					
45 F	まず第一は子どもの安全の確保ができるかどうか。虐待されないとかご飯ちゃんと食べられるとか。まあ年齢によって違うと思うんですよ。大澤さんガイドラインもってない？帰せるとか帰せないとか県が作っているやつ。	子どもの安全の確保／年 齢によって違う	帰宅して子どもに危険が ないか／復帰時点での年 齢によって判断のポイン トが異なる	復帰判断ポイントの年齢 による相違	判断ポイントの変遷	判断ポイントの変遷
46 筆者	厚労省のではありませんか？					
47 F	まあ厚労省だよなあれ。17年頃のやつ。あれに準じています。チェックリストに準じて。					
48 筆者	定期的にチェックをするのですか？					

49 F	帰す前に、基本的には自立支援計画を立てる時にケアワーカーと一緒にやるというのが大前提ですけども、ケースが少ないので、逆にね、J県は児童相談所がほとんど動く。それを提示してくる。家庭復帰ケースという形で。これはどうですかと。どんどん押し進めるんです。	自立支援計画を立てる時にケアワーカーと一緒にやる	国のガイドラインに沿ってGWとFSWが共同でアセスメントする	ツールに基づく協働アセスメント	ツールに基づく共同アセスメント	
50 F	ひっくり返すものもあるけどね。なんでこれが家庭復帰なんだ。ふざけんなよなんでもこれが準家庭復帰なんだってね。準も無理でしょ、2、3年で帰せると思いますが？って施設側から結構言うんですよ。	施設側から結構言う	児相に対する進言	児童相談所と施設の関係 進言力	児童相談所への進言力	
51 F	そうすると担当が変わると「ああそうですかねー」って言うの。児福司も一人ひとり資質が違うから。両極端。	児福司も一人ひとり資質が違うから、両極端	行政職員の個人差 良い人と悪い人	行政職員によるブレ	行政対応のブレ	
52 F	S県は帰すみたいね。他の県はできる限り中卒で帰しちゃやうみたいね。まあその方が妥当だけだね。	他の県はできる限り中卒で帰しちゃやうみたい	家庭復帰判断の地域差	家庭復帰判断の地域差	家庭復帰判断の地域差	
53 筆者	あまり長くても					
54 F	不幸になりますね。					
55 筆者	高卒までのケースが多いですか？					
56 F	そうですね、W学園もV学園も多いですね。高卒まで居たのが。小学校から入所して。					
57 筆者	平均入所期間はどのくらいですか？					
58 F	だいたい中学2年生から来ると5年くらいいるんじゃないかな。だいたい他の学園だと3年とかそんな数字が出てくるはずですけど、この施設は長いんですよ5年くらいいになっちゃうかな平均すると。W学園にしてもそうだな。中学校の入所が多いから。	この施設は長い	入所期間が延びる傾向	入所傾向と期間の一致	入所傾向と期間の一致	
59 筆者	J県の平均より長め？					
60 F	長めですね					
61 筆者	入所時の見通しはどんな感じなのですか？					
62 F	見立てていくと、まず親の係累とか親の状況を見ていって、正直親の精神疾患とか知的障害だと帰したいけどロングかな、フィニッシュまでいくかなという見立てはしちゃいますよね。	正直親の精神疾患とか知的障害だと帰したいけどロングかな、フィニッシュまでいくかな	親の状況で入所期間を予測する 障害、疾患は長くなる傾向	見通しのポイント 親原因の長期化	親の状況からの見通し	親に対するサポートがあっても復帰不可能か？
63 筆者	短期の見立てのケースもありますか？					

64 F	なかにはあります。今回ですわね私が最初の最後に入所を承諾したケースなんです。親が全面的に拒否してるとは、親が社会的に力を持っている親、要は仕事をきっちり持っている親御さんで話をしていくと、進むんです。結構、振り返りができるから。自分分がやったことと、帰せる可能性はうんと広がってくる。今はダメなだけで、今はこの子の顔なんか見たくないという、出ててちやうど、でもすごいんですよ。え〜って感じの仕事ですよ。大学の教授とかないけど、普通の、契約的なところがあるんだけど。普通に、生活保護じゃなくてアパート借りて生活できちゃうような、母子。父子は…父子の場合女の子帰すっていうと難しいよね。	社会的に力を持っている親／自分がやったことと帰せる可能性はうんと広がってくる	社会的地位の高い親、底辺でない親／自省できる／復帰の可能性を残す	親の社会的地位と在所期間の関係、内省力がある親元には復帰の可能性が高い	親の社会的地位・内省力と復帰可能性の相関	
65 筆者	年齢が上がる？					
66 F	うーん、難しいね。ただそこででんでん返しが出るのが、児相の調査不足もあるんですよ。例えば、父子家庭、母子家庭、かたつぼの親がいるじゃないですか、出てった方の親、それがあらわれちゃう場合があるわけ。で、うんとしっかりすると、お父さんで、主訴はお父さんの養育困難で来てるんだけど、お母さんの方に繋ぎ変えて帰すって方法もあるんですよ。	かたつぼの親、いるじゃないですか、出てった方の親	入所時に問題になっていない方の親	社会資源になる親、可能性の急浮上	引きとり可能な親の急浮上	
67 F	それが、でもそれ大澤さん無理なの。1か月2か月の一時保護期間中にそこまで調べるの無理。	1か月2か月の一時保護期間中にそこまで調べるの無理	入所前に子どもの背景を調べる時間が足りない	入所前の調査時間不足	児童相談所一時保護期間中の調査時間不足	
68 筆者	児相のワーカー100件ですものね					
69 F	うん、絶対無理。だからそこを担ってるんだよね、意外に。施設のFSWが。そう緊いって、行く可能性があるんですよ。	そこを担ってるんだよね	児福司のできない部分をFSWが補う	児童福祉司とFSWの補完関係	児童福祉司とFSWの補完関係	
70 筆者	児相のアセスメントもマチマチのようですが					
71 F	アセスメントも、一応D学園の「入所の整理と評価」っていう形ですね、それちよつと後で見せします。面白い資料持ってるから。それを見て、まあ入所の段階で聞くのか、アセスメント、あるいは入所以前の段階で聞くのか、ほんとは以前に聞いていた方がいいんじゃないからね、それをつきつけて、ある程度整理しておくんですよ。内容を。そうすると次につなげていくんですよ。やりやすく。	ほんとは以前に聞いてあったほうがいい	情報収集の時期、早い方がいい、プロセスとの関係	適正な情報収集時期、収集期とプロセスの関係	適正な情報収集時期	
72 F	私たちは今大澤さんがおっしゃったように、アセスメントいい加減でも、すごいケースあるんですよ。子どもが4か月保護所ですよ、4か月半。そんなの取りますよ。かわいそうじゃないそう。即入所OKしました。4か月半ですよ？一時保護所に。人権問題ですよ。んなの。	アセスメントいい加減でも	入所前の情報収集不足でも受け入れることがある	情報不足でも受け入れ	事前情報に拘泥しない受け入れ姿勢	
73 筆者	一時保護期間は伸びていますね					

74 F	行き場所がないから。結局ね、行っても、入ってもね、まあわからんでもないわけ。一回施設に入ると、1年はいますよ、まちがいない。やっぱり私たちも児童相談所も責任をもって親元に帰すときは調べますから。細み立てますから。最短期でも半年はソーシャルワークをしないは無理です。いろいろなところ関係機関つなげたりとか考えていきます。だから、児相が慎重になるんですよ、施設入所に対して。	一回施設に入ると、1年はいます。最短期でも半年はソーシャルワークをしないは無理。児相が慎重になるんですよ、施設入所に対して	一度入所すると一定の間は在在する。ソノソノワークに必要時間がある。決まってる。ソノソノワークを空けておきたい。入所させたい。入所させたい。入所させたい。	先を見通した隣接 入所と定員確保の葛藤	入所期間を見通した措置の躊躇	
75 F	ただでさえ施設は取り合いですから。早く情報を得て、知っている施設が多いほど児福司は有利だから頼んじやうだよね。という事なんですか。	ただでさえ施設は取り合いです	入所させたい子の数と定員のミスマッチ	ケースと定員のミスマッチ	ケースと定員のミスマッチ	
76 筆者	空気を確保しておきたい？					
77 F	でしょうね、児相の方向性としては、5年くらい前だった入所してあるようなケースでも入所させないですよ、なかなか。それが現実です。10年前ならあり得ないというケースが、まだコロナ在宅で見えています。でもそれを全部拾い上げて行っちゃやうと、満床はあつという間だから。いくら子どもが入ってこないとかいろいろ言うても、たぶん入所調整をしないと思ふんだよね。	5年くらい前だった入所しているようなケースでも入所させない。入所調整をしない	入所判断の変遷。だんだん入所させなくなってきた。入所している。入所の依頼がない	措置判断の変化	措置判断の消極化	地域差はどのくらいあるのか？
78 筆者	一時保護所も長くと子どもが暮れるようです					
79 F	一時保護所で暮れるって、一時保護所の職員も、質は落っこってるもん。そりゃそうですよ。だって実際に、私施設長になっちゃったけど、私が児福司の任用であるでしょ？手を挙げたら一発ですよ。採ってくれますよ。J県もスツコイから、ずるいですよ、たぶん今は福祉司さんね、供給できているわけ、施設の指導員さんとか残ってるから。大量に採った時代は、40代の半ばとかいるんですよ。ところがそこから下が、あと2、3年たつてくると急に減って減ってくるわけ。バブルが崩壊した後、福祉職を採ってないんですよ。そうすると供給源がなくなってくるわけ、児童福祉司の。何をやるかっていうたら、これですよ。民間で引っ張ってくるの。間違ったやり方から。何もなしで身分保障されて給料が上がるやつ、泊りがなくなつて、そりゃ行きますよ。当たり前ですよ、施設長の枠なんつーつかないのに福祉司の枠があるっていえばね。任用がないっていえば、任期がないで60までいっていけばやるでしょうね、普通は。今任期があるから、キャリアになるっていうと試験難しいから、受からない試験らしいんですよ、年間5人とか3人とかしか。すごい難しいんだって、数学とか(笑)	これまで同った施設では、かなり帰している施設と、5年間帰していないという施設があったのですが				
80 筆者	それ極端だね、5年間もないって。それは極端にまた少ないな。だってV学園で僕が4年やって、去年2人帰してのね。2人っていうか、どこまでを家庭復帰と見なしていくか、また定義の問題になるから、高校卒業した時も家庭復帰と見なしていくと結構いるんですよ。去年が高校卒業で2人と、途中で2人で4人帰したの。その前は3人いたけどみんな自立してるな。でも途中のやつがいたな、1人帰っちゃったのいたな。	高校卒業した時も家庭復帰と見なしていくと結構いる	学齢期終了時点も家庭復帰と判断。多数は家庭復帰の扱い	家庭復帰の広義化。家庭復帰事例の一定性	「家庭復帰の広義解釈」	
81 F						



91 F	そうです。よく言われるのが、営業職ですね、民間企業。FSWが、家庭復帰にプログラムとか、やっぱね、PDCAサイクルを繰り返していきんだよね。プランをやってみるでしょ、チェックするでしょ、でも一回再建するアクション起こすでしょ、その繰り返しですよ。	よく言われるのが、営業職	FSW業務の例え 一連のサイクル	FSW業務のサイクル性	FSW業務のサイクル性
92 F	事例も参考にはなるけど、やっぱ違うよね。社会背景によっても違うし、地域性によっても違うし、年齢によっても違う。社会資源をいかに利用していくかによって違うと思います。	事例も参考にはなるけど、やっぱ違う	事例はそのまま導入できない	事例と実践のギャップ	事例と実践のギャップ
93 筆者	地域の資源が遠くないですか？				
94 F	そこは苦にならなくてね。児童相談所がつながる場合もあるし、関係者会議を開くんですよ、つねに。実は去年の4月に帰した2人の兄弟、実際には3人いてお兄ちゃんだけ残っちゃったんだけどね、兄園に。嫌で。帰りたい、中学くらいは出たい、僕は転校ばかりしているから嫌だった。結果的に正解だったんだけど、その家庭破綻しちゃったから。でもあれは予想できなかったな。実父の虐待が始まっちゃったからね。	児童相談所がつながる／関係者会議を開く	社会資源と親を児童相談所が仲介する／社会資源がネットワークを組む	社会資源の連携方法	社会資源の連携
95 筆者	それで再措置に？				
96 F	いや再措置じゃない。お母さんが家を出たの、子ども連れて。生活保護受けながら今やっていますから。非常にいい子だったんだけどね。ちっちゃいね、3歳とか5歳で来た子はね、やっぱ帰せるとさき帰さないとかダメだ。家庭生活を送れないもん、そうじゃないと。一番上のお兄ちゃんも4年生まで生活してたから、家で。	3歳とか5歳で来た子はね、やっぱ帰せるとき帰さないとかダメだ	幼児はできるだけ早く家庭復帰させるべき 幼児は家庭生活を知らない	幼児期の家庭経験の必要性	幼児期の家庭経験の重要性
97 F	はざり言いましたその時、そこまでやって、共有していくんですね、いろんな話を、関係機関と。家庭支援センターとか児童相談所と心理と施設とか4者くらい集まって。それでもっと激しいところだと、あの家庭復帰の関係者会議すごかったな。主任児童委員までいた。家庭支援センターだけじゃなくて。要は民生委員の主任児童委員さんと、心理と児福とすごい大所帯でやったのありますよ。ただその音頭取るのは児福だよ。	共有していくんだよね／音頭取るのは児福	関係機関との情報共有／関係機関の取りまとめ役は児相	関係機関間の情報共有	関係機関間の情報共有
98 筆者	提案するのは、どこですか？				
99 F	たいてい施設ですね。やりましょうかと。時には児相は、親からの働きかけによってどうしようかというところもあるんですよ。施設側から働きかけるときは、好転して、親がなかなか児相に言えない時とか、アドボケートするんだよね、代弁するんだよね。代弁してやるって形もあるから。その場合には施設側から話しかける。	たいてい施設／親からの働きかけによってどうしようかということもある／代弁してやるって形もある	関係者会議の発議は施設から／親が発端になることもある／親のアドボケートをする	発議の頻度 アドボケート機能の発揮	関係者会議の発議
100 筆者	FSWの業務にセオリーはありますか？				
101	セオリーですか...				
102 筆者	研修会がありますよね				



103 F	ありますね。結構やっていますよね、専門職員会です。事例を検討したりとか。僕が出たときにはいろいろな知識を得るためにね、生保のワーカーさん呼んだこともあったな。周辺領域で親の関係を築くような機関の方を呼んでいろいろレクチャーを受けて、やっぱり知識を得るわけですよ。こういう形でいくよとか。	周辺領域で親の関係を築くような機関	隣接領域の知識 親の資源になる機関 使えるスキルとしての知識増強	使える知識の獲得	関連知識の獲得	
104 F	基本的には補足性の原理だからね、生保は。だから子ども手当にもうれしくないよね、生保は。生保の家庭の親は。仕事持っていない親はうれしいんだけど、仕事持っていない親はなにもうれしくないよ。あれだっただけ減額されちゃうじゃん。だから親やりにくくなって。すごいケースありましたよ。親がね、入ってくる時期がマチマチになっちゃうと生活が成り立たなくなっちゃうから嫌だっと思って、私はとても子どもを監護する力がありまっせなって施設に書いてくれている(笑)すげーこれと思って。ありえねーよと思って。あるんですよ、そういうのも。	子ども手当にもうれしくないよね、生保は	社会資源のメリット・デメリット ケースによっては社会手当が有利にならない	社会資源と親のメリットのギャップ	社会資源のケースによるギャップ	
105 F	そういうところまで言える関係まで持っていないかなきゃダメなんですよ、FSWって。それもやっぱ時間をかけないと関係性ってできていかない。セオリーではないですけど、ともかく普通に話ができるように、していくんですよ。	そういうところまで言える関係／普通に話ができるように	気取らない会話ができる／委縮しない関係	委縮しない関係づくり	なんでも言える関係づくり	
106 F	親っていうのは、ケアワーカー時代からこれは変わっていないことなんですけど、なんというのかな、底辺層の人間なの、すごく。で、自己評価低いんです、親も。空があったら地上があって、海面から5m、10m、チヨウチンアンコウの世界まであるわけじゃないですか。チヨウチンアンコウの世界ですよ、親御さんで。自己評価低いし、近所との関係性も取れない。そういう親御さんが多いんですよ。その方たちに目線を合わせるんです、上から目線じゃダメなんです。V学園の園長先生はダメなんです。上から目線はダメなんです。必ず目線を水平にして話をする。助言者になり得る立場になる。やっぱた頃ね、困っちゃったんだけど、しまったと思って、携帯教えちゃったたらガンガンかかってきちゃって。まいつかと思って、極力対応するようにしてしまっただけ。でもそうすると、いいですよ。なんでも話してくれて。	チヨウチンアンコウの世界ですよ、親御さんで／その方たちに目線を合わせる／目線を水平にして話をする。助言者になり得る立場になる	入所児の親の世界 最底辺 低い自己像／上下関係を作らない 対等な立場に立つ／平等の追及 聞き入れてもらえる人物になる	最底辺の自己像 対等性 水平性 相談者の地位の追求	最底辺の自己像 対等性の追求	
107 筆者	何気ない話をできるようにするところから、ですか？					
108 F	うん、そうですね。そこまでおっことしてかかないと。決して私はあなたを、親のサイドに立つって最初に言ったでしょ？そこなんです。それができるとか。視線を常に、コウベを低くするっていうこと。それですね、一番は。そこから。	親のサイドに立つ／首を低くする	対等 平等 自ら下りていく	対等性の追求 下りていく姿勢	下りていく姿勢	
109 筆者	基幹職兼務のFSWが多いようですが					
110 F	お説教型に？こつちという副施設長が？うーん、なる場合もあるし。出しやばりすぎちゃう場合もあるよね、そういう風に思われちゃう場合もあるよね。やり過ぎちゃうとかね、ほっときやいのになってところとか、あるじゃないですか。そうすると依存心の塊になるじゃないですか、親が。それもまたよくないよね。	出しやばり過ぎちゃう場合もある／やり過ぎちゃう	過剰な関わり 引き際 手を出して良い範囲の見極め	関わる範囲の見極め やり過ぎない	介入程度の見極め	
111 筆者	施設によっては若いFSWもいますね					

112 F	まあ少なくとも最低見積もっても7年はほしいね、経験は。できれば10年。ツーサイクル回るから。スリーサイクルかな。3年でひとサイクルなんですよ、大体。子どもが、循環していくと大きく変わっていくのが3年とか5年で変わっていくでしょ、大体入れ替わっちゃうから。先ほどの子どもの入所年数とか在籍日数とか年数とか考えたら、5年でツーサイクル回るとはいいたいできる。パターンがあるから。個々には違いますが。まあこれは自分のワーカー上の経験なんだけど、5年でやっとな人前になって思ってる。ワーカーをやっている。5年で。だから20代後半というのも、大卒すぐでっていうのもあるけど。	ツーサイクル回る／5年でやっとな人前かな	ケースの進行を理解するのに必要な時間 1サイクル見るとやっとな仕事かわかる	ケース進行のパターンラクトデイス ワーカー職の理解	ケアワークのパターンラクトデイス	
113 F	ただし大卒すぐの場合はひとつ欠点があって、社会経験が乏しい。					
114 筆者	他の勤務経験がある方がいい？					
115 F	絶対強い。一般企業の方が強い。					
116 筆者	叩かれる経験が必要ということでしょうか？					
117 F	そうですね。叩かれますよ。人間関係も、福祉は甘いですが、もんどっちゃかっという。					
118 筆者	職員間の関係が？					
119 F	まあ、なんとか普通にやっけても給料もらえちゃうところがあるけど、民間で、僕は営業系だから特に厳しかったけど稼いでなんぼですけれど、客とってなんぼでしたから。何も言われなくても無言のプレッシャーがかかりますから。胃潰瘍にもなりましたね。(中略)メーカーの営業やって売り込み行ってる。それがすごい生きていますね。					
120 筆者	福祉業界に入ったのは？					
121 F	25。2年間外にいたんですよ。W学園で求人出してたんですよ、平成元年のまだバブルのころ。もともと私自身が教員志望だったの、二十数年前はまだ教員は狭き門で、今は広き門だけど。					
122 筆者	FSWを複数で分担しているところもありますか？					
123 F	やっけるところもありますし、それは定員にもよりますし、これは考え方ですけど、後輩が育たないよ、ひとりですもんぶやると。いつまでもソーシャルワークやっつけられないし、複数でやるといいことには、複数あるいは男女、性差つけた方がいいね。	後輩が育たない／性差つけた方がいい	後進育成意識の視点／職員の特性を生かした使い分け	後進育成意識 協働するケースによる使い分け	協働による後進育成意識	性別や年齢を超えた普遍的な専門性はないか？
124 筆者	男女で視点が違う？					
125 F	視点が違うし、男性依存のお母さんいるもん。そういう時には女性に客観的に言わせた方がいいから。万能じゃないですよ、男性ワーカーは。女性ワーカーも万能じゃないから。時と場合によって共同でやらなきゃだめですよ性差つけて。	視点が違う／時と場合によって共同で	性別による着眼点の差／複数の視点を持つ	着眼点の差異 使い分け	着眼点による選択	
126 筆者	組んでやるとよいですか？					

127 F	そうそう。こっちがうまくいかなかったらこっちとか。男性恐怖症のお母さんだっているんだからさ、DV受けてさ、話してきかないとか。今かといっても色目使っちゃやお母さんとかほんとにいいから。今は俺もこんなだからないけどさ、でも母子寮のお母さん危ないですよ。えーっと思つて。母子の先生に聞いたんだけど、20年くらい前の若かりし頃ですよ、15年くらい前だったかな、「あんたうちの学園に来たらお母さんが大変だからね、あと5年くらいしないとうちで雇えないよ」って笑いな言われたことあるんだけど、あるんですよ。そういうことって。知的に低いお母さん多いからね、母子寮は。危ないんだよね。あと複数でやるメルिटはそこにあるんですよ。	こっちがうまくいかなかったらこっちとか	有効な手段を使い分ける	有効な手段の使い分け	有効性による支援者選択	
128 筆者	状況によって使い分けてということですね					
129 F	そうです。ただワンストップ、ソーステップってV学園なんかからよつとかいってそうなんだけど、経験がろくすっぽなくて、やらなきゃなんないって、職務だからやらせられて、絶対育たない。1年目でまだ経験がないって、海千山千のお父さんお母さんですよ？そんなのなにもできるわけないんだよ、二十歳だ22、3の子たちが。短大出てやっける子がね。それはやっぱりある程度カバールしていつてあげないといけないし。いくつになってもできないのいるけどね、25になっても26になっても。で、やり過ぎちゃうからいけませんよっていうのもいるんだよね。	経験がろくすっぽなくて、やらなきゃなんないって、職務だからやらせられて、絶対育たない	若手の職員に指導もなくFSW業務をさせても成長できない 前提となるCWとしてのキャリア	後進指導の不可欠性 SWの前提としてのCWキャリア	SWの前提としてのCWキャリア 後進指導	
130 筆者	親身になり過ぎる人がいる？					
131 F	そうそう、入り込み過ぎちゃうっていうか、入れ込み過ぎちゃう。ソーシャルワークとケアワークはまた似て非なるものだから、距離感を置かないといけないんだよね、ある程度。それができないとダメ。その判断ができないと。	ソーシャルワークとケアワークはまた似て非なるもの／距離感を置かない	距離感の強い CWはケースに密着 SWは距離をおく	ケースとの距離感 距離をおく感覚	ケースとの距離感	
132 筆者	ケアワーカーがSWをするのですか？					
133 F	持つの、第一歩っていうのは、面会の日程でしょうね。だってケアワーカーじゃないと子どもが今日こういうお稽古があった、習い事があった、行事があったってこういうのを把握してないから、FSWそこまで把握できないからですよ。そこはやってもらおう。それは第一歩なんですよ。	第一歩っていうのは、面会の日程	CWが行うSW 子どもの日程と面会の調整	CWの専門性を活かしたソーシャルワーク	CWが行うソーシャルワーク	
134 F	で、一番いいのは、OJTっていうの話をしている中でも一緒に横にいて聞かせるだけでかなり勉強になるはずですよ。でもなかなか気が付かないけど、間とかタイミングとかかっていうのは。できませなければでもそれは必要なんです、状況如何によつては。	一緒に横にいて聞かせるだけでかなり勉強になるはず	FSWの業務を見せる	CWのトレーニングとしてのソーシャルワーク	CWのFSWとしての育成	
135 筆者	FSWの専門性はCWの専門性の延長にあるということですか？					
136 F	うんうん、そう思ってもいいと思います。	そう思ってもいい	FSWの専門性はCWの専門性の延長	CWの延長にあるFSW	CWの延長にあるFSW	
137 筆者	そう自覚していないFSWもいるようですが					

138 F	ここはね、ざっくり言ってしまうと、家庭復帰だけがソーシャルワークではないんですというところをざっくり考えていくと、その答えが出てくるのかなと思うてるんですね。こんなこと言ったら見相に怒られちゃうけど、長い人生を考えて、子どもがボコボコに虐待されてもね、これは俺の宗教観もあるのかも知れないけど、10年経って20年経って、親を超えることができるか、許せることができるか、虐待を受けた子どもたちが、今「ひなたぼっこ」の方たちともいろいろ話をしたいと子どももあるんだけど、でも最終的にその親に対してね、緑香一本でもあげられるようになれば成功したのかなと思うてるの。肩拾えりや成功かなと思うてるの、最終ラインでね、虐待受けてきた子どもたちの。	家庭復帰だけがソーシャルワークではない／10年経って20年経って、親を超えることができるか、許せることができるか／骨拾えりや成功かなと思うてるの、最終ラインで	帰ることが全てではない／遠い将来親を許容できる／今より将来親のため／何かにできる親であることを認められる	遠い将来を見通した再統合ゴールとしての親の許容 究極のゴールとしての親の許容	長期的な再統合計画 究極のゴールとしての親の許容	
139 F	それが私たちが、まあそれはケアワークなんだけどね、だけどソーシャルワークのなかではそこも必要だね。親と年賀状の一枚でもやり取りがあって、大人になった時にね、親と初めて接触できるのもいいかなと思うときもありますよ、ぜんぜんダメでも。親が気が付いてくるかどうかってところもあるしね。	それはケアワークなんだけどね、だけどソーシャルワークの中ではそこも必要	親子関係の整序はケアワーク ケアワークはソーシャルワークの一部	ケアワークとソーシャルワークの接点にある親子関係の整序	ケアワークとソーシャルワークによる親子関係維持	
140 F	そこを、そうなんだけど、あなたのルールはそこですってことをね、覚えさせたいな。ケアワークの延長なんだけど、ソーシャルワークの中に含まれてる部分。	あなたのルールはそこですよ／ケアワークの延長なんだけど、ソーシャルワークの中に含まれてる部分	生い立ち 自分がどこからきたか／ケアワークはソーシャルワークの一部	生い立ちの整序 ケアワークとソーシャルワークの接点にある生い立ちの整序	ケアワークとソーシャルワークの視点からの生い立ちの価値づけ	
141 筆者	あなたのルールはそこ、					
142 F	あなたが生まれてきてね、生まれてきたのは、いろんなことがあってもあのお父さんとお母さんなんだよ、感謝しろとは言わないけどさ、ボコボコにされてるんだから。でもそれがなければあなたはこの世に生まれてなかったんだよって。	感謝しろとは言わないけどさ	親を無条件で受け入れることは要求しない	親の限定的な受容の勧め	限定的親受容の勧め	
143 F	もう一つ言えるのは、僕アイルトン・セナの言葉がすごく好きでね、F1レーサーの。アイルトン・セナにね、落合信彦っていう有名なジャーナリストがインタビューしたんだよね。死ぬ前に。「あなたは家庭的にもいろんな恵まれた才能があって生まれてきたんじゃないですか」と。家庭的にも裕福で。したらアイルトン・セナが言ったのがね、「生まれてきたことがチャンスじゃないですか」と答えたんだよね。やっぱりそういうことを大事にしてあげたいな。だって人として生まれてきてるんだもん、可能性はあるんだもん。	生まれてきたことがチャンスじゃないですか／人として生まれてきてるんだもん、可能性はあるんだもん	命があること／生きていればチャンスがある 生きていくことに対する見方の転換	人生観の提示 人生観の転換	人生観の提示	
144 筆者	そういう話を退所に向けてお子さんにしますか？					
145 F	しますよ。たまに、わかる子にはね。自分がダメでダメで今落ち込んじゃって子に「こういうことってあるんだよー」って言いますよね、これケアワーカーの仕事だけだね。ケアワーカーとしてもしたことがあるよ。	これケアワーカーの仕事だけだね	人生観の提示はケアワークの範囲	ケアワークとしての人生観の提示	人生観の提示	
146 筆者	日常生活のなかで？					

147 F	うん。やったことあるし、今日もちょっとひとり、終わった後で個々に話さないかな。まだ来たばっかで何にもしてあげられなかった高校3年生の、明日退所。送別会は来るんだよね。その子にはちょっとメッセージを残したいと思って。まあ知ってる子だけだね、5年前もいたから。小っちゃいころからいた子どもだからね。							
148 F	まあそこまで持っていければいいかなって思ってるんですよ。手紙のやり取りでもね。線香の一本でもっていうと児相がすげえ怒るの、嫌な顔すんだだけだね。でも僕たちは最終的にはね、ゴール地点で親を認められるかっていうところまでいけばソーシャルワークなんだよ。	僕たちは最終的にはね、ゴール地点で親を認められるかっていうところまでいけばソーシャルワークなんだよ	究極のゴール 最後に親を許容する	究極のゴールとしての親の許容	究極のゴールとしての親の許容			
149 筆者	見ているスパンは退所より先ですね							
150 F	先。先ですよ。							
151 筆者	20年30年先の心境のための支援が今必要？							
152 F	必要です。在籍期間の短い間にいくことって必要になって。だからよけい厳しくしゃやうんだけど、厳しくしていくと、自分が社会的に認められると自信がつくでしょ、そうすると余裕ができるんですよ、心に。いくら虐待を受けていようが何しようか。	在籍期間の短い間にいくことって必要	先を見据えた支援 効果が先に現れる支援	長期的展望の必要性	支援の長期的展望			
153 F	またちょっと不眠症になったりしたときに、俺なんかよく言うんだけど、そういうときは医者や世話になれって言うって。薬でもなんでももらって。自分が薬のんでこういう状態になれればいいじゃないかって。そう思っておけば、たばこを吸いたいのと同じですよ。それですみやすい。ただ胃が悪くなったりするとまずいよって(笑)話をするけどね。そこはうんと気楽に生きていかないといいないなって。だから僕みたいのはウツにならないんです。自信ありますもん、いい加減だから。	自分が薬のんでこういう状態になれればいいじゃないかって	助けを借りて生きる方法 楽に生きる手段	楽観的人生観の提示 生きやすさの知恵	楽観的人生観の勧め			
154 筆者	施設長になってプレッシャー感じませんか？							
155 F	違います。やっぱりプレッシャーあるよね。そりゃだって、携帯だっていままです電源落としてたけど、電源落とせないもん。事故起こされたらとかそんなのあったらね。バックレちゃいましたとか、事故起こしましたとか、チャアノーゼ起こしましたとかいってね。やっぱありますよ、そこはちゃんとみてないよ。							
156 筆者	都市部と地方の施設では医療体制違う？							
157 F	V学園はね、同じ。むしろいいかもしれない。だって大学病院だよ、あそこは。だから病児送るんだよ向こうに。知ってるから。アナフィラキシーショック送ってきたよV学園に。風邪薬、薬品で。病院あるからいられるですよって。							
158 筆者	元虚弱児施設でしたっけ？							

159 F	そうす、40年近く前。こも目と鼻の先じゃないけど、よっぽどひどくなければ一般の開業医いっぱいあるからさ、こも。医療過疎地じゃないよね。車飛ばせば10分くらいのところ、昔の国立病院があるんですよ。私立病院があったりとか、結構病院は多いですよ。医療体制で言えばね、大学病院は別格じゃない、東京でも？大学病院も東京の真ん中にあるわけじゃないから。かわいそうなのはし学園とか。あれはかわいそうだよ。O学園ってところは片っ端から病児送ってたの。もっとかわいそうなのはね、T学園ってところがあって、あそこも病児ばかり送られたの。								
160 筆者	隣が病院ですからね								
161 F	関係ないんだよFさんって教えてくれたよ。そんなの急に心臓が止まっちゃやうやう、アナフィラキシーなんて来たって止まっちゃやうって。冗談じゃねえって怒ってたもん。								
162 筆者	し学園は幼児専門でした								
163 F	小学生がGHIにいたいね、多少は。どうしても家庭復帰できないって。								
164 筆者	年齢を区切ると家庭復帰のプレッシャーかかる？								
165 F	かかるけど難しいと思うよ。だから措置延長でGHIに小学生入れたいっていうのはそれがあるでしょ。無理に決まってるじゃん、何が起るかわかんないんだもん。よくし学園の園長さんと話するんだけど、「一応退所予定で大丈夫だと思っただけだね」って、思うけどね止めると、やっぱり。何が起きるかわかんないから。急に家庭復帰できない要因ができることって、お母さんが緊急入院しちゃったりとかね、そんなことも考えられるから。	ゴールの年齢を定めると集中するが困難／先が読めない不安定さ	時間制限の困難性 予測困難性	退所後の予測困難性					
166 筆者	制度化による国の期待と、現場の受け止めに齟齬はありますか？								
167 F	そこはね、だいたい整理されてきているような気がする。最初はね、やっぱりこの制度化の前後って話になって力が入ってたんだよね、SW自体が。家庭復帰だー！やるぞー！っていうのがあって。でもだんだんだんだん慣れてくると、見直すよね。だって問題起こっちゃったじゃん。最初帰してすぐ虐待されて死んで、虐待死の問題あったでしょ？	初期の熱気 冷静さの取戻し 方針の転換	家庭復帰意欲の変遷 意欲と現状の妥協点	家庭復帰意欲の妥当な水準					
168 F	施設が反対して、児相がなんかイケイケでドンでやって失敗したっていうのがあったから。だから今施設側の方が慎重ですよ。児相の見立てがちよと違うんだよ。だから児相もよく聞くんだよ。どうしても親との接触は施設の方が多から。施設のソーシャルワーカーの方が多からさ。	児相判断と施設判断の違い 施設判断が正しいことが多い／親を理解できる	関係機関間の判断の相違 情報優位性	施設の情報優位性					

169 F	家庭復帰がかかるとほとんど関わりましたね、向こうの学園でやってた時。ただ後輩育でもあるから、行って来いっていうのもよくあって。2か月1回とか1か月1回とか、悪いけど家庭訪問お前やれよって。親の様子見て来いってさんざん行かせた。担当のケアワーカー。まだ若いけどね、4年目くらいもお前やれって。もう「やれ」ですよ。場数踏んで来いってことで。様子見て来いって、家の状況とか。それで子ども帰ってきた状況全部報告あげてちようだいって。その組み立てはうんと大事。	後輩育でもあるから、行って来いっていうのもよくあって	後進育成 業務の割り振り 現場経験を積ませる	マネージャー役割 後進育成視点	後進育成のためのマネジメント	
170 筆者	ケースを担当するというより統括をする感じですか？					
171 F	うん、そんな感じだったね、むこうはね。					
172 筆者	それは施設によって違うのでしょうか？					
173 F	うーん、違うし、でもその方が考え方としてはいいかな。ぼくはそっちの方がいいんじゃないかなって思ってますよ。とくにV学園なんかは経験年数が少ないところだから、組織力で対抗するしかないんだよね。ここは個人力でやれるわけ、W学園は。だって経験長いんじゃない。ここは個人力。施設長と副施設長とさっきのSW3の人が20年選いっぱいいるもの。もうひとり12、3年やってると、8年やってるとか、うんと階層がいろいろの。だからできやうの、ここはある程度ほっといても。向こうは組織力でやらないとそりや無理よ。分けていかないと。この部分はあんたやってねって。それだとFSWが指揮ふるっていかなくやなんないから、またそれはそれで大変だけど、組織力でやるっていうのは、今そっちの方が必要かもしれない。	経験年数が少ないところだから、組織力で対抗するしかない。ここは個人力でやれる。FSWが指揮ふるっていかなくやなんない	職員の年齢層が若い施設は分担任して対応 FSWが分担任 全体の統括／ベテランが多い施設は一職員の力量に任せる	施設形態によるFSW業態の差異 統括型 個人技型	FSW業態の差異 統括型 個人技型	
174 F	昔は職人芸でやれたけど、今FSWの年齢層が30代の方が、Hさんなんか、ああいう子がいるところはまだ先行きいいんだけど、他だって40代の後半とか50代多いでしょ？ やってる人たちが。40代後半はまだいいよ。団塊の人たちでももう引退しちゃうんだからさ。そうなるよ、この部分はこれで、これはOJTのなかにも含まれるから、ひとりやっちゃうダメなのよ。僕はずっとそういう考えでいるから。ここにいてる当時からそうなんだ。向こうもそうだな。	昔は職人芸でやれた。団塊の人たちでももう引退しちゃう。ちやダメなのよ	昔の児童養護 職員の個人技 独自のスキル／世代交代 職人技時代の終焉／チームワークの時代	ソーシャルワーク手法の変遷 職人技時代の終焉 チームワークの時代	職人技時代の終焉 チームワークの時代	
175 筆者	ソーシャルワークは担当CWがそれぞれやるが、それに寄り添っていっしょにやるのがFSW？					
176 F	その方がやりやすいと思う。ただ出ていくときとか、どうしても関係者会議とか、そういう形上の問題をね、専任職つかないと、だって宿直明けでいったらとでもじゃやないけど回らないもん。そのためには必要ですよ、卒がね。	そのためには必要ですね、卒が	チームワークのためにFSWが必要	チームワークを可能にするFSW	チームワークを可能にするFSW	





183 F	ね、相談して、最終的には寄り添ってでも今日は一緒にいこうとか、そういう風になるでしょ？それがじゃあ今日はいいよ！って言うちゃったの。それは園長怒りますよ。それが現状なんです、短大卒あたりでも。やっぱりどうして四大卒の福祉がほしいかっていうと、そこだけはやらないよね、さすがに。施設実習なんかでも、私たちがもっと明確にしているのは、基本的に施設実習をやらなかった職員は新卒では採りません。ほぼ採らない、基本的には。ミスマッチ起こすから。ミスマッチ起こされちゃったから、すでに。就業規則も変えたもん、試用期間の定めを。最初裁判で負けちゃうから、3週間で設定してたんだけど、こういう事例があったもんでって理由話してハローワークに頼んだら、すごく理解してくれした。3か月にしました。よっぽどの理由がない限り解雇できないでしよ。今、3週間とか2週間でやってたの、だいたい思えばわかるから。そしたら、2か月になって耳鳴りがするってウツなんて診断もらってきた。ああもう終わったと思うって。ミスマッチです。その子やっとなかったんだよね、施設実習を。								
184 筆者	保育士ですか？								
185 F	保育士です。保育士を探らないとね。ワーカーが集まらないね。								
186 筆者	長い職員が多い施設と少ない施設ではソーシャルワークのやり方が違うんでしょうか？								
187 F	まあここは先ほど言ったように、ひとりひとりの力があるから、統括マネージャーだけでいいと思うの、FSWは。で向こうは組織力って話したでしょ？そこでできるまで、レベルアップするまでこの部分をやって頂戴ねって振っていきかないよね、局所的に。全体像をやるまではいかないよね。そこで対応するしかないと思う。	職員の成長に合わせて業務分担 一人でFSWでできるようになるまで	OW育成を意図した分担指示	OW育成のための分担					
188 F	かといって全部一人でFSWがやると自分のスキルは上がるけれども、施設全体のスキルアップにはならないから、機会があったら行かせようね。V学園は典型的だね。経営層とワーカー一層の差が歴然としてたから。T先生ってこの園長だったの、今手伝ってくれてるんだけど。T先生とQさんと私が、まあ園長は象徴天皇だからもういいんだけど、要は外部から来た方だからいいんだけど、それが20年以上で、10年くらいいやいやたワーカーが他施設経験とか合わせて3人くらいいるのね。あと5年目が3、4人いて、あと1年2年ばっかだから、十数名が。そうなるよ、局所的にやっつけていくしかないわけよ。組織でやるっていうのは、この部分俺やるからおまえこつちやっつけてくれるか、っていう感じで。こまごましたことを。雑用とは言わないけどケアワークとかぶる部分を指示していいから。本当はFSWがそれをやっつけていった方が密着度は高まるわけ、親との関係性を作るうえで、でもそれをやっやうと育っていかないから。場数を踏ませないといけない。	全部一人でFSWがやると自分のスキルは上がるけれども、施設全体のスキルアップにはならないノケアワークとかぶる部分を指示していいから	個人のスキルアップと施設の経験の非相関 独占しない 業務分担のバランスノケアワークとソーシャルワークの接点をやらせる	個人スキル向上と組織力のアンバランス 接点の指示	個人スキルと組織力のバランス ケアワークとソーシャルワークの接点				
189 筆者	ケアワーカーのスキルアップのためにということですか？								

190 F	ケアワークをしっかりとっていかないと、FSWIになれないんですよ。で、誰もがFSWIになれないわけなくて、V学園みたくに3つ寮舎があるところは、僕がFSWIだった時代には直でやっていて、直に指示出してたんだけど、これからは各寮舎に一人ずつFSWIという形で置いていて、それを統括するFSWIほんまもんがいるっていうのがいい感じ。それでその各寮舎のFSWIが、やれる人間がいればそいつらが振っていくんですよ。この部分やっていていいこと。それをまとめていくわけよ。それこそ組織力でやっていくっていうことが求められると思う。	ケアワークをしっかりとっていかないと、FSWIになれないんですよ。で、誰もがFSWIになれないわけなくて、V学園みたくに3つ寮舎があるところは、僕がFSWIだった時代には直でやっていて、直に指示出してたんだけど、これからは各寮舎に一人ずつFSWIという形で置いていて、それを統括するFSWIほんまもんがいるっていうのがいい感じ。それでその各寮舎のFSWIが、やれる人間がいればそいつらが振っていくんですよ。この部分やっていていいこと。それをまとめていくわけよ。それこそ組織力でやっていくっていうことが求められると思う。	ケアワークをしっかりとっていかないと、FSWIになれないんですよ。で、誰もがFSWIになれないわけなくて、V学園みたくに3つ寮舎があるところは、僕がFSWIだった時代には直でやっていて、直に指示出してたんだけど、これからは各寮舎に一人ずつFSWIという形で置いていて、それを統括するFSWIほんまもんがいるっていうのがいい感じ。それでその各寮舎のFSWIが、やれる人間がいればそいつらが振っていくんですよ。この部分やっていていいこと。それをまとめていくわけよ。それこそ組織力でやっていくっていうことが求められると思う。	CW経験がFSWIに必要 全員FSWIが理想 ケア ワークとソーシャルワーク の連続性	ケアワークとソーシャル ワークの連続性 総FSW	ケアワークとソーシャル ワークの連続性	
191 筆者	ケアワークの目標にはソーシャルワークを含みますか？	ケアワークの目標にはソーシャルワークを含みますか？					
192 F	と思いますよ。今更ながらFSWって抽出してやってるけど、予算どりの部分もあるし、そういうまとめる人がいい方いいねっていう形だから。必要といえば必要なんだけど、昔からやっていたことといえはやってることなんだよな。	今更ながらFSWって抽出してやってるけど、予算どりの部分もあるし、そういうまとめる人がいい方いいねっていう形だから。必要といえば必要なんだけど、昔からやっていたことといえはやってることなんだよな。	FSW特別視 もともとやっ ていること／新規性はな い	FSW業務の非新規性	FSW業務の非新規性		
193 F	でもそうやって専門職を作っていないと、実際にはできない方たちも多いってことなんですよな。	でもそうやって専門職を作っていないと、実際にはできない方たちも多いってことなんですよな。	専門職化のメリット 現状 の施設間格差	専門職化の要求	専門職化の要求		
194 筆者	インタビュー受けてくれるのは自信のあるところでしょうか	インタビュー受けてくれるのは自信のあるところでしょうか					
195 F	そうだと思いますよ。	そうだと思いますよ。					
196 筆者	受けてくれないところ、FSW置いていないところはどうかやっていますか？	受けてくれないところ、FSW置いていないところはどうかやっていますか？					
197 F	置いてませんあつたあ？ 地方だよな。	置いてませんあつたあ？ 地方だよな。					
198 筆者	設置は義務では？	設置は義務では？					
199 F	6:1とか満たないと雇えないんだよ。だから枠だけ取ってるという可能性はある。形だけやっているとこはあるかもしれない。それで、県がうるさいのは、宿直やらさせるなって言ってるんだよ、FSWIに。	6:1とか満たないと雇えないんだよ。だから枠だけ取ってるという可能性はある。形だけやっているとこはあるかもしれない。それで、県がうるさいのは、宿直やらさせるなって言ってるんだよ、FSWIに。	実質が伴わないFSW	形式と実態の解離	形式と実態の解離	形式と実態の解離	
200 F	でもはっきり言ってやっただけで、「無理です」って言ってやっただけで、研修の時に、寮舎が分かれてこれだけ分散してるんだからね、泊りだとかその食育に関わらないんであり得ませんって言ったの。絶対無理。たとえ1回でもいいの。点々と泊って行って、そんな1か月2か月で子どもの様子なんて変わるわけはないんだから、半年1年じやまずいけどさ。3か月に1回くらい泊まっていけばわかるぜ、子どもの様子が。あまわつたとか、こいつ変だなとか。それでいいじゃないですか。	「無理です」って言ってやっただけで、研修の時に、寮舎が分かれてこれだけ分散してるんだからね、泊りだとかその食育に関わらないんであり得ませんって言ったの。絶対無理。たとえ1回でもいいの。点々と泊って行って、そんな1か月2か月で子どもの様子なんて変わるわけはないんだから、半年1年じやまずいけどさ。3か月に1回くらい泊まっていけばわかるぜ、子どもの様子が。あまわつたとか、こいつ変だなとか。それでいいじゃないですか。	ケアに関わらないFSWIは 不可能／直接ケアで子ども に接する／頻繁でなくとも いい 生活を共にして 子どもを理解する	直接見る機会の不可欠 性 直接的な子どもの把握	直接的な子どもの把握の 必要性		

201 F	すていねでもね。そこそ自信があるっていうか、オープンにや るっていうのはW学園の昔からの流れだから。なんでもオープンに しているところがある。僕が最後の頃ね、だいたい食 事で3回入ってたもん。1週間1回は。6ユニットあるから回れないん だよ1か月経たないと。俺だって会議があったり日勤があったりぐ ちゃぐちゃになっただけから。それだって園長はやらないうし、副園長 も高齢だからやれないし、もうひとりの方だってやらないし、俺ほ んどんだけやってたもん。1か月に1回はここのところ食事とろう と入りましたよ。それで6日間ですよ。1か月かかりますよ。第1は会 議があるから各寮回るから無理だったし、週3回入れるときはも う無理でした。	1か月に1回はここの ところ食事とろうと入りま したよ	FSWが子どもに接する機 会を自発的に作る	直接処遇機会の創出	直接処遇機会の創出	
202 筆者	ここはユニットではないですね					
203 F	ないです。19人います。					
204 筆者	常に見えてますね					
205 F	見えちゃう見えちゃう。子どもがおかしいとか。職員が朝礼とか 全部出ちゃうから。やりやすいです。	見えちゃう。子どもがおか しいとか	子どもの様子が常にオー ブン	子どもを把握しやすい構 造	施設構造による把握しや すさ	施設の構造によってFSW の業務はどう異なるか？
206 F	もうちょっとちっちゃくしたいんだけどな。小っちゃくすると分散化す るから、FSWを泊まり減らさないといけないと思う。	小っちゃくすると分散化す るから、FSWを泊まり減ら さないといけないと思う	施設規模と職員配置の兼 ね合い 小規模はFSWの 宿泊減	小規模化のディメリット	施設規模と職員配置の兼 ね合い	
207 筆者	全部GHのところはどうなってるんでしょう？					
208 F	U学園で聞くとね、FSWがまとめているような感じだね。やっぱりで きないって、分散しちゃう。U学園なんて絶対できないよ、5か所 もあるんだよGHが。46名定員で30名が外ですよ。16名が本園で すよ。16名分はすぐでできたってできませんよ。絶対無理。あの人も 無理って言ってたもん、Hちゃんも。	FSWがまとめているような 感じ	GHの統括はFSWが行う	マネジメントとしてのFSW	マネージャーとしてのFSW	
209 筆者	そういう場合はGHにFSW的な人を置く？					
210 F	まあそれはホーム長だね、それ担う人は。FSWが見て回るしかな いけどさ。					
No.	テキスト	〈1〉テキストの中の注目 すべき語句	〈2〉テキストの中の語句 の言い換え	〈3〉左を説明するようなテ キスト外の概念	〈4〉テーマ・構成概念(前 後や全体の文脈を考慮 して)	〈5〉疑問・課題

W学園は立地の特徴から、親からの隔離目的で措置される児童が多い。全国的には家庭復帰判断の地域差があるが、W学園は入所傾向と期間の一致が見られ、入所期間はやや長い。しかし今日の社会的養育は養育可能性への執着を持って支援にあたるため、思いがけない復帰を果たせるケースがある。例えば引きとり可能な親の急浮上が起こるケースである。こうした例は措置前の見相一時保護期間中の調査時間不足に起因するため、入所後に補完的に情報収集する見直しとFSWの補充関係が成立している。F氏は見相とは情報共有を密にすることで協働感の向上が起ると感じている。

現在全国的にケースと定員のミスマッチが生じており、見相は入所期間を見通した措置の躊躇があって措置判断の消極化が起きている。早期家庭復帰のために適正な情報収集時期があり、情報は早く正確に入手したいが、W学園では人道的配慮から事前情報に拘泥しない受け入れ姿勢をとっている。

ストーリーライン	<p>家庭支援専門相談員制度化直後に比べると、次第に家庭復帰意欲の妥当な水準を見出せるようになった。児童福祉司にも個人差があるため行政対応のブレはあるが、日頃の親子の様子を知り得る施設の情報優位性から、施設が児童相談所への進言力を持つようになっている結果とF氏は見ている。そのため、関係者会議の発議は施設からか、施設が親のアドボケートをする場合が多い。関係機関の情報共有を行い、社会資源の連携が図られる。</p> <p>F氏はFSW業務の非新規性を指摘するが、施設によっては形式と実態の解離が生じており、専門職化の要求がされたと分析している。FSWとして研修を通じて関連知識の獲得をしたり、事例検討をするが、事例と実態のギャップ、社会資源のケースによるギャップを感じることもある。</p> <p>「家庭復帰」の広義解釈を行えば、高卒時点でも一定数は家庭復帰可能なため、場せないのは失敗例である。F氏は失敗例としてソーシャルワークの失敗が起こっている。一方で年齢によって復帰判断ポイントの変遷があり、ケア二ードの減少と復帰可能性には相関がある。F氏は家庭復帰のタイミングとして中卒時の最終性を指摘している。特に幼児期の家庭経験の重要性は代えがたく、タイミングの目測は不可欠である。F氏は時には家庭復帰成功の限定的保証に基づいた思い切った判断も下すべきだと考えているが、ケースの背景評価の個人差もある。しかし高齢入所児は中卒までの支援時間の制限があってソーシャルワーク時間不足になる。そのため親との関係形成の時間不足も生じる。入所期間は親の状況からの見通しで推測するが、親は子どもほどには短期で変わらない親子の時間感覚の差もあって、長期化しやすい。</p> <p>入所児の親は最底辺の自己像を持っているため、F氏はFSWは親サイドに立つ意識、自ら同じ目線に下りていく姿勢によって対等性の追求をし、なんでも言える関係づくりが不可欠だと考えている。一方でソーシャルワークの過程では厳密さの要求をし、要求へのレスポンス評価を通して関係性を築く。遠方でも面接に来ることも親の意欲の測定になっている。親の社会的地位・内省力と復帰可能性の相関がある。復帰が近づく頻回に面会させるプロセスと帰宅頻度の相関があり、親子双方の家族一体感の形成を促す。それでも復帰後の予測不可能性は私試できず退所後の予測困難性がある。こうした一連の支援過程にはFSW業務のサイクル性が見られる。親との関係構築の第一歩として、F氏はFSWの第一印象の重要性を指摘する。親に負けない職員であるためには、共同生活による子ども把握の必要を無視できない。</p> <p>F氏はベテラン職員としてFSWの育成に関心を持っている。そもそもソーシャルワークをCWの業務としてのソーシャルワークであると考えると、CWの延長にあるFSWという視点で捉えているため、課題はCWのFSWとしての育成である。施設の規模によってFSW業務の差異があり、ひとつは一人ですべて担当個人技型、もうひとつは複数のCWが行うソーシャルワークをFSWが管理する統括型である。現在は職人技時代の終焉を迎え、チームワークの時代であるため、チームワークを可能にするFSW、マネジメント機能としてのFSWの存在が求められている。チームで行う利点として着眼点による選択、有効性による支援者選択が可能になることがある。</p> <p>後進指導にあたっては、個人スキルと組織力のバランスを考慮し、FSWが全て担当のではなく、CWとFSWの協働を心掛けている。ところが、近年はケアスキルの世代間格差があり、まずCWのケア力の向上が欠かせない。SWの前提としてのCWキャリアが課題となっており、ケアワークのパターンプラクティスが必要である。したがってF氏は協働による後進育成意識に基づいてCW育成のための分担当を行う後進育成のためのマネジメントを担当している。具体的には、ケアワークとソーシャルワークの接点から始めさせ、CWでなければ知り得ない事例についてのCWが行うソーシャルワークを担わせる。復帰の判断はCWとFSWがツールに基づき共同アセスメントを行う。</p> <p>F氏はケアワークとソーシャルワークの連続性を強調する一方で、両者はケースとの距離感において似て非なるものだと考えている。CWがFSWになるためには、介入程度の見極めができるようにならないといけない。このような指導体制のためには、F氏は基幹職員が兼任するというFSWの理想的兼任像を持っている。</p> <p>施設規模・形態によって、子どもの施設構造による把握しやすさに差がある。FSWが把握しにくい場合には、直接処遇機会の創出の努力が必要である。施設規模と職員配置の兼ね合いもあり、分散小規模化する場合にはマネージャーとしてのFSWが求められる。</p> <p>家庭再統合について、F氏は究極のゴールとしての親の許容に向かうような支援の最期の展望、長期的な再統合計画が必要だと考えている。そのために、子どもには限定的親受容の勧めをする。また退所後の自立に向けて人生観の提示、楽観的人生観の勧めも行っている。こうした支援は、CWとしてもFSWとしても行うべき、ケアワークとソーシャルワークによる親子関係維持、ケアワークとソーシャルワークの視点からの生い立ちの価値づけである。</p>
理論記述	<p>62. 家庭復帰の判断には地域差がある</p> <p>63. すべてのケースに復帰可能性への執着を持って家庭支援し、思いがけない復帰に至るケースがある</p> <p>64. 入所前に児童福祉司が終えなかった情報収集をFSWが担っている</p> <p>65. 児童福祉司とFSWは情報共有を密にすることで協働感覚の向上が起こる</p> <p>66. 児童相談所は入所期間の見通しと施設定員を考慮して措置に消極的である</p> <p>67. 施設の情報優位性のため、施設が児童相談所への進言力を獲得した</p> <p>68. FSWの専門職化が要求されたが、業務に新規性はない</p> <p>69. 家庭復帰できないケースはソーシャルワークの失敗である</p> <p>70. 家庭復帰のタイミングとして中卒時が最終段階である</p> <p>71. 家庭復帰の成功に対する限定的保障でもタイミングを重視した思い切った判断がなければ復帰できない</p>

	<p>72.自己評価の低い親にFSWは自ら下りていく姿勢で目線を合わせ、何でも言える関係づくりにつとめる</p> <p>73.支援過程には厳密さを要求し、レスポンスを評価するというマネジメントのサイクルがFSW業務である</p> <p>74.親に負けないFSWは第一印象と子どもの直接把握が必要である</p> <p>75.FSWの専門性はCWの専門性の延長にある</p> <p>76.CWをFSWとして育成するため、協働する</p> <p>77.ファミリーソーシャルワークとケアワークはケースとの距離感において異なっている</p> <p>78.施設規模・形態によってFSWの最適な配置は異なる</p> <p>79.家族再統合の究極のゴールは親の許容である</p> <p>80.長期的展望に立った正しい立ちの価値づけ、親子関係の維持が不可欠である</p>
さらに追及すべき点、課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・施設の立地は家庭復帰の判断にどう影響するのか？</li> <li>・施設構造とFSW業務との関係</li> <li>・CW業務とFSW業務の差異はなにか？</li> </ul>

## 施設退所時のファミリーソーシャルワーカーの業務についてのアンケート

日本女子大学大学院人間社会研究科

調査実施者 社会福祉学専攻博士課程後期 2 年 大澤朋子

調査責任者 人間社会学部教授 岩田 正美

連絡先 090-2530-4031 (大澤)

### [ご回答にあたって]

- ・このアンケートは貴児童養護施設のファミリーソーシャルワーカー（以下 FSW）の方がお答えになるようお願いいたします。
- ・お答えになりたくない質問には、無理にお答えいただく必要はありません。
- ・具体的なケースについての質問は、支障のない範囲でお答えいただければ結構です。
- ・ご提示いただく 2 つのケースは、いずれも①被虐待を理由に入所措置になったケースまたは②入所後に虐待を受けていたことがわかったケースからお選びいただきますようお願いいたします。
- ・ご回答いただきました内容はすべて統計的に処理し、お答えになった方やご所属の施設が特定されることのないよう留意いたします。
- ・アンケートは次のページからです。

【あなたが FSW として関わった実際のケースのうち、子どもを家族の元に帰したケースについてお伺いいたします（複数ある場合は、どれかひとつ選んでください）】

問1 支障のない範囲でケースの概要を教えてください

入所時年齢	才	退所時年齢	才	措置期間	年 ヶ月
性別		措置理由			
概要（施設での子どもの様子、家族の元に帰るまでのプロセス、子どもや家族の変化、支援の内容等、自由にご記入ください）					

問2 そのケースであなたが FSW として果たした役割、行なった援助はどのようなものでしたか？ 自由にお書きください。

問3 そのケースで、家族の元に帰すという判断をするにあたって、決定的だった要素はなんでしたか？ 自由にお書きください。（大きな要素が複数ある場合は、3つまでお答えください）

【あなたが FSW として関わった実際のケースのうち、子どもを家族の元に帰すことなく、自立させたケースについてお伺いいたします（複数ある場合は、どれかひとつ選んでください）】

問 4 支障のない範囲でケースの概要を教えてください

入所時年齢	才	退所時年齢	才	措置期間	年    ヶ月
性別		措置理由			
概要（施設での子どもの様子、子どもが自立するまでのプロセス、子どもや家族の変化、支援の内容等、自由にご記入ください）					

問 5 そのケースであなたが FSW として果たした役割、行なった援助はどのようなものでしたか？ 自由にお書きください。



問 6 そのケースで、家族の元には帰せないという判断をするにあたって、決定的だった要素はなんでしたか？ 自由にお書きください。（大きな要素が複数ある場合は、3 つまでお答えください）

[ ]

問 7 家族の元に帰らない子どもに対して、家族との関係の持ち方についてなにか援助を行いましたか？

ア) 行なった イ) 特に行なわなかった

↳ それはそのようなものでしたか？

[ ]

【あなたが現在お勤めの児童養護施設の、家庭復帰あるいは自立援助のシステムについてお伺いいたします】

問 8 子どもを家族の元に帰すか、退所後自立させるかという最初の実際的な提案は、どなたからどのくらい行ないますか？ 下の選択肢の中からそれぞれ選んで、（ ）に記入してください。

- ア) 児童養護施設の子どもの担当職員から ( )  
イ) 児童養護施設の FSW から ( )  
ウ) 児童養護施設長から ( )  
エ) 児童相談所の担当児童福祉司から ( )  
オ) 子どもの家族から ( )  
カ) 子ども本人から ( )  
キ) その他 ( ) から ( )

選択肢： ①よくある ②ときどきある ③まったくない

問 9 子どもを家族の元に帰すか、退所後自立させるかという最終的な判断は、どなたがどのくらい行ないますか？ 下の選択肢の中からそれぞれ選んで、( ) に記入してください。

- |                  |     |
|------------------|-----|
| ア) 児童養護施設の担当職員   | ( ) |
| イ) 児童養護施設の FSW   | ( ) |
| ウ) 児童養護施設長       | ( ) |
| エ) 児童相談所の担当児童福祉司 | ( ) |
| オ) 子どもの家族        | ( ) |
| カ) 子ども本人         | ( ) |
| キ) その他 ( )       | ( ) |

選択肢： ①よくある ②ときどきある ③まったくない

問 10 子どもを家族の元に帰せるかどうか判断するためのアセスメントシートや、決定した援助計画に沿って課題をアセスメントする様式が決まっていますか？

- ア) 決まっている                      イ) 決まっていない

└─▶ 見本を送っていただけますか？

問 11 FSW はどのくらいのケースに関わっていますか？ ひとつ選んで○をつけてください。

- ア) ほとんどすべてのケースに関わる  
イ) 半分程度のケースに関わる  
ウ) 必要がある時だけ関わる  
エ) あまり関わることはない  
オ) その他 ( )

問 12 子どもを家族の元に帰すかどうかで、施設側と児童相談所の担当児童福祉司との意見が分かれることがありますか？

- ア) ある → 問 13 へ                      イ) ない → 問 14 へ

問 13 問 12 であるとお答えの場合、どのように対応することが多いですか？施設の方針として一番近いものをひとつ選んで○をつけてください。

- ア) 意見が一致するまで担当児童福祉司となんども協議する
- イ) 施設側の意向を優先するように援助することが多い
- ウ) 児童相談所の決定に沿うように援助をすることが多い
- エ) その他

( )

問 14 FSW が施設内でスーパービジョンを受けたり、施設外でコンサルテーションを受けることはありますか？ あてはまるものをいくつでも選んで○をつけてください。 また、業務の上で困難なことがあったとき、どのように解決しているか自由にお書きください。

- ア) スーパービジョンを定期的に受ける
- イ) スーパービジョンを困難ケースがあった時のみ受ける
- ウ) コンサルテーションを定期的に受ける
- エ) コンサルテーションを困難ケースがあった時のみ受ける
- オ) そのような機会はない
- カ) その他 ( )

困難なことがあった時、どのように解決しているか

( )



問 22 あなたは「家族再統合」という言葉を、どのような意味で捉えて、日々の業務を行なっていますか？ 次のなかからご自身の考えと近いものをいくつでも選んで○をつけてください。

- ア) 子どもが虐待親を含む元の家族と一緒に住み、安全に生活できるようになること
- イ) 子どもが虐待を除く一部の家族と一緒に住み、安全に生活できるようになること
- ウ) 子どもが元の家族以外の親族等と一緒に住み、安全に生活しながら、元の家族と定期的に会うなどして、良好な家族関係を築くこと
- エ) 子どもが里親等と一緒に住み、安全に生活しながら、元の家族と定期的に会うなどして、良好な関係を築くこと
- オ) 子どもが一人で自立した生活を営みながら、元の家族と定期的に会うなどして、良好な家族関係を築くこと
- カ) その他（具体的にお書きください）

( )

問 23 家族関係を再構築するということについて、FSW の業務を通して日頃お考えの事があれば、ご自由にお書きください。

( )

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

なお、本研究では児童養護施設で働く FSW の方に、業務を通じて家族関係の再構築についてどのようなことを考えていらっしゃるのか、インタビューにて詳しくお伺いしたいと予定しております。もしご協力をいただける方は、下記にご連絡先をご記入くださいますようお願いいたします。後日改めましてお願いの連絡をさせていただきます。

お名前 ( ) 施設名 ( )  
お電話番号 ( ) ご都合のよい時間帯等 ( )

## 資料 18 インタビューガイド

### インタビューでお伺いしたいこと

児童養護施設で働くファミリーソーシャルワーカー（以下 FSW）が、施設の役割の変化や家族関係の再構築について、業務を通じて日頃どのように感じ、考えていらっしゃるのか、実際の援助ケース等の経験を交えながら自由に語っていただきたいと存じます。

#### 【お伺いしたい項目】

- 質問 1 FSW が制度化されて 7 年目になりますが、制度化の前後で、子どもを家族の元に帰すケース数や、援助のプロセスにどのような変化がありましたか？
- 質問 2 FSW が制度化されてから、児童養護施設に期待されている役割、果たすべきだとお考えの役割に、なにか変化がありましたか？ また本来児童養護施設の役割ではないが、現状で引き受けていることがありますか？
- 質問 3 実際に子どもを家族の元に帰したり、退所後自立させる等の判断にあたって、誰がどのような役割を果たしていますか？ またその自立支援計画に沿って、誰が、誰に対して、どのような援助を行ったり、役割を果たしていますか？
- 質問 4 FSW が制度化され、家族再統合のための援助をするうえで、制度上の難しさ、課題だと感じることはありますか？ あるとすればどのようなことでしょうか？
- 質問 5 自立支援計画立てることが困難だったり、計画のとおり援助が進まないとき、どのようなことが課題になっているとお考えですか？
- 質問 6 実際の業務では、子ども、子どもの家族、施設長や子どもの担当ケアワーカー、児童福祉司等、いろいろな立場の人と接していらっしゃると思いますが、そのなかでどのようなプレッシャーを感じたり、業務の難しさを感じていらっしゃいますか？ また特定の人からではなく、世論やマスメディア等から受けるプレッシャーが業務に影響していると感じることはありますか？
- 質問 7 家族関係をもう一度作り直すということについて、FSW としてどのようにお考えでしょうか？ たとえば子どもを空間的には家族から分離したまま、親子関係を修復するということがありえますか？ もしあるとすれば、家族にとって「再統合」とはどのようなものだとお考えでしょうか？
- 質問 8 その他、日々の業務で感じていらっしゃるご苦労や、業務を通じてお考えのこと、研究者に知らせたいことなど、ご自由にお話してください。